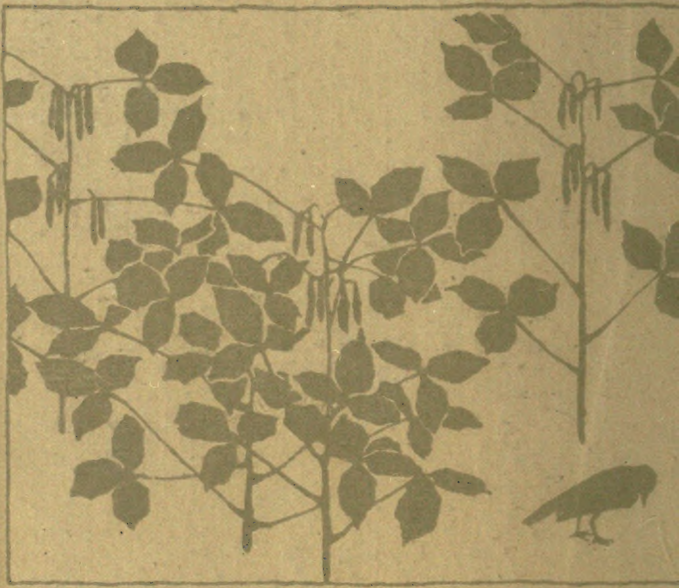
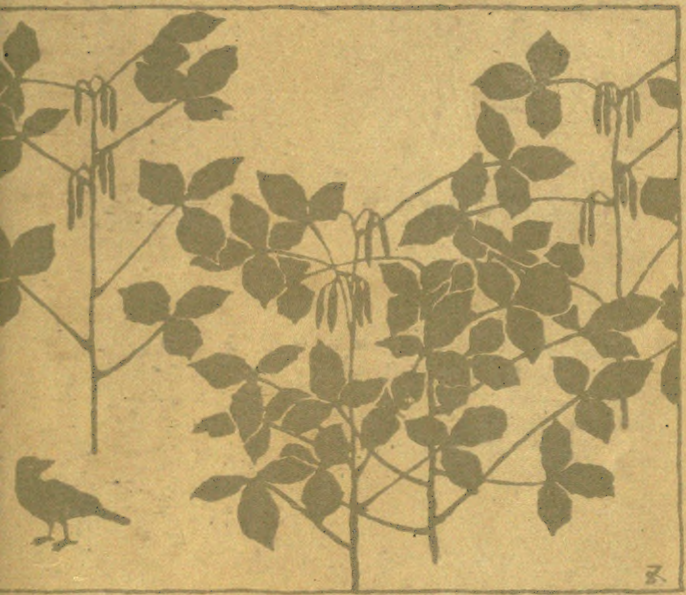




（岡山製本）

大正四年九月廿七日印刷
大正四年九月三十日發行

有朋堂文庫
萬葉集 下（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

以上

萬葉集總目錄終

羅部

禮部

呂部

和部

由部

與部

母　部

也　部

保部

麻部

美部

幣部

布部

比部

奴部

邇部

登部

都部

弖部

智部

勢部

曾部

多部

須部

斯部

佐部

氣部

許部

久部

伎部

加部

意部

宇部

伊部

萬葉集總目錄

（本總目錄は一に萬葉集略解所載のものを襲蹈し、只丁附のみを本文庫本通りに改訂せり）

阿部

萬葉集終

有レ之。恐繁。而註二別紙一略レ之爾已。

後光嚴
文和二年癸巳中秋八月二十五日　　權少僧都成俊記之

右書寫本云應長元年云々といへる奥書より此成俊が奥書まで契沖が校せる官本といへるものにはなし。

於二姑捨山之麓一。結レ草爲レ廬。養二餘生一耳。云有二佳客一携二此集一來問レ余。余晤語云。僕有二志願一。積年不レ果レ之。而暦（歴カ）二涼燠一行年已向二七旬一也。老眼有二不レ堪レ筆之愁一。卷而懐レ之。客聞レ之。乃感二余誠心一。而此集全部廿卷書寫レ之而投二于余一。余手舞レ之足蹈レ之曰。宿望已成之。便拭二老眼一。手自加二和字之筆跡於敘靑一者也。抑於二和字音義一。從二京極黄門一之以降。尋二八雲之跡一之輩。高卑伺二其趣一者歟。仍天下大底守二彼式一。而異レ之族一人而無レ之依レ之人々似レ背二萬葉古今等之字義一者也。僕又專二彼式一而用來年久。今時又□（一本亦）不レ背レ之。將來又以可然者也。但特二地於萬葉集一至二于書一加和字於漢字右一。而聊引二散愚性之僻案一。偏任二當集之音義一。所レ令レ點之也。是且非二自由一。且非レ無レ所レ詮。其故者依二當世之音義書一。用二其和字之則一。違二萬葉集儀（イ義）理一之事在（イ有）レ之。所謂當集者遠近之遠字之假名者。登保登書レ之。草木枝條之撓乎者。登乎登書レ之。當世遠近之遠字和音者登乎登書レ之。然者用二書此和音一者。所レ可レ令二集之字語相違一也。又書二宇惠一者殖也。書二宇邊一者上也。此外此類雖レ

書寫本云。

（花園）應長元年十月廿五日以相傳說不殘祕訓授申源幸公訖。

陰蘿芝代玉松之枝緒吹風赤土與路津葉分野佐々良之光波

桑門寂印 在判

此うたくもらじよたまふつがえをふくかぜによろづはわけのつきのひかりはとよましめんとなるべし佐々良は假名書なるをつきとよまんよしなし又月をさゝらえをとことはよめれどさゝらとのみいへる事なしさゝらは小き意にてさゝらとのみにて月の事となるにはあらずさる事もわいだめずしてかけるものなり

同卷奥書

萬葉集余過レ目以後書二寫之一。而有下可レ奉レ呈二松壇一志上已久矣。爰逢二（後醍醐）元弘建武（同）間一。陵谷轉變亂。而不レ能レ容二於身窩居一。忽離二寺門一遊二歷涇津一也。影二孤他鄕之月一。濯二足世波之濁一。自然以來。徒蹈二歲霜一。閱二光景一也。今雖レ歸二舊隱一。未レ入二寺門一。信州

一人校勘依見漏事也三箇本者松殿入道殿下御本蘗穗包帋紫表紙黑木軸彼御本不慮之外備後三善康持被給云々鎌倉右大臣家本厚様表帋赤木軸具尾烏丸月輪入道殿下御本（青羅表紙草子十帖）一帖複二卷又以擇然上人本校了而依自本直損字書入落字了寬元四年十二月二十二日於相州鎌倉比企谷新釋迦堂僧坊治定本書寫了同五年二月十日校點了又重校了抑萬葉集和字出來之後者漢字歌一首書了又更書假名歌事常習也是者不知漢字男女等爲令見安歟然而令摹清往昔之本故一向以漢字書々寫了而後漢字傍點付其和耳也又有多德故也其德者一者料帋減三分之一書寫惟安二者和漢相並見合無煩和漢別時者短歌猶以勘合有煩何況於長歌乎三者和若漢訛謬無隱四者跡漢一所疾畢字聲五者來付假名歌有置和之所本雖以有其理徒然闕行無用之一向漢字書之時者有德無難者也依如比等道理於漢字右付假名了他本和有難歌之時以墨又字左點云々其和之間云言辭之道理不符合之所者字左以朱愚點了又於古點者不及付符於順朝臣之後人和字者合點爲符次長歌以朱着星於旋頭歌上以墨着星爲其符矣是偏將來稽古之人爲令勘易之也

權律師仙覺生年四十五

餘レ身似二覺悟曉一者歟。其後聞二古老傳說一云。天曆御宇源順奉二勅宣一令レ付二假名於漢字之傍一畢。然又法成寺入道殿下（○法成寺殿ハ右大臣師輔公ノ孫、攝政關白太政大臣兼家公ノ子道長公也）爲レ令レ獻二上東門院一。仰二藤原家經朝臣一（○家經朝臣ハ太宰大貳有國ノ孫參議廣業ノ子）被レ書二寫萬葉集一之時。假名歌別令レ書レ之畢。爾來普天移レ之。云々。然而道風手跡本。假名歌別書レ之。古老之說有二相違一歟。後賢勘レ之。以前三箇不レ同等。令レ採二用其善一。所二書寫一此本也。只事二一身之耽翫一。未レ顧二多情之疑謗一。自感二數奇一屢垂二哀淚一而已。去年書寫本者。依二中務卿親王（○中務卿親王ハ後嵯峨院第一皇子宗尊親王也）仰一。令レ獻二上之一畢。仍更所レ令二書寫一也。

文永三年歲次丙寅八月廿三日　　權律師仙覺記之

或本右以宇治殿御本通俊本校畢者ノ末ノ異同コヽニ記ス。

於是正二位前大納言征夷大將軍家始自寬元々年初秋之比仰付源李部親行朝臣治定萬葉集一本爲令書本以三箇本比校親行本了同四年正月仙覺又請取親行朝臣本幷三箇本重校合了是則

（ハ成ノ誤也）等手跡本。同以詞擧。歌下。仍去今兩年二箇度書寫本移レ之畢。凡序題幷端作詞指擧書レ之。詩歌引下書レ之事者。古書之習歟。就レ中御宇年號等擧書之者。時代分明。尤佳也。三假名離合不レ同者。倩案二事情一。（村上）天曆御宇源順（○源順は左京大夫致ノ孫左馬頭擧ノ子從五位上能登守）等奉レ勅初奉レ和之刻。定於二漢字之傍一付二進假名一歟。仍慕二往昔之本一故。先度愚本於二漢字之右一付二假名一畢。是則其德非レ一也。其德者一者料紙三分之一。書寫惟安。二者和漢相並見合無レ煩。和漢別時者。短歌猶以校勘有レ煩。何況於二長歌一乎。三者若和漢訛謬無レ隱。四者和漢一所疾了二字聲一。五者未レ付二假名一歌二有レ和レ之。所レ本雖レ似レ有二其理一。徒然闕レ行無用也。一向漢字書レ之時者。有レ德無レ難者歟。於レ是去弘長二年初春之比。以二太宰大貳重家卿自筆本一。令二校合一之處。於二漢字之右一被レ付二假名一。彼本第一卷奧書云。承安元年六月十五日以二平三品（經盛）本一。手自書寫畢。件本以二一條院御本一書寫本也。他本假名別書レ之。而起レ自二叡慮一。被レ付二假名於眞名一。珍重々々等（一本ナシ）云々。愚本假名皆以符合。水月融郎（朗カ）感應道交觀。悅

箇國ニ也。〈イ於武藏一國別可擧防人之名乎〉凡他卷目六擧二歌員數一事大旨如此也。今愚本附二順之一畢。如二二條院御本之流。并基長中納言本之流。倘書禪門眞觀本一〈元家隆卿本也〉者。至二于第十五卷一目六在レ之。第十六卷以下五卷無二目六一。自レ本如レ此本一流有レ之歟。或又有下都無二目六一本上也。又卷々初擧二長歌員數一書レ之。短歌何首等。〈本ノマヽ〉假。〈イ名之字無之〉令第五卷初書レ之。短歌十首反歌百三首等也。是則以二長歌一爲二短歌一僻料簡之所レ爲歟。次反歌者相二副長歌一之時短歌也。故長歌次有二短歌一之時。或書二之反歌一。或書二之短歌一者也。而何一卷內短歌摠以謂二之反歌一乎。其誤非レ一歟。如二忠兼本一者。都不レ書レ之。尤佳也。如二松殿御本一者。短歌何首等雖レ書レ之。其註美本無レ之云々。尤可レ然。次歌詞高下不レ同者。如二光明峯寺入道前攝政家御本。鎌倉右大臣家本。忠兼本一者。歌高。詞下。先度愚本移レ之畢。法性寺殿〈○法性寺關白內大臣師通公ノ孫、攝政關白太政大臣准三后忠實公ノ子攝政關白太政大臣忠通公也〉御自筆御本又同レ之也。雖レ然古本并可レ然本々多以端作詞者。指擧書レ之。歌者引下書レ之。所謂松殿御本。二條院御本之流。并忠定卿本。倘書禪門本。左京兆本皆同。道風行盛〈○盛〉

斯本者肥後大進忠兼之書也。件（イ本）表紙書云。以二讃州本一書寫畢。以二江家本一校畢（イ了）。又以二梁園御本一校畢。又以二孝言朝臣本一校畢者。可レ謂二證本一者歟。又校本云。以二蔣左金吾本一書寫畢。保安（鳥羽）二年七月以二數本一比校畢。又以二中務大輔本一校畢（イ了）。件本表紙表云。以二宇治殿〔○宇治殿ハ法成寺道長公ノ子、攝政關白太政大臣准三后頼通公也〕御本。通俊本一校畢者。〔此以下或本異同多し末に書添へたり〕

抑先本校合之根源。并今本。〔イ書寫之子細幷〕假名色々事第一卷奥先記レ之畢。愚老年來之間。以二數本一比二校（令イ）之一處。異說且千也。其中於二大段不レ同有二三種差別一。一者卷（卷）。目錄不レ同也。二者歌詞高下不レ同。三者假名離合不レ同也。初卷々目錄不レ同者。如二松殿御本。左京兆本。〔已上兩本共帥中納言伊房卿手跡也〕忠兼等本一者。廿卷皆卷々端（に）目六在レ之。但目六之詞各有二少異一。就レ中第廿卷目六。有二三重（の）相違一。或本者諸國防人等名字皆以載レ之。或本者始自二遠江國防人部領使一。至二于上野國防人部領使已上一。九箇國者雖レ擧二所レ進歌（の）員數一。不レ擧二防人一々名字一。於二武藏一國一書二載防人等十二人之名字一。或本者如二以前（の）九箇國一。武藏防人所レ進歌。擧二其員（イ歌）數許一也。此說可レ宜歟。尤（イ何）可レ同二自餘九

四年八月日庚寅薨 紀に死と有。紀を按るに、死後大伴繼人竹良等、種繼を殺せし事發覺、下獄案驗するに事家持等に連、是によりて追て除名其息永主等並流するよしあれば、こゝに薨と有は誤也。さて類聚國史延暦廿五年、勅に延暦四年配流の輩存亡を論ぜず、本位に復す、大伴宿禰家持從三位云々とみゆ。

右大臣正二位藤原朝臣不比等 内大臣大織冠第二男子 ○織ヲ今職ニ誤

大寶元年三月十九日任二中納言一

同日停二中納言一叙二正三位一任二大納言一

慶雲元年正月七日叙二從二位一

五年五月臥二重病一詔賜二度者二十人一 慶雲は四年のみなるを五年と有はいかゞ。度者三十人を賜事は養老四年也。此一行誤れり。

和銅元年正月七日叙二正二位一任二右大臣一 續紀此年三月丙午爲二右大臣一とみゆ。月日誤れり。

養老四年八月三日癸未薨 年六十二 懷風藻に六十三と註せり。

詔贈二太政大臣正一位一 詔曰二淡海公一以二近江國十二郡一封レ之 養老四年十月壬寅此事あり。

巻第二十奥書

先度書本云。

六年十一月丁亥日任二衛門督一
七年三月癸巳日任二伊勢守一
八年正月庚申日叙二從四位上一
九年正月十七日癸亥叙二正四位下一
十一年二月一日丙申朔任二參議一同九日丙辰兼二右大辨一
天應元年四月十五日癸卯叙二正四位上一同十四日壬寅兼二春宮大夫一五月四日任二左大辨一大夫如故
八月一日復二任參議一大辨大夫如故十一月十三日叙二從三位一紀に八月丁亥朔甲午正四位大伴宿禰家持左大辨兼二春宮大夫一、先レ是遭二母憂一解任至レ是復焉と有。甲午は八日なり。
延暦元年閏正月辛丑坐レ事除二官位一五月十一日兼二春宮大夫一六月戊辰日兼二陸奥按察使一紀に氷上眞人川繼が謀反に黨するを以て、官位を除かる。又紀に按察使鎭守將軍と有。
二年七月十三日任二中納言一春宮大夫如故
三年二月兼二持節征東將軍一

十八年三月任二兵部大輔一 紀によるに、此時兵部大輔は誤にて宮内少輔也。又紀に六月爲二越中守一、勝寶元年四月朔從五位上、六年四月庚午爲二兵部少輔一、十一月爲二山陰道巡察使一、寶字元年六月爲二兵部大輔一と有。又此集卷十九に勝寶三年七月少納言に任ぜし事みゆるを紀には漏せり。

天平寶字二年六月任二因幡守一 紀に六年正月庚辰朔戊子爲二信部大輔一、信部省は中務省也。

六年三月日任二民部大輔一 民部大輔に任ぜし事紀に見えず、此時民部といふ官名なし。信部の誤ならん。

八年正月日紀二丁未任二薩摩守一

神護景雲元年八月日丙午任二太宰少貳一

四月六日任二民部少輔一 日月幷官不審可尋〇官ヲ今官二誤 紀に載せず。

九月日丁亥任二左中辨兼中務大輔一 紀寶龜元年なり、景雲に非。

寶龜元年十月日己丑叙二正五位下一

二年十一月日丁未叙二從四位下一

三年二月日丁卯兼二式部權大輔一 紀に式部員外大輔

五年三月日甲辰任二相模守一九月日庚子兼二左京大夫一上總守 紀に爲二兼上總守一

卷第三奥書 此第三の卷までを、古萬葉と思ひ誤りて、こゝに家持卿の傳を書しは、仙覺律師が所爲なるべし。此卷はまたく家持卿の家集なるべきよし師はいはれき。

大納言從二位大伴宿禰旅人 大納言安麻呂第一男 續紀和銅四年四月授二從四位下一靈龜元年五月爲二中務卿一とみゆ。安萬呂は、難波朝大紫右大臣長德卿の子なり。

養老二年三月三日任二中納言一 不レ歷二參議一 契沖云養老二年三月戊戌車駕自二美濃一至。乙巳大伴旅人爲二中納言一。しかれば三月朔日の支干を記せざれば、乙巳幾日に當る事知がたけれども、戊戌より八日にあたれり。三日と書るは違へり。

三年正月七日叙二正四位下一 紀によるに、七日は誤にて十三日也。且四年三月以二中納言正四位下大伴旅人一爲二征隼人持節大將軍一と有。

五年正月七日叙二從三位一 紀によるに五日なり。又紀に賜二帶刀資人四人一と有。

神龜元年二月日叙二正三位一

天平二年十月一日任二大納言一 紀に神龜元年二月甲午大伴宿禰多比等正三位を授と有て、同七月此卿の事みえ、天平三年正月丙子從二位を授よしはみえたれども、其間天平二年太宰帥に任じ、歸京して大納言に任じたる事を、紀にもらせるは、今本の脫文なるべし。こゝに帥に任ぜられし事を載せざれば、仙覺が見し紀にも脫せしなるべし。

三年正月七日叙二一位一七月一日薨 在官二年 紀によるに正月廿七日なり。二位の上從を脫せり。

中納言從三位大伴宿禰家持 大納言贈從二位安麻呂之孫大納言從二位旅人男。

天平七年正月叙二從五位下一 七年の上十の字を脫せり。十六年までは內舍人なり。

（龜山）弘長三年十一月又以二忠定卿（○忠定卿未詳、或中山忠親ノ孫大納言兼宗ノ男ト云リ可考）本一比校畢。凡此集既以二十本一遂二校合一畢。又（龜山）文永二年閏四月之比。以二左京兆の（○左京兆未考）本一（伊房卿ノ娘ノ手次也）令二比校一畢。而後。同年五六兩月之間。終二書寫之功一。初秋一月之内。令レ校二點之一畢。

抑先度愚本假名者古次兩點有二異說一。歌者於二漢字左右一付二假名一畢。其上猶於レ下有二心詞窊曲一歌上者加二新點一畢。如此異說多種之間。其點勝劣。輕以難辨者歟。依之去今兩年二箇度書寫本者。不レ論二古點新點一。取二捨其正訛（訓ノ誤也）一於二漢字右一。一筋所二點下一也。其内古次兩點詞者。撰二其秀逸一。同以レ墨點レ之。次雖レ有二古次兩點一。而爲二心詞參差一句者。以二紺青一點レ之。所謂不レ勘二古語一之點。并手爾乎波之字相違等。皆以二紺青一令レ點直レ之也。是則先顯レ有二古次兩點一。且示二偏非二新點一（にこそ）也。次新點詞。并訓中補闕之句。又雖レ爲二一字一而漏二古點一之字。以レ朱點レ之。偏是爲二自身所レ見點レ之。爲二他人所レ用不レ點レ之而已。

文永三年八月十八日　　權律師仙覺

畢。今此萬葉集假名。他本皆漢字歌一首書畢。假名歌更書之。常儀也。然而於二今本一者。爲レ紓（紀イ）二和漢之符合一。於二漢字右一今付二假名一畢。如此雖レ令二治定一。今又見レ之。不審文字且千（ちゞなり）也。仍去（ぬる）弘長元年夏比（の）。又以二松殿御本幷兩本一。〇尚書禪門眞觀本基長中納言本也〇尚書禪門眞觀ハ六條大納言光賴卿ヨリ四世中納言光親卿ノ子右大辨右衛門佐正四位下光俊出家シテ眞觀ト云リ〇基長ハ中納言正二位堀河右大臣賴宗公ノ孫內大臣能有公ノ子ナリ 遂二再校一。紓（紀イ）二文理訛謬一畢。又同二年正月以二六條家本一比校畢。此本異レ他。其德甚多。珍重々々。

彼本奥書云。

承安（高倉）元年六月十五日以二平三品 經盛〇經盛ハ平忠盛ノ子修理大夫正三位トミユ 本一。手自書寫畢。件本以二二條院（の）御本一書寫本（するの）也。他本假名別（に）書レ之。而起レ自二叡慮一。被レ付二假名於（を）眞名（に）一。珍重々々。可二秘藏一々々々。

從三位行備中權守藤原重家 〇重家ハ清輔弟

彼御本清輔朝臣 〇清輔ハ修理大夫顯季ノ孫、左京大夫顯輔ノ子也 點レ之云々。

愚本假名皆以符合。水月融卽（朗カ）。千悅萬感。

萬葉第一奥書ー以下五七五頁より五八九頁に至るこの奥書全部は、特に參考として略解所載の儘を採録したり、但、○印ある片假名交りの割註は、略解に於ては頭註欄に載せたるものなれども、參照の便を圖り、今凡て本文中適當の個所に組入るる事となしたり

萬葉第一奥書

本云龜山

文永十年八月八日於鎌倉書寫畢。

此本者。正二位前大納言征夷大將軍藤原卿。○藤原卿ハ鎌倉四代賴經卿ニテ後京極攝政良經公ノ孫光明峯寺攝政道家公ノ四男也 始自後嵯峨寛元元年初秋之比。仰付李部大夫源親行。校調萬葉集一部。爲令書本。以三箇證本。令比校親行 ○親行ト云ル名ノ人アマタアレバイヅレカ知ラレズ 本了。同四年正月。仙覺又請取親行本。并三箇本。重校合畢。是則一人校勘。依可有見漏事也。三箇證本者。松殿入道殿下 ○松殿ハ攝政關白太政大臣基房公ニテ知足院攝政忠實公ノ孫、法性寺攝政忠通公ノ二男也 御本。帥中納言伊房卿手跡也○伊房權大納言行成卿ノ孫、參議兵部卿行經卿ノ子也 光明峯寺入道前攝政左大臣 ○光明峯寺殿ハ攝政關白太政大臣兼實公ノ孫道家公ノ子也 家御本。鎌倉右大臣家本也。此外又以兩三本令比校畢。而依多本。直付損字。書入落字畢。寛元四年十二月二十二日。於相州比企谷新釋迦堂僧坊。以治定本。書寫畢。同五年二月十日校點畢。又重校

靡く―「靡かす」の約
相か別れむ―相別れんか

新しき―一訓「あらたしき」
今日降る雪の―降る雪の積り重るが如く
いやしけ吉事―よき事の数多重ねてあれかしの意

七月五日於二治部少輔大原今城眞人宅一餞二因幡守大伴宿禰家持一宴歌一首

秋風乃。須惠布伎奈婢久。波疑能花。登毛爾加敷左受。安比加和可禮牟。
秋風の、末吹き靡く、萩の花、共にかざさず、相か別れむ。

右一首。大伴宿禰家持作之。

三年春正月一日於二因幡國廳一賜二饗ヲ國郡司等一之宴歌一首

新。年之始乃。波都波流能。家布敷流由伎能。伊夜之家餘其騰。
新しき、年の始の、初春の、今日降る雪の、いやしけ吉事。

右一首。守大伴宿禰家持作之。

扱きれな—扱き入れん

散らまく惜しも—散りなん事の惜しき哉

風浪靡き—風も浪も従ひ靡きにて、要するに風も浪もたゝずと也

つゝむ事無く—恙無く、故障なく

鴛鴦の住む、君が此の島、今日見れば、馬醉木の花も、咲きにけるかも。

右一首。大監物御方王。

伊氣美豆爾。可氣左倍見要底。佐伎爾保布。安之婢乃波奈乎。蘇弖爾古伎禮奈。

池水に、影さへ見えて、咲き匂ふ、馬醉木の花を、袖に扱きれな。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。

伊蘇可氣乃。美由流伊氣美豆。氐流麻泥爾。左家流安之婢乃。知良麻久乎思母。

磯陰の、見ゆる池水、照るまでに、咲ける馬醉木の、散らまく惜しも。

右一首。大藏大輔甘南備伊香眞人。

二月十日於二内相宅一餞二渤海大使小野田守朝臣等一宴歌一首

阿乎宇奈波良。加是奈美奈妣伎。由久佐久佐。都都牟許等奈久。布禰波波夜家無。

青海原、風浪靡き、行くさ來さ、つゝむ事無く、船は早けむ。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。未誦之。

大君かも―反語・大君ならんや

標結ふべしも―跡の絶えざらん爲也

見すらし―見させ給ひし

山齋―しまゝ、又「しまのいへ」と訓ずべし

右一首。治部少輔今城眞人。

多可麻刀能。努敝波布久受乃。須惠都比爾。知與爾和須禮牟。和我於保伎美加母。

高圓の、野邊這ふ葛の、末遂に、千代に忘れむ、我が大君かも。

右一首。主人中臣清麻呂朝臣。

波布久受能。多要受之努波牟。於保吉美能。賣之思野邊爾波。之米由布倍之母。

這ふ葛の、絶えず忍ばむ、大君の、見しゝ野邊には、標結ふべしも。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。

於保吉美乃。都藝弖賣須良之。多加麻刀能。努敝美流其等爾。禰能未之奈加由。

大君の、繼ぎて見すらし、高圓の、野邊見る毎に、音のみし泣かゆ。

右一首。大藏大輔甘南備伊香眞人。

屬二目山齋一作歌三首

乎之能須牟。伎美我許乃之麻。家布美禮婆。安之婢乃波奈毛。左伎爾家流可母。

日けに―日々に
磯…鴛鴦の―實景を以て「惜しき」の序とせるならん
惜しき我が身は―惜しき我身にはあれどの意に解すべからん
離宮處―離宮のありし跡
立たしゝ君―聖武天皇を指し奉る
遠ぞけば―遠ざかれば

宇流波之等。阿我毛布伎美波。伊也比家爾。伎末勢和我世古。多由流日奈之爾。
うるはしと、我が思ふ君は、いや日けに、來ませ我が背子、絶ゆる日無しに。

右一首。中臣清麻呂朝臣。

伊蘇能宇良爾。都禰欲比伎須牟。乎之杼里能。乎之伎安我未波。伎美我末仁麻爾。
磯の裏に、常呼び來栖む、鴛鴦の、惜しき我が身は、君がまに〳〵。

右一首。治部少輔大原今城眞人。

依レ興各思二高圓離宮處一作歌五首

多加麻刀能。努乃宇倍能美也婆。安禮爾家里。多多志志伎美能。美與等保曾氣婆。
高圓の、野の上の宮は、荒れにけり。立たしゝ君の、御代遠ぞけば。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。

多加麻刀能。乎能宇倍乃美也波。安禮奴等母。多多志志伎美能。美奈和須禮米也。
高圓の、峯の上の宮は、荒れぬとも、立たしゝ君の、御名忘れめや。

遠けども—互に住處の隔り居れども
しぬに—しをれて

結ばな—あるじとかはらぬ契をなさんといふ意を添へたるならん

見とも—見るとも
君かも—反語、君ならんや

宇梅能波奈。香乎加具波之美。等保家杼母。己許呂母之努爾。伎美乎之曾於毛布。
梅の花、香をかぐはしみ、遠けども、心もしぬに、君をしぞ思ふ。

右一首。治部大輔市原王。

夜知久佐能。波奈波宇都呂布。等伎波奈流。麻都能左要太乎。和禮波牟須婆奈。
八千種の、花は移ろふ、常磐なる、松の小枝を、我は結ばな。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。

烏梅能波奈。左伎知流波流能。奈我伎比乎。美禮杼母安可奴。伊蘇爾母安流香母。
梅の花、咲き散る春の、長き日を、見れども飽かぬ、磯にもあるかも。

右一首。大藏大輔甘南備伊香眞人。

伎美我伊敝能。伊氣乃之良奈美。伊蘇爾與世。之婆之婆美等母。安加無伎彌加毛。
君が家の、池の白波、磯に寄せ、屢見とも、飽かむ君かも。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。

はしきよし―敬愛すべき
我が背子―家持を指す
聞さば―仰にならば
乞ひのみ―乞ひ祈り
長くとぞ思ふ―我も我命の長かれと思ふと也

右一首。治部少輔大原今城眞人。

美牟等伊波婆。伊奈等伊波米也。宇梅乃波奈。知利須具流麻弖。伎美我伎麻左奴。

見むと言はば、否と言はめや。梅の花、散り過ぐるまで、君が來まさぬ。

右一首。主人中臣清麻呂朝臣。

波之伎余之。家布能安路自波。伊蘇麻都能。都禰爾伊麻佐禰。伊麻母美流其等。

はしきよし、今日の主人は、磯松の、常に座さね。今も見る如。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。

和我勢故之。可久志伎許散婆。安米都知乃。可未乎許比能美。奈我久等曾於毛布。

我が背子し、斯くし聞さば、天地の、神を乞ひのみ、長くとぞ思ふ。

右一首。主人中臣清麻呂朝臣。

可毛能羽能―一本、下の「能」無し

あを馬―左馬寮式云「凡正月七日青馬籠繞云々、凡青馬二十匹、自二十一月一日一至二正月七日一寮半分飼之(一足互飼)云々」

限り無しといふ―壽命無疆なりといふ

打靡く―「春」の枕詞

春とも著く―春といふ事も顯著に

あるか―あるかな

見しめず―我に不レ令レ見也

水鳥乃。可毛能羽能伊呂乃。青馬乎。家布美流比等波。可藝利奈之等伊布。

水鳥の、鴨の羽の色の、あを馬を、今日見る人は、限り無しといふ。

右一首。爲二七日侍宴一。右中辨大伴宿禰家持預作二此歌一。但依二仁王會事一。却以二六日一於二内裏一召二諸王卿等一。賜レ酒肆宴給レ祿。因レ斯不レ奏也。

六日内庭假植二樹木一以作二林帷一而爲二肆宴一歌一首

打奈婢久。波流等毛之流久。宇具比須波。宇惠木之樹間乎。奈伎和多良奈牟。

打靡く、春とも著く、鶯は、植木の木間を、鳴き渡らなむ。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。不レ奏。

二月於二式部大輔中臣清麻呂朝臣之宅一宴歌十首

宇良賣之久。伎美波母安流加。夜度乃烏梅能。知利須具流麻涅。美之米受安利家流。

恨しく、君はもあるか。宿の梅の、散り過ぐるまで、見しめずありける。

大き海の、水底深く、思ひつゝ、裳引き馴しゝ、菅原の里。

右一首。藤原宿奈麻呂朝臣之妻石川女郎薄愛離別。悲恨作歌也。年月未レ詳。

二十三日於二治部少輔大原今城眞人之宅一宴歌一首

都奇餘米婆。伊麻太冬奈里。之可須我爾。霞多奈婢久。波流多知奴等可。

月よめば、未だ冬なり。しかすがに、霞棚引く、春立ちぬとか。

右一首。右中辨大伴宿禰家持作。

二年春正月三日召二侍從竪子王臣等一。令レ侍二於內裏之東屋垣下一。卽賜二玉箒一肆宴。于レ時內相藤原朝臣奉レ勅。宣二諸王卿等一。隨レ堪任レ意。作レ歌幷賦レ詩。仍應二詔旨一。各陳二心緒一。作レ歌賦レ詩。未レ得二諸人之賦詩幷作歌一也

始春乃。波都禰乃家布能。多麻婆波伎。手爾等流可良爾。由良久多麻能乎。

初春の、初音の今日の、玉箒、手に取るからに、ゆらく玉の緒。

右一首。右中辨大伴宿禰家持作。但依二大藏政一不レ堪レ奏之也。

大き海の云々—略解に「斯く人の心のうつろひ果てんとも知らで、菅原の里を行き通ひし事よと、女郎が別れて後歎く意か、又は宿奈麻呂の家菅原に在りて、そこに住み馴れしなごりを思ふにても有るべし」

月よめば—月次を數ふればの意、年の內に春立てる也

玉箒—玉にて飾りたる箒

手に取るからに—戴き承けて手に取り持つからにやがて

ゆらく—ゆら〳〵と鳴る

今日のみ―十九日立春にあたりたるならん

打靡く―「春」の枕詞

右一首。内相藤原朝臣奏之。

十二月十八日於大監物三形王之宅宴歌三首

三雪布流。布由波祁布能未。鶯之。奈加牟春敝波。安須爾之安流良之。

み雪降る、冬は今日のみ、鶯の、鳴かむ春邊は、明日にしあるらし。

右一首。主人三形王。

宇知奈婢久。波流乎知可美加。奴婆玉乃。己與比能都久欲。可須美多流良牟。

打靡く、春を近みか、ぬば玉の、今宵の月夜、霞みたるらむ。

右一首。大藏大輔甘南備伊香眞人。

安良多末能。等之由伎我敝理。波流多多婆。末豆和我夜度爾。宇具比須波奈家。

新玉の、年行き返り、春立たば、先づ我が宿に、鶯は鳴け。

右一首。右中辨大伴宿禰家持。

於保吉宇美能。美奈曾己布可久。於毛比都都。毛婢伎奈良之思。須我波良能佐刀。

咲く花は―略解に「色よき物はうつろひ、常磐なるものはうつろはぬをよめり」

見しあきらめゝ―見て心をはらし給はんの意

奈爾加―一本「加」の上に「乎」あるを宜しとす

兒ども―人々を指す

戯業―狂けたるわざ、一説、橘奈良麻呂の謀反などを思ひてよめるか

里。

咲く花は、移ろふ時あり。足引の、山菅の根し、長くはありけり。

右一首。大伴宿禰家持悲二怜物色變化一作之也。

時花。伊夜米豆良之母。可久之許曾。賣之安伎良米晩。阿伎多都其等爾。

時の花、いや珍しも。斯くしこそ、見しあきらめゝ。秋立つ毎に。

右一首。大伴宿禰家持作之。

天平寶字元年十一月十八日於二内裏一肆宴歌二首

天地乎。弖良須日月能。極奈久。阿流倍伎母能乎。奈爾加於毛波牟。

天地を、照す日月の、極み無く、あるべきものを、何か思はむ。

右一首。皇太子御歌。

伊射子等毛。多波和射奈世曾。天地能。加多米之久爾曾。夜麻登之麻禰波。

いざ兒ども、戯業なせそ。天地の、固めし國ぞ。大和島根は。

植ゑてげる君―山の八峯の椿を根こじて家の庭に植ゑたるよし也

忘らゆまじも―忘らるまじきにて「も」は助辭也

三月四日於㆓兵部大丞大原眞人今城之宅㆒宴歌一首

安之比奇能。夜都乎乃都婆吉。都良都良爾。美等母安加米也。宇惠弖家流伎美。

足引の、八尾の椿、つら〳〵に、見とも飽かめや。植ゑてげる君。

右兵部少輔大伴家持屬㆓植椿㆒作。

保里延故要。等保伎佐刀麻弖。於久利家流。伎美我許己呂波。和須良由麻之目。

堀江越え、遠き里まで、送りける、君が心は、忘らゆまじも。

右一首。播磨介藤原朝臣執弓赴㆑任悲㆑別也。主人大原今城傳讀云爾。

勝寶九歲六月二十三日於㆓大監物三形王之宅㆒宴歌一首

宇都里由久。時見其登爾。許己呂伊多久。牟可之能比等之。於毛保由流加母。

移り行く、時見る毎に、心いたく、昔の人し、思ほゆるかも。

右兵部大輔大伴宿禰家持作。

佐久波奈波。宇都呂布等伎安里。安之比奇乃。夜麻須我乃禰之。奈我久波安利家

佐保路―智努女王の家佐保のあたりにありけん

荒しやしてむ云々―女王世に座さねば今は相見んとて通ふ人もなき故に也

佐保川…薄氷の―「薄き」の序

燒太刀の―枕詞

天の御門―天皇

懸けつれば―心になるべし

作者未詳―端書に二首を一首と誤れるより、後人の書入れたるなるべし

由布義理爾。知杼里乃奈吉志。佐保治乎婆。安良之也之弖牟。美流與之乎奈美。

夕霧に、千鳥の鳴きし、佐保路をば、荒しやしてむ。見る由を無み。

大原櫻井眞人行㆓佐保川邊㆒之時作歌一首

佐保河波爾。許保里和多禮流。宇須良婢乃。宇須伎許己呂乎。和我於毛波奈久爾。

佐保川に、凍り渡れる、薄氷の、薄き心を、我が思はなくに。

藤原夫人歌二首 淨御原宮御宇天皇之夫人也字曰氷上大刀自也

安佐欲比爾。禰能未之奈氣婆。夜伎多知能。刀其己呂毛安禮波。於母比加禰都毛。

朝宵に、音のみし鳴けば、燒太刀の、利心も我は、思ひ兼ねつも。

可之故伎也。安米乃美加度乎。可氣都禮婆。禰能未之奈加由。安左欲比爾之弖。

畏きや、天の御門を、懸けつれば、音のみし泣かゆ。朝宵にして。

作者未詳。

右件四首。傳讀兵部大丞大原今城。

於毛比之其等久—聞かまほしく思ひし其如くの意か、一本「於毛比之母乃乎」

戀しくの—戀しき事の忍ばむ—心の獄にせんとなるべし

しく／＼君に—重々君に「君」は主人を指す也

此餞之各作二此歌一。聊陳二所心一也。

武良等里乃。安佐太知伊爾之。伎美我宇倍波。左夜加爾伎吉都。於毛比之其等久。
群鳥の、朝立ち去にし、君が上は、さやかに聞きつ。思ひし如く。

一云。於毛比之母乃乎。

右一首。兵部少輔大伴宿禰家持後日追二和出雲守山背王歌一作之。

二十三日集二於式部少丞大伴宿禰池主之宅一飲宴歌二首

波都由伎波。知敝爾布里之家。故非之久能。於保加流和禮波。美都郡之努波牟。
初雪は、千重に降りしけ。戀しくの、多かる我は、見つゝ忍ばむ。

於久夜麻能。之伎美我波奈能。奈能其等也。之久之久伎美爾。故非和多利奈無。
奥山の、樒が花の。名の如や、しく／＼君に、戀ひ渡りなむ。

右二首。兵部大丞大原眞人今城。

智努女王卒後圓方女王悲傷作歌一首

意宇―出雲國、本文「保」は「宇」の誤か

見し日の如く―昔見し如く無事にありと告げよ

以前歌六首。六月十七日大伴宿禰家持作。

冬十一月五日夜少雷起鳴雪落二覆庭一忽懷二感憐一聊作二短歌一首一

氣能己里能。由伎爾安倍弖流。安之比奇之。夜麻多知波奈乎。都刀爾通彌許奈。

消残りの、雪に合照る、足引の、山橘を、裹に摘み來な。

右一首。兵部少輔大伴宿禰家持。

八日讃岐守安宿王等集二於出雲掾安宿奈杼麻呂之家一宴歌二首

於保吉美乃。美許等加之古美。於保乃宇良乎。曾我比爾美都都。美也古能保流。

大君の、命畏み、意宇の浦を、そがひに見つゝ、都へ上る。

右掾安宿奈杼麻呂。

宇知比左須。美也古乃比等爾。都氣麻久波。美之比乃其等久。安里等都氣己曾。

内日射す、都の人に、告げまくは、見し日の如く、ありと告げこそ。

右一首。守山背王歌也。主人安宿奈杼麻呂語云。奈杼麻呂被レ差二朝集使一。擬レ入二京師一。因レ

敷島の。日本の國に、明けき、名に負ふ伴の緒、心勤めよ。

都流藝多知。伊與餘刀具倍之。伊爾之敝由。佐夜氣久於比弖。伎爾之曾乃名曾。

劍太刀、愈研ぐべし。古ゆ、さやけく負ひて、來にしその名ぞ。

右縁ニ淡海眞人三船讒言一。出雲守大伴古慈悲宿禰解レ任。是以家持作ニ此歌一也。

臥レ病悲ニ無常一欲レ修レ道作歌二首

宇都世美波。加受奈吉身奈利。夜麻加波乃。佐夜氣吉見都都。美知乎多豆禰奈。

現身は、數無き身なり、山川の、さやけき見つゝ、道を尋ねな。

和多流日能。加氣爾伎保比弖。多豆禰弖奈。伎欲吉曾能美知。末多母安波無多米。

渡る日の、陰に競ひて、尋ねてな、淸き其の道、又も逢はむ爲め。

願レ壽作歌一首

美都煩奈須。可禮流身曾等波。之禮禮杼母。奈保之禰可比都。知等世能伊乃知乎。

みつぼなす、借れる身ぞとは、知れゝども、猶し願ひつ。千歳の命を。

劍太刀―「研ぐ」といふ爲の枕詞、愈精神を研ぎて忠勤をはげめといふ也

數無き身なり―人の齡の幾許も無きをいふ

山川の云々―凡夫の穢を離れ本來淸淨の佛道に立かへり早く修道せんとにや、又は山住をして靜に佛の道を修せんとなるべし

渡る日の云々―光陰を惜みて競ふ意ならん

又も逢はむ爲め―生々世々値遇せんことを願ふなり、煩惱の雲におほはれたれど磨き淸めて本來淸淨の佛性に値はんとにや

みつぼ(一)水火(二)水泡のつたつをいふ、現身のはなき喩也

皇祖—天孫を指す
櫨弓—櫨の木にてつくりたる弓
眞鹿兒矢—鹿などを射るに用ひし矢
國まぎしつゝ—國を求めつゝ
言向け—歸服せしめ
皇邊—天皇の御身のほとり
事立てて—殊更に平常ならぬ異なる事をするをいふ
生の子—子々孫々
おほろかに—おろそかに
虛言も云々—無實の言にも先祖の名を穢さぬ樣にせよと也

加爾。己許呂於母比弖。牟奈許等母。於夜乃名多都奈。大伴乃。宇治等名爾於敝流。麻須良乎能等母。

久方の、天の戸開き、高千穂の、嶽に天降りし、皇祖の、神の御代より、櫨弓を、手握り持たし、眞鹿兒矢を、手挾み添へて、大久米の、益荒猛男を、先に立て、靫取負せ、山河を、岩根さくみて、蹈み通り、國まぎしつゝ、千早振る、神を言向け、まつろへぬ、人をもやはし、掃き淸め、仕へ奉りて、秋津洲、大和の國の、橿原の、畝火の宮に、宮柱、太知り立てて、天の下、知らし召しける、皇祖の、天の日嗣と、繼ぎて來る、君の御代々々、隱さはぬ、赤き心を、皇邊に、極め盡して、仕へ來る、祖先の官と、事立てて、授け給へる、生の子の、彌繼々に、見る人の、語り繼ぎでて、聞く人の、鑑にせむを、惜しき、淸き其の名ぞ、おほろかに、心思ひて、虛言も、祖先の名斷つな、大伴の、氏と名に負へる、丈夫の伴。

之奇志麻乃。夜末等能久爾爾。安伎良氣伎。名爾於布等毛能乎。己許呂都刀米與。

設けたるのみ、一說「我」或は「乎」の誤か
紐解きさくるー納涼すべき時の近づけるをいふ
麻都呂倍奴ー「倍」は「波」の誤にて「まつろはぬ」か

右二首。二十日大伴宿禰家持依レ興作レ之。

喩レ族歌一首并短歌

比左加多能。安麻能刀比良伎。多可知保乃。多氣爾阿毛理之。須賣呂伎能。可未能御代欲利。波自由美乎。多爾藝利母多之。麻可胡也乎。多波左美蘇倍弖。於保久米能。麻須良多祁乎乎。佐吉爾多弖。由伎登利於保世。山河乎。伊波禰左久美弖。布美等保利。久爾麻藝之都都。知波夜夫流。神乎許等牟氣。麻都呂倍奴。比等乎母夜波之。波吉伎欲米。都可倍麻都里弖。安吉豆之萬。夜萬登能久爾乃。可之婆良能。宇禰備乃宮爾。美也婆之良。布刀之利多弖氐。安米能之多。之良志賣之祁流。須賣呂伎能。安麻能日繼等。都藝弖久流。伎美能御代御代。加久佐波奴。安加吉許己呂乎。須賣良弊爾。伎波米都久之弖。都加倍久流。於夜能都可佐等。許等太弖氐。佐豆氣多麻敝流。宇美乃古能。伊也都藝都岐爾。美流比等乃。可多里都藝弖氐。伎久比等能。可我見爾世武乎。安多良之伎。吉用伎曾乃名曾。於煩呂

右一首。式部少丞大伴宿禰池主讀レ之。卽云兵部大丞大原眞人今城先日他所讀歌者也。

保利江己具。伊豆手乃船乃。可治都久米。於等之婆多知奴。美乎波也美加母。
堀江漕ぐ、いづての船の、檝つくめ、音しば立ちぬ。澪早みかも。

保里江欲利。美乎左可能保流。梶乃音乃。麻奈久曾奈良波。古非之可利家留。
堀江より、澪溯る、檝の音の、間無くぞ奈良は、戀しかりける。

布奈藝保布。保利江乃可波乃。美奈伎波爾。伎爲都都奈久波。美夜故杼里香蒙。
船競ふ、堀江の川の、水際に、來居つゝ鳴くは、都鳥かも。

右三首。江邊作レ之。

保等登藝須。麻豆奈久安佐氣。伊可爾世婆。和我加度須疑自。可多利都具麻涅。
郭公、先づ鳴く朝け、如何にせば、我が門過ぎじ。語り繼ぐまで。

保等登藝須。可氣都都伎美我。麻都可氣爾。比毛等伎佐久流。都奇知可都伎奴。
郭公、懸けつゝ君が、松陰に、紐解きさくる、月近づきぬ。

いづての船―(一)五手の船にて、五人にて漕ぐ船(二)伊豆出船にて、伊豆國より造り出す船
つくめ―宣長說、本文「久」は「夫」の誤にて「つぶめ」にて、檝の音のするをいふか、又、一說に檝を船のつくへ掛けて彼方此方へ引動かすことかといへり
堀江…音の―「間無く」の序
如何にせば云々―友人にも告げ知らせて人皆も聞きに來る迄吾が門を過ぎず鳴くやうには如何にしてか留め得ましと也
懸けつゝ―心に也
君が―「松」といはん爲に

馬國人―「馬」の下に「史」を脱す

下這へて―心の下に思ひ置きて、略解には、忍びて妻問することとなるを友を親む意にとるといへり

鳰鳥の―枕詞
息長川―近江國

皆聞くまでに―音高しとも也

天平勝寶八歳丙申二月朔乙酉二十四日戊申。太上天皇太皇太后幸二行於河内離宮一。經信以二壬子一傳二幸於難波宮一也。

三月七日於二河内國伎人鄉馬國人之家一宴歌三首

須美乃江能。波麻末都我根乃。之多婆倍弖。和我見流乎努能。久佐奈加利曾禰。

住吉の、濱松が根の、下這へて、我が見る小野の、草な刈りそね。

右一首。兵部少輔大伴宿禰家持。

爾保杼里乃。於吉奈我河波半。多延奴等母。伎美爾可多良武。己等都奇米也母。

鳰鳥の、息長川は、絶えぬとも、君に語らむ、言盡きめやも。

古新未詳。

右一首。主人散位寮散位馬史國人。

蘆苅爾。保里江許具奈流。可治能於等波。於保美也比等能。未奈伎久麻泥爾。

蘆刈りに、堀江漕ぐなる、楫の音は、大宮人の、皆聞くまでに。

高山…根の―「ねもころ」の序
ねもころごろに―野にも山にも降らぬ限なく
葛城王―橘諸兄
陘妙觀―「陘」は「薩」の誤
たゞびて―(一)田賜びて(二)策(タ、マ)を活用したる語、「び」はめく意、要するに班田の事を取行ひて忙しく暇なきをいふ也
かにはの田井―一説、山城國樺井渡といふ處か

十一月二十八日佐大臣集㆓於兵部卿橘奈良麻呂朝臣宅㆒宴歌一首

高山乃。伊波保爾於布流。須我乃根能。爾母許呂其呂爾。布里於久白雪。
高山の、巖に生ふる、菅の根の、ねもころごろに、降り置く白雪。

右一首。左大臣作。

天平元年班田之時使葛城王従㆓山背國㆒贈㆓陘妙觀命婦等所㆒歌一首

副㆓芹子裹㆒

安可禰佐須。比流波多多婢弖。奴婆多麻乃。欲流乃伊刀末仁。都賓流芹子許禮。
茜さす、晝はたゞびて、ぬば玉の、夜の暇に、摘める芹是。

陘妙觀命婦報贈歌一首

麻須良乎等。於毛敝流母能乎。多知波吉氏。可爾波乃多爲爾。世理曾都美家流。
丈夫と、思へるものを、太刀佩きて、かにはの田井に、芹ぞ摘みける。

右二首。左大臣讀レ之云爾。左大臣是葛城王後賜㆓橘姓㆒也

なぞへて—なぞらへて

和我勢故我。夜度能奈弖之故。知良米也母。伊夜波都波奈爾。佐伎波麻須等母。

我が背子が、宿の撫子、散らめやも。いや初花に、咲きは增すとも。

宇流波之美。安我毛布伎美波。奈弖之故我。波奈爾奈會倍弖。美禮杼安可奴香母。

うるはしみ、我が思ふ君は、撫子が、花になぞへて、見ればば飽かぬかも。

右二首。兵部少輔大伴宿禰家持追作。

八月十三日在㆓内南安殿㆒肆宴歌二首

乎等賣良我。多麻毛須蘇婢久。許能爾波爾。安伎可是不吉弖。波奈波知里都都。

少女らが、玉裳裾曳く、此の庭に、秋風吹きて、花は散りつゝ。

右一首。内匠頭兼播磨守正四位下安宿王奏之。

安吉加是能。布伎古吉之家流。波奈能爾波。伎欲伎都久欲仁。美禮杼安賀奴香毋。

秋風の、吹き扱き敷ける、花の庭、清き月夜に、見れど飽かぬかも。

右一首。兵部少輔從五位上大伴宿禰家持。未奏。

花のみ—(一)はな〲しくて實なきにたとふ(二)たとひ花は無くとも訪はずしてあるべき君ならぬ事をと也

やつ世にを—世を重ねて、長く久しく「つ」「を」は共に助辭

うつら〱—つら〱

右一首。丹比國人眞人壽二左大臣一歌。

麻比之都都。伎美我於保世流。奈弖之故我。波奈乃未等波無。伎美奈良奈久爾。

幣しつゝ、君が生せる、撫子が、花のみとはむ、君ならなくに。

右一首。左大臣和歌。

安治佐爲能。夜敝佐久其等久。夜都與爾乎。伊麻世和我勢故。美都都思努波牟。

紫陽花の、八重咲く如く、やつ世にを、座せ我背子、見つゝ忍ばむ。

右一首。左大臣寄二味狹藍花一詠也。

十八日左大臣宴二於兵部卿橘奈良麻呂朝臣之宅一歌三首

奈弖之故我。波奈等里母知弖。宇都良宇都良。美麻久能富之伎。吉美爾母安流加母。

撫子が、花取持ちて、うつら〱、見まくの欲しき、君にもあるかも。

右一首。治部卿船王。

久方の、雨は降りしく、撫子が、いや初花に、戀しき我が背。

右一首。大伴宿禰家持。

和我世故我。夜度奈流波疑乃。波奈佐可牟。安伎能由布弊波。和禮乎之努波世。

我が背子が、宿なる萩の、花咲かむ、秋の夕は、我を忍ばせ。

右一首。大原眞人今城。

即聞二鸎哢一作歌一首

宇具比須乃。許惠波須疑奴等。於毛倍杼母。之美爾之許己呂。奈保古非爾家里。

鶯の、聲は過ぎぬと、思へども、染みにし心、猶戀ひにけり。

右一首。大伴宿禰家持。

同月十一日左大臣橘卿宴二右大辨丹比國人眞人之宅一歌三首

和我夜度爾。佐家流奈弖之故。麻比波勢牟。由米波奈知流奈。伊也乎知爾左家。

我が宿に、咲ける撫子、幣はせむ、ゆめ花散るな。いやをちに咲け。

聲は過ぎぬ―此時五月なれば、鶯の聲を賞すべき時節は過ぎたり

橘卿―諸兄卿也

をちに咲け―初めへ返り返り幾度も咲け

いましなば—京へ還りもはしましなば

立撓ふ—しなやかに美しき

よの限り—我が齡の限り

日並べて—毎日々々

右件四首。上總國大掾正六位上大原眞人今城傳誦云爾。年月未レ詳

上總國朝集使大掾大原眞人今城向レ京之時郡司妻女等餞レ之歌二首

安之我良乃。夜敝也麻故要氏。伊麻之奈婆。多禮乎可伎美等。彌都都志努波牟。

足柄の、八重山越えて、いましなば、誰をか君と、見つゝ忍ばむ。

多知之奈布。伎美我須我多乎。和須禮受波。與能可藝里爾夜。故非和多里奈無。

立撓ふ、君が姿を、忘れずは、よの限りにや、戀ひ渡りなむ。

五月九日兵部少輔大伴宿禰家持之宅集飲歌四首

和我勢故我。夜度乃奈弖之故。比奈良倍弖。安米波布禮杼母。伊呂毛可波良受。

我が背子が、宿の撫子、日並べて、雨は降れども、色も變らず。

右一首。大原眞人今城。

比佐可多乃。安米波布里之久。奈弖之故我。伊夜波都波奈爾。故非之伎和我勢。

先太上天皇―元正天皇

なほ―一說、なほざりにて、俗にたいがいにの意、又はなほより以上にかもとつ人―既に故人となりし人にて、こゝは元明天皇を指すにや、又はもとつ人ほとゝぎすと續くにて、前年も來鳴きし郭公よの意か

懸けつゝ―御心に也

ねしなくも―(一)寢させぬの意(二)音に泣かしむの意

近くを―「を」は強勢の助辭

過ぎなむ後に―此時過ぎて後にには

太上天皇―聖武天皇

先太上天皇御製霍公鳥歌一首 元日本根子高瑞日清足姫天皇也

富等登藝須。奈保毛奈賀那牟。母等都比等。可氣都都母等奈。安乎禰之奈久母。

郭公、なほも鳴かなむ。もとつ人、懸けつゝもとな、我をねしなくも。

薩妙観應レ詔奉レ和歌一首

保等登藝須。許許爾知可久乎。伎奈伎弖余。須疑奈無能知爾。之流志安良米夜母。

郭公、此處に近くを、來鳴きてよ。過ぎなむ後に、しるしあらめやも。

冬日幸二于靫負御井一之時内命婦石川朝臣應レ詔賦レ雪一首 諱曰二色婆一

麻都我延乃。都知爾都久麻泥。布流由伎乎。美受弖也伊毛我。許母里乎流良牟。

松が枝の、地に附くまで、降る雪を、見ずてや妹が、籠り居るらむ。

于レ時水主内親王寢膳不レ安。累日不レ參。因以二此日一。太上天皇勅二侍嬬等一曰。爲レ遣二水主内親王一。賦レ雪作レ歌奉レ獻者。於レ是諸命婦等不レ堪レ作レ歌而此石川命婦獨作二此歌一奏レ之。

七重かる—「かる」は著るにて、多く著重ぬるをいふか
兒—妻を指す
さへなへぬ—拒み得ぬ意か
命—天子の詔
さやに—明かに、紛れもなく也、又「夜」は「倍」の誤にて「さへに」か
含めりし—含みてありし
闇の夜の—枕詞
來まさんと—還り來まさんと

三月三日撿二校防人一勅使并兵部使人等同集飲宴作歌三首

阿佐奈佐奈。安我流比婆利爾。奈里弖之可。美也古爾由伎弖。波夜加弊里許牟。
朝なさな、上る雲雀に、なりてしが。都に行きて、早や歸り來む。

右一首。勅使紫微大弼安倍沙美麻呂朝臣。

比婆里安我流。波流弊等佐夜爾。奈理奴禮婆。美夜古母美要受。可須美多奈妣久。
雲雀上る。春邊とさやに、なりぬれば、都も見えず、霞棚引く。

布敷賣里之。波奈乃波自米爾。許之和禮夜。知里奈牟能知爾。美夜古敝由可無。
含めりし、花の初に、來し我や、散りなむ後に、都へ行かむ。

右二首。兵部少輔大伴宿禰家持。

昔年相替防人歌一首

夜未乃欲能。由久佐伎之良受。由久和禮乎。伊都伎麻左牟等。登比之古良波母。
闇の夜の、行先知らず、行く我を、何時來まさむと、問ひし兒らはも。

和我世奈乎。都久志波夜利弖。宇都久之美。叡比波登加奈奈。阿夜爾可毛禰牟。
我が夫を、筑紫は遣りて、うつくしみ、帶は解かなゝ、あやにかも寢む。
宇麻夜奈流。奈波多都古麻乃。於久流我弁。伊毛我伊比之乎。於伎弖可奈之毛。
厩なる、繩斷つ駒の、おくるがへ、妹が言ひしを、置きて悲しも。
阿良之乎乃。伊乎佐太波佐美。牟可比多知。可奈流麻之都美。伊遲弖登阿我久流。
荒男の、いを矢手挾み、向ひ立ち、かなるましづみ、いでてと我が來る。
佐左賀波乃。佐也久志毛用爾。奈奈辨加流。去呂毛爾麻世流。古侶賀波太波毛。
笹が葉の、さやく霜夜に、七重かる、衣にませる、兒ろが膚はも。
佐辨奈辨奴。美許登爾阿禮婆。可奈之伊毛我。多麻久良波奈禮。阿夜爾可奈之毛。
さへなへぬ、命にあれば、悲し妹が、手枕離れ、あやに悲しも。
右八首。昔年防人歌矣。主典刑部少録正七位上磐余伊美吉諸君抄寫。贈二兵部少輔大伴
宿禰家持。

都久志波—「波」は「倍」の誤にて「つくしへ」か、或はこれも東國方言か

繩斷つ—繫げる綱を斷ちて駈け出づるをいふ

おくるがへ—（一）「がへ」はなへと同じく馬の人を送らんとするが如く妻の送りても行かんさまにする歎きの切なりしをいふ（二）後れんや、はの意にて、綱を斷ち切りて馳せ行く駒の如く後を追ひ行かんと歎く意「がへ」は反語、下に「と」を補ひて見よ

伊遲弖—「いねて」と訓むべし、又出でてぞ我が來るの意

いを矢—「い」は接頭語にて小箭也、又五百箭

向ひ立ち—獸に也

かなるましづみ—未詳、「かなるま」はかなぐり放つ間、「しづみ」は鎭めてにて、獵人の氣息をしづめてねらひ射放つ如く、別れての悲しき思を取り鎭めてか

さやく—風に音を立つること

染めましを—染むべかりしものを
たばらば—まはらば、足柄のみ坂に立ちて袖振るをいふ也
まさやかに—「ま」は發語
ともし—うらやまし
物思もせず—三句の上に轉じて見よ

右一首。埼玉郡上丁藤原部等母麻呂。

伊呂夫可久。世奈我許呂母波。曾米麻之乎。美佐可多婆良婆。麻佐夜可爾美無。
色深く、夫が衣は、染めましを、み坂たばらば、まさやかに見む。

右一首。妻物部刀自賣。

二月二十日武藏國部領防人使掾正六位上安曇宿禰三國進歌數二十首。但拙劣歌者不レ取載レ之。

佐伎母利爾。由久波多我世登。刀布比登乎。美流我登毛之佐。毛乃母比毛世受。
防人に、行くは誰が背と、問ふ人を、見るがともしさ。物思もせず。

阿米都之乃。可未爾奴佐於伎。伊波比都都。伊麻世和我世奈。阿禮乎之毛波婆。
天地の、神に幣置き、齋ひつゝ、去ませ我が夫、我をし思はば。

伊波乃伊毛呂。和乎之乃布良之。麻由須比爾。由須比之比毛乃。登久良久毛倍婆。
家の妹ろ、我を忍ぶらし。眞結に、結びし紐の、解くらく思へば。

右一首。橘樹郡上丁物部眞根。

久佐麻久良。多妣乃麻流禰乃。比毛多要婆。安我弖等都氣呂。許禮乃波流母志。

草枕、旅の丸寢の、紐絶えば、我が手と附けろ、是の針持し。

右一首。妻椋椅部弟女。

和我由伎乃。伊伎都久之可婆。安之我良乃。美禰波保久毛乎。美等登志怒波禰。

我が行きの、息衝くしかば、足柄の、峰這ほ雲を、見とゝ忍ばね。

右一首。都筑郡上丁服部於田。

和我世奈乎。都久之倍夜里弖。宇都久之美。於妣波等可奈奈。阿也爾加母禰毛。

我が夫を、筑紫へ遣りて、うつくしみ、帶は解かなゝ、あやにかも寢も。

右一首。妻服部呰女。

安之我良乃。美佐可爾多志弖。蘇涅布良波。伊波奈流伊毛波。佐夜爾美毛可母。

足柄の、み坂に立して、袖振らば、家なる妹は、さやに見もかも。

へ也」
住みよけを—住みよきを
戀しけ思はも—戀しく思はん
我が手と附けろ—我が手と思ひて附けよの意
是の針持し—この針を以ての意
息衝くしかば—歎かるればの意
見とゝ—見つゝ
うつくしみ—愛しく思ふ故に
解かなゝ—解かず
あやにかも寢も—奇しきまでに戀しく思ひつゝ寢んかの意
さやに見もかも—明かに見んかも

右一首。主帳荏原郡物部歳德。

久佐麻久良。多比由久世奈我。麻流禰世婆。伊波奈流和禮波。比毛等加受禰牟。

草枕、旅行く夫が、丸寢せば、家なる我は、紐解かず寢む。

右一首。妻椋椅部刀自賣。

阿加胡麻乎。夜麻努爾波賀志。刀里加爾弖。多麻乃余許夜麻。加志由加也良牟。

赤駒を、山野にはがし、捕りかにて、多摩の横山、かしゆか遣らむ。

右一首。豐島郡上丁椋椅部荒虫之妻宇遲部黒女。

和我可度乃。可多夜麻都婆伎。麻己等奈禮。和我弖布禮奈奈。都知爾於知母可毛。

我が門の、片山椿、誠汝、我が手觸れなゝ、地に落ちもかも。

右一首。荏原郡上丁物部廣足。

伊波呂爾波。安之布多氣騰母。須美與氣乎。都久之爾伊多里氏。古布志氣毛波母。

家ろには、蘆火燒けども、住みよけを、筑紫に至りて、戀しけ思はも。

見るのす―見るなすにて見る如くの意

はがし―放ち

捕りかにて―捕へ兼ねて

多摩―武藏國

かしゆか遣らむ―歩（かち）よりか行かしめんの意

我が門の云々―一說、椿を妻に譬ふ、汝は妻を指す、「なゝ」は「ず」といふ意の東國方言、古義に「契りて未だ娶らざる女をいへるにて（中略）未だ我手觸れぬ間に汝實におちぶれなんか、さても心がかりや云々」、宣長は「四の句は遠く別れ居るたとへ、結句はよすがなくて侘びんかと妻を憐むたとへ也」

まくら太刀—(一)眞黒太刀、防人等の佩く黒ぬりの刀(二)枕太刀、常に枕邊に置く太刀
まき來む—罷り來らん、歸り來らん、
うつくしけ—うつくしき、かはゆき
まこ—「ま」は接頭語、「こ」は妻のこと
母之弖—「之」一本「知」
美弖毛母也—一說「母也」は「也母」の誤にて「みてもやも」にて、見てむやもの意

萬葉集 巻第二十下

麻久良多知。己志爾等里波伎。麻可奈之伎。西呂我馬伎己無。都久乃之奈久。
まくら太刀、腰に取佩き、眞悲しき、背ろがまき來む、月の知らなく。

右一首。上丁那珂郡檜前舍人石前之妻大伴眞足母。

於保伎美乃。美己等可之古美。宇都久之氣。麻古我弖波奈禮。之末豆多比由久。
大君の、命畏み、うつくしけ、まこが手離れ、島傳ひ行く。

右一首。助丁秩父郡大伴部少歳。

志良多麻乎。弖爾刀里母之弖。美流乃須母。伊弊奈流伊母乎。麻多美弖母母也。
白玉を、手に取持して、見るのすも、家なる妹を、又見てもよや。

島陰に云々—島陰に船泊つる毎に平安なる由を家人に告げやらんと思へど其使の無き故唯故鄕を戀しく思ひつゝのみ往かんと也

之麻可氣爾。和我布禰波弖氏。都氣也良牟。都可比乎奈美也。古非都都由加牟。
島陰に、我が船はてて、告げやらむ、使を無みや、戀ひつゝ行かむ。

二月二十三日兵部少輔大伴宿禰家持。

朝開き—朝發船して

齋へにかあらむ—齋へば其しるしにやあらんの意

比里弊流—「里」一本「呂」

別れし來れば、思ふ空、安くもあらず、戀ふる空、苦しきものを、現身の、世の人なれば、魂きはる、命も知らず、海原の、恐き道を、島傳ひ、い漕ぎ渡りて、在り廻り、我が來るまでに、平けく、親は座さね、恙無く、妻は待たせと、住吉の、我が皇神に、幣奉り、祈り申して、難波津に、船を浮け据ゑ、八十楫貫き、水手整へて、朝開き、我は漕ぎ出ぬと、家に告げこそ。

反歌

伊弊妣等乃。伊波倍爾可安良牟。多比良氣久。布奈涅波之奴等。於夜爾麻宇佐爾。

家人の、齋へにかあらむ、平けく、船出はしぬと、親に申さね。

美蘇良由久。久母母都可比等。比等波伊倍等。伊弊頭刀夜良武。多豆伎之良受母。

御空行く、雲も使と、人は言へど、家裏遣らむ、たづき知らずも。

伊弊都刀爾。可比曾比里弊流。波麻奈美波。伊也之久之久二。多可久與須禮騰。

家裏に、貝ぞ拾へる、濱浪は、彌しく〳〵に、高く寄すれど。

栲綱の―枕詞
鹿兒じ物―枕詞
言問せむ―物言ひ交はさん
悲び座せ―下に「ば」を補ふ
聲のさまよひ―春鳥の鳴くこと、妻子の泣き悲むに譬ふ

等奈禮婆。多麻伎波流。伊能知母之良受。海原乃。可之古伎美知乎。之麻豆多比。伊己藝和多利弖。安利米具利。和我久流麻泥爾。多比良氣久。於夜波伊麻佐爾。都都美奈久。都麻波麻多世等。須美乃延能。安我須賣可未爾。奴佐麻都利。伊能里麻宇之弖。奈爾波都爾。船乎宇氣須惠。夜蘇加奴伎。可古登登能倍弖。安佐婢良伎。和波己藝涅奴等。伊弊爾都氣己曾。

大君の、任けのまに／＼、防人に、我が立ち來れば、柞葉の、母の命は、御裳の裾、摘上げ掻撫で、ちゝの實の、父の命は、栲綱の、白鬚の上ゆ、涙垂り、歎き宣ばく、鹿兒じもの、唯一人して、朝戸出の、悲しき我子、新玉の、年の緒永く、相見ずは、戀しくあるべし、今日だにも、言問せむと、惜しみつゝ、悲び座せ、若草の、妻も子どもも、遠近に、さはに圍み居、春鳥の、聲のさまよひ、白妙の、袖泣き濡らし、携はり、別れがてにも、引き止め、慕ひしものを、大君の、命畏み、玉桙の、道に出で立ち、岳の崎、いたむる毎に、萬度、顧みしつゝ、遙々に、

不二取載一之。

陳二防人悲レ別之情一歌一首并短歌

大王乃。麻氣乃麻爾麻爾。島守爾。和我多知久禮婆。波波蘇婆能。波波能美許等波。美母乃須蘇。都美安氣可伎奈渠。知知能未乃。知知能美許等波。多久頭怒能。之良比氣乃宇倍由。奈美太多利。奈氣伎乃多婆久。可胡自母乃。多太比等里之氐。安佐刀渠乃。可奈之伎吾子。安良多麻乃。等之能乎奈我久。安比美受波。古非之久安流倍之。今日太仁母。許等騰比勢武等。乎之美都都。可奈之備伊麻世。若草之。都麻母古騰母毛。乎知己知爾。左波爾可久美爲。春鳥乃。己惠乃佐麻欲比。之路多倍乃。蘇渠奈伎奴良之。多豆佐波里。和可禮加弖爾等。比伎等騰米。之多比之毛能乎。天皇乃。美許等可之古美。多麻保己乃。美知爾出立。乎可之佐伎。伊多牟流其等爾。與呂頭多比。可弊里見之都追。波呂波呂爾。和可禮之久禮婆。於毛布蘇良。夜須久母安良受。古布流蘇良。久流之伎毛乃乎。宇都世美乃。與能比

絶えにけるかも―月日久しくなりたるを歎くなるべし

伊母古―「古」一本「等」

忍びにせよと―我を戀ひ慕ふ形見にせよとの意

家ろ―「ろ」は助辭

行かも人もが―行かん人もがな

ひなぐもり―枕詞、日の曇りの義か、ひた曇りの義か

難波路を、行きて來までと、我妹子が、著けし紐が緒、絶えにけるかも。

右一首。助丁上毛野牛甘。

和我伊母古我。志濃比爾西餘等。都氣志比毛。伊刀爾奈流等母。和波等可自等余。

我が妹子が、忍びにせよと、著けし紐、絲になるとも、我は解かじとよ。

右一首。朝倉益人。

和我伊波呂爾。由加毛比等母我。久佐麻久良。多妣波久流之等。都氣夜良麻久母。

我が家ろに、行かも人もが、草枕、旅は苦しと、告げ遣らまくも。

右一首。大伴部節麻呂。

比奈久母理。宇須比乃佐可乎。古延志太爾。伊毛賀古比之久。和須良延奴可母。

ひなぐもり、碓氷の坂を、越えしだに、妹が戀しく、忘らえぬかも。

右一首。池田部子磐前。

二月二十三日上野國防人部領使大目正六位下上毛野君駿河進歌數十二首。但拙劣歌者

母無しにして—母は子の母、みなし子を置きて來しを歎くなり

神の御坂—すべて嶮しく深き山坂をいふか

多奈妣久—「多奈」一本「等能」

來ぬかむ—來ぬかも

右十九日兵部少輔大伴宿禰家持作之。

可良己呂茂。須會爾等里都伎。奈苦古良乎。意伎弖曾伎怒也。意母奈之爾志弖。
韓衣、裾に取附き、泣く子らを、置きてぞ來ぬや。母無しにして。

右一首。國造少縣郡他田舍人大島。

知波夜布留。賀美乃美佐賀爾。怒佐麻都里。伊波負伊能知波。意毛知知我多米。
千早振る、神の御坂に、幣奉り、齋ふ命は、母父が爲。

右一首。主帳埴科郡神人部子忍男。

意保伎美能。美己等可之古美。阿乎久牟乃。多奈妣久夜麻乎。古江弖伎怒加牟。
大君の、命畏み、青雲の、棚引く山を、越えて來ぬかむ。

右一首。少長谷部笠麻呂。

二月二十二日信濃國防人部領使上道得レ病不レ來。進歌數十二首。但拙劣歌者不レ取載レ之。

奈爾波治乎。由伎弖久麻弖等。和藝毛古賀。都氣之非毛我乎。多延爾氣流可母。

さもらふ—日和を伺ひ待つ。
島み—島邊
負征矢—背負ひたる征矢
そよと鳴る迄—矢の鳴るばかり、契沖「曾箭といふをうけて曾與とはいへり、泣聲の高くひゞくにつけて背に負ひたる征矢もそよぎて鳴る」
葦邊も見えず—まして本國の方の見ゆべくもなきを歎くなり

大君の、命畏み、妻別れ、悲しくはあれど、丈夫の、心振興し、取裝ひ、門出をすれば、垂乳根の、母掻撫で、若草の、妻は取附き、平けく、我は齋はむ、眞幸くて、早還り來と、眞袖持ち、涙を拭ひ、咽びつゝ、言問すれば、群鳥の、出立ちがてに、滯り、顧みしつゝ、彌遠に、國を來離れ、彌高に、山を越え過ぎ、蘆が散る、難波に來居て、夕潮に、船を浮け据ゑ、朝凪に、舳向け漕がむと、さもらふと、我が居る時に、春霞、島みに立ちて、田鶴が音の、悲しく鳴けば、遙々に、家を思ひ出、負征矢の、そよと鳴るまで、歎きつるかも。

反歌

宇奈波良爾。霞多奈妣伎。多頭我禰乃。可奈之伎與比波。久爾弊之於毛保由。
海原に、霞棚引き、田鶴が音の、悲しき宵は、國方し思ほゆ。

伊弊於毛負等。伊乎禰受乎禮婆。多頭我奈久。安之弊毛美要受。波流乃可須美爾。
家思ふと、寢を寢ず居れば、田鶴が鳴く、葦邊も見えず。春の霞に。

多弖流婆―「婆」一本「波」

可伎奈埿泥―「泥」一本無きをよしとす

見和多世婆。牟加都乎能倍乃。波奈爾保比。弖里氐多弖流婆。波之伎多我都麻。
見渡せば、向つ尾上の、花匂ひ、照りて立てるは、はしき誰が妻。

右三首二月十七日兵部少輔大伴家持作之。

爲二防人情一陳レ思作歌一首并短歌

大王乃。美己等可之古美。都麻和可禮。可奈之久波安禮特。丈夫。情布里於許之。等里與會比。門出乎須禮婆。多良知禰乃。波波可伎奈埿〔泥〕。若草乃。都麻波等里都吉。平久。和禮波伊波波牟。好去而。早還來等。麻蘇埿毛知。奈美太乎能其比。牟世比都都。言語須禮婆。群鳥乃。伊埿多知加弖爾。等騰己保里。可弊里美之都都。伊也等保爾。國乎伎波奈例。伊夜多可爾。山乎故要須疑。安之我知流。難波爾伎爲弖。由布之保爾。船乎宇氣須惠。安佐奈藝爾。倍牟氣許我牟等。佐毛良布等。和我乎流等伎爾。春霞。之麻未爾多知弖。多頭我禰之。悲鳴婆。波呂波呂爾。伊弊乎於毛比埿。於比曾箭乃。曾與等奈流麻埿。奈氣吉都流香母。

夢のみに―實際に妹と相寢る事は出來ず、只夢のみに也

刀禰―「禰」一本「爾」とある方宜し「とに」は内にの意

江水―難波江

裹―家づと、みやげ

於保伎美能。美己等加之古美。由美乃美仁。佐尼加和多良牟。奈賀氣己乃用乎。

大君の、命畏み、夢のみに、さ寢か渡らむ。長け此の夜を。

右一首。相馬郡大伴部子羊。

二月十六日下總國防人部領使少目從七位下縣犬養宿禰浄人進歌數二十二首。但拙劣歌者不二取載一之。

獨惜二龍田山櫻花一歌一首

多都多夜麻。見都都古要許之。佐久良波奈。知利加須疑奈牟。和我可敝流刀禰。

龍田山、見つゝ越え來し、櫻花、散りか過ぎなむ、我が歸るとに。

獨見二江水浮漂糞一怨二恨貝玉不一レ依作歌一首

保理江欲利。安佐之保美知爾。與流許都美。可比爾安里世婆。都刀爾勢麻之乎。

堀江より、朝潮滿ちに、寄る木積、貝にありせば、裹にせましを。

在二館門一見二江南美女一作歌一首

れて、防人に仰せられしをいふ
むら玉の―枕詞(一)ぬば玉の東國方言、或は本文「浪」は「波」の誤か(一)群玉也
固めとし―固めてし
危くなめかも―危げもなくうしろ安しの意、又、危ふげもあらじかにて、安かるべき事なるになほ堪へ難く心の落居ぬさまか
あがこひすなむ―贖ひ乞ひすらん
あめつし―「つし」は「つち」の東國方言にて「天地」か、或は本文「之」は「都」の誤にて「あめつゝ」か
うつくし母―いつくしみ思ふ母
枳麻之乎―「麻」一本「爾」に作る方宜し
命にされば―「命にしあれば」の約
齋瓮と置きて―齋瓮の如く大切にして故郷に置きその意

牟浪他麻乃。久留爾久枳作之。加多米等之。以母加去去里波。阿用久奈米加母。
むら玉の、樞に鏁差し、固めとし、妹が心は、危くなめかも。
右一首。猨島郡刑部　志加麻呂。

久爾具爾乃。夜之呂乃加美爾。奴佐麻都理。阿加古比須奈牟。伊母賀加奈志作。
國々の、社の神に、幣奉り、あがこひすなむ、妹がかなしさ。
右一首。結城郡忍海部五百麻呂。

阿米都之乃。以都例乃可美乎。以乃良波加。有都久之波波爾。麻多己等刀波牟。
あめつしの、何れの神を、祈らばか、うつくし母に、又言問はむ。
右一首。埴生郡大伴部麻與佐。

於保伎美能。美許等爾作例波。知知波波乎。以波比弊等於枳弖。麻爲弖枳麻之乎。
大君の、命にされば、父母を、齋瓮と置きて、參出來にしを。
右一首。結城郡雀　部廣島。

右一首。葛飾郡私部石島。

和加加都乃。以都母等夜奈枳。以都母以都母。於母加古比須奈。奈理麻之都母之。

我が門の、五本柳、何時も〳〵、母が戀ひすな、業ましつしも。

右一首。結城郡矢作部眞長。

知波乃奴乃。古乃弖加之波能。保保麻例等。阿夜爾加奈之美。於枳弖他加枳奴。

千葉の野の、兒手柏の、含まれど、あやに悲しみ、おきてたか來ぬ。

右一首。千葉郡大田部足人。

多妣等弊等。麻多妣爾奈理奴。以弊乃母加。枳世之己呂母爾。阿加都枳爾迦理。

旅とへど、眞旅になりぬ。家の妹が、著せし衣に、垢附きにかり。

右一首。占部虫麻呂。

志保不尼乃。弊古祖志良奈美。爾波志久母。於不世他麻保加。於母波弊奈久爾。

潮船の、舳越そ白浪、にはしくも、仰せ給ほか。思はへなくに。

右一首。印波郡丈部直大歳。

古比須奈—「奈」一本「須」

奈理麻之都母之—一説「之」は「都」の誤にて「なりましつゝも」にて、なりはひの業をし給ひながらもの意

母が戀ひすな—母は旅なる我を戀しく思ひておはすらん

他加—「他」は「和」の誤にて「わが」か、又「加」は「知」の誤にて「たち」か

千葉—下總國

含まれど—妹の我がふところに寢居りて別れ兼ねてありしに譬ふ

おきて—(一)置きて(二)起きて

旅とへど—旅といへど

垢附きにかり—「かり」はけりの東國方言か、或は本文「迦」は誤字か

潮船…浪—俄の意にて、「にはしくも」の序とす

にはしくも—俄にも、「しく」は助辭

仰せ給ほか—仰せ給ふか

ふたほがみ—未詳（一）二面神（二）兩小腹（三）太小腹、強暴大膽の意
惡しけ人—この役をさし來れる人をさす
あたゆまひ—痼病か
母が目もがも—母に逢見ん由もあれかし
たづき知らずも—行末の覺束なきをいふ也
浪な音ゑらひ—浪の音ゆりとよみ
子をら云々—三つの「ら」は共に助辭

布多富我美。阿志氣比等奈里。阿多由麻比。和我須流等伎爾。佐伎母里爾佐酒。
ふたほがみ、惡しけ人なり。あたゆまひ、我がする時に、防人にさす。
右一首。那須郡上丁大伴部廣成。

都乃久爾乃。宇美能奈伎佐爾。布奈餘會比。多志埿毛等伎爾。阿母我米母我母。
津の國の、海の渚に、船装ひ、立し出も時に、母が目もがも。
右一首。鹽屋郡上丁丈部足人。

二月十四日下野國防人部領使正六位上田口朝臣大戸進歌數十八首。但拙劣歌者不ㇾ取載ㇾ之。

阿加等伎乃。加波多例等枳爾。之麻加枳乎。己枳爾之布祢乃。他都枳之良受母。
曉の、彼は誰時に、島陰を、漕ぎにし船の、たづき知らずも。
右一首。助丁海上郡海上國造他田日奉直得大理。

由古作枳爾。奈美奈等惠良比。志流敝爾波。古乎等都麻乎等。於枳弖等母枳奴。
行こ先に、浪な音ゑらひ、後方には、子をら妻をら、置きてらも來ぬ。

忘れせなふも―忘れせぬも

濱邊―難波より西の濱を指す

別れなば―別れいなば

八度云々―家近き程にて也、八は數多きをいふ

難波戸―難波の瀬戸

集ひ―難波に也

別る―難波の津より也

都久比夜波。須具波由氣等毛。阿母志志可。多麻乃須我多波。和須例西奈布母。

月日夜は、過ぐは行けども、母父が、玉の姿は、忘れせなふも。

右一首。都賀郡上丁中臣部足國。

之良奈美乃。與曾流波麻倍爾。和可例奈波。伊刀毛須倍奈美。夜多妣蘇弖布流。

白浪の、寄そる濱邊に、別れなば、いとも術無み、八度袖振る。

右一首。足利郡上丁大舍人部禰麻呂。

奈爾波刀乎。己岐涅弖美例婆。可美佐夫流。伊古麻多可禰爾。久毛曾多奈妣久。

難波戸を、漕ぎ出て見れば、神さぶる、生駒高嶺に、雲ぞ棚引く。

右一首。梁田郡上丁大田部三成。

久爾具爾乃。佐伎毛利都度比。布奈能里弖。和可流乎美禮婆。伊刀母須弊奈之。

國々の、防人集ひ、船乘りて、別るを見れば、いとも術無し。

右一首。河内郡上丁神麻續部島麻呂。

幸矢拔き—靫、胡籙などへ矢を貫き入れてさすをいふか

立たりしもころ—立ちて在りしが如し

志志—「知知」に通じたる東語なるべし

阿米都知乃。可美乎伊乃里弖。佐都夜奴伎。都久之乃之麻乎。佐之弖伊久和例波。
天地の、神を祈りて、幸矢拔き、筑紫の島を、指して行く我は。

右一首。火長大田部荒耳。

麻都能氣乃。奈美多流美禮婆。伊波比等乃。和例乎美於久流等。多多理之母己呂。
松の木の、並みたる見れば、家人の、我を見送ると、立たりしもころ。

右一首。火長物部眞島。

多妣由伎爾。由久等之良受弖。阿母志志爾。己等麻乎佐受弖。伊麻叙久夜之氣。
旅行きに、行くと知らずて、母父に、言申さずて、今ぞ悔しけ。

右一首。寒川郡上丁川上巨老。

阿母刀自母。多麻爾母賀母夜。伊多太伎弖。美都良乃奈可爾。阿敝麻可麻久母。
母刀自も、玉にもがもや、戴きて、鬘の中に、合へ巻かまくも。

右一首。津守宿禰小黒栖。

牟麻―「牟」は「宇」の誤か、されどこれも東國方言か

立しや―立ちよ也、略解には、本文「志」は「知」の誤にて「たちや」か、又「夜」も誤かといへり

馬の蹄―枕詞

諸は―故鄉に留れる父母妻子一族を指すか

醜の御楯―醜は自ら卑みていふ、防人は實に天皇の御楯といふべければ也、毛詩「赳々武夫公侯干城」

阿志加良能。美佐可多麻波理。可閉理美須。阿例波久江由久。阿良志乎母。多志夜波婆可流。不破乃世伎。久江弖和波由久。牟麻能都米。都久志能佐伎爾。知麻利爲弖。阿例波伊波波牟。母呂母呂波。佐祁久等麻乎須。可閉利久麻弖爾。

足柄の、御坂た廻り、顧みず、我は越え行く。荒男も、立しや憚る、不破の關、越えて我は行く。馬の蹄、筑紫の崎に、留り居て、我は齋はむ。諸は、幸くと申す、歸り來までに。

右一首。倭文部可良麻呂。

二月十四日常陸國部領防人使大目正七位上息長眞人國島進歌數十七首。但拙劣歌者不二取載一之。

祁布與利波。可敝里見奈久弖。意富伎美乃。之許乃美多弖等。伊埿多都和例波。

今日よりは、顧みなくて、大君の、醜の御楯と、出で立つ我は。

右一首。火長今奉部與曾布。

久慈川―常陸國
潮船―潮路の上を漕ぐ船、海船
筑波根…花の―「ゆ」といふ序
かなしけ―かはゆき
霰降り―枕詞
我は來にしを―恙なく防人仕へまつらざらめやの意を含むか、又は何ぞ偉功を立てずして歸らんやの意を含むか
橘の云々―初二句は、「かぐはしき」の序。「かぐはしき」ははめていふ言也

右一首。茨城郡占部小龍。
久自我波波。佐氣久阿利麻弖。志富夫禰爾。麻可知之自奴伎。和波可敝里許牟。
久慈川は、幸く在り待て。潮船に、眞檝しゞ貫き、我は歸り來む。

右一首。久慈郡丸子部佐壯。
都久波禰乃。佐由流能波奈能。由等許爾母。可奈之家伊母曾。比留毛可奈之祁
筑波根の、小百合の花の、夜床にも、かなしけ妹ぞ、晝もかなしけ。
阿良例布理。可志麻能可美乎。伊能利都都。須米良美久佐爾。和例波伎爾之乎。
霰降り、鹿島の神を、祈りつゝ、皇御軍に、我は來にしを。

右二首。那賀郡上丁大舍人部千文。
多知波奈乃。之多布久可是乃。可具波志伎。都久波能夜麻乎。古比須安良米可毛。
橘の、下吹く風の、かぐはしき、筑波の山を、戀ひずあらめかも。

右一首。助丁占部廣方。

おろ据ゑ—下し据ゑ
今は漕ぎぬと—今は漕ぎ出でぬと
伊毛—「毛」一本「牟」、さらば「いむ」と訓むべし、意は同じ
なるべき事を—産業にすべき事を、生業の事を
告ぎこそ—告げよかし
記して附けて—書き記し授けて
波弖—「弖」一本「尼」
しだは—時は

奈爾波都爾。美布禰於呂須惠。夜蘇加奴伎。伊麻波許伎奴等。伊母爾都氣許曾。
難波津に、御船おろ据ゑ、八十楫貫き、今は漕ぎぬと、妹に告げこそ。
佐伎牟理爾。多多牟佐和伎爾。伊敝能伊毛何。奈流敝伎己等乎。伊波須伎奴可母。
防人に、立たむ騒ぎに、家の妹が、なるべき事を、言はず來ぬかも。

右二首。茨城郡若舍人部廣足。

於之弖流夜。奈爾波能津與利。布奈與曾比。阿例波許藝奴等。伊母爾都岐許曾。
押照るや、難波の津より、船裝ひ、我は漕ぎぬと、妹に告ぎこそ。
比多知散思。由可牟加里母我。阿我古比乎。志留志弖都祁弖。伊母爾志良世牟。
常陸指し、行かむ雁もが、我が戀を、記して附けて、妹に知らせむ。

右二首。信太郡物部道足。

阿我母弖能。和須例母之太波。都久波尼乎。布利佐氣美都都。伊母波之奴波弖。
我が面の、忘れもしだは、筑波根を、振りさけ見つゝ、妹は忍ばね。

見の乏しく―見ることの珍しく
見し給ひ云々―見明め給ひ
水脉引しつゝ―水脉を舟引き上ること
はらゝに―あちちこちちに、點々と
そきだくも―そこばくも、許多
おぎろ無き―廣大無限なる意
こきばくも―こゝばくも、許多

春の始は、八千種に、花咲き匂ひ、山見れば、見の乏しく、川見れば、見のさやけく、物毎に、榮ゆる時と、見し給ひ、明め給ひ、敷き座せる、難波の宮は、聞し召す、四方の國より、奉る、貢の船は、堀江より、水脉引しつゝ、朝凪に、檝引き上り、夕潮に、棹差し下り、あぢむらの、騒ぎ競ひて、濱に出でて、海原見れば、白波の、八重折るが上に、海人小舟、はらゝに浮きて、大御食に、仕へ奉ると、遠近に、漁り釣りけり。そきだくも、おぎろ無きかも、こきばくも、豊けきかも。こゝ見れば、宜し神代ゆ、始めけらしも。

櫻花。伊麻佐可里奈里。難波乃海。於之弖流宮爾。伎許之賣須奈倍。

櫻花、今盛なり。難波の海、押照る宮に、聞し召すなべ。

海原乃。由多氣伎見都都。安之我知流。奈爾波爾等之波。倍努倍久於毛保由。

海原の、豊けき見つゝ、蘆が散る、難波に年は、經ぬべく思ほゆ。

右二月十三日兵部少輔大伴宿禰家持。

伊麻能乎―「乎」は「與」の誤か

伎己之米須―「米」一本「乎」

大君の遠き御代―仁徳天皇の御代を指す「大君の」一訓「すめろぎの」

等。伊麻能乎爾。多要受伊比都都。可氣麻久母。安夜爾可之古志。可武奈我良。和其大王乃。宇知奈比久。春初波。夜知久佐爾。波奈佐伎爾保比。夜麻美禮婆。見能等母之久。可波美禮婆。見乃佐夜氣久。母能其等爾。佐可由流等伎登。賣之多麻比。安伎良米多麻比。之伎麻世流。難波宮者。伎己之米須。四方乃久爾欲里。多弖麻都流。美都奇能船者。保理江欲里。美乎妣伎之都都。安佐奈藝爾。可治比伎能保里。由布之保爾。佐乎佐之久太理。安治牟良能。佐和伎伎保比弖。波麻爾伊泥弖。海原見禮婆。之良奈美乃。夜敝乎流我宇倍爾。安麻乎夫禰。波良良爾宇伎弖。於保美氣爾。都加倍麻都流等。乎知許知爾。伊蘇里都利家理。曾伎太久毛。於藝呂奈伎可毛。己伎婆久母。由多氣伎可母。許己見禮婆。宇倍之神代由。波自米家良思母。

大君(おほきみ)の、遠(とほ)き御代(みよ)にも、押照(おして)る、難波(なには)の國(くに)に、天(あめ)の下(した)、知(し)らし召(め)しきと、今(いま)の世(よ)に、絶(た)えず言(い)ひつゝ、懸(か)けまくも、あやに畏(かしこ)し、神(かむ)ながら、我(わ)ご大君(おほきみ)の、打靡(うちなび)く

しほゝに―しをゝくと

我ぬ取附きて―我に取り附きて
言ひし云々―別れ難きことをいひし也、「見なく」は「見らく」に同じ
洮郡―「洮」は「淮」の誤なるべし、和名抄、上總國周淮季（スヱ）

蘆垣の、隈處に立ちて、我妹子が、袖もしほゝに、泣きしぞ思はゆ。

右一首。市原郡上丁刑部直千國。

於保伎美乃。美許等加志古美。伊弖久禮婆。和努等里都伎弖。伊比之古奈波毛。

大君の、命畏み、出で來れば、我ぬ取附きて、言ひし兒なはも。

右一首。種郡洮上丁物部龍。

都久之閉爾。敝牟加流布禰乃。伊都之加毛。都加敝麻都里弖。久爾爾閉牟可毛。

筑紫邊に、舳向る船の、何時しかも、仕へ奉りて、國に舳向かも。

右一首。長柄郡上丁若麻續部羊。

二月九日上總國防人部領使少目從七位下茨田連沙彌麻呂進歌數十九首。但拙劣歌者不ㇾ取ㇾ載之。

陳ニ私拙懐ㇾ一首并短歌

天皇乃。等保伎美與爾毛。於之弖流。難波乃久爾爾。阿米能之多。之良志賣之伎

家風—我が故郷の方より吹き來る風
家言—家の親や妻などの傳言
立鴨—飛びて立ちあがる鴨の意にて枕詞
渡らも—海を渡らん
我がからに—我が故に

家風は、日に〳〵吹けど、我妹子が、家言持ちて、來る日とも無し。

右一首。朝夷郡上丁丸子連大歳。

多知許毛乃。多知乃佐和伎爾。阿比美弖之。伊母加己己呂波。和須禮世奴可母。
立鴨の、立ちの騷ぎに、相見てし、妹が心は、忘れせぬかも。

右一首。長狹郡上丁丈部與呂麻呂。

余曾爾能美。美弖夜和多良毛。奈爾波我多。久毛爲爾美由流。志麻奈良奈久爾。
外にのみ、見てや渡らも。難波潟、雲井に見ゆる、島ならなくに。

右一首。武射郡上丁丈部山代。

和我波波能。蘇弖母知奈弖氐。和我可良爾。奈伎之許己呂乎。和須良延努可毛。
我が母の、袖持ち撫でて、我がからに、泣きし心を、忘らえぬかも。

右一首。山邊郡上丁物部手刀良。

阿之可伎能。久麻刀爾多知弖。和藝毛古我。蘇弖毛志保保爾。奈伎志曾母波由。

あすはの神—古事記に、大年神の子に庭津日神、次阿須波神云々と有りて、竈神ともいひ、農家などにて竈神と共に庭に祀りしならんともいふ
小柴さし—小柴もて神垣をかりそめに造るなるべし

多比—「比」一本「妣」
夜豆伎—「豆」一本「都」、「伎」一本「倍」

うまら—うばら、荊
這ほ—這ふ
はかれ—わかれ

百隈の、道は來にしを、又更に、八十島過ぎて、別れか行かむ。

右一首。助丁刑部直三野。

爾波奈加能。阿須波乃可美爾。古志波佐之。阿例波伊波波牟。加倍理久麻佰爾。

庭中の、あすはの神に、小柴さし、我は齋はむ。歸り來までに。

右一首。帳丁若麻續部諸人。

多比己呂母。夜豆伎可佐禰弖。伊努禮等母。奈保波太佐牟志。伊母爾志阿良禰婆。

旅衣、八つ著襲ねて、寢ぬれども、尙膚寒し。妹にしあらねば。

右一首。望陀郡上丁玉作部國忍。

美知乃倍乃。宇萬良能宇禮爾。波保麻米乃。可良麻流伎美乎。波可禮加由加牟。

道の邊の、うまらのうれに、這ほ豆の、絡る君を、はかれか行かむ。

右一首。天羽郡上丁丈部鳥。

伊倍加是波。比爾比爾布氣等。和伎母古賀。伊倍其登母遲弖。久流比等母奈之。

さくあれて―幸くあれと

あらずは―あらんよりは

太刀に成りて云々―汝が佩る太刀に成りても汝を齋はんものをと、防人の親がよめる也

母を別れて―母に別れて

知知波波我。可之良加伎奈弖。佐久安禮天。伊比之古度婆曾。和須禮加禰津流。
父母が、頭搔撫で、さくあれて、言ひし言葉ぞ、忘れ兼ねつる。

右一首。丈部稻麻呂。

二月七日駿河國防人部領使守從五位下布勢朝臣人主實進二九日一歌數二十首。但拙劣歌者不二取載一レ之。

伊閉爾之弖。古非都都安良受波。奈我波氣流。多知爾奈里弖母。伊波非弖之加母。
家にして、戀ひつゝあらずは、汝が佩ける、太刀になりても、齋ひてしがも。

右一首。國造丁日下部使主三中之文歌。

多良知禰乃。波波乎和加例弖。麻許等和例。多非乃加里保爾。夜須久禰牟加母。
垂乳根の、母を別れて、誠我、旅の假廬に、安く寢むかも。

右一首。國造丁日下部使主三中。

毛母久麻能。美知波紀爾志乎。麻多佐良爾。夜蘇志麻須義弖。和加例加由可牟。

はめて—古へ新室祝に賀詞いふことありしより斯くいふ

わろ—我等

おめほど—思へど

戀にして—戀しく思ふ故にして

こめちやすらむ—顏もち瘦すらん

和伎米故—「米」或は「毛」の誤か、又は東國の方言か

うちえする—枕詞

戀しくめあるか—戀しくもあるか、本文「米」は「毛」の誤か、又は東國の方言か

麻氣波之良。寶米弖豆久禮留。等乃能其等。已麻勢波波刀自。於米加波利勢受。

眞木柱、ほめて造れる、殿の如、座せ母刀自、面變せず。

右一首。坂田部首麻呂。

和呂多比波。多比等於米保等。己比爾志弖。古米知夜須良牟。和可美可奈志母。

わろ旅は、旅とおめほど、戀にして、こめちやすらむ、我が身悲しも。

右一首。玉作部廣目。

和須良牟弖。努由伎夜麻由伎。和例久禮等。和我知知波波。和須例勢努加毛。

忘らむと、野行き山行き、我來れど、我が父母は、忘れせぬかも。

右一首。商長首麻呂。

和伎米故等。不多利和我見之。宇知江須流。須流河乃禰良波。苦不志久米阿流可。

我妹子と、二人我が見し、うちえする、駿河の嶺らは、戀しくめあるか。

右一首。春日部麻呂。

たゝみけめ—枕詞
むらじが磯—駿國か河

國廻る—古へ郡縣をも國といへば、防人の郡々を轉任することをいへり
あとりかまけり—(一)藕子鳥かまびすしの意、(二)多數の防人のさわぎて任にまかるをいふ(三)我一人が任を帶びての意(四)「か」は接頭語「當任有」の意にて、年番に當り任ぜられたる意
父母え—「え」は「よ」に同じ

美衣利—一説、和名抄に駿河國に夜梨鄕あり、何れか誤にて同じところか「衣」一本「表」
橘の—枕詞か否か

多多美氣米。牟良自加已蘇乃。波奈利蘇乃。波波乎波奈例弖。由久我加奈之佐。
たゝみけめ、むらじが磯の、離磯の、母を離れて、行くが悲しさ。

右一首。助丁生部道麻呂。

久爾米具留。阿等利加麻氣利。由伎米具利。可比利久麻弖爾。已波比弖麻多禰。
國廻る、あとりかまけり、行き廻り、歸り來までに、齋ひて待たね。

右一首。刑部虫麻呂。

知知波波江。已波比弖麻多禰。豆久志奈流。美豆久白玉。等里弖久麻弖爾。
父母え、齋ひて待たね。筑紫なる、水漬く白玉、取りて來までに。

右一首。川原虫麻呂。

多知波奈能。美衣利乃佐刀爾。父乎於伎弖。道乃長道波。由伎加弖努加毛。
橘の、みえりの里に、父を置きて、道の長路は、行きがてぬかも。

右一首。丈部足麻呂。

雞が鳴く、東國男子の、妻別れ、悲しくありけむ。年の緒長み。

右二月八日兵部少輔大伴宿禰家持。

海原乎。等保久和多里弖。等之布等母。兒良我牟須敝流。比毛等久奈由米。

海原を、遠く渡りて、年經とも、兒らが結べる、紐解くなゆめ。

今替。爾比佐伎母利我。布奈弖須流。宇奈波良乃宇倍爾。奈美那佐伎曾禰。

今替る、新防人が、船出する、海原の上に。浪な咲きそね。

佐吉母利能。保里江己藝弖流。伊豆手夫禰。可治等流間奈久。戀波思氣家牟。

防人の、堀江漕ぎ出る、いづて船、楫取る間無く、戀は繁けむ。

右九日大伴宿禰家持作之。

美豆等利乃。多知能己蘇伎爾。父母爾。毛能波須價爾弖。己麻叙久夜志伎。

水鳥の、立ちの急に、父母に、物はずけにて、今ぞ悔しき。

右一首。上丁有度郡牛麻呂。

浪な咲きそね―浪起つ勿れ

いづて船―(一)五手船にて、五人にて漕ぐ船(二)伊豆出船にて、伊豆國より造り出す船

物はずけにて―物言はず來にて

有度郡―「郡」は「部」の誤にて氏なるべし

仇守る―異國の賊を守るなり
おさへの城―賊をおさへ防ぐ城
聞こし食す―知ろしめすに同じ、下へつゞく
まかず―抱いて寢ず
蘆が散る―枕詞
引折り―引きたわめ、力を入れて檝をつかふ事
あともひ―誘ひ
君―防人をさす
い行きさぐくみ―浪のまにまに浮きつ沈みつ行きなやみ
つゝまはず―恙なく
齋瓮を言々―旅立てるあとの床を齋ふは古の常なり

す、四方の國には、人さはに、滿ちてはあれど、雞が鳴く、東國男子は、出向ひ、顧せずて、勇みたる、猛き軍と、勞ぎ給ひ、任のまに〳〵、垂乳根の、母が目離れて、若草の、妻をもまかず、新玉の、月日よみつゝ、蘆が散る、難波のみ津に、大船に眞櫂しゞ貫き、朝凪に、水手整へ、夕潮に、檝引折り、あともひて、漕ぎ行く君は、波の間を、い行きさぐくみ、眞幸くも、早く到りて、大君の、命のまにま、丈夫の、心を持ちて、在り廻り、事し了らば、つゝまはず、歸り來ませと、齋瓮を、床邊に据ゑて、白妙の、袖折り返し、ぬば玉の、黑髮敷きて、永き日を、待ちかも戀ひむ、はしき妻らは。

反歌

麻須良男能。由伎等里於比弖。伊田弖伊氣婆。和可禮乎乎之美。奈氣伎家牟都麻。
丈夫の、靫取り負ひて、出でて行けば、別れを惜しみ、歎きけむ妻。

等里我奈久。安豆麻乎等故能。都麻和可禮。可奈之久安里家牟。等之能乎奈我美。

大君の——一訓「すめろぎの」

追テ痛二防人悲レ別之心一作歌一首并短歌

天皇乃。等保能朝廷等。之良奴日。筑紫國波。安多麻毛流。於佐倍乃城曾等。聞食。四方國爾波。比等佐波爾。美知弖波安禮杼。登利我奈久。安豆麻乎能故波。伊田牟可比。加弊里見世受弖。伊佐美多流。多家吉軍卒等。禰疑多麻比。麻氣乃麻爾麻爾。多良知禰乃。波波我目可禮弖。若草能。都麻乎母麻可受。安良多麻能。月日餘美都都。安之我知流。難波能美津爾。大船爾。末加伊之自奴伎。安佐奈藝爾。可故等登能倍。由布思保爾。可知比伎乎里。安騰母比弖。許藝由久伎美波。奈美乃間乎。伊由伎佐具久美。麻佐吉久母。波夜久伊多里弖。大王乃。美許等能麻爾末。麻須良男乃。許己呂乎母知弖。安里米具里。事之乎波良婆。都都麻波受。可敝理伎麻勢登。伊波比倍乎。等許敝爾須惠弖。之路多倍能。蘇田遠利加敝之。奴婆多麻乃。久路加美之伎弖。奈我伎氣遠。麻知可母戀牟。波之伎都麻良波。

大君(おほきみ)の、遠(とほ)の朝廷(みかど)と、不知火(しらぬひ)、筑紫(つくし)の國(くに)は、仇守(あたまも)る、おさへの城(き)ぞと、聞(き)こし食(を)

いそ―(一)石(二)礒

八十國―多くの國の意、防人は遠江以東の國より出でて數多ければいふ

船かざり―船よそひすること

日ろ―「ろ」は助辭

右一首。長下郡物部古麻呂。

二月六日防人部領使遠江國史生坂本朝臣人上進歌數十八首。但有拙劣歌十一首不取載之。

於保吉美能。美許等可之古美。伊蘇爾布理。宇乃波良和多流。知知波波乎於伎弖。

大君の、命畏み、いそに觸り、海原渡る、父母を置きて。

右一首。助丁丈部造人麻呂。

夜蘇久爾波。那爾波爾都度比。布奈可射里。安我世武比呂乎。美毛比等母我母。

八十國は、難波に集ひ、船かざり、我がせむ日ろを、見も人もがも。

右一首。足下郡上丁丹比部國人。

奈爾波都爾。余曾比余曾比弖。氣布能日夜。伊田弖麻可良武。美流波波奈之爾。

難波津に、裝ひくて、今日の日や、出でて退らむ。見る母無しに。

右一首。鎌倉郡上丁丸子連多麻呂。

右一首。防人山名郡丈部眞麻呂。

等倍多保美。志留波乃伊宗等。爾閉乃宇良等。安比弖之阿良婆。己等母加由波牟。

遠江、白羽の磯と、にへの浦と、逢ひてしあらば、言も通はむ。

右一首。同郡丈部川相。

知知波波母。波奈爾母我毛夜。久佐麻久良。多妣波由久等母。佐佐己弖由加牟。

父母も、花にもがもや、草枕、旅は行くとも、捧ごて行かむ。

右一首。佐野郡丈部黒當。

父母我。等能能志利弊乃。母母余具佐。母母與伊弖麻勢。和我伎多流麻弖。

父母が、殿の後の、もゝよ草、百代いでませ。我が來るまで。

右一首。同郡生玉部足國。

和我都麻母。畫爾可伎等良無。伊豆麻母加。多比由久阿禮波。美都都志努波牟。

我が妻も、繪に畫き取らむ、いづまもが。旅行く我は、見つゝ忍ばむ。

遠江云々―眞淵は岡部日記中に、「筑紫へさゝれたる此國の防人の歌にて、筑紫と遠江といとのきたる境なれば、古郷の思の堪へ難きを、彼の筑紫に有るにへの浦と此しるはの磯は、へをし物にへと汁と向ひて近きが如くあちば物は思はじを、名のみは相似てかひなき由をいへり云々」

捧ごて―捧げて

百代いでませ―百年もいませの意

いづまもが―暇もがなあれかし

呼び立てし―鹿笛を吹きて鹿を呼び出すこと古もありけん

かゞぶり―蒙り

かえがいむたねを―未詳、試に(一)(二)の説を示す、(一)「かえ」は地名か、「むた」は共に、かえといふ所の妹と共に寢せしものを(二)「いむたね」は妹なねにて、かえといふ里に妹なねはあれどといふ意か(三)かえといふ所の齋嶺といふ山

戀ひらし―戀ふらし

咲きて來ずけむ―咲き來ざらんの意、本文「低」一本「泥」にて「咲き出こずけむ」也

麻須良男乃。欲妣多天思加婆。左乎之加能。牟奈和氣由可牟。安伎野波疑波良。
丈夫の、呼び立てしかば、さ牡鹿の、胸別け行かむ、秋の萩原。

右歌六首。兵部少輔大伴宿禰家持獨憶㆓秋野㆒聊述㆓拙懷㆒作㆑之。

天平勝寶七歳乙未二月相替遣㆓筑紫諸國㆒防人等歌

可之古伎夜。美許等加我布理。阿須由利也。加曳我伊牟多禰乎。伊牟奈之爾志弖。
畏きや、命かゞぶり、明日ゆりや、かえがいむたねを、いむ無しにして。

右一首。國造丁長下郡物部秋持。

和我都麻波。伊多久古比良之。乃牟美豆爾。加其佐倍美曳弖。余爾和須良禮受。
我が妻は、甚く戀ひらし。飲む水に、影さへ見えて、よに忘られず。

右一首。主帳丁麁玉郡若倭部身麻呂。

等伎騰吉乃。波奈波佐家登母。奈爾須禮曾。波波登布波奈乃。佐吉低己受祁牟。
時々の、花は咲けども、何すれぞ、母とふ花の、咲きて來ずけむ。

忍ばな—愛賞せん

袖著衣—袖を著けたる衣

裾み—裾邊
野司—野の高き處

男女—(一)をとこへし、をみなへし(二)すゝき、女郎女(三)男女、一五三四二と句を轉じて見よ(四)男女の宮人たちの花競すとて打交り遊ぶを見ん爲めに、さて句は三四五一二として心得べし

八千種に、草木を植ゑて、時毎に、咲かむ花をし、見つゝ忍ばな。

右一首。同月二十八日大伴宿禰家持作レ之。

宮人乃。蘇泥都氣其呂母。安伎波疑爾。仁保比與呂之伎。多加麻刀能美夜。
宮人の、袖著衣、秋萩に、匂ひ宜しき、高圓の宮。

多可麻刀能。宮乃須蘇未乃。努都可佐爾。伊麻左家流良武。乎美奈弊之波母。
高圓の、宮の裾みの、野司に、今咲けるらむ。女郎花はも。

秋野爾波。伊麻己曾由可米。能母乃布能。乎等古乎美奈能。波奈爾保比見爾。
秋野には、今こそ行かめ。武夫の、男女の、花匂ひ見に。

安伎能野爾。都由於弊流波疑乎。多乎良受弖。安多良佐可里乎。須具之弖牟登香。
秋の野に、露負へる萩を、手折らずて、あたら盛りを、過してむとか。

多可麻刀能。秋野乃宇倍能。安佐疑里爾。都麻欲夫乎之可。伊泥多都良武可。
高圓の、秋野の上の、朝霧に、妻呼ぶ牡鹿、出で立つらむか。

和草の―草の名、上三句は「にこよかに」の序

繼ぎて―常に續けて

うら待ち―心の内に待ち

月をし待たむ―この月は月次の月にて即ち七月をさす

戕振る程に―戕は舟を繫ぎ止むる木、木をふりたてゝ綱を結ふによりて振るとはいへり

秋風爾。奈妣久可波備能。爾故具左能。爾古餘可爾之母。於毛保由流香母。
秋風に、靡く川邊の、和草の、にこよかにしも、思ほゆるかも。

安吉佐禮婆。奇里多知和多流。安麻能河波。伊之奈彌於可婆。都藝弖見牟可母。
秋されば、霧立ち渡る、天の河、石並み置かば、繼ぎて見むかも。

秋風爾。伊麻香伊麻可等。比母等伎弖。宇良麻知乎流爾。月可多夫伎奴。
秋風に、今か〳〵と、紐解きて、うら待ち居るに、月傾きぬ。

秋草爾。於久之良都由能。安可受能未。安比見流毛乃乎。月乎之麻多牟。
秋草に、置く白露の、飽かずのみ、逢見るものを、月をし待たむ。

安乎奈美爾。蘇弖佐閇奴禮弖。許具布禰乃。可之布流保刀爾。左欲布氣奈武可。
青波に、袖さへ濡れて、漕ぐ船の、戕振る程に、小夜更けなむか。

右大伴宿禰家持獨仰二天漢一作レ之。

八千種爾。久佐奇乎宇惠弖。等伎其等爾。左加牟波奈乎之。見都追思努波奈。

初秋風—牽牛になりてよめり

秋といへば—一四五三二と句を轉じて見よ

花に—花やかに珍しくの意

右一首。少納言大伴宿禰家持矚二時花一作。但未レ出之間。大臣罷レ宴而不二擧誦一耳。

詠二霍公鳥一歌一首

許乃久禮能。之氣伎乎乃倍乎。保等登藝須。奈伎弖故由奈里。伊麻之久良之母。

木の暗の、繁き尾上を、郭公、鳴きて越ゆなり。今し來らしも。

右一首。四月大伴宿禰家持作。

七夕歌八首

波都秋風。須受之伎由布弊。等香武等會。比毛波牟須妣之。伊母爾安波牟多米。

初秋風、涼しき夕、解かむとぞ、紐は結びし。妹に逢はむため。

秋等伊弊婆。許己呂會伊多伎。宇多弖家爾。花爾奈蘇倍弖。見麻久保里香聞。

秋といへば、心ぞいたき。轉て異に、花になぞへて、見まく欲りかも。

波都乎婆奈。波名爾見牟登之。安麻乃河波。弊奈里爾家良之。年緒奈我久。

初尾花、花に見むとし、天の河、隔りにけらし。年の緒長く。

印南野―播磨國
赤柏―色づきたる柏の葉
さね―實に

彌年のはに―いよいよ年毎に

君を見まくは云々―君を見んは千歳なれかしと左大臣の長壽を祝ふなるべし

印南野の、赤柏は、時はあれど、君を我が思ふ、時はさね無し。

右一首。播磨國守安宿王奏。古今未ㇾ詳。

三月十九日家持之庄門槻樹下宴飲歌二首

夜麻夫伎波。奈泥都都於保佐牟。安里都都母。伎美伎麻之都都。可射之多里家利。
山吹は、撫でつゝ生さむ　在りつゝも、君來ましつゝ、かざしたりけり。

右一首。置始連長谷。

和我勢故我。夜度乃也麻夫伎。佐吉弖安良婆。也麻受可欲波牟。伊夜登之能波爾。
我が背子が、宿の山吹、咲きてあらば、止まず通はむ。彌年のはに。

右一首。長谷攀ㇾ花提ㇾ壺到來。因ㇾ是大伴宿禰家持作二此歌一和ㇾ之。

同月二十五日左大臣橘卿宴二于山田御母之宅一歌一首

夜麻夫伎乃。花能左香利爾。可久乃其等。伎美乎見麻久波。知登世爾母我母。
山吹の、花の盛りに、斯くの如、君を見まくは、千歳にもがも。

霜…たばしり—「彌増し」の序

古今未レ詳—時宜に適したる舊作を歌へるか、又即席の新作か未レ詳と也

年月は云々—新しき年月を重ねて久しく相見れどもの意、本文「安多良安多良」一本「安良多安良多」

見むと云々—いつまでも今日のごとく、新年を重ねて相見んとおもふが樂しき也

天皇—孝謙天皇
太上天皇—元正天皇
皇太后—光明皇后

霜の上に、霰たばしり、彌増しに、我は參ゐ來む。年の緒長く。

古今未レ詳。

右一首。左兵衛督大伴宿禰千里。

年月波。安多良安多良爾。安比美禮騰。安我毛布伎美波。安伎太良奴可母。

年月は、新々に、相見れど、我が思ふ君は、飽き足らぬかも。

古今未レ詳。

右一首。民部少丞大伴宿禰村上。

可須美多都。春初乎。家布能其等。見牟登於毛倍波。多努之等曾毛布。

霞立つ、春の初を、今日の如、見むと思へば、樂しとぞもふ。

右一首。左京少進大伴宿禰池主。

七日天皇太上天皇皇太后於二東常宮南大殿一肆宴歌一首

伊奈美野乃。安可良我之波波。等伎波安禮騰。伎美乎安我毛布。登伎波佐禰奈之。

たゞならずとも―略解に、たゞにあらんよりはの意とせるはいかゞ、實に妹に逢ふにはあらずともなるべし

黄葉敢へむかも―いまだ紅葉しあへざりし下葉も、今はもみぢ敢へんかと也

凌ぎ―押分けて

八月十二日二三大夫等各提二壺酒一登二高圓野一聊述二所心一作歌三首

多可麻刀能。乎婆奈布伎故酒。秋風爾。比毛等伎安氣奈。多太奈良受等母。

高圓の、尾花吹き越す、秋風に、紐解き明けな、たゞならずとも。

右一首。左京少進大伴宿禰池主。

安麻久母爾。可里會奈久奈流。多加麻刀能。波疑乃之多婆波。毛美知安倍牟可聞。

天雲に、雁ぞ鳴くなる、高圓の、萩の下葉は、黄葉敢へむかも。

右一首。左中辨中臣清麻呂朝臣。

乎美奈弊之。安伎波疑之努藝。左乎之可能。都由和氣奈加牟。多加麻刀能野曾。

女郎花、秋萩凌ぎ、さ牡鹿の、露別け鳴かむ、高圓の野ぞ。

右一首。少納言大伴宿禰家持。

六年正月四日氏族人等賀二集于少納言大伴宿禰家持之宅一宴飲歌三首

霜上爾。安良禮多婆之里。伊夜麻之爾。安禮波麻爲許牟。年緒奈我久。

先太上天皇—元正天皇

足引の云々—略解に「花紅葉などを折らせて歸らせたまひて、山賤の奉れるよしよませ給へるか云々、宣長云、山づとぞ是とのたまへるは、卽御歌をさしてのたまへる也といへり」

山人—一說、天皇をさす

山人や誰—山人は御製にのたまへる山人

萬葉集 卷第二十上

幸二行於山村一之時歌二首

先太上天皇詔二陪從王臣一曰夫諸王卿等宜下賦二和歌一而奏上卽御口號曰。

安之比奇能。山行之可婆。山人乃。和禮爾依志米之。夜麻都刀曾許禮。

足引の、山行きしかば、山人の、我に得しめし、山裹ぞ是。

舍人親王應レ詔奉レ和歌一首

安之比奇能。山爾由伎家牟。夜麻毗等能。情母之良受。山人夜多禮。

足引の、山に行きけむ、山人の、心も知らず、山人や誰。

右天平勝寶五年五月在二於大納言藤原朝臣之家一時。依レ奏レ事而請問之間。少主鈴山田史土麻呂語二少納言大伴宿禰家持一曰。昔聞二此言一。卽誦二此歌一也。

稱二作者名字一。徒錄二年月所處緣起一者。皆大伴宿禰家持裁作歌詞也。異本左註也

蘰くは—蘰にするは

うらがなし—心可憐に

いさゝ群竹—小さき竹歟、「い」は發語、「さゝ」は小の意、又五十竹葉群竹の義にて、數多く繁りたる竹をいふ

うら〳〵に—うらうらかに

二月十九日於二左大臣橘家一宴見レル二攀折レル柳條一ヲ歌一首

青柳乃。保都枝與治等理。可豆良久波。君之屋戸爾之。千年保久等曾。

青柳の、上枝攀ぢ取り、蘰くは、君が宿にし、千歳祝くとぞ。

二十三日依レ興作歌二首

春野爾。霞多奈妣伎。宇良悲。許能暮影爾。鶯奈久母。

春の野に、霞棚引き、うらがなし。此の夕影に、鶯鳴くも。

和我屋度能。伊佐左村竹。布久風能。於等能可蘇氣伎。許能由布敝可母。

我が宿の、いさゝ群竹、吹く風の、音の幽けき、此の夕かも。

二十五日作歌一首

宇良宇良爾。照流春日爾。比婆理安我里。情悲毛。比登里志於母倍婆。

うら〳〵に、照れる春日に、雲雀上り、心悲しも。一人し思へば。

春日遅々。鶬鶊正啼。悽惆之意。非レ歌難レ撥耳。仍作二此歌一。式展二締緒一。但此巻中。不レ

い群れて—「い」は接頭語

しば鳴きにしを—しばしば鳴きしものを

布禮禮之—一説「之」は「也」の誤にて、「ふれゝや」か、さらば降れゝばにやの意

新しき、年の始に、思ふどち、い群れて居れば、嬉しくもあるか。

右一首。大膳大夫道祖王。

十一日大雪落積尺有二寸因述二拙懐一歌三首

大宮能。内爾毛外爾母。米都良之久。布禮留大雪。莫踏禰乎之。
大宮の、内にも外にも、珍しく、降れる大雪、な踏みそね惜し。

御苑布能。竹林爾。鶯波。之波奈吉爾之乎。雪波布利都都。
御園生の、竹の林に、鶯は、しば鳴きにしを、雪は降りつゝ。

鶯能。鳴之可伎都爾。爾保敝理之。梅此雪爾。宇都呂布良牟可。
鶯の、鳴きし垣内に、匂へりし、梅此の雪に、移ろふらむか。

十二日侍二於内裏一聞二千鳥喧一作歌一首

河渚爾母。雪波布禮禮之。宮乃裏。智杼利鳴良之。爲牟等己呂奈美。
川洲にも、雪は降れゝし。宮の内に、千鳥鳴くらし。居む處無み。

息の緒に思ふ―命にかけて思ふ

戀ひや籠れる―心ある人の見に來んを待ち戀ひて咲かずにこもり居るか、それとも又雪の降る時を過さんと待ち居るか

白雪能。布里之久山乎。越山可牟。君乎會母等奈。伊吉能乎爾念。
白雪の、降り敷く山を、越え行かむ、君をぞもとな、息の緒に思ふ。
左大臣換レ尾云。伊伎能乎爾須流。然猶喩曰。如レ前誦レ之也。
右一首。少納言大伴宿禰家持。

五年正月四日於ニ治部少輔石上朝臣宅嗣家一宴歌三首

辭繁。不相問爾。梅花。雪爾之乎禮氏。宇都呂波牟可母。
事繁み、相訪はざるに、梅の花、雪に萎れて、移ろはむかも。
右一首。主人石上朝臣宅嗣。

梅花。開有之中爾。布敷賣流波。戀哉許母禮留。雪乎待等可。
梅の花、咲けるが中に、含めるは、戀ひや籠れる。雪を待つとか。
右一首。中務大輔茨田王。

新。年始爾。思共。伊牟禮氏乎禮婆。宇禮之久母安流可。

袖垂れて、いざ我が園に、鶯の、木傳ひ散らす、梅の花見に。

右一首。大和國守藤原永手朝臣。

足日木乃。夜麻之多日影。可豆良家流。宇倍爾也左良爾。梅乎之奴波牟。

足引の、山下日蔭、蘰ける、上にや更に、梅を忍ばむ。

右一首。少納言大伴宿禰家持。

二十七日林王宅餞二之但馬案察使橘奈良麻呂朝臣一宴歌三首

能登河乃。後者相牟。之麻之久母。別等伊倍婆。可奈久母在香。

のと川の、後には逢はむ。暫しくも、別ると言へば、悲しくもあるか。

右一首。治部卿船王。

立別。君我伊麻左婆。之奇島能。人者和禮自久。伊波比氏麻多牟。

立ち別れ、君が去まさば、しき島の、人は我じく、齋ひて待たむ。

右一首。京少進大伴宿禰黒麻呂。

袖垂れて―ゆるやかに遊ぶさま

足引の云々―略解「今日日陰かづら懸て肆宴に侍る上に、何ぞや梅を慕はんといふ也」古義には「國守のしかのたまへば此上に又更に梅花をしのばむかと云ふ意にせるはいかゞ」

のと川―大和國添上郡、「後」の序に用ひし也

しき島―大和國の別名

我じく―我身の上の事らしくの意か、又宣長は本文「久」は「之」の誤にて「われじし」かといへり

右一首。大納言巨勢朝臣。

天爾波母。五百都綱波布。萬代爾。國所知牟等。五百都都奈波布。

天(あめ)にはも、五百(いほ)つ綱(つな)延(は)ふ。萬代(よろづよ)に、國知(くにし)らさむと、五百(ほ)つ綱(つな)延ふ。

似古歌而未詳。

右一首。式部卿石川年足(トシタリ)朝臣。

天地與。久萬氏爾。萬代爾。都可倍麻都良牟。黒酒白酒乎。

天地(あめつち)と、久(ひさ)しき迄(まで)に、萬代(よろづよ)に、仕(つか)へ奉(まつ)らむ。黒酒(くろき)白酒(しろき)を。

右一首。從三位文屋智奴(チヌ)麻呂眞人。

嶋山爾。照在橘。宇受爾左之。仕奉者。卿大夫等。

嶋山(しまやま)に、照(て)れる橘(たちばな)、髻華(うず)にさし、仕(つか)へ奉(まつ)るは、公卿(まへつぎみ)たち。

右一首。右大辨藤原八束朝臣。

袖垂而。伊射吾苑爾。鶯乃。木傳令落。梅花見爾。

天―(一)禁中をさす(二)大嘗宮の屋根の上のあたりを祝ぎていふ

綱延ふ―(一)大嘗宮に注連繩などかけたればいふ(二)大嘗宮の上の方を結び固めたる繩をいふ

黒酒白酒―大嘗會にこれを奉ることある也、白酒は普通の清める酒、黒酒は、くさぎ(山うつぎ)の灰、後には又黒胡麻の粉を入れたる酒

仕奉者―(一)「者」は「爲」の誤にて「つかへまつらす」か(二)「者」は「佑」の誤りにて「つかへまつらふ」(三)「者」は「名」の誤にて「つかへまつらな」か

清き濱邊—庭の景色、まことの海濱にあらず

敷きませばかも—幸臨し給へる其德によりてか

牟具良波布。伊也之伎屋戸母。大皇之。座牟等知者。玉之可麻思乎。
葎這ふ、賤しき宿も、大君の、まさむと知らば、玉敷かましを。

右一首。左大臣橘卿。

松影乃。淸濱邊爾。玉敷者。君伎麻佐牟可。淸濱邊爾。
松影の、淸き濱邊に、玉敷かば、君來まさむか、淸き濱邊に。

右一首。右大辨藤原八束朝臣。

天地爾。足之照而。吾大皇。之伎座婆可母。樂伎小里。
天地に、足らはし照りて、我が大君、敷きませばかも。樂しき小里。

右一首。少納言大伴宿禰家持。未レ奏。

二十五日新嘗會肆宴應レ詔歌六首

天地與。相左可延牟等。大宮乎。都可倍麻都禮婆。貴久宇禮之伎。
天地と、相榮えむと、大宮を、仕へ奉れば、貴く嬉しき。

見し明めよ—一訓「めし明めて」見明らめ賜はん

天皇—孝謙天皇
太后—光明皇后
澤蘭—あかまぐさ、一名さはあらゝぎ

見者有之乎—「者」は「乍」の誤にて「見つゝありしを」か
年に忘れず—年久しく忘れず

須賣呂伎能。御代萬代爾。如是許曾。見爲安伎良目米。立年之葉爾。
天皇の、御代萬代に、斯くしこそ、見し明めよ。立つ年のはに。

右二首。大伴宿禰家持作之。

天皇太后共幸二於大納言藤原卿家一之日黄葉澤蘭一株拔取令レ持二内侍佐佐貴山君一遣二賜大納言藤原卿并陪從大夫等一御歌一首

命婦誦曰

此里者。繼而霜哉置。夏野爾。吾見之草波。毛美知多里家利。
此の里は、繼ぎて霜や置く。夏の野に、我が見し草は、黄葉ちたりけり。

十一月八日在二於左大臣橘朝臣宅一肆宴歌四首

余曾能未爾。見者有之乎。今日見者。年爾不忘。所念可母。
外のみに、見てはありしを、今日見れば、年に忘れず。思ほえむかも。

右一首。太上天皇御歌。

見しせす今日は―一訓「めす今日の日は」
島山―禁中の御池の中島か
あかる橘―(一)實の熟して赤くなれる橘(二)山橘、即ちやぶかうじ
祝きき―(一)祝きゝの略か(二)本文「吉」は「言(イヒ)」の誤か(三)古義には「保伎吉」は「保佐吉」の誤にて「ほさき」なるべしといへり
ゑらゝゝに―笑み榮えて

右發ニ遣勅使一并賜レ酒樂宴之日月未レ得ニ詳審一也。

爲レ應レ詔儲作歌一首并短歌

安之比奇能。八峯能宇倍能。都我能木能。伊也繼繼爾。松根能。絶事奈久。青丹余志。奈良能京師爾。萬代爾。國所知等。安美知之。吾大皇乃。神奈我良。於母保之賣志氐。豐宴。見爲今日者。毛能乃布能。八十伴雄能。島山爾。安可流橘。宇受爾指。紐解放而。千年保伎。保伎吉等餘毛之。惠良惠良爾。仕奉乎。見之貴左。

足引の、八尾の上の、樛の木の、彌繼々に、松が根の、絶ゆる事無く、青丹吉、奈良の都に、萬代に、國知らさむと、やすみしゝ、我が大君の、神ながら、思し召して、豐明、見しせす今日は、武夫の、八十伴の緒の、島山に、あかる橘、髻華に差し、紐解きさけて、千年祝き、祝ききとよもし、ゑらゝゝに、仕へ奉るを、見るが貴さ。

反歌一首

御歌―「御」の下に「製」を脫す、孝謙天皇の御製

四つの船―大使、副使、判官、主の典船なり

しらが―（一）木綿鬘（二）白紙なるべし
鎭而將待―一說、「しでてまたむ」と訓むべし
著け―（一）頭につけて其れを裾まで垂るゝなり（二）裳の裾に著くるなり

作主未ㇾ詳。

右件歌傳誦ハ大伴宿禰村上。同淸繼等是也。

勅ニ從四位上高麗朝臣福信ニ遣ニ於難波ニ賜ニ酒肴入唐使藤原朝臣淸河等ニ御歌一首幷短歌

虛見都。山跡乃國波。水上波。地往如久。船上波。床座如。大神乃。鎭在國曾。四舶。舶能倍奈良倍。平安。早渡來而。還事。奏日爾。相飮酒曾。斯豐御酒者。

空見つ、大和の國は、水の上は、地行く如く、船の上は、床に居る如、大神の、齋へる國ぞ、四つの船、船の舳並べ、平けく、早渡り來て、返言、申さむ日に、相飮まむ酒ぞ。此の豐御酒は。

反歌一首

四舶。早還來等。白香著。朕裳裾爾。鎭而將待。

四つの船、早歸り來と、しらが著け、朕が裳の裾に、齋ひて待たむ。

這ふ云々—水田なりし地を盛なる都と爲しつるよと也

行き足らはして—行きとどきて、公事を行ひ竟への意を含めたり

櫛も見じ云々—仙覺説、人の旅立ちし後三日は家の庭も掃かず使ふ櫛も見ずといふことありといへり「見じ」は取り持ち用ふまじの義か

大君は、神にしませば、赤駒の、這ふ田井を、都となしつ。

右一首。大將軍贈右大臣大伴卿作。

大王者。神爾之座者。水鳥乃。須太久水奴麻乎。皇都常成都。

大君は、神にしませば、水鳥の、集く水沼を、都となしつ。

作者未レ詳。

右件二首。天平勝寶四年二月二日聞レ之卽載ニ於茲一也。

閏三月於ニ衞門督大伴古慈悲宿禰家一餞ニ之入唐副使同胡麻呂宿禰等一

歌二首

韓國爾　由伎多良波之氏。可敝里許牟。麻須良多家乎爾。美伎多氏麻都流。

唐國に、行き足らはして、歸り來む、益荒猛男に、御酒奉る。

右一首。多治比眞人鷹主壽ニ副使大伴胡麻呂宿禰一也。

梳毛見自。屋中毛波可自。久左麻久良。多婢由久伎美乎。伊波布等毛比氏。

櫛も見じ、家内も掃かじ。草枕、旅行く君を、齋ふと思ひて。

もと葛城王なればなり、

立去奴—「去」一本「之」とある方宜し

手束弓—弓、手に握り持つ故にいふ

たなくら—山城國棚倉か

遠ぞきぬ—遠ざかりぬの意

常可—「常」は「零」の誤にて「ふれか」か、さらば降れぱかの意、又「可」は「方」などの誤にて「ば」かともいふ

十月二十二日於二左大辨紀飯麻呂朝臣家一宴歌三首

手束弓。手爾取持而。朝獵爾。君者立去奴。多奈久良能野爾。

手束弓、手に取り持ちて、朝獵に、君は立たしぬ。たなくらの野に。

右一首。治部卿船王傳二誦之一。久邇京都時歌。未レ詳二作主一也。

明日香河。河戸乎淸美。後居而。戀者京。彌遠曾伎奴。

明日香川、川門を淸み、後れ居て、戀ふれば都、いや遠ぞきぬ。

右一首。左中辨中臣朝臣淸麻呂傳誦。古京時歌也。

十月。之具禮能常可。吾世古河。屋戸乃黃葉。可落所見。

十月、時雨の常か、我が背子が、宿の黃葉、散りぬべく見ゆ。

右一首。少納言大伴宿禰家持當時矚二梨黃葉一作二此歌一也。

壬申年之亂平定以後歌二首

皇者。神爾之座者。赤駒之。腹婆布田爲乎。京師跡奈之都。

國見しせして、あもり座し、掃ひ平げ、千代重ね、彌繼々に、知らし來る、天の日嗣と、神ながら、我が大君の、天の下、治め給へば、武夫の、八十伴の緒を、撫で給ひ、齊へ給ひ、食國の、四方の人をも、あてさはず、惠み給へば、古ゆ、無かりしるし、度まねく、申し給ひぬ、たむだきて、事無き御代と、天地、月日と共に、萬世に、記し繼がむぞ。やすみしゝ、我が大君、秋の花、しが色々に、見し給ひ、明め給ひ、酒みづき、榮ゆる今日の、あやに貴き。

反歌一首

秋時花。種爾有等。色別爾。見之明良牟流。今日之貴左。

秋の花、種々なれど、色ことに、見し明むる、今日の貴さ。

爲ㇾ壽ニ左大臣橘卿ニ預作歌一首

古昔爾。君之三代經。仕家利。吾大王波。七世申禰。

古に、君が三代經て、仕へけり。我が大君は、七代申さね。

あもり座し―天降りまし

あてさはず―一說、本文「天」は「夫」の誤にて「あふさはず」あぶさずと同じく、とりのこさずの意

たむだきて―手を拱きて

しが色々に―其色々に

見し―一訓「めし」聞きを聞かし、知りを知らしといふと同格といふ

酒みづき―酒宴

君が三代經て―君は天皇、諸兄の母は天武、持統、文武の三代に仕へたれば斯くいふ

我が大君―諸兄をさす、

來之—一說「之」は「弖」の誤にて「出でて來て」

天雲に云々—神武紀饒速日命の事蹟をかりて天孫の御事を申せり

大伴宿禰家持和歌一首

立而居而。待登待可禰。伊泥氏來之。君爾於是相。插頭都流波疑。

立ちて居て、待てど待ち兼ね、出でて來し、君に此處に逢ひ、かざしつる萩。

向レ京路上依レ興預作侍レ宴應レ詔歌一首幷短歌

蜻島。山迹國乎。天雲爾。磐船浮。等母爾倍爾。眞可伊繁貫。伊許藝都追。國看之勢志氏。安母里麻之。掃平。千代累。彌嗣繼爾。所知來流。天之日繼等。神奈我良。吾皇乃。天下。治賜者。物乃布能。八十友之雄乎。撫賜。等登能倍賜。食國之。四方之人乎母。安天左波受。愍賜者。從古昔。無利之瑞。多婢末禰久。申多麻比奴。手拱而。事無御代等。天地。日月等登閇仁。萬世爾。記續牟曾。八隅知之。吾大皇。秋花。之我色色爾。見賜。明米多麻比。酒見附。榮流今日之。安夜爾貴左。

秋津洲、大和の國を、天雲に、磐船浮べ、艫に舳に、眞櫂しじ貫き、い漕ぎつゝ、

しなざかる—枕詞
立別れまく—立別れんことの

事跡—(一)「しわざ」と訓みて事跡の意、君が政務の事跡を京に歸りて奏上せんの意(二)「ことど」と訓みて離別の辭をいふ、其他說あり、尚可レ勘

於介内藏伊美吉繩麻呂館ニ餞レ之于レ時大伴宿禰家持作歌一首

之奈謝可流。越爾五箇年。住住而。立別麻久。惜初夜可毛。

しなざかる、越に五歳、住み〳〵て、立別れまく、惜しき宵かも。

五日平旦上道仍國司次官已下諸僚皆共視送於時射水郡大領安努君廣島門前之林中預設ニ餞饌之宴ニ于レ時大帳使大伴宿禰家持和ル内藏伊美吉繩麻呂捧レ盞之歌ニ一首

玉桙之。道爾出立。往吾者。公之事跡乎。負而之將去。

玉桙の、道に出で立ち、行く我は、君がことどを、負ひてし行かむ。

正税帳使掾久米朝臣廣繩事畢退任テ適遇ニ於越前國掾大伴宿禰池主之館ニ仍共飲樂也于時久米朝臣廣繩矚ニ芽子花ニ作歌一首

君之家爾。殖有芽子之。始花乎。折而插頭奈。客別度知。

君が家に、植ゑたる萩の、初花を、折りてかざさな。旅別るどち。

心引き―同じ心の人なる故に心の引かさるゝ由也

石勢野―越中國
秋萩凌ぎ―秋萩を押分けて

天雲の、退遊の極み、我が思へる、君に別れむ、日近くなりぬ。

右件歌者。傳誦之人越中大目高安倉人種麻呂是也。但年月次者隨二聞之時一載二於此一焉。

以二七月十七日一遷二任少納言一仍作二悲レ別之歌一贈二貽朝集使掾久米朝臣廣繩之館一二首

既滿二六載之期一。忽値二遷替之運一。於是別レ舊之悽。心中鬱結。拭レ渧之袖。何以能旱。因作二悲歌二首一。式遺二莫忘之志一。其詞曰。

荒玉乃。年緒長久。相見氏之。彼心引。將忘也毛。

新玉の、年の緒長く、相見てし、其の心引き、忘らえめやも。

伊波世野爾。秋芽子之努藝。馬並。始鷹獵太爾。不爲哉將別。

石勢野に、秋萩凌ぎ、馬並めて、初鳥狩だに、せずや別れむ。

右八月四日贈レ之。

便附二大帳使一取二八月五日一應レ入二京師一因レ此以二四日一設二國厨之饌一ヲ

空見つ—枕詞
青丹吉—枕詞
押照る—枕詞
日の入る國—支那を指す
懸けまくの—口に懸けて祈り申さん事の
本の國邊に—一訓「もとのみかどに」
邊波莫越—「越」は「起」の誤にて「へなみなたちそ」か

崎々。許藝波底牟。泊々爾。荒風。浪爾安波世受。平久。率而可敝里麻世。毛等能國家爾。

空見つ、大和の國、青丹吉、奈良の都ゆ、押照る、難波に下り、住吉の、三津に船乘り、直渡り、日の入る國に、遣はさる、我が背の君を、懸けまくの、忌々し畏き、住吉の、我が大御神、船の舳に、領き座し、船艫に、御立たし座して、指寄らむ、磯の崎々、漕ぎはてむ、泊々に、荒き風、浪に遇せず、平けく、率て歸りませ。本の國邊に。

反歌一首

奧浪。邊波莫越。君之船。許藝可敝里來而。津爾泊麻泥。

沖つ浪、邊浪な越しそ。君が船、漕ぎ歸り來て、津にはつるまで。

阿倍朝臣老人遣レ唐時奉レ母悲レ別歌一首

天雲能。曾伎敝能伎波美。吾念有。伎美爾將別。日近成奴。

天雲乃。去還奈牟。毛能由惠爾。念曾吾爲流。別悲美。
天雲の、往き返りなむ、ものゆゑに、思ひぞ我がする、別れ悲しみ。

民部少輔多治眞人土作歌一首

住吉爾。伊都久祝之。神言等。行得毛來等毛。舶波早家無。
住吉に、齋く祝が、神言と、行くとも來とも、船は早けむ。

大使藤原朝臣淸河歌一首

荒玉之。年緒長。吾念有。兒等爾可戀。月近附奴。
新玉の、年の緒長く、我が思へる、兒らに戀ふべき、月近づきぬ。

天平五年贈₂入唐使₁歌一首幷短歌　作主未ㇾ詳

虛見都。山跡乃國。靑丹與之。平城京師由。忍照。難波爾久太里。住吉乃。三津爾船能利。直渡。日入國爾。所遣。和我勢能君乎。懸麻久乃。由由志恐伎。墨吉乃。吾大御神。舶乃倍爾。宇之波伎座。船騰毛爾。御立座而。佐之與良牟。礒乃

ものゆゑに—物なるを

神言と—神言は祝詞、「と」は、共に、又は、の如く、又は、に因りて

兒らに戀ふべき—妹に別れて出發すべき時の近づきたれば斯くよめり

梅花柳絮三月初咲耳。

詠ニ霍公鳥一歌一首

二上之。峰於乃繁爾。許毛爾之波。霍公鳥待騰。未來奈賀受。

二上の、尾の上のしゞに、こもにしは、郭公待てど、未だ來鳴かず。

右四月十六日大伴宿禰家持作之。

春日祭ニ神之日藤原太后御作歌一首卽賜ニ入唐大使藤原朝臣清河一（参議従四位下遣唐使）

大舶爾。眞梶繁貫。此吾子乎。韓國邊遣。伊波敝神多智。

大船に、眞楫しゞ貫き、此の我子を、唐國へ遣る。齋へ神たち。

大使藤原朝臣清河歌一首

春日野爾。伊都久三諸乃。梅花。榮而在待。還來麻泥。

春日野に、齋く御室の、梅の花、榮えて在り待て。還り來るまで。

大納言藤原家餞ニ之入唐使等一宴日歌一首　卽主人卿作之

許毛爾之波—(一)「爾」は「里」の誤にて「こもりしは」か、さらば籠りしかばの意か(二)「毛」の下に「里」を脱し「波」は衍文にて「こもりにし」か

しゞに—繁き間に

此吾子乎—「乎」一本「等」

御室—神を祭りたるところ

天地の、神は無かれや、うるはしき、我が妻離る。光神、鳴るはた少女、手携ひ、共に在らむと、思ひしに、心違ひぬ。言はむ術、せむ術知らに、木綿襷、肩に取り掛け、倭文幣を、手に取り持ちて、なさけそと、我は禱れど、まきて寢し、妹が袂は、雲に棚引く。

反歌一首

寤爾等。念氐之可毛。夢耳爾。手本巻寢等。見者須便奈之。

現にと、思ひてしかも、夢のみに、袂まきぬと、見るは術無し。

右二首。傳誦遊行女婦蒲生是也。

二月三日會二集于守館一宴作歌一首

君之往。若久爾有婆。梅柳。誰與共可。吾縵可牟。

君が行き、若し久ならば、梅柳、誰と共にか、我が鬘かむ。

右判官久米朝臣廣繩以二正税帳一應レ入二京師一。仍守大伴宿禰家持作二此歌一也。但越中風土

無かれや—無きか

光神—枕詞

鳴るはた少女—機は音するものなれば斯くつゞく、されば妻の名を機娘(ハタチトメ)といひしにや、又は本文「鳴波多」は少女の序か、さらば「なりはたをとめ」と訓むべし

妹が袂は云々—火葬の煙をいふ

鬘かむ—鬘にして遊び樂まん

いまさめやも―歸りまさんや

積めこそ―積めばこそ

ほろに―はら〳〵と
蹈みあたし―蹈み散らし
今日に云々―命婦大御前にてかしこまりうけたまはる事有りてよめるなるべし

打羽振り、鷄は鳴くとも、斯くばかり、降り敷く雪に、君いまさめやも。

守大伴宿禰家持和へ歌一首

鳴鷄者。彌及鳴杼。落雪之。千重爾千積許曾。吾等立可氏禰。

鳴く鷄は、いやしき鳴けど、降る雪の、千重に積めこそ、我立ちがてね。

太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉二天皇一歌一首

天雲乎。富呂爾布美安多之。鳴神毛。今日爾益而。可之古家米也母。

天雲を、ほろに蹈みあたし、鳴神も、今日に増りて、畏けめやも。

右一首。傳誦掾久米朝臣廣繩也。

悲二傷死妻一歌一首并短歌　作主未レ詳

天地之。神者無可禮也。愛。吾妻離流。光神。鳴波多𡢳嬬。携手。共將有等。念之爾。情違奴。將言爲便。將作爲便不知爾。木綿手次。肩爾取掛。倭文幣乎。手爾取持而。勿離等。和禮波雖禱。卷而寢之。妹之手本者。雲爾多奈妣久。

腰になづみて―腰までうまる程惱み煩ひて

しるしもあるか―驗もある哉

雪島―池の中島に雪の積れるをいふか、右の歌と同じ時の作

咲かぬか―咲きてあれかし

落雪乎。腰爾奈都美氐。參來之。印毛有香。年之初爾。

降る雪を、腰になづみて、參り來し、しるしもあるか、年の初に。

右一首。三日會ニ集介内藏忌寸繩麻呂舘ニ宴樂時。大伴宿禰家持作之。

于レ時積雪彫ニ成重巖之起ニ奇巧綵ニ發草樹之花ニ屬レ此掾久米朝臣廣繩

作歌一首

奈泥之故波。秋咲物乎。君宅之。雪巖爾。左家理家流可母。

撫子は、秋咲くものを、君が家の、雪の巖に、咲けりけるかも。

遊行女婦蒲生娘子歌一首

雪島。巖爾殖有。奈泥之故波。千世爾開奴可。君之挿頭爾。

雪島の、巖に立てる、撫子は、千代に咲かぬか。君がかざしに。

于是諸人酒酣更深鷄鳴因レ此主人内藏伊美吉繩麻呂作歌一首

打羽振。鷄者鳴等母。如此許。零敷雪爾。君伊麻左米也母。

もとほり—大殿のめぐりをいふ

常斯くにもが—斯くの如く年毎に集宴せまほしの意

大殿の、此のもとほりの、雪な踏みそね。屢も、降らざる雪ぞ。山のみに、降りし雪ぞ。ゆめ寄るな、人や。な踏みそね雪は。

反歌一首

有都都毛。御見多麻波牟曾。大殿乃。此母等保里能。雪奈布美曾禰。

在りつゝも、見し給はむぞ。大殿の、此のもとほりの、雪な踏みそね。

右二首歌者。三形沙彌承二贈左大臣藤原北卿之語一作誦之也。聞レ之傳者笠朝臣子君。復後傳讀者越中國掾久米朝臣廣繩是也。

天平勝寶三年

新。年之初者。彌年爾。雪踏平之。常如此爾毛我。

新しき、年の初は、いや年に、雪踏み平し、常斯くにもが。

右一首歌者。正月二日守舘集宴。於レ時零雪殊多。積有四尺焉。即主人大伴宿禰家持作二此歌一也。

止め得むかも—とゞめ得む、一說「止め得めやも」と訓む、希求の意とす

雫合ひて—雫の落ち合ひて

君が越えまく—君が一人寂しく越えんことのいとほしく思ひやらるゝよと也

朝霧の、棚引く田井に、鳴く雁を、止め得むかも。我が宿の萩。

右一首歌者。幸二於吉野宮一之時。藤原皇后御作。但年月未二審詳一。十月五日河邊朝臣東人傳誦云爾。

足日木之。山黃葉爾。四頭久相而。將落山道乎。公之越麻久。

足引の、山の黃葉に、雫合ひて、散らむ山路を、君が越えまく。

右一首。同月十六日餞二之朝集使少目秦伊美吉石竹一時守大伴宿禰家持作之。

雪日作歌一首

此雪之。消遺時爾。去來歸奈。山橘之。實光毛將見。

此の雪の、消残る時に、いざ行かな。山橘の、實の照るも見む。

右一首。十二月大伴宿禰家持作之。

大殿之。此廻之。雪莫踏爾。數毛。不零雪曾。山耳爾。零之雪曾。由米緣勿。人哉。莫履禰雪者。

古非之久志—「志」一本無し

あらましものを—あるべかりしものを

取りてむ—折り取らん

奈良人—略解には、家持卿自らをいふといひ、古義には、廣繩の妻の京にあるをいふなるべしといへり

反歌一首

可久婆可里。古非之久志安良婆。末蘇可我彌。美奴比等吉奈久。安良麻之母能乎。

斯くばかり、戀しくあらば、眞十鏡、見ぬ日時無く、あらましものを。

右二首。大伴氏坂上郎女賜二女子大孃一也。

九月三日宴歌二首

許能之具禮。伊多久奈布里曾。和藝毛故爾。美勢牟我多米爾。母美知等里氏牟。

此の時雨、甚くな降りそ。我妹子に、見せむが爲に、黄葉取りてむ。

右一首。掾久米朝臣廣繩作レ之。

安乎爾與之。奈良比等美牟登。和我世故我。之米家牟毛美知。都知爾於知米也母。

青丹よし、奈良人見むと、我が背子が、占めけむ黄葉、地に落ちめやも。

右一首。守大伴宿禰家持作之。

朝霧之。多奈引田爲爾。鳴鴈乎。留得哉。吾屋戸能波義。

我が宿の、萩咲きにけり。秋風の、吹かむを待たば、いと遠みかも。

右一首。六月十五日見二芽子早花一作レ之。

從二京師一來贈歌一首并短歌

和多都民能。可味能美許等乃。美久之宜爾。多久波比於伎氐。伊都久等布。多麻爾末佐里氐。於毛敝里之。安我故爾波安禮騰。宇都世美乃。與能許等和利等。麻須良乎能。比伎能麻爾麻爾。之奈謝可流。古之地乎左之氐。波布都多能。和我禮爾之欲理。於吉都奈美。等乎牟麻欲比伎。於保夫爾能。由久良由久良耳。於毛可宜爾。毛得奈民延都都。可久古非婆。意伊豆久安我米。氣太志安倍牟可母。

海の、神の命の、御櫛笥に、貯ひ置きて、齋くとふ、珠に勝りて、思へりし、我が子にはあれど、現身の、世の理と、丈夫の、引きのまに〳〵、しなざかる、越路を指して、這ふ蔦の、別れにしより、沖つ浪、撓む眉引、大船の、ゆくら〳〵に、面影に、もとな見えつゝ、斯く戀ひば、老づく我が身、蓋しあへむかも。

和我禮爾之―「我」は「柯」などの誤か

這ふ蔦の―枕詞
沖つ浪―「撓む」の枕詞
撓む眉引―下の「面影に」云々につゞく
老づく―年とりたる
あへむかも―逢ふまでの命は得堪へむの意

水はなに―水の出ではなに、本文「逝」一説「邇」の誤か

木積なす―木屑の寄り積るごとく、以上凡て序

寄らむ兒もがも―我に歸來せん女もがなあれかし

鮪…火の―「穂に」といはん序

遠音にも、君が歎くと、聞きつれば、音のみし泣かゆ。相思ふ我は。

世間之。無常事者。知良牟乎。情盡莫。丈夫爾之氏。

世の中の、常無き事は、知るらむを、心盡すな、丈夫にして。

右大伴宿禰家持弔下聟南右大臣家藤原二郎之喪二慈母一患上也。五月二十七日

霖雨晴日作歌一首

宇能花乎。令腐霖雨之。始水逝。緣木積成。將因兒毛我母。

卯の花を、腐す長雨の、水はなに、寄る木積なす、寄らむ兒もがも。

見二漁夫火光一歌一首

鮪衝等。海人之燭有。伊射里火之。保爾可將出。吾之下念乎。

鮪突くと、海人の燈せる、漁火の、穂にか出でなむ。我が下思を。

右二首。五月。

吾屋戸之。芽子開爾家理。秋風之。將吹乎待者。伊等遠彌可母。

鄙ざかる云々—家持自ら任國にあるをいふ

風雲に云々—使のこと

はしきよし君—藤原二郎をさす

うらさびて云々—母の喪を愁ひ歎き居るをいふ

玉の緒—命

天地の、初の時ゆ、現身の、八十伴の緒は、大君に、まつろふものと、定めたる、官にしあれば、大君の、命畏み、鄙ざかる、國を治むと、足引の、山河隔り、風雲に、言は通へど、直に逢はず、日の重れば、思ひ戀ひ、息衝き居るに、玉桙の、道來る人の、傳言に、我に語らく、はしきよし、君は此の頃、うらさびて、歎かひ坐す、世の中の、憂けく辛けく、咲く花も、時に移ろふ、現身も、常なくありけり、垂乳根の、御母の命、何しかも、時しはあらむを、眞十鏡、見れども飽かず、玉の緒の、惜しき盛りに、立つ霧の、失せぬる如く、置く露の、消ぬるが如く、玉藻なす、靡きこい伏し、逝く水の、留めも得ずと、戯言や、人の言ひつる、妖言を、人の告げつる、梓弓、爪引く夜音の、遠音にも、聞けば悲しみ、にはたづみ、流るゝ涙、留め兼ねつも。

反歌二首

遠音毛。君之痛念跡。聞都禮婆。哭耳所泣。相念吾者。

萬葉集卷第十九下

挽歌一首幷短歌

天地之。初時從。宇都曾美能。八十伴男者。大王爾。麻都呂布物跡。定有。官爾之在者。天皇之。命恐。夷放。國乎治等。足日木。山河阻。風雲爾。言者雖通。正不遇。日之累者。思戀。氣衝居爾。玉桙之。道來人之。傳言爾。吾爾語良久。波之伎餘之。君者比來。宇良佐備氏。嘆息伊麻須。世間之。厭家口都良家苦。開花毛。時爾宇都呂布。宇都勢美毛。無常阿里家利。足千根之。御母之命。何如可毛。時之波將有乎。眞鏡。見禮杼母不飽。珠緒之。惜盛爾。立霧之。失去如。置露之。消去之如。玉藻成。靡許伊臥。逝水之。留不得常。扗言哉。人之云都流。逆言乎。人之告都流。梓弧。爪夜音之。遠音爾毛。聞者悲彌。庭多豆水。流涕。留可禰都母。

扗言—「扗」は「狂」の誤
逆言乎—「乎」は「可」の誤にて「およづれか」か
梓弧爪—「弧」或は「弓」の誤か、下に「引」を脱せしか

右五月六日依ㇾ興大伴宿禰家持作之。

安由乎疾美。奈呉能浦廻爾。與須流浪。伊夜千重之伎爾。戀渡可母。

東風をいたみ、奈呉の浦まに、寄する浪、彌千重しきに、戀ひ渡るかも。

右一首。贈㆓京丹比家㆒。

勞美。父母爾。啓別而。離家。海邊爾出立。朝暮爾。滿來潮之。八隔浪爾。靡珠藻乃。節間毛。惜命乎。露霜之。過麻之爾家禮。奥墓乎。此間定而。後代之。聞繼人毛。伊也遠爾。思努比爾勢餘等。黃楊小櫛。之賀左志家良之。生而靡有。

古に、有りけるわざの、くすはしき、事と言ひ繼ぐ、茅渟男、菟原男の、現身の、名を爭ふと、魂きはる、命も捨てて、あらそひに、妻問ひしける、少女らが、聞けば悲しさ、春花の、にほえ榮えて、秋の葉の、匂に照れる、惜身の、盛をすらに、丈夫の、言いとほしみ、父母に、申し別れて、家さかり、海邊に出で立ち、朝宵に、滿ち來る潮の、八重浪に、靡く玉藻の、節の間も、惜しき命を、露霜の、過ぎましにけれ、奥津城を、此處と定めて、後の代の、聞き繼ぐ人も、彌遠に、偲びにせよと、黃楊小櫛、汝が差しけらし、生ひて靡けり。

乎等女等之。後能表跡。黃楊小櫛。生更生而。靡家良思母。

少女らが、後のしるしと、黃楊小櫛、生ひ更り生ひて、靡きけらしも。

くすはしき—奇しき、希代なる

少女らが—「事を」と補ふか、或は「春花の」の句へつづくか

海邊に出で立ち—一訓「うみべにてたち」

節の間も—暫くの間も

過ぎましにけれ—死にましければ

黃楊小櫛云々—少女がつげの櫛を土にさしたるが生榮えしといひ傳へて、斯くよめるなるべし

生ひ更り生ひて—枯れても／＼生ひ代り／＼して

相爭爾—「爭」は「具」などの誤にて「あひともに」か
爾太要盛而—一說「爾」は「志」、「太」は「奈」の誤にて「しなえさかえて」か

太伎奈加受。奈久許惠乎。伎可麻久保理登。安志太爾波。可度爾伊氏多知。由布敝爾波。多爾乎美和多之。古布禮騰毛。比等己惠太爾母。伊麻太伎己要受。
谷近く、家は居れども、木高くて、里はあれども、郭公、未だ來鳴かず。鳴く聲を、聞かまく欲りと、朝には、門に出で立ち、夕には、谷を見渡し、戀ふれども、一聲だにも、未だ聞えず。
敷治奈美乃。志氣里波須疑奴。安志比紀乃。夜麻保登等藝須。奈騰可伎奈賀奴。
藤浪の、繁りは過ぎぬ。足引の、山郭公、などか來鳴かぬ。

右二十三日掾久米朝臣廣繩和。

追㆓和處女墓歌㆒一首幷短歌

古爾。有家流和射乃。久須婆之伎。事跡言繼。知努乎登古。宇奈比壯子乃。宇都勢美能。名乎競爭登。玉剋。壽毛須底氏。相爭爾。嬬問爲家留。嬬嬬等之。聞者悲左。春花乃。爾太要盛而。秋葉之。爾保比爾照有。惜身之。壯尙。丈夫之。語

我が背子—廣縄を指す
垣つ—垣の内にて、郭内の意なるべし
時をまたしみ—(一)此の時四月なれば橘の花の咲き散る時を待つとて鳴かぬは怨みずとの意か(二)未(マダ)しきといふと同じか
谷片附きて—谷によりての意

暮左禮婆。藤之繁美爾。遙遙爾。鳴霍公鳥。吾屋戸能。殖木橘。花爾知流。時乎麻多之美。伎奈加奈久。曾許波不怨。之可禮杼毛。谷可多頭伎氏。家居有。君之聞都都。追氣奈久毛宇之。

此處にして、そがひに見ゆる、我が背子が、垣つの谷に、明けされば、榛の小枝に、夕されば、藤の繁みに、遙々に、鳴く郭公、我が宿の、植木橘、花に散る、時を待たしみ、來鳴かなく、そこは怨みず。然れども、谷片附きて、家居れる、君が聞きつゝ、告げなくも憂し。

反歌一首

吾幾許。麻氏騰來不鳴。霍公鳥。比等里聞都追。不告君可母。

我が許多、待てど來鳴かぬ、郭公、一人聞きつゝ、告げぬ君かも。

詠二霍公鳥一歌一首并短歌

多爾知可久。伊敝波乎禮騰。許太加久氏。佐刀波安禮騰母。保登等藝須。伊麻

吾勢故我。捧而持流。保寶我之婆。安多可毛似加。青蓋。

我が背子が、捧げて持たる、厚朴、宛も似るか。青き衣笠。

講師僧惠行。

皇祖神之。遠御代三世波。射布折。酒飲等伊布曾。此保寶我之波。

皇祖神の、遠き御代々々は、いしきをり、酒飲むと言ふぞ。此の厚朴。

守大伴宿禰家持。

還時濱上仰二見月光一歌一首

之夫多爾乎。指而吾行。此濱爾。月夜安伎氏牟。馬之末時停息。

澁溪を、指して我が行く、此の濱に、月夜飽きてむ。馬暫し止め。

守大伴宿禰家持。

二十二日贈二判官久米朝臣廣繩一霍公鳥歌怨恨歌一首幷短歌

此間爾之氏。曾我比爾所見。和我勢故我。垣都能谿爾。安氣左禮婆。榛之狹枝爾。

いしきをり—(一)「い」は發語、「しきをり」は折敷きの意か(二)本文「布折」は上下に誤れるか(三)「布」は誤字か、さて二の句の末の「波」或は三句につゞくべきか

月夜飽きてむ—月を飽くまで見んの意

止め—止めよ

霍公鳥歌—「歌」衍文

次官内藏忌寸繩麻呂。

伊佐左可爾。念而來之乎。多祜乃浦爾。開流藤見而。一夜可經。

聊に、思ひて來しを、たこの浦に、咲ける藤見て、一夜經ぬべし。

判官久米朝臣廣繩。

藤奈美乎。借廬爾造。灣廻爲流。人等波不知爾。海人等可見良牟。

藤波を、假廬に造り、漁する、人とは知らに、海人とか見らむ。

久米朝臣繼麻呂。

恨霍公鳥不喧歌一首

家爾去而。奈爾乎將語。安之比奇能。山霍公鳥。一音毛奈家。

家に行きて、何を語らむ。足引の、山郭公、一聲も鳴け。

判官久米朝臣廣繩。

見攀折保寶葉歌二首

聊に―かりそめに

假廬に造り―契沖は、藤の陰にかくるゝを斯くいひなす也といへり

漁する―古義「うらみする」と訓じ、浦廻りして遊び歩く義とせり

保寶葉―厚朴、今ほゝの木といふ

贈二京人一歌」上に「從京師贈來歌」とありし返歌

しづくし水中にある物の透きて見ゆること

贈二京人一歌二首

妹爾似。草等見之欲里。吾標之。野邊之山吹。誰可手乎里之。
妹に似る、草と見しより、我が標し、野邊の山吹、誰か手折りし。

都禮毋奈久。可禮爾之毛能登。人者雖云。不相日麻禰美。念曾吾爲流。
つれも無く、離れにしものと、人は言へど、逢はぬ日まねみ、思ぞ我がする。

右爲レ贈二留レ女之女郎一所レ誂二家婦一作也。女郎者郎大伴家持之妹。

十二日遊二覽布勢水海一船泊二於多祜灣一望二見藤花一各述レ懷作歌四首

藤奈美能。影成海之。底清美。之都久石乎毛。珠等曾吾見流。
藤波の、蔭なる海の、底清み、しづく石をも、玉とぞ我が見る。

守大伴宿禰家持。

多祜乃浦能。底左倍爾保布。藤奈美乎。加射之氏將去。不見人之爲。
たこの浦の、底さへ匂ふ、藤波を、かざして行かむ。見ぬ人の爲め。

染むとも。

霍公鳥。鳴羽觸爾毛。落爾家利。盛過良志。藤奈美能花。

郭公、鳴く羽振にも、散りにけり。盛り過ぐらし、藤浪の花。

一云。落奴倍美。袖爾古伎禮都。藤浪乃花也。

同九日作レ之。

更怨二霍公鳥哢晩一歌三首

霍公鳥。喧渡奴等。告禮騰毛。吾聞都我受。花波須疑都追。

郭公、鳴き渡りぬと、告ぐれども、我聞き繼がず。花は過ぎつゝ。

吾幾許。斯奴波久不知爾。霍公鳥。伊頭敝能山乎。鳴可將超。

我が幾許、偲ばく知らに、郭公、何べの山を、鳴きか越ゆらむ。

月立之。日欲里乎伎都追。敲自奴比。麻低騰伎奈可奴。霍公鳥可母。

月立ちし、日より招きつゝ、打忍び、待てど來鳴かぬ、郭公かも。

花―藤の花

何べ―いづれ

敲自奴比―「自」或は「四」の誤か

月立ちし―契沖說、立夏にて四月の節なり、四月朔日にあらず

しが―それが
搔向け―「搔」は接頭語惠み給へ

呼等米尒―一說「米尒」は「余米」の誤

笑み曲り―眉の撓めるかたちをいふか

立ちくゝと―立ちくゞるとて

扱きれつ―扱き入れつ

鸕河立。取左牟安由能。之我波多婆。吾等爾可伎無氣。念之念婆。
鵜河立ち、取らさむ鮎の、しが鰭は、我に搔向け。思ひし思はゞ。

右九日。附レ使贈レ之。

詠二霍公鳥井藤花一一首并短歌

桃花。紅色爾。爾保比多流。面輪能宇知爾。青柳乃。細眉根乎。咲麻我理。朝影見都追。嬿嬬良我。手爾取持有。眞鏡。蓋上山爾。許能久禮乃。繁溪邊乎。呼等米尒。旦飛渡。暮月夜。可蘇氣伎野邊。遙遙爾。喧霍公鳥。立久久等。羽觸爾知良須。藤浪乃。花奈都可之美。引攀而。袖爾古伎禮都。染婆染等母。

桃の花、紅色に、匂ひたる、面わの内に、青柳の、細き眉根を、笑み曲り、朝影見つゝ、少女らが、手に取り持たる、眞十鏡、二上山に、木の暗の、繁き谷邊を、呼びとよめ、朝飛び渡り、夕月夜、幽けき野邊に、遙々に、鳴く郭公、立ちくゝと、羽振に散らす、藤浪の、花懷かしみ、引攀ぢて、袖に扱きれつ。染まば

遊波之母―一說「波」の下「久與」を脱せしにて「あそばくよしも」か

しくら川―(一)本文「叔」は「新」の誤にて「しらき川」か、越前國(二)越前國大野郡に篠座(シヌクラ)神社あり、そこの川か

江家―宣長說に、「江家の人の此歌の訓を附けたるを記せるなり」

天離。夷等之在者。彼所此間毛。同許己呂曾。離家。等之乃經去者。宇都勢美波。物念之氣思。曾許由惠爾。情奈具左爾。霍公鳥。喧始音乎。橘。珠爾安倍貫。可頭良伎氏。遊波之母。麻須良乎乎。等毛奈倍立而。叔羅河。奈頭左比泝。平瀬爾波。左泥刺渡。早湍爾波。水烏乎潜都追。月爾日爾。之可志安蘇婆祢。波之伎和我勢故。

天離る、鄙としあれば、そこ此所も、同じ心ぞ。家離り、年の經ぬれば、現身は、物思繁し。そこ故に、心慰に、郭公、鳴く初聲を、橘の、玉に交貫き、鬘きて、遊ばはしも。丈夫を、伴へ立てて、しくら川、なづさひ上り、平瀬には、叉手差し渡し、早瀬には、鵜を潜けつゝ、月に日に、然し遊ばね。はしき我が背子。

江家。

叔羅河。湍乎尋都追。和我勢故波。宇河波多多佐爾。情奈具左爾。

しくら川、瀬を尋ねつゝ、我が背子は、鵜川立たさね。心慰に。

浪咲而。濱淨久。白浪左和伎。及及爾。戀波末佐禮杼。今日耳。飽足米夜母。如是己曾。彌年能波爾。春花之。繁盛爾。秋葉能。黄色時爾。安里我欲比。見都追思努波米。此布勢能海乎。

思ふどち、丈夫の、木の暗の、繁き思を、見明らめ、心遣らむと、布勢の海に、小船連並め、眞櫂懸け、い漕ぎ廻れば、をふの浦に、霞棚引き、垂姫に、藤波咲きて、濱淸く、白波騷ぎ、しく〱に、戀は增されど、今日のみに、飽足らめやも。斯くしこそ、彌年のはに、春花の、繁き盛りに、秋の葉の、黄葉の時に、在り通ひ、見つゝ偲ばめ。此の布勢の海を。

反歌

藤奈美能。花盛爾。如此許曾。浦己藝廻都追。年爾之努波米。

藤波の、花の盛りに、斯くしこそ、浦漕ぎたみつゝ、年に偲ばめ。

贈ニ水烏越前判官大伴宿禰池主ニ歌一首并短歌

木の暗の—「繁き」の序、本文、下に「乃」或は「能」を脱せしか

をふの浦—越中國

垂姫—越中國

しく〱に云々—此のところを頻りに見たき思は增れどの意

黄葉の時に—一訓「にほへる時に」

繁けば—一訓「繁くば」
折りも折らずも—折りも
めで折らずしても見ての

江家—略解に「此二字元
暦本になし、尤削るべし」

疑牟等。繁山之。谿敝爾生流。山振乎。屋戸爾引植而。朝露爾。仁保敝流花乎。毎見。念者不止。戀志繁母。

現身は、戀を繁みと、春まけて、思繁けば、引攀ぢて、折りも折らずも、見る毎に、心なぎむと、繁山の、谷邊に生ふる、山吹を、宿に引植ゑて、朝露に、匂へる花を、見る毎に、思は止まず、戀し繁しも。

江家。

反　謌

山吹乎。屋戸爾植氐波。見其等爾。念者不止。戀己曾益禮。

山吹を、宿に植ゑては、見る毎に、思は止まず、戀こそ増され。

六日遊二覽布勢水海一作歌一首并短歌

念度知。丈夫能。許能久禮。繁思乎。見明良米。情也良牟等。布勢乃海爾。小船都良奈米。眞可伊可氣。伊許藝米具禮婆。乎布能浦爾。霞多奈比伎。垂姫爾。藤

離れず鳴くがね—絶えず鳴かんが爲めに

來向ふ夏—來年の夏

妹—家持の妻を指す、女同志にても妹といふことなは男同志にて我が背子（セコ）といふが如し

留女—「女」は「郷」又は「京」の誤なるべし

左夜深而。曉月爾。影所見而。喧霍公鳥。聞者夏借。
小夜更けて、曉月に、影見えて、鳴く郭公聞けば懷し。

霍公鳥。雖聞不足。網取爾。獲而奈都氣奈。可禮受鳴金。
郭公、聞けども、飽かず、網取りに、獲りて懷けな。離れず鳴くがね。

霍公鳥。飼通良婆。今年經而。來向夏波。麻豆將喧乎。
郭公、飼ひ通せらば、今年經て、來向ふ夏は、先づ鳴きなむを。

從㆓京師㆒贈來歌一首

山吹乃。花執持而。都禮毛奈久。可禮爾之妹乎。之努比都流可毛。
山吹の、花取り持ちて、つれも無く、離れにし妹を、偲びつるかも。

右四月五日從㆓留女之女郎㆒所送也。

詠㆓山振花㆒歌一首并短歌

宇都世美波。戀乎繁美登。春麻氣氏。念繁波、引攀而。折毛不折毛。毎見。情奈

鳴爾毛―「爾」は「南」の誤にて「なかなも」か、又「爾」は「祝」の誤にて「なけやも」か
丹生―越前國丹生郡
ゆめ心あれ―つとめて心ありて鳴けかしの意
昌蒲―和名抄其他に「昌」字を用ひたる例見ゆ
可頭良沼久麻而爾―「沼」は衍文か、「而」一本「泥」に作る方宜し

吾耳。聞婆不怜毛。霍公鳥。丹生之山邊爾。伊去鳴爾毛。
我のみ、聞けばさぶしも。郭公、丹生の山邊に、い行き鳴くにも。
霍公鳥。夜喧乎爲管。我世兒乎。安宿勿令寢。由米情在。
郭公、夜鳴をしつゝ、我が背子を、安寢しなすな。ゆめ心あれ。

不レ飽下感二霍公鳥一之情上述レ懷作歌一首并短歌

春過而。夏來向者。足檜木乃。山呼等余米。左夜中爾。鳴霍公鳥。始音乎。聞婆奈都可之。昌蒲。花橘乎。貫交。可頭良沼久麻而爾。里響。喧渡禮騰母。尚之努波由。
春過ぎて、夏來向へば、足引の、山呼びとよめ、小夜中に、鳴く郭公、初聲を、聞けば懷かし。菖蒲草、花橘を、貫き交へ、蘰くまでに、里とよめ、鳴き渡れども、尙し偲ばゆ。

反歌三首

四月三日贈二越前判官大伴宿禰池主一霍公鳥歌不レ勝二感レ舊之意一述レ

懐一首并短歌

和我勢故等。手携而。曉來者。出立向。暮去者。振放見都追。念暢。見奈疑之山爾。八峰爾波。霞多奈婢伎。谿敝爾波。海石榴花咲。宇良悲。春之過者。霍公鳥伊也之伎喧奴。獨耳。聞婆不怜毛。君與吾。隔而戀流。利波山。飛超去而。明立者。松之佐枝爾。暮去者。向月而。菖蒲。玉貫麻泥爾。鳴等余米。安寢不令宿。君乎奈夜麻勢。

我が背子と、手携はりて、曉來れば、出で立ち向ひ、夕されば、振りさけ見つゝ、思のべ、見なぎし山に、八尾には、霞棚引き、谷邊には、椿花咲き、うらがなし、春し過ぐれば、郭公、彌しき鳴きぬ。獨のみ、聞けばさぶしも。君と我、隔てて戀ふる、礪波山、飛び越え行きて、明け立たば、松の小枝に、夕さらば、月に向ひて、菖蒲草、玉貫くまでに、鳴きとよめ、安寢しなさず、君を惱ませ。

反歌

我が背子―池主を指す

見なぎし―見て心を慰めし、家持池主共にもと越中國にありしに今池主は越前國にあれば斯くいへり

さぶしも―心樂まず

菖蒲草云々―五日まで鳴けといふ意

安寢云々―安らかに眠らしめずして池主の君を惱ませよ

妹乎不見。越國敝爾。經年婆。吾情度乃。奈具流日毛無。

妹を見ず、越の國邊に、年經れば、我が心利の、なぐる日も無し。

追二和筑紫太宰之時春苑梅謌一一首

春裏之。樂終者。梅花。手折乎伎都追。遊爾可有。

春の内の、樂しき終へば、梅の花、手折りをきつゝ、遊ぶにあるべし。

右一首。二十七日依レ興作レ之。

詠二霍公鳥一歌二首

霍公鳥。今來喧曾無。菖蒲。可都良久麻泥爾。加流流日安良米也。

郭公、今來鳴き初む。菖蒲草、蘰くまでに、離るゝ日あらめや。

毛能波三箇辭闕レ之。

我門從。喧過度。霍公鳥。伊夜奈都可之久。雖聞飽不足。

我門ゆ、鳴き過ぎ渡る、郭公、いや懐しく、聞けど飽足らず。

毛能波氏爾乎六箇辭闕レ之。

なぐる—慰まる

乎伎都追—一說「乎伎」は「毛致」の誤にて「たをりもちつゝ」か

樂しき終へば—樂しきことを極め盡さんとならば

毛能波云々—此三の言を除きてよめる也

蘰く—蘰にする

離るゝ日—鳴かざる日

語「歲寒然後知ニ松柏之後ー凋」

君ー親をさす
生けるとも無しー「と」は利心(トゴコロ)などいふ利

常人もー世の人も

草取らむー鳥の木の枝にとまるをいふ
宿には植ゑずてー今更悔ゆる意也

尊き我が君。

御面謂ニ之美於毛和ー。

反歌一首

白玉之。見我保之君乎。不見久爾。夷爾之乎禮婆。伊家流等毛奈之。
白玉の、見が欲し君を、見ず久に、鄙にし居れば、生けるとも無し。

二十四日應ニ立夏四月節ー也因レ此二十三日之暮忽思ニ霍公鳥曉喧聲ー

作歌二首

常人毛、起都追聞曾。霍公鳥。此曉爾。來喧始音。
常人も、起きつゝ聞くぞ、郭公、此の曉に、來鳴く初聲。

霍公鳥。來鳴響者。草等良牟。花橘乎。屋戸爾波不殖而。
郭公、來鳴きとよまば、草取らむ、花橘を、宿には植ゑずて。

贈ニ京丹比家ー歌一首

家婦―坂上大娘
尊母―大伴坂上郎女

天離る―枕詞

奈呉の…白珠の―「見が欲しし」の序

松柏の―常葉なるより「榮え」の序とせる也、論

每年謂二之等之乃波一。

右二十日。雖レ未レ及レ時依レ興豫作也。

爲三家婦贈二在レ京尊母一所レ誂作歌一首并短歌

霍公鳥。來喧五月爾。笑爾保布。花橘乃。香吉。於夜能御言。朝暮爾。不聞日麻禰久。安麻射可流。夷爾之居者。安之比奇乃。山乃多乎里爾。立雲乎。余曾能未見都追。歎蘇良。家須家久奈久爾。念蘇良。苦伎毛能乎。奈呉乃海部之。潛取云。眞珠乃。見我保之御面。多太向。將見時麻泥波。松柏乃。佐賀延伊麻佐禰。尊安我吉美。

郭公、來鳴く五月に、咲き匂ふ、花橘の、香しき、親の御言、朝宵に、聞かぬ日まねく、天離る、鄙にし居れば、足引の、山のたをりに、立つ雲を、外のみ見つゝ、歎く空、安けくなくに、思ふ空、苦しきものを、奈呉の海人の、潛き取るとふ、白珠の、見が欲し御面わ、直向ひ、見む時までは、松柏の、榮え居まさね。

爭ふはしに―「はし」は間、花鳥を愛で爭ふうちに、（一）本文「有」は「相」の誤か（二）「爭」は「來」の誤にて「ありくる」か
鶯のうつし眞子かも―郭公は鶯の巣のうちに卵を生みてこれに孵化せしむれば斯くいふ「うつし」は「うつくし」の略か、或は現しか
しめらに―「しみらに」に同じ、終日

ものゆゑ―ものなるを
逢はぬ日―聞かぬ日

何如將飽足。

時毎に、彌珍しく、八千種に、草木花咲き、鳴く鳥の、聲も變らふ、耳に聞き、目に見る毎に、打歎き、萎えうらぶれ、偲びつゝ、爭ふはしに、木の暗闇、四月し立てば、夜籠に、鳴く郭公、古ゆ、語り繼ぎつる、鶯の、うつし眞子かも、菖蒲草、花橘を、少女らが、玉貫くまでに、茜さす、晝はしめらに、足引の、八尾飛び越え、ぬば玉の、夜はすがらに、曉の、月に向ひて、往き還り、鳴きとよむれど、如何飽き足らむ。

反歌二首

毎時。彌米頭良之久。咲花乎。折毛不折毛。見良久之余志母。

時毎に、彌珍しく、咲く花を、折りも折らずも、見らくしよしも。

毎年爾。來喧毛能由惠。霍公鳥。聞婆之努波久。不相日乎於保美。

年のはに、來鳴くものゆゑ、郭公、聞けば偲ばく。逢はぬ日を多み。

千尋—遥に遠く
差任くる云々—二句穩かならず、脫句あるか、或は官より差し任ずる其精神に障らずよく忠節を盡す意か
後の代の—後の代の人のといふ意
語り繼ぐがね—語り繼がん爲に
許能久禮罷—一說「罷」は「能」の誤にて「このくれのしか

劒太刀、腰に取佩き、足引の、八尾踏み越え、差任くる、心障らず、後の代の、語り繼ぐべく、名を立つべしも。

反歌

丈夫者。名乎之立倍之。後代爾。聞繼人毛。可多里都具我禰。
丈夫は、名をし立つべし。後の代に、聞繼ぐ人も、語り繼ぐがね。

右二首。追二和山上憶良臣一作歌。

詠二霍公鳥幷時花一謌一首幷短歌

毎時爾。伊夜目都良之久。八千種爾。草木花左伎。喧鳥乃。音毛更布。耳爾聞。眼爾視其等爾。宇知歎。之奈要宇良夫禮。之努比都追。有爭波之爾。許能久禮罷。四月之立者。欲其母理爾。鳴霍公鳥。從古昔。可多理都藝都流。鶯之。宇都之眞子可母。菖蒲。花橘乎。娘嬬良我。珠貫麻泥爾。赤根刺。晝波之賣良爾。安之比奇乃。八丘飛超。夜干玉之。夜者須我良爾。曉。月爾向而。往還。喧等余牟禮杼。

心附けずて云々—略解に執着せずして世間の有様を觀察するをいふとせるは如何、契沖が、心つけて思けぬ日ぞ多きといふ意なりといへる如く、今泣深く心の及ばざりしを驚くなるべし

枕かむ—枕とせん
さ夜更けぬとに—夜の更けぬ内に

ちゝの實の—枕詞
柞葉の—枕詞
おほろかに—疎かに
其の子なれやも—其子ならんや

現身の、常無き見れば、世の中に、心附けずて、思ふ日ぞ多き。

一云。嘆日曾於保吉。

豫作七夕歌一首

妹之袖。和禮枕可牟。河湍爾。霧多知和多禮。左欲布氣奴刀爾。

妹が袖、我枕かむ。川の瀬に、霧立渡れ、さ夜更けぬとに。

慕レ振二勇士之名一歌一首并短歌

知智乃實乃。父能美許等。波播蘇葉乃。母能美己等。於保呂可爾。情盡而。念良牟。其子奈禮夜母。丈夫夜。無奈之久可在。梓弓。須惠布理於許之。投矢毛知。千尋射和多之。劒刀。許思爾等理波伎。安之比奇能。八峰布美越。左之麻久流。情不障。後代乃。可多利都具倍久。名乎多都倍志母。

ちゝの實の、父の命、柞葉の、母の命、おほろかに、心盡して、思ふらむ、其の子なれやも。丈夫や、空しくあるべき。梓弓、末振起し、投箭持ち、千尋射渡し、

始よ—始より
ながらへ來れ—言ひ傳はり來れば
にはたづみ—行潦也、「流る」の枕詞
常を無みこそ—無常の理を遁れぬ故にこそ

等騰米可爾都母。
天地の、遠き始よ、世の中は、常無きものと、語り繼ぎ、ながらへ來れ、天の原、振りさけ見れば、照る月も、滿虧しけり、足引の、山の木ぬれも、春されば、花咲き匂ひ、秋づけば、露霜負ひて、風交り、黄葉散りけり。現身も、斯くのみならし。紅の、色も移ろひ、ぬば玉の、黑髮變り、朝の笑、夕變らひ、吹く風の、見えぬが如く、逝く水の、止らぬ如く、常もなく、移ろふ見れば、にはたづみ、流るゝ涙、止め兼ねつも。

反歌

言等波奴。木尙春開。秋都氣波。毛美知遲良久波。常乎奈美許曾。
言問はぬ、木すら春咲き、秋づけば、黄葉散らくは、常を無みこそ。
一云。常無牟等曾。
宇都世美能。常無見者。世間爾。情都氣受氏。念日曾於保伎。

潜けて―潜がせて

つまゝ―樹の名、詳かならず

年のはに、鮎し走らば、さき田川、鵜八つ潜けて、川瀬尋ねむ。

季春三月九日擬﹅出﹅擧之政﹅行﹅於舊江村﹅道上屬﹅目物花﹅之詠并興中所﹅作之歌

過﹅澁溪埼﹅見﹅巖上樹﹅歌一首　樹名都萬麻

礒上之。都萬麻乎見者。根乎延而。年深有之。神佐備爾家里。

礒の上の、つまゝを見れば、根を延へて、年深からし。神さびにけり。

悲﹅世間無﹅常歌一首并短歌

天地之。遠始欲。俗中波。常無毛能等。語續。奈我良倍伎多禮。天原。振左氣見婆。照月毛。盈昃之家里。安之比奇能。山之木末毛。春去婆。花開爾保比。秋都氣婆。露霜負而。風交。毛美知落家利。宇都勢美母。如是能未奈良之。紅能。伊呂母宇都呂比。奴婆多麻能。黑髮變。朝之咲。暮加波良比。吹風能。見要奴我其登久。逝水能。登麻良奴其等久。常毛奈久。宇都呂布見者。爾波多豆美。流涕。

花耳—「耳」は「開」の誤か

島つ鳥—枕詞
なづさひ行けば—水にひたりて行けば、越前越中地方にては多く川中に立ちて鵜を飼ふとぞ
形見がてらと—形見かたがたに

荒玉能。年往更。春去者。花耳爾保布。安之比奇能。山下響。墮多藝知。流辟田乃。河瀬爾。年魚兒狹走。島津鳥。鸕養等母奈倍。可我理左之。奈津左比由氣波。吾妹子我。可多見我氏良等。紅之。八鹽爾染而。於己勢多流。服之襴毛。等寶利氏濃禮奴。

新玉の、年往き返り、春されば、花咲き匂ふ、足引の、山下とよみ、落ち激ち、流るさき田の、川の瀬に、鮎兒さ走り、島つ鳥、鸕飼伴へ、篝さし、なづさひ行けば、我妹子が、形見がてらと、紅の、八入に染めて、おこせたる、衣の裾も、通りて濡れぬ。

反歌

紅。衣爾保波之。辟田河。絶己等奈久。吾等眷牟。

紅の、衣匂はし、さき田川、絶ゆることなく、我還り見む。

毎年爾。鮎之走婆。左伎多河。鸕八頭可頭氣氏。河瀬多頭爾牟。

也里。布里左氣見都追。伊伎騰保流。許己呂能宇知乎。思延。宇禮之備奈我良。枕附。都麻屋之内爾。鳥座由比。須惠氏曾我飼。眞白部乃多可。

足引の、山坂越えて、行き返る、年の緒長く、しなざかる、越にし住めば、大君の、敷き坐す國は、都をも、此處も同じと、心には、思ふものから、語りさけ、見さくる人目、乏しみと、思し繁し。そこ故に、心なぐやと、秋づけば、萩咲き匂ふ、石勢野に、馬たぎ行きて、遠近に、鳥踏み立て、白塗の、小鈴もゆらに、合せ遣り、振りさけ見つゝ、憤る、心の内を、思ひのべ、嬉しびながら、枕つく、妻屋の内に、塒結ひ、据ゑてぞ我が飼ふ、眞白斑の鷹。

反歌

矢形尾乃。麻之路能鷹乎。屋戸爾須惠。可伎奈泥見都追。飼久之余志毛。

屋形尾の、眞白の鷹を、宿に据ゑ、搔撫で見つゝ、飼はくしよしも。

潛鸕歌一首并短歌

しなざかる―枕詞
語りさけ見さくる―物言ひて心を慰め相見て心を慰むる
石勢野―越中國新川郡
馬たぎ行きて―馬の手綱をたぐり行きて
もゆらに―「も」は接頭語、「ゆら」は鈴の鳴る音
憤る―むすぼれふさがる
嬉しびながら―嬉しく思ふまゝに
枕つく―枕詞

つばらかに—つまびらかに、歡を悉して

漢人も云々—漢土にて三月三日に水に遊ぶをいふ

三日守大伴宿禰家持之館ニ宴歌三首

今日之爲等。思標之、足引乃。峯上之櫻。如此開爾家里。

今日の爲と、思ひて標し、足引の、尾上の櫻、斯く咲きにけり。

奧山之。八峯乃海石榴。都婆良可爾。今日者久良佐禰。丈夫之徒。

奧山の、八尾の椿、つばらかに、今日は暮さね。丈夫の伴。

漢人毛。栰浮而。遊云。今日曾和我勢故。花縵世余。

漢人も、船を浮べて、遊ぶとふ、今日ぞ我が背子、花鬘せよ。

八日詠ニ白大鷹ー歌一首幷短歌

安志比奇能。山坂超而。去更。年緒奈我久。科坂在。故志爾之須米婆。大王之。敷座國者。京師乎母。此間毛於夜自等。心爾波。念毛能可良。語左氣。見左久流人眼。乏等。於毛比志繁。曾己由惠爾。情奈具也等。秋附婆。芽子開爾保布。石瀬野爾。馬太伎由吉氏。乎知許知爾。鳥布美立。白塗之。小鈴毛由良爾。安波勢

夜降ちに―夜更けに

川瀨とめ―川瀨を尋ねて

心もしぬに―聞く人の心も愁ひしなふ程に

しぬび―物あはれなる物に聞きなし

すぎの野―越中國か

籠妻かも―「かも」は反語、籠妻なればいかに思へばとて斯く著く鳴くべきことかはの意

八尾―數多重れる峰

朝床に―朝の床に臥しながら

夜具多知爾。寢覺而居者。河瀨尋。情毛之奴爾。鳴知等理賀毛。
夜降ちに、寢覺めて居れば、川瀨とめ、心もしぬに、鳴く千鳥かも。

夜降而。鳴河波知登里。宇倍之許曾。昔人母。之奴比來爾家禮。
夜降ちて、鳴く川千鳥、宜しこそ、昔の人も、しぬび來にけれ。

聞二曉鳴鴙一歌二首

椙野爾。左乎騰流鴙。灼然。啼爾之毛將哭。己母利豆麻可母。
すぎの野に、さ躍る雉子、著く、音にしも鳴かむ、籠妻かも。

足引之。八峯之鴙。鳴響。朝開之霞。見者可奈之母。
足引の、八尾の雉子、鳴きとよむ、朝けの霞、見れば悲しも。

遙聞二泝レ江船人唱一歌一首

朝床爾。聞者遙之。射水河。朝己藝思都追。唱船人。
朝床に、聞けば遙けし、射水川、朝漕ぎしつゝ、歌ふ船人。

張れる—芽の萌え出でたる

八十乃媙嬬等之—一説「乃」は衍にて「やそをとめらが」なるべし

寺井—たゞ寺の井か、又は地名か

汲み紛ふ—數多の少女の水汲むとて行き交ふさま

堅香子—眞淵説に「越の國にてはかたこ、みちの國にてはかたくりといへり、根は百合の如く葉はたゞ一葉さし出て花も又一もと立ちてすみれの如くうす紫也」

黄葉—一訓「もみぢむ」

春日爾。張流柳乎。取持而。見者京之。大路所思。

春の日に、張れる柳を、取持ちて、見れば都の、大路思ほゆ。

攀二折堅香子草花一歌一首

物部能。八十乃媙嬬等之。挹亂。寺井之於乃。堅香子之花。

武士の、八十の少女が、汲み紛ふ、寺井の上の、堅香子の花。

見二歸雁一歌二首

燕來。時爾成奴等。雁之鳴者。本鄕思都追。雲隱喧。

燕來る、時になりぬと、雁がねは、國思ひつゝ、雲隱り鳴く。

春設而。如此歸等母。秋風爾。黄葉山乎。不超來有米也。

春まけて、斯く歸るとも、秋風に、黄葉でむ山を、越えこざらめや。

一云。春去歸此鴈。

夜裏聞二千鳥喧一歌二首

春の園云々—以下專ら家持の歌

下照る道—紅色の地まで照り徹れるをいふ

はだれ—はだれ雪の略

飛翻翔—一本「飛」なし

須牟—元暦本「頒牟」食む也

羽ぶき—鳥の翼を打振ること、本文「はふり」とも訓むべし

萬葉集 巻第十九上

天平勝寶二年三月一日之暮眺二矚春苑桃李花一作歌二首

春苑。紅爾保布。桃花。下照道爾。出立媙嬬。

春の園、紅匂ふ、桃の花、下照る道に、出で立つ少女。

吾園之。李花可。庭爾落。波太禮能未。遺有可母。

我が園の、李の花か、庭に散る。はだれの未だ、殘りたるかも。

見二飛翻翔鴫一作歌一首

春儲而。物悲爾。三更而。羽振鳴志藝。誰田爾須牟。

春まけて、もの悲しきに、さ夜更けて、羽ぶき鳴く鴫、誰が田にか住む。

二日攀二柳黛一思二京師一歌一首

やぶなみ―地名
籠りつゝむ―雨をはゞかりて家に籠り居ること

縁下撿二察墾田地一事上宿二礪波郡主帳多治比部北里之家一于時忽起二風

雨一不レ得二辭去一作歌一首

夜夫奈美能。佐刀爾夜度可里。波流佐米爾。許母理都追牟等。伊母爾都宜都夜。

やぶなみの、里に宿かり、春雨に、籠りつゝむと、妹に告げつや。

二月十八日守大伴宿禰家持作。

ハゴ)の類にて、旅客の專ら負ひて持ち歩く具

はしきー愛らしき

常人の云々ー卷七に「琴とれば歎き先立つ云々」と詠める如く、古より琴の音は人を感じ歎かするものとすれば斯くよめり

はよーはやに同じ、寄生木、和名抄「寄生一名寓生、和名夜止里木、一云保夜」

祝ぐーことほぐ、祝ふ

時じけめやもー何時とても時ならずといふ事あらずと也

右一首。十二月大伴宿禰家持作。

和我勢故我。許登等流奈倍爾。都禰比登能。伊布奈宜吉思毛。伊夜之伎麻須毛。

我が背子が、琴とるなへに、常人の、言ふ歎きしも、いやしき増すも。

右一首。少目秦伊美吉石竹館宴守大伴宿禰家持作。

天平勝寶二年正月二日於國廳給饗諸郡司等宴歌一首

安之比奇能。夜麻能許奴禮能。保與等里天。可射之都良久波。知等世保久等曾。

足引の、山の木ぬれの、ほよ取りて、かざしつらくは、千歳祝ぐとぞ。

右一首。守大伴宿禰家持作。

判官久米朝臣廣繩之館宴歌一首

牟都奇多都。波流能波自米爾。可久之都追。安比之惠美天婆。等枳自家米也母。

睦月立つ、春の初めに、斯くしつゝ、相し笑みてば、時じけめやも。

同月五日守大伴宿禰家持作之。

度レ疑歟。僕作二囑羅一。且惱二使君一。夫乞レ水得レ酒。從來能口。論レ時合レ理。何題二强吏一乎。

尋誦二針袋詠一。詞泉酌不レ竭。抱レ膝獨咲。能蠲二旅愁一。陶然遣レ日何慮何思。短筆不宜。

勝寶元年十二月十五日　徵物下司。

謹上　不伏使君　記室。

別奉云云歌二首

多多佐爾毛。可爾母與己佐母。夜都故等曾。安禮波安利家流。奴之能等能度爾。

たゞさにも、かにも横さも、奴とぞ、我はありける。大人の殿戸に。

波里夫久路。己禮波多婆利奴。須理夫久路。伊麻波衣天之可。於吉奈佐備勢牟。

針袋、此は賜りぬ。擦袋、今は得てしが、翁さびせむ。

宴席詠二雪月梅花一歌一首

由吉能宇倍爾。天禮流都久欲爾。烏梅能播奈。乎理天於久良牟。波之伎故毛我母。

雪の上に、照れる月夜に、梅の花、折りて贈らむ、はしき兒もがも。

意、されは實に、東國の任を望めどもその由なきをよめるか

身異二胡馬一云々ー家持のは池主の任地より北方に當れば斯くいふ

無二所鶱一ー戀情のせん術なきをいふ

著者云々ー(一)家持よりの來書にありしと見ゆ、されど脱字有らん(二)「著者」は「昔者」の誤か(三)「著者」一本「云者」

囑羅ー家持に袋をあつらへしことか

强吏ー無道の有司

針袋詠ー池主の四詠に答へたる家持の歌

不伏使君ー家持徵物をもこさねば責めてもかしこまり伏せぬ使君と罵れていふにや

記室ー下僚の書記にて、侍史などいふに同じ

たゞさにも云々ー「たゞさにも」は竪さまにも「かにも」はかにかくにも、とにもかくにも「横さ」は横さま、竪さまにも横さまにもかにもかくにも君がため我は奴にて有りの意

殿戸ー一說「殿の外」

擦袋ー火うちぶくろ、又一說、韈袋也、韈は皮韈(カ

物所貿易下吏—我が物を引違へられし下吏にて、池主自らいふ
貿易人—物を引違へたる盜人
官司—家持を指す、盜人は家持の方人にてそを家持に訴ふるさまに書けり
可レ怜之意—愛情
擬二睡覺一—目覺しぐさにことよすといふ事にて、俗にいふ笑ひぐさなどの意か
草枕云々—池主より家持へ針袋を縫ひて給はれと乞ひしに針をも入れておこせしなるべし
縫はむものもが—縫ふべき衣も賜へとの意か
返さへば—返せばの延言、裏返して見れば
おのとも云々—「おのともおのや」は表もか、表も表よ裏さへつぎたるわろき袋かなといふ意、一說、おのれがともおのれの意
おびつゞけながら—(一)帶び續けながら(二)本文に誤字あるか
衒さひ歩けど—ひけらかし歩けども
ふさへしに云々—幸を得に行かんと思へどもの意、又、自慢しはこり行く

芳理夫久路。等利安宜麻敝爾於吉。可邊佐倍波。於能等母於能夜。宇良毛都藝多利。

針袋、取上げ前に置き、返さへば、おのともおのや、裏もつぎたり。

波利夫久路。應婢都都氣奈我良。佐刀其等邇。天良佐比安流氣騰。比等毛登賀米授。

針袋、おびつゞけながら、里毎に、衒さひ歩けど、人も咎めず。

等里我奈久。安豆麻乎佐之天。布佐倍之爾。由可牟登於毛倍騰。與之母佐禰奈之。

鷄が鳴く、東を指して、ふさへしに、行かむと思へど、由もさね無し。

右歌之返歌者脱漏。不レ得二探求一也。

更來贈歌二首

依下迎二驛使一事上。今月十五日到二來部下加賀郡境一。面蔭見二射水之郷一。戀緒結二深海之村一。身異二胡馬一。心悲二北風一。乘レ月徘徊。曾無二所爲一。稍開二來封一。其辭云著者。先所レ奉書。返畏ル

こ向ひ立ちて—一說、本文「許」は「伊」の誤、安の河を間に置きて互に向き合ひ立てるをいふ
表裏云々—針袋を縫うてもちふべききれを池主より家持へ贈りたるに其れにまされる絹に取かへて縫はせおこしたるを戲に咎めたる也といふ
推量云々—思ふに率爾に貿易(とりかへ)の策をなしたるに相違なからん
如—舊本「加」に作る
正贓—盜めるものをそのまゝにて償はすること
倍贓—盜めるもの他人へ渡り失せぬれば倍して償はすること
勒風雲—風の便、また雲も使などいへばさる意もて書けるか
發遣徵使—取返すとて使を立つること
延回—延引

夜須能河波。許牟可比太知弖。等之能古非。氣奈我伎古良河。都麻度比能欲曾。
安の河、こ向ひ立ちて、年の戀、け長き兒らが、つまどひの夜ぞ。

右七月七日仰見天漢大伴宿禰家持作之。

越前國掾大伴宿禰池主來贈戲歌四首

忽辱恩賜。驚欣已深。心中含咲。獨座稍開。表裏不同。相違何異。推量所由。率爾作策歟。明知如言。豈有他意乎。凡貿易本物。其罪不輕。正贓倍贓。宜急并滿。今勒風雲。發遣徵使。早速返報。不須延回。

勝寶元年十一月十二日　物所貿易下吏。

謹訴貿易人斷官司　廳下。

別白。可怜之意。不能默止。聊述四詠。唯擬睡覺。

久佐麻久良。多比能於伎奈等。於母保之天。波里曾多麻敝流。奴波牟物能毛賀。
草枕、旅の翁と、思ほして、針ぞ賜へる。縫はむ物もが。

天照す神——天照大神

項掛けり居て——うなじに手を掛け居りて、互に親み給ふさま

こゝをしも——これをしも、宣長說に「しも」は「こそ」に通ひて三段の係となる也

母。安吉爾之安良禰波。許等騰比能。等毛之伎古良。宇都世美能。代人和禮母。許己乎之母。安夜爾久須之彌。往更。年能波其登爾。安麻能波良。布里左氣見都追。伊比都藝爾須禮。

天照す、神の御代より、安の河、中に隔てて、向ひ立ち、袖振り交し、息の緒に、歎かす兒ら、渡守、船も設けず、橋だにも、渡してあらば、其の上ゆも、い行き渡らし、携はり、項掛けり居て、思ほしき、事も語らひ、慰むる、心はあらむを、何しかも、秋にしあらねば、言問の、乏しき兒ら、空蟬の、世の人我も、こゝをしも、あやに奇しみ、往き更る、年のは毎に、天の原、振りさけ見つゝ、言繼ぎにすれ。

反歌二首

安麻能我波。波志和多世良波。曾能倍由母。伊和多良佐牟乎。安吉爾安良受得物。

天の河、橋渡せらば、其の上ゆも、い渡らさむを、秋にあらずとも。

ほびこりて―はびこりて、ひろがりて
降らぬか―降れかし
心足ひに―飽き足るばかりに
言擧せずとも―いひ立てて神に祈らずとも
とし―稻

此の見ゆる、雲ほびこりて、との曇り、雨も降らぬか。心足ひに。

右二首。六月一日晩頭守大伴宿禰家持作之。

賀二雨落一歌一首

和我保里之。安米波布里伎奴。可久之安良波。許登安氣世受杼母。登思波佐可延牟。

我が欲りし、雨は降り來ぬ。斯くしあらば、言擧せずとも、としは榮えむ。

右一首。同月四日大伴宿禰家持作之。

七夕歌一首并短歌

安麻泥良須。可未能御代欲里。夜洲能河波。奈加爾敝太弖弖。牟可比太和。蘇泥布利可波之。伊吉能乎爾。奈氣加須古良。和多理母理。布禰毛麻宇氣受。波之太爾母。和多之氏安良波。曾能倍由母。伊由伎和多良之。多豆佐波利。宇奈我既利爲氏。於母保之吉。許登母加多良比。那具左牟流。許己呂波安良牟乎。奈爾之可

敷き座す—知ろしめす

司—かしら、稻は萬づの貢の中にて最上に位するものなれば斯くいへり

天つ水—雨

山のたをり—山の頂の凹みて見ゆる所

との曇り—棚曇りに同じく雲の棚引きて曇ること

惠之田毛。麻吉之波多氣毛。安佐其登爾。之保美可禮由苦。曾乎見禮波。許己呂乎伊多美。彌騰里兒能。知許布我其登久。安麻都美豆。安布藝弖曾麻都。安之比奇能。夜麻能多乎理爾。許能見由流。安麻能之良久母。和多都美能。於枳都美夜敝爾。多知和多里。等能具毛利安比弖。安米母多麻波禰。

天皇の、敷き坐す國の、天の下、四方の道には、馬の蹄、い盡す極み、船の舳の、い泊つるまでに、古よ、今の現に、萬調、奉る司と、作りたる、其の生業を、雨降らず、日の重れば、植ゑし田も、蒔きし畠も、朝毎に、凋み枯れ行く、其を見れば、心を痛み、綠兒の、乳乞ふが如く、天つ水、仰ぎてぞ待つ。足引の、山のたをりに、此の見ゆる、天の白雲、海神の、沖つ宮邊に、立ち渡り、との曇り合ひて、雨も賜はね。

反歌一首

許能美由流。久毛保妣許里弖。等能具毛理。安米毛布良奴可。許己呂太良比爾。

相ニ美人一―相は「あふ」と訓むか
儲作―「あらかじめよめる」と訓ず
見まく欲り云々―端詞にいへる美人をよめり
蘰蔭―一說、蘰日蔭にて、枕詞
かぐはし―(一)「か」は發語にて、くはし女(メ)の意か(二)かうばしき君の意
參り―宮中へ參ること、一說、本文「朝參」は「朝戶出」などの誤にや、端詞の貴人をよめり
起ニ小旱一―「起」は「赴」の誤か
田畝稍―「稍」一本「稻」
六月―一本、上に「今」あり

爲下向レ京之時見ニ貴人一及相ニ美人一飲宴之日上述レ懷儲作歌二首

見麻久保里。於毛比之奈倍爾。加都良賀氣。香具波之君乎。安比見都流賀母。

見まく欲り、思ひしなへに、蘰蔭、かぐはし君を、相見つるかも。

朝參乃。伎美我須我多乎。美受比左爾。比奈爾之須米婆。安禮故非爾家里。

參りの、君が姿を、見ず久に、鄙にし住めば、我戀ひにけり。

一頭云。波之吉與思。伊毛我須我多乎。

同閏五月二十八日大伴宿禰家持作之。

天平感寶元年閏五月六日以來起ニ小旱一百姓田畝稍有ニ凋色一也至ニ于六月朔日一忽見ニ雨雲之氣一仍作レ雲歌一首　短歌一絶

須賣呂伎能。之伎麻須久爾能。安米能之多。四方能美知爾波。宇麻乃都米。伊都久須伎波美。布奈乃倍能。伊波都流麻泥爾。伊爾之敝欲。伊麻乃乎都頭爾。萬調。麻都流都可佐等。都久里多流。曾能奈里波比乎。安米布良受。日能可左奈禮波。宇

事畢り云々—朝集の事をはり京を罷りて任國に還り到りし也
にふゞ—にこやか、にこにこ
末末爾—一本「末爾末」
面や—(一)「や」は「よ」と同じく助辭(二)面いや
少くも—末句にかゝる
戀しけれやも—一說、本文「禮」は「米」の誤にて「こひしけめやも」か
古よ云々—古より人の慕ふ鳥なればの意

りて、逝く水の、彌增しにのみ、田鶴が鳴く、奈呉江の菅の、懇に、思ひ結れ、歎きつゝ、我が待つ君が、事畢り、歸り罷りて、夏の野の、小百合の花の、花笑みに、にふゞに笑みて、逢はしたる、今日を始めて、鏡なす、斯くし常見む、面變せず。

反歌二首

許序能秋。安比見之末末爾。今日見波。於毛夜目都良之。美夜古可多比等。

去年の秋、相見しまゝに、今日見れば、面や珍し、都方人。

可久之天母。安比見流毛能乎。須久奈久母。年月經禮婆。古非之家禮夜母。

斯くしても、相見るものを、少くも、年月經れば、戀しけれやも。

聞二霍公鳥喧一作歌一首

伊爾之敝欲。之奴比爾家禮婆。保等登伎須。奈久許惠伎吉氏。古非之吉物能乎。

古よ、忍びにければ、郭公、鳴く聲聞きて、戀しきものを。

母知。多末保許能。美知爾伊天多知。伊波爾布美。也末古衣野由伎。彌夜故敝爾。末爲之和我世乎。安良多末乃。等之由吉我敝理。月可佐禰。美奴日佐末禰美。故敷流曾良。夜須久之安良禰波。保止止支須。支奈久五月能。安夜女具佐。余母疑可豆良伎。左加美都伎。安蘇比奈具禮止。射水河。雪消溢而。逝水能。伊夜末思爾乃未。多豆我奈久。奈呉江能須氣能。根毛己呂爾。於母比牟須保禮。奈介伎都都。安我末川君我。許登乎波里。可敝利末可利天。夏野能。佐由利能波奈能。花咲爾。爾布夫爾惠美天。阿波之多流。今日乎波自米氐。鏡奈須。可久之都禰見牟。於毛我波利世須。

大君の、任きのまに／＼、執り持ちて、仕ふる國の、年の内の、事かたね持ち、玉桙の、道に出で立ち、岩根踏み、山越え野行き、都邊に、參るし我が背を、新玉の、年往き歸り、月重ね、見ぬ日さまねみ、戀ふる空、安くしあらねば、郭公、來鳴く五月の、菖蒲草、蓬蘰き、さかみづき、遊び慰ぐれど、射水川、雪消はふ

安我末川君―一説「川」は「門」の誤か、古義には原のまゝなるべき由論ぜり

執り持ちて―官事を也

かたね持ち―つかね持ちの意か

見ぬ日さまねみ―見ぬ日數多くなれるをいふ

蘰き―蘰にし

さかみづき―酒宴をすること

慰ぐれど―慰むれどの略

其の花妻—なでしこの如く花やぎたる故郷の妻
ゆりも逢はむと—後も逢はんと
あれや—あらめや
にほひ—あてやかさ、はなやかさ
したばふる—心の內に思ひ居る

撫子を、宿に蒔き生し、夏の野の、小百合引き植ゑて、咲く花を、出で見る毎に、撫子が、其の花妻に、小百合花、ゆりも逢はむと、慰むる、心し無くは、天離る、鄙に一日も、在るべくもあれや。

反歌二首。

奈泥之故我。花見流其等爾。乎登女良我。惠末比能爾保比。於母保由流可母。

撫子が、花見る毎に、少女らが、笑まひのにほひ、思ほゆるかも。

佐由利花。由利母相等。之多波布流。許己呂之奈久波。今日母倍米夜母。

小百合花、ゆりも逢はむと、したばふる、心しなくは、今日も經めやも。

同閏五月二十六日大伴宿禰家持作。

國掾久米朝臣廣繩以二天平二十年一附二朝集使一入レ京其事畢而天平感寶元年閏五月二十七日還二到本任一仍長官之館設二詩酒宴一樂飮於時主人守大伴宿禰家持作歌一首幷短歌

於保伎見能。末伎末爾末爾。等里毛知底。都可布流久爾能。年內能。許登可多禰

庭中花—上に「詠」を脱す

任き給ふ—まかせ給ふの約言

まにま—まに〳〵の略

橘波。花爾毛實爾母。美都禮騰母。移夜時自久爾。奈保之見我保之。

橘は、花にも實にも、見つれども、いや時じくに、猶し見が欲し。

閏五月二十三日大伴宿禰家持作之。

庭中花作歌幷短歌

於保伎見能。等保能美可等等。末伎太末不。官乃末爾末。美由伎布流。古之爾久太利來。安良多末能。等之能五年。之吉多倍乃。手枕末可受。比毛等可須。末呂宿乎須禮波。移夫勢美等。情奈具左爾。奈泥之故乎。屋戸爾末枳於保之。夏能能之。佐由利比伎宇惠天。開花乎。移低見流其等爾。那泥之古我。曾乃波奈豆末爾。佐由理花。由利母安波無等。奈具佐無流。許己呂之奈久波。安麻射可流。比奈爾一日毛。安流部久母安禮也。

大君の、遠の朝廷と、任き給ふ、官のまにま、み雪降る、越に下り來、新玉の、年の五年、敷細の、手枕まかず、紐解かず、丸寝をすれば、いぶせみと、心慰に、

禮受。常磐奈須。伊夜佐加波延爾。之可禮許曾。神乃御代欲理。與呂之奈倍。此橘乎。等伎自久能。可久能木實等。名附家良之母。

懸けまくも、あやに畏し。皇神祖の、神の大御代に、田道間守、常世に渡り、八矛持ち、參出來し時、時じくの、香の木の實を、畏くも、遺し給へれ、國も狹に、生ひ立ち榮え、春されば、ひこ枝萌いつゝ、郭公、鳴く五月には、初花を、枝に手折りて、少女らに、裹にも遣りみ、白妙の、袖にもこきれ、かぐはしみ、措きて枯らしみ、熟ゆる實は、玉に貫きつゝ、手に纏きて、見れども飽かず、秋づけば、時雨の雨降り、足引の、山の木ぬれは、紅に、匂ひ散れども、橘の、なれる其實は、直照りに、彌見が欲しく、み雪降る、冬に至れば、霜置けども、其の葉も枯れず、常磐なす、いや榮ばえに。然れこそ、神の御代より、宜しなへ、此の橘を、時じくの、香の木の實と、名附けけらしも。

反歌一首

田道間守―垂仁紀に見ゆ

八矛―垂仁紀に「以縵八縵矛八矛、將來之間云々」、橘の採り樣についての名也、古事記參照

時じく―時ならぬ也、本文「支」は「敷」の誤か

遺し給へれ―下に「ば」と補ふ

ひこ枝―枝より又出づる枝

初花―本文「婆」一本「波」の方宜し

枝に手折りて―花を枝ながら折りての意

霜置けども―卷六「橘は實さへ花さへ其の葉さへ枝に霜置けどいや常葉の木」

神の御代―垂仁天皇の御代を指す

宜しなへ―如何れも適當に、ふさはしくも

いつぎし殿―少咋をいつぎし遊女の家なるべし、略解には「いつぎ」は上にいへる「いつがり」を約めたる詞なるべし、殿は少咋が官舍をいふといへり

鈴懸けぬ云々―「鈴」は驛鈴、少咋の本妻が都よりお、して越中國に下れるを、鈴懸けぬ驛使の下れると人のいひさわぐを戲れてよめり、本文「婆」は一本「波」とある方宜し

左夫流兒我。伊都伎之等能爾。須受可氣奴。婆由麻久太禮利。佐刀毛等騰呂爾。

さぶる兒が、いつぎし殿に、鈴懸けぬ、早馬下れり。里もとゞろに。

同月十七日大伴宿禰家持作之。

橘歌一首幷短歌

可氣麻久母。安夜爾加之古思。皇神祖能。可見能大御世爾。田道間守。常世爾和多利。夜保許毛知。麻爲泥許之登吉。時支能。香久乃菓子乎。可之古久母。能許之多麻敝禮。國毛勢爾。於非多知左加延。波流左禮婆。孫枝毛伊都追。保登等藝須。奈久五月爾波。波都婆奈乎。延太爾多乎理弖。乎登女良爾。都刀爾母夜里美之路多倍能。蘇泥爾毛古伎神。香具播之美。於枳弖可良之美。安由流實波。多麻爾奴伎都追。手爾麻吉弖。見禮騰毛安加受。秋豆氣婆。之具禮能雨零。阿之比奇能。夜麻能許奴禮波。久禮奈爲爾。仁保比知禮止毛。多知波奈能。成流其實者。比太照爾。伊夜見我保之久。美山伎布流。冬爾伊多禮波。霜於氣騰母。其葉毛可

いつがり合ひて—「い」は發語、固く結ばりつながるをいふ
さどはせる—迷はせる
術も術無さ—言はん方なさの意

安良司可—一説「司」は「自」の誤か

美夜泥—一説「美」は「尼」の誤にて「ねやで」か
後姿—うしろで、うしろつき

紅—遊女をさす
橡—本妻をさす

り合ひて、鳰鳥の、二人並び居、奈呉の海の、沖を深めて、さどはせる、君が心の、術も術無さ。

反歌三首

安乎爾與之。奈良爾安流伊毛我。多可多可爾。麻都良牟許己呂。之可爾波安良司可。

青丹吉、奈良に在る妹が、高々に、待つらむ心、然かにはあらじか。

左刀妣等能。見流目波豆可之。左夫流兒爾。佐度波須伎美我。美夜泥之理夫利。

里人の、見る目恥し。さぶる兒に、さどはす君が、宮出後姿。

久禮奈爲波。宇都呂布母能曾。都流波美能。奈禮爾之伎奴爾。奈保之可米夜母。

紅は、移ろふものぞ。橡の、なれにし衣に、猶若かめやも。

右五月十五日。守大伴宿禰家持作之。

先妻不レ待二夫君之喚使一自來時作歌一首

安良多之家牟―「安良牟等末多之家牟」の誤にて「あらむとまたしけむ」と訓ずる説に從ふ
沙加利曽―一說「曽」は「乎」の誤か
波居弖―「波」は「放」の誤か
雪消益而―「益」は「溢」の誤、又は略書

其妻の兒―故鄕にのこせる妻
笑みゝ笑まずも―笑みもし笑まずもありての意

心さぶしく―妻の心樂まず居るをいふ
さぶる其の兒に―原文の註にいへる如く「さぶる」は遊女の字、「其の兒」は女子を親しみいふ也

嘗安良多之家牟。等吉能沙加利曽。波居弖。の〳〵奈介可須移母我。何時可毛。都可比能許牟等。末多須良無。心左夫之苦。南吹。雪消益而。射水河。流水沫能。余留弊奈美。左夫流其兒爾。比毛能緒能。移都我利安比弖。爾保騰里能。布多理雙坐。那呉能宇美能。於伎乎布可米天。左度波世流。伎美我許己呂能。須敝母須弊奈佐。〔言佐夫流者遊行女婦之字也。〕

大己貴、少彦名の、神代より、言ひ繼ぎけらし。父母を、見れば尊く、妻子見れば、かなしくめぐし。空蟬の、世の理と、斯く樣に、言ひけるものを、世の人の、立つること立て、ちさの花、咲ける盛りに、はしきよし、其妻の兒と、朝宵に、笑みゝ笑まずも、打歎き、語りけまくは、永久に、斯くしもあらめや。天地の、神事寄せて、春花の、盛りもあらむと、待たしけむ、時の盛りぞ、離り居て、歎かす妹が、何時しかも、使の來むと、待たすらむ、心さぶしく、南吹き、雪消はふりて、射水川、流る水泡の、寄方無み、さぶる其の兒に、紐の緒の、いつが

七出例―戸令「凡棄㆑妻須㆑有㆓七出之狀㆒、一無㆑子、二婬佚、三不㆑事㆓舅姑㆒、四口舌、五盜竊、六妬忌、七惡疾、皆夫手書棄㆑之云々」

三不去―下に「例」を脱す、戸令「雖㆑有㆓棄狀㆒有㆓三不去㆒、一經㆑持㆓舅姑之喪㆒、二娶時賤後貴、三有㆑所㆑受無㆑所㆑歸云々」

家良之―一說「之」は「久」の誤にて「けらく」

教㆓喩史生尾張少咋㆒歌一首幷短歌

七出例云。但犯㆓一條㆒卽合㆑出㆑之。無㆓七出㆒。輙棄者徒一年半。三不去云。雖㆑犯㆓七出㆒。不㆑合㆑棄㆑之。違者杖一百。唯犯㆑姧惡疾得㆑棄㆑之。兩妻例云。有㆑妻更娶者徒一年。女家杖一百離㆑之。

詔書云。慇㆓賜義夫節婦㆒。

謹案。先件數條。建法之基。化道之源也。然則義夫之道。情存㆑無㆑別。一家同財。豈有㆓忘㆑舊愛㆑新之志㆒哉。所以綴㆓作數行之歌㆒。令㆑悔㆓棄㆑舊之惑㆒。其詞曰。

於保奈牟知。須久奈比古奈野。神代欲里。伊比都藝家良之。父母乎。見波多布刀久。妻子見波。可奈之久米具之。宇都世美能。余乃許等和利止。可久佐末爾。伊比家流物能乎。世人能。多都許許等太弖。知左能花。佐家流沙加利爾。波之吉余之。曾能都末能古等。安沙余比爾。惠美美惠末須毛。宅知奈氣伎。可多里家末久波、等已之部爾。可久之母安良米也。天地能。可未許等余勢天。春花能。佐可里

五百ち—五百個なるべし
片去り—本文「古」は「左」の誤か、夫の臥すべき床をあけ片方に寄りて臥す也
夜良波—一説「波」は「那」などの誤にて「やらな」か
白玉—鰒珠
可豆具—「具」は「俱」の誤か
おこせむ—送り來らん、よこさん
むかし—うれしく心にかなひたるをいふ

はしきよし、妻の命の、衣手の、別れし時よ、ぬば玉の、夜床片去り、朝寢髮、掻きも梳らず、出でて來し、月日よみつゝ、歎くらむ、心慰に、郭公、來鳴く五月の、菖蒲草、花橘に、貫き交へ、鬘にせよと、包みて遣らむ。

白玉乎。都々美氐夜良波。安夜女具佐。波奈多知婆奈爾。安倍母奴久我禰。
白玉を、包みて遣らば、菖蒲草、花橘に、合へも貫くがね。

於伎都之麻。伊由伎和多里弖。可豆具知布。安波妣多麻母我。都々美弖夜良牟。
沖つ島、い行き渡りて、潛くちふ、鰒珠もが。包みて遣らむ。

和伎母故我。許己呂奈具左爾。夜良無多米。於伎都之麻奈流。之良多麻母我母。
我妹子が、心慰に、遣らむ爲め、沖つ島なる、白玉もがも。

思良多麻能。伊保都都度比乎。手爾牟須妣。於許世牟安麻波。牟賀思久母安流香。
白玉の、五百箇集を、手に結び、おこせむ海人は、むかしくもあるか。

一云。我家牟伎波母。

右五月十四日。大伴宿禰家持依興作。

心奈具佐余—「余」は「尒」の誤か

珠洲—能登國
沖つ御神—御神は海神

反歌

伊爾之敝乎。於母保須良之母。和期於保伎美。余思努乃美夜乎。安里我欲比賣須。
古を、思ほすらしも。我ご大君、吉野の宮を、在り通ひめす。

物能乃布能。夜蘇氏人毛。與之努河波。多由流許等奈久。都可倍追通見牟。
武夫の、八十氏人も、吉野川、絶ゆること無く、仕へつゝ見む。

爲レ贈二京家一願二眞珠一歌一首并短歌

珠洲乃安麻能、於伎都美可未爾。伊和多利弖。可都伎等流登伊布。安波妣多麻。伊保知毛我母。波之吉餘之。都麻乃美許登能。許呂毛泥乃。和可禮之等吉欲。奴婆玉乃。夜床加多古里。安佐爾我美。可伎母氣頭良受。伊泥氏許之。月日余美都追。奈氣久良牟。心奈具佐余。保登等藝須。伎奈久五月能。安夜女具佐。波奈多知波奈爾。奴吉麻自倍。可頭良爾世餘等。都追美氏夜良牟。
珠洲の海人の、沖つ御神に、い渡りて、潛き探るといふ、鰒珠、五百ちもがも。

天平感寶元年五月十二日。於二越中國守舘一大伴宿禰家持作レ之。

爲下幸二行芳野離宮一之時上儲作歌一首并短歌

多可美久良。安麻能日嗣等。天下。志良之賣師家類。須賣呂伎乃。可未能美許等能。可之古久母。波自米多麻比弖。多不刀久母。左太米麻敝流。美與之努能。許乃於保美夜爾。安里我欲比。賣之多麻布良之。毛能乃敷能。夜蘇等母能乎毛。於能我於敝流。於能我名負名負。大王之。麻氣能麻久麻久。此河能。多由流許等奈久。此山能。伊夜都藝都藝爾。可久之許曾。都可倍麻都良米。伊夜等保奈我爾。

高御座、天の日嗣と、天の下、知らし召しける、天皇の、神の命の、畏くも、始め給ひて、貴くも、定め給へる、み吉野の、此の大宮に、在り通ひ、めし給ふらし。武夫の、八十伴の緒も、己が負へる、己が名負ひて、大君の、任のまく〳〵、此の川の、絶ゆる事なく、此の山の、彌繼々に、斯くしこそ、仕へ奉らめ。彌遠永に。

始め給ひて―齊明紀「二年造二吉野宮一」

在り通ひ―天皇の行幸し給ひて

めし給ふ―見させ給ふ

己が名負ひて―先祖より負へる家の職を負ひての意、本文「名負名負」は一說「名負弖」の誤か

任のまく〳〵―(一)「まくまく」はまかせ〳〵の約言にて、まかせ給へる其の任々に隨ひの意か(二)本文「久」は何れも「弖」の誤にて「まけのまに〳〵」か

こと立て―古義に、異立の義にて、こゝは赤心不變の志を立つる事の常人に異りていみじく堅きよしにて云へるなるべしといへり

古よ―古より

大伴と佐伯―姓氏錄「雄略天皇御世、以天靫負賜大連公、已奏曰衛門開闔之務於職重、若一身難堪、望與愚兒語相併、奉衛左右、依勅奏、是大伴佐伯二氏、掌左右開闔之縁也」この語連の裔が佐伯氏となれる也

御言の幸―御恩惠を施して臣等を幸へ饒し給ふ意なるべし

標立て―標を立てよ

黃金花咲く―契沖曰く「山にはよろづの木の花咲くゆゑに陸奧山には金の花咲けりとよめり」

の祖先の、立つること立て、人の子は、祖先の名絶たず、大君に、まつろふものと、言ひ繼げる、言の官ぞ。梓弓、手に取り持ちて、劒太刀、腰に取り佩き、朝守り、夕の守りに、大君の、御門の守り、我を措きて、又人はあらじと、彌立て、思ひし增さる。大君の、御言の幸の、聞けば貴み。

一云。貴久之安禮婆。

反歌三首

丈夫能。許己呂於毛保由。於保伎美能。美許登能佐吉乎。一云能 聞者多布刀美。

丈夫の、心思ほゆ。大君の、御言の幸を、聞けば貴み。

一云。貴久之安禮婆。

大伴能。等保追可牟於夜能。於久都奇波。之流久之米多底。比等能之流倍久。

大伴の、遠つ神祖の、奧津城は、著く標立て、人の知るべく。

須賣呂伎能。御代佐可延牟等。阿頭麻奈流。美知能久夜麻尓。金花佐久。

天皇の、御代榮えむと、東國なる、陸奧山に、黃金花咲く。

善き事を云々―詔詞に見えたる佛像鑄造の事を指せるならんか、略解には諸の善き事を始め給ふ義とせり
たのしけくあらむ―國民樂しからんと思し召し給ひての意か、又詔書の極よりすれば「少氣久安良牟」
下悩ます―御心のうちに思ひ悩み給ふをいふ
小田―陸奥國小田郡
申し給へれ―人の奏し奉りたれば
御心を云々―御安心遊ばし
相うづなひ―「うづなふ」は「うべなふ」に同じ
皇御祖云々―代々の天皇の御靈の助け給ひしをいふ
かゝりし事を―「なかりしことを」なるべし
御食國―本文、一本「御」なき方宜し
まつろへの云々―治め給ふまゝにの意
こゝをしも―之をしも
大久米主―久米部を率ゐし故に斯くいふ

天の日嗣と、知らし來る、君の御代々々、しき坐せる、四方の國には、山川を、廣み厚みと、奉る、御調寶は、數へ得ず、盡しも兼ねつ。然れども、我が大君の、諸人を、誘ひ給ひ、善き事を、始め給ひて、黄金かも、たのしけくあらむと、思ほして、下悩ますに、鷄が鳴く、東國の、陸奥の、小田なる山に、黄金ありと、申し給へれ、御心を、明らめ給ひ、天地の、神相うづなひ、皇御祖の、御靈助けて、遠き世に、かゝりし事を、我が御代に、顯はしてあれば、御食國は、榮えむものと、神ながら、思ほし召して、武夫の、八十伴の緒を、まつろへの、むけのまに／＼、老人も、女の童兒も、汝が願ふ、心足ひに、撫で給ひ、治め給へば、こゝをしも、あやに貴み、嬉しけく、愈思ひて、大伴の、遠つ神祖の、其の名をば、大久米主と、負ひ持ちて、仕へし官、海行かば、水漬く屍、山行かば、草むす屍、大君の、邊にこそ死なめ、顧みは、せじとこと立て、丈夫の、清き其の名を、古よ、今の現に、流さへる、先祖の子どもぞ。大伴と、佐伯の氏は、人

伊夜多弖―一說、下に今一つ「弖」ありしを脱せしか

許登乎。朕御世爾。安良波之弖安禮婆。御食國波。左可延牟物能等。可牟奈我良。於毛保之賣之弖。毛能乃布能。八十伴雄乎。麻都呂倍乃。牟氣乃麻爾麻爾。老人毛。女童兒毛。之我願。心太良比爾。撫賜。治賜婆。許己乎之母。安夜爾多敷刀美。宇禮之家久。伊余與於母比弖。大伴能。遠都神祖乃。其名乎婆。大來目主登。於比母知弖。都加倍之官。海行者。美都久屍。山行者。草牟須屍。大皇乃。敝爾許曾死米。可弊里見波。勢自等許等太弖。丈夫乃。伎欲吉彼名乎。伊爾之敝欲。伊麻乃乎追通爾。奈我佐敝流。於夜能子等毛曾。大伴等。佐伯氏者。人祖乃。立流辭立。人子者。祖名不絕。大君爾。麻都呂布物能等。伊比都雅流。許等能都可佐曾。梓弓。手爾等里母知弖。劒大刀。許之爾等里波伎。安佐麻毛利。由布能麻毛利爾。大王能。三門乃麻毛利。和禮乎於吉弖。且比等波安良自等。伊夜多弖。於毛比之麻左流。大皇乃。御言能左吉乃。（一云「乎」）聞者貴美。

葦原の、瑞穂國を、天降り、知らしめしける、天皇の、神の命の、御代重ね、

安乎能宇良爾。餘須流之良奈美。伊夜末之爾。多知之伎與世久。安由乎伊多美可聞。

英遠の浦に、寄する白浪、いや增しに、立ちしき寄せ來、東風を甚みかも。

右一首。大伴宿禰家持作之。

賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌

葦原能。美豆保國乎。安麻久太利。之良志賣之家流。須賣呂伎能。神乃美許等能。御代可佐爾。天乃日嗣等。之良志久流。伎美能御代御代。之伎麻世流。四方國爾波。山河乎。比呂美安都美等。多弖麻豆流。御調寶波。可蘇倍衣受。都久之毛可禰都。之加禮騰母。吾大王能。毛呂比登乎。伊射奈比多麻比。善事乎。波自米多麻比弖。久我禰可毛。多能之氣久安良牟登。於母保之弖。之多奈夜麻須爾。鷄鳴。東國能。美知能久乃。小田在山爾。金有等。麻宇之多麻敝禮。御心乎。安吉良米多麻比。天地乃。神安比宇豆奈比。皇御祖乃。御靈多須氣弖。遠代爾。可可里之

英遠―越中國

詔書―「續紀聖武天皇天平二十一年丁巳、陸奥國始貢黃金云々、同年四月甲午朔、天皇幸東大寺、御盧舍那佛像前殿云々、勅遣左大臣橘宿禰諸兄白佛、三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命盧舍那像能大前仁奉賜部止奏久、此大倭國者、天地開闢以來爾、黃金波人國用理獻言波有登毛、斯地者無物止念部流仁聞看食國中能東方陸奥國守從五位上百濟王敬福伊、部內少田郡仁黃金在奏氏獻、此遠聞食驚伎云々」

美豆保國―「保」の下「乃」を脫せるか

可可里之―「奈可里之」の誤歟

晝暮し―終日
夜わたし―夜もすがら
あはれの鳥―あらおもしろき鳥
行方なく云々―郭公は鳴く聲は聞ゆれども行方の知れぬものなれば斯くよめり、本文「具」は「倶」の誤か
名告り鳴くなべ―郭公は卯の花の咲く頃鳴けば斯くいへり
播奈治流―「治」は「知」の誤か
ねたけくは―ねたくある事には

きて偲ばむ。卯の花の、咲く月立てば、珍しく、鳴く郭公、菖蒲草、玉貫くまでに、晝暮し、夜わたし聞けど、聞く毎に、心動きて、打嘆き、あはれの鳥と、言はぬ時無し。

反歌

由具敝奈久。安里和多流登毛。保等登藝須。奈枳之和多良婆。可久夜思努波牟。
行方なく、あり渡るとも、郭公、鳴きし渡らば、斯くや偲ばむ。

宇能花能。開爾之奈氣婆。保等得藝須。伊夜米豆良之毛。名能里奈久奈倍。
卯の花の、咲くにし鳴けば、郭公、彌珍しも。名告り鳴くなべ。

保登等藝須。伊登爾多家口波。橘能。播奈治流等吉爾。伎奈吉登余牟流。
郭公、いとねたけくは、橘の、花散る時に、來鳴きとよむる。

右四首。十日大伴宿禰家持作之。

行二英遠浦一之日作歌一首

由理波奈—「波」一本「婆」
思へこそ—思へばこそ
まさか—現在
豆呉枳弖—「豆」は「宇」の
聞し食す—聞し召す
かなし—愛らし、かはゆし

右一首。介內藏伊美吉繩麻呂。

在由理波奈。由利毛安波牟等。於毛倍許曾。伊末能麻左可母。宇流波之美須禮。

さ百合花、ゆりも會はむと、思へこそ、今のまさかも、うるはしみすれ。

右一首。大伴宿禰家持和。

獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首并短歌

高御座。安麻能日繼登。須賣呂伎能。可未能美許登能。伎己之乎須。久爾能麻保良爾。山乎之毛。佐波爾於保美等。百鳥能。來居弖奈久許惠。春佐禮婆。伎吉能可奈之母。伊豆禮乎可。和枳弖之努波無。宇能花乃。佐久月多弖婆。米都良之久。鳴保等登藝須。安夜女具佐。珠奴久麻泥爾。比流久良之。欲和多之伎氣騰。伎久其等爾。許己呂豆呉枳弖。宇知奈氣伎。安波禮能登里等。伊波奴登枳奈思。

高御座、天の日嗣と、天皇の、神の命の、聞し食す、國の眞ほらに、山をしも、さはに多みと、百鳥の、來居て鳴く聲、春されば、聞のかなしも。何れをか、分

右四日附ㇾ使贈二上京師一。

天平感寶元年五月五日饗二東大寺之占墾地使僧平榮等一于時守大伴宿禰家持

送二酒僧一歌一首

夜岐多知乎。刀奈美能勢伎爾。安須欲里波。毛利敝夜里蘇倍。伎美乎等登米牟。

燒太刀を、礪波の關に、明日よりは、守部遣りそへ、君を止めむ。

同月九日諸僚會二少目秦伊美吉石竹之館一飲宴於時主人造二百合花縵三枚一

疊二置豆器一捧二贈賓客一各賦二此縵一作三首

安夫良火能。比可里爾見由流。和我可豆良。佐由利能波奈能。惠麻波之香母。

油火の、光に見ゆる、我が蘰、さ百合の花の、笑まはしきかも。

右一首。守大伴宿禰家持。

等毛之火能。比可里爾見由流。佐由理婆奈。由利毛安波牟等。於母比曾米弖伎。

燈火の、光に見ゆる、さ百合花、ゆりも會はむと、思ひ初めてき。

燒太刀を―枕詞

礪波の關―越中國

伊美吉―忌寸

三枚―「枚」一本「枝」

豆器―(一)高坏か(二)俎豆の意か(三)豆は燈の誤か

作三首―「作」の下に「歌」を脱す

油火―ともし油に燈心をひたしてともす燈火

笑まはしきかも―花の咲きたるを笑むといへば斯く儲けたる也、花のゑまひのうるはしく見事なる哉と也

ゆりも會はむと―後も會はんと

なりにたらずや―なりにてあらずやにて、死ぬべくなりたりといふ意

太馬―ふとくたくましき馬

人かだはむかも―人がかすめ取るべき由戯れてよめるならん

報歌―下「二首」として「幷」以下を削除すべし

比奈能都夜故爾―(一)「都」は「美」の誤か(二)「都夜故」は「夜都故」の誤にて「やつこ」と訓ず、然るべし

天人の―一訓「天人し」

斯く戀すらば―斯く戀するならばの略

馬に戀ひ來ば―太馬に負せ來らば荷ひ堪へじと也

常人の、戀ふと言ふよりは、餘にて、我は死ぬべく、なりにたらずや。

可多於毛比遠。宇萬爾布都麻爾。於保世母天。故事部爾夜良波。比登加多波牟可母。

片思を、馬に太馬に、負せもて、越邊に遣らば、人かだはむかも。

越中守大伴宿禰家持報歌并所心三首

安萬射可流。比奈能都夜故爾。安米比度之。可久古非須良波。伊家流思留事安里。

天離る、鄙の都に、天人の、斯く戀すらば、生けるしるしあり。

都禰能孤悲。伊麻太夜麻奴爾。美夜古欲利。宇麻爾古非許婆。爾奈比安倍牟可母。

常の戀、未だ止まぬに、都より、馬に戀ひ來ば、擔ひ敢へむかも。

別所心一首

安可登吉爾。名能里奈久奈流。保登等藝須。伊夜米豆良之久。於毛保由流香母。

曉に、名告り鳴くなる、郭公、彌珍しく、思ほゆるかも。

佐具良—「具」は「倶」の誤か

得も名づけたり—略解に「淺くも名づけたり也、えならずのえと同じ」

しかすがに—さすがに、然しながら

一　答ニ屬レ目發レ思兼詠ニ云遷任スル舊宅西北隅ノ櫻樹ニ

和我勢故我。布流伎可吉都能。佐具良波奈。伊麻太敷布賣利。比等目見爾許禰。

我(わ)が背子(せこ)が、古(ふる)き垣内(かきつ)の、櫻花(さくらばな)、いまだ含(ふく)めり。一目(ひとめ)見(み)に來(こ)ね。

一　答ニ所心一即以ニ古人之跡一代ニ今日之意一

故敷等伊布波。衣毛名豆氣多理。伊布須敝能。多豆伎母奈吉波。安賀未奈里家利。

戀(こ)ふと言(い)ふは、得(え)も名(な)づけたり。言(い)ふ術(すべ)の、たづきも無(な)きは、我(あ)が身(み)なりけり。

一　更矚レ目

美之麻野爾。可須美多奈妣伎。之可須我爾。伎乃敷毛家布毛。由伎波敷里都追。

三島野(みしまぬ)に、霞棚引(かすみたなび)き、しかすがに、昨日(きのふ)も今日(けふ)も、雪(ゆき)は降(ふ)りつゝ。

三月十六日。

姑大伴氏坂上郎女來ニ贈越中守大伴宿禰家持一歌二首

都禰比等能。故布登伊敷欲利波。安麻里爾豆。和禮波之奴倍久。奈里爾多良受也。

我佐夫之毛―「我」の下に「波を」脱せるか

所心耳―「耳」一本「歌」に作る方宜し、「おもひをのぶるうた」也

大伴家持―大伴の下「宿禰」を脱す

同じき云々―古義に「末句は、同じ心なるを、里を隔てつといふ意なるべし、里と心とを姑くおき換へて心得べし」

都奇見禮婆。於奈自久爾奈里。夜麻許曾波。伎美我安多里乎。敝太弖多里家禮。
月見れば、同じ國なり。山こそは、君があたりを、隔てたりけれ。

一　屬レ物發レ思

櫻花。今曾盛等。雖人云。我佐夫之毛。伎美止之不在者。
櫻花、今ぞ盛りと、人は言へど、我はさぶしも、君としあらねば。

一　所心耳

安必意毛波受。安流良牟伎美乎。安夜思苦毛。奈氣伎和多流香。比登能等布麻泥。
相思はず、あるらむ君を、恠しくも、歎き渡るか。人の問ふまで。

越中國守大伴家持報贈歌四首

一　答古人云

安之比奇能。夜麻波奈久毛我。都奇見禮婆。於奈自伎佐刀乎。許己呂敝太底都。
足引の、山は無くもが。月見れば、同じき里を、心隔てつ。

君の—「の」は助辭
柳蘰き—柳を蘰にして
奴波多廝能—「波」一本「渡」に作る方宜し
よみつゝ—數へつゝ

清見一也。

之奈射可流。故之能吉美能等。可久之許曾。楊奈疑可豆良枳。多努之久安蘇婆米。

級離る、越の君のと、斯くしこそ、柳蘰き、樂しく遊ばめ。

奴波多廝能。欲和多流都奇乎。伊久欲布等。余美都追伊毛波。和禮麻都良牟曾。

ぬばたまの、夜渡る月を、幾夜經と、よみつゝ妹は、我待つらむぞ。

右此夕月光遲流。和風稍扇。卽因レ屬レ目聊作二此歌一也。

越前國掾大伴宿禰池主來贈歌三首

以二今月十四日一。到二來深見村一。望二拜彼北方一。常念二芳德一。何日能休。兼以二隣近一。忽增レ戀。加以先書云。暮春可レ惜。促レ膝未レ期。生別悲兮。夫復何言。臨レ紙悽斷。奉狀不備。

三月十五日大伴宿禰池主。

一　古人云

一夜のからに―一夜の程なるものを

誰に見せむと云々―只貫僧に見せんと思ひしものをと也

右一首。遊行女婦土師作之。

乎里安加之。許余比波能麻牟。保登等藝須　安氣牟安之多波。奈伎和多良牟曾。

居り明かし、今宵は飲まむ。郭公、明けむ朝は、鳴き渡らむぞ。

二日應立夏節。故謂之明旦將喧也。

右一首。守大伴宿禰家持作之。

安須余里波。都藝弖伎許要牟。保登等藝須。比登欲能可良爾。古非和多流加母。

明日よりは、繼ぎて聞えむ、郭公、一夜のからに、戀ひ渡るかも。

右一首。羽咋郡擬主帳能登臣乙美作。

詠庭中牛麥花一首

比登母等能。奈泥之故宇惠之。曾能許己呂。多禮爾見世牟等。於母比曾米家牟。

一本の、撫子植ゑし、其の心、誰に見せむと、思ひ初めけむ。

右先國師從僧清見可入京師。因設飲饌饗宴。于時主人大伴宿禰家持作此歌詞。送酒

大君は、常磐に座さむ。橘の、殿の橘、ひた照りにして。

右二首。大伴宿禰家持作之。

射水郡驛館之屋柱題著歌一首

安佐妣良伎。伊里江許具奈流。可治能於登乃。都波良都婆良爾。吾家之於母保由

朝開、入江漕ぐなる、檝の音の、つばら〳〵に、我家し思ほゆ。

右一首。山上臣作。不審名。或云。憶良大夫之男。但其正名未詳也。

四月一日掾久米朝臣廣繩之館宴歌四首

宇能花能。佐久都奇多知奴。保等登藝須。伎奈吉等與米余。敷布美多里登母。

卯の花の、咲く月立ちぬ。郭公、來鳴きとよめよ。含みたりとも。

右一首。守大伴宿禰家持作之。

敷多我美能。夜麻爾許母禮流。保等登藝須。伊麻母奈加奴香。伎美爾妓可勢牟。

二上の、山に籠れる、郭公、今も鳴かぬか。君に聞かせむ。

ひた照り—ひたすらに照ること、永久にかはり無くいつも照ること

つばら〳〵に—切にこまかにの意、本文「波」は「婆」の誤、上の三句は檝の音が「つばら〳〵」と聞ゆる由にて序とせる也

含みたりとも—卯の花はまだつぼみてありて開かずとも

妓可勢牟—「妓」一本「伎」

鳴かぬか—鳴けかし

酒に沈酔するをいふか、宣長の古事記傳には「槃水飽(サカミヅアク)」にて酒を飽くまで飲み樂(アソ)ぶよしにもやあらむ」

我が插せる—我がかざしにせる

赤ら橘—橘の實の赤く色づけるをいふ

澪引—船のしるべして行くこと、又水脈に從ひて漕ぎ行く事

道たづ〳〵し云々—五月闇なる故によく注意せよと也

常世物—枕詞

今も見る如—今見奉る如く末久しくましませと也

都奇麻知弖。伊敝爾波由可牟。知我佐世流。安加良多知婆奈。可氣爾見要都追。

月待ちて、家には行かむ。我が插せる、赤ら橘、影に見えつゝ。

右件歌者。在二於左大臣橘卿之宅一肆宴一御歌并奏歌也。

保里江欲里。水乎妣吉之都追。美布祢左須。之津乎能登母波。加波能瀬麻宇勢。

堀江より、澪引しつゝ、御船さす、賤男の伴は、川の瀬申せ。

奈都乃欲波。美知多豆多都之。布祢爾能里。可波乃瀬其等爾。佐乎左指能保禮。

夏の夜は、道たづ〳〵し。船に乗り、川の瀬毎に、棹さし上れ。

右件歌者。御船以二綱手一泝レ江遊宴之日作也。傳誦之人田邊史福麻呂是也。

後追二和橘歌一二首

等許余物能。己能多知婆奈能。伊夜氏里爾。和期大皇波。伊麻毛見流其登。

常世物、此の橘の、彌照りに、我ご大君は、今も見る如。

大皇波。等吉波爾麻佐牟。多知婆奈能。等能乃多知波奈。比多底里爾之氏。

登乎能—「登能之」の誤か

橘の云々—橘卿の殿の庭の橘なれば斯くよませ給へるなり

やつ代—彌代「つ」は助辭

下照る—(一)橘の實の色づきて庭にうつれば斯くよめり(二)赤く照ること

酒みづき—酒寧「みづき」は水漬にて沈む意なれば

多萬之賀受。伎美我久伊弖伊布。保理江爾波。多麻之伎美弖弖。都藝弖可欲波牟。

玉敷かず、君が悔いて言ふ、堀江には、玉敷き滿てて、繼ぎて通はむ。

或云。多麻古伎之伎弖。

右二首件歌者。御船泝レ江遊宴之日左大臣奏并御製。

御製歌一首

多知婆奈能。登乎能多知波奈。夜都代爾母。安禮波和須禮自。許乃多知婆奈乎。

橘の、殿の橘、やつ代にも、我は忘れじ。此の橘を。

河内女王歌一首

多知婆奈能。之多泥流爾波爾。等能多弖天。佐可彌豆伎伊麻須。和我於保伎美可母。

橘の、下照る庭に、殿建てて、酒みづき座す、我が大君かも。

粟田女王歌一首

右一首。久米朝臣廣繩。

保等登藝須。許欲奈枳和多禮。登毛之備乎。都久欲爾奈蘇倍。曾能可氣母見牟。

郭公、こよ鳴き渡れ。燈火を、月夜になぞへ、其の影も見む。

可敝流末能。美知由可牟日波。伊都波多野。佐加爾蘇泥布禮。和禮乎事於毛波婆。

歸る間の、道行かむ日は、五幡の、坂に袖振れ。我をし思はば。

右二首。大伴宿禰家持。

前件歌者二十六日作之。

太上皇御二在於難波宮一之時歌七首　清足姫天皇也

左大臣橘宿禰歌一首

保里江爾波。多麻之可麻之乎。大皇乎。美敷禰許我牟登。可年弖之里勢婆。

堀江には、玉敷かましを、大君の、御舟漕がむと、豫て知りせば。

御製歌一首　和

こよ―こゆ、こゝより
なぞへ―なぞらへて
歸る間―歸り道の程といふ意か、又「かへる」は越前國敦賀郡にある地名歸山か、「ま」は廻の意にて、古義は例により「み」と改む
太上皇―元正天皇
大皇乎―「乎」は「之」の誤か、又原のまゝ「おほきみを」と訓じ「を」は「の」に通ずともいへり

等余米婆—一説「米」は「末」の誤にて「とよまば」

十五首—八首の誤

しるし—甲斐

木の闇—三月の末にて若葉のしげれる也

珍しき、君が來まさば、鳴けと言ひし、山郭公、何か來鳴かぬ。

右一首。掾久米朝臣廣繩。

多胡乃佐伎。許能久禮之氣爾。保登等藝須。伎奈伎等余米婆。波太古非米夜母。

たこの崎、木の闇繁に、郭公、來鳴きとよめば、將戀ひめやも。

右一首。大伴宿禰家持。

前件十五首歌者二十五日作之。

掾久米朝臣廣繩之館饗二田邊史福麻呂一宴歌四首

保登等藝須。伊麻奈可受之弖。安須古要牟。夜麻爾奈久等母。之流思安良米夜母。

郭公、今鳴かずして、明日越えむ、山に鳴くとも、しるしあらめやも。

右一首。田邊史福麻呂。

許能久禮爾。奈里奴流母能乎。保等登藝須。奈爾加伎奈可奴。伎美爾安敝流等吉。

木の闇に、なりぬるものを、郭公、何か來鳴かぬ。君に逢へる時。

日婆―一本「日波」

檝間―檝とる間、しばらくの間

おろかにぞ―今迄はおろそかに

伎麻佐波―「波」一本「婆」

右一首。田邊史福麻呂。

多流比賣野。宇良乎許藝都追。介敷乃日婆。多奴之久安曾敝。移比都伎爾勢牟。

たるひめの、浦を漕ぎつゝ、今日の日は、樂しく遊べ。言繼にせむ。

右一首。遊行女婦土師。

多流比女能。宇良乎具不爾。可治末爾母。奈良野和藝敝乎。和須禮氏於毛倍也。

たるひめの、浦を漕ぐ船、檝間にも、奈良の我家を、忘れて思へや。

右一首。大伴家持。

於呂可爾曾。和禮波於母比之。乎不乃宇良能。安利蘇野米具利。見禮度安可須介利。

おろかにぞ、我は思ひし。をふの浦の、荒磯のめぐり、見れど飽かずけり。

右一首。田邊史福麻呂。

米豆良之伎。吉美我伎麻佐波。奈家等伊比之。夜麻保等登藝須。奈爾加伎奈可奴。

蓋し云々—若し郭公の來鳴かずして徒に藤の花の散らんかと惜む意

打行かば—馬に乘りて行かば

迎へも來ぬか—迎へに來れかし

我が思ふ云々—あれが我が思ふ君の御船かもの意

明日の日の、布勢の浦まの、藤波に、蓋し來鳴かず、散らしてむかも。

一頭云。保等登藝須。

右一首。大伴宿禰家持和レ之。

前件八首歌者二十四日宴作レ之。

二十五日往二布勢水海一道中馬上口號二首

波萬部余里。和我宇知由可波。宇美邊欲利。牟可倍母許奴可。安麻能都里夫禰。

濱邊より、我が打行かば、海邊より、迎へも來ぬか。海人の釣船。

於伎敝欲里。美知久流之保能。伊也麻之爾。安我毛布伎見我。彌不根可母加禮。

沖邊より、滿ち來る潮の、彌增しに、我が思ふ君が、御船かも彼。

至二水海一遊覽之時各述レ懷作歌

可牟佐夫流。多流比女能佐吉。許伎米具利。見禮登母安可受。伊加爾和禮世牟。

神さぶる、たるひめの崎、漕ぎ廻り、見れども飽かず、如何に我せむ。

玉櫛笥—「明けむ」の枕詞
何時しか明けむ—早く夜の明けよかし
上らじ—都へ上らじ
見てば—見たらば、本文「波」一本「婆」とある方宜し
安須能比能—一本「保等登藝須」とある方宜し

多麻久之氣。伊都之可安氣牟。布勢能宇美能。宇良乎由伎都追。多麻母比利波牟
玉櫛笥、何時しか明けむ。布勢の海の、浦を行きつゝ、玉藻拾はむ。
於等能未爾。伎吉底目爾見奴。布勢能宇良乎。見受波能保良自。等之波倍奴等母。
音のみに、聞きて目に見ぬ、布勢の浦を、見ずは上らじ。年は經ぬとも。
布勢能宇良乎。由吉底之見弖波。毛母之綺能。於保美夜比等爾。可多利都藝底牟。
布勢の浦を、行きてし見てば、百敷の、大宮人に、語り繼ぎてむ。
宇梅能波奈。佐伎知流曾能爾。和禮由可牟。伎美我都可比乎。可多麻知我底良。
梅の花、咲き散る園に、我行かむ。君が使を、片待ちがてら。
敷治奈美能。佐伎由久見禮婆。保等登藝須。奈久倍吉登伎爾。知可豆伎爾家里。
藤波の、咲き行く見れば、郭公、鳴くべき時に、近づきにけり。

右五首。田邊史福麻呂。

安須能比能。敷勢能宇良末能。布治奈美爾。氣太之伎奈可須。知良之底牟可母。

奈呉の海に、潮の早や干ば、あさりしに、出でむと田鶴は、今ぞ鳴くなる。

保等登藝須。伊等布登伎奈之。安夜賣具佐。加豆良爾勢武日。許由奈伎和多禮。

郭公、厭ふ時無し。菖蒲草、蘰にせむ日、こゆ鳴き渡れ。

右四首。田邊史福麻呂。

于レ時期之明日將レ遊二覽布勢水海一仍述レ懐各作歌

伊可爾世流。布勢能宇良曾毛。許己太久爾。吉民我彌世武等。和禮乎等登牟流。

如何にせる、布勢の浦ぞも。幾許は、君が見せむと、我を止むる。

右一首。田邊史福麻呂。

乎敷乃佐吉。許藝多母等保里。比爾毛須爾。美等母安久倍伎。宇良爾安良奈久爾。

をふの崎、漕ぎたもとほり、終日に、見とも飽くべき、浦にあらなくに。

一云。伎美我等波須母。

右一首。守大伴宿禰家持。

郭公云々―此歌巻十に出づ

期之―「之」は「云」の誤か

布勢―越中國射水郡

如何にせる―如何ばかりおもしろき、本文「世」一本「安」

をふの崎云々―右の歌の返し

見とも―見るとも

橘家—「家」目録「卿」
于守—一本「于」の下に「時」あり
新歌—一本上に「作」あり
幷使—「使」一本「便」

奈呉—越中國

浪…貝の—「間無き」の序

萬葉集巻第十八

天平二十年春三月二十三日左大臣橘家之使者造酒司令史田邊福麻呂饗二于守大伴宿禰家持館一。爰新歌幷使誦古詠。各述二心緒一

奈呉乃宇美爾。布禰之麻志可勢。於伎爾伊泥氏。奈美多知久夜等。見底可敝利許牟。

奈呉の海に、船暫し貸せ。沖に出でて、浪立ち來やと、見て返り來む。

奈美多底波。奈呉能宇良末爾。余流可比乃。末奈伎許悲爾曾。等之波倍爾家流。

浪立てば、奈呉の浦まに、寄る貝の、間無き戀にぞ、年は經にける。

奈呉能宇美爾。之保能波夜悲波。安佐里之爾。伊泥牟等多豆波。伊麻曾奈久奈流。

片待てば—片待つに、ひとへに待ちてあるに

中臣—古より祭祀のことを司りし家がら

誰が爲めに汝—誰が爲ぞ、皆汝が爲にこそあれと也

右件謌詞者。依二春出擧一。巡二行諸郡一當時所二屬目一作レ之。大伴宿禰家持。

怨二鸎晩哢一歌一首

宇具比須波。伊麻波奈可牟等。可多麻底波。可須美多奈妣吉。都奇波倍爾都追。

鶯は、今は鳴かむと、片待てば、霞棚引き、月は經につゝ。

造レ酒歌一首

奈加等美乃。敷刀能里等其等。伊比波良倍。安賀布伊能知毛。多我多米爾奈禮。

中臣の、大祝詞、言ひ祓へ、贖ふ命も、誰が爲めに汝。

大伴宿禰家持作レ之。

神備曾。
鳥總立て、船木伐るといふ、能登の島山、今日見れば、木立繁しも。幾代神びぞ。
香島欲里。久麻吉乎左之底。許具布禰能。可治等流間奈久。京師之於母保由。
香島より、熊來を指して、漕ぐ船の、檝取る間無く、都し思ほゆ。

鳳至郡度㆓饒石河㆒之時作歌一首

伊毛爾安波受。比左思久奈里奴。爾藝之河波。伎欲吉瀨其登爾。美奈宇良波倍底奈。
妹に逢はず、久しくなりぬ。饒石川、淸き瀨毎に、水占はへてな。

從㆓珠洲郡㆒發㆑船還㆓太沼郡㆒之時泊㆓長濱灣㆒仰㆓見月光㆒作歌一首

珠洲能宇美爾。安佐比良伎之底。許藝久禮婆。奈我波麻能宇良爾。都奇底里爾家里。
珠洲の海に、朝開して、漕ぎ來れば、長濱の浦に、月照りにけり。

鳥總立て―枕詞
神び―神さびの略
鳳至郡―能登國
水占はへてな―水占へてなの延言、水占は水にてなす占
珠洲郡―能登國
太沼郡―一說、沼郡は海鄕の誤にて太田鄕か、さらば羽咋郡にあり
朝開して―朝に船出して

緩ぶこと無く—たゆみなく
すがなく—よすがなくの略か、又は悅び樂まぬ貌か
於毛倍遊—「倍」は「保」の誤

失レ節。野獵乖レ候。摶レ風之翅。高翔匿レ雲。腐鼠之餌。呼留靡レ驗。於レ是張二設羅網一。窺二乎非常一。奉二幣神祇一。特二乎不虞一也。粤以夢裏有二娘子一。喩曰。使君勿下作二苦念一。空費二精神一。放逸彼鷹、獲得未レ幾矣哉。須臾覺寤。有レ悅二於懷一。因作二却恨之歌一。式旌二感信一。守大伴宿禰家持。九月二十六日作也

高市連黒人歌一首　年月未レ審

賣比能野能。須須吉於之奈倍。布流由伎爾。夜度加流家敷之。可奈之久於毛倍遊。

めひの野の、薄押しなべ、降る雪に、宿借る今日し、悲しく思ほゆ。

右傳二誦此詞一三國眞人五百國是也。

東風。越二俗語東風謂一レ之安由乃可是一也　伊多久布久良之。奈呉乃安麻能。都利須流乎夫禰。許藝可久流見由。

あゆの風、甚く吹くらし。奈呉の海人の、釣する小舟、漕ぎ隱る見ゆ。

美奈刀可世。佐牟久布久良之。奈呉乃江爾。都麻欲比可波之。多豆左波爾奈久。

鯯ーこのしろの一名か
飛びたもとはりー飛びまはり
今二日だみー「だみ」はばかりの意か、一說、本文「未」は「爾」の誤か、一本「米」に作る
來なむー鷹の歸り來らんと也
いまにー「いめ(夢)に」の誤
獵らぬ日まねくー鷹の歸り來ぬ故獵らざる日の多くして月を經たりの意
待つがへり云々ー待つは却つて強事なるか、山田の翁が逃げられし日に求むれども鷹にはあはざりけんといふ意か、古義には、夢の告は強言ならじ、されば逃したる其日に心を盡して求めば得べかりけんを、如何で心を盡さざりけん恨めしき事やの意とせり

し、鯯とる、ひみの江過ぎて、たこの島、飛びたもとほり、葦鴨の、すだくふる江に、一昨日も、昨日も在りつ、近くあらば、今二日だみ、遠くあらば、七日の內は、過ぎめやも、來なむ我が背子、懇に、な戀ひそよとぞ、いまに告げつる。

矢形尾能。多加乎手爾須惠。美之麻野爾。可良奴日麻禰久。都奇曾倍爾家流。
屋形尾の、鷹を手に据ゑ、三島野に、獵らぬ日まねく、月ぞ經にける。

二上能。乎底母許能母爾。安美佐之底。安我麻都多可乎。伊米爾都氣追母。
二上の、をても此の面に、網さして、我が待つ鷹を、夢に告げつも。

麻追我幹里。之比爾底安禮可母。佐夜麻太乃。乎治我其日爾。母等米安波受家牟。
待つがへり、強ひにてあれかも。さ山田の、翁が其の日に、求め逢はずけむ。

情爾波。由流布許等奈久。須加能夜麻。須可奈久能未也。孤悲和多利奈牟。
心には緩ぶこと無く、すかの山、すがなくのみや、戀ひ渡りなむ。

右射水郡古江村取二獲蒼鷹一。形容美麗。鷙レ雉秀レ群也。於レ時養吏山田史君麻呂。調試

やかた尾—(一)「やかた」は屋形にて尾に屋の棟の如くへの字なりの斑ある鷹をいふか(二)鷹の尾の數十三あるもの
追ふ毎に—鷹を放つ毎にの意
をち—放ちたる鷹のかへり來ること
たぶれたる—氣のちがひたる
醜つ翁—左註によるに鷹飼の山田史君麻呂といふものをさす
名のみを告りて—下に狩に出でたる由を略す
しはぶれ告ぐれ—下に「ば」と補ふ、老人のしはぶきながら告ぐるさま
けだしくも—若も
をても—彼の面
倭文—倭文幣の略
ほつ鷹—すぐれてよき鷹

は、行く川の、清き瀬毎に、篝さし、なづさひ上る。露霜の、秋に至れば、野もさはに、鳥すだけりと、丈夫の、伴誘ひて、鷹はしも、數多あれども、やかた尾の、我が大黑に、白塗の、鈴取り附けて、朝狩に、五百つ鳥立て、夕狩に、千鳥蹈み立て、追ふ毎に、免すこと無く、手放れも、をちもか易き、是をおきて、又は在り難し、さ竝べる、鷹は無けむと、心には、思ひ誇りて、笑まひつゝ、渡る間に、たぶれたる、醜つ翁の、言だにも、我には告げず、殿曇り、雨の降る日を、鳥狩すと、名のみを告りて、三島野を、そがひに見つゝ、二上の、山飛び越えて、雲隱り、翔り去にきと、歸り來て、しはぶれ告ぐれ、招く由の、そこに無ければ、言ふ術の、たどきを知らに、心には、火さへ燃えつゝ、思ひ戀ひ、息衝き餘り、けだしくも、逢ふことありやと、足引の、をても此の面に、鳥網張り、守部を据ゑて、千早振る、神の社に、照る鏡、倭文に取り添へ、請祈みて、我が待つ時に、少女らが、夢に告ぐらく、汝が戀ふる、其のほつ鷹は、まつだ江の、濱行き暮ら

伊麻―「麻」は「米」の誤にて夢也

遠の朝廷ぞ―「遠つ朝廷と」の誤なるべし

島つ鳥―枕詞

島野乎。曾我比爾見都追。二上。山登妣古要底。久母我久理。可氣理伊爾伎等。可幹理伎底。之波夫禮都具禮。呼久餘思乃。曾許爾奈家禮婆。伊敷須弊能。多騰伎乎之良爾。心爾波。火佐倍毛要都追。於母比孤悲。伊伎豆吉安麻利。氣太之久毛。安布許等安里也等。安之比奇能。乎底母許乃毛爾。等奈美波里。母利弊乎須惠底。知波夜夫流。神社爾。底流鏡。之都爾等里蘇倍。己比能美底。安我麻都等吉爾。乎登賣良我。伊米爾都具良久。奈我古敷流。曾能保追多加波。麻都太要乃。波麻由伎具良之。都奈之等流。比美乃江過底。多古能之麻。等比多毛登保里。安之我母能。須太久舊江爾。乎等都日毛。伎能敷母安里追。知加久安良波。伊麻布都可太未。等保久安良婆。奈奴可乃宇知波。須疑米也母。伎奈牟和我勢故。禰毛許呂爾。奈孤悲曾余等曾。伊麻爾都氣都流。

大君の、遠の朝廷ぞ、み雪降る、越と名に負へる、天離る、鄙にしあれば、山高み、河遠白し。野を廣み、草こそ茂き。鮎走る、夏の盛りと、島つ鳥、鵜飼が伴

美何度曾——一說「曾」は「等」の誤

右大伴宿禰池主報贈和歌。五月二日

思二放逸鷹一夢見感悅作歌一首幷短歌

大王乃。等保能美可度曾。美雪落。越登名爾於弊流。安麻射可流。比奈爾之安禮婆。山高美。河登保之呂思。野乎比呂美。久佐許曾之既吉。安由波之流。奈都能左加利等。之麻都等里。鵜養我登母波。由久加波乃。伎欲吉瀨其登爾。可賀里左之。奈豆左比能保流。露霜乃。安伎爾伊多禮波。野毛佐波爾。等里須太家里等。麻須良乎能。登母伊射奈比底。多加波之母。安麻多安禮等母。矢形尾乃。安我大黑爾。大黑者蒼鷹之名也 之良奴里能。鈴登里都氣底。朝獵爾。伊保都登里多底。暮獵爾。知登理布美多底。於敷其等爾。由流須許等奈久。手放毛。乎知母可夜須伎。許禮乎於伎底。麻多波安里我多之。左奈良弊流。多可波奈家牟等。情爾波。於毛比保許里底。惠麻比都追。和多流安比太爾。多夫禮多流。之許都於吉奈乃。許等太爾母吾爾波都氣受。等乃具母利。安米能布流日乎。等我理須等。名乃未乎能里底。三

思遣る—物思を遣る
若草の—枕詞
村鳥の—枕詞
朝霧の云々—朝霧はむちむちと亂れ流るゝさまなれば「亂る」といはん料にいへり
君がたゞかを—末句につゞく、たゞかの人の上の實事を此方にて聞く事即ち消息などいふ意に用ひられたるが本義なれど、宣長が「多太加とは君また妹を直にさしあてゝいへる言にて、君妹とのみいふも同じことに聞ゆるなり」といへるぞ此所にはよく適ふべきか
在りたもとほり—在々て年月廻り來らば
相見しめとぞ—相見しめ給へとぞ祈る
うら戀し—心戀しき

毛可波佐受。奈泥之故我。波奈乃佐可里爾。阿比見之米等會。

青丹吉、奈良を來離れ、天離る、鄙にはあれど、我が背子を、見つゝし居れば、思遣る、事もありしを、大君の、命畏み、食す國の、こと執り持ちて、若草の、脚結手作り、村鳥の、朝立ち去なば、後れたる、我や悲しき、旅に行く、君かも戀ひむ。思ふ空、安くあらねば、歎かくを、止めも兼ねて、見渡せば、卯の花山の、郭公、音のみし泣かゆ。朝霧の、亂るゝ心、言に出でて、言はゞゆゝしみ、礪波山、手向の神に、幣奉り、我が請祈まく、はしけやし、君がたゞかを、眞幸くも、在りたもとほり、月立たば、時もかはさず、撫子が、花の盛りに、相見しめとぞ。

多麻保許能。美知能可未多知。麻比波勢牟。安賀於毛布伎美乎。奈都可之美勢余。

玉桙の、道の神たち、幣はせむ。我が思ふ君を、懐しみせよ。

宇良故非之。和賀勢能伎美波。奈泥之故我。波奈爾毛我母奈。安佐奈佐奈見牟。

うら戀し、我が背の君は、撫子が、花にもがもな。朝なさな見む。

我が背子は、玉にもがもな。郭公、聲に合へ貫き、手に纏きて行かむ。

右大伴宿禰家持。贈二掾大伴宿禰池主一。四月三十日

忽見三入レ京述レ懷之作一生別悲兮斷腸萬回怨緒難レ禁聊奉二所心一一首

并二絶

安遠禰與之。奈良乎伎波奈禮。阿麻射可流。比奈爾波安禮登。和賀勢故乎。見都追志乎禮婆。於毛比夜流。許等母安利之乎。於保伎美乃。美許等可之古美。乎須久禰能。許等登里毛知底。和可久佐能。安由比多豆久利。無良等理能。安佐太知伊奈婆。於久禮多流。阿禮也可奈之伎。多妣禰由久。伎美可母孤悲無。於毛布蘇良。夜須久安良禰婆。奈氣可久乎。等騰米毛可禰底。見和多勢婆。宇能波奈夜麻乃。保等登藝須。禰能米之奈可由。安佐疑理能。美太流流許己呂。許登禰伊泥底。伊波婆由遊思美。刀奈美夜麻。多牟氣能可味禰。奴佐麻都里。安我許比能麻久。波之家夜之。吉美賀多太可乎。麻佐吉久毛。安里多母等保利。都奇多多婆。等伎

掻數ふ—枕詞

我が背の君—池主を指す

あゆの風—東風、北國にていふ

御言持ち—朝廷の仰せを承りて

後れたる君は云々—君を後にのこし置きて別るゝ悲はあれどもの意、君は池主をさす

けの長けむぞ—月日の間の長からんぞ

合へ貫く—合はせ貫くの約言、郭公の鳴くころ橘も實ればいふ

登藝須。許惠爾安倍奴久。多麻爾母我。手爾麻吉毛知底。安佐欲比爾。見都追由可牟乎。於伎底伊加婆乎思。

掻數ふ、二上山に、神さびて、立てる樛の木、本も枝も、同じ常磐に、はしきよし、我が背の君を、朝さらず、遇ひて言問ひ、夕されば、手携はりて、射水川、清き河内に、出で立ちて、我が立ち見れば、あゆの風、いたくし吹けば、湊には、白浪高み、妻呼ぶと、洲鳥は騷ぐ。葦刈ると、海人の小舟は、入江漕ぐ、楫の音高し。そこをしも、あやにともしみ、偲びつゝ、遊ぶ盛りを、天皇の、食國なれば、御言持ち、立ち別れなば、後れたる、君はあれども、玉桙の、道行く我は、白雲の、棚引く山を、岩根踏み、越え隔りなば、戀しけく、けの長けむぞ。そこ思へば、心しいたし。郭公、聲に合へ貫く、玉にもが。手に纏き持ちて、朝宵に、見つゝ行かむを、置きて行かば惜し。

和我勢故婆。多麻爾母我毛奈。保等登伎須。許惠爾安倍奴伎。手爾麻伎底由加牟。

落ち激つ、かたかひ川の、絶えぬ如、今見る人も、止まず通はむ。

右掾大伴宿禰池主和之。四月二十八日

入レ京漸近悲情難レ撥述レ懷一首并一絶

可伎加蘇布。敷多我美夜麻爾。可牟佐備底。多底流都我能奇。毛等母延毛。於夜自得伎波爾。波之伎與之、和我世乃伎美乎。安佐左良受。安比底許登騰比。由布佐禮婆。手多豆佐波利底。伊美豆河波。吉欲伎可布知爾。伊泥多知底。和我多知彌禮婆。安由能加是。伊多久之布氣婆。美奈刀爾波。之良奈美多可彌。都麻欲夫等。須騰理波佐和久。安之可流等。安麻乃乎夫禰波。伊里延許具。加遲能於等多可之。會己乎之毛。安夜爾登母志美。之怒比都追。安蘇夫佐香理乎。須賣呂伎能。乎須久爾奈禮婆。美許登母知。多知和可禮奈婆。於久禮多流。吉民波安禮騰母。多麻保許乃。美知由久和禮播。之良久毛能。多奈妣久夜麻乎。伊波禰布美。古要弊奈利奈婆。孤悲之家久。氣乃奈我氣牟會。則許母倍婆。許己呂志伊多思。保等

朝日射し―常に見ゆる所より朝日の射すに向ひて見ゆる方、又枕詞なるべしともいふ
そがひに見ゆる―國府より後方に見ゆる
御名に負はせる―立つといふ語を名に持ちたる
天ぞそり―「そゝり」は進む意にて、天に進み上るが如く見ゆるをいふ
谷を深みと―谷が深さに
河内―川の廻れる處
朝さらず―朝毎に
渡る―年月を在り渡る也

多利。由布佐禮婆。久毛爲多奈毗吉。久毛爲奈須。己許呂毛之努爾。多都奇理能。於毛比須具佐受。由久美豆乃。於等母佐夜氣久。與呂豆余爾。伊比都藝由可牟。加波之多要受波。

朝日射し、そがひに見ゆる、神ながら、御名に負はせる、白雲の、千重を押別け、天ぞそり、高き立山、冬夏と、分くことも無く、白妙に、雪は降り置きて、古ゆ、在り來にければ、こごしかも、岩の神さび、たまきはる、幾代經にけむ、立ちて居て、見れどもあやし、峯高み、谷を深みと、落ち激ぎつ、清き河内に、朝さらず、霧立ち渡り、夕されば、雲居棚引き、雲居なす、心もしぬに、立つ霧の、思ひ過さず、行く水の、音もさやけく、萬代に、言ひ繼ぎ行かむ、川し絕えずは。

多知夜麻爾。布里於家流由伎能。等許奈都爾。氣受底和多流波。可無奈我良等曾。

立山に、降り置ける雪の、常夏に、消ずて渡るは、神ながらとぞ。

於知多藝都。可多加比我波能。多延奴期等。伊麻見流比等母。夜麻受可欲波牟。

るゝ也
立つ霧の云々―朝夕立つ霧の絶えぬが如くこの山川のおもしろさは思ひ過し見過し難しといふ意
ともしぶるがね―羨しがらしめんために
神がらならし―一説「柰」の字を脱したるにて「かむながらならし」と訓ずべしといふ
行く水の―水の絶えざる如く

だ見ぬ、人にも告げむ。音のみも、名のみも聞きて、ともしぶるがね。
多知夜麻爾。布里於家流由伎乎。登己奈都爾。見禮等母安可受。加武賀良奈良之。
立山に、降り置ける雪を、常夏に、見れども飽かず。神がらならし。
可多加比能。可波能瀬伎欲久。由久美豆能。多由流許登奈久。安里我欲比見牟。
かたかひの、川の瀬清く、行く水の、絶ゆること無く、在り通ひ見む。

四月二十七日大伴宿禰家持作之。

敬和㆓立山賦㆒一首并二絶

阿佐比左之。曾我比爾見由流。可無奈我良。彌奈爾於婆勢流。之良久母能。知邊乎於之和氣。安麻曾曾理。多可吉多知夜麻。布由奈都登。和久許等母奈久。之路多倍爾。遊吉波布里於吉底。伊爾之邊遊。阿理吉仁家禮婆。許其志可毛。伊波能可牟佐備。多末伎波流。伊久代經爾家牟。多知底爲底。見禮登毛安夜之。彌禰太可美。多爾乎布可美等。於知多藝都。吉欲伎可敷知爾。安佐左良受。綺利多知和

戀ふる日多けむ—別れて後に也

名かゝす—(一)名を輝す(二)「かゝす」は懸かす、こは立山なれば立つといふことを名にかけて高く立てる由をいふ
越の中—越の道の中の意、越中國をいふ
うしはき—領座し
常夏に—とこしなへにの意
帶ばせる—帶とせる、かたかひ川が此山の麓を流

都邊に、立つ日近く。飽くまでに、相見て行かな。戀ふる日多けむ。

立山賦一首并短歌　此山者有新河郡也

安麻射可流。比奈爾名可加須。古思能奈可。久奴知許登其等。夜麻波之母。之自爾安禮登毛。加波波之母。左波爾由氣等毛。須賣加未能。宇之波伎伊麻須。爾比可波能。曾能多知夜麻爾。等許奈都爾。由伎布理之伎底。於婆勢流。可多加比河波能。伎欲吉瀬爾。安佐欲比其等爾。多都奇利能。於毛比須疑米夜。安里我欲比。伊夜登之能播仁。余增能未母。布利佐氣見都都。余呂豆餘能。可多良比具佐等。伊末太見奴。比等爾母都氣牟。於登能未毛。名能未母伎吉底。登母之夫流我禰。

天離る、鄙に名かゝす、越の中、國內盡、山はしも、しゞにおれども、川はしも、さはに行けども、皇神の、うしはき坐す、新川の、その立山に、常夏に、雪降り敷きて、帶ばせる、かたかひ川の、清き瀬に、朝宵毎に、立つ霧の、思ひ過ぎめや。在り通ひ、彌年のはに、外のみも、振りさけ見つゝ、萬代の、語ひ草と、未

國―本國の奈良をさす
ましなば―いにましなば
さぶしけむ―心樂しまざらん
玉―藥玉
貫かさね―玉を貫きて心を慰め給へ
我が宿の云々―略解に「これは古歌ながら右の歌に叶ひたれば此時誦したるならん」

和我勢古我。久爾弊麻之奈婆。保等登藝須。奈可牟佐都奇波。佐夫之家牟可母。
我が背子が、國へましなば、郭公、鳴かむ五月は、さぶしけむかも。

右一首。介内藏忌寸繩麻呂作之。

安禮奈之等。奈和備和我勢故。保登等藝須。奈可牟佐都奇波。多麻乎奴香佐禰。
我無しと、な侘び我が背子、郭公、鳴かむ五月は、玉を貫かさね。

右一首。守大伴宿禰家持和。

石川朝臣水通橘歌一首

和我夜度能。花橘乎。波奈其米爾。多麻爾曾安我奴久。麻多婆苦流之美。
我が宿の、花橘を、花ごめに、玉にぞ我が貫く。待たば苦しみ。

右一首。傳誦主人大伴宿禰池主云爾。

守大伴宿禰家持館飲宴歌一首 四月二十六日

美夜故弊爾。多都日知可豆久。安久麻底爾。安比見而由可奈。故布流比於保家牟。

君がまにまと—君が行くにまかせて共に遊ばんの意、本文「等」一本「爾」
見も明らめゝ—眺めん
絶ゆる日あらめや—春秋に絶えずともなひ遊ばんの意

世の間—生涯

さまねみ—多き故に

ちても居ても、漕ぎ廻り、見れども飽かず。秋さらば、黄葉の時に。春さらば、花の盛りに、かもかくも、君がまにまと、斯くしこそ、見も明らめゝ。絶ゆる日あらめや。

之良奈美能。與世久流多麻毛。余能安比太母。都藝底民仁許武。吉欲伎波麻備乎。

白波の、寄せ來る玉藻、世の間も、續ぎて見に來む。淸き濱邊を。

右掾大伴宿禰池主作。四月二十六日追和

四月二十六日掾大伴宿禰池主之館餞㆓税帳使守大伴宿禰家持㆒宴謌幷古歌四首

多麻保許乃。美知爾伊泥多知。和可禮奈婆。見奴日佐麻禰美。孤悲思家武可母。

玉桙の、道に出で立ち、別れなば、見ぬ日さまねみ、戀しけむかも。

一云。不見日久彌。戀之家牟加母。

右一首。大伴宿禰家持作之。

ともしきに―めづらしき故に
うらぐはし―面白し
眞楫櫂貫き―古へ楫といふは今の櫓、櫂は櫓に似て平きもの
袖振り返し―楫取等が漕ぐ時に袖の飜るをいふ
あともひて―率ゐて
花散り紛ひ―花は卯の花か
小波―「立つ」の序

之路多倍能。蘇泥布理可邊之。阿登毛比底。和賀己藝山氣婆。乎布能佐伎。波奈知利麻我比。奈伎佐爾波。阿之賀毛佐和伎。佐射禮奈美。多知底毛爲底母。己藝米具利。美禮登母安可受。安伎佐良婆。毛美知能等伎爾。波流佐良婆。波奈能佐可利爾。可毛加久母。伎美我麻爾麻等。可久之許曾。美母安吉良米米。多由流比安良米也。

藤波は、咲きて散りにき、卯の花は、今ぞ盛りと、足引の、山にも野にも、郭公、鳴きしとよめば、打靡く、心もしぬに、其處をしも、うら戀しみと、思ふどち、馬打群れて、携はり、出で立ち見れば、射水川、港の洲鳥、朝凪に、潟にあさりし、潮滿てば、妻呼び交はす。ともしきに、見つゝ過ぎ行き、しぶたにの、荒磯の崎に、沖つ波、寄せ來る玉藻、片寄りに、蘰に造り、妹が爲め、手に纒き持ちて、うらぐはし、布勢の湖に、海人舟に、眞楫櫂貫き、白妙の、袖振り返し、あともひて、我が漕ぎ行けば、をふの崎、花散り紛ひ、渚には、葦鴨騷ぎ、小波、立

今も見るごと—只今も見る如く

年のはに—年毎に

一絕—長歌を賦と書けるより短歌を絕と書けるなり

きは別れず、在り通ひ、彌年のはに、思ふどち、斯くし遊ばむ。今も見るごと。

布勢能宇美能。意枳都之良奈美。安利我欲比。伊夜登偲能波爾。見都追思努播牟。

布勢の海の、沖つ白浪、在り通ひ、彌年のはに、見つゝ偲ばむ。

右守大伴宿禰家持作レ之。四月二十四日

敬和下遊二覽布勢水海一賦上一首幷一絕

布治奈美波。佐岐底知里爾伎。宇能波奈波。伊麻曾佐可理等。安之比奇能。夜麻爾毛野爾毛。保登等藝須。奈伎之等與米婆。宇知奈妣久。許己呂毛之努爾。曾己乎之母。宇良胡非之美等。於毛布度知。宇麻宇知牟禮底。多豆佐波理。伊泥多知美禮婆。伊美豆河泊。美奈刀能須登利。安佐奈藝爾。可多爾安佐里之。思保美底婆。都麻欲比可波須。等母之伎爾。美都追須疑由伎。之夫多爾能。安里蘇乃佐伎爾。於枳追奈美。余勢久流多麻母。可多與理爾。可都良爾都久理。伊毛我多米。底爾麻吉母知底。宇良具波之。布勢之美豆宇彌爾。阿麻夫禰爾。麻可治加伊奴吉。

之麻末—古義、例の「之麻末」（シマミ）

うちくちぶり—（一）「うちく」は打來にて「ちぶり」は越中越後の境なる市振といふ地名か（二）遠近振にて、波の彼方此方に觸るをいふ「馬並めて」は下の「たもとほり」にかゝる序

そこも飽かに—それも飽かざるに

見のさやけきか—見るがさやけきかな

夫利乃。之良奈美能。安里蘇爾與須流。之夫多爾能。佐吉多毋登保理。麻都太要能。奈我波麻須義底。宇奈比河波。伎欲吉勢其等爾。宇加波多知。可由吉加久遊岐。見都禮騰母。曾許母安加爾等。布勢能宇彌爾。布禰宇氣須惠底。於伎弊許藝。邊爾己伎見禮婆。奈藝左爾波。安遲牟良佐和伎。之麻末爾波。許奴禮波奈左吉。許己婆久毛。見乃佐夜氣吉加。多麻久之氣。布多我彌夜麻爾。波布都多能。由伎波和可禮受。安里我欲比。伊夜登之能波爾。於毋布度知。可久思安蘇婆牟。異麻母見流其等。

武士の、八十伴の緒の、思ふどち、心遣らむと、馬並めて、うちくちぶりの、白浪の、荒磯に寄する、しぶたにの、崎たもとほり、まつだえの、長濱過ぎて、宇納川、清き瀬毎に、鵜川立ち、か行きかく行き、見つれども、そこも飽かにと、布勢の海に、舟浮け据ゑて、沖邊漕ぎ、邊に漕ぎ見れば、渚には、味群騒ぎ、島まには、木ぬれ花咲き、許多も、見のさやけきか。玉櫛笥、二上山に、這ふ蔦の、行

四月十六日夜裏遙聞二霍公鳥喧一述レ懐歌一首

奴婆多麻能。都奇爾牟加比底。保登等藝須。奈久於登波流氣之。佐刀騰保美可聞。

ぬば玉の、月に向ひて、郭公、鳴く音遙けし。里遠みかも。

右大伴宿禰家持作之。

大目秦忌寸八千嶋之館餞二守大伴宿禰家持一宴歌二首

奈呉能宇美能。意吉都之良奈美。志苦思苦爾。於毛保要武可母。多知和可禮奈波。

奈呉の海の、沖つ白浪、しくしくに、思ほえむかも。立別れなば。

我加勢故波。多麻爾母我毛奈。手爾麻伎底。見都追由可牟乎。於吉底伊加婆乎思。

我が背子は、玉にもがもな、手に巻きて、見つゝ行かむを。置きて行かば惜し。

右守大伴宿禰家持以二正税帳一須レ入二京師一。仍作二此歌一聊陳二相別之歎一。 四月二十日

遊二覧布勢水海一賦一首幷短歌 此海者有二射水郡舊江村一也

物能乃敷能。夜蘇等母乃乎能。於毛布度知。許己呂也良武等。宇麻奈米底。宇知久知

奈呉の海―越中國

しくしくに―頻々に君が戀しく

我加―「和我」の誤か

有射水云々―「有」は「在」の誤

そこばーそこばくにて、多き意

皇神のすそみの山ー(一)反歌を見るに神代に神の此の山を愛せし故事などあるか「すそみ」は進みにて愛づる意か(二)皇神は二上山を神として指し、「すそみ」はその麓をいふか

をつゝー「うつゝ」に同じ、現在

鳴く鳥ー郭公を指すか

久流之保能。伊夜麻之爾。多由流許登奈久。伊爾之弊由。伊麻乃乎都豆爾。可久之許曾。見流比登其等爾。加氣底之努波米。

射水川、い行き廻れる、玉櫛笥、二上山は、春花の、咲ける盛に、秋の葉の、匂へる時に、出立ちて、振りさけ見れば、神がらや、そこば貴き、山がらや、見が欲しからむ、皇神の、すそみの山の、しぶたにの、崎の荒磯に、朝凪に、寄する白浪、夕凪に、滿ち來る潮の、彌增しに、絶ゆること無く、古ゆ、今のをつゝに、斯くしこそ、見る人每に、懸けて偲ばめ。

之夫多爾能。佐伎能安里蘇爾。與須流奈美。伊夜思久思久爾。伊爾之弊於毛保由。

しぶたにの、崎の荒磯に、寄する浪、いやしく〳〵に、古思ほゆ。

多麻久之氣。敷多我美也麻爾。鳴鳥能。許惠乃孤悲思吉。登岐波伎爾家里。

玉櫛笥、二上山に、鳴く鳥の、聲の戀しき、時は來にけり。

右三月三十日依レ興作レ之。大伴宿禰家持。

立夏四月既經二累日一而由未レ聞二霍公鳥喧一因作恨歌二首

安思比奇能。夜麻毛知可吉乎。保登等藝須。都奇多都麻泥爾。奈仁加吉奈可奴。

足引の、山も近きを、郭公、月立つまでに、何か來鳴かぬ。

多麻爾奴久。波奈多知婆奈乎。等毛之美思。己能和我佐刀爾。伎奈可受安流良之。

玉に貫く、花橘を、乏しみし、此の我が里に、來鳴かずあるらし。

霍公鳥者立夏之日來鳴必定。又越中風土希レ有二橙橘一也。因レ此大伴宿禰家持感二發於懷一。聊裁二此歌一。　三月二十九日

二上山賦一首　此山者有二射水郡一也

伊美都河泊。伊由伎米具禮流。多麻久之氣。布多我美山者。波流波奈乃。佐氣流左加利爾。安吉乃葉乃。爾保弊流等伎爾。出立底。布里佐氣見禮婆。可牟加良夜。曾許婆多敷刀伎。夜麻可良夜。見我保之加良武。須賣加未能。須蘇未乃夜麻能。之夫多爾能。佐吉乃安里蘇爾。阿佐奈藝爾。餘須流之良奈美。由敷奈藝爾。美知

月立つまでに—題にいへる如く、四月の節に入りて日を累ぬる迄也

乏しみし—乏しさに

二上山賦一首—賦は長歌の意、下に「幷短歌」とあるべし

乘り立ち—船に也
なすらむ—「なす」は寢るの古語、我を待ちて獨り寢るらんの意
しぬに—萎やぎて
戀息まずけり—戀息まざりけり
移ろふ—散る
よみつゝ—數へつゝ

りさけ見つゝ、近江路に、い行き乘り立ち、青丹吉、奈良の我家に、鵼鳥の、うらなげしつゝ、下戀に、思ひうらぶれ、門に立ち、夕占問ひつゝ、我を待つと、なすらむ妹を、逢ひて早や見む。

安良多麻乃。登之可弊流麻泥。安比見禰婆。許己呂母之努爾。於母保由流香聞。
新玉の、年返るまで、相見ねば、心もしぬに、思ほゆるかも。

奴婆多麻乃。伊米爾波母等奈。安比見禮騰。多太爾安良禰婆。孤悲夜麻受家里。
ぬば玉の、夢にはもとな、相見れど、直にあらねば、戀息まずけり。

安之比奇能。夜麻伎弊奈里底。等保家騰母。許己呂之遊氣婆。伊米爾美要家里。
足引の、山來隔りて、遠けども、心し行けば、夢に見えけり。

春花能。宇都路布麻泥爾。相見禰婆。月日餘美都追。伊母麻都良牟曾。
春花の、移ろふまでに、相見ねば、月日よみつゝ、妹待つらむぞ。

右三月二十日夜裏忽兮起二戀情一作。大伴宿禰家持。

心ぐし云々—心苦しく思ふことも無く見苦しと思ふこともなし又、心にも目にもなつかしく思ふ意
奥妻—深く思ふ妻
其の日の極み—別れし日を限りにの意
直にあらねば—直接に逢ふにあらねば
歸りにだにも—一寸立ち歸りにだにも
道はし—(一)「し」は助辭(二)「はし」は間の意か
隔りてあれこそ—隔りてあればこそ得行かねの意
由はあらむぞ—逢見る由あらん也

公鳥。來鳴牟都奇爾。伊都之加母。波夜久奈里那牟。宇乃花乃。爾保弊流山乎。余曾能未母。布里佐氣見都追。淡海路爾。伊由伎能里多知。青丹吉。奈良乃吾家爾。奴要鳥能。宇良奈氣之都追。思多戀爾。於毛比宇良夫禮。可度爾多知。由布氣刀比都追。吾乎麻都等。奈須良牟妹乎。安比底早見牟。

妹も我も、心は同じ、たぐへれど、彌懷しく、相見れば、常初花に、心ぐし、目ぐしも無しに、はしけやし、我が奥妻、大君の、命畏こみ、足引の、山越え野行き、天離る、鄙治めにと、別れ來し、其の日の極み、新玉の、年往き返り、春花の、移ろふまでに、相見ねば、いたも術なみ、敷妙の、袖返しつゝ、寝る夜落ちず、夢には見れど、現にし、直にあらねば、戀しけく、千重に積りぬ。近からば、歸りにだにも、打行きて、妹が手枕、差交へて、寢ても來ましを、玉桙の、道はし遠く、關さへに、隔りてあれこそ。よしゑやし、由はあらむぞ、郭公、來鳴かむ月に、何時しかも、早くなりなむ、卯の花の、匂へる山を、外のみも、振

戀ひけれこそは—戀ひければこそ

安之可伎能。保加爾母伎美我。余里多多志。孤悲家禮許曾婆。伊米爾見要家禮。

葦垣(あしがき)の、外(ほか)にも君(きみ)が、寄(よ)り立(た)たし、戀(こ)ひけれこそは、夢(いめ)に見(み)えけれ。

三月五日大伴宿禰家持臥レ病作之。

述二戀緒一歌一首并短歌

妹毛吾毛。許己呂波於夜自。多具弊禮登。伊夜奈都可之久。相見婆。登許波都波奈爾。情具之。眼具之毛奈之爾。波思家夜之。安我於久豆麻。大王能。美許登加之古美。阿之比奇能。夜麻古要奴由伎。安麻射可流。比奈乎左米爾等。別來之。伊會乃日乃伎波美。荒璞能。登之由吉我弊利。春花乃。宇都呂布麻爾。相見禰婆。伊多母須弊奈美。之伎多倍能。蘇泥可弊之都追。宿夜於知受。伊米爾波見禮登。宇都追爾之。多太爾安良禰婆。孤悲之家口。知弊爾都母里奴。近在者。加弊利爾太仁母。宇知由吉底。妹我多麻久良。佐之加倍底。禰天蒙許萬思乎。多麻保己乃。路波之騰保久。關左閇爾。弊奈里底安禮許曾。與思惠夜之。餘志播安良武會。霍

昨暮云々—此前に古義「守大伴宿禰家持更報詩幷短歌」と題を補ふ
纍レ信—度重るたより
靡レ瑩—心の暗きこと
腐レ毫—才短くて文の作り難きをいふ
因レ流—因循などの誤か
聞二鄙里少兒一—たゞ或人に聞くの意
擬二解咲一—解咲は「解レ人頤」といふ語にとる、御覽にいれる意
唱聲遊—下に脫字あるべし「遊」一本「樞」
曲歟—下に脫字あるべし
譬濫謟—「謟」一本「謡」
杪春—暮春
餘日—遲日の意か
賀宇入—「宇入」は「入宇」の誤か、淮南子の語
歸鴻云々—淮南子「雁銜レ蘆而翔云々」
赴瀛—雁の北の海指して行くこと
嘯侶—誤字か
新流曲—「新」は「親」の誤
良此宴—「此良宴」の誤か
染懊—いたく病めることと
跉玎—字書に「行不正皃」と見ゆ

稍寫二欝結一。二吟二秀句一。已蠲二愁緒一。非二此眺翫一。孰能暢レ心乎。但惟下僕。稟性難レ彫。闇神靡レ瑩。握レ翰腐レ毫。對レ研忘レ渇。終日因レ流。綴レ之不レ能。所謂文章天骨。習レ之不レ得也。豈堪三探レ字勒レ韻。叶二和雅篇一哉。抑聞二鄙里少兒一。古人言無レ不レ酬。聊裁二拙詠一。敬擬二解咲一焉。如今賦レ言勒レ韻。同二斯雅作之篇一。豈殊二將レ石同レ瓊。唱聲遊走曲歟。抑小兒譬濫謟敬寫二葉端一。式擬レ亂曰。

七言一首。

杪春餘日媚景麗。初巳和風拂自輕。來燕銜レ泥賀宇入。歸鴻引レ蘆廻赴瀛。
聞君嘯侶新流曲。禊飲催レ爵泛二河清一。雖レ欲レ追二尋良此宴一。還知染懊脚跉玎。

短歌二首

佐家理等母。之良受之安良婆。母太毛安良牟。己能夜萬夫吉乎。美勢追都母等奈。
咲けりとも、知らずしあらば、もだもあらむ。此の山吹を、見せつゝもとな。

を道藝の中に置きてはなれぬ意
七歩成レ章―魏の曹子建が故事にて文を作ることの速なるをいふ
詞泉―詩想のわきて盡くることなきに譬ふ
比レ此如レ蔑―人麻呂も赤人も及ばぬ程なりとの意
彫龍―文彩のこまやかなること
比奈毛―「毛」は「乎」の誤、又元のまゝ「ひなも」と訓ず
之多毛比余―「余」は「爾」の誤
久良之―「之」は「久」の誤か
毛能賀―「賀」一本「曾」
宇良奥想云々―下に句を脱せるか
多奈由比（一）「由比」は「伊比」にや（二）「由比」は「思禮（シレ）」の誤か、然らば左樣に心得よといふに似たり
來通ふ―行き通ふ
籠り戀ひ―籠り居て戀ふるなり
心ぐし―心のくゞもる意、又、心になつかしまるゝ意
うるはしと云々―その山吹の日に〳〵咲く如く君を重ね〴〵思ふとの意
葦垣の―枕詞、家持と池主と離れ居れば斯くよめり

思ふ。青丹吉、奈良路來通ふ、玉梓の、使絶えめや。籠り戀ひ、息衝き渡り、下思に、歎かふ我が背、古ゆ、言ひ繼ぎ來らく、世の中は、數なきものか、慰むる、事もあらむと、里人の、我に告ぐらく、山邊には、櫻花散り、顏鳥の、間無く屢鳴く、春の野に、菫を摘むと、白妙の、袖折り返し、紅の、赤裳裾引き、少女らは、思ひ亂れて、君待つと、裏戀すなり。心ぐし、いざ見に行かな、ことはたなゆひ。

夜麻夫枳波。比爾比爾佐伎奴。宇流波之等。安我毛布伎美波。思久思久於毛保由。
山吹は、日に〳〵咲きぬ。うるはしと、我が思ふ君は、しく〳〵思ほゆ。

和賀勢故爾。古非須弊奈賀利。安之可伎能。保可爾奈氣加布。安禮之可奈思母。
我が背子に、戀ひ術無かり、葦垣の、外に歎かふ、我し悲しも。

三月五日大伴宿禰池主。

昨暮來レ使幸也。以垂二晚春遊覽之詩一。今朝累レ信。辱也以貺二相招望レ野之歌一。一看二玉藻一

「謂二盛服一也」と見ゆ
桃源—ところから仙境と見なしたるなり
雲罍—酒器
酌レ桂—謝恵連が雪賦「酌二桂酒一」
三清—周禮天官酒正「辨二三酒之物一」云々、三曰二清酒一とあるによれるか、或は三月三日の清明なる事にいへるか
羽爵—羽觴と同じく杯
九曲流—隈々多き流に杯の水に浮びて廻り來るさま
陶心—毛詩註「陶々和樂貌」
忘二彼我一—賓主の別もなく打解けたるをいふ
酩酊云々—醉ひてこゝかしこに寢席を移したるさま
昨日云々—この前古義に「掾大伴宿禰池主報贈歌二首幷短歌」の題を補ふ
奉二不次一—我が歌文のみだりがはしきを卑みていへり
逸調—文のすぐれたるをいふ
智水仁山—論語による
琳瑯之光彩—世說に出て人材に譬ふ
潘江陸海—潘陸は潘岳、陸機にて、六朝に名高き文人、江海は其の才の大なるに譬ふ
坐二詩書之廊廟一—常に身

雲星氣。逸調過レ人。智水仁山。既盈二琳瑯之光彩一。潘江陸海。自坐二詩書之廊廟一。騁二思非常一。託二情有理一。七步成レ章。數篇滿レ紙。巧遣二愁人之重患一。能除二戀者之積思一。山柿詞泉。比レ此如レ蔑。彫龍筆海。粲然得レ看矣。方知二僕之有一レ幸也。敬和歌其詞云。

憶保枳美能。彌許等可之古美。安之比奇能。夜麻野佐婆良受。安麻射可流。比奈毛乎佐牟流。麻須良袁夜。奈爾可母能毛布。安乎爾余之。奈良治伎可欲布。多麻豆佐能。都可比多要米也。己母理古非。伊伎豆伎和多利。之多毛比余。奈氣可布和賀勢。伊爾之弊由。伊比都藝久良之。餘乃奈加波。可受奈枳毛能賀。奈具佐牟流。己等母安良牟等。佐刀妣等能。安禮爾都具良久。夜麻備爾波。佐久良婆奈知利。可保等利能。麻奈久之婆奈久。春野爾。須美禮乎都牟等。之路多倍乃。蘇泥乎利可弊之。久禮奈爲能。安可毛須蘇妣伎。乎登賣良波。於毛比美太禮底。伎美麻都等。宇良呉悲須奈里。己許呂具志。伊謝美爾加奈。許等波多奈由比。

大君（おほきみ）の、命畏（みことかしこ）み、足引（あしびき）の、山野（やまぬ）障（さは）らず、天離（あまざか）る、鄙（ひな）を治（をさ）むる、丈夫（ますらを）や、何（なに）か物（もの）

上巳―漢禮儀志に上巳祓飲の事見ゆ、後にはたゞ三日を上巳といひならへり
名辰―佳節
含レ苔―「含レ黛」或は「含レ眉」の誤か
過二野客之家一―「過」は「過」の誤か
蘭契―同心の契をいふ
和レ光―こゝは友達同志の親しき意
德星―晉の陳寔荀淑の故事にて賢者の集れること、家持の不參を「已少」といへり
扣レ寂―陸機が文賦に「扣二寂寞一而求レ音」とあるにより強ひてひねり出す意
餘春―晩春
媚日―うらゝかなるよき日
縟二袨服一―縟は說文に「繁采色也」袨服は文選註に

萬葉集 卷第十七下

七言晩春三日遊覽一首并序

上巳名辰。暮春麗景。桃花照レ瞼。以分レ紅。柳色含レ苔。而競レ緑。于時也。携レ手曠二望江河之畔一。訪レ酒迥過二野客之家一。既而也開レ罇（元琴）得レ性。蘭契和レ光。嗟乎今日所レ恨。德星已少歟。若不レ扣レ寂。含レ章何以攄二逍遙之趣一。忽課二短筆一。聊勒二四韻一云爾。

餘春媚日宜二怜賞一。上巳風光足二覽遊一。柳陌臨レ江縟二袨服一。桃源通レ海泛二仙舟一。雲罍酌レ桂三清湛。羽爵催レ人九曲流。縱醉陶心忘二彼我一。酩酊無三處トシテ不二淹留一。

二月四日大伴宿禰池主。

昨日述二短懷一。今朝汙二耳目一。更承二賜書一。且奉二不次一。死罪謹言。不レ遺二下賤一。頻惠二德音一。英

過ぐし遣りつれ―下に「ば」と補ふ
しめら―「すがら」に同じ、終日
見てば―見てあらば
ともし―羨し
心利―利心に同じ

若菜摘ますと、紅の、赤裳の裾の、春雨に、匂ひひづちて、通ふらむ、時の盛りを、徒に、過ぐし遣りつれ、偲ばせる、君が心を、うるはしみ、此の夜すがらに、いも寝ずに、今日もしめらに、戀ひつゝぞ居る。

安之比寄能。夜麻左久良婆奈。比等目太爾。伎美等之見底婆。安禮古非米夜母。
足引の、山櫻花、一目だに、君とし見てば、我戀ひめやも。

夜麻扶枳能。之氣美登毗久久。鶯能。許惠乎聞良牟。伎美波登母之毛。
山吹の、茂み飛びぐく、鶯の、聲を聞くらむ、君はともしも。

伊泥多多武。知加良乎奈美等。許母里爲底。伎彌爾故布流爾。許己呂度母奈思。
出で立たむ、力を無みと、籠り居て、君に戀ふるに、心利も無し。

三月三日大伴宿禰家持。

級離る—枕詞

いらなけく云々—古事記仁徳天皇の御歌にとれり、いらなけく（一）いうなくにて、烈しく、いらいらしくの意（二）燃ゆるをいふといへば、これは胸のいらいらるゝをいふか（三）いらなし

此處に思ひ出其處に思ひ出—非常に故郷の思ひ出さるゝをいふ

山來へなりて—山を來り隔りて

飛びくゝ—飛びくゞる

念奈氣加比。奈具佐牟流。許己呂波奈之爾。春花乃。佐家流左加里爾。於毛敷度如。多乎里加射佐受。波流乃野能。之氣美登妣久久。鶯。音太爾伎加受。乎登賣良我。春菜都麻須等。久禮奈爲能。赤裳乃須蘇能。波流佐米爾。爾保比比豆知底。加欲敷浪牟。時盛乎。伊多豆良爾。須具之夜里都禮。思努波勢流。君之心乎。宇流波之美。此夜須我浪爾。伊母禰受爾。今日毛之賣良爾。孤悲都追曾乎流。

大君の、まけのまにく\、級離る、越を治めに、出でて來し、丈夫我すら、世の中の、常し無ければ、打靡き、床にこい伏し、いたけくの、日にけに增せば、悲しけく、此處に思ひ出、いらなけく、其處に思ひ出、歎く空、安けくなくに、思ふ空、苦しきものを、足引の、山來へなりて、玉桙の、道の遠けば、間使も、遣る由も無み、思ほしき、言も通はず、魂きはる、命惜しけど、せむ術の、たどきを知らに、籠り居て、思ひ歎かひ、慰むる、心は無しに、春花の、咲ける盛りに、思ふどち、手折りかざさず、春の野の、茂み飛びくゝ、鶯の、聲だに聞かず、少女らが、

更贈云々—古義にこの上に「三月三日守大伴宿禰家持」と補へり
含弘—易に出づ、大德をいふ
蓬體—蓬身といふに同じ、我身の卑稱
不ㇾ貲—「貲」は「訾」に通ず
蔵荷末春—一說「戯荷來眷」の誤か、來眷は池主の返歌をおくれるをさし、眷はかへりみるの意
遊藝—論語に出づ、物學ぶこと
橫翰之藻—文を書くこと
彫蟲—漢の揚雄が言にてさかしらに文書くは小人の藝なりとの意
山柿—人麻呂、赤人
藂林—「藻林」に同じ
夜須家奈久爾—「家」の下一本「久」あり、或は「家」は「可良」二字の誤にて「やすからなくに」か

姑洗二日掾大伴宿禰池主。

更贈歌一首幷短歌

含弘之德。垂ニ恩蓬體ー。不ㇾ貲(ハカラ)之思。報ニ慰陋心ー。載荷未春。無ㇾ堪ニ所喩ー也。但以下稚時不上ㇾ涉ニ遊藝之庭ー。橫翰之藻。自乏ニ乎彫蟲ー焉。幼年未ㇾ逕(古過)ニ山柿之門ー。裁歌之趣。詞失ニ乎藂林ー矣。爰辱ニ以ㇾ藤續ㇾ錦之言ー。更題ニ將ㇾ石同ㇾ瓊之詠ー。因(古固)是俗愚懷癖。不ㇾ能ニ默止ー。仍捧ニ數行ー。式(古或)酬ニ嗤咲ー。其詞曰。

於保吉民能。麻氣乃麻爾麻爾。之奈射加流。故之乎遠佐米爾。伊泥底許之。麻須良和禮須良。余能奈可乃。都禰之奈家禮婆。宇知奈妣伎。登許爾己伊布之。伊多家苦乃。日異麻世婆。可奈之家口。許己爾思出。伊良奈家久。曾許爾念出。奈氣久蘇良。夜須家奈久爾。於母布蘇良。久流之伎母能乎。安之比紀能。夜麻伎弊奈里底。多麻保許乃。美知能等保家波。間使毛。遣緣毛奈美。於母保之吉。許等毛可欲波受。多麻伎波流。伊能知乎之家登。勢牟須辨能。多騰吉乎之良爾。隱居而

宇具比須乃。奈根知良須良武。春花。伊都思香伎美登。多乎里加射佐牟。

鶯の、鳴き散らすらむ、春の花、何時しか君と、手折りかざさむ。

天平二十年二月二十九日大伴宿禰家持。

忽辱㆓芳音㆒。翰苑凌㆑雲。兼垂㆓倭詩㆒。詞林舒㆑錦。以吟以詠。能蠲㆓戀緒㆒。春可樂。暮春風景。最可怜。紅桃灼々。戯蝶回㆑花儛。翠柳依々。嬌鶯隠㆑葉歌。可㆑樂哉。淡交促㆑席。得意忘㆑言。樂矣美矣。幽襟足㆑賞哉。豈慮乎。蘭蕙隔㆑䕺。琴罇無㆑用。空過㆓令節㆒。物色輕㆑人乎。所㆑怨有㆑此。不㆑能㆓默止㆒。俗語云以㆑藤續㆑錦。聊擬㆓談咲㆒耳。

夜麻可比爾（元我）。佐家流佐久良乎。多太比等米。伎美爾彌西底婆。奈爾乎可於母波牟。

山がひに、咲ける櫻を、唯一目、君に見せてば、何をか思はむ。

宇具比須能。伎奈久夜麻夫伎。宇多賀多母。伎美我手敷禮受。波奈知良米夜母。

鶯の、來鳴く山吹、うたがたも、君が手觸れず、花散らめやも。

忽云々—此前に古義「三月二日掾大伴宿禰池主、報贈守大伴宿禰家持歌二首」の題を補へり
倭詩—歌
蠲戀緒—心の慰むこと
春可樂—「春」の下脱字あるべし
灼々—毛詩の註に「花盛也」
儛—舞に同じ
促席—促膝といふに同じ意
幽襟—みやび心
蘭蕙䕺—みやび男の相見えぬに譬ふ
物色—こゝにては花鳥の上をさす、花鳥を賞することをもせねば花鳥にあなづられんかと侘ぶる意
所怨—怨は怨に同じ
以藤續錦—藤は藤の荒布、自己の返歌を謙遜して斯くいへり
山がひ—山と山との間のせまき處
うたがた—暫しの意

世間波。加受奈吉物能可。春花乃。知里能麻可比爾。思奴倍吉於母倍婆。
世の中は、數無きものか。春花の、散りの紛ひに、死ぬべき思へば。
山河乃。曾伎敝乎登保美。波之吉余思。伊母乎安比見受。可久夜奈氣加牟。
山川の、そきへを遠み、はしきよし、妹を逢見ず、斯くや嘆かむ。

右天平十九年春二月二十日。越中國守之舘臥病悲傷聊作二此歌一。

守大伴宿禰家持贈二掾大伴宿禰池主一悲歌二首并序

忽沈二枉疾一。累旬痛苦。禱二恃百神一。且得二消損一。而由二身體疼羸一。筋力怯軟。未レ堪二展謝一。係戀彌深。方今春朝春花流二馥於春苑一。春暮春鶯囀二聲於春林一。對二此節候一。琴罇可レ翫矣。雖レ有二乘レ興之感一。不レ耐二策杖之勞一。獨臥二帷幄之裏一。聊作二寸分之歌一。輕奉二机下一。犯レ解二玉頤一。其詞曰。

波流能波奈。伊麻波左加里爾。仁保布良牟。乎里底加射佐武。多治可良毛我母。
春の花、今は盛りに、匂ふらむ。折りてかざさむ、手力もがも。

數無きものか—生くる年月の數の少きをいふ
そきへ—遠く離れたるところ、はて
流馥—薫の滿つること
策杖—「杖策」の誤か、つゑ
寸分之歌—思ふことを聊か述ぶる歌の意か
手力もがも—煩ひて力なきを歎きたる也

使毛。夜流余之母奈之。於母保之伎。許登都底夜良受。孤布流爾思。情波母要奴。多麻伎波流。伊乃知乎之家騰。世牟須辨能。多騰伎乎之良爾。加吉思底也。安良志乎須良爾。奈氣枳布勢良武。

大君の、まけのまに／＼、丈夫の、心振興し、足引の、山坂越えて、天離る、鄙に下り來、息だにも、未だ休めず、年月も、幾何もあらぬに、空蟬の、世の人なれば、打靡き、床にこい伏し、いたけくの、日にけに增る。垂乳根の、母の命の、大船の、ゆくら／＼に、下戀に、何時かも來むと、待たすらむ、心さぶしく、はしきよし、妻の命も、明け來れば、門に倚り立ち、衣手を、折返しつゝ、夕されば、床打拂ひ、ぬば玉の、黑髮敷きて、何時しかと、嘆かすらむぞ、妹も背も、若き子どもは、遠近に、騷ぎ泣くらむ。玉桙の、道をた遠み、間使も、遣る由も無し。思はしき、言傳て遣らず、戀ふるにし、心は燃えぬ、魂きはる、命惜しけど、せむ術の、たどきを知らに、斯くしてや、あらし夫すらに、嘆き臥せらむ。

打靡き云々―なよらかに臥すさま
こい伏し―伏しまろび
いたけくの―一訓「いたけくし」、病の痛苦の也
ゆくら／＼に―物思に心の動くさま
下戀―心に戀ふること
衣手を云々―袖を折返して寢れば思ふ人を夢に見るといふ諺ありしなり
妹も背も若き子どもは―女の子も男の子もの意
惜しけど―惜しけれど
あらし夫―丈夫

右以二天平十八年八月一。掾大伴宿禰池主附二大帳使一赴二向京師一。而同年十一月還二到本任一。仍設二詩酒之宴一。彈絲飲樂（元宴）。是日也白雪忽降。積レ地尺餘。此時也復漁夫之船入レ海浮レ瀾。爰守大伴宿禰家持寄二情二眺一。聊裁二所心一。

忽沈二枉疾一殆臨二泉路一仍作二謌詞一以申二悲緒一一首并短歌

大王能。麻氣能麻爾麻爾。大夫之。情布里於許之。安思比奇能。山坂古延底。安麻射加流。比奈爾久太理伎。伊伎太爾毛。伊麻太夜須米受。年月毛。伊久良母阿良奴爾。宇都世美能。代人奈禮婆。宇知奈妣吉。等許爾許伊布之。伊多家苦之。日異益。多良知禰乃。波波能美許等乃。大船乃。由久良由久良爾。思多呉非爾。伊都可聞許武等。麻多須良武。情左夫之苦。波之吉與志。都麻能美許登母。安氣久禮婆。門爾餘里多知。己呂母泥乎。遠理加弊之都追。由布佐禮婆。登許宇知波良比。奴波多麻能。黑髮之吉底。伊都之加登。奈氣可須良牟曾。伊母毛勢母。和可伎兒等毛波。乎知許知爾。佐和吉奈久良牟。多麻保己能。美知乎多騰保彌。間

踏み平げず—この「ず」上の「出で立ちならし」にもかゝりてこれを打消す
こぬれ—梢
白雲に云々—火葬の煙をいふ
我が待たなくに—我が待たぬに、雪は千重なれど我が待つはなは其れ以上と也
磯ま—古義「磯み」と訓ずる事例の如し

朝庭に、出で立ちならし、夕庭に、踏み平げず、佐保のうちの、里を行き過ぎ、足引の、山のこぬれに、白雲に、立ち棚引くと、我に告げつる。

麻佐吉久登。伊比底之物能乎。白雲爾。多知多奈妣久登。伎氣婆可奈思物。

眞幸くと、言ひてしものを、白雲に、立ち棚引くと、聞けば悲しも。

可加良牟等。可禰底思理世婆。古之能宇美乃。安里蘇乃奈美母。見世麻之物能乎。

斯からむと、豫ねて知りせば、越の海の、荒磯の浪も、見せましものを。

右天平十八年秋九月二十五日。越中守大伴宿禰家持遙聞二弟喪一感傷作レ之也。

相歡歌二首　越中守大伴宿禰家持作

庭爾敷流。雪波知敝之久。思加乃未爾。於母比底伎美乎。安我麻多奈久爾。

庭に降る、雪は千重しく。然のみに、思ひて君を、我が待たなくに。

白浪乃。余須流伊蘇末乎。榜船乃。可治登流間奈久。於母保要之伎美。

白浪の、寄する磯まを、漕ぐ船の、檝取る間無く、思ほえし君。

鄙治めにと—家持卿越中國の任に下れるをいふ
よく行きて—一訓「まさきくて」
來し日の極み—任地に向ふとて別れ來し日を限りにの意
へなりて—隔りて
け長きものを—日久しきに
ければ—來れば
なせ—男子を親みて呼ぶ語

能乎。見麻久保里。念間爾。多麻豆左能。使乃家禮婆。宇禮之美登。安我麻知刀敷爾。於餘豆禮能。多婆許登等可毛。波之伎余思。奈弟乃美許等。奈爾之加母。時之波安良牟乎。波太須酒吉。穗出秋乃。芽子花。爾保弊流屋戸乎。言斯人爲ㇾ性好ㇾ愛花草花樹而多植於寢院之庭。故謂之花薫庭也。安佐爾波爾。伊泥多知奈良之。暮庭爾。敷美多比良氣受。佐保能宇知乃。里乎往過。安之比紀乃。山能許奴禮爾。白雲爾。多知多奈妣久等。安禮爾都氣都流。佐保山火葬。故謂之佐保乃宇知乃佐刀乎由吉須疑。

天離る、鄙治めにと、大君の、まけのまにく、出でて來し、我を送ると、青丹吉、奈良山過ぎて、泉川、淸き河原に、馬止め、別れし時に、よく行きて、我歸り來む、平けく、齋ひて待てと、語らひて、來し日の極み、玉桙の、道をた遠み、山川の、へなりてあれば、戀しけく、け長きものを、見まく欲り、思ふ間に、玉梓の、使のければ、嬉しみと、我が待ち問ふに、妖言の、戯言とかも、はしきよし、なせの命、何しかも、時しはあらむを、旗薄、穗に出る秋の、萩の花、匂へる宿を、

二上山—越中國

なご—越中國
船棚—船の兩舷に棚の如く致したる板舟子のふみゆたり棹さすためなり
打ちて—(一)取り付くるをいふか(二)魚のより來むために船棚をうつこと
あへて—一訓「あべて」と湧り喘而の義とす

右二首。守大伴宿禰家持。

奴婆多麻乃。欲波布氣奴良之。多末久之氣。敷多我美夜麻爾。月加多夫伎奴。

ぬば玉の、夜は更けぬらし。玉櫛笥、二上山に、月傾きぬ。

右一首。史生土師宿禰道良。

大目秦忌寸八千島之館宴歌一首

奈呉能安麻能。都里須流布禰波。伊麻許曾婆。敷奈太那宇知底。安倍底許藝泥米。

なごの海人の、釣する船は、今こそは、船棚打ちて、あへて漕ぎ出め。

右館之客屋居望二蒼海一。仍主人八千島作二此歌一也。

哀二傷長逝之弟一歌一首并短歌

安麻射加流。比奈乎佐米爾等。大王能。麻氣乃麻爾末爾。出而許之。和禮乎於久流登。青丹余之。奈良夜麻須疑底。泉河。伎欲吉可波良爾。馬駐。和可禮之時爾。好去而。安禮可弊里許牟。平久。伊波比底待登。可多良比底。許之比乃伎波美。多麻保許能。道乎多騰保美。山河能。弊奈里底安禮婆。孤悲之家口。氣奈我枳物

茅蜩の云々—花郎女は多く女に譬ふれば、夕ぐれに女に逢はんといふ意なるべしと略解にいへるはいかゞ、せめて旅の心を慰めとての意ならんか

いくりの森—越後國蒲原郡に伊久禮とある所か

秋風寒み—初句の上に轉じて見よ

其の川—都のうちの川なるべし

蘇末—古義「末」は「未」の誤にて、いそみ」

しぶたに—越中國

右一首。守大伴宿禰家持作。

日晩之乃。奈吉奴流登吉波。乎美奈弊之。佐伎多流野邊乎。遊吉追都見倍之。

茅蜩の、鳴きぬる時は、女郎花、咲きたる野邊を、行きつゝ見べし。

右一首。大目秦忌寸八千島。

古歌一首　大原高安眞人作。年月不レ審。但隨聞時記載茲焉。

伊毛我伊弊爾。伊久理能母里乃。藤花。伊麻許牟春毛。都禰加久之見牟。

妹が家に、いくりの森の、藤の花、今來む春も、常斯くし見む。

右一首。傳誦僧玄勝是也。

鴈我禰波。都可比爾許牟等。佐和久良武。秋風左無美。曾乃可波能倍爾。

雁がねは、使に來むと、騷ぐらむ。秋風寒み、其の川の邊に。

馬並底。伊射宇知由可奈。思夫多爾能。伎欲吉伊蘇未爾。與須流奈彌見爾。

馬並めて、いざ打行かな。しぶたにの、淸き礒まに、寄する浪見に。

右三首。掾大伴宿禰池主作。

氣佐能安佐氣。秋風佐牟之。登保都比等。加里我來鳴牟。等伎知可美香物。

今朝の朝け、秋風寒し。遠つ人、雁が來鳴かむ、時近みかも。

安麻射可流。比奈爾月歷奴。之可禮登毛。由比底之紐乎。登伎毛安氣奈久爾。

天離る、鄙に月經ぬ。然れども、結ひてし紐を、解きもあけなくに。

右二首。守大伴宿禰家持作。

安麻射加流。比奈爾安流和禮乎。宇多我多毛。比母毛登吉佐氣底。於毛保須良米也。

天離る、鄙に在る我を、うたがたも、紐も解き避けて、思ほすらめや。

右一首。掾大伴宿禰池主。

伊弊爾之底。由比底師比毛乎。登吉佐氣受。念意緒。多禮賀思良牟母。

家にして、結ひてし紐を、解きさけず、思ふ心を、誰か知らむも。

遠つ人—枕詞

結ひてし紐—妹が也

解きもあけなくに—我も解き明けざるを妹が心は如何ならん覺束なしとにや

佐氣底—「底」は「受」の誤にて「紐も解きさけず」か

うたがたも—暫しもの意にとる

松の花—我が身に譬ふ

見がてり—見がてら

ふさ手折り—ふさ／＼と多く手折り

たもとほり—行き廻り徘徊して

由もあらなくに—妹もなく如何しやうも無きものを

松の花、花數にしも、我が背子が、思へらなくに、もとな咲きつゝ。

右件十二首歌者。時々寄二便使一來贈。非レ在二一度一所レ送也。

八年七日夜集二于守大伴宿禰家持館一宴歌

秋田乃。穗牟伎見我底利。和我勢古我。布佐多乎里家流。乎美奈敝之香物。

秋の田の、穗向見がてり、我が背子が、ふさ手折りける、女郎花かも。

右一首。守大伴宿禰家持作。

乎美奈敝之。佐伎多流野邊乎。由伎米具利。吉美乎念出。多母登保里伎奴。

女郎花、咲きたる野邊を、行き廻り、君を思ひ出、たもとほり來ぬ。

安吉能欲波。阿加登吉左牟之。思路多倍乃。妹之衣袖。伎牟餘之母我毛。

秋の夜は、曉寒し。白妙の、妹が衣手、著む由もがも。

保登等藝須。奈伎底須疑爾之。乎加備可良。秋風吹奴。余之母安良奈久爾。

郭公、鳴きて過ぎにし、岡邊から、秋風吹きぬ。由もあらなくに。

我が戀ひ居らむ—彼をかけていふにあらず、斯くばかり戀ひつゝ居らんかの意

もとな—思ひし甲斐もなかりしと也

萬代に—いつまでもの意、本文「爾」一本「等」

抓みし手見つゝ—我が背子がつねりし我が手のあとを見つゝの意、本文「乎」一本「手」

暗谷—日の目も見えぬ深谷

打ちはめて—投入れて

燒けは死ぬとも—火葬にせらるゝことをいへるならんか

草枕、旅に屢く、斯くのみや、君を遣りつゝ、我が戀ひ居らむ。

草枕。多妣伊爾之伎美我。可敝里許牟、月日乎之良牟。須邊能思良難久。

草枕、旅行にし君が、歸り來む、月日を知らむ、術の知らなく。

可久能未也。安我故非乎浪牟。奴婆多麻能。欲流乃比毛太爾。登吉佐氣受之底。

斯くのみや、我が戀ひ居らむ。ぬば玉の、夜の緒だに、解きさけずして。

佐刀知加久。伎美我奈理那婆。古非米也等。母登奈於毛比此。安連曾久夜思伎。

里近く、君がなりなば、戀ひめやと、もとな思ひし、我ぞ悔しき。

餘呂豆代爾。許己呂波刀氣底。和我世古我。都美之乎見都追。志乃備加禰都母。

萬代に、心は解けて、我が背子が、抓みし手見つゝ、忍び兼ねつも。

鶯能。奈久久良多爾爾。宇知波米底。夜氣波之奴等母。伎美乎之麻多武。

鶯の、鳴く暗谷に、打ちはめて、燒けは死ぬとも、君をし待たむ。

麻都能波奈。花可受爾之毛。和我勢故我。於母敝良奈久爾。母登奈佐吉都追。

龍田山—立=斷

在りさりて—在り〳〵て の約

思へこそ—思へばこそ

吉美爾餘里。吾名波須泥爾。多都多山。絶多流孤悲乃。之氣吉許呂可母。

君に寄り、我が名は已に、龍田山、絶えたる戀の、繁き頃かも。

須麻比等乃。海邊都禰佐良受。夜久之保能。可良吉戀乎母。安禮波須流香物。

須磨人の、海邊常去らず、燒く鹽の、辛き戀をも、我はするかも。

阿里佐利底。能知毛相牟等。於母倍許曾。都由能伊乃知母。都藝都追和多禮。

在りさりて、後も逢はむと、思へこそ、露の命も、繼ぎつゝ渡れ。

奈可奈可爾。之奈婆夜須家牟。伎美我目乎。美受比佐奈良婆。須敝奈可流倍思。

なか〳〵に、死なば安けむ。君が目を、見ず久ならば、術無かるべし。

許母利奴能。之多由孤悲安麻里。志良奈美能。伊知之路久伊泥奴。比登乃師流倍久。

籠沼の、下ゆ戀ひ餘り、白浪の、著く出でぬ。人の知るべく。

久佐麻久良。多比爾之婆之婆。可久能未也。伎美乎夜利都追。安我孤悲乎良牟。

大伴宿禰家持以二天平十八年閏七月一被レ任二越中國守一卽取二七月一赴二任所一於レ時姑大伴坂上郎女贈二家持一歌二首

久佐麻久良。多妣由久吉美乎。佐伎久安禮等。伊波比倍須惠都。安我登許能弊爾。

草枕、旅行く君を、幸くあれど、齋瓮据ゑつ。我が床の邊に。

伊麻能其等。古非之久伎美我。於毛保要婆。伊可爾加母世牟。須流須邊乃奈左。

今の如、戀しく君が、思ほえば、如何にかもせむ。する術の無さ。

更贈二越中國一歌二首

多妣爾伊仁思。吉美志毛都藝底。伊米爾美由。安我加多孤悲乃。思氣家禮婆可聞。

旅に行にし、君しも繼ぎて、夢に見ゆ。我が片戀の、繁ければかも。

美知乃奈加。久爾都美可未波。多妣由伎母。之思良奴伎美乎。米具美多麻波奈。

道の中、國つ御神は、旅行きも、爲知らぬ君を、惠み給はな。

平群氏女郎贈二越中守大伴宿禰家持一歌十二首

齋瓮—古へ酒を盛りて神に供へし陶製の壺
我が床の邊に—古へ旅立てる跡の床を齋へること所々に見ゆ
君が—君を
如何にかもせむ—別れて後は也
する術の無さ—せん術の無さ
道の中—越中國
爲知らぬ—しなれぬ

山のかひ—山と山との間の狹きところ

豐の年—漢書「充ㇾ尺豐年之瑞」

しるすとならし—しるしあらはすならんの意

零須—「須」は「類」の誤にて「ふれる」か

山のかひ、其處とも見えず、一昨日も、昨日も今日も、雪の降れゝば。

葛井連諸會應ㇾ詔歌一首

新。年乃波自米爾。豐乃登之。思流須登奈良思。雪能敷禮流波。

新しき、年の始めに、豐の年、しるすとならし。雪の降れるは。

大伴宿禰家持應ㇾ詔歌一首

大宮之。宇知爾毛刀爾毛。比賀流麻泥。零須白雪。見禮杼安可奴香聞。

大宮の、内にも外にも、光るまで、降らす白雪、見れど飽かぬかも。

藤原豐成朝臣。巨勢奈底麻呂朝臣。大伴牛養宿禰。藤原仲麻呂朝臣。三原王。智努王。船王。邑知王。山田王。林王。穗積朝臣老。小田朝臣諸人。小野朝臣綱手。高橋朝臣國足。太朝臣德太理。高丘連河內。秦忌寸朝元。楢原造東人。

右件王卿等應ㇾ詔作ㇾ歌。依ㇾ次奏ㇾ之。登時不ㇾ記。其歌漏失。但秦忌寸朝元者。左大臣橘卿謔曰。靡ㇾ堪ㇾ賦ㇾ歌。以ㇾ麝贖ㇾ之。因ㇾ此默止也。

大納言—「大」は「中」の誤

太上天皇—元明天皇

供奉掃レ雪—御前に侍して雪を賞せしを斯く書けり

降る雪の—その時の景をやがて枕詞とせり

貴くもあるか—貴くもあるかな

天の下云々—雪の光を天下を治め給ふ御勢に譬ふ

既に—悉く

天平十八年正月白雪多零。積レ地數寸也。於レ時左大臣橘卿。率二大納言藤原豐成朝臣及諸王諸臣等一。參二入太上天皇御在所一。中宮西院供奉掃レ雪。於レ是降レ詔。大臣參議幷諸王者令レ侍二于大殿上一。諸卿大夫等者令レ侍二于南細殿一。而則賜レ酒肆宴。勅曰。汝諸王卿等聊賦二此雪一。各奏二其詞一。

左大臣橘宿禰應レ詔歌一首

布流由吉乃。之路髪麻泥爾。大皇爾。都可倍麻都禮婆。貴久母安流香。

降る雪の、白髪までに、大君に、仕へ奉れば、貴くもあるか。

紀朝臣清人應レ詔歌一首

天下。須泥爾於保比底。布流雪乃。比加里乎見禮婆。多敷刀久母安流香。

天の下、既に覆ひて、降る雪の、光を見れば、貴くもあるか。

紀朝臣男梶應レ詔歌一首

山乃可比。曾許登母見延受。乎登都日毛。昨日毛今日毛。由吉能布禮禮婆。

橘の、匂へる香かも、郭公、鳴く夜の雨に、移ろひぬらむ。

保登等藝須。夜音奈都可思。安美指者。花者須具等毛。可禮受加奈可牟。
郭公、夜聲懐し。網さゝば、花は過ぐとも、離れずか鳴かむ。

橘乃。爾保散流苑爾。保等登藝須。鳴等比登都具。安美佐散麻之乎。
橘の、匂へる園に、郭公、鳴くと人告ぐ。網さゝましを。

青丹余之。奈良能美夜古波。布里奴禮登。毛等保登等藝須。不鳴安良久爾。
青丹よし、奈良の都は、古りぬれど、本郭公、鳴かずあらなくに。

鶉鳴。布流之登比等波。於毛弊禮騰。花橘乃。爾保敷許乃屋度。
鶉鳴く、古しと人は、思へれど、花橘の、匂ふ此の宿。

加吉都播多。衣爾須里都氣。麻須良雄乃。服曾比獵須流。月者伎爾家里。
燕子花、衣に摺り附け、丈夫の、きそひ狩する、月は來にけり。

右六首歌者。天平十六年四月五日。獨居二於平城敎鄕舊宅一。大伴宿禰家持作。

移ろひぬらむ—こゝは香の散り失するをいふ

網さゝば—網を張らば、郭公を網の中に入れ置かばの意

安良久爾—「久」の上に「奈」を脱す

青丹よし云々—久邇の都の榮えたる頃なれば斯くよめり

本郭公—もとの郭公、ふるなじみの郭公

鶉鳴く—枕詞、一訓「うづらなき」枕詞にあらず、荒れたる里のさま

きそひ狩—此狩は藥狩、競狩、一說、衣を著裝ひて狩をするなり

右四月三日。内舍人大伴宿禰家持。從二久邇京一報二送弟書持一。

思二霍公鳥一歌一首　田口朝臣馬長作

保登等藝須。今之來鳴者。餘呂豆代爾。可多理都具倍久。所念可母。

郭公、今し來鳴かば、萬代に、語り繼ぐべく、思ほゆるかも。

右傳云。一時交遊集宴。此日此處。霍公鳥不レ喧。仍作二件歌一。以陳二思慕之意一。但其宴所。幷年月。未レ得二詳審一也。

山部宿禰赤人詠二春鶯一歌一首

安之比奇能。山谷古延底。野豆可佐爾。今者鳴良武。宇具比須乃許惠。

足引の、山谷越えて、野阜に、今は鳴くらむ。鶯の聲。

右年月所處未レ得二詳審一。但隨二聞之時一記二載於茲一。

十六年四月五日獨居二平城故宅一作歌六首

橘乃。爾保弊流香可聞。保登等藝須。奈久欲乃雨爾。宇都路比奴良牟。

野阜—野中の丘

常花にもが―とこしへに咲きて花にてあれかし
玉に貫く云々―棟の花は藥玉に貫き交へるを以て斯くいふ
飜嚶―嚶は鳴く、「なきかへる」と訓ず
立ちぐき―立ちくゞり
何の―如何なる

橘は、常花にもが。郭公、住むと來鳴かば、聞かぬ日無けむ。
珠爾奴久。安布知乎宅爾。宇恵多良婆。夜麻霍公鳥。可禮受許武可聞。
玉に貫く、棟を家に、植ゑたらば、山郭公、かれず來むかも。

右四月二日。大伴宿禰書持。從二奈良宅一贈二兄家持一歌二首。

橙橘初咲霍公鳥飜嚶對二此時候一詎不レ暢レ志因作二三首短歌一以散二鬱結之緒一耳

安之比奇能。山邊爾乎禮婆。保登等藝須。木際多知久吉。奈可奴日波奈之。
足引の、山邊に居れば、郭公、木の間立ちぐき、鳴かぬ日は無し。
保登等藝須。奈爾乃情曾。多知花乃。多麻奴久月之。來鳴登餘牟流。
郭公、何の心ぞ。橘の、玉貫く月し、來鳴きとよむる。
保登等藝須。安不知能枝爾。由吉底居者。花波知良牟奈。珠登見流麻泥。
郭公、棟の枝に、行きて居ば、花は散らむな。玉と見るまで。

泉の川—今の木津川
淀瀬—水のよどめるところ

楯並めて—枕詞

山背乃。久爾能美夜古波。春佐禮播。花咲乎乎理。秋佐禮婆。黄葉爾保比。於婆勢流。泉河乃。可美都瀬爾。宇知橋和多之。余登瀬爾波。宇枳橋和多之。安里我欲比。都可倍麻都良武。萬代麻底爾。

山城の、久邇の都は、春されば、花咲きををり、秋されば、黄葉匂ひ、帯ばせる、泉の川の、上つ瀬に、打橋渡し、淀瀬には、浮橋渡し、在り通ひ、仕へ奉らむ。萬代までに。

反歌

楯並而。伊豆美乃河波乃。水緒多要受。都可倍麻都良牟。大宮所。

楯並めて、泉の川の、水脈絶えず、仕へ奉らむ、大宮所。

右天平十三年二月。右馬寮頭境部宿禰老麻呂作也。

詠霍公鳥歌二首

多和婆奈波。常花爾毛歟。保登等藝須。周無等來鳴者。伎可奴日奈家牟。

深山としみに―深山となりて木の繁く
あかにせむ―飽かぬものにせん、本文「氣」一本「勢」に作る
楊奈疑可―「可」は「等」の誤にて「やなぎと」かともいふ
共に後れぬ云々―柳も梅も時を同じうして共に春の景物なりとの意か
乎良自等―「自」は「目」の誤にて「をらめと」か
遊内乃―一說「内」は「日」の誤にて「あそぶひの」か
三香原新都―久邇の都

烏梅乃花。美夜萬等之美爾。安里登母也。如此乃未君波。見禮登安可爾氣牟。
梅の花、深山としみに、ありともや、斯くのみ君は、見れどあかにせむ。

春雨爾。毛延之楊奈疑可。烏梅乃花。登母爾於久禮奴。常乃物香聞。
春雨に、萌えし柳か、梅の花、共に後れぬ、常のものかも。

宇梅能花。伊都波乎良自等。伊登波爾登。佐吉乃盛波。乎思吉物奈利。
梅の花、何時は折らじと、厭はねど、咲きの盛りは、惜しきものなり。

遊内乃。多努之吉庭爾。梅柳。乎理加謝思底婆。意毛比奈美可毛。
遊ぶ内の、樂しき庭に、梅柳、折りかざしてば、思ひ無みかも。

御苑布能。百木乃宇梅乃。落花之。安米爾登妣安我里。雪等敷里家牟。
御園生の、百木の梅の、散る花の、天に飛び上り、雪と降りけむ。

右天平十二年十一月九日大伴宿禰家持作。

讃三香原新都歌一首并短歌

うたがた—泡、危きことに譬ふ、本文「乙」は「方」の誤か
我が背—同船の人々を指す
諸本云々—「歌乞」の字を疑ひたる後人の書入れか
おぼほしく—ほの〴〵と
つぬの松原—攝津國
雲立渡る—(一)雲を波に見立てていふ(二)織女のよそひを人に見せじとて也

大船の、上にし居れば、天雲の、たどきも知らず、うたがた我が背。

諸本如此可尋之。

海未通女。伊射里多久火能。於煩保之久。都努乃松原。於母保由流可聞。
海人少女、漁燒く火の、おぼほしく、つぬの松原、思ほゆるかも。

右九首。作者不レ審二姓名一。

十年七月七日之夜獨仰二天漢一聊述レ懐一首

多奈波多之。船乘須良之。麻蘇鏡。吉欲伎月夜爾。雲起和多流。
棚機し、船乘すらし。眞十鏡、淸き月夜に、雲立渡る。

右一首。大伴宿禰家持作。

追二和太宰之時梅花一新歌六首

民布由都藝。芳流波吉多禮登。烏梅能芳奈。君爾之安良禰婆。遠流人毛奈之。
み冬盡き、春は來れど、梅の花、君にしあらねば、折る人も無し。

ひぢきの灘―播磨國響灘、ひぢきは後に訛れる誤か

檝間―檝を取る間、暫しの間

玉はやす―枕詞
天傳ふ―枕詞

おくか―はて

一云云々―此方可なり

問ひし兒らはも―筑紫國にて馴れそめし妹をいふか

昨日許曾。敷奈底婆勢之可。伊佐魚取。比治奇乃奈太乎。今日見都流香母。
昨日こそ、船出はせしか。いさな取り、ひぢきの灘を、今日見つるかも。
淡路島。刀和多流船乃。可治麻爾毛。吾波和須禮受。伊弊乎之曾於毛布。
淡路島、門渡る船の、檝間にも、我は忘れず、家をしぞ思ふ。
多麻波夜須。武庫能和多里爾。天傳。日能久禮由氣婆。家乎之曾於毛布。
玉はやす、武庫の渡に、天傳ふ、日の暮れ行けば、家をしぞ思ふ。
家爾底母。多由多敷命。浪乃宇倍爾。思之乎禮婆。於久香之良受母。
家にても、たゆたふ命、浪の上に、思ひし居れば、おくか知らずも。
一云。宇伎底之乎禮八。
大海乃。於久可母之良受。由久和禮乎。何時伎麻佐武等。問之兒等波母。
大海の、おくかも知らず、行く我を、何時來まさむと、問ひし兒らはも。
大船乃。宇倍爾之居婆。安麻久毛乃。多度伎毛思良受。歌乞和我世。

萬葉集 巻第十七上

天平二年庚午冬十一月太宰帥大伴卿被レ任ニ大納言一兼レ帥如レ舊 上レ京之時陪従人等別取ニ海路一入レ京於レ是悲ニ傷羇旅一各陳ニ所心一作歌十首

和我勢兒乎。安我松原欲。見度婆。安麻乎等女登母。多麻藻可流美由。
我が背子を、我が松原よ、見渡せば、海人少女ども、玉藻刈る見ゆ。

右一首。三野連石守作。

荒津乃海。之保悲思保美知。時波安禮登。伊頭禮乃時加。吾孤悲射良牟。
荒津の海、潮干潮滿ち、時はあれど、何れの時か、我が戀ひざらむ。

伊蘇其登爾。海夫乃釣船。波底爾家利。我船波底牟。伊蘇乃之良奈久。
磯毎に、海人の釣船、はてにけり。我が船はてむ、磯の知らなく。

我が松原—松原に我が待つをいひ掛く

荒津の海—筑前國に小荒大荒といふ地あり、そこの海か

我が船云々—我乘りたる舟はいづこに泊てんとも知られぬと也

陶人の云々—疾く醋にせよといふ意なるべし

時賞毛云々—「時」は「聞」の誤にて奏聞の意とし、路解に下文の如く訓じたる也

さゝらの小野—天上にありておそろしき野と云ひ傳へたるならん

奥つ國—海路を隔てたる遠き島國

染屋形—船の屋形「染」の字一訓「しめ」

神の門云々—神は海にて神の門とは瀬戸のことと

人魂の云々—(一)君は人魂、本文「思」の下に「久」を脱せしか(二)人魂は枕詞にて、色青き人に逢へるをいへるか、本文「葉非左思」は誤字あるか

右歌一首。爲レ蟹述痛作レ之也。

怕物歌

天爾有哉。神樂良能小野爾。茅草苅。草苅婆可爾。鶉乎立毛。

天なるや、さゝらの小野に、茅萱刈り。かや刈りばかに、鶉を立つも。

奥國。領君之。染屋形。黄染乃屋形。神之門渡。

奥つ國、領らす君が、染屋形、黄染の屋形、神の門渡る。

人魂乃。佐青有公之。但獨。相有之雨夜葉。非左思所念。

人魂の、さ青なる君が、唯獨り、逢へりし雨夜は、久しく思ほゆ。

にげ、にれは此語の轉ならん「御しは」はしくびしは
申しはやされ—「され」は「せ」の延言、もてはやさせ給への意
彼毛—下に「此毛」を脱す
雖立—古義に「雖不置」の誤にて「おかねども」か、下に對して「おきな」の序也といへり
押照るや—枕詞
小江—「小」は發語
廬造り—蟹を擬人法にせり
なまりて居る—隱れて居る「なまり」は「なばり」に同じ
葦蟹—葦あるところに住めばいふ
飛鳥に云々—大宮所ありたればなり
おきな—地名か、恐らくは誤字あらん
衝かねども—杖を也
つくぬ—地名か、大和國桃花鳥野（ツキノ）か
はくれ—掛くること
樅楡—樅に似たる楡か、古へその皮を食せしと見ゆ
囀るや—枕詞
唐臼に舂き—古へ楡の皮に鹽を搗き交ぜて鹽にせしなり
初垂—初めて垂るゝ鹽にてよき鹽

天光夜。日乃異爾干。佐比豆留夜。辛碓爾舂。庭立。碓子爾舂。忍光八。難波乃小江乃。始垂乎。辛久垂來弖。陶人乃。所作瓶乎。今日往。明日取持來。吾目良爾。鹽漆給。時賞毛。時賞毛。

押照るや、難波の小江に、廬造り、なまりて居る、葦蟹を、大君召すと、何せむに、我を召すらめや。明けく、我が知る事を、歌人と、我を召すらめや。笛吹きと、我を召すらめや。琴彈きと、我を召すらめや。かもかくも、命受けむと、今日今日と、飛鳥に到り、立ちたれど、おきなに到り、衝かねども、つくぬに到り、東の、中のみ門ゆ、參り來て、命受くれば、馬にこそ、絆掛くもの、牛にこそ、鼻繩はくれ、足引の、此の片山の、樅楡を、五百枝剝ぎ垂れ、天照るや、日の氣に干し、囀るや、唐臼に舂き、庭に立つ、殼臼に舂き、押照るや、難波の小江の、初垂を、辛く垂れ來て、陶人の、作れる瓶を、今日往きて、明日取持ち來、我が目らに、しほ塗り給べと、申しはやさも、申しはやさも。

にい行くとてはさもの」は行く所の定かならぬ意
虎とふ神―虎は獸のうちにてもすぐれて猛きものなれば神といふ
八重疊―枕詞
平群の山―大和詞
藥獵―夏獵とて鹿の若角をとる獵
梓弓云々―狩人の多きをいふか、又狩人の數多の弓をたばさみか
ひめ鏑―(一)ひきめ鏑の略か(二)鏑の小なるものか(三)極目鏑にて鏑に極をゑりたるもの
御傘のはやし―御傘は大傘にて柄あるもの、はやすは榮えしむの意にて大傘の頂に鹿の角を立てゝ飾にすればいふ
御墨の壺―これは鹿の角を墨壺に用ふるにはあらで形の似たればいふか
我が爪は云々―これも形の似たればいふ
我が毛らは云々―古今註「鹿毛爲ㇾ杜、羊毛爲ㇾ被」
我が皮は―箱の蓋とすればいふ
我がみぎは云々―「みぎ」は「にれ」に同じく、反芻動物の胃にとり入れしのみの食物、之を再び口に出して嚙むを「にげかむ」とも「にれかむ」ともいふ、

八つ手挾み、ひめ鏑、八つ手挾み、しゝ待つと、我が居る時に、さ男鹿の、來立ち嘆かく、俄に、我は死ぬべし、大君に、我は仕へむ、我が角は、御傘のはやし、我が耳は、御墨の壺、我が目らは、眞澄の鏡、我が爪は、御弓の弓弭、我が毛らは、御筆のはやし、我が皮は、御箱の皮に、我が肉は、御鱠はやし、我が肝も、御鱠はやし、我がみぎは、御しほのはやし、老い果てぬ、我が身一つに、七重花咲く、八重花咲くと、申しはやさね、申しはやさね。

右歌一首。爲ㇾ鹿述痛作ㇾ之也。

忍照八。難波乃小江爾。盧作。難麻理弖居。葦河爾乎。王召跡。何爲牟爾。吾乎召良米夜。明久。吾知事乎。歌人跡。和平召良米夜。笛吹跡。和平召良米夜。琴引跡。和平召良米夜。彼毛。令受牟等。今日今日跡。飛鳥爾到。雖立。置勿爾到。雖不策。都久怒爾到。東。中門由。參納來弖。命受例婆。馬爾己曾。布毛太志可久物。牛爾己曾。鼻繩波久例。足引乃。此片山乃。毛武爾禮乎。五百枝波伎垂。

來立來—下の「來」は衍文

いとこ—人を親みて呼ぶ語、以下十句「八重疊」といはん序

汝兄—男子を親みて呼ぶ語

居り〳〵て—在り〳〵てに同じく、そのまゝにありての意

ものにい行くとは—もの

乞食者詠二首

伊刀古。名兄乃君。居居而。物爾伊行跡波。韓國乃。虎云神乎。生取爾。八頭取持來。其皮乎。多多彌爾刺。八重疊。平羣乃山爾。四月與。五月間爾。藥獵。仕流時爾。足引乃。此片山爾。二立。伊智比何本爾。梓弓。八多婆佐彌。比米加夫良。八多婆左彌。宍待跡。吾居時爾。佐男鹿乃。來立來嘆久。頓爾。吾可死。王爾。吾仕牟。吾角者。御笠乃波夜詩。吾耳者。御墨坩。吾目良波。眞墨乃鏡。吾爪者。御弓之弓波受。吾毛等者。御筆波夜斯。吾皮者。御箱皮爾。吾宍者。御奈麻須波夜志。吾伎毛母。御奈麻須波夜之。吾美義波。御鹽乃波夜之。耆矣奴。吾身一爾。七重花佐久。八重花生跡。白賞尼。白賞尼。

いとこ、汝兄の君、居り〳〵て、ものにい行くとは、韓國の、虎とふ神を、生捕りに、八つ取り持ち來、其の皮を、疊に刺し、八重疊、平群の山に、四月と、五月の程に、藥獵、仕ふる時に、足引の、此の片山に、二つ立つ、櫟が下に、梓弓、

こゝと揉み—「こゝ」は揉む音
奉りつや—奉りつるよといふ意、又問ふ意
まけ—一說、「負」は「とせ」と訓みて「刀自」か
大野—礪波郡
繁路は繁路—一訓「しげぢのもりぢ」
二上山—射水郡
子む—子產む
翳—大なる團扇の柄の長きもの、鳥の羽にてつくり貴人外出の時左右より御顏のほどをかざすに用ひたり
日良—「日」の下に「須」を脫す
彌彥の神—彌彥の山
今日らもか—「ら」は助辭、今日もか
こやすらむ—臥すらん
皮の衣著て云々—鹿に毛皮と角あるはもとよりなれど、人のさまにいひなしたるなり

ひ濯ぎ、辛鹽に、こゝと揉み、高坏に盛り、机に立てて、母に奉りつや、愛づ兒のまけ。父に奉りつや、み愛づ兒のまけ。

越中國歌四首

大野路者。繁道森徑。之氣久登毛。君志通者。徑者廣計武。
大野路は、繁路は繁路、繁くとも、君し通はば、道は廣けむ。

澁溪乃。二上山爾。鷲曾子產跡云。指羽爾毛。君之御爲爾。鷲曾子生跡云。
澁溪の、二上山に、鷲ぞ子むとふ。翳にも、君が御爲に、鷲ぞ子むとふ。

伊夜彥。於能禮神佐備。青雲乃。田名引日良。霂曾保零。
彌彥の、己神さび、青雲の、棚引く日すら、小雨そほ降る。
一云。安奈爾可武佐備。

伊夜彥乃。神乃布本。今日良毛加鹿乃。伏良武。皮服著而。角附奈我良。
彌彥の、神の麓に、今日らもか鹿の、こやすらむ。皮の衣著て、角附きながら。

落し入れわし―(一)「わし」は「忘す」(ワスシ)の略か、(二)調を整へんための助辭

かけて――決して、又心に懸けての意

酒屋―酒を置く所か

まぬらる―「ま」は接頭語、「ぬらる」は黑らる、酒に醉ひて黑らるゝをいふ

破夫利―「はふり」とも訓むべし、意は同じ

細螺―貝の名、今きさごといふものに似たり

き出づるやと、見むわし

右歌一首傳云。或有二愚人一。斧墮二海底一。而不レ解二鐵沈無一レ理レ浮レ水。聊作二此歌一口吟爲喩也。

堦楯。熊來酒屋爾。眞奴良留奴和之。佐須比立 率而來奈麻之乎。眞奴良留奴和之。

橋立の、熊來酒屋に、まぬらる奴わし。誘ひ立て、率て來なましを。まぬらる奴わし。

右一首。

所聞多禰乃。机之島能。小螺乎。伊拾持來而。石以。都追伎破夫利。早川爾。洗濯。辛鹽爾。古胡登毛美。高杯爾盛。机爾立而。母爾奉都也。目豆兒乃負。父爾獻都也。身女兒乃負。

加島嶺の、机の島の、細螺を、い拾ひ持ち來て、石持ち、つゝき破り、早川に、洗

昔の少き―人目の少く人口のうるさくさき意
逢はぬかも―逢へかし
少きよ「よ」は詠歎
いふ者せる―妹が著たる、「いふ」は親愛語、本文「唯」は「鬪」の誤なるらん
項げる―項にかける
取替へも申さむものを―取替へて著見ともなし申さんものをの意
少き―昔の也、本文「四」を脱したるにて「少きよ」とよむべしともいふ

移ろはめやも―あだしむ無きをいふ

橋立の―枕詞
熊來のやら―能登國の地名「やら」は蘆葦などの生えたる處

が項げる、珠の七緒、取替へも、申さむものを。少き、道に逢はぬかも。

右歌一首。

豐前國白水郎歌一首

豐國。企玖乃池奈流。菱之宇禮乎。採跡也妹之。御袖所沾計武。

豐國の、企救の池なる、菱のうれを、摘むとや妹が、み袖濡れけむ。

豐後國白水郎歌一首

紅爾。染而之衣。雨零而。爾保比波雖爲。移波米也毛。

紅に、染めてし衣、雨降りて、匂はすとも、移ろはめやも。

能登國歌三首

堦楯。熊來乃夜良爾。新羅斧。墮入和之。河毛佀河毛佀。勿鳴爲曾禰。浮出流夜登。將見和之。

橋立の、熊來のやらに、新羅斧、落し入れわし、かけて〳〵、な泣かしそね。浮

もり食む—其のところを離れず守り居てついばむ意か
百千鳥—多くの鳥
一夜妻—遊女をいへどここは初めて一夜逢へる妻なるべし、又「妻」は「夫」の借字なるべきか
身若可倍爾—一説、「みのわかゞへに」と訓みて、身の若きかひにといふ意か
つなぐ—射られたるしゝの跡を追ひ行くこと、或は鹿の逃げ行きて河邊の若草を噉むをいふか、「つなぐ」はその爲めに足を留めしむる謂也
琴酒を—(一)「琴」は「美」の誤にて「うまさけを」と訓じ枕詞か(二)琴は押へ酒は垂るゝによりて「押垂」とつゞけたり
押垂小野—(一)かゝる地名あるか(二)本文「小」は「水」の誤にて「おしたるみぬゆ」か、さらば「押す」までは序にて垂水野か、この歌「所念」といふところまでは「音」といはんための序
清水の—又、「さむきみもひ」又「ましみづの」
心もけやに—「けや」はいさぎよくさやけき意

我が門の、榎の實もり食む、百千鳥、千鳥は來れど、君ぞ來まさぬ。

吾門爾。千鳥數鳴。起余起余。我一夜妻。人爾所知名。
我が門に、千鳥しば鳴く。起きよ〳〵、我が一夜妻、人に知らゆな。

右歌二首。

所肰鹿乎。認河邊之。和草。身若可倍爾。佐宿之兒等波母。
射ゆしゝを、つなぐ川邊の、若草の、身若きが上に、さ寢し兒らはも。

右歌一首。

琴酒乎。押垂小野從。出流水。奴流久波不出。寒水之。心毛計夜爾。所念。音之少寸。道爾相奴鴨。少寸四。道爾相佐婆。伊呂雅世流。菅笠小笠。吾宇奈雅流。珠乃七條。取替毛。將申物乎。少寸。道爾相奴鴨。
琴酒を、押垂小野ゆ、出づる水、ぬるくは出でず、淸水の、心もけやに、思ほゆる、音の少き、道に逢はぬかも。少きよ、道に逢はさば、いろ著せる、菅笠小笠、我

紫の—枕詞

角島—長門國
若布—女に譬ふ
人のむた云々—人のいひ寄るには荒くて聞き入れず我には靡き從ふといふ意を寓す

答曰。走。雖ㇾ異ㇾ郡。同ㇾ船日久。志篤ニ兄弟一。在ニ於殉死一。豈復辭哉。津麻呂曰。府官差ㇾ僕。充ニ對馬送ㇾ粮舶ノ柂師一。容齒衰老。不ㇾ堪ニ海路一。故來祇候。願垂ニ相替一矣。於ㇾ是荒雄許諾。遂從ニ彼事一。自ニ肥前國松浦縣美彌良久埼一發ㇾ舶。直射ニ對馬一渡ㇾ海。登時忽天暗冥。暴風交ㇾ雨。竟無ニ順風一。沈ニ沒海中一焉。因ㇾ斯妻子等。不ㇾ勝ニ犢慕一。裁ニ作此謌一。或云。筑歌國守山上憶良臣悲ニ感妻子之傷一。述ㇾ志而作ニ此歌一。

紫乃。粉滷乃海爾。潜鳥。珠潜出者。吾玉爾將爲。
紫の、こかたの海に、潛く鳥、珠潛き出ば、我が玉にせむ。

右歌一首。

角島之。迫門乃稚海藻者。人之共。荒有之可杼。吾共者和海藻。
角島の、瀬戸の若布は、人のむたゝ、荒かりしかど、我がむたは和布。

右歌一首。

吾門之。榎實毛利喫。百千鳥。千鳥者雖來。君曾不來座。

なり—なりはひ
思はずろ—「ろ」は助辭
沖つ鳥—枕詞
鴨とふ船—鴨はよく水に浮ぶより船の名とせるならん
やら—筑前國にある地名か、貝原說に、筑前國早良郡
たみて—めぐりて
聞かれ來ぬかも—一說、本文「禮」は「衣」の誤にて「聞え來ぬかも」
あから小船に—丹塗の小船に托して荒雄に也

荒雄良者。妻子之産業乎婆。不念呂。年之八歳乎。待騰來不座。
荒雄らは、妻子のなりをば、思はずろ、年の八歳を、待てど來まさず。
奧鳥。鴨云船之。還來者。也良之埼守。早告許曾。
沖つ鳥、鴨とふ船の、還り來ば、やらの防人、早く告げこそ。
奧鳥。鴨云舟者。也良乃埼。多未弖榜來跡。所聞禮許奴可聞。
沖つ鳥、鴨とふ船は、やらの崎、たみて漕ぎ來と、聞かれ來ぬかも。
奧去哉。赤羅小船爾。裹遣者。若人見而。解披見鴨。
沖行くや、あから小船に、裹遣らば、若しも人見て、披き見むかも。
大舶爾。小船引副。可豆久登毛。志賀乃荒雄爾。潜將相八方。
大船に、小船引き副へ、潜くとも、志賀の荒雄に、潜き逢はめやも。

右以神龜年中。太宰府差二筑前國宗像郡之百姓宗形部津麻呂一。充二對馬送レ粮舶ノ柂師一也。
于時津麻呂詣二於糟屋郡志賀村白水郞荒雄之許一。語曰。僕有二小事一。若疑不レ許歟。荒雄

荒雄らを云々—妻の待つさま也

よすがの山と云々—荒雄を葬りたる山なればなり

志賀の海人の云々—一說、志賀は上古より海人の名高きところなれば斯くいふ

大浦田沼—海岸の大浦といふところの田邊の沼をいふか

さぶしかるかも—一說、本文「有」の上に「不」を脫したるにて「さぶしからずや」

右歌二首。

筑前國志賀白水郎歌十首

王之。不遣爾。情進爾。行之荒雄良。奥爾袖振。

大君の、遣さなくに、さかしらに、行きし荒雄ら、沖に袖振る。

荒雄良乎。將來可不來可等。飯盛而。門爾出立。雖待不來座。

荒雄らを、來むか來じかと、飯盛りて、門に出で立ち、待てど來まさず。

志賀乃山。痛勿伐。荒雄良我。余須可乃山跡。見管將偲。

志賀の山、甚くな伐りそ。荒雄らが、よすがの山と、見つゝ忍ばむ。

荒雄良我。去爾之日從。志賀乃安麻乃。大浦田沼者。不樂有哉。

荒雄らが、行きにし日より、志賀の海人の、大浦田沼は、さぶしかるかも。

官許曾。指弖毛遣米。情出爾。行之荒雄良。波爾袖振。

官こそ、指しても遣らめ。さかしらに、行きし荒雄ら、波に袖振る。

婆羅門の、作れる小田を、食む烏、瞼腫れて、幢に居り。

戀二夫君一歌一首

飯喫騰。味母不在。雖行往。安久毛不有。赤根佐須。君之情志。忘可禰津藻。

飯食へど、甘くもあらず、歩けども、安くもあらず。茜さす、君が心し、忘れ兼ねつも。

右歌一首傳云。佐爲王有二近習婢一也。于レ時宿直不レ遑。夫君難レ遇。感情馳結。係戀實深。於レ是當宿之夜。夢裡相見。覺悟探抱。曾無レ觸レ手。爾乃哽咽歔欷。高聲吟二詠此歌一。

因王聞レ之哀慟。永免二侍宿一也。

比來之。吾戀力。記集。功爾申者。五位乃冠。

此の頃の、我が戀力、記し集め、功に申さば、五位の冠。

頃者之。吾戀力。不給者。京兆爾出而。將訴。

此の頃の、我が戀力、賜ばらずは、都に出でて、訴へ申さむ。

婆羅門―(一)印度四姓の一、漢土の士、本朝の武士やうのこれに似たり、但本歌の指す所は未詳(二)當時唐土より來れる梵僧婆羅門がことか(三)僧か

烏―瞼の腫れたるやうに見ゆといふ

幢―上部に小さき旗をつけたる鉾、祭禮の時などに用ふ

飯食へど―一訓「いひはめど」

茜さす―紅顔をいふ

戀力―戀につとめたる勞力

京兆―京職の唐名「京兆尹」を略して書けるか、さらば「みさとつかさに」と訓むべきか、然る時は第五句「出でて訴へん」となる

我が戀力―「の酬を」と補ふ

右歌一首。

嗤二咲痩人一歌二首

石麻呂爾。吾物申。夏痩爾。吉跡云物曾。武奈伎取食。賣世反也

石麻呂に、我もの申す。夏痩に、良しとふ物ぞ。鰻取り召せ。

痩痩母。生有者將在乎。波多也波多。一云武奈伎乎漁取跡。河爾流勿。

痩すくも、生けらばあらむを、將や將、鰻を取ると、川に流るな。

右有三吉田連老字曰二石麻呂一。所謂仁敎之子也。其老爲レ人身體甚痩。雖二多喫飲一。形似二飢饉一。因レ此大伴宿禰家持聊作二斯歌一以爲二戲咲一也。

高宮王詠二數種物一歌二首

葛英爾。延於保登禮流。屎葛。絶事無。官將爲。

葛花に、延ひおほどれる、細子草、絶ゆること無く、宮仕せむ。

婆羅門乃。作有流小田乎。喫烏。瞼腫而。幡幢爾居。

葛英—一説「葛莢」の誤にて「かはらふぢ」か
官—「宦」の誤
おほどれる—這ひひろがれるをいふ

厭二世間無常一歌一首

生死之。二海乎。厭見。潮干乃山乎。之努比鶴鴨。

生死の、二つの海を、厭しみ、潮干の山を、忍びつるかも。

世間之。繁借廬爾。住住而。將至國之。多附不知聞。

世の中の、醜假廬に、住み〳〵て、至らむ國の、たづき知らずも。

右歌二首。河原寺之佛堂裡在二倭琴面一也。

心乎之。無何有乃郷爾。置而有者。藐孤射能山乎。見末久知香谿務。

心をし、無何有の郷に、置きたらば、藐姑射の山を、見まく近けむ。

右歌一首。

鯨魚取。海哉死爲流。山哉死爲流。死許曾。海者潮干而。山者枯爲禮。

いさな取り、海や死にする、山や死にする。死ねこそ、海は潮干て、山は枯れすれ。

意は、屯倉にて稲を多く積み重ね置く故戀の甚しきに譬ふ（二）本文「干」は「干」の誤にて「ひね〳〵し」と訓みて、物の盛り過ぎたるをひねといへば、逢ひ見ぬことの長きを稲の久しく成りて乾くに寄せたり

生死の云々―華嚴經「何能度二生死海一入二佛智海一」云々」

潮干の山―彼岸をさす、潮の干たるを生死の海の干たるにたとふ、それを忍ぶは無爲の樂果を願ふとの意

醜假廬―醜は佛法にてこの世を穢土といふ意、假廬はこの世は假のものなればいふ

至らむ國―極樂

無何有の郷―莊子に出づ、何物も無く又何事も無きところ

藐姑射の山―莊子に出づ、仙人の住めりと想像せし山

死ねこそ―死ねばこそ

曰二正月麻呂一。與二巨勢斐太朝臣一〈名字忘之也 島大夫男也〉兩人並此彼貌黑色焉。於レ是土師宿禰水道作二斯歌一嗤咲者。而巨勢朝臣豊人聞レ之。即作二和歌一酬咲也。

戲嗤レ僧歌一首

法師等之。鬚乃剃杭。馬繫。痛勿引曾。僧半甘。

法師らが、鬚の剃杭、馬繫ぎ、甚くな引きそ。法師なからかむ。

法師報歌一首

檀越也。然勿言。氏戸等我。課役徴者。汝毛半甘。

檀越や、然もな言ひそ。てこらわが、えだちはたらば、汝も半らかむ。

夢裡作歌一首

荒城田乃。子師田乃稻乎。倉爾擧藏而。阿奈于稻于稻志。吾戀良久者

あらき田の、しゝ田の稻を、倉に積みて、あなうたくし。我が戀ふらくは。

右歌一首。忌部首黑麻呂夢裡作二此戀歌一贈レ友。覺而令二誦習一如レ前。

法師云々—俗は古へより髮も鬚も剃りし也、鬚の剃杭—剃りたるあとに短く生えたる鬚、本文「鬚」は「鬚」の誤

なからかむ—「半缺かむ」の約、顏が半分にならんと戯れていへり

氏戸等我—(一)「氏」は「良」の誤にて「いへをさらが」と訓むべし(二)「氏戸」は「戸長」の誤か(三)「五十戸長等我」の誤にて「さとをさらが」

檀越—檀那

えだちはたらば—「えだち」は課役、國民の義務として公務を課せられてそのことに從ふこと、「はたる」は催促すること

あらき田—新にひらきたる田

しゝ田—猪鹿などの出て踏み荒す田

うたくし—(一)物のあまりあるまで重れることにて愈々甚しき意、上の

童ども—一訓「わくごども」
八穗蓼を—枕詞
わきくさ—(一)腋毛(二)わきが
何處にぞ—一訓「いづくぞ」
薦疊—枕詞
ぬば玉の云々—答歌の左註を見よ、さて大黑小黑は馬をいひ、斐太朝臣を大黑に、豐人を小黑に譬へしか、此の頃飛驒國より良馬を出せし故斐太朝臣の方すぐれて黑かりし故斯くよめるならん

小兒等。草者勿苅。八穗蓼乎。穗積乃阿曾我。腋草乎可禮。
童ども、草はな刈りそ。八穗蓼を、穗積のあそが、わきぐさを刈れ。

穗積朝臣和歌一首

何所曾。眞朱穿岳。薦疊。平群乃阿曾我。鼻上乎穿禮。
何處にぞ、眞赭掘る岡、薦疊、平群のあそが、鼻の上を掘れ。

嗤二咲黑色一歌一首

烏玉之。斐太乃大黑。毎見。巨勢乃小黑之。所念可聞。
ぬば玉の、斐太の大黑、見る毎に、巨勢の小黑し、思ほゆるかも。

答歌一首

造駒。土師乃志婢麻呂。白爾有者。諸欲將有。其黑色乎。
駒造る、土師の志婢麻呂、白なれば、宜べ欲しからむ。其の黑色を。

右歌者傳云。有二大舍人土師宿禰水道一字曰二志婢麻呂一也。於レ時大舍人巨勢朝臣豐人字

吾兄子之。犢鼻爾爲流。都夫禮石之。吉野乃山爾。氷魚曾懸有。（懸有反云佐家禮流）

我背子が、犢鼻褌にする、圓石の、吉野の山に、氷魚ぞさがれる。

右歌者舍人親王令二侍座一曰。或有下作二無レ所レ由之歌一人上者。賜以二錢帛一。于レ時大舍人安倍朝臣子祖父。乃作二斯歌一獻上。登時以二所レ募物錢二千文一給レ之也。

池田朝臣嗤二大神朝臣奧守一歌一首（池田朝臣名忘失也）

寺寺之。女餓鬼申久。大神乃。男餓鬼被給而。其子將播。

寺々の、女餓鬼申さく、大神の、男餓鬼賜りて、其の子生まはむ。

大神朝臣奧守報嗤歌一首

佛造。眞朱不足者。水渟。池田乃阿曾我。鼻上乎穿禮。

佛造る、眞赭足らずは、水溜る、池田のあそが、鼻の上を掘れ。

或云。

平群朝臣嗤歌一首

佐家―「家」官本「我」に作るに從ふべし

犢鼻褌―ふんどし

寺々の云々―寺に餓鬼を作り置くことあり、女餓鬼男餓鬼の二種あり、大神朝臣いたく瘦せたれば斯くよめる也

眞赭―眞は發語、赭は赤色の土、古へ物を塗るに用ひたり、本文「眞朱」は「まはに」とも訓むべきか

水溜る―枕詞

池田のあそが云々―鼻あかゝりければ、しかよめり「あそ」は人を親みて呼ぶ稱

或云―此下字の脱したる也

兩面爾―(一)「ふたがはに」と訓む(二)一本「爾」無くて「ふたおもて」か
佞人―(一)「あしけひと」と訓むか(二)「こびびと」と訓むか
兒手柏―檜の一種、葉はひばの葉に似て掌を立てたるが如し、風吹けば翻りて裏の見ゆれば「兩面」といはん序とせり
玉爾似將有見―「將有」は上下に顚倒して誤れるか
降らぬか―降れかし
額に生ふる―一訓「ぬかに生ひたる」
特牛―牡牛の強健なるものの稱

謗二佞人一歌一首

奈良山乃。兒手柏之。兩面爾。左毛右毛。佞人之友。
奈良山の、兒手柏の、兩面に、かにもかくにも、佞人の輩。

右歌一首。博士消奈行文大夫作之。

久堅之。雨毛落奴可。蓮荷爾。渟在水乃。玉爾似將有見。
久方の、雨も降らぬか。蓮葉に、溜れる水の、玉に似たる見む。

右歌一首傳云。有二右兵衞一。姓氏未詳 多能二歌作之藝一也。于レ時府家備二設酒食一。饗二宴府官人等一。於レ是饌食盛レ之皆用二荷葉一。諸人酒酣。謌舞絡繹。乃誘二兵衞一云。關二其荷葉一而作二此歌一者。登時應レ聲作二斯歌一也。

無二心所レ著歌二首

吾妹兒之。額爾生流。雙六乃。事負乃牛之。倉上之瘡。
我妹子が、額に生ふる、雙六の、特牛の牛の、倉の上の瘡。

鮫龍—「鮫」は「蛟」の誤

虎に乘り云々—神樂歌「伊曾乃加美不留也遠止古乃多知毛可奈久美乃遠志天々美也知加與波牟」古屋は大和國か

梨棗云々—初に梨の實なり次いで棗熟しさて黍を蒔き次いで粟を蒔くといふ意にいへり、二の句に君に逢ひ繼ぐ意をこめ、葵に逢ふの意をこむ

勝間田の池—大和國

鬚無きが如し—一訓「鬚無き如し」

境部王詠二數種物一歌　穗積親王之子也

虎爾乘。古屋乎越而。青淵爾。鮫龍取將來。劒刀毛我。

虎に乘り、古屋を越えて、青淵に、蛟取り來む。劒太刀もが

作主未レ詳歌一首

成棗。寸三二粟嗣。延田葛乃。後毛將相跡。葵花咲。

梨棗、黍に粟つぎ、延ふ葛の、後も逢はむと、葵花咲く。

獻二新田部親王一歌一首

勝間田之。池者我知。蓮無。然言君之。鬚無如之。

勝間田の、池は我知る、蓮無し。然か言ふ君が、鬚無きが如し。

右或有レ人聞レ之曰。新田部親王出二遊于堵裡一。御二見勝間田之池一。感二緒御心之中一。還レ自二彼池一。不レ忍二憐愛一。於レ時語二婦人一曰。今日遊行見二勝間田池一。水影濤濤。蓮花灼灼。可憐斷腸。不レ可二得言一。爾乃婦人作二此戯歌一專輙吟詠也。

詠㆓酢醬蒜鯛水葱㆒歌

醬酢爾。蒜都伎合而。鯛願。吾爾勿所見。水葱乃煮物。

醬酢に、蒜搗きかてて、鯛もがも。我にな見せそ、水葱の羹。

詠㆓玉掃鎌天木香棗㆒歌

玉掃。苅來鎌麻呂。室乃樹與。棗本。可吉將掃爲。

玉箒、刈り來鎌麻呂、室の木と、棗が下と、搔掃かむ爲め。

詠㆓白鷺啄㆑木飛㆒歌

池神。力士儛可母。白鷺乃。桙啄持而。飛渡良武。

池がみの、力士舞かも。白鷺の、桙くひ持ちて、飛び渡るらむ。

忌部首詠㆓數種物㆒歌一首 名忘失也

枳。蕀原苅除曾氣。倉將立。屎遠麻禮。櫛造刀自。

枳殼の、茨刈り退け、倉建てむ。糞遠くまれ、櫛造る刀自。

川限—川といひて厠をこめたり、本文「隅」は「限」に通ずる也
くそ鮒—俗に小鮒といふものか、くそは物の屑のこと、又は鮒の一種か
甚き—極めて賤しき意
鯛願—一說、「願」は「餔」の誤にて「たひくらふ」か、又原文のまゝにて一訓「たひねがふ」
搗きかてて—搗き交へて
水葱—水草の名、みづあふひの類、古へ植ゑ作りて食とせり
玉箒—はうきぐさ
鎌麻呂—單に鎌といふべきを奴などの名の如くいひなせる也
棗が下と—一訓「と」を「を」とす
池がみ—池上にて大和國十市郡か
力士舞—力士は手力ある佛、古へ力士の桙持ちたるまねして舞ひし舞ありしにや
苅除曾氣—「曾氣」は衍文か
刀自—婦女の稱

詠㆓行騰蔓菁食薦屋樑㆒歌

食薦敷。蔓菁煮將來。樑爾。行騰懸而。息此公。

簀薦敷き、青菜煮持來、梁に、行縢懸けて、休め此の君。

詠㆓荷葉㆒歌

蓮葉者。如是許會有物。意吉麻呂之。家在物者。宇毛乃葉爾有之。

蓮葉は、斯くこそあれも。意吉麻呂が、家なるものは、芋の葉にあらし。

詠㆓雙六頭㆒歌

一二之。目耳不有。五六。三四佐倍有。雙六乃佐叡。

一二の、目のみにあらず、五つ六つ、三つ四つさへあり。雙六の賽。

詠㆓香塔厠屎鮒奴㆒歌

香塗流。塔爾莫依。川隅乃。屎鮒喫有。痛女奴。

香塗れる、塔にな寄りそ。川くまの、くそ鮒食める、甚き女奴。

將來―「將」一本「持」、又一訓「もてこ」

簀薦―竹を簾の如く編みて裏に白き生絹をつけ白き緣をつけたるもの、食机の下に敷くに用ふ

行騰―獸の毛皮にて製し腰に著けて袴の前面を垂れおほふもの、昔時專ら騎馬に用ひたり

休め―一訓「休む」

あれも―あれ、「も」は添辭、一訓「あるもの」下に「なれ」と補ひて見よといふ

芋―「うも」は「いも」の古義ならん

雙六頭―下に「子」を脫せしか

香塗れる云々―「こり」は香の古語也、(一)佛家には香を壁に塗ることあるか、(二)香塗れる塔は淸淨にてうやまふべき限りなれば、寄りつく勿れといふ意(三)「塗」は「焚」の誤にて「こりたける」か

つぬのふくれ—(一)牛鹿などの角は皆下の方ふくれたれば醜き顔にたとふ(二)獸の面のふくれてみにくきを醜男に譬ふ
しぐひ合ひ—婚娶し、よい仲になる也、上に「何故に」と補ふ
橘の寺—菩提寺、大和國飛鳥
髫髪放—髫髪をそのまゝ結び上げずに放ち置くこと 童女
右歌云々—此左註は甚しき贅也
從來許武—直は「許」は衍文か
さし鍋に云々—さし鍋はつるをかけたる鍋にて銚子の如く口あるもの、古酒などを暖むるに用ひたり
櫟津—大和國

古歌曰

橘。寺之長屋爾。吾率宿之。童女彼奈理波。髪上都良武可。

橘の、寺の長屋に、我が率寝し、髫髪放は、髪上げつらむか。

右歌椎野連長年脉曰。夫寺家之屋者。不レ有二俗人寝處一。亦僻二若冠女一。曰二放髪丱一矣。然則腹句已云二放髪丱一者。尾句不レ可三重云二著冠之辭一哉。

決曰。

橘之。光有長屋爾。吾率宿之。宇奈爲放爾。髪擧都良武香。

長忌寸意吉麻呂歌八首

刺名倍爾。湯和可世子等。櫟津乃。檜橋從來許武。狐爾安牟佐武。

さし鍋に、湯沸せ兒ども、櫟津の、檜橋より來む、狐に浴さむ。

右一首傳云。一時衆集宴飲也。於時夜漏三更。所レ聞二狐聲一。爾乃衆諸。誘二興麻呂一曰。關二此饌具雜器狐聲河橋等物一。但作レ歌者。卽應レ聲作二此歌一也。

夕附く日―夕日
宜べよそりけり―(一)よそるは人の思を寄すること、さらばこれは戀の譬喩歌(二)本文「諾所因來」は「うべぞよりくる」と訓むべし、さらば譬喩にあらず

うまし物云々―皆人はよきが上にもよからんことを願ひて飽くことなきを、又、姓も高く容も美しき人ならば心に飽き足らぬ事はあらじを
いづく飽かぬを――一訓「いづく飽かじを」

右歌二首。河村王宴居之時。彈レ琴而卽先誦二此歌一。以爲二常行一也。

暮立之。雨打零者。春日野之。草花之末乃。白露於母保遊。

夕立の、雨打降れば、春日野の、尾花が末の、白露思ほゆ。

夕附日。指哉河邊爾。構屋之。形乎宜美。諾所因來。

夕附く日、射すや川邊に、造る家の、形を宜しみ、宜べよそりけり。

右歌二首。小鯛王宴居之日。取レ琴登時。必先吟二詠此歌一也。其小鯛王者。更名二置始多久美一斯人也。

兒部女王嗤歌一首

美麗物。何所不飽矣。坂門等之。角乃布久禮爾。四具比相爾計六。

うまし物、いづく飽かぬを、坂門らが、つぬのふくれに、しぐひ合ひにけむ。

右時有二娘子一。姓尺度氏也。此娘子不レ聽二高姓美人之所一レ誂。應レ許二下姓醜士之所一レ誂也。於レ是兒部女王裁二作此歌一。嗤二咲彼愚一也。

白玉の、緒絶えはまこと、然れども、其の緒復貫き、人もて行にけり。

右傳云。時有二娘子一。夫君ニ見レ棄。改二適他氏一也。于時或有二壯士一。不レ知二改適一。此歌ヲ贈遣。請二誂於女之父母者一。於レ是父母之意。壯士未レ聞二委曲之旨一。乃依二彼歌一。報送以顯二改適之緣一也。

穗積親王御歌一首

家爾有之。櫃爾鏁刺。藏而師。戀乃奴之。束見懸而。

家にありし、櫃に鏁差し、藏めてし、戀の奴の、摑みかゝりて。

右歌一首。穗積親王宴飮之日。酒酣之時好誦二斯歌一。以爲二恒賞一也。

可流羽須波。田廬乃毛等爾。吾兄子者。二布夫爾咲而。立麻爲所見。田廬者多夫世反

唐臼は、田廬のもとに、我が背子は、にふゞに笑みて、立ちませり見ゆ。

朝霞。香火屋之下乃。鳴川津。之努比管有常。將告兒毛欲得。

朝霞、蚊火屋が下に、鳴く蛙、忍びつゝありと、告げむ兒もがも。

鏁刺―一訓「くざさし」

唐臼は云々―田舍にて妻問するさまをよめる歌、
唐臼は一種の臼
田廬―田の中に造れる伏屋
にふゞに―にこ〳〵と
朝霞―枕詞
蚊火屋―卷十に出て詳註せり(上卷六〇〇頁)

卜部―鍋卜に問ふこと
八十の衢云々―辻占に問ふこと
君―夫
白玉―眞珠
去家有―「有」は「里」の誤

卜部をも、八十の衢も、占問へど、君を逢見む、たどき知らずも。

或本反歌曰

吾命者。惜雲不有。散追良布。君爾依而曾。長欲爲。

我が命は、惜しくもあらず、さにづらふ、君に寄りてぞ、長く欲せし。

右傳云。時有ニ娘子ー。姓車持氏也。其夫久逕ニ年序ー。不レ作ニ往來ー。于レ時娘子。係戀傷レ心。沈ニ臥痾疹ー。痩羸日異。忽臨ニ泉路ー。於レ是遣レ使。喚ニ其夫君ー來。而乃歔欷流涕。口ニ號斯歌ー。登時逝沒也。

贈歌一首

眞珠者。緒絶爲爾伎登。聞之故爾。其緒復貫。吾玉爾將爲。

白玉は、緒絶えしにきと、聞きし故に、其の緒復貫き、我が玉にせむ。

答歌一首

白玉之。緒絶者信。雖然。其緒又貫。人持去家有。

染保里―「染」の下「等」を脱せしか

御言と―御言として

神にもな負せ―神の祟りとかこつくる勿れ

卜部すゑ―一訓「卜部ませ」「ませ」は「まさせ」の略といふ

戀しくに―「しく」は助辭

戀㆓夫君㆒歌一首并短歌

佐耳通良布。君之三言等。玉梓乃。使毛不來者。憶病。吾身一會。千磐破。神爾毛莫負。卜部座。龜毛莫燒曾。戀之久爾。痛吾身曾。伊知白苦。身爾染保里。村肝乃。心碎而。將死命。爾波可爾成奴。今更。君可吾乎喚。足千根乃。母之御事歟。百不足。八十乃衢爾。夕占爾毛。卜爾毛曾問。應死吾之故。

さにづらふ、君が御言と、玉梓の、使も來ねば、思ひ病む、我が身一つぞ。千早振る、神にもな負せ。卜部すゑ、龜もな燒きそ。戀しくに、いたき我が身ぞ、著く、身に染み通り、村肝の、心碎けて、死なむ命、俄になりぬ。今更に、君か我を呼ぶ、垂乳根の、母の命か、百足らず、八十の衢に、夕占にも、卜にもぞ問ふ。死ぬべき我が故。

反歌

卜部乎毛。八十乃衢毛。占雖問。君乎相見。多時不知毛。

寤爾毛—上に「阿」を脱し「あさめにも」、又一說、上に「眞」を脫したるにて「まさめにも」正目の義也
をづめ—住吉神社の祭か
(一)本文數本「をべら」と訓む(二)一本「をへちひ」と訓む

あきかはり—(一)既に買取すみて後それを變へて元通りにすること(二)「あきかへり」と訓むべし(三)「あきかへし」と訓むべし
しらすとの御法—(一)さやうの事をはしいまゝにせよとの法令(二)本文「領爲」を「めせ」と訓み我が物にする意(三)本文「之」は「云」の誤にて「しめせとふみのり」と訓むべし(四)「しらせとのみのり」意味は「一」の說に同じ
代者曾無—(一)「しるしはぞもなき」とも訓むべし(二)「かひはかつてなし」と訓むか

墨江之。小集樂爾出而。寤爾毛。己妻尙乎。鏡登見津藻。

住吉の、をづめに出でて、現にも、己妻すらを、鏡と見つも。

右傳云。昔者鄙人（姓名未詳也）于時鄕里男女衆集野遊。是會衆之中有二鄙人夫婦一。其婦容姿端正。秀二於衆諸一。乃彼鄙人之意。彌增二愛レ妻之情一。而作二斯歌一。讃二嘆美貌一也。

商變。領爲跡之御法。有者許曾。吾下衣。變賜米。

あきかはり、しらすとの御法、有らばこそ、我が下衣、返し給はめ。

右傳云。時有レ所レ幸娘子一也。（姓名未詳）寵薄之後。還二賜寄物一。（俗云可多美）於レ是娘子怨恨。聊作二斯歌一獻上。

味飯乎。水爾釀成。吾待之。代者曾無。直爾之不有者。

熟飯を、水に釀みなし、我が待ちし、かはりはぞ無き。たゞにしあらねば。

右傳云。昔有二娘子一也。相二別其夫一。望戀經レ年。爾時夫君更娶二他妻一。正身不レ來。徒贈二裹物一。因レ此娘子作二此恨歌一。還二酬之一也。

黒髮―男のをさす
幾許戀ふれば―我が也

事しあらば―父母に責めらるゝやうなる事也
岩城―墓をいへり
な思ひ―さればとかく物思を爲す勿れ

安積山―陸奧
山の井―山中に自ら水の湧き出でて井をなせるものにて、淺きものなればり「淺き心」といはん序とせり

烏玉之。黒髮所沾而。沫雪之。零也來座。幾許戀者。
ぬば玉の、黒髮濡れて、泡雪の、降るにや來ます。幾許戀ふれば。
今案二此歌一。其夫被レ使。既經二累載一。而當二還時一。雪落之冬也。因斯娘子作二此沫雪之句一歟。

事之有者。小泊瀨山乃。石城爾母。隱者共爾。莫思吾背。
事しあらば、小泊瀨山の、岩城にも、籠らば共に。な思ひ我が背。
右傳云。時有二女子一。不レ知二父母一。竊接二壯士一也。壯士悚二惕其親呵嘖一。稍有二猶豫之意一。因此娘子。裁二作斯謌一。贈二與其夫一也。

安積香山。影副所見。山井之。淺心乎。吾念莫國。
安積山、影さへ見ゆる、山の井の、淺き心を、我が思はなくに。
右歌傳云。葛城王遣二于陸奧國一之時。國司祗承緩怠異甚。於レ時王意不レ悅。怒色顯レ面。雖レ設二飲饌一。不二肯宴樂一。於レ是有二前采女一。風流娘子。左手捧レ觴。右手持レ水。擊二之王膝一。而詠二其歌一。爾乃王意解脫。樂飲終日。

句ひ寄りなむ—心を移し寄する意
送₌與其父₋—「父」一本「夫」に作るを宜しとす
猪名川—攝津國
沖を深めて—行末を兼ねてのみの意

昔者有二壯士與一レ美女一也。（姓名未詳）不レ告二二親一。竊爲二交接一。於レ時娘子之意。欲二親令一レ知。因作二歌詠一。送二與其父一。歌曰。

隱耳。戀者辛苦。山葉從。出來月之。顯者如何。

籠りのみ、戀ふれば苦し。山の端ゆ、出で來る月の、顯さば如何に。

右或曰。男有二答歌一者。未レ得二探求一也。

昔者有二壯士一。新成二婚禮一也。未レ經二幾時一。忽爲二驛使一。被レ遣二遠境一。公事有レ限。會期無レ日。於レ是娘子。感慟悽愴。沈臥疾疹。累年之後。壯士還來。覆命既了。乃詣相視。而娘子姿容。疲羸甚異。言語哽咽。于レ時壯士。哀嘆流レ涙。裁レ歌口號。其歌一首。

如是耳爾。有家流物乎。猪名川之。奥乎深目而。吾念有來。

斯くのみに、ありけるものを、猪名川の、沖を深めて、我思へりける。

娘子臥聞二夫君之歌一。從レ枕擧レ頭。應レ聲和歌一首。

死藻生藻。同心跡。結而爲。友八違。我藻將依。
死にも生きも、同じ心と、結びてし、友や違はむ。我も寄りなむ。
何爲迹。違將居。否藻諾藻。友之波波。我裳將依。
何せむと、違ひは居らむ。否も諾も、友の並み〱、我も寄りなむ。
豈藻不在。自身之柄。人子之。事藻不盡。我藻將依。
あにもあらず、己が身のから、人の子の、言も盡さじ。我も寄りなむ。
者田爲爲寸。穗庭莫出。思而有。情者所知。我藻將依。
旗薄、穗には出でじと、忍びたる、心は知れつ。我も寄りなむ。
墨之江之。岸野之榛丹。丹穗所經迹。丹穗葉寐我八。丹穗氷而將居。
住吉の、岸野の榛に、匂ふれど、匂はぬ我や、匂ひて居らむ。
春之野乃。下草靡。我藻依。丹穗氷因將。友之隨意。
春の野に、下草靡き、我も寄り、匂ひ寄りなむ。友のまに〱。

友や違はむ―友に違はんやの意、略解に本文「八」は「不」の誤にて「友にたがはず」といへるはいかゞ
何爲迹―一說「迹」は「遡」の誤にて「なにせむに」か又、下に「歟」を脱したるにて「何すとか」也
あにもあらず―何の論もあらずの意「あに」は何にに同じ、又「あにもあらぬ」と訓じ、何の能もなきの意とする說もあり
己が身のから―我が事の故に、又、我が身なるものを
忍びたる云々―我忍びたる心は人に知られつ
匂ふれど―一訓「にはへれど」、匂はすれど、さてこの歌は住吉の榛にて摺れども色のうつらぬ如くうつらぬ我なれども物にうつらぬ我なれども(或は、もとよりはえなき我が身なれど)翁にはうつり寄らんの意

路を來れば—一訓「おはぢをけれぱ」

さゝきし—女どもに交りさゝめきさわぎしをいふ

思はえてあらむを—一訓「おもはれてある」

斯くぞしこなる—斯く老いて醜なる意と略解にいへるはいかゞ、舊訓のまゝ「かくぞしこし」と訓じ、斯くの如く爲して來りしの義とする方可ならん

おほゝしき—女の何事にもおろそかなるをいふ

かまけて—「か」は發語、負けて也

寄りなむ—翁のいふがまゝにせんの意

諸も—一訓「をも」

欲りするまゝに—一訓「ほりのまに〳〵」

かたち見ゆかも—一訓「かたち見えめや」又「かたちは見ゆや」見えよかしの意

反歌二首

死者木苑。相不見在目。生而在者。白髮子等丹。不生在目八方。

死なばこそ、相見ずあらめ。生きてあらば、白髮兒らに、生ひざらめやも。

白髮爲。子等母生名者。如是。將若異子等丹。所詈金目八。

白髮して、兒らも生きなば、斯くの如、若けむ兒らに、詈らえ兼ねめや。

娘子等和歌九首

端寸八爲。老夫之歌丹。大欲寸。九兒等哉。蚊間毛而將居。

はしきやし、翁の歌に、おほゝしき、九の兒らや、かまけて居らむ。

辱尾忍。辱尾默。無事。物不言先丹。我者將依。

辱を忍び、辱を默して、言も無く、物言はぬ先に、我は寄りなむ。

否藻諾藻。隨欲。可赦。貌所見哉。我藻將依。

否も諾も、欲りするまゝに、許すべき、かたち見ゆかも。我も寄りなむ。

子等が」かといへり
よち―同じころはひの子をいふ
か黒なる髮を―一訓「かぐろし髮を」
遠里小野―一訓「をりのをぬ」
差しべ重ねべ―さしみ重ねみに同じ、紐をさし衣を重ね也、一說「さゝへかさなへ」にて指重ねの延
うちそはし―「苧績」の枕詞
苧績の兒ら―苧を績むを業とする賤しき女子
宿に經る―未だ若くて人にも見えず家に隱れ居る意、一說、本文「屋所經」は「退所經」の誤にて「ほころへる」と訓ず
稻置少女―稻置は後世の名主といふ類にて、その者の少女也
つまどふと―夫を求むとて、娉の物として次の品品をもこすとなるべし
遠方の―遠方より來りし意か、或は本文「彼」は「浮」の誤にて「浮文」(ウキガタ)か
引帶なす―一訓「ひこびなす」キオの約コなれば也、引帶は袍・直衣などに用ふる小さき帶
我を思へか―我を思へばか

寶の兒らが、打栲は、へて織る布、日晒の、麻調布を、しきもなすは、しきに取り敷き、宿に經る、稻置少女が、つまどふと、我にぞ來たる、遠方の、二綾襪、飛ぶ鳥の、飛鳥男が、長雨忌み、縫ひし黒沓、さしはきて、庭に佇めば、な立ちそと、いさむる少女が、ほの聞きて、我にぞ來たる、水縹の、栲の帶を、引帶なす、韓帶に取らし、海神の、殿の甍に、飛び翔る、蜾蠃の如き、腰細に、取り飾らひ、眞十鏡、取竝め懸けて、己が顏、かへらひ見つゝ、春さりて、野邊を廻れば、面白み、我を思へか、さ野つ鳥、來鳴き翔らふ。秋さりて、山邊を行けば、懷しと、我を思へか、天雲も、行き棚引きぬ。還り立ち、路を來れば、内日射す、宮女、さすたけの、舍人男も、忍ぶらひ、かへらひ見つゝ、誰が子ぞとや、思ほえて、あらむを、斯くぞ醜なる、古の、さゝきし我や、はしきやし、今日やも兒らに、いさにとや、思ほえて、あらむを、斯くぞしこなる、古の賢き人も、後の世の、形見にせむと、老人を、送りし車、持て還り來し。

者。而白見。我矣思經蚊。狹野津鳥。來鳴翔經。秋避而。山邊尾往者。名津蚊爲迹。我矣思經蚊。天雲裳。行田菜引。還立。路尾所來者。打氷刺。宮尾見名。刺竹之。舍人壯裳。忍經等氷。還氷見乍。誰子其迹哉。所思而。在。如是所爲故爲。古部。狹狹寸爲我哉。端寸八爲。今日八方子等丹。五十狹邇迹哉。所思而。在。如是所爲故爲。古部之。賢人藻。後之世之。堅監將爲迹。老人矣。送爲車。持還來。

綠兒の、若子が身には、たらちし、母に抱かえ、襷かく、這ふ兒が身には、木綿肩衣、ひつりに縫ひ服、項つきの、童が身には、纐纈の、袖著衣、著し我を、によれる兒らが、よちには、蜷の腸、か黑なる髮を、眞櫛もて、こゝに掻垂れ、取り束ね、擧げても纒きみ、解き亂り、髫髮子の、丹なす兒ら、につかふ色に、懐しき、紫の、大綾の衣、住吉の、遠里小野の、眞榛以て、匂しゝ衣に、高麗錦、紐に縫ひ著け、差しべ重ねべ、竝み重ね著て、うちそはし、苧績の兒ら、あり衣の、

立ち、ゆきもとはれば、おもとじの、守(モ)らすをとめが」か
還氷見乍―一本「還」の下に「等」の字あり
行田菜引―一說「行」の上に「伊」字を脫したるにて「いゆきたなびき」也
堅監―(一)「堅」は「規」の誤にて「ためし」か(二)此二字は「鑒」の誤にて「かゞみ」か(三)原文のまゝにて「かゞみ」と訓ずべきか(四)「かたかゞみ」の約として「かたぎ」と訓ずべきか
抱かえ―一訓、「うだかえ」
ひつり―宣長說に、純裏(ヒタウラ)にて、約めて「ひつら」と訓ずべし
項つきの―一訓「くびつきの」、髮の末の頸をつく程なるをいふか
纐纈の―一訓「ゆひはたの」
によれる―(一)眞淵說には、丹づかふ妹とよめるに等しく紅顏をいふ(二)宣長說には、似合ひたる事にて、こゝの二句は「丹因四千子等我身庭」(ニヨレルヨチコラガミニハ)の錯誤なるべし(三)古義には、本文「丹」の上に「我」を脫したるにて「あによ

慮之外。偶逢二神仙一。迷惑之心。無二敢所一レ禁。近狎之罪。希贖以レ謌。卽作歌一首竝短歌。

緑子之。若子蚊見庭。垂乳爲。母所懐。搓襁。平生蚊見庭。結經方衣。氷津裡丹縫服。頸著之。童子蚊見庭。結幡之。袂著衣。服我矣。丹因子等何。四千庭。三名之綿。蚊黑爲髪尾。信櫛持。於是蚊寸垂。取束。擧而裳纒見。解亂。童兒。丹成見羅。丹津蚊經色丹。名著來。紫之。大綾之衣。墨江之。遠里小野之。眞棒持。丹穗之爲衣丹。狛錦。紐丹縫著。刺部重部。波累服。打十八爲。麻續兒等。蟻衣之。寶之子等蚊。打栲者。經而織布。日暴之。朝手作尾。信巾裳成者。之寸丹取爲支。屋所經。稻寸丁女蚊。妻問迹。我丹所來爲。彼方之。二綾裏沓。飛鳥。飛鳥壯蚊。霖禁。縫爲黑沓。刺佩而。庭立住退。莫立。禁尾迹女蚊。髣髴聞而。我丹所來爲。水縹。絹帶尾。引帶成。韓帶丹取爲。海神之。殿盖丹。飛翔。爲輕如來。腰細丹。取餝氷。眞十鏡。取雙懸而。己蚊杲。還氷見乍。春避而。野邊尾回

緑子之云々―この長歌すべて錯誤甚しきが如し、倘可レ勘

搓襁―一說「槎」は「搓」の誤にて「すきかくる」襁は字鏡に「負兒帶也、須支」

於是蚊寸垂―一說「是」は「肩」の誤にて「かたにかきたり」

童兒丹成見羅―一說「羅」は「紅」の誤にて「わらはになしみくれなゐの」と訓ず

打栲者經而織布―一說、「者」の字を下に附けて「打つたへ、はへ（延）て織る布」と訓ず

信巾裳成者―一說「者」は衍文

我丹所來爲―一說「我にもくりし」と訓ず、又「來」は「賫」の誤にて「われにぞたばりし」と訓ず、「髣髴聞而」の次なる句も同斷

庭立住退莫立禁尾迹女蚊―一說「庭立徃廻母負之云々」の誤にて「には」には

或曰。昔有二三男一。同娉二一女一也。娘子嘆息曰。一女之身。易レ滅如レ露。三雄之志。難レ平如レ石。遂乃彷二徨池上一。沈二沒水底一。於レ時其壯士等不レ勝二哀頽之至一。各陳二所心一作歌三首。（娘子字曰二鬘兒一也）

無耳之。池羊蹄恨之。吾妹兒之。來乍潛者。水波將涸。

耳梨の、池し恨めし。我妹子が、來つゝ潛かば、水はあせなむ。

足曳之。山縵之兒。今日往跡。吾爾告世婆。還來麻之乎。

足引の、山鬘の兒、今日行くと、我に告げせば、歸り來ましを。

足曳之。玉縵之兒。如今日。何隈乎。見管來爾監。

足引の、山鬘の兒、今日の如、何處の隈を、見つゝ來にけむ。

昔有二老翁一。號曰二竹取翁一也。此翁季春之月。登レ丘遠望。忽値二煮レ羹之九箇女子一也。百嬌無レ儔。花容無レ止。于レ時娘子等。呼二老翁一嗤曰。叔父來乎。吹二此燭火一也。於レ是翁曰。唯々。漸趨徐行。著二接座上一。良久娘子等皆共含レ咲。相推讓之曰。阿誰呼二此翁一哉。爾乃竹取翁謝レ之曰。非

耳梨—大和國耳梨山

あせなむ—古訓「かれなむ」

還來麻之乎—(一)「還」は「泥」の誤にて「はやく」又は「とく」と訓むべし(二)この男その時旅に出て居りしか

山鬘の兒—鬘兒といはんために斯くつゞく

玉縵之兒—「玉」は「山」の誤、この歌にはなほ他にも誤字あるか

昔云々—此話の趣は大寶廣博樓閣經一卷、又後漢書西南夷傳等に見えたる竹の傳說に據れるものかといふ

花容無止—「止」は「比」又は「匹」の誤

此燭火—「燭」は元曆本「鋤」とあるに從ふべし

誂二此娘一―「誂」は「挑」の誤か、古義には、誤にあらず、「とふ」と訓ずとて類例を擧げて論じたり
歔欷―涕泣の貌、さくり泣き
不レ敢二哀慟一―「敢」は「堪」の誤か
かざしにせむと云々―妻にせんとせし意を寓す
櫻の花―櫻兒の名に寄す
散り行けるかも―一訓「散りにけるかも」死せることを寓す
年のはに―年毎に

萬葉集 巻第十六

有由縁幷雜歌

昔者有二娘子一。字曰二櫻兒一也。于レ時有二二壯士一。共誂二此娘一。而捐レ生挌競。貪レ死相敵。於レ是娘子歔欷曰。從レ古來二于今一。未レ聞未レ見。一女之身。往適二二門一矣。方今壯士之意。有レ難二和平一。不レ如妾死。相害永息。爾乃尋二入林中一。懸レ樹經死。其兩壯士。不レ敢二哀慟一。血泣漣レ襟。各陳二心緒一。作歌二首。

春去者。挿頭爾將爲跡。我念之。櫻花者。散去流香聞。
春さらば、かざしにせむと、我が思ひし、櫻の花は、散り行けるかも。

妹之名爾。繫有櫻。花開者。常哉將戀。彌年之羽爾。
妹が名に、懸かせる櫻、花咲かば、常にや戀ひむ。いや年のはに。

雨籠—雨に降りこめられていとゞ物思ふ也

こよ—こゝより、こゝを

多婢爾之弖。毛能毛布等吉爾。保等登藝須。毛等奈那難吉曾。安我古非麻左流。
旅にして、物思ふ時に、郭公、もとなな鳴きそ。我が戀増る。

安麻其毛理。毛能母布等伎爾。保等登藝須。和我須武佐刀爾。伎奈伎等余母須。
雨籠、物思ふ時に、郭公、我が住む里に、來鳴きとよもす。

多婢爾之弖。伊毛爾古布禮婆。保登等伎須。和我須武佐刀爾。許欲奈伎和多流。
旅にして、妹に戀ふれば、郭公、我が住む里に、こよ鳴き渡る。

許己呂奈伎。登里爾曾安利家流。保登等藝須。毛能毛布等伎爾。奈久倍伎毛能可。
心無き、鳥にぞありける。郭公、物思ふ時に、鳴くべきものか。

保登等藝須。安比太之麻思於家。奈我奈家婆。安我毛布許己呂。伊多母須敝奈之。
郭公、間暫し置け。汝が鳴けば、我が思ふ心、甚も術無し。

右七首。中臣朝臣宅守寄二花鳥一陳レ思作歌。

西の御厩—此の娘子の家右馬寮の邊に在りしならん

する術—せん術

白妙の云々—形見の衣を以て神を齋ふことありしか

家布毛可母。美也故奈里世婆。見麻久保里。爾之能御馬屋乃。刀爾多弖良麻之。
今日もかも、都なりせば、見まく欲り、西の御廐の、外に立てらまし。

右二首。中臣朝臣宅守。

伎能布家布。伎美爾安波受弖。須流須敝能。多度伎乎之良爾。祢能未之曾奈久。
昨日今日、君に逢はずて、する術の、たどきを知らに、音のみしぞ泣く。

之路多倍乃。阿我許呂毛弖乎。登里母知弖。伊波敝和我勢古。多太爾安布末低爾。
白妙の、我が衣手を、取り持ちて、齋へ我が背子、直に逢ふまでに。

右二首。娘子。

和我夜度乃。波奈多知婆奈波。伊多都良爾。知利可須具良牟。見流比等奈思爾。
我が宿の、花橘は、徒に、散りか過ぐらむ、見る人無しに。

古非之奈婆。古非毛之祢等也。保等登藝須。毛能毛布等伎爾。伎奈吉等余牟流。
戀ひ死なば、戀ひも死ねとや、郭公、物思ふ時に、來鳴きとよむる。

あぢま野―越前國味眞か

宮人―宅守の友を指すか、或は本文「宮」は「家」の誤にて「いへびと」か

ほと〳〵死にき―非常によろこびしさま、一說「し」は「爲」の義、「ほと〳〵」はふた〳〵に同じ、うれしさに胸のふた〳〵とさわぎきと也

君がむた―君と共に

同じこと―同じ事にて、君が流され行きし思も我が後れ居る思も同じ事にての意ならん

けしき心―あだし心

あぢま野に、宿れる君が、歸り來む、時の迎へを、何時とか待たむ。

宮人能。夜須伊毛禰受弖。家布家布等。麻都良武毛能乎。美要奴君可聞。

宮人の、安寢も寢ずて、今日々々と、待つらむものを、見えぬ君かも。

可敝里家流。比等伎多禮里等。伊比之可婆。保登保登之爾吉。君香登於毛比弖。

歸りける、人來れりと、言ひしかば、ほと〳〵死にき。君かと思ひて。

君我牟多。由可麻之毛能乎。於奈自許等。於久禮弖乎禮杼。與伎許等毛奈之。

君がむた、行かましものを、同じこと、後れて居れど、善き事も無し。

和我世故我。可反里吉麻佐武。等伎能多米。伊能知能己佐牟。和須禮多麻布奈。

我が背子が、歸り來まさむ、時の爲め、命殘さむ。忘れ給ふな。

右八首。娘子。

安良多麻能。等之能乎奈我久。安波射禮杼。家之伎許己呂乎。安我毛波奈久爾。

新玉の、年の緒長く、逢はざれど、けしき心を、我が思はなくに。

まつりだす―(一)奉出すの意(二)本文「須」は「類」の誤にて「まつりたる」か

結ひ附け持ちて―形見の物を也

給ふれど―賜へてたまへれどもの意、一説に、鎭魂祭の祈禱をすれどもの意

逢はずまにして―逢はずにして、「ま」は助辭

麻蘇可我美。可氣弖之奴敝等。麻都里太須。可多美乃母能乎。比等爾之賣須奈。

眞十鏡、懸けて忍べと、まつりだす、形見の物を、人に示すな。

宇流波之等。於毛比之於毛婆波。之多婢毛爾。由比都氣毛知弖。夜麻受之努波世。

うるはしと、思ひし思はば、下紐に、結ひ附け持ちて、止まず忍ばせ。

右十三首。中臣朝臣宅守。

多麻之比波。安之多由布敝爾。多麻布禮杼。安我牟禰伊多之。古非能之氣吉爾。

魂は、朝夕に、給ふれど、我が胸痛し、戀の繁きに。

己能許呂波。君乎於毛布等。須敝毛奈伎。古非能未之都都。禰能未之曾奈久。

此の頃は、君を思ふと、術も無き、戀のみしつゝ、音のみしぞ泣く。

奴婆多麻乃、欲流見之君乎。安久流安之多。安波受麻爾之弖。伊麻曾久夜思吉。

ぬば玉の、夜見し君を、明くる朝、逢はずまにして、今ぞ悔しき。

安治麻野爾。屋杼禮流君我。可反里許武。等伎能牟可倍乎。伊都等可麻多武。

立ち返り―くりかへし
思ひわぶれて―思ひうらぶれて　思ひわづらひて
すゑのたねから―一説「すゑしたねから」と訓む、「すゑし」は蒔きしの意、己がなしたる業因によりてといふ意
言にぞ易き―言葉にいへばいと易き事なれど實際やつて見れば
兒らにまさめやも―留り居る娘子の悲しさにはまさらじといふ意

立ち返り、泣けども我は、しるし無み、思ひわぶれて、寢る夜しぞ多き。

左奴流欲波。於保久安禮杼毛。母能毛波受。夜須久奴流欲波。佐禰奈伎母能乎。
さ寢る夜は、多くあれども、物思はず、安く寢る夜は、さね無きものを。

與能奈可能。都年能己等和利。可久左麻爾。奈里伎爾家良之。須惠之多禰可良。
世の中の、常の理、斯く樣に、なり來にけらし、すゑのたねから。

和伎毛故爾。安布左可山乎。故要弖伎弖。奈伎都都乎禮杼。安布余思毛奈之。
我妹子に、逢坂山を、越えて來て、泣きつゝ居れど、逢ふ由も無し。

多婢等伊倍婆。許登爾曾夜須伎。須敝毛奈久。久流思伎多婢毛。許等爾麻左米也母。
旅と言へば、異にぞ易き、術も無く、苦しき旅も、兒らにまさめやも。

山川乎。奈可爾敝奈里弖。等保久登母。許己呂乎知可久。於毛保世和伎母。
山川を、中にへなりて、遠くとも、心を近く、思ほせ我妹。

文—關所の手形、一說「ふた」と訓ずべし。

多我子爾毛—一說「多」は「和」、「子」は「未」の誤、「爾毛」の下に「可毛」二字を脫す、然らば「わがみにがも」と訓むべし、郭公を我が身にもがもの意

うるはし—かはゆし

へなりて—隔りて

厭はぬ—飽かぬ

月渡るまで—一月も經る迄相見ずと也

關山—越中國礪波山の關か、又、關と川との意

さすたけの—枕詞

人嬲り—他人を愚弄すること、娘子が事によりて罪せられしをなぶるなるべし

過所奈之爾。世伎等婢古由流。保等登藝須。多我子爾毛。夜麻受可欲波牟。

文無しに、關飛び越ゆる、郭公、多我子爾毛、止まず通はむ。

宇流波之等。安我毛布伊毛乎。山川乎。奈可爾敝奈里氐。夜須家久毛奈之。

うるはしと、我が思ふ妹を、山川を、中にへなりて、安けくも無し。

牟可比爲弖。一日毛於知受。見之可杼母。伊等波奴伊毛乎。都奇和多流麻弖。

向ひ居て、一日も落ちず、見しかども、厭はぬ妹を、月渡るまで。

安我未許曾。世伎夜麻故要氐。許己爾安良米。許己呂波伊毛爾。與里爾之母能乎。

我が身こそ、關山越えて、此處にあらめ。心は妹に、寄りにしものを。

佐須太氣能。大宮人者。伊麻毛可母。比等奈夫理能未。許能美多流良武。

さすたけの、大宮人は、今もかも、人嬲りのみ、好みたるらむ。

一云。伊麻左倍也。

多知可敝里。奈氣杼毛安禮波。之流思奈美。於毛比和夫禮弖。奴流欲之曾於保伎。

速けく——速に
往ませて——おはしまさしめて
時の知らなく——其間はいつ迄か、いつ歸り來給ひて逢はるゝ事やら際限も知れずと也
そこひ——かぎり、はて
さねあらじ——まことにあらじ
下衣——下に重ね著る衣をいふか
持てれ——持ちてあれ
現しけめやも——現しからめやも、現の心地せぬ意
逢はむ日の——逢はん日までの

他國は、住み惡しとぞ言ふ。速けく、早や歸りませ。戀ひ死なぬとに。

比等久爾爾。伎美乎伊麻勢弖。伊都麻弖可。安我故非乎良牟。等伎乃之良奈久。
他國に、君を往ませて、何時までか、我が戀ひ居らむ、時の知らなく。

安米都知乃。曾許比能宇良爾。安我其等久。伎美爾故布良牟。比等波左爾安良自。
天地の、そこひの裏に、我が如く、君に戀ふらむ、人はさねあらじ。

之呂多倍能。安我之多其呂母。宇思奈波受。毛弖禮和我世故。多太爾安布麻低爾。
白妙の、我が下衣、失はず、持てれ我が背子、直に逢ふまでに。

波流乃日能。宇良我奈之伎爾。於久禮爲弖。君爾古非都都。宇都之家米也母。
春の日の、うら悲しきに、後れ居て、君に戀ひつゝ、現しけめやも。

安波牟日能。可多美爾世與等。多和也女能。於毛比美多禮弖。奴敝流許呂母曾。
逢はむ日の、形見にせよと、手弱女の、思ひ亂れて、縫へる衣ぞ。

右九首。娘子。

和伎毛故爾。古布流爾安禮波。多麻吉波流。美自可伎伊能知毛。乎之家久母奈思。
我妹子に、戀ふるに我は、たまきはる、短き命も、惜しけくも無し。

右十四首。中臣朝臣宅守。

伊能知安良婆。安布許登母安良牟。和我由惠爾。波太奈於毛比曾。伊能知多爾敝波。
命あらば、逢ふこともあらむ。我が故に、將な思ひそ。命だに經ば。

比等能宇宇流。田者宇惠麻佐受。伊麻左良爾。久爾和可禮之弖。安禮波伊可爾勢武。
人の植うる、田は植ゑまさず、今更に、國別れして、我は如何にせむ。

和我屋度能。麻都能葉見都都。安禮麻多無。波夜可反里麻世。古非之奈奴刀爾。
我が宿の、松の葉見つゝ、我待たむ。早や歸りませ、戀ひ死なぬとに。

比等久爾波。須美安之等曾伊布。須牟也氣久。波也可反里萬世。古非之奈奴刀爾。

たまきはる—枕詞

經ば—長らへてあるならば

國別れ—國を隔てて別るるをいふ

戀ひ死なぬとに—戀ひ死なぬ内に

死にせめ―死なめ

あり衣―うるはしき衣、「在りて」の序

其日―いつ〳〵と日のきまりてあるをいふ

少くも云々―末句の上に轉じて見よ、せん術無さの少くもあらず甚だしきにの意

思ひつゝ、寢ればかもとな、ぬば玉の、一夜も落ちず、夢にし見ゆる。

可久婆可里。古非牟等可禰弖。之良末世婆。伊毛乎婆美受曾。安流倍久安里家留。

斯くばかり、戀ひむと豫て、知らませば、妹をば見ずぞ、あるべくありける。

安米都知能。可未奈伎毛能爾。安良婆許曾。安我毛布伊毛爾。安波受思仁世來。

天地の、神無きものに、あらばこそ、我が思ふ妹に、逢はず死にせめ。

伊能知乎之。麻多久之安良婆。安里伎奴能。安里弖能知爾毛。安波射良米也母。

命をし、全くしあらば、あり衣の、在りて後にも、逢はざらめやも。

一云。安里弖能乃知毛。

安波牟日乎。其日等之良受。等許也未爾。伊豆禮能日麻弖。安禮古非乎良牟。

逢はむ日を、其日と知らず、常闇に、何れの日まで、我戀ひ居らむ。

多婢等伊倍婆。許等爾曾夜須伎。須久奈久毛。伊母爾戀都都。須敝奈家奈久爾。

旅と言へば、言にぞ易き、少くも、妹に戀ひつゝ、術なけなくに。

さぶしさ—不怜不樂などの意

思はずも云々—思はずして實にあり得んや　見えざらなくに—見えざるに

人—他人

和伎毛故我。可多美能許呂母。奈可里世婆。奈爾毛能母氏加。伊能知都我麻之。
我妹子が、形見の衣、無かりせば、何物以てか、命繼がまし。

等保伎山。世伎毛故要伎奴。伊麻左良爾。安布倍伎與之能。奈伎我佐夫之佐。
遠き山、關も越え來ぬ。今更に、逢ふべき由の、無きがさぶしさ。

一云。左必之佐。

於毛波受母。麻許等安里衣牟也。左奴流欲能。伊米爾毛伊母我。美延射良奈久爾。
思はずも、誠あり得むや。さ寢る夜の、夢にも妹が、見えざらなくに。

等保久安禮婆。一日一夜毛。於母波受弖。安流良牟母能等。於毛保之賣須奈。
遠くあれば、一日一夜も、思はずて、あるらむものと、思ほし召すな。

比等余里波。伊毛曾母安之伎。故非毛奈久。安良末思毛能乎。於毛波之米都追。
人よりは、妹ぞも惡しき、戀も無く、あらましものを、思はしめつゝ。

於毛比都追。奴禮婆可毛等奈。奴婆多麻能。比等欲毛意知受。伊米爾之見由流。

我ゆゑに―我なるに
かなし―いとほし、かはゆし
行き善けど―行き善けれど
此の山路―今越えおもむく山路
麗しと云々―上の歌に自ら答ふるさまによめり
もとな―徒に、この詞を三句の上に轉じて見よ
畏みと云々―勅命を畏れて妹が事を人にも告げず有りしを
思ふゑに云々―思ふ心のまゝに逢はるゝものならばの意
すがらに―終夜

塵泥の、數にもあらぬ、我ゆゑに、思ひ侘ぶらむ、妹がかなしさ。
安乎爾與之。奈良能於保知波。由吉余家杼。許能山道波。由伎安之可里家利。
青丹よし、奈良の大路は、行き善けど、此の山路は、行き惡しかりけり。
宇流波之等。安我毛布伊毛乎。於毛比都追。由氣婆可母等奈。由伎安思可流良武。
麗しと、我が思ふ妹を、思ひつゝ、行けばかもとな、行き惡しかるらむ。
加思故美等。能良受安里思乎。美故之治能。多武氣爾多知弖。伊毛我名能里都。
畏みと、告らずありしを、み越路の、手向に立ちて、妹が名告りつ。

右四首。中臣朝臣宅守上道作歌。

於毛布惠爾。安布毛能奈良婆。之末思久毛。伊母我目可禮弖。安禮乎良米也母。
思ふゑに、逢ふものならば、暫しくも、妹が目離れて、我居らめやも。
安可禰佐須。比流波毛能母比。奴婆多麻乃。欲流波須我良爾。禰能未之奈加由。
茜さす、晝は物思ひ、ぬば玉の、夜はすがらに、音のみし泣かゆ。

大伴の―枕詞

中臣朝臣云々―目錄を見よ、「茅」一本「弟」に作る

くりたゝね―繰り寄せ疊みて一つにし

蓋し―若しの意

振らさね―ふれの延言

明けてをちより―「をち」はあち也、別れてより後は

大伴の、御津の泊りに、船はてて、龍田の山を、何時か越え行かむ。

中臣朝臣宅守與二狹野茅上娘子一贈答歌

安之比奇能。夜麻治古延牟等。須流君乎。許許呂爾毛知弖。夜須家久母奈之。

足引の、山路越えむと、する君を、心に持ちて、安けくも無し。

君我由久。道乃奈我氐乎。久里多多禰。也伎保呂煩散牟。安米能火毛我母。

君が行く、道の長手を、くりたゝね、燒き滅さむ、天の火もがも。

和我世故之。氣太之麻可良婆。思漏多倍乃。蘇低乎布良左禰。見都追志努波牟。

我が背子が、蓋し退らば、白妙の、袖を振らさね。見つゝ忍ばむ。

己能許呂波。古非都追母安良牟。多麻久之氣。安氣弖乎知欲利。須辨奈可流倍思。

此の頃は、戀ひつゝもあらむ。玉櫛笥、明けてをちより、術無かるべし。

右四首。娘子臨レ別作歌。

知里比治能。可受爾母安良奴。和禮由惠爾。於毛比和夫良牟。伊母我可奈思佐。

喪なく—凶事なく
名にこそありけれ—只名のみにて其實無かりけり
家づく—家に近づく
夜明しも—徹夜しても

旅にても、喪無く早や來と、我妹子が、結びし紐は、なれにけるかも。

回ニ來筑紫海路一入レ京到ニ播磨國家島一之時作歌五首

伊敝之麻波。奈爾許曾安里家禮。宇奈波良乎。安我古非伎都流。伊毛母安良奈久爾。

家島は、名にこそありけれ。海原を、我が戀ひ來つる、妹もあらなくに。

久左麻久良。多婢爾比左之久。安良米也等。伊毛爾伊比之乎。等之能倍奴良久。

草枕、旅に久しく、あらめやと、妹に言ひしを、年の經ぬらく。

和伎毛故乎。由伎弖波也美武。安波治之麻。久毛爲爾見延奴。伊敝都久良之母。

我妹子を、行きて早や見む。淡路島、雲井に見えぬ。家づくらしも。

奴婆多麻能。欲安可之母布禰波。許藝由可奈。美都能波麻末都。麻知故非奴良武。

ぬば玉の、夜明しも船は、漕ぎ行かな。御津の濱松、待ち戀ひぬらむ。

大作乃。羊津能等麻里爾。布禰波弖弖。多都多能山乎。伊都可故延伊加武。

ぬば玉の―(一)「夜」に冠らする枕詞なるより轉じて妹の「い(寢)」に冠らしめし枕詞(二)卷十一、「ぬば玉の妹が黒髪云々」などある歌より誤りてよめるなるべし(三)或は「志岐多閑能」(シキタヘノ)などありしが誤りしか

秋されば云々―秋にならば必ず歸り來て相見んと契りし也

たゆたひ來れば―あちこちに滯りてずん〳〵と來らぬをいふ

我が袖は、袂通りて、濡れぬとも、戀忘貝、取らずは行かじ。

奴波多麻能。伊毛我保須倍久。安良奈久爾。和我許呂母弖乎。奴禮弖伊可爾勢牟。

ぬば玉の、妹が乾すべく、あらなくに、我が衣手を、濡れて如何にせむ。

毛美知婆波。伊麻波宇都呂布。和伎毛故我。麻多牟等伊比之。等伎能倍由氣婆。

黄葉は、今は移ろふ。我妹子が、待たむと言ひし、時の經行けば。

安伎佐禮婆。故非之美伊母乎。伊米爾太爾。比左之久見牟乎。安氣爾家流香聞。

秋されば、戀ひしみ妹を、夢にだに、久しく見むを、明けにけるかも。

比等里能未。伎奴流許呂毛能。比毛等加婆。多禮可毛由波牟。伊敝杼保久之弖。

一人のみ、著ぬる衣の、紐解かば、誰かも結はむ。家遠くして。

安麻久毛能。多由多比久禮婆。九月能。毛美知能山毛。宇都呂比爾家里。

天雲の、たゆたひ來れば、九月の、黄葉の山も、移ろひにけり。

多婢爾弖毛。母奈久波也許登。和伎毛故我。牟須比思比毛波。奈禮爾家流香聞。

秋山の云々―磯山の黄葉の見飽かぬに潮滿ち來れば舟に乘るとてよめるならん

下紐の―「下」といふ爲めの枕詞、下は心の中也

潮さゐ―潮の滿ち來る時行き合ひて高くなること

右一首。大使。

安伎也麻能。毛美知乎可射之。和我乎禮婆。宇良之保美知久。伊麻太安可奈久爾。

秋山の、黄葉をかざし、我が居れば、浦潮滿ち來。未だ飽かなくに。

右一首。副使。

毛能毛布等。比等爾波美要緖。之多婢毛能。思多由故布流爾。都寄曾倍爾家流。

もの思ふと、人には見えじ。下紐の、下ゆ戀ふるに、月ぞ經にける。

右一首。大使。

伊敝豆刀爾。可比乎比里布等。於伎敝欲里。與世久流奈美爾。許呂毛弖奴禮奴。

家裹に、貝を拾ふと、沖邊より、寄せ來る浪に、衣手濡れぬ。

之保非奈波。麻多母和禮許牟。伊射遊賀武。於伎都志保佐爲。多可久多知伎奴。

潮干なば、復も我來む、いざ行かむ。沖つ潮さゐ、高く立ち來ぬ。

和我袖波。多毛登等保里弖。奴禮奴等母。故非和須禮我比。等良受波由可自。

我行きて—三韓へ也
散りこすなゆめ—「こす」はこそと同じく希求の意をあらはす助詞

玉敷ける—砂の清きをいふ

竹敷の、浦まの黄葉、我行きて、歸り來るまで、散りこすなゆめ。

右一首。大判官。

多可思吉能。宇敝可多山者。久禮奈爲能。也之保能伊呂爾。奈里爾家流香聞。

竹敷の、うへかた山は、紅の、八入の色に、なりにけるかも。

右一首。少判官。

毛美知婆能。知良布山邊由。許具布禰能。爾保比爾米低弖。伊低弖伎爾家里。

黄葉の、散らふ山邊ゆ、漕ぐ船の、匂に愛でて、出でて來にけり。

多可思吉能。多麻毛奈婢可之。己藝低奈牟。君我美布禰乎。伊都等可麻多牟。

竹敷の、玉藻靡かし、漕ぎ出なむ、君が御船を、何時とか待たむ。

右二首。對馬娘子名玉槻。

多麻之家流。伎欲吉奈藝佐乎。之保美弖婆。安可受和禮由久。可反流左爾見牟。

玉敷ける、清き渚を、潮滿てば、飽かず我行く、歸るさに見む。

妹ぞ遠くは―妹にぞ遠くはの意

敢へずして―堪へずして

竹敷浦―對島國

した光る―「した」は赤く照ること

散りの紛ひ―散り亂れて面白き盛りは

宇良末―一本「宇良未」

安麻射可流。比奈爾毛月波。弖禮禮杼母。伊毛曾等保久波。和可禮伎爾家流。

天離る、鄙にも月は、照れゝども、妹ぞ遠くは、別れ來にける。

安伎左禮婆。於久都由之毛爾。安倍受之弖。京師乃山波。伊呂豆伎奴良牟。

秋されば、置く露霜に、敢へずして、都の山は、色づきぬらむ。

竹敷浦船泊之時各陳心緒作歌十八首

安之比奇能。山下比可流。毛美知葉能。知里能麻河比波。計布仁聞安留香母。

足引の、山した光る、黄葉の、散りの紛ひは、今日にもあるかも。

右一首。大使。

多可之伎能。母美知乎見禮婆。和藝毛故我。麻多牟等伊比之。等伎曾伎爾家流。

竹敷の、黄葉を見れば、我妹子が、待たむと言ひし、時ぞ來にける。

右一首。副使。

多可思吉能。宇良末能毛美知。和禮由伎弖。可敝里久流末低。知里許須奈由米。

ほつて―上手、ほむる詞
肩燒きて―鹿の肩の骨を燒きて占ふなり
道の空路に云々―中途にて死せるをいふ
昔より云々―昔より三韓に渡ることは困難なりといひ來し故に斯くいふ
新羅へか云々―半途に斯かる辛き別れをして心もくれまどひ行くべき道のたづきも知らねば、新羅へ行く事か家へ還る事かいと覺束なしとなるべし
黄葉だひにけり―黄葉ぢにけりの延言

の海人の、ほつての占を、肩燒きて、行かむとするに、夢の如、道の空路に、別する君。

反歌二首

牟可之欲里。伊比祁流許等乃。可良久爾能。可良久毛己許爾。和可禮須留可聞。
昔より、言ひける言の、韓國の、辛くも此處に、別するかも。

新羅奇敝可。伊敝爾可加反流。由吉能之麻。由加牟多登伎毛。於毛比可禰都母。
新羅へか、家にか歸る、壹岐の島、行かむたどきも、思ひかねつも。

右三首。六鯖作挽歌。

到二對馬島淺茅浦一舶泊之時不レ得二順風一經停五箇日於レ是瞻二望物華一各陳二慟心一作歌三首

毛母布禰乃。波都流對馬能。安佐治山。志具禮能安米爾。毛美多比爾家里。
百船の、泊つる對馬の、淺茅山、時雨の雨に、黄葉だひにけり。

にあれやも、秋萩の、散らへる野邊の、初尾花、假廬に葺きて、雲離れ、遠き國邊の、露霜の、寒き山邊に、宿りせるらむ。

反歌二首

波之家也思。都麻毛古杼毛母。多可多加爾。麻都良牟伎美也。之麻我久禮奴流。

はしけやし、妻も子供も、たか〴〵に、待つらむ君や、島隱れぬる。

毛美知葉能。知里奈牟山爾。夜杼里奴流。君乎麻都良牟。比等之可奈思母。

黄葉の、散りなむ山に、宿りぬる、君を待つらむ、人し悲しも。

右三首。葛井連子老作挽歌

和多都美能。可之故伎美知乎。也須家口母。奈久奈夜美伎弖。伊麻太爾母。毛奈久由可牟登。由吉能安末能。保都手乃宇良敝乎。可多夜伎弖。由加武土須流爾。伊米能其等。美知能蘇良治爾。和可禮須流伎美。

海の、恐き路を、安けくも、なく惱み來て、今だにも、喪なく行かむと、壹岐

君にあれやも—君にあればにやの意、君は宅滿を指す

假廬—喪屋のことを生時の如くいひなせる也

雲離れ—遠く離れたること

たか〴〵に—遠く望む意

島隱れぬる—島に葬られしをいふ

人—家人を指す

喪なく—凶事なく

相思はぬ―母や妻の歎きをも思はで先立ちしをいふ

右三首。挽歌。

天地等。登毛爾母我毛等。於毛比都都。安里家牟毛能乎。波之家也思。伊敝乎波奈禮弖。奈美能宇倍由。奈豆佐比伎爾弖。安良多麻能。月日毛伎倍奴。可里我禰母。都藝弖伎奈氣婆。多良知禰能。波波母都末良母。安佐都由爾。毛能須蘇比都知。由布疑里爾。己呂毛弖奴禮弖。左伎久之毛。安流良牟其登久。伊低見都追。麻都良牟母能乎。世間能。比登乃奈氣伎波。安比於毛波奴。君爾安禮也母。安伎波疑能。知良敝流野邊乃。波都乎花。可里保爾布伎弖。久毛婆奈禮。等保伎久爾敝能。都由之毛能。佐武伎山邊爾。夜杼里世流良牟。

天地と、共にもがもと、思ひつゝ、ありけむものを、はしけやし、家を離れて、浪の上ゆ、なづさひ來にて、新玉の、月日も來經ぬ。雁がねも、繼ぎて來鳴けば、垂乳根の、母も妻らも、朝露に、裳の裾ひづち、夕霧に、衣手濡れて、幸くしも、あるらむ如く、出で見つゝ、待つらむものを、世の中の、人の歎きは、相思はぬ、君

遠の朝廷―三韓を指す

齋ひ待たねか―齋ひ待たねばか

疊かも云々―宣長說に、人の旅行の程は家にてその疊を大切にしてつゝしむ事古禮也、これを過ちすればその旅行人に禍ある也といへり

岩が根の云々―海邊の岩に墓を作りて葬れるをいふなるべし

石田野―壹岐國石田郡

君にやもとな云々―よしなくも君に戀ひつゝ慕ひ行かんの意

登。伊敝比等波。麻知故布良牟爾。等保能久爾。伊麻太毛都可受。也麻等乎毛。登保久左可里弖。伊波我爾乃。安良伎之麻爾爾。夜杼里須流君。

天皇の、遠の朝廷と、韓國に、渡る我が夫は、家人の、齋ひ待たねか、疊かも、過しけむ、秋さらば、歸りまさむと、垂乳根の、母に申して、時も過ぎ、月も經ぬれば、今日か來む、明日かも來むと、家人は、待ち戀ふらむに、遠の國、未だも著かず、日本をも、遠く離りて、岩が根の、荒き島根に、宿りする君。

反歌二首

伊波多野爾。夜杼里須流伎美。伊敝妣等乃。伊豆良等和禮乎。等波婆伊可爾伊波牟。

石田野に、宿りする君。家人の、いづらと我を、問はば如何に言はむ。

與能奈可波。都禰可久能未等。和可禮奴流。君爾也毛登奈。安我孤悲由加牟。

世の中は、常斯くのみと、別れぬる、君にやもとな、我が戀ひ行かむ。

長み—長き故

足日姫—神功皇后

家にある妹し云々—家に留れる妹がさぞや我を思ふらんと思ひやれば悲しと也

麻于之弖—「于」一本「乎」に作る方正し

秋夜乎。奈我美爾可安良武。奈倉許己波。伊能禰良要奴毛。比等里奴禮婆可。
秋の夜を、長みにかあらむ。何ぞ幾許、寢の寢らえぬも、一人寢ればか。

多良思比賣。御船波弖家牟。松浦乃宇美。伊母我麻都敝伎。月者倍爾都都。
足日姫、御船はてけむ、松浦の海、妹が待つべき、月は經につゝ。

多婢奈禮婆。於毛比多要弖毛。安里都禮杼。伊敝爾安流伊毛之。於母比我奈思母。
旅なれば、思ひ絶えても、ありつれど、家にある妹し、思ひ悲しも。

安思必寄能。山等妣古由留。可里我禰婆。美也故爾由加波。伊毛爾安比弖許禰。
足引の、山飛越ゆる、雁がねは、都に行かば、妹に逢ひて來ね。

到二壹岐島一雪連宅滿忽遇二鬼病一死去之時作歌一首并短歌

須賣呂伎能。等保能朝廷等。可良國爾。和多流和我世波。伊敝妣等能。伊波比麻多禰可。多太未可母。安夜麻知之家牟。安吉佐良婆。可敝里麻左牟等。多良知禰能。波波爾麻于之弖。等伎毛須疑。都奇母倍奴禮婆。今日可許牟。明日可蒙許武

とよめ―とよませ

乞ひまくは―乞ひんは
避くる日もあらじ―一日も闕けずと也

欲乎奈我美。伊能年良延奴爾。安之比奇能。山妣故等余米。佐乎思賀奈君母。
夜を長み、寢の寢らえぬに、足引の、山彦とよめ、さ牡鹿鳴くも。

肥前國松浦郡狛島亭舶泊之夜遙望二海浪一各慟二旅心一作歌七首

可敝里伎弖。見牟等於毛比之。和我夜等能。安伎波疑須須伎。知里爾家武可聞。
歸り來て、見むと思ひし、我が宿の、秋萩薄、散りにけむかも。

右一首。秦田麻呂。

安米都知能。可未乎許比都都。安禮麻多武。波夜伎萬世伎美。麻多婆久流思母。
天地の、神を乞ひつゝ、我待たむ。早や來ませ君、待たば苦しも。

右一首。娘子。

伎美乎於毛比。安我古非萬久波。安良多麻乃。多都追奇其等爾。與久流日毛安良自。
君を思ひ、我が乞ひまくは、新玉の、立つ月毎に、避くる日もあらじ。

見そしるし無し—見る甲斐なし

妻思ひ兼ねて—妻を思ふに堪へかねて

時待つと—汐時を待つとのみ

於吉都奈美。多可久多都日爾。安敝利伎等。美夜古能比等波。伎吉弖家牟可母。
沖つ浪、高く立つ日に、逢へりきと、都の人は、聞きてけむかも。

右二首。大判官。

安麻等夫也。可里乎都可比爾。衣弖之可母。奈良能彌夜古爾。許登都礙夜良武。
天飛ぶや、雁を使に、得てしがも。奈良の都に、言告げ遣らむ。

秋野乎。爾保波須波疑波。佐家禮杼母。見流之留思奈之。多婢爾師安禮婆。
秋の野を、匂はす萩は、咲けれども、見るしるし無し。旅にしあれば。

伊毛乎於毛比。伊能爾良延奴爾。安伎乃野爾。草乎思香奈伎都。追麻於毛比可禰弖。
妹を思ひ、寢の寢らえぬに、秋の野に、さ牡鹿鳴きつ。妻思ひ兼ねて。

於保夫禰爾。眞可治之自奴伎。等吉麻都等。和禮波於毛倍杼。月曾倍爾家流。
大船に、眞楫しじ貫き、時待つと、我は思へど、月ぞ經にける。

家に―家を

燈しあへり―漁火點々相照して海上の美しきをいふ

舶泊之―下に「夜」或は「時」を脱す

可也の山―筑前國志摩郡、今親山といふとぞ

右一首。大判官。

可良等麻里。能許乃宇良奈美。多多奴日者。安禮杼母伊敝爾。古非奴日者奈之。

韓泊、能古の浦浪、立たぬ日は、あれども家に、戀ひぬ日は無し。

奴婆多麻乃。欲和多流月爾。安良麻世婆。伊敝奈流伊毛爾。安比弖許麻之乎。

ぬば玉の、夜渡る月に、あらませば、家なる妹に、逢ひて來ましを。

比左可多能。月者弖利多里。伊刀麻奈久。安麻能伊射里波。等毛之安敝里見由。

久方の、月は照りたり。暇無く、海人の漁は、燈しあへり見ゆ。

可是布氣婆。於吉都思良奈美。可之故美等。能許能等麻里爾。安麻多欲曾奴流。

風吹けば、沖つ白浪、恐みと、能古の泊に、數多夜ぞ寢る

引津亭舶泊之作歌七首

久左麻久良。多婢乎久流之美。故非乎禮婆。可也能山邊爾。草乎思香奈久毛。

草枕、旅を苦み、戀ひ居れば、可也の山邊に、さ牡鹿鳴くも。

對二此華一—「華」の上に「物」を脱せしか

遠の朝廷—太宰府を指す
戀ひにけるかも—故郷を
也

闇にや—心の闇に也

妹を思ひ、寢の寢らえぬに、曉の、朝霧籠り、雁がねぞ鳴く。

由布佐禮婆。安伎可是左牟思。和伎母故我。等伎安良比其呂母。由伎弖波也伎牟。

夕されば、秋風寒し。我妹子が、解洗衣、行きて早や著む。

和我多妣波。比左思久安良思。許能安我家流。伊毛我許呂母能。阿可都久見禮婆。

我が旅は、久しくあらし。此の我が著る、妹が衣の、垢づく見れば。

到二筑前國志麻郡之韓亭一舶泊經二三日一於時夜月之光皎皎流照奄對二此華一旅情悽噎各陳二心緒一聊以裁歌六首

於保伎美能。等保能美可度登。於毛敝禮杼。氣奈我久之安禮婆。古非爾家流可母。

大君の、遠の朝廷と、思へれど、け長くしあれば、戀ひにけるかも。

右一首。大使。

多妣爾安禮杼。欲流波火等毛之。乎流和禮乎。也未爾也伊毛我。古非都追安流良牟。

旅にあれど、夜は火燈し、居る我を、闇にや妹が、戀ひつゝあるらむ。

よしゑやし云々―明けるならば明けたとてもまゝよと也

宇良末―一本「宇良未」

一云。安麻乃平等賣我。毛能須蘇奴禮濃。
安麻能波良。布里佐氣見禮婆。欲曾布氣爾家流。與之惠也之。比等里奴流欲波。
安氣婆安氣奴等母。
天の原、振りさけ見れば、夜ぞ更けにける。よしゑやし、一人寢る夜は、明けば
明けぬとも。

右一首。旋頭歌也。

和多都美能。於伎都奈波能里。久流等伎登。伊毛我麻都良牟。月者倍爾都追。
海の、沖つ繩海苔、來る時と、妹が待つらむ。月は經につゝ。
之可能宇良爾。伊射里須流安麻。安氣久禮婆。宇良末許具良之。可治能於等伎許
由。
志可の浦に、漁する海人、明け來れば、浦ま漕ぐらし。檝の音聞ゆ。
伊母乎於毛比。伊能禰良延奴爾。安可等吉能。安左宜理其問理。可里我禰曾奈久。

歳にありて―一年たあての意

船人―彦星
乏し―羨し

日にけに―日にく

あらつ―筑前國那珂郡荒津なるべし

風のむた―風と共に

歳にありて、一夜妹に逢ふ、彦星も、我にまさりて、思ふらめやも。

由布豆久欲、可氣多知與里安比。安麻能我波。許具布奈妣等乎。見流我等母之佐。

夕月夜、影立ち寄り合ひ、天の河、漕ぐ船人を、見るが乏しさ。

海邊望レ月作歌九首

安伎可是波。比爾家爾布伎奴。和伎毛故波。伊都登加和禮乎。伊波比麻都良牟。

秋風は、日にけに吹きぬ。我妹子は、何時とか我を、齋ひ待つらむ。

大使之第二男。

可牟佐夫流。安良都能左伎爾。與須流奈美。麻奈久也伊毛爾。故非和多里奈牟。

神さぶる、あらつの崎に、寄する浪、間無くや妹に、戀ひ渡りなむ。

右一首。土師稻足。

可是能牟多。與世久流奈美爾。伊射里須流。安麻乎等女良我。毛能須素奴禮奴。

風のむた、寄せ來る浪に、漁する、海人少女らが、裳の裾濡れぬ。

明し釣る魚—夜を明して魚を釣るの意、任果てれば歸り得ぬ我が身の上より推してよめり
かしぶえ—地名、所在未詳
立ちしくらし—立ち重るらし
秋萩に云々—秋萩にて摺れる裳なり
君が御船の云々—君を留めんために也、織女の心になりてよめる歌也

志可の浦に、漁する海人、家人の、待ち戀ふらむに、明し釣る魚。
可之布江爾。多豆奈吉和多流。之可能宇良爾。於枳都之良奈美。多知之久良思毛。
かしぶえに、田鶴鳴き渡る。志可の浦に、沖つ白浪、立ちしくらしも。
一云。美知之伎奴良思。
伊麻欲里波。安伎豆吉奴良之。安思比奇能。夜麻末都可氣爾。日具良之奈伎奴。
今よりは、秋づきぬらし。足引の、山松陰に、茅蜩鳴きぬ。

七夕仰二観天漢一各陳レ所レ思作歌三首

安伎波疑爾。爾保比流和我母。奴禮奴等母。伎美我美布禰能。都奈之等理弖波。
秋萩に、匂へる我が裳、濡れぬとも、君が御船の、綱し取りてば。
右一首。大使。
等之爾安里弖。比等欲伊母爾安布。比故保思母。和禮爾麻佐里弖。於毛布良米也母。

鴨じ物―枕詞
蜷の腸―枕詞

みつれども―(一)「見つれども」か(二)「滿つれども」にて、日數の重りし意かといへどいかゞ

出でぬかも―出でよかし

志可―筑前國糟屋郡

可母自毛能。宇伎禰乎須禮婆。美奈能和多。可具呂伎可美爾。都由曾於伎爾家類。
鴨じ物、浮寢をすれば、蜷の腸、か黒き髪に、露ぞ置きにける。

比左可多能。安麻弖流月波。見都禮杼母。安我母布伊毛爾。安波奴許呂可毛。
久方の、天照る月は、みつれども、我が思ふ妹に、逢はぬ頃かも。

奴波多麻能。欲和多流月者。波夜毛伊弖奴香文。宇奈波良能。夜蘇之麻能宇倍由。伊毛我安多里見牟。旋頭歌也。
ぬば玉の、夜渡る月は、早も出でぬかも。海原の、八十島の上ゆ、妹があたり見む。

至二筑紫館一遙二望本郷一悽愴作歌四首

之賀能安麻能。一日毛於知受。也久之保能。可良伎孤悲乎母。安禮波須流香母。
志可の海人の、一日も落ちず、燒く鹽の、からき戀をも、我はするかも。

思可能宇良爾。伊射里須流安麻。伊敝妣等能。麻知古布良牟爾。安可思都流宇乎。

浦ニ於是追怛ニ艱難一悽惆作歌八首

於保伎美能。美許等可之故美。於保夫禰能。由伎能麻爾末爾。夜杼里須流可母。
大君の、命畏み、大船の、行きのまに〳〵、宿りするかも。

右一首。雪宅麻呂。

和伎毛故波。伴也母許奴可登。麻都良牟乎。於伎爾也須麻牟。伊敝都可受之弖。
我妹子は、早やも來ぬかと、待つらむを、沖に休まむ。家づかずして。

宇良末欲里。許藝許之布爾乎。風波夜美。於伎都美宇良爾。夜杼里須流可毛。
浦まより、漕ぎ來し船を、風早み、沖つみ浦に、宿りするかも。

和伎毛故我。伊可爾於毛倍可。奴婆多末能。比登欲毛於知受。伊米爾之美由流。
我妹子が、如何に思へか、ぬば玉の、一夜も落ちず、夢にし見ゆる。

宇奈波良能。於伎敝爾等毛之。伊射流火波。安可之弖登母世。夜麻登思麻見無。
海原の、沖邊にともし、漁る火は、明してともせ。大和島見む。

家づかずして―家に近づかずして
宇良末―一本「宇良末」
沖つみ浦―沖中の島の浦、「み」は美稱
思へか―思へばか
明してともせ―(一)火を明くともせ(二)夜を明してともせ

亂れて思ふ—思ひ亂ると妹に

宇良末—舊本「宇良未」うらみ也

からの浦—筑前國韓泊か

佐婆—和名抄「周防國佐波郡」

分間—「まゝ」とも「わま」とも稱すといふ

熊毛浦船泊之夜作歌四首

美夜故邊爾。由可牟船毛我。可里許母能。美太禮弖於毛布。許登都礙夜良牟。

都邊に、行かむ船もが。刈菰の、亂れて思ふ、言告げ遣らむ。

右一首。羽栗。

安可等伎能。伊敝胡悲之伎爾。宇良末欲理。可治乃於等須流波。安麻乎等女可母。

曉の、家戀しきに、浦まより、檝の音するは、海人少女かも。

於伎敝欲理。之保美知久良之。可良能宇良爾。安佐里須流多豆。奈伎弖佐和伎奴。

沖邊より、潮滿ち來らし。からの浦に、あさりする田鶴、鳴きて騷ぎぬ。

於吉敝欲里。布奈妣等能煩流。與妣與勢弖。伊射都氣也良牟。多婢能也登里乎。

沖邊より、船人上る。呼び寄せて、いざ告げ遣らむ。旅の宿りを。

一云。多妣能夜杼里乎。伊射都氣夜良奈。

佐婆海中忽遭二逆風漲浪一漂流經レ宿而後幸得二順風一到二著豐前國下毛郡分間

帰り早や來―早や歸り來れ
祝島―玖珂郡なるべし

大島鳴門―周防の地と大島との間の瀬門

これやこの―これがかの
渦潮―渦卷く潮

あどもへか―我妹子が我事を如何に深く思へばかの意

乎。
妹が家路、近くありせば、見れど飽かぬ、鞠生の浦を、見せましものを。
伊敝妣等波。可敝里波也許等。伊波比之麻。伊波比麻都良牟。多妣由久和禮乎。
家人は、歸り早や來と、祝島、齋ひ待つらむ。旅行く我を。
久左麻久良。多妣由久比等乎。伊波比之麻。伊久與布流末弖。伊波比伎爾家牟。
草枕、旅行く人を、祝島、幾代經るまで、齋ひ來にけむ。

過二大島鳴門一而經二再宿一之後追作歌二首

巨禮也己能。名爾於布奈流門能。宇頭之保爾。多麻毛可流登布。安麻乎等女杼毛。
これやこの、名に負ふ鳴門の、渦潮に、玉藻刈るとふ、海人少女ども。

右一首。田邊秋庭。

伎美能宇倍爾。宇伎禰世之欲比。安杼毛倍香。許己呂我奈之久。伊米爾美要都流。
波の上に、浮寢せし宵、あどもへか、心悲しく、夢に見えつる。

行かずは—行かぬものならば

粟島—讃岐國の西北方の海中にあり

戕—船を繫ぐ杙

あれや—あらぬものを如何で斯く

かだの大島—大島は周防國大島郡、「かだ」は其邊の總稱なりしか

周防國玖珂郡麻里布浦行之時作歌八首

眞可治奴伎。布禰之由加受波。見禮杼安可奴。麻里布能宇良爾。也杼里世麻之乎。
眞檝貫き、船し行かずは、見れど飽かぬ、鞠生の浦に、宿りせましを。

伊都之可母。見牟等於毛比師。安波之麻乎。與曾爾也故非無。由久與思乎奈美。
何時しかも、見むと思ひし、粟島を、外にや戀ひむ。行く由を無み。

大船爾。可之布里多弖天。波麻藝欲伎。麻里布能宇良爾。也杼里可世麻之。
大船に、戕振立てて、濱淸き、鞠生の浦に、宿りかせまし。

安波思麻能。安波自等於毛布。伊毛爾安禮也。夜須伊毛禰受弖。安我故非和多流。
粟島の、逢はじと思ふ、妹にあれや、安寢も寢ずて、我が戀ひ渡る。

筑紫道能。可太能於保之麻。思末志久母。見禰婆古非思吉。伊毛乎於伎弖伎奴。
筑紫路の、かだの大島、暫しくも、見ねば戀しき、妹を置きて來ぬ。

伊毛我伊敝治。知可久安里世婆。見禮杼安可奴。麻理布能宇良乎。見世麻思毛能

鳰鳥の―枕詞
家島―播磨國揖保郡
心なぐやと―心慰むやと
漕ぎ我が行けば―我が漕ぎて行けば
泣かゆ―泣かる
しるし―其甲斐
見る人―妹
置けれ―置きてあれの約言

浮けり。曉の、潮滿ち來れば、葦邊には、田鶴鳴き渡る。朝凪に、船出をせむと、船人も、水手も聲喚び、鳰鳥の、なづさひ行けば、家島は、雲居に見えぬ。我が思へる、心なぐやと、早く來て、見むと思ひて、大船を、漕ぎ我が行けば、沖つ浪、高く立ち來ぬ。外のみに、見つゝ過ぎ行き、たまの浦に、船を止めて、濱邊より、浦磯を見つゝ、泣く兒なす、音のみし泣かゆ。海神の、手纏の珠を、家苞に、妹に遣らむと、拾ひ採り、袖には入れて、返し遣る、使無ければ、持てれども、しるしを無みと、又置きつるかも。

反歌二首

多麻能宇良能。於伎都之良多麻。比利敝禮杼。麻多曾於伎都流。見流比等乎奈美。
たまの浦の、沖つ白珠、拾へれど、又ぞ置きつる、見る人を無み。

安伎左良婆。和我布禰波弖牟。和須禮我比。與世伎弖於家禮。於伎都之良奈美。
秋さらば、我が船泊てむ。忘貝、寄せ來て置けれ。沖つ白波。

朝…なす美―「津」の序

つらゝに―列々に

奈藝爾。布奈弖乎世牟等。船人毛。鹿子毛許惠欲妣。柔保等里能。奈豆左比由氣婆。伊敝之麻婆。久毛為爾美延奴。安我毛敝流。許己呂奈具也等。波夜久伎弖。美牟等於毛比弖。於保夫祢乎。許藝和我由氣婆。於伎都奈美。多可久多知伎奴。與曾能未爾。見都追須疑由伎。多麻能宇良爾。布祢乎等杼米弖。波麻備欲里。宇良伊蘇乎見都追。奈久古奈須。禰能未之奈可由。和多都美能。多麻伎能多麻乎。伊敝都刀爾。伊毛爾也良牟等。比里比等里。素弖爾波伊禮弖。可敝之也流。都可比奈家禮婆。毛弖禮杼毛。之留思乎奈美等。麻多於伎都流可毛。

朝されば、妹が手に纏く、鏡なす、美津の濱邊に、大船に、眞楫しゞ貫き、唐國に、渡り行かむと、直向ふ、敏馬を指して、潮待ちて、水脈びき行けば、沖邊には、白波高み、浦まより、漕ぎて渡れば、我妹子に、淡路の島は、夕されば、雲居隱りぬ。小夜更けて、行く方を知らに、我が心、明石の浦に、船止めて、憂寢をしつゝ、海の、沖邊を見れば、漁する、海人の少女は、小船乗り、つらゝに

たづ〳〵し—たど〳〵しくおぼつかなし

反歌一首

多都我奈伎。安之敝乎左之弖。等妣和多類。安奈多頭多頭志。比等里佐奴禮婆。

田鶴が鳴き、葦邊を指して、飛び渡る、あなたづ〳〵し。一人さ寢れば。

右丹比大夫悽㆓愴亡妻㆒歌。

屬㆑物發㆑思歌一首并短歌

安佐散禮婆。伊毛我手爾麻久。可我美原須。美津能波麻備爾。於保夫禰爾。眞可治之自奴伎。可良久爾爾。和多理由加武等。多太牟可布。美奴面乎左指天。之保麻知弖。美乎妣伎由氣婆。於伎敝爾波。之良奈美多可美。宇良末欲理。許藝弖和多禮婆。和伎毛故爾。安波治乃之麻波。由布左禮婆。久毛爲可久里奴。左欲布氣弖。由久敝乎之良爾。安我己許呂。安可志能宇良爾。布禰等米弖。宇伎禰乎詞都追。和多都美能。於枳敝乎見禮婆。伊射理須流。安麻能乎等女波。小船乘。都良良爾宇家里。安香等吉能。之保美知久禮婆。安之辨爾波。多豆奈伎和多流。安左

鴨―或は鷗か

羽根差交へて云々―羽根を打拂ひつゝ差交へての意

褻衣―ふだんぎ

和禮乃未夜。欲布爾波許具登。於毛敝禮婆。於伎敝能可多爾。可治能於等須奈里。

我のみや、夜船は漕ぐと、思へれば、沖邊の方に、檝の音すなり。

古挽歌一首并短歌

由布佐禮婆。安之敝爾佐和伎。安氣久禮婆。於伎爾奈都佐布。可母須良母。都麻等多具比弖。和我尾爾波。之毛奈布里曾等。之路多倍乃。波爾佐之可倍氏。宇知波良比。左宿等布毛能乎。由久奈都能。可敝良奴其等久。布久可是能。美延奴我其登久。安刀毛奈吉。與能比登爾之弖。和可禮爾之。伊毛我伎世弖思。奈禮其呂母。蘇弖加多思吉氏。比登里可母禰牟。

夕されば、葦邊に騒ぎ、明け來れば、沖になづさふ、鴨すらも、妻とたぐひて、我が尾には、霜な降りそと、白妙の、羽根差交へて、打拂ひ、さ寝とふものを、行く水の、還らぬ如く、吹く風の、見えぬが如く、跡も無き、世の人にして、別れにし、妹が著せてし、褻衣、袖片敷きて、獨りかも寢む。

山川の、淸き川瀨に、遊べども、奈良の都は、忘れ兼ねつも。

伊蘇乃麻由。多藝都山河。多延受安良婆。麻多母安比見牟。秋加多麻氣氏。
磯の間ゆ、激ぎつ山川、絕えずあらば、又も逢見む。秋かたまけて。

故悲思氣美。奈具左米可爾氏。比具良之能。奈久之麻可氣爾。伊保利須流可母。
戀繁み、慰め兼ねて、茅蜩の、鳴く島陰に、庵するかも。

和我伊能知乎。奈我刀能之麻能。小松原。伊久與乎倍弖加。可武佐備和多流。
我が命を、長門の島の、小松原、幾代を經てか、神さび渡る。

從二長門浦一船出之夜仰二觀月光一作歌三首

月余美乃。比可里乎伎欲美。由布奈藝爾。加古能古惠欲妣。宇良末許具可母。
月夜見の、光を淸み、夕凪に、水手の聲呼び、浦ま漕ぐかも。

山乃波爾。月可多夫氣婆。伊射里須流。安麻能等毛之備。於伎爾奈都佐布。
山の端に、月傾けば、漁する、海人の燈火、沖になづさふ。

絕えずあらば—身に恙なきを山川に寄せていへり、又、單にこの山川の水の絕えずあらば秋片設けて再びこの好景を見んの義

秋かたまけて—秋になりての意

我が命云々—老木の松を見て小松の代々を經て斯くなれる如く我が命も長かれといはふなり

月夜見—一訓「つくよみ」
浦ま—一訓「うらみ」

なづさふ—浸漬傍の義、前出

風速—安藝國高田郡

歎きのきりに—「きり」はくもりの約言、潮ぐもりは風の起るに從ひて立つものなればいふ、又、妹が歎のいぶきの霧

可敝流散爾。伊母爾見勢武爾。和多都美乃。於伎都白玉。比利比弖由賀奈。

歸るさに、妹に見せむに、海の、沖つ白玉、拾ひて行かな。

風速浦舶泊之夜作歌二首

和我由惠仁。妹奈氣久良之。風早能。宇良能於伎敝爾。奇里多奈妣家利。

我が故に、妹歎くらし。風速の、浦の沖邊に、霧棚引けり。

於伎都加是。伊多久布伎勢波。和伎毛故我。奈氣伎能奇里爾。安可麻之母能乎。

沖つ風、甚く吹きせば、我妹子が、歎きのきりに、飽かましものを。

安藝國長門島舶泊礒邊作歌五首

伊波婆之流。多伎毛登杼呂爾。鳴蟬乃。許惠乎之伎氣婆。京師之於毛保由。

岩走る、瀧もとゞろに、鳴く蟬の、聲をし聞けば、都し思ほゆ。

右一首。大石蓑麻呂。

夜麻河泊能。伎欲吉可波世爾。安蘇倍杼母。奈良能美夜古波。和須禮可禰都母。

月人男―(一)牽牛星(二)月のことにて、月の歌なるを誤りて七夕歌と書き添へしにや

柿本朝臣人麻呂歌曰。安美能宇良。又曰。多麻母能須蘇爾。

七夕歌一首

於保夫爾爾。麻可治之自奴伎。宇奈波良乎。許藝弖天和多流。月人乎登枯。
大船に、眞櫂しゞ貫き、海原を、漕ぎ出て渡る、月人男。

右柿本朝臣人麻呂歌。

備後國水調郡長井浦舶泊之夜作歌三首

安乎爾與之。奈良能美也故爾。由久比等毛我母。久佐麻久良。多妣由久布爾能。登麻利都礙武仁。旋頭歌也。
青丹よし、奈良の都に、行く人もがも。草枕、旅行く船の、泊り告げむに。

右一首。大判官。壬生使主宇太麻呂也。

海原乎。夜蘇之麻我久里。伎奴禮杼母。奈良能美也故波。和須禮可禰都母。
海原を、八十島隱り、來ぬれども、奈良の都は、忘れ兼ねつも。

奈我道乎──「乎」卷三には「從」

英虞の浦──志摩國

之路多倍能。藤江能宇良爾。伊射里須流。安麻等也見良武。多妣由久和禮乎。

白妙の、藤江の浦に、漁する、海人とや見らむ。旅行く我を。

　柿本朝臣人麻呂歌曰。安良多倍乃。又曰。須受吉都流。安麻登香見良武。

安麻射可流。比奈乃奈我道乎。孤悲久禮婆。安可思能門欲里。伊敝乃安多里見由。

天離る、鄙の長路を、戀ひ來れば、明石の門より、家のあたり見ゆ。

　柿本朝臣人麻呂歌曰。夜麻等思麻見由。

武庫能宇美能。爾波余久安良之。伊射里須流。安麻能都里船。奈美能宇倍由見由。

武庫の海の、にはよくあらし。漁する、海人の釣船、波の上ゆ見ゆ。

　柿本朝臣人麻呂歌曰。氣比乃宇美能。又曰。可里許毛能。美太禮氏出見由。安麻能都里船。

安胡乃宇良爾。布奈能里須良牟。乎等女良我。安可毛能須素爾。之保美都良武賀。

英虞の浦に、船乗すらむ。少女らが、赤裳の裾に、潮滿つらむか。

青丹よし—枕詞

青柳の云々—(一)枝葉廣がりて田をおはへばなり(二)田に柳を植ゑ置きてはねつるべにするため(三)楊の枝を伐りて苗代の水口にさして神を齋ひ奉るをいふなるべし、此說可ならんか

齋種—苗代に蒔くべき種子、水口祭などしていみ淸めて蒔けばいふ

飾磨川—播磨國

玉藻刈る云々—以下四首卷三に出づ、こゝは二句と結句とをあやまれり

青丹よし、奈良の都に、棚引ける、天の白雲、見れど飽かぬかも。

右一首。詠レ雲。

安平楊疑能。延太伎里於呂之。湯種蒔。忌忌伎美爾。故非和多流香母。

青柳の、枝切りおろし、齋種蒔き、忌々しく君に、戀ひ渡るかも。

妹我素弖。和可禮弖比左爾。奈里奴禮杼。比登比母伊毛乎。和須禮弖於毛倍也。

妹が袖、別れて久に、なりぬれど、一日も妹を、忘れて思へや。

和多都美乃。宇美爾伊弖多流。思可麻河泊。多延無日爾許曾。安我故非夜麻米。

海の、海に出でたる、飾磨川、絕えむ日にこそ、我が戀止まめ。

右三首。戀歌。

多麻藻可流。乎等女乎須疑氐。奈都久佐能。野島我左吉爾。伊保里須和禮波。

玉藻刈る、少女を過ぎて、夏草の、野島が崎に、庵す我は。

柿本朝臣人麻呂歌曰。敏馬乎須疑氐。又曰。布禰知可豆伎奴。

玉の浦—一說、備前備中の兩國の間邊にあるか
月夜見—一訓「つくよみ」
神島—備中國か
離磯—陸地より遠くさし出でたる磯、こゝは備後國鞆の浦なるべし
うたがたも—姑くと思ふ間、略解には危ふげに年經て立てる木を見てといへどいかゞ
あれや—あらんや然るに如何にして

奴波多麻能。欲波安氣奴良之。多麻能宇良爾。安佐里須流多豆。奈伎和多流奈里。
ぬばたまの、夜は明けぬらし。玉の浦に、漁する田鶴、鳴き渡るなり。
月余美能。比可里乎伎欲美。神島乃。伊素末乃宇良由。船出須和禮波。
月夜見の、光を淸み、神島の、磯まの浦ゆ、船出す我は。
波奈禮蘇爾。多氐流牟漏能木。宇多我多毛。比左之伎時乎。須疑爾家流香母。
離磯に、立てる室の木、うたがたも、久しき時を、過ぎにけるかも。
之麻思久母。比等利安里宇流。毛能爾安禮也。之麻能牟漏能木。波奈禮弖安流良武。
暫くも、一人ありうる、ものにあれや。しまの室の木、離れてあるらむ。

右八首。乘レ船入レ海路上作歌。

當レ所誦詠古歌

安乎爾余志。奈良能美夜古爾。多奈妣家流。安麻能之良久毛。見禮杼安可奴加毛。

海原に、浮寢せむ夜は、沖つ風、甚くな吹きそ。妹もあらなくに。

大伴能。美津爾布奈能里。許藝出而者。伊都禮乃思麻爾。伊保里世武和禮。

大伴の、御津に船乘り、漕ぎ出ては、何れの島に、庵せむ我。

右三首。臨レ發之時作歌。

之保麻都等。安里家流布禰乎。思良受志弖。久夜之久妹乎。和可禮伎爾家利。

潮待つと、ありける船を、知らずして、悔しく妹を、別れ來にけり。

安佐妣良伎。許藝弖天久禮婆。牟故能宇良能。之保非能可多爾。多豆我許惠須毛。

朝開き、漕ぎ出て來れば、武庫の浦の、潮干の潟に、田鶴が聲すも。

和伎母故我。可多美爾見牟乎。印南都麻。之良奈美多加彌。與曾爾可母美牟。

我妹子が、形見に見むを、印南づま、白浪高み、外にかも見む。

和多都美能。於伎都之良奈美。多知久良思。安麻乎等女等母。思麻我久流見由。

海の、沖つ白浪、立ち來らし、海人少女ども、島隱る見ゆ。

大伴の―枕詞

朝開き―朝船の帆を開きて湊を出づること

印南づま―卷三、印南都麻うらみを過ぎて、卷六、伊奈美嬬辛荷の島とある所

けしき心—あだし心

妹が目を欲り—妹を見んと欲して

妹と云々—妹と二人在りし時はさてもありしかどもの意

波呂波呂爾。於毛保由流可母。之可禮杼毛。異情乎。安我毛波奈久爾。
遙々に、思ほゆるかも。然れども、けしき心を、我が思はなくに。

右十一首。贈答。

由布佐禮婆。比具良之伎奈久。伊故麻山。古延弖曾安我久流。伊毛我目乎保里。
夕されば、茅蜩來鳴く、生駒山、越えてぞ我が來る。妹が目を欲り。

右一首。秦間滿。

伊毛爾安波受。安良婆須敝奈美。伊波爾布牟。伊故麻乃山乎。故延弖曾安我久流。
妹に逢はず、あらば術無み、岩根踏む、生駒の山を、越えてぞ我が來る。

右蹔還ニ私家一陳レ思。

妹等安里之。時者安禮杼毛。和可禮弖波。許呂母弖佐牟伎。母能爾曾安里家流。
妹とありし、時はあれども、別れては、衣手寒き、ものにぞありける。

海原爾。宇伎禰世武夜者。於伎都風。伊多久奈布吉曾。妹毛安良奈久爾。

伊多之—「多」一本「太」に作る方宜し
いますー往にます
つゝむこと無くー恙無く
下にをー下によ「を」は詠歎辭
之多爾毛—一説、「毛」は「乎」の誤にて「下にを」
逢はむものゆゑー逢はんものなるに
栲衾ー枕詞
君が目をー君と相見ることをの意

大船乎。安流美爾伊多之。伊麻須君。都追牟許等奈久。波也可敝里麻勢。
大船を、荒海に出し、います君、つゝむこと無く、早や歸りませ。

眞幸而。伊毛我伊波伴伐。於伎都奈美。知敝爾多都等母。佐波里安良米也母。
眞幸くて、妹が齋はゞ、沖つ浪、千重に立つとも、障りあらめやも。

和可禮奈婆。宇良我奈之家武。安我許呂母。之多爾乎伎麻勢。多太爾安布麻弖爾。
別れなば、うら悲しけむ。我が衣、下にを著ませ。直に逢ふまでに。

和伎母故我。之多爾毛伎余等。於久理多流。許呂母能比毛乎。安禮等可米也母。
我妹子が、下にも著よと、贈りたる、衣の紐を、我解かめやも。

和我由惠爾。於毛比奈夜勢曾。秋風能。布可武曾能都奇。安波牟母能由惠。
我が故に、思ひな痩せそ。秋風の、吹かむ其の月、逢はむものゆゑ。

多久夫須麻。新羅邊伊麻須。伎美我目乎。家布可安須可登。伊波比弖麻多牟。
栲衾、新羅へいます、君が目を、今日か明日かと、齋ひて待たむ。

萬葉集 卷第十五

遣二新羅一使人等悲レ別贈答及海路慟レ情陳レ思并當所誦詠之古謌

武庫能浦乃。伊里江能渚鳥。羽具久毛流。伎美乎波奈禮弖。古非爾之奴倍之。
武庫の浦の、入江の洲鳥、羽含もる、君を離れて、戀に死ぬべし。

大船爾。伊母能流母能爾。安良麻勢波。羽具久美母知氐。由可麻之母能乎。
大船に、妹乘るものに、あらませば、羽含み持ちて、行かましものを。

君之由久。海邊乃夜杼爾。奇里多多婆。安我多知奈氣久。伊伎等之理麻勢。
君が行く、海邊の宿に、霧立たば、我が立ち歎く、息と知りませ。

秋佐良婆。安比見牟毛能乎。奈爾之可母。奇里爾多都倍久。奈氣伎之麻左牟。
秋さらば、逢見むものを、何しかも、霧に立つべく、歎きしまさむ。

遣二新羅一云々—此題詞目録と異なり、卷頭所載の目録參照

羽含もる—親鳥が羽にて鶵を被ふこと

君—夫をさす

をさと―(一)地名か(二)「を」は單に發語か

みやじろ―地名
籠めて忍ばむ―心の内にこめかくして相愛せん

山菅の―枕詞
そがひ―背向也
寢しく―「く」は助辭

乎佐刀奈流。波奈多知波奈乎。比伎余知氐。乎良無登須禮杼。宇良和可美許曾。
をさとなる、花橘を、引攀ぢて、折らむとすれど、うら若みかも。

美夜自呂乃。緒可敝爾多氐流。可保我波奈。莫佐吉伊低曾爾。許米氐思努波武。
みやじろの、岡邊に立てる、顔が花、な咲き出でそね。籠めて忍ばむ。

奈波之呂乃。古奈伎我波奈乎。伎奴爾須里。奈流留麻爾末仁。安是可加奈思家。
苗代の、小水葱が花を、衣に摺り、馴るゝまに〳〵、何ぜか悲しけ。

挽歌

可奈思伊毛乎。伊都知由可米等。夜麻須氣乃。曾我比爾宿思久。伊麻之久夜思母。
かなし妹を、何地行かめと、山菅の、そがひに寢しく、今し悔しも。

以前歌詞未レ得三勘知二國土山川之名一也。

金門出—門出

おほゝしく見つゝぞ來ぬる—妻と二人ならねば長き道を心むすぼれて景も眺めずもぼつかなく來れりとなるべし

含まる時に—若葉の程なるを未しき童女に喩へしならん

風吹かずかも—おとづれたより誘はざらんやの意か

得難き陰を—陰は上の葛陰と同じく山陰葛のこと、妹に譬ふ

防人に、立ちし朝明の、金門出に、手離れ惜しみ、泣きし兒らはも。

安之能葉爾。由布宜利多知氏。可母我鳴乃。左牟伎由布敝思。奈乎波思奴波牟。

葦の葉に、夕霧立ちて、鴨が音の、寒き夕し、汝をば忍ばむ。

於能豆麻乎。比登乃左刀爾於吉。於保保思久。見都都曾伎奴流。許能美知乃安比太。

己妻を、人の里に置き、おほょしく、見つゝぞ來ぬる。此の道の間。

譬喩歌

安杼毛敝可。阿自久麻夜末乃。由豆流波乃。布敷麻留等伎爾。可是布可受可母。

何ど思へか、あじくま山の、讓葉の、含まる時に、風吹かずかも。

安之比奇能。夜麻可都良加氣。麻之波爾母。衣可多伎可氣乎。於吉夜可良佐武。

足引の、山葛蔭、眞廛にも、得難き蔭を、置きや枯さむ。

は「可幾」の誤にて「かき」にて「あらがきまがき」か、あらがきは荒播にて、春に田を馬鍬もて播きならすこと、まがきは眞播にて、苗を植うる時に田を播くこと、さて二句まで序(三)「まゆみ」はまゆむと活用する語にて、地の干わるゝこと
日かとれば—日が照れば也
雨を待とのす—雨を待つ如く
安里蘇夜—(一)「夜」は「麻」の誤にて「ありそま」か、荒磯ま(二)「夜」は「沼」の誤にて「ありそぬ」か
こすげ—武藏國葛飾郡に今小菅あり、其處か
何どすゝか—何とすとか、何としつゝか
片寄る—傾く
曾和敝可毛—一說、「敝」一本「惠」とある方宜し、「そわゑかも」にて、いひさわぎ立ちての意といへどいかゞ、又一說、本文「和敝」は「故遠」の誤にて「そこをかも」か
我妹子に云々—この歌解し難し
かめに負せむ—一說、神の崇ぞといひなさんの意、本文「加米」一本「加未」

可能古呂等。宿受屋奈里奈牟。波太須酒伎。宇良野乃夜麻爾。都久可多與留母。
彼の兒ろと、寢ずやなりなむ。旗薄、うらぬの山に、月片寄るも。

和伎毛古爾。安我古非思奈婆。曾和敝可毛。加米爾於保世牟。己許呂思良受氏。
我妹子に、我が戀ひ死なば、そわへかも、かめに負せむ。心知らずて。

防人歌

於伎氏伊可婆。伊毛婆摩可奈之。母知氏由久。安都佐能由美乃。由都可爾母我毛。
置きて行かば、妹はまがなし。持ちて行く、梓の弓の、弓束にもがも。

於久禮爲氏。古非波久流思母。安佐我里能。伎美我由美爾母。奈良麻思物能乎。
後れ居て、戀ひば苦しも。朝獵の、君が弓にも、ならましものを。

右二首問答。

佐伎母理爾。多知之安佐氣乃。可奈刀低爾。手婆奈禮乎思美。奈吉思兒良婆母。

於保夫禰乎。倍由毛登毛由毛。可多米提之。許曾能左刀妣等。阿良波左米可母。

大船を、舳ゆも艫ゆも、堅めてし、こその里人、顯さめかも。

麻可禰布久。爾布能麻曾保乃。伊呂爾低氐。伊波奈久能未曾。安我古布良久波。

眞金吹く、丹生の眞赭の、色に出て、言はなくのみぞ。我が戀ふらくは。

可奈刀田乎。安良我伎麻由美。比賀刀禮婆。阿米乎萬刀能須。伎美乎等麻刀母。

金門田を、あらがきまゆみ、日かとれば、雨を待とのす、君をと待とも。

安里蘇夜爾。於布流多麻母乃。宇知奈婢伎。比登里夜宿良牟。安乎麻知可禰氐。

荒磯やに、生ふる玉藻の、打靡き、一人や寢らむ。我を待ち兼ねて。

比多我多能。伊蘇乃和可米乃。多知美多要。和乎可麻都那毛。伎曾毛己余必母。

ひた潟の、磯の若布の、立亂え、我をか待つなも。昨夜も今宵も。

古須氣呂乃。宇良布久可是能。安騰須酒香。可奈之家兒呂乎。於毛比須吾左牟。

こすけろの、浦吹く風の、何どすゝか、かなしけ兒らを、思ひ過さむ。

にて、うかれつゝよそにしてあちばの意(二)置ければにて、女を寢ずして濟けばの意

ゐをどかもしね―「ど」は何(ア)どかの略、「しむ」はせん

忘れはせなゝ―(一)忘れもせぬかし(二)「濟ぐ船の」は惱しき譬にて、初句の上に轉じて見よ、「忘れはせなゝ」は忘れはせずなにて、忘れぬ意

逢はぬかも―逢へかし

舳ゆも艫ゆも云々―(一)艫は艫舳の堅めを專らとして作るを、內情を知れる里人によく口堅めせしに譬ふ(二)とまれる船を綱にて繋ぎ堅めしに譬へしなるべし

こそ―地名文か、或は本「曾」は「賀」の誤にて「こが」にや

顯さめかも―かもは反語

丹生―上野國甘樂郡か

眞赭―「眞」は發語、赤色の土、古へ物を塗るに用ひたり

金門田―門田、門の外にある田

あらがきまゆみ―(一)荒木眞弓、(荒木にてつくれる眞弓)初句より「あらがき」とつゞけ、其れを荒木眞弓といひなし、弓といふより「引く」と三句へつゞけたり(二)本文「由美」

咲く浪―高く立つ浪、思ふ男に譬ふ
平瀬―瀬の平かなるところ、なべての男に譬ふ
うら立ち云々―(一)占に問ふこと、「もろ」は助辭(二)本文「字」は「牟」の誤にて、驟群立の義ならんか、二、三句以下は人のいひさわぐことゝを我が侘しく思ふ如く君も侘しく思ふらんの意、「なも」は「らむ」に同じ、「のみ」は如く(三)「さわゑ」はさはへの訛にて五月蠅「うらだち」は「むらだち」にて、まつが浦のうらをうけたるのみならず、まつの浦に立つ浪の如くむらだち五月蠅なす人言の意
禰麻久母―「爾」一本「許」.
入る潮の―(一)その響を人のいひさわぐに譬ふ(二)三句迄は「入りて」の序
こてたすくもか―(一)本文「受」は「家」の誤にて「こてたけくもか」にて、人言のいたけくもあらんかの意、(二)本文「久」は「之」の誤にて「こてたすしもが」にて、こちたからずしもがなの意
まくらがの―枕詞
唐檝の云々―人言の繁きに譬ふ
潮船―止りて潮待する船
おかれば―(一)浮かれば

安治可麻能。可家能水奈刀爾。伊流思保乃。許氏多受久毛可。伊里氏爾麻久母。
あぢかまの、かけの湊に、入る潮の、こてたすくもか。入りて寝ましを。

伊毛我奴流。等許乃安多理爾。伊波具久留。水都爾母我毛與。伊里氏爾末久母。
妹が寝る、床のあたりに、岩潛る、水にもがもよ。入りて寝まくも。

麻久良我乃。許我能和多利乃。可良加治乃。於登太可思母奈。宿莫敝兒由惠爾。
まくらがの、こがの渡の、唐檝の、音高しもよ。寝なへ兒ゆゑに。

思保夫禰能。於可禮婆可奈之。左宿都禮婆。比登其等思氣志。那乎杼可母思武。
潮船の、おかれば悲し。さ寝つれば、人言繁し。汝をどかもしむ。

奈夜麻思家。比登都麻可母與。許具布禰能。和須禮婆勢奈那。伊夜母比麻須爾。
悩しけ、人妻かもよ。漕ぐ船の、忘れはせなゝ、いや思ひ増すに。

安波受之氏。由加婆乎思家牟。麻久良我能。許賀己具布禰爾。伎美毛安波奴可毛。
逢はずして、行かば惜しけむ。まくらがの、こが漕ぐ船に、君も逢はぬかも。

立處鳴らすも—己の立てる處をふみならして妹の來る方を望み居るをいふ
鶴—鶴鴨の略、本文「知」一本「遲」
すさの入江—攝津國にもあれどこれは東國にあるなるべし
いとのきて—甚しく

たゆひ潟—越前國にもあれどこゝは東國か
いづゆかも—何處よりか「も」は助辭
おしていなと云々—強ひて否といひて、稻は舂かねど、又否といふを強ひられて舂くにはあらねど、此歌古義の說の如く、賤しき女の許へ通ふ男の契りし夜行かでその翌晚行きし時、その女稻舂き居て、昨夜のひとり寢になやまし苦しければ今宵も思ひ侘びて獨り寢んとすと男をたしなむる趣にや、尚可勘
あぢかま—讃岐にありといへどこゝは東國か

阿知乃須牟。須沙能伊利江乃。許母理沼乃。安奈伊伎豆加思。美受比佐爾指天。
鶴の栖む、すさの入江の、籠沼の、あな息づかし。見ず久にして。
奈流世呂爾。木都能余須奈須。伊等能伎提。可奈思家世呂爾。比等佐敝余須母。
鳴瀬ろに、木積の寄すなす、いとのきて、かなしけ背ろに、人さへ寄すも。
多由比我多。志保彌知和多流。伊豆由可母。加奈之伎世呂我。和賀利可欲波牟。
たゆひ潟、潮滿ち渡る。いづゆかも、悲しき背ろが、我許通はむ。
於志氐伊奈等。伊禰波都可禰杼。奈美乃保能。伊多夫良思毛與。伎曾比登里宿而。
おしていなと、いねはつかねど、浪の穗の、いた振らしもよ。昨夜一人寢て。
阿遲可麻能。可多爾左久奈美。比良湍爾母。比毛登久毛能可。加奈思家乎於吉氐。
あぢかまの、潟に咲く浪、平瀬にも、紐解くものか。かなしけを措きて。
麻都我宇良爾。佐和惠宇良太知。麻比等其等。於毛抱須奈母呂。和賀母抱乃須毛。
まつが浦に、さわゐうら立ち、眞人言、思ほすなもろ。我が思ほのすも。

行このす―行くなす、行く如くの意
危はども―危けれども
まゆかせらふも―「ま」は發語にて、床しくすの意か

はさせて―走らせて

むろがやのつるの堤―(一)陸奥か(二)甲斐に都留郡あり、其處か

あすか川―(一)本文「可」は「太」の誤にて「あすだ川」か、さらば更科日記古本に「むさしと下つふさのあはひなるあすだ川」(二)東國にも大和國のと同名の川ありしなるべし(三)大和の飛鳥川なるべし
下濁れるを―男の心の誠ならぬに譬ふ
堰くと知りせば―親などの逢はせじとするを兼ねて知りたらば

あず邊から、駒の行このす、危はども、人妻兒ろを、まゆかせらふも。
佐射禮伊思爾。古馬乎波佐世氐。己許呂伊多美。安我毛布伊毛我。伊敝乃安多里可聞。
小石に、駒をはさせて、心いたみ、我が思ふ妹が、家のあたりかも。
武路我夜乃。都留能都追美乃。那利奴賀爾。古呂波伊敝杼母。伊末太年那久爾。
むろがやの、つるの堤の、なりぬがに、兒ろは言へども、未だ寢なくに。
阿須可河泊。之多爾其禮留乎。之良受思天。勢奈那登布多理。左宿而久也思母。
あすか川、下濁れるを、知らずして、せなゝと二人、さ寢て悔しも。
安須可河泊。世久登之里世波。安麻多欲母。爲禰氐己麻思乎。世久得四里世波。
あすか川、堰くと知りせば、數多夜も、率寢て來ましを。堰くと知りせば。
安乎楊木能。波良路可波刀爾。奈乎麻都等。西美度波久末受。多知度奈良須母。
青柳の、張らろ川門に、汝を待つと、淸水は汲まず、立處鳴らすも。

久敝胡之爾。武藝波武古宇馬能。波都波都爾。安比見之兒良之。安夜爾可奈思母。

くべ越しに、麥食む駒の、はつ〳〵に、逢見し兒らし、あやにかなしも。

或本歌曰。宇麻勢胡之。牟伎波武古麻能。波都波都爾。仁必波太布禮思、古呂之可奈思母。

比呂波之乎。宇馬古思我禰氏。己許呂能未。伊母我理夜里氏。和波己許爾思天。

ひろ橋を、馬越し兼ねて、心のみ、妹許遣りて、我は此處にして。

或本歌發句曰。乎波夜之爾。古麻乎波左佐氣。

安受乃宇敝爾。古馬乎都奈伎氏。安夜抱可等。比登麻都古呂乎。伊吉爾和我須流。

あずの上に、駒を繋ぎて、危ほかど、人まつ兒ろを、息に我がする。

左和多里能。手兒爾伊由伎安比。安可故麻我。安我伎乎波夜美。許等登波受伎奴。

さわたりの、手兒にい行き逢ひ、赤駒が、足搔を早み、言問はず來ぬ。

安受倍可良。古麻乃由胡能須。安也波刀文。比登豆麻古呂乎。麻由可西良布母。

さをびき―(一)「さ」は發語「ひき」はおびき出すなどいふに同じ、心を引き見るに譬ふ(二)「をびき」は緒牽(チビ)きにて、馬の綱を引くなり、さて二句までは心引きの「引き」といはん序

古字馬―「字」は衍

くべ―垣

はつ〳〵に―わづかに

夜里氏―一說「氏」は「豆」の誤か

ひろ橋―(一)「ろ」は「ら」の意にて板一ひら渡したる打橋(二)一尋ばかりの廣さの橋(三)間の遠き岩橋(四)飜橋の意にて反橋(ソリハシ)ならん

比登麻都―「麻都」は「都麻」の誤にて「ひとづま」

あず―(一)畦(二)危き崖

危ほかど―危くあれども

息に我がする―(一)「息」は息の緒といふに同じく命をかけて思ふの意(二)氣息に掛けて歎きつゝ思ふ

さわたり―地名

ヤ鄕あり
狙はり—狙ひころはえ—馮りしかられし
兒呂家—「家」は「我」の誤ならん
えし—よし
しゝなす—鹿の如く弱く厭はしく
口止まず—絶えず歎きて
かなしけしだは—可憐に思ふ時は
濱洲鳥—枕詞
見立てし—後姿を見送りて立ち居りしをいふ
駒にあふ—略解に饗（アヘ）する也といへど、古義に從ひ「逢ふ」と解し、家に入らぬ內早く庭まで迎へに出て駒に逢ふとする方可ならんか、この說によれば一二句の意は、我が夫よ我を疎かに思ふ勿れ也

妹をこそ、逢見に來しか。眉引の、横山邊ろの、しゝなす思へる。
波流能野爾。久左波牟古麻能。久知夜麻受。安乎思努布良武。伊敝乃兒呂波母。
春の野に、草食む駒の、口止まず、我を忍ぶらむ、家の兒ろはも。
比登乃兒乃。可奈思家之太波。波麻渚杼里。安奈由牟古麻能。乎之家口母奈思。
人の兒の、かなしけしだは、濱洲鳥、足惱む駒の、惜しけくも無し。
安可胡麻我。可度氏乎思都都。伊氏可天爾。世之乎見多氏思。伊敝能兒良波母。
赤駒が、門出をしつゝ、出でがてに、せしを見立てし、家の兒らはも。
於能我乎遠。於保爾奈於毛比曾。爾波爾多知。惠麻須我可良爾。古麻爾安布毛能乎。
己が男を、おほにな思ひそ。庭に立ち、笑ますがからに、駒にあふものを。
安加胡麻乎。宇知氏左乎妣吉。己許呂妣吉。伊可奈流勢奈可。和我理許武等伊布。
赤駒を、打ちてさをびき、心引き、如何なる兒か、我許來むと言ふ。

みくゞぬに、鴨のはほのす、兒ろがうへに、言おろばへて、未だ寢なふも。

奴麻布多都。可欲波等里我栖。安我許己呂。布多由久奈母等。奈與母波里曾禰。

沼二つ、通は鳥が巣、我が心、二行くなもと、なよもはりそね。

於吉爾須毛。乎加母乃母己呂。也左可杼利。伊伎豆久伊毛乎。於伎氐伎努可母。

沖に栖も、小鴨のもころ、八尺鳥、息衝く妹を、置きて來ぬかも。

水都等利乃。多多武與曾比爾。伊母能良爾。毛乃伊波受伎爾氐。於毛比可禰都毛。

水鳥の、立たむ裝に、妹の等に、物言はず來にて、思ひ兼ねつも。

等夜乃野爾。乎佐藝禰良波里。乎佐乎左毛。禰奈敝古由惠爾。波伴爾許呂波要。

とやの野に、兎狙はり、をさ〱も、寢なへ兒ゆゑに、母にころはえ。

左乎思鹿能。布須也久草無良。見要受等母。兒呂家可奈門欲。由可久之要思毛。

さ牡鹿の、臥すや叢、見えずとも、兒ろが金戸よ、行かくしえしも。

伊母乎許曾。安比美爾許思可。麻欲婢吉能。與許夜麻敝呂能。思之奈須於母敝流。

沖つ眞鴨―はるけき譬又浮き上りて息つくより「歎き」の序とせるかみ

あくどぬ―（一）武藏國にのある沼か（二）ぬは野

はほのす―（一）羽ぶきの如く（二）遁ふが如く、さて上二句は「おろ」の序

兒ろがうへに―「う（へ）」にはうはべに、うはべの言にのみ寢んといひて未だ寢ぬの意、又「う（へ）」は輕く添はれるのみともいふ

おろばへて―（一）驚ばへて（二）「おろ」はおろそかにの意（三）たしかならずはのかに言ひしのみにての意

沼二つ云々―二つの沼へ通ふ鳥の巣の如くの意

なよもはりそね―「もはり」はもひの「お」を略し「ひ」を延べたるものにて、な思ひその意、一說、本文「與」は「於」の誤

豆久―下の「久」は衍

もころ―如く

八尺鳥―枕詞

妹の等―「の」は助辭

とやの野―（一）「とや」は鳥屋にて鷹をあはせんとて柴などをさして狼ひ居るところなるを轉じて獸とる爲にするをもいふか、さてさるわざするところをとやの野といふか（二）下總國に鳥矢（ト

こられ—嘖られしかられて

まさでに—正しく

ころく—烏が兒ら來と鳴くと也

きぞ—昨夜

阿倍—駿河

乏しき—めづらしく愛らしき

まを薦—「ま」も「を」も美稱

節のみ近くて—あみめの繁きをいふ、「のみ」は「近く」にかゝる

於毛可多能。和須禮牟之太波。於抱野呂爾。多奈婢久君母乎。見都追思努波牟。

面形の、忘れむ時は、大野ろに、棚引く雲を、見つゝ忍ばむ。

可良須等布。於保乎曾杼里能。麻左低爾毛。伎麻左奴伎美乎。許呂久等曾奈久。

烏とふ、大嘘鳥の、まさでにも、來まさぬ君を、ころくとぞ鳴く。

伎曾許曾波。兒呂等左宿之香。久毛能宇倍由。奈伎由久多豆乃。麻登保久於毛保由。

きぞこそは、兒ろとさ寝しか。雲の上ゆ、鳴き行く田鶴の、ま遠く思ほゆ。

佐可故要氐。阿倍乃田能毛爾。爲流多豆乃。等毛思吉伎美波。安須左倍母我毛。

坂越えて、阿倍の田の面に、居る田鶴の、乏しき君は、明日さへもがも。

麻乎其母能。布能未知可久氐。安波奈敝波。於吉都麻可母能。奈氣伎曾安我須流。

まを薦の、節のみ近くて、逢はなへば、沖つ眞鴨の、歎きぞ我がする。

水久君野爾。可母能波抱能須。兒呂我宇倍爾。許等於呂波敝而。伊麻太宿奈布母。

多可伎禰爾。久毛能都久能須。和禮左倍爾。伎美爾都吉奈那。多可禰等毛比氐。
高き嶺に、雲の附くのす、我さへに、君に附きなゝ、高嶺と思ひて。
阿我於毛乃。和須禮牟之太波。久爾波布利。禰爾多都久毛乎。見都追之努波西。
我が面の、忘れむしだは、國溢り、嶺に立つ雲を、見つゝ忍ばせ。
對馬能禰波。之多具毛安良南敷。可牟能禰爾。多奈婢久君毛乎。見都追思怒波毛。
對馬の嶺は、した雲あらなふ。かむの嶺に、棚引く雲を、見つゝ忍ばも。
思良久毛能。多要爾之伊毛乎。阿是西呂等。許己呂爾能里氐。許己婆可那之家。
白雲の、絶えにし妹を、何ぜせろと、心に乗りて、こゝば悲しけ。
伊波能倍爾。伊賀可流久毛能。可努麻豆久。比等會於多波布。伊射禰之賣刀良。
岩の上に、い懸る雲の、かぬまづく、人ぞおたばふ、いざ寝しめとら。
奈我波伴爾。己良例安波由久。安乎久毛能。伊氐來和伎母兒。安必見而由可武。
汝が母に、こられ我は行く。青雲の、出で來我妹子、相見て行かむ。

附くのす―附くなす、附くが如く
高嶺と思ひて―君を也
忘れむしだは―忘れん時はの意
國溢り―國に溢れんばかりに
思怒波毛―「怒」一本「努」、「波」一本「婆」とある方宜し
した雲あらなふ云々―(一)「した雲」は下雲、「あらなふ」はあらなく、「かむ」は上にて、山の麓には雲はなければ嶺上の雲を見て忍ばんの意(二)あらなふはあるなの意(三)初句嶺の下の「は」は下につゞきて「はしたくもあらなふ」と訓じ、うつくしくもあらぬの意、「かむの嶺」は足柄山をさすか
何ぜせろと―何とせよとての意
こゝろば―こゝろばく、許多
岩の上に云々―此の歌三句以下落ちしならん、この三句以下は前の上野歌に出でたる句の竄入なるべし

芝付乃。御宇良佐伎奈流。根都古具佐。安比見受安良婆。安禮古非米夜母。
芝附の、三浦崎なる、ねつこ草、逢見ずあらば、我戀ひめやも。

多久夫須麻。之良夜麻可是能。宿奈敝杼母。古呂賀於曾伎能。安路許曾要志母。
栲衾、白山風の、寢なへども、兒ろが襲著の、あろこそえしも。

美蘇良由久。君母爾毛我母奈。家布由伎氏。伊母爾許等杼比。安須可敝里許武。
み空行く、雲にもがもな。今日行きて、妹に言問ひ、明日歸り來む。

安乎禰呂爾。多奈婢久君母能。伊佐欲比爾。物能安乎曾於毛布。等思乃許能己呂。
青嶺ろに、棚引く雲の、いさよひに、物をぞ思ふ。年の此の頃。

比登禰呂爾。伊波流毛能可良。安乎禰呂爾。伊佐欲布久母能。與曾里都麻波母。
一嶺ろに、言はるものから、青嶺ろに、いさよふ雲の、寄そり妻はも。

由布佐禮婆。美夜麻乎左良奴。爾努具母能。安是可多要牟等。伊比之兒呂婆母。
夕されば、み山をさらぬ、布雲の、何ぜか絶えむと、言ひし兒ろはも。

芝附—地名なるべし
三浦—相模國か
白山—加賀國か、又は越の國か
寢なへども—寢難けれども
襲著—上著
あろこそえしも—妹が形見の衣のあるを著ればよしの意
物能—下の「安」は衍
年の此の頃—此の年頃の意
一嶺ろに云々—女の心未だ定らずして、逢はざるに逢ひしぞといはるゝを侘しく思ふ意
布雲—布をひろげたる如く棚引きたる雲

和我目豆麻。比等波左久禮杼。安佐我保能。等思佐倍己其登。和波佐可流我倍。
我が眞妻、人はさくれど、朝顏の、年さへこぞと、我はさかるがへ。

安齊可我多。志保悲乃由多爾。於毛敝良婆。宇家良我波奈乃。伊呂爾氐米也母。
あせか潟、潮干のゆたに、思へらば、うけらが花の、色に出めやも。

波流敝左久。布治能宇良葉乃。宇良夜須爾。左奴流夜曾奈伎。兒呂乎之毛倍婆。
春邊咲く、藤の末葉の、うら安に、さ寢る夜ぞ無き。兒ろをし思へば。

宇知比佐都。美夜能瀬河泊能。可保波奈能。孤悲天香眠良武。伎曾母許余比毛。
內日射つ、みやのせ川の、顏花の、戀ひてか寢らむ。きぞも今宵も。

爾比牟路能。許騰伎爾伊多禮婆。波太須酒伎。穗爾氐之伎美我。見延奴己能許呂。
新室の、こどきに至れば、旗薄、穗に出し君が、見えぬ此の頃。

多爾世婆美。彌年爾波比多流。多麻可豆良。多延武能己許呂。和我母波奈久爾。
谷狹み、峰に延ひたる、玉葛、絕えむの心、我が思はなくに。

靡きなえたる萓の意、「なごや」の序
寢ろとへなかも―寢んと言はずの意
紫は云々―紫は根もて衣を染むれば斯くいふ
うらがなしけを―心に愛憐する女を
安房峰―安房國の山なるべし
たはみづら―蔓草の名
目豆麻―一說「めづま」と訓みて目につきて思ふ妻の意、さて三句をこの句の上に轉置して見よ
安佐我保能―一說、「安良多麻能」などの誤か
年さへこぞと―本文、「己其登」は「こぞと」と訓みて年にさへ來ずとも我は思ひはなるゝ心あらじといふ意か(一)「こぞ」とは幾何(コ、ダ)と同じ語
ゆたに―ゆたかに、のどかに
うら安に―こゝろ安く
顏花の―顏よき妹に譬へたるか、この序穩ならず。或は晝顏の稱にて其花の暮方眠るより戀ひて眠ると續けしかともいふ
きぞ―昨夜
こどき―(一)新室の言祝(二)蠶(こ)がひの季節、古は年々養蠶室を新に建てしものならん

橘樹―武藏國
垂髪―振分髪にせる女兒

根白高萱―川岸などに生じたる萱の根の水にあらはれて白く高くなりたるものか、さて下の「あやに」と音通へば序とす、又は一句隔てて「さ寢〳〵て」の序か

ねやはら小菅―(一)海岸に生ひたる菅は潮にあひて根の柔かなればしかいふ(二)やはらは泥にて泥に生ひたる小菅をやはら小菅といひそれに寢といふ語を添へてうるはしきやははだの妹といふ意を含ましめしか(三)やはらかになえ〳〵と靡く菅をいふ」さてなよやかなる女に喩へし也

岡に寄せ―(一)岡につき寄りて(二)岡は萱を刈るところをいへるのみ、「寄せ」は下にかゝりて、我が引き寄せなびかせて刈る萱の云々の意、さて萱を女に譬ふ

さね萱―(一)さは發語、根萱に寢を添ふ(二)よく

多知婆奈乃。古婆乃波奈里我。於毛布奈牟。己許呂宇都久志。伊氏安禮波伊可奈。
橘樹の、こばの垂髪が、思ふなむ、心うつくし。いで我は行かな。

可波加美能。禰自路多可我夜。安也爾阿夜爾。左宿左寐氏許曾。己登爾氏爾思。
川上の、根白高萱、あやに〳〵、さ寢〳〵てこそ、言に出にしか。

宇奈波良乃。根夜波良古須氣。安麻多阿禮婆。伎美波和須良酒。和禮和須流禮夜。
海原の、ねやはら小菅、數多あれば、君は忘らす、我忘るれや。

乎可爾與世。和我可流加夜能。佐禰加夜能。麻許等奈其夜波。禰呂等敝奈香母。
岡に寄せ、我が刈る萱の、さね萱の、誠なごやは、寢ろとへなかも。

牟良佐伎波。根乎可母乎布流。比等乃兒能。宇良我奈之家乎。禰乎遠敝奈久爾。
紫は、根をかも終ふる。人の子の、うらがなしけを、寢を終へなくに。

安波乎呂能。乎呂田爾於波流。多波美豆良。比可婆奴流奴留。安乎許等奈多延。
安房峰ろの、峰ろ田に生はる、たはみづら、引かばぬる〳〵、我を言な絶え。

まさか—今さし當り
世の人—即ち我をさす
遲早も—遲くとも早くとも
逢ひは違けはじ—逢ひは違はじ
伊波保—「波」は「香」の誤にて「伊香保」か
そひの若松—こゝまで「限り」といはん序
うらもとなくも—心もとなくも

楊奈疑許曾。伎禮婆伴要須禮。余能比等乃。古非爾思奈武乎。伊可爾世余等曾。
柳こそ、伐れば生えすれ。世の人の、戀に死なむを、如何にせよとぞ。

乎夜麻田乃。伊氣能都追美爾。左須楊奈疑。奈里毛奈良受毛。奈等布多里波母。
小山田の、池の堤に、さす柳、なりもならずも、汝と二人はも。

於曾波夜母。奈乎許曾麻多賣。牟可都乎能。四比乃故夜提能。安比波多家波自。
遲早も、汝をこそ待ため。向つ尾の、椎の小枝の、逢ひは違けはじ。

或本歌曰。於曾波也母。伎美乎思麻多武。牟可都乎能。思比乃佐要太能。登吉波須具登母。

兒毛知夜麻。和可加敝流氏能。毛美都麻氏。宿毛等和波毛布。汝波安杼可毛布。
こもち山、若楓の、黄葉づまで、寝もと我は思ふ。汝は何どか思ふ。

伊波保呂乃。蘇比能和可麻都。可藝里登也。伎美我伎麻左奴。宇良毛等奈久毛。
いはほろの、そひの若松、限りとや、君が來まさぬ、うらもとなくも。

衣(アサゾ)を著せざらめやの意(二)明日も來らざらんやにて、明日の日もあれば今宵はやめて早く寢んの意、男の女の麻を績み居るところに來てよめる歌
手兒ーこゝは緣兒の意
弓束なべ卷きー同等の男の各弓束を竝べ射競するをいふ
もごろ男ー我と同等の男
いや勝たましにーいよいよ勝たまし
末に玉卷きー末を大切に思ふ譬にや
斯くすゝぞー一說、俗に斯くしい〳〵といふが如し
寢なゝなりにしー妹と寢ることもなくなりにしよと歎く意、本文「奈莫」一本「奈々」とある方宜し
奥をかぬ〳〵ー末をかねつゝ強ひずしてある間に也
生ふし本ー生ふ繁み本の路にて、生ひ繁りたる木立、又大椵か
ましばー(一)眞柴に眞數(マシバ)をいひ掛く、眞數はしば〳〵の意(二)本文「波」は淸音なれば「ましは」にて、名を告ぐることを惜む意か
かたーうらかた
繁かくにー繁きに

都流伎多知。身爾素布伊母乎。等里見我禰。哭乎曾奈伎都流。手兒爾安良奈久爾。
劍太刀、身に添ふ妹を、取見兼ね、音をぞ泣きつる。手兒にあらなくに。

何奈思伊毛乎。由豆加奈倍麻伎。母許呂乎乃。許登等思伊波婆。伊夜可多麻斯爾。
悲し妹を、弓束なべ卷き、もごろ男の、こととし言はば、いや勝たましに。

安豆左由美。須惠爾多麻末吉。可久須酒曾。宿奈莫那里爾思。於久乎可奴加奴。
梓弓、末に玉卷き、斯くすよぞ、寢なよなりにし、奥をかぬ〳〵。

於布之毛等。許乃母登夜麻乃。麻之波爾毛。能良奴伊毛我名。可多爾伊氐牟可母。
生ふし本、此の本山の、ましばにも、告らぬ妹が名、かたに出でむかも。

安豆左由美。欲良能夜麻邊能。之牙可久爾。伊毛呂乎多氐天。左禰度波良布母。
梓弓、よらの山邊の、繁かくに、妹ろを立てて、さ寢所拂ふも。

安都佐由美。須惠波余里禰牟。麻左可許曾。比等目乎於保美。奈乎波思爾於家禮。
梓弓、末は寄り寢む。まさかこそ、人目を多み、汝を端に置けれ。

見レ上—四の卷也

也須流—「流」一本「家」とある方宜し

ふすさに—澤山に
あすきせざめや—(一)麻

安利伎奴乃。佐惠佐惠之豆美。伊敝能伊母爾。毛乃伊波受伎爾氏。於毛比具流之母。

あり衣の、さゑ〳〵しづみ、家の妹に、物言はず來にて、思苦しも。

柿本朝臣人麻呂歌集中出見レ上已詮也。

可良許呂毛。須蘇乃宇知可倍。安波禰杼毛。家思吉己許呂乎。安我毛波奈久爾。

韓衣、裾の打交、逢はねども、けしき心を、我が思はなくに。

或本歌曰。可良己呂母。須素能宇知可比。阿波奈敝波。禰奈敝乃可良爾。許等多可利都母。

比流等家波。等家奈敝比毛乃。和賀西奈爾。阿比與流等可毛。欲流等家也須流。

晝解けば、解けなへ紐の、我が兄に、相寄るとかも、夜解け易けろ。

安左乎良乎。遠家爾布須左爾。宇麻受登毛。安須伎西佐米也。伊射西乎騰許爾。

麻緒らを、麻笥にふすさに、績まずとも、あすきせざめや。いざせ小床に。

ぬがなへ行けば—流ちへ行けば

乏しとふ—一說、遠しといふ

逢ほしだ—逢ふ時

逢はなへしだ—逢はぬ時「あはのへしだ」と訓ずべきか

汝にこそ寄され—我が心は汝にこそ寄りたれ

爭ふ—他人に言はれて決してそんな事はなしと爭ふ也

宇倍兒奈波。和奴爾故布奈毛。多刀都久能。奴賀奈敝由家婆。故布思可流奈母。

宜べ見なは、我ぬに戀ふなも。立と月の、ぬがなへ行けば、戀しかるなも。

或本歌末句曰。努我奈敝由家杼。和奴賀由乃敝波。

安都麻道乃。手兒乃欲婢佐可。古要氐伊奈婆。安禮婆古非牟奈。能知波安比奴登母。

東路の、田子のよび坂、越えて行なば、我は戀ひむな。後は逢ひぬとも。

等保斯等布。故奈乃思良禰爾。阿抱思太毛。安波乃敝思太毛。奈爾己曾與佐禮。

乏しとふ、こなの白嶺に、逢ほしだも、逢はなへしだも、汝にこそ寄され。

安可見夜麻。久左禰可利曾氣。安波須賀倍。安良蘇布伊毛之。安夜爾可奈之毛。

あかみ山、草根刈り除け、逢はすが上、爭ふ妹し、あやにかなしも。

於保伎美乃。美己等可思古美。可奈之伊毛我。多麻久良波奈禮。欲太知伎奴可母。

大君の、命畏み、かなし妹が、手枕離れ、夜立ち來ぬかも。

逢見ては、千歳や去ぬる。否をかも、我や然か思ふ。君待ちがてに。

柿本朝臣人麻呂歌集出也。

思麻良久波。爾都追母安良牟乎。伊米能未爾。母登奈見要都追。安乎爾思奈久流。

暫くは、寢つゝもあらむを、夢のみに、もとな見えつゝ、我を寢しなくる。

比登豆麻等。安是可曾乎伊波牟。志可良婆加。刀奈里乃伎奴乎。可里氐伎奈波毛。

人妻と、あぜか其を言はむ。然らばか、隣の衣を、借りて著なはも。

左努夜麻爾。宇都也乎能登乃。等抱可騰母。爾毛等可兒呂賀。於由爾美要都留。

さぬ山に、打つや斧音の、遠かども、寢もとか兒ろが、おゆに見えつる。

宇惠多氣能。毛登左倍登與美。伊低氐伊奈婆。伊豆思牟伎氐可。伊毛我奈藝可牟。

植竹の、本さへとよみ、出でて行なば、何方向きてか、妹が歎かむ。

古非都追母。乎良牟等須禮杼。遊布麻夜萬。可久禮之伎美乎。於母比可爾都母。

戀ひつゝも、居らむとすれど、木綿間山、隱れし君を、思ひ兼ねつも。

る事あるものにて、人其の光を見て捕へんとして行くに捕ふべき程に近づく時に俄かに立去りて又行先の方にて光り捕へ難きものなり、されば此の歌に「鏡懸け」といふは尾の鏡の如く夜光るをいひ「となふべみ」は捕ふべみ「よそりけめ」は言ひ寄りそめたれにて、山鶏の捕へらるべく見えて捕へ難き如く女の我になびくべき様に見えながらつひになびかぬに譬ふ

告ろ―告れる

あぜぞも―何ぞや

逢見ては―此歌巻十一に載せたり

我を寢しなくる―我を寢しめぬの意

あぜか―何か

借りて著なはも―借りて著る事無からんや

於由―「由」は「母」の誤にて「おも」と訓む「面影」の略か

木綿間山―下に「を越えて」と補ふ

我はまかじやも―反語にて、人言はしげくとも共寝せんと也
あどせろとかも―何とせんとてか
さ寝なへば―さは發語、寝なければ
奥山の―枕詞
とゞ―男の戸を叩く音
はつ尾―しだり尾、鳥の尾の中にて最も長きもの也
鏡懸け云々―（一）支那魏の時代に山鷄をかひて鳴かざりしに山鷄の方に鏡を置きたりしかばよく鳴きつといふ故事を以てよめるか、となふは聲立てゝよぶ事にて其れを名を唱へらるゝにいひよす（二）山鷄の尾は夜いみじく光

人言の、繁きによりて、眞小薦の、同じ枕は、我はまかじやも。
巨麻爾思吉。比毛登伎佐氣氏。奴流我倍爾。安杼世呂登可母。安夜爾可奈之伎。
高麗錦、紐解きさけて、寝るが上に、あどせろとかも。あやにかなしき。
麻可奈思美。奴禮婆許登爾豆。佐爾奈敝波。己許呂乃緒呂爾。能里氏可奈思母。
まがなしみ、寝れば言につ。さ寝なへば、心の緒ろに、乘りて悲しも。
於久夜麻能。眞木乃伊多度乎。等杼登之氏。和我比良可武爾。伊利伎氏奈左禰。
奥山の、眞木の板戸を、とゞとして、我が開かむに、入り來て寝さね。
夜麻杼里乃。乎呂能波都乎爾。可賀美可家。刀奈布倍美許曾。奈爾與曾利雞米。
山鷄の、尾ろのはつ尾に、鏡懸け、となふべみこそ、汝によそりけめ。
由布氣爾毛。許余比登乃良路。和賀西奈波。阿是會母許與比。與斯呂伎麻左奴。
夕占にも、今宵と告らろ。我が夫は、あぜぞも今宵、寄しろ來まさぬ。
安比見氏波。千等世夜伊奴流。伊奈乎加母。安禮也思加毛布。伎美末知我氏爾。

の中絶えて來ぬに譬ふ、古義には、とりの岡の岬を廻れば女の家も見えずなるならんといへり

寢しなくよ—寢しめぬよ、古義によれば、我に哭(ネ)を泣かしむるよ也

かゞる—あかぎれがきれる

和家世—「和」一本「我」とある方宜し

おそぶる—押開かんとする

我が夫を遣りて—里長又は郡家などの新嘗祭の集り

あぜといへか—何といふことか

さねに—眞に

宵なは來なに—宵には來ずして

明けぬしだ—あけぬる時

まなといふ兒—一說、世の人々がまなむすめといひて貴ぶ兒

伊禰都氣波。可加流安我手乎。許余比毛可。等能乃和久胡我。等里氐奈氣可武。

稻搗けば、かゞる我が手を、今宵もか、殿の若子が、取りて歎かむ。

多禮曾許能。屋能戸於曾夫流。爾布奈未爾。和家世乎夜里氐。伊波布許能戸乎。

誰ぞ此の、屋の戸おそぶる。新嘗に、我が夫を遣りて、齋ふ此の戸を。

安是登伊敝可。佐宿爾安波奈久爾。眞日久禮氐。與比奈波許奈爾。安家奴思太久流。

あぜといへか、さねに逢はなくに、眞日暮れて、宵なは來なに、明けぬしだ來る。

安志比奇乃。夜末佐波妣登乃。比登佐波爾。麻奈登伊布兒我。安夜爾可奈思佐。

足引の、山澤人の、人さはに、まなといふ兒が、あやにかなしさ。

麻等保久能。野爾毛安波奈牟。己許呂奈久。佐刀乃美奈可爾。安敝流世奈可母。

ま遠くの、野にも逢はなむ。心無く、里のみ中に、逢へる夫かも。

比登其等乃。之氣吉爾余里氐。麻乎其母能。於夜自麻久良波。和波麻可自夜毛。

八十言の上は―多くの人のいひさわぐをいふ、一說「のへ」は「なひ」にて、音なひの義

內日射す―枕詞、此歌は宮づかへに男の大和の京へ上りたるその妻がよめる也と契沖說也

中だをれ―この岡路は中たわめるにや、それを男

萬葉集 卷第十四下

相聞

古非思家婆。伎麻世和我勢古。可伎都楊疑。宇禮都美可良思。和禮多知麻多牟。

戀しけば、來ませ我が背子。垣つ柳、うれ摘み枯し、我立ち待たむ。

宇都世美能。夜蘇許登乃敝波。思家久等母。安良蘇比可禰氏。安乎許登奈須那。

空蟬の、八十言の上は、繁くとも、爭ひ兼ねて、我を言なすな。

宇知日佐須。美夜能和我世波。夜麻登女乃。比射麻久其登爾。安乎和須良須奈。

內日射す、宮の我が夫は、大和女の、膝まく每に、我を忘らすな。

奈勢能古夜。等里乃乎加恥志。奈可太乎禮。安乎禰思奈久與。伊久豆君麻氏爾。

汝夫の子や、とりの岡路し、中だをれ、我を寢しなくよ。息衝くまでに。

説「そ」は馬を追ふ聲、本文「波自」は上に「於」を略したるにて「追はじ」
風の音の―枕詞
袂のくだり―袂の上より下までの意
まよひ―布帛の古びて經緯のかたよりよれ〳〵になること
庭にたつ―「麻」に懸る枕詞

庭にたつ、麻布小衾、今宵だに、夫寄し來せね。麻布小衾。

花散らふ、此の向つ尾の、をなの尾の、ひじに著くまで、君が代もかも。

思路多倍乃。許呂毋能素低乎。麻久良我欲。安麻許伎久見由。奈美多都奈由米。
白妙の、衣の袖を、まくらがよ、海人漕ぎ來見ゆ。浪立つなゆめ。

乎久佐乎等。乎具佐受家乎等。斯乎布禰乃。那良敝氏美禮婆。乎具佐可利馬利。
をくさ男と、をぐさずけ男と、潮舟の、竝べて見れば、をぐさ勝ちめり。

左奈都良能。乎可爾安波麻伎。可奈之伎我。古麻波多具等毛。和波素登毛波自。
さなづらの、岡に粟蒔き、かなしきが、駒はたぐとも、我は其と思はじ。

於毛思路伎。野乎婆奈夜吉曾。布流久左爾。仁比久佐麻自利。於非波於布流我爾。
面白き、野をばな燒きそ。古草に、新草まじり、生ひば生ふるがに。

可是乃等能。登抱吉和伎母賀。吉西斯伎奴。多母登乃久太利。麻欲比伎爾家利。
風の音の、遠き我妹が、著せし衣。袂のくだり、まよひ來にけり。

爾波爾多都。安佐提古夫須麻。許余比太爾。都麻余之許西禰。安佐提古夫須麻。

あがめいふ語、吾主が通はんとての意、一本「努」無し
をな―上總國
ひじに著くまで―本文「自」は「目」の誤にて紐か、又本文「佐」一本無き方宜し、高き峰の低くなりて腰の垂紐に著くまでの意か、尚可勘
まくらがよ―袖をまくといひかけ「ま」は發語、「くらが」は下總國か「よ」はよりの略
可利馬利―「利」一本「知」
をくさ男―をくさといふところの男
をぐさずけ男―このをぐさは上のをぐさとは別の地なるべし、ずけ男は助丁、をくさ男は正丁かと略解にいへるいかゞ、古義の說の如く「ずけを」は好色男（スキヲ）にて、上は此語を略したるまで也と見るべきか
潮舟の―枕詞、本文「乎」は「本」の誤
かなしきが―いとしき夫が
駒はたぐとも―その粟を蒔きし畑の上を駒を引き行くとものの意「たぐ」はたぐるの約にて、手綱をたぐりて馬を歩ますること
其と思はじ―さる惡しきわざとも思はじの意、一

うらも無く―何心もなく
張りて―芽の萌張りて
物思ひづつ―物思ひ出で
つの路、本文「豆」一本「弖」
さらば「物思ひでつ」
乃多奈布―「乃」は「美」或
は「民」の誤にて「みたな
ふ」滿ちなくの意か
きはづく―一說、常陸國
くゝみら―草の名
美奈刀能也―一本「美奈
刀安之能」
隔し―隔て

つかふ―(一)妹と我と行
き違ふをいふか(二)川の
名か、さらば初句にかけ
て見るべし(三)使ふにて
用水とする義か
ひとごと―蘆と一つ如
く、荻と蘆の區別を問ふ
にことよせて妹にいひ寄
らんの意
草陰の―枕詞
あぬゝな―(一)あぬは地
名か、本文「奈」は「爾」の誤
か(二)「吾主根之」(あぬし
ねが)にて「ぬし」も「ね」も

宇良毛奈久。和我由久美知爾。安乎夜宜乃、波里氐多氏禮婆。物能毛比豆都母。
うらも無く、我が行く道に、青柳の、張りて立てれば、物思ひづつも。
伎波都久乃。乎加能久君美良。和禮都賣杼。故爾毛乃多奈布。西奈等都麻佐禰。
きはづくの、岡のくゝみら、我摘めど、籠にものたなふ。兄と摘まさね。
美奈刀能也。安之我奈可那流。多麻古須氣。可利己和我西古。等許乃敝太思爾。
湊のや、葦が中なる、玉小菅、刈り來我が背子。床の隔しに。
伊毛奈呂我。都可布河泊豆乃。佐左良乎疑。安志等比登其等。加多里與良斯毛。
妹なろが、つかふ河津の、さゝら荻、蘆とひとごと、語り寄らしも。
久佐可氣乃。安努努奈由可武等。波里之美知。阿努努波由加受氏。阿良久佐太知奴。
草陰の、あぬゝな行かむと、墾りし道、あぬゝは行かずて、荒草立ちぬ。
波奈知良布。己能牟可都乎乃。乎那能乎能。比自爾都久佐麻提。伎美我與母賀母。

鈴が音—鷹の尾につけたる鈴
かむしだ—駿河國志太郡の志太の里に上下ありしならん
なかぢ—中子にて、中の男をいふか
すゞがね—(一)鈴が音にて早馬といはん料(二)すゞが嶺にて地名
筒み井—みは助辭、筒井に同じ、一說、水の漏らぬ樣につゝみ圍ひたる井
妹が直手よ—直に妹が手よりの意
よちをぞ云々—「よち」は同じ年ごろの意、よきふごろと思ひてあるとい年を約めいへるか
兒賜りに—その兒賜りねの意、その兒の母にいひかけしなるべし、一說、一本文「爾」は「禰」の誤か
田子のよび坂—今の薩埵山

つむが野に、鈴が音聞ゆ。かむしだの、殿のなかちし、鳥狩すらしも。

或本歌曰。美都我野爾。又曰。和久胡思。

須受我爾乃。波由馬宇馬夜能。都追美井乃。美都乎多麻倍奈。伊毛我多太手欲。
すゞがねの、早馬驛の、筒み井の、水を賜へな。妹が直手よ。

許乃河泊爾。安佐奈安良布兒。奈禮毛安禮毛。余知乎曾母氐流。伊低兒多婆里爾。
此の川に、朝菜洗ふ兒、汝も我も、よちをぞもてる。いで兒賜りに。

一云。麻之毛安禮母。

麻等保久能。久毛爲爾見由流。伊毛我敝爾。伊都可伊多良武。安由賣安我古麻。
ま遠くの、雲井に見ゆる、妹が家に、何時か至らむ。歩め我が駒。

柿本朝臣人麻呂歌集曰。等保久之氐。又曰。安由賣久路古麻。

安豆麻治乃。手兒乃欲妣左賀。古要我爾氐。夜麻爾可禰牟毛。夜杼里波奈之爾。
東路の、田子のよび坂、越え兼ねて、山にか寢むも。宿りは無しに。

上つ毛野、安蘇山葛、野を廣み、延ひにしものを、あぜか絶えせむ。

伊可保呂乃。蘇比乃波里波良。和我吉奴爾。都伎與良之母與。多敝登於毛敝婆。

伊香保ろの、そひの榛原、我が衣に、附き寄らしもよ。たへと思へば。

志良登保布。乎爾比多夜麻乃。毛流夜麻能。宇良賀禮勢那奈。登許波爾毛我母。

しらとほふ、を新田山の、守る山の、末枯せなな。常葉にもがな。

右三首。上野國歌。

美知乃久能。安太多良末由美。波自伎於伎氐。西良思馬伎那婆。都良波可馬可毛。

陸奥の、あだたら眞弓、はじき置きて、せらしめきなば、弦はがめかも。

右一首。陸奥國歌。

雜歌

都武賀野爾。須受我於等伎許由。可牟思太能。等能乃奈可知師。登我里須良思母。

垂るは木の老いて枝の垂れさがるをいふ、本文「乎」は「之」に通ず
あぜか絶えせむ―何ぞ絶えんやの意

附き寄らしもよ―附き寄らしめよ
たへと思へば―「たへ」は絹布の總稱にて我に譬ふ

しらとほふ―枕詞、宣長説に、本文「布」は「留」の誤にて「白砥掘る」の義
せなな―すな

あだたら眞弓―あだたらといふところより出づる眞弓、あだたらは岩代國安達か
はじき置きて―弦をはづし置きて
せらしめきなば―そらしめ置きなば

斯太能宇良乎。阿佐許求布禰波。與志奈之爾。許求良米可母與。奈志許佐流良米
志太の浦を、朝漕ぐ船は、寄し無しに、漕ぐらめかもよ。何し來ざるらめ。

右一首。駿河國歌。

阿之我里乃。安伎奈乃夜麻爾。比古布禰乃。斯利比可志母與。許己波故賀多爾。
足柄の、あきなの山に、引こ船の、後引かしもよ。此處は來難に。
阿之賀利乃。和乎可雞夜麻能。可頭乃木能。和乎可豆佐禰母。可豆佐可受等母。
足柄の、我をかけ山の、かづの木の、我をかづさねも。かづさかずとも。
多伎木許流。可麻久良夜麻能。許太流木乎。麻都等奈我伊波婆。古非都追夜安良牟。
薪樵る、鎌倉山の、木垂る木を、待つと汝が言はば、戀ひつゝやあらむ。

右三首。相模國歌。

可美都毛野。安蘇夜麻都豆良。野乎比呂美。波比爾思物能乎。安是加多延世武。

志太―駿河國
寄し無しに―磯へ寄ること無しにの意
何し云々―我が夫は何故に我が方へ來たらざらんの意
引こ船の云々―古足柄山にて船を造りそれを下す時に艫を先にし舳綱を附けて引きつゝ漸々に下しものなれば斯くいひ、さて男の我が方に來り難くするに譬ふといへり
此處は來難に―我が方へは來り難げにの意、一說、こゝは許多の意
我をかけ山―かけ山といふ山の名に我を懸けて、思はぶといふ意をいひかけしか
かづの木―「かづ」は穀(カヂ)か
我を云々―我をかどはせ、かどはし難くともの意、「かづす」はぬすむ、「かづさかず」はかづし兼ぬ
薪樵る―枕詞
鎌倉山―相模國
木垂る木―古木の意、木

會津嶺の云々—二一三と句を轉じて見よ
逢はなはゞ—逢はなくばの意

あだたら—安達郡か

賴めて—深く賴ませて
淺ましものを—人の心の淺きものをの意

安比豆禰能。久爾乎佐杼抱美。安波奈波婆。斯努比爾勢牟等。比毛牟須婆左禰。
會津嶺の、國をさ遠み、逢はなはゞ、忍びにせむと、紐結ばさね。

筑紫奈留。爾抱布兒由惠爾。美知能久乃。可刀利乎登女乃。由比思比毛等久。
筑紫なる、匂ふ兒故に、陸奥の、かとり少女の、結ひし紐解く。

安太多良乃。禰爾布須思之能。安里都都毛。安禮波伊多良牟。禰度奈佐利曾禰。
あだたらの、嶺に臥す猪の、在りつゝも、我はいたらむ。寢所な去りそね。

右三首。陸奥國歌。

譬喩歌

等保都安布美。伊奈佐保曾江乃。水乎都久思。安禮乎多能米氏。安佐麻之物能乎。
遠江、引佐細江の、澪標、我を賴めて、淺ましものを。

右一首。遠江國歌。

我がへ—我が上、我身の上

こ楢のす—「こ楢」は小楢、「のす」はなすに同じく、の如くの意

高けか—高々にかといふと同じくふりあふぎ望む意、一說「誰苛歟將持」の義にて、誰が妻とかならましと也

汝が心のれ—「のれ」は告れにて、うれしと思ふや否や汝が心を告げよの意

伊香保嶺に、雷な鳴りそね。我がへには、故は無けども、兒らによりてぞ。

伊香保可是。布久日布加奴日。安里登伊倍杼。安我古非能未思。等伎奈可里家利。

伊香保風、吹く日吹かぬ日、有りと言へど、我が戀のみし、時無かりけり。

可美都氣努。伊可抱乃禰呂爾。布路與伎能。遊吉須宜可提奴。伊毛賀伊敝乃安多里。

上つ毛野、伊香保の嶺ろに、降ろ雪の、行き過ぎがてぬ。妹が家のあたり。

右二十二首。上野國歌。

之母都家野。美可母乃夜麻能。許奈良能須。麻具波思兒呂波。多賀家可母多牟。

下つ毛野、みかもの山の、こ楢のす、まぐはし兒らは、高けか持たむ。

志母都家努。安素乃河泊良欲。伊之布麻受。蘇良由登伎努與。奈我己許呂能禮。

下つ毛野、安蘇の川原よ、石蹈まず、空ゆと來ぬよ。汝が心のれ。

右二首。下野國歌。

小水葱ー美しき女に喩ふ

いはゐづらー蔓草の名
ぬれつゝーなびき依りて

見しよはー見しよりは

ことは定めつー一說、すでに主定めたればと、言ひ寄られし女の答ふるにや

伊加云々ー此歌誤脫あるべし、古來定說なし

さかれがへー「がへ」は反語、本文「禮」一本「流」に作る方宜し

上つ毛野、伊香保の沼に、植小水葱、斯く戀ひむとや、種求めけむ。

可美都氣努。可保夜我奴麻能。伊波爲都良。比可波奴禮都追。安乎奈多要曾禰。

上つ毛野、かほやが沼の、いはゐづら、引かばぬれつゝ、我をな絶えそね。

可美都氣奴。伊奈良能奴麻能。於保爲具左。與曾爾見之欲波。伊麻許曾麻左禮。

上つ毛野、いならの沼の、大藺草、外に見しよは、今こそまされ。

柿本朝臣人麻呂歌集出也。

可美都氣努。佐野田能奈倍能。武良奈倍爾。許登波佐太米都。伊麻波伊可爾世母。

上つ毛野、佐野田の苗の、群苗に、ことは定めつ。今は如何にせも。

伊加保世欲奈可中次下於毛比度路久麻許曾之都等和須禮西奈布母。

可美都氣努。佐野乃布奈波之。登利波奈之。於也波左久禮騰。和波左可禮賀倍。

上つ毛野、佐野の船橋、取り放し、親はさくれど、我はさかれがへ。

伊香保禰爾。可未奈那里曾禰。和我倍爾波。由惠波奈家杼母。兒良爾與里氏曾。

伊香保ろ―ろは助辭
か沼云々―略解に「か沼は今も有る地名也、伊つぎの伊は發語、いかほの山の雨雲のはびこりて、かぬまといふ所までひとつにつゞけるを、吾と妹と心は一つぞと人にいはるゝに譬ふ、おたばふは、おらぶといふに同じく、音高くいひさわぐなり、末の句はかくいはるゝからは、いざ相寢しめたらんといふ也云々」、其他數說あれど何れもいかゞ、尙可ㇾ勘
そひ―傍の意
よかば―よからば
あにくやしづし―本文「之」一本「久」、古義に「豈來耶沈石」の義とす
其の顏よきに―一說、面やはらかに打笑みつゝ在りて心の動かぬをいふ、本文「把」一本「抱」(ホ)とある方宜し
葛葉がた―地名か
多多―一本「多太」
波に逢ふのす―「のす」は「なす」と同じく如くの意

伊香保ろに、雨雲い繼ぎ、か沼づく、ひとゝおたばふ。いざ寢しめとら。
伊香保呂能。蘇比乃波里波良。禰毛己呂爾。於久乎奈加禰曾。麻左可思余加婆。
伊香保ろの、そひの榛原、懇に、奥をな兼ねそ。まさかしよかば。
多胡能禰爾。與西都奈波倍氐。與須禮騰毛。阿爾久夜斯豆之。曾能可把與吉爾。
多胡の嶺に、寄綱延へて、寄すれども、あにくやしづし。其の顏よきに。
賀美都氣野。久路保乃禰呂乃。久受葉我多。可奈師家兒良爾。伊夜射可里久母。
上つ毛野、くろほの嶺ろの、葛葉がた、かなしけ兒らに、彌ざかり來も。
刀禰河泊乃。可波世毛思良受。多多和多里。奈美爾安布能須。安敝流伎美可母。
利根川の、川瀬も知らず、たゞ渡り、波に逢ふのす、逢へる君かも。
伊香保呂能。夜左可能爲提爾。多都努自能。安良波路萬代母。佐禰乎佐禰氐婆。
伊香保ろの、やさかの井手に、立つ虹の、顯ろまでに、さ寢をさ寢てば。
可美都氣努。伊可保乃奴麻爾。宇惠古奈宜。可久古非牟等夜。多禰物得米家武

上つ毛野―上野國
あそ―地名
播きむだき―播抱き、「播き」は接頭語、「むだき」は身抱き
あどか―何にとか
をどのたどりが―小野の田野らの意か、小野は上野國甘樂、緑野、群馬の三郡に各あり、されど確ならず
莖立―莖、菜蔬などの中心より出でて花を生ずべき莖
待たむゑ―ゑは助辭
ことし來ずとも―略解には「來と不來ともにて、之は助辭歟、たまたま來ともといふなるべし」古義には「今年來ずとも也」
まぐはしまと―「まぐは」は地名「しまと」は島門にて、川島の渡瀬の門か
まきらはし―まばゆし
つかなゝ―つかなくの意か、女の我に寄りながら又さもあらず間(中途半端)なるに譬ふ

上つ毛野、あその眞麻群、播きむだき、寢れど飽かぬを、あどか我がせむ。

可美都氣乃。乎度能多杼里我。可波治爾毛。兒良波安波奈毛。比等理能未思氏。

上つ毛野、をどのたどりが、川路にも、兒らは逢はなも。一人のみして。

或本歌曰。可美都氣乃。乎野乃多抒里我。安波治爾母。世奈波安波奈母。美流比登奈思爾。

可美都氣野。左野乃九久多知。乎里波夜志。安禮波麻多牟惠。許登之許受登母。

上つ毛野、佐野の莖立、折りはやし、我は待たむゑ。ことし來ずとも。

可美都氣努。麻具波思麻度爾。安佐日左指。麻伎良波之母奈。安利都追見禮婆。

上つ毛野、まぐはしまとに、朝日射し、まきらはしもな。在りつゝ見れば。

爾比多夜麻。禰爾波都可奈那。和爾余曾利。波之奈流兒良師。安夜爾可奈思母。

新田山、嶺にはつかなゝ、我に寄り、はしなる兒らし、あやに悲しも。

伊香保呂爾。安麻久母伊都藝。可奴麻豆久。比等登於多波布。伊射禰志米刀羅。

墾道ー新に開きたる道路、續記、和銅六年、「美濃信濃二國之堺、經道險阻、往還艱難、仍通吉蘇路」
刈りばねー刈り取りたるあとの根
なかまなー地名か、未詳
碓氷の山ー上野國
夫のー「の」は助辭
於父ー「父」は「久」の誤か、「奥」は行末の意
まさかーまのあたりに、只今
多胡ー上野國

信濃道者。伊麻能波里美知。可里婆禰爾。安思布麻之牟奈。久都波氣和我世。
信濃路は、今の墾道、刈りばねに、足蹈ましむな。沓はけ我が夫。

信濃奈流。知具麻能河泊能。左射禮之母。伎彌之布美氏婆。多麻等比呂波牟。
信濃なる、筑摩の川の、小石も、君し蹈みてば、玉と拾はむ。

中麻奈爾。宇伎乎流布禰能。許藝氏奈婆。安布許等可多思。家布爾思安良受波。
なかまなに、浮き居る船の、漕ぎ出なば、逢ふこと難し。今日にしあらずは。

右四首。信濃國歌。

比能具禮爾。宇須比乃夜麻乎。古由流日波。勢奈能我素低母。佐夜爾布良思都。
日の暮に、碓氷の山を、越ゆる日は、夫のが袖も、さやに振らしつ。

安我古非波。麻左香毛可奈思。久佐麻久良。多胡能伊利野乃。於父母可奈思母。
我が戀は、まさかも悲し。草枕、多胡の入野の、奥も悲しも。

可美都氣努。安蘇能麻素武良。可伎武太伎。奴禮杼安加奴乎。安杼加安我世牟。

がもれども」か(二)「已」は「巳」の誤にて「はゝはもれども」か
をても此の面に―彼方此方に
狭衣の―枕詞
汝を懸けなはめ―汝を懸けて慕はざらめ、忘れぬが故に懸けて戀ひ慕ふぞと也
月立し云々―月立しは月立ちにて初月をいふ、初月の見えし頃逢ひて其後逢はぬ夜の多くなりしより又逢ふことのあらんか或は絶えやせんかとあやぶめる歌
立つ鳥の―下の「目」の序、「め」は群(ムレ)の約言
目ゆか汝を見む―たゞ目にのみ見て斯く戀ひつゝあらんかの意
さ寝ざらなくに―寝ざるにの意、さは發語
あどか―などか、我が中はなどか也
埴科―信濃國
石井―地名か

筑波根の、をても此の面に、守部据ゑ、母こもれども、魂ぞ合ひにける。
左其呂毛能。乎豆久波禰呂能。夜麻乃佐吉。和須良延許波古曾。那乎可家奈波賣。
狭衣の、を筑波根ろの、山の崎、忘らえ來ばこそ、汝を懸けなはめ。
乎豆久波乃。禰呂爾都久多思。安比太欲波。佐波太奈利努乎。萬多禰天武可聞。
を筑波の、嶺ろに月立し、間夜は、さはだなりぬを、又寝てむかも。
乎都久波乃。之氣吉許能麻欲。多都登利能。目由可汝乎見牟。左禰射良奈久爾。
を筑波の、繁き木の間よ、立つ鳥の、目ゆか汝を見む。さ寝ざらなくに。
比多知奈流。奈左可能宇美乃。多麻毛許曾。比氣波多延須禮。阿杼可多延世武。
常陸なる、なさかの海の、玉藻こそ、引けば絶えすれ、あどかたえせむ。

右十首。常陸國歌。

比等未奈乃。許等波多由登毛。波爾思奈能。伊思井乃手兒我。許登奈多延曾禰。
人皆の、言は絶ゆとも、埴科の、石井の手兒が、言な絶えそね。

ば門外に立たせては置かじ、必ず内に入れん
繼橋―ところ〴〵に柱を立てて板を繼ぎてわたせる橋
過ぎがてに―女の家のあたりを行き過ぎがたくするなり
かゞ鳴く―かゞは鷲の鳴きごゑ、一說「かゝ」と清音
あしほ山―(一)下野國、さらば足尾山か(二)葦穗山にて常陸國
和家―「家」一本「我」に作るをよしとす
落つる水―瀧をいふ
たゆらに―前出
波播己毛禮杼母―(一)「己」は「可」の誤にて「はゝ

右四首。下總國歌。

筑波禰乃。禰呂爾可須美爲。須宜可提爾。伊伎豆久伎美乎。爲禰氏夜良佐禰。
筑波根の、嶺ろに霞居、過ぎがてに、息衝く君を、率寢て遣らさね。

伊毛我可度。伊夜等保曾吉奴。都久波夜麻。可久禮奴保刀爾。蘇提婆布利氏奈。
妹が門、いや遠ぞきぬ。筑波山、隱れぬ程に、袖は振りてな。

筑波禰爾。可加奈久和之能。禰乃未乎可。奈岐和多里南牟。安布登波奈思爾。
筑波根に、かゞ鳴く鷲の、音のみをか、鳴き渡りなむ。逢ふとは無しに。

筑波禰爾。曾我比爾美由流。安之保夜麻。安志可流登我毛。左禰見延奈久爾。
筑波根に、そがひに見ゆる、あしほ山、惡しかる咎も、さね見えなくに。

筱波彌乃。伊波毛等杼呂爾。於都流美豆。代爾毛多由良爾。和家於毛波奈久爾。
筑波根の、岩もとゞろに、落つる水、世にもたゆらに、我が思はなくに。

筑波禰乃。乎氏毛許能母爾。毛利敝須惠。波播己毛禮杼母。多麻曾阿比爾家留。

笹葉の云々—宣長說、笹葉に露霜の置きたる如く濡れての意
我來なば—我が來ぬるはの東國方言か、又我が行きなばの意

我に寄すとふ—我と關係ありと人がいひよすと也
手兒奈家—「家」一本「我」とある方宜し

おすひ—磯邊
浪もとゞろに—手兒奈が磯邊にありしかば浪さへめでてさわぎし程の美貌にめでて人々多く來りさわぎしとならん
鳰鳥の—枕詞
にへす—新嘗卽新稻を神に奉ること、朝廷はもとより民戶にても此祭をなし其時は人の入り來る事を忌みしものと見ゆ
其のかなしきを云々—其のいとしと思ふ君が來ら

馬來田の、嶺ろの笹葉の、露霜の、濡れて我來なば、汝は戀ふばぞも。
宇麻具多能。禰呂爾可久里爲。可久太爾毛。久爾乃登保可婆。奈我目保里勢牟。
馬來田の、嶺ろに隱り居、斯くだにも、國の遠かば、汝が目欲せむ。

右二首。上總國歌。

可都思加能。麻末能手兒奈乎。麻許登可聞。和禮爾余須等布。麻末乃氏胡奈乎。
葛飾の、眞間の手兒奈を、誠かも、我に寄すとふ。眞間の手兒奈を。
可豆思賀能。麻萬能手兒奈家。安里之可婆。麻末乃於須比爾。奈美毛登杼呂爾。
葛飾の、眞間の手兒奈が、ありしかば、眞間のおすひに、浪もとゞろに。
爾保杼里能。可豆思加和世乎。爾倍須登毛。曾能可奈之伎乎。刀爾多氏米也母。
鳰鳥の、葛飾早稻を、にへすとも、其のかなしきを、外に立てめやも。
安能於登世受。由可牟古馬母我。可都思加乃。麻末乃都藝波思。夜麻受可欲波牟。
足の音せず、行かむ駒もが。葛飾の、眞間の繼橋、止まず通はむ。

武藏野乃。久佐波母呂武吉。可毛可久母。伎美我麻爾末爾。吾者余利爾思乎。
武藏野の、草葉諸向き、かもかくも、君がまに〱、我は寄りにしを。
伊利麻治能。於保屋我波良能。伊波爲都良。比可婆奴流奴流。和爾奈多要曾禰。
入間路の、おほや川原の、いはゐづら、引かばぬる〱、我にな絶えそね。
和我世故乎。安杼可母伊波武。牟射志野乃。宇家良我波奈乃。登吉奈伎母能乎。
我が背子を、あどかも言はむ、武藏野の、うけらが花の、時無きものを。
佐吉多萬能。津爾乎流布爾乃。可是乎伊多美。都奈波多由登毛。許登奈多延曾禰。
埼玉の、津に居る船の、風をいたみ、綱は絶ゆとも、言な絶えそね。
奈都蘇妣久。宇奈比乎左之氐。等夫登利乃。伊多良武等曾與。阿我之多波倍思。
夏麻引く、うなびを指して、飛ぶ鳥の、至らむとぞよ、我が下延へし。

右九首。武藏國歌。

宇麻具多能。禰呂能佐左葉能。都由思母能。奴禮氐和伎奈婆。汝者故布婆曾母。

諸向き—(一)諸共に靡くさま(二)あなたへもこなたへも靡くさま
おほや—入間郡大家か　いはゐづら—未詳、蔓草なるべし
あどかも言はむ—「あどかも」は何とかも、戀しさは譬へいはん方も無しの意
うけらが花の—「時」にかかる
時無きものを—いつといふ時なくのべつに戀ふるものを
埼玉の津—利根川の船津をいふか
夏麻引く—枕詞
下延へ—心の内に深く慕しく思ふ

相模路の、餘綾の濱の、眞砂なす、兒らく悲しく、思はるゝかも。

右十二首。相模國歌。

多麻河泊爾。左良須氏豆久利。佐良佐良爾。奈仁曾許能兒乃。己許太可奈之伎。

多麻川に、晒す手作、さら〳〵に、何ぞ此の兒の、幾許かなしき。

武藏野爾。宇良敝可多也伎。麻左氐爾毛。乃良奴伎美我名。宇良爾低爾家里。

武藏野に、占へ肩燒き、まさでにも、告らぬ君が名、占に出にけり。

武藏野乃。乎具奇我吉藝志。多知和可禮。伊爾之與比欲利。世呂爾安波奈布與。

武藏野の、小岫が雉子、立ち別れ、去にし宵より、背ろに逢はなふよ。

古非思家波。素氐毛布良武乎。牟射志野乃。宇家良我波奈乃。伊呂爾豆奈由米。

戀しけば、袖も振らむを、武藏野の、うけらが花の、色に出なゆめ。

或本歌曰。伊可爾思氐。古非波可伊毛爾。武藏野乃。宇家良我波奈乃。伊呂爾低受安良牟。

はの意、本文「豆」一本なし、古義に、紐解くを恥かしがる新妻にても無きを何とて紐解かずしては寢んの意とせり

寢夜の―(一)枕詞か(二)本文「久」は「己」、「欲」は「奴」の誤にて「こもりぬの」の訛傳か

下還へ―心のうちに深く慕しく思ふことと

こちでつるかも―言に出しつるかも

兒良久―「久」は「之」の誤にて「こらし」か

多麻川―武藏國多摩川

手作―手織の布

かなしき―可憐に戀しく思はるゝぞ

まさでに―略解には、眞定にも也といへど、古義にいへる如く、まさてと清音にし、眞貲(マサネ)の轉とする方可ならんか

小岫―岫は和名抄に「陸詞云、岫、山穴似レ袖、和名久木」、古來此野のをぐきといふべき所は、秩父山の方へよりて有るべしといへり

逢はなふよ―逢はぬよ

戀しけば―戀しくあらば

ま悲しみ、さ寢に我は行く。鎌倉の、みなのせ川に、潮滿つなむか。

母毛豆思麻。安之我良乎夫禰。安流吉於保美。目許曾可流良米。己許呂波毛倍杼。

百づ島、足柄小船、歩き多み、目こそ離るらめ。心は思へど。

阿之我利能。刀比能可布知爾。伊豆流湯能。余爾母多欲良爾。故呂何伊波奈久爾。

足柄の、土肥の河内に、出づる湯の、よにもたよらに、兒ろが言はなくに。

阿之我利乃。麻萬能古須氣乃。須我麻久良。安是加麻可左武。許呂勢多麻久良。

足柄の、まゝの小菅の、菅枕、あぜかまかさむ。兒ろせ手枕。

安思我里乃。波故禰能禰呂乃。爾古具佐能。波奈都豆麻奈禮也。比母登可受禰牟。

足柄の、箱根の嶺ろの、和草の、花妻なれや、紐解かず寢む。

安思我良乃。美佐可加思古美。久毛利欲能。阿我志多婆倍乎。許知氏都流可毛。

足柄の、み坂恐み、曇夜の、我が下這へを、こちでつるかも。

相模治乃。余呂伎能波麻乃。麻奈胡奈須。兒良久可奈之久。於毛波流留可毛。

ま悲しみ—「ま」は接頭語、愛する意

満つなむか—満つらんかの東語なるべし

百つ島—「歩き多み」といはん料

足柄小船—足柄山の材にて造れる船

目こそ離るらめ—男の目かる(訪ね來ぬ)ならん

よにもたよらに云々—(一)「よ」は代々にの意、「たよらに云々」は、絶えん如くいはざりしにの意にて妹が今更に逢はぬを疑ふか(二)「たよらに」は大丈夫にの意、上よりのつゞきは湯の大丈夫に多き意、歌の意は、妹が大丈夫にたしかにいはぬをあやぶめるなり(三)たゞよひ不安定に女がいへるにも無きに何ぞ我が斯く物思ひすらんと也

兒ろ—妹

あぜ—何ぞの東國方言

まかさむ—枕とせんや

兒ろせ手枕—いざ我手を手枕にせよ兒等よの意なるべし、略解に、兒等と夫は共に手枕を交すからはといへるはいかゞ

嶺ろ—ろは助辭

花妻なれや—花妻なりや

かなるましづみ—(一)弱はこけぜといふものを以て仕掛け置く、獣觸るれば急にそのこはぜはづれてわなにかゝる、「かなるまし」は其のこはぜのはづるゝ間をかなぐるまといふを略していへるにて、いと短き時間に譬ふ、「しづみ」は「靜めて」にて、ひまをぬすむ意(二)俗に鳴りをしづめてといふ意に聞ゆ(三)騷鳴聞靜にて騷しき人音をしづめて後の意

相模嶺—今大山といふ山か

を峰—重ねていふのみ

我を音し泣くな—我を音に泣かしむる勿れ

まつしたす—(一)契沖說、「まぶし立つ」也、まぶしは獵夫の柴など折かけて身をかくすもの、獵夫のまぶしを立てゝうかゞふ如く杉の木の間より夫の今や歸ると眺め居る意(二)古義は「令待慕」にて夫の方より吾を待ち慕はしむる謂なるべしといへり、「尚可ㇾ勘」

いはくえ—石崩にて山或は川岸などの岸の崩れたるところ「悔ゆ」の序

余—「爾」の誤

相模禰乃。乎美禰見所久思。和須禮久流。伊毛我名欲妣氏。吾乎禰之奈久奈。

相模嶺の、を峰見過ぐし、忘れ來る、妹が名呼びて、我を音し泣くな。

或本歌曰。武藏禰乃。乎美禰見可久思。和須禮遊久。伎美我名可氣氏。安乎禰思奈久流。

和我世古乎。夜麻登敝夜利氏。麻都之太須。安思我良夜麻乃。須疑乃木能末可。

我が背子を、大和へ遣りて、まつしたす、足柄山の、杉の木の間か。

安思我良能。波姑禰乃夜麻爾。安波麻吉氏。實登波奈禮留乎。阿波奈久毛安夜思。

足柄の、箱根の山に、粟蒔きて、實とはなれるを、逢はなくも怪し。

或本歌末句云。波布久受能。比可利與利己禰。思多奈保那保爾。

可麻久良乃。美胡之能佐吉能。伊波久叡乃。伎美我久由倍伎。己許呂波母多自。

鎌倉の、みこしの崎の、いはくえの、君が悔ゆべき、心は持たじ。

麻可奈思美。佐禰爾和波由久。可麻久良能。美奈能瀬河泊余。思保美都奈武賀。

玉の緒—長きにも短きにも譬ふ、こゝは後者
鳴瀬—古は水有り火有りて湧き返る音高かりしといふ

夜—「良」の誤

おし邊—一説、磯邊の東國方言

亂れしめよや—宣長説「亂れ初めよや」なるべし

をても—「をちも」の轉、かなたの意

一本歌曰。阿倣良久波。多麻能乎思家也。古布良久波、布自乃多可禰爾。布流由伎奈須毛。

駿河能宇美。於思倣爾於布流。波麻都豆夜。伊麻思乎多能美。波播爾多我比奴。
駿河の海、おし邊に生ふる、濱葛、汝を頼み、母に違ひぬ。

一云。於夜爾多我比奴。

右五首。駿河國歌。

伊豆乃宇美爾。多都思良奈美能。安里都追毛。都藝奈牟毛能乎。美太禮志米梅楊。
伊豆の海に、立つ白浪の、在りつゝも、繼ぎなむものを、亂れしめよや。

或本歌曰。之良久毛能。多延都追母。都我牟等母倍也。美太禮曾米家武。

右一首。伊豆國歌。

安思我良能。乎氏毛許乃母爾。佐須和奈乃。可奈流麻之豆美。許呂安禮比毛等久。
足柄の、をても此の面に、さす羂の、かなるましづみ、兒ろ我紐解く。

のよみし歌
麁玉—遠江國麁玉郡
汝を立てて—(一)汝を立ち待たしめて(二)汝を立止まらせ置きて
ゆきがつましも—(一)雪が積りしもの意、本文「自」は「目」の誤、(二)行きがてましもの意
いを先立たに—(一)寢を先立たねの意、「に」は「ね」に通はしいふ東語か、又、一訓「ね」(二)汝も立止らずして先立ちて行けかし、我も共に行かんといふ意(三)本文「移乎」は「移毛」の誤にて「いも」か
和多佐波太—「太」は「爾」の誤
斑衾—斑摺の衾か、或は筋ある倭文織の布にてつくれる衾か
入りなましもの—結句をこの上に轉じて見よ、さて三句までは序
木の暗云々—木の繁りて暗く隱妻と立隱るべき時節過ぎてはの意か
とへば—といへば
けによばず來ぬ—(一)「け」は息、「によぶ」はうめく、息衝きうめくこともなく安く來りつの意(二)「け」は來經(キヘ)の約「よばず」は及ばず、時刻を移さず急ぎ來りぬの意

きべ人の、斑衾に、綿さはに、入りなましもの。妹がを床に。

右二首。遠江國歌。

安麻乃波良。不自能之婆夜麻。己能久禮能。等伎由都利奈波。阿波受可母安良牟。
天の原、富士の柴山、木の暗の、時移りなば、逢はずかもあらむ。

不盡能禰乃。伊夜等保奈我伎。夜麻治乎毛。伊母我理登倍婆。氣爾餘婆受吉奴。
富士の根の、いや遠長き、山路をも、妹許とへば、けによばず來ぬ。

可須美爲流。布時能夜麻備爾。和我伎奈婆。伊豆知武吉氏加。伊毛我奈氣可牟。
霞み居る、富士の山邊に、我が來なば、何地向きてか、妹が歎かむ。

佐奴良久波。多麻乃緒婆可里。古布良久波。布自能多可禰乃。奈流佐波能其登。
さ寢らくは、玉の緒ばかり、戀ふらくは、富士の高嶺の、鳴澤の如。

或本歌曰。麻可奈思美。奴艮久波思家艮久。奈艮久波。伊豆能多可禰能。奈流左波奈須與。

人などの衣服の美きを見てよめるなるべし、上句のさましか聞ゆ」

降らる―降れるの東語

否をかも―否よ、しかはあらぬかの意

かなしき―いとほしき、かはゆき

乾さるかも―乾せるかものの東語

麁玉の云々―麁玉は遠江國（一）雪の降る夜尋ね來りし男に女の贈れる歌（二）男の旅立つ時妻の送り來りければ別るゝ時男

或本歌曰。多巨知爾能。又云。安麻多伎保思母。

筑波禰爾。由伎可母布良留。伊奈乎可母。加奈思吉兒呂我。爾努保佐流可母。

筑波根に、雪かも降らる、否をかも、かなしき兒ろが、布乾さるかも。

右二首。常陸國歌。

信濃奈流。須我能安良能爾。保登等藝須。奈久許惠伎氣婆。登伎須疑爾家里。

信濃なる、すがの荒野に、郭公、鳴く聲聞けば、時過ぎにけり。

右一首。信濃國歌。

相聞

阿良多麻能。伎倍乃波也之爾。奈乎多氏天。由吉可都麻思自。移乎佐伎太多尼。

麁玉の、きべの林に、汝を立てて、ゆきがつましも、いを先立たに。

伎倍比等乃。萬太良夫須麻爾。和多佐波太。伊利奈麻之母乃。伊毛我乎杼許爾。

萬葉集卷第十四上

東歌

奈都素妣久。宇奈加美我多能。於伎都渚爾。布爾波等杼米牟。佐欲布氣爾家里。

夏麻引く、海上潟の、沖つ洲に、船は止めむ。小夜更けにけり。

右一首。上總國歌。

可豆思加乃。麻萬能宇良末乎。許具布爾能。布奈妣等佐和久。奈美多都良思母。

葛飾の、眞間の浦まを、漕ぐ船の、船人騒ぐ。浪立つらしも。

右一首。下總國歌。

筑波禰乃。爾比具波麻欲能。伎奴波安禮杼。伎美我美家思志。安夜爾伎保思母。

筑波根の、新桑繭の、衣はあれど、君が御衣し、あやに著欲しも。

夏麻引く枕—詞
海上潟—總上國

葛飾—武藏國
浦ま—一訓「浦み」

筑波根の云々—官長云、
「是は京より下り居る官

投箭—投げつくる矢

欲見者—「欲」は「放」の誤にて「みさくれば」とあるべし

十羽の松原—大和國
いざわ—いざに同じ

こと避けば—「避けば」一訓「避かば」斯うして私をも捨てになる位ならば一層の事國を立つ程にこそ避くべきを他國の任などに率て來て避くるよと恨むなり、この避くるは死別をさす

旅のけに—「け」は日、旅の間にの意

葦邊往。鴈之翅乎。見別。公之佩具之。投箭之所思。
葦邊行く、雁の翼を、見る毎に、君が佩ばしゝ、投箭し思ほゆ。

右二首。但或云。此短歌者防人妻所レ作也。然則應レ知ニ長歌亦此同作一焉。

欲見者。雲井所見。愛。十羽能松原。少子等。率和出將見。琴酒者。國丹放甞。別避者。宅仁離南。乾坤之。神志恨之。草枕。此羈之氣爾。妻應離哉。
見が欲れば、雲井に見ゆる、はしきやし、十羽の松原、若子ども、いざわ出で見む。こと避けば、國にさけなむ。こと避けば、家にさけなむ。天地の、神し恨めし。草枕、此の旅のけに、夫避くべしや。

反歌

草枕。此羈之氣爾。妻放。家道思。生爲便無。
草枕、此の旅のけに、夫さかり、家路思へば、生ける術無し。

或本歌曰。羈乃氣二爲而。

右二首。

此月者。君將來跡。大舟之。思憑而。何時可登。吾待居者。黃葉之。過行跡。玉梓之。使之云者。螢成。髣髴聞而。大士乎。太穗跡。立而居而。去方毛不知。朝霧乃。思惑而。杖不足。八尺乃嘆。嘆友。記乎無見跡。何所鹿。君之將座跡。天雲乃。行之隨爾。所射完乃。行文將死跡。思友。道之不知者。獨居而。君爾戀爾。哭耳思所泣。

此の月は、君來まさむと、大舟の、思ひ賴みて、何時しかと、我が待ち居れば、黃葉の、過ぎて行きぬと、玉梓の、使の言へば、螢なす、仄に聞きて、丈夫を、はたとょのふと、立ちて居て、行方も知らに、朝霧の、思ひ惑ひて、（杖足らず）八尺の嘆、嘆けども、しるしを無みと、何處にか、君が座さむと、天雲の、行きのまにく、（射ゆしょの）行きも死なむと、思へども、道し知らねば、獨り居て、君に戀ふるに、音のみし泣かゆ。

反歌

大士乎云々―一說、「大土乎足蹈駈」の誤か、しからば「おほつちを、あしふみかけり」と訓むべし、又「天土乎乞禱歟」の誤にて「あめつちを、こひのみなげき」か。尚可勘

杖足らず―枕詞

天雲の云々―天雲の行くに隨ひての意

射ゆしゝの―枕詞

道し知らねば―旅にて夫の死にたるを悲しみて妻のよめる歌

立丹置而。汭潭矣。枕丹卷而。占裳無。偃爲公者。母父之。愛子丹裳在將。(稚草之。妻裳將有等。家問跡。家道裳不云。名矣問跡。名谷裳不告。誰之言矣。勞鳴。腫涙能。恐海矣。直渉異將。

反歌

母父裳。妻裳子等裳。高高丹。來將跡待。人乃悲。

家人乃。將待物矣。津煎裳無。荒磯矣卷而。偃有公鴨。
家人の、待つらむものを、つれも無き、荒磯をまきて、臥せる君かも。

汭潭。偃爲公矣。今日今日跡。將來跡將待。妻之可奈思母。
入淵に、こやせる君を、今日々々と、來むと待つらむ、妻し悲しも。

汭浪。來依濱丹。津煎裳無。偃有公賀。家道不知裳。
いる浪の、來寄する濱に、つれも無く、こやせる君が、家路知らずも。

右九首。

母父裳云々—此歌前出

津煎—「煎」は「烈」の誤

入淵—海川などの陸に入り込みて水の深くなりたる處

こやせる—臥せる

汭浪—(一)「汭」は「澳」の誤にて「おきつなみ」か(二)「うらなみの」と訓まんか、この歌は前の「鳥音云々」といへる長歌の反歌か

思はしき―言傳やらまほしき事あらばの意

言だにとはず―ものをも言はず

思へども―いかに思ろても

待異六―「異」一本「羅」とある方よし、「まつらむ」

高々に―遠く望む意

浪之塞―「之」は「立」の誤か、又は「之」の下に別に「立」を脱せしか、さらば「なみたちさふる」とか「なみのたちさふ」とか訓むべし

かあらむ、(若草の、)妻かありけむ、思ほしき、言傳てむやと、家問へば、家をも告らず、名を問へど、名だにも告らず、泣く兒なす、言だにとはず。思へども、悲しきものは、世の中にあり。

反歌

母父毛。妻毛子等毛。高高二。來跡待異六。人之悲沙。

母父も、妻も子供も、高々に、來むと待ちけむ、人の悲しさ。

蘆檜木乃。山道者將行。風吹者。浪之塞。海道者不行。

足引の、山路は行かむ。風吹けば、浪のさへぬる、海路は行かじ。

或本歌。

備後國神島濱調使首見屍作歌一首竝短歌。

玉桙之。道爾出立。葦引乃。野行山行。潦。川徃渉。鯨名取。海路丹出而。吹風裳。母穗丹者不吹。立浪裳。箆跡丹者不起。恐耶。神之渡乃。敷浪乃。寄濱邊丹。高山矣。部

玉桙之。道去人者。足檜木之。山行野往。直海。川往渡。不知魚取。海道荷出而。惶八。神之渡者。吹風母。和者不吹。立浪母。踈不立。跡座浪之。立塞道麻。誰心。勞跡鴨。直渡異六。

玉桙の、道行く人は、足引の、山行き野行き、直渡り、川行き渡り、勇魚取り、海路に出でて、畏きや、神の渡は、吹く風も、のどには吹かず、立つ浪も、おほには立たず、しき浪の、立ちさふ道を、誰が心、いとほしとかも、直渡りけむ。

鳥音之。所聞海爾。高山麻。障所爲而。奥藻麻。枕所爲。蛾葉之衣。浴不服爾。不知魚取。海之濱邊爾。浦裳無。所宿有人者。母父爾。眞名子爾可有六。若蒭之。妻香有異六。思布。言傳八跡。家問者。家乎母不告。名問跡。名谷母不告。哭兒如。言谷不語。思鞆。悲物者。世間有。

鳥が音も、聞えぬ海に、高山を、隔になして、沖つ藻を、枕にまきて、蛾の衣、濯ぎも著ずに、勇魚取り、海の濱邊に、うらも無く、宿れる人は、母父に、愛子に

直海—「海」は「渉」の誤か

神の渡—備後國神島濱か

おほには立たず—浪の高く立つをいふ、本文「踈」の下に「者」あるべし

しき浪の云々—浪打際をいふ

誰が心云々—故郷の人の待ち佗ぶらんをいとほしみて心急ぎまゝに云々の意、さて溺死せることは反歌に知らせたり

鳥音之—「之」は「不」の誤

枕所爲—一本「枕丹卷」とある方宜し、或は「所」は「爾」の誤にて「まくらに」なしてか

蛾葉之衣—一說「葉」は「糸」の誤か、又「蛾」は「蛸」の誤にて「あきつばの」きぬだに著ずにか

うらも無く—何心も無く

大夕卜―「奴左」とか「幣」とかありしがあやまれるにや
枉言―「枉」は「狂」の誤

大君の云々―地方官となりて筑紫の國に行きし人の彼の地にて死せるを、京にある妻のかなしみてよめる歌
大伴の―枕詞
水手の音―舟人の聲、一說、本文「爲乍」は「喚」などの誤にて「かこの聲よび」か
たゞか―噂、消息

王之。御命恐。秋津島。倭雄過而。大作之。御津之濱邊從。大舟爾。眞梶繁貫。旦名伎爾。水手之音爲乍。夕名寸爾。梶音爲乍。行師君。何時來座登。大夕卜置而。齋度爾。枉言哉。人之言釣。我心。盡之山之。黄葉之。散過去常。公之正香乎。

大君の、命畏み、秋津島、大和を過ぎて、大伴の、御津の濱邊ゆ、大船に、眞檝しじ貫き、朝凪に、水手の音しつゝ、夕凪に、檝の音しつゝ、行きし君、何時來まさむと、幣置きて、齋ひ渡るに、狂言や、人の言ひつる。我が心、筑紫の山の、黄葉の、散り過ぎにきと、君がたゞかを。

反歌

枉言哉。人之云鶴。玉緒乃。長登君者。言手師物乎。

狂言や、人の言ひつる。玉の緒の、長くと君は、言ひてしものを。

右二首。

年魚をくはしめ―鵜に年魚をとらするをいふ
くはしめ―うるはしき女
投ぐる箭の―枕詞
遠ざかり居て―葬りたれば家より遠く離れ居て
充物曾―「充」古本「花」とある方宜し、訓も「はなものぞ」とすべきか
山のまに―もとの山のとほりにの意、一訓「やまながら」「海のまに」も「海ながら」
うつしく―現存するをいふ
直ならめ―常ならめといふに同じ

瀬の、年魚をくはしめ、下つ瀬の、鮎をくはしめ、くはしめに、鮎をあたらし、投ぐる箭の、遠ざかり居て、思ふ空、安からなくに、嘆く空、安からなくに、衣こそは、それ破れぬれば、縫ひつゝも、又も逢ふと言へ、玉こそは、緒の絶えぬれば、括りつゝ、又も逢ふと言へ、又も、逢はぬものは、妹にしありけり。

隱來之。長谷之山。青幡之。忍坂山者。走出之。宜山之。出立之。妙山叙。惜山之。荒巻惜毛。

隱來の、泊瀬の山、青幡の、忍坂の山は、走出の、宜しき山の、出立の、まぐはしき山ぞ、惜しき山の、荒れまく惜しも。

高山與。海社者。山隨。如此毛現。海隨。然直有目。人者充物曾。空蟬與人。

高山と、海こそは、山のまに、斯くもうつしく、海のまに、然も直ならめ、人は徒物ぞ。空蟬の世人。

右三首。

戀ひぬ時とは―戀ひぬ時とては

始めてし―死にし時をいふ

岩が根の云々―夫の墓の側に妻の宿り居て歎くさま

鮎遠惜―(一)「辭遠借」の誤か、さらば「ことゝほざかり」と訓むべし(二)「副稜緒」の誤にて「たぐひてましを」か

縫乍物―「縫」古本「繼」「つぎつゝも」と訓むべし

戀ひぬ時とは、あらねども、此の九月を、我が背子が、偲びにせよと、千代にも、偲び渡れと、萬代に、語り繼がへと、始めてし、此の九月の、過ぎまくを、甚も術無み、新玉の、月の替れば、せむ術の、たどきを知らに、岩が根の、こゞしき道の、岩床の、根延へる門に、朝には、出で居て嘆き、夕には、入り居戀ひつゝ、ぬば玉の、黑髮敷きて、人の寢る、熟睡は寢ずに、大船の、ゆくらくに、思ひつゝ、我が寢る夜らは、よみも敢へぬかも。

右一首。

隱來之。長谷之川之。上瀨爾。鵜矣八頭漬。下瀨爾。鵜矣八頭漬。上瀨之。年魚矣令咋。下瀨之。鮎矣令咋。麗妹爾。鮎遠惜。投左乃。遠離居而。思空。不安國。嘆空。不安國。衣社薄。其破者。縫乍物。又母相登言。玉社者。緒之絕薄。八十一里喚雞。又物逢登曰。又毛。不相物者。孋爾志有來。

隱國の、泊瀨の川の、上つ瀨に、鵜を八つ潜け、下つ瀨に、鵜を八つ潜け、上つ

古義には「あしげのこまの」心あれかも―心あればかも

天地…入座戀乍―この三十四句は挽歌なりしが前後の句の落失せたるより紛れ入りしにて、上十句より直ちに「烏玉之」云々の句に接し相聞の歌とすべしとは古義の說、又「烏玉之」以下九句は竄入也とは略解の說、何れにしても此歌甚しき錯簡あるなり

白雲の云々―國の極きをいふ
青雲―青空
天雲―天
天地に云々―天地の神に言擧するをいふ、一說、本文「滿言」の「言」は「足」の誤にて「みちたらはして」か

衣手の、眞白の駒の、斷ゆるも、心あれかも、常ゆ異に鳴く。

右二首。

白雲之。棚曳國之。青雲之。向伏國乃。天雲。下有人者。妾耳鴨。君爾戀濫。吾耳鴨。夫君爾戀禮薄。天地。滿言。戀鴨。胷之病有。念鴨。意之痛。妾戀叙。日爾異爾益。何時橋物。不戀時等者。不有友。是九月乎。吾背子之。偲丹爲與得。千世爾物。偲渡登。萬代爾。語都我部等。始而之。此九月之。過莫乎。伊多母爲便無見。荒玉之。月乃易者。將爲須部乃。田度伎乎不知。石根之。許凝敷道之。石床之。根延門爾。朝庭。出居而嘆。夕庭。入座戀乍。烏玉之。黑髮敷而。人寢。味寢者不宿爾。大船之。行良行良爾。思乍。吾寢夜等者。數物不敢鴨。

白雲の、棚引く國の、青雲の、向伏す國の、天雲の、下なる人は、我のみかも、君に戀ふらむ、我のみかも、君に戀ふれば、天地に、言ひ足らはして、戀ふれかも、胸の病める、思へかも、心の痛き、我が戀ぞ、日にけに增る。何時はしも、

城のへの宮—卷二高市皇子尊城上殯宮とあるに同じく此の歌も同尊の殯宮にありし時舎人のよめるなり
磨ぎし心—皇子の御爲めに盡さんと思ふ心
天雲に云々—天雲の如くに亂れたゞよふの意
こい轉び—伏し轉び
ひづち泣けども—袖ひぢて泣けども

飼旱—一說「旱」は「宮」の誤にて「かひなめ」か

三野の大君—栗隈王の第二子橘諸兄の父なる三野王か
嘶え立ちつる—連立ちて嘶く意

大分青馬—一訓「ひたをのこま」とあれどいかゞ、

殿を、仕へ奉りて、殿籠り、籠り座せば、朝には、召して使はし、夕には、召して使はし、使はしゝ、舎人の子等は、行く鳥の、群りて待ち、あり待てど、召し給はねば、劒太刀、磨ぎし心を、天雲に、思ひはふらし、こい轉び、ひづち泣けども、飽足らぬかも。

右一首。

百小竹之。三野王。金厩。立而飼駒。角厩。立而飼駒。草社者。取而飼旱。水社者。挹而飼旱。何然。大分青馬之。鳴立鶴。

百篠の、三野の大君、西の厩、立てて飼ふ駒、東の厩、立てて飼ふ駒、草こそは、取りて飼へかに、水こそは、汲みて飼へかに、何しかも、眞白の駒の、嘶え立ちつる。

反歌

衣袖。大分青馬之。嘶音。情有鳧。常從異鳴。

か、或はその邊にさる地あるか(二)廣瀨郡城缶(キノべ)か
つぬさはふ―枕詞
おくか―はて
行き觸れし松―「遠つ人松の下路ゆ」と前に出でし松、一說、本文「往」は「持」の誤にて「御袖持ち觸りてし松を」と訓ず
皇―「吾王」の誤か、又は「皇呂」にて「おほきみろ」か
羣而待―「待」は「侍」の誤にて「むれてさもらひ」か
つれも無き―緣もゆかりも無き

行く道の、たづきを知らに、思へども、しるしを無み、嘆けども、おくかを無み、大御袖、行き觸れし松を、言問はぬ、木にはあれども、新玉の、立つ月毎に、天の原、振りさけ見つゝ、玉襷、懸けて偲ばな。畏けれども。

反歌

角障經。石村山丹。白栲。懸有雲者。皇可聞。

つぬさはふ、いはれの山に、白妙に、懸れる雲は、我が大君かも。

右二首。

磯城島之。日本國爾。何方。御念食可。津禮毛無。城上宮爾。大殿乎。都可倍奉而。殿隱。隱在者。朝者。召而使。夕者。召而使。遣之。舍人之子等者。行鳥之。羣而待。有雖待。不召賜者。劒刀。磨之心乎。天雲爾。念散之。展轉。土打哭杼母。飽不足可聞。

敷島の、大和の國し、如何樣に、思ほし召せか、つれも無き、城のへの宮に、大

天原。振放見管。珠手次。懸而思名。雖恐有。

懸けまくも、あやに畏し。藤原の、都しみゝに、人はしも、滿ちてあれども、君はしも、多く座せど、行きむかひ、年の緒長く、仕へ來て、君が御門を、天の如、仰ぎて見つゝ、畏けど、思ひ頼みて、何時しかも、日足らしまして、望月の、湛はしけむと、我が思へる、皇子の命は、春されば、殖槻が上の、遠つ人、松の下路ゆ、登らして、國見遊ばし、九月の、時雨の秋は、大殿の、砌しみゝに、露負ひて、靡ける萩を、玉襷、懸けて偲ばし、み雪降る、冬の朝は、刺楊、根張梓を、大御手に、取らし給ひて、遊ばしゝ、我が大君を、煙立つ、春日の暮に、眞十鏡、見れど飽かねば、萬代に、斯くしもがもと、大船の、頼める時に、泣く我が、目かも惑へる、大殿を、振りさけ見れば、白妙に、飾奉りて、内日刺す、宮の舍人は、栲のほの、麻衣著るは、夢かも、現かもと、曇り夜の、惑へる程に、あさもよし、城のへの道ゆ、つぬさはふ、いはれを見つゝ、神葬り、葬り奉れば、

懸けまくも云々―この歌は高市皇子のいと幼くおはしませし頃より仕へ奉りし人の皇子の薨去せし時作れる歌か
君はしも云々―皇子たちはその外にも多くいませどの意
行きむかひ―一說、外にも皇子はいませど、わきてこの君に心よせて仕へ奉るの意か、一說「向」は「易」の誤にて「行きかはる」か
日足らしまして―成長遊ばして、本文、上に註したる一說參照
殖槻―大和國添下郡
遠つ人―枕詞
懸けて偲ばし―御心に也
刺楊云々―「刺楊」は枕詞、「根」は上と下との續きに入れたる語「張梓」は弓のこと
煙立つ―霞立つ
春日の暮に―長き春の日の暮るゝに至るまでに
栲のほ―栲の色、即ち白色
曇り夜の―枕詞
あさもよし―枕詞
城のへ―(一)城上郡礒城

挽歌

挂纒毛。文恐。藤原。王都志彌美爾。人下。滿雖有。君下。大座常。往向。年緒
長。仕來。君之御門乎。如天。仰而見乍。雖畏。思憑而。何時可聞。日足座而。十
五月之。多田波思家武登。吾思。皇子命者。春避者。殖槻於之。遠人。待之下道
湯。登之而。國見所遊。九月之。四具禮之秋者。大殿之。砌志美彌爾。露負而。靡
芽子乎。珠手次。懸而所偲。三雪零。冬朝者。刺楊。根張梓矣。御手二。所取賜
而。所遊。我王矣。煙立。春日暮。喚犬追馬鏡。雖見不飽者。萬歲。如是霜欲得
常。大船之。憑有時爾。涙言。目鴨迷。大殿矣。振放見者。白細布。飾奉而。内
日刺。宮舍人方。一云「者」雪穗。麻衣服者。夢鴨。現前鴨跡。雲入夜之。迷問。朝裳吉。城
於道從。角障經。石村乎見乍。神葬。葬奉者。往道之。田付叫不知。雖思。印乎
無見。雖嘆。奧香乎無見。御袖。往觸之松矣。言不問。木雖在。荒玉之。立月每。

—共に「い刈り持ち來て」の下に移して見るべく、未だ妻として共寢もせざるにの義ならんか

日足座而—一說「白之座而」の誤にて、上に「吾王之天下」の二句を脫す「わがおほきみの、あめのした、しろしいまして」と訓ずべし

十五月之—「十五夜月之」の略

御手二—上に「大」の字を脫す

涙言—「言涙」の誤にて「我が涙目かもまどはす」ならんか、「言」を「わが」と訓ずる類例あり

の歌なるべし、道のしらなくとはよみつれども、なは思ひかねて出立ち行くならんといへり
こゆ巨勢路—こゝより越え＝巨勢

門に居る云々—門まで送り出でたる女の我が家の内へ歸り入る程の暫しの間なりとものの意か、或は、我を送りて見えずなり少女は家の内に入るとも、なほ痛く我を戀ふとならばおつつけ歸り來らんとの意か、本文「郎子」は「郎女」の誤なるべし

級照る—枕詞、一訓「しなたつ」
筑摩、息長—近江國坂田郡
遠智の小菅—遠智は息長の内の地名、小菅は未だ世づかぬ少女に喩へしならん
編まなくに、敷かなくに

左夜深而。今者明奴登。開戸手。木部行君乎。何時可將待。
小夜更けて、今は明けぬと、戸開きて、紀邊行きし君を、何時とか待たむ。

門座。郎子内爾。雖至。痛之戀者。今還金。
門に居る、少女は内に、至るとも、いたくし戀ひば、今歸り來む。

右五首。

譬喩歌

師名立。都久麻左野方。息長之。遠智能小菅。不連爾。伊苅持來。不敷爾。伊苅持來而。置而。吾乎令偲。息長之。遠智能子菅。
級照る、筑摩狹額田、息長の、遠智の小菅、編まなくに、い刈り持ち來、敷かなくに、い刈り持ち來て、置きて、我を偲ばす。息長の、遠智の小菅。

右一首。

不來益。久有。今七日許。早有者。今二日許。將有等曾。君者聞之二二。勿戀吾妹。

紀の國の、濱に寄るとふ、鰒珠、拾はむと云ひて、妹の山、背の山越えて、行きし君、何時來まさむと、玉桙の、道に出で立ち、夕卜を、我が問ひしかば、夕卜の、我に告らく、我妹子や、汝が待つ君は、奥つ浪、來寄る白珠、邊つ浪の、寄する白珠、求むとぞ、君が來まさぬ、拾ふとぞ、君は來まさぬ。久ならば、今七日許、早からば、今二日許、あらむとぞ、君は聞しゝ。な戀ひそ我妹。

反歌

杖衝毛。不衝毛吾者。行目友。公之將來。道之不知苦。

杖衝きも、衝かずも我は、行かめども、君が來まさむ、道の知らなく。

直不往。此從巨勢道柄。石瀨蹈。求曾吾來。戀而爲便奈見。

（直に行かず、こゆ巨勢路から、岩瀨踏み、求めぞ我が來し。戀ひて術無み。

久有―下に「者」を脫す

君は聞しゝ―夫君は仰ありしと夕卜の夫君の言を傳へていへる由也

杖衝きも―杖を衝きても

直に行かず―遍り道をして、宣長は、これも同じ女

負ひ竝め持ちて―右二品を共に負ひ持ち行きての意

馬かへ―馬に替へよの意、古は物々交換なればいふ、又賣代なして馬を買へとも解し得ん

しるし無し―かひなし、益なし

馬替へば―一訓「馬買はば」

反歌

泉河。渡瀨深見。吾世古我。旅行衣。裳沾鴨。

泉川、渡瀨深み、我が背子が、旅行衣、裾濡れむかも。

或本反歌曰

淸鏡。雖持吾者。記無。君之步行。名積去見者。

眞十鏡、持たれど我は、しるし無し。君がかちより、なづみ行く見れば。

馬替者。妹步行將有。縱惠八子。石者雖履。吾二行。

馬替へば、妹かちならむ。よしゑやし、石は踏むとも、我は二人行かむ。

右四首。

木國之。濱因云。鰒珠。將拾跡云而。妹乃山。勢能山越而。行之君。何時來座跡。玉桙之。道爾出立。夕卜乎。吾問之可婆。夕卜之。吾爾告良久。吾妹兒哉。汝待君者。奧浪。來因白珠。邊浪之。緣流白珠。求跡曾。君之不來益。拾登曾。公者

駒の來る夜は—一訓「くろまのくよは」

常にあらぬかも—常にあれかし

つぎねふ—枕詞

蜻蛉領巾—形蜻蛉の羽に似たるひれならん

に、父は寝たり、起き立たば、母知りぬべし、出で行かば、父知りぬべし、ぬば玉の、夜は明け行きぬ。幾許も、思ふ如ならぬ、忍夫かも。

反歌

川瀬之。石迹渡。野干玉之。黒馬之來夜者。常二有沼鴨。

川の瀬の、石踏み渡り、ぬば玉の、駒の來る夜は、常にあらぬかも。

右四首。

次嶺經。山背道乎。人都末乃。馬從行爾。己夫之。歩從行者。毎見。哭耳之所泣。曾許思爾。心之痛之。垂乳根乃。母之形見跡。吾持有。眞十見鏡爾。蜻領巾。負竝持而。馬替吾背。

つぎねふ、山城路を、人夫の、馬より行くに、己夫が、歩より行けば、見る毎に、音のみし泣かゆ。そこ思ふに、心し痛し。垂乳根の、母が形見と、我が持たる、眞澄鏡に、蜻蛉領巾、負ひ竝め持ちて、馬かへ我が夫。

來。野鳥。雉動。家鳥。可鷄毛鳴。左夜者明。此夜者旭奴。入而且將眠。此戸開爲。

隱國の、泊瀨の國に、さよばひに、我が來れば、棚曇り、雪は降り來ぬ。さ曇り、雨は降り來ぬ。野つ鳥、雉子はとよみ、家つ鳥、雞も鳴き、小夜は明け、此の夜は明けぬ。入りて朝寢む、此の戸開かせ。

反歌

隱來乃。泊瀨少國爾。妻有者。石者履友。猶來來。

隱國の、泊瀨小國に、妻しあれば、石は蹈めども、猶ぞ來にける。

隱口乃。長谷小國。夜延爲。吾大皇寸與。奧床仁。母者睡有。外床丹。父者寢有。起立者。母可知。出行者。父可知。野干玉之。夜者昶去奴。幾許雲。不念如。隱孋香聞。

隱國の、泊瀨小國に、よばひせす、我が夫の君よ。奧床に、母は寢たり、外つ床

さ曇り—さは發語

野つ鳥—枕詞

家つ鳥—枕詞

開かせ—開け

石は蹈めども—道の險惡なるをいふ

吾大皇寸與—(一)「大皇寸」は「夫寸美」の誤(二)「大皇寸」は「夫尊」の誤にて「あがせのみことよ」

不念如云々—一說、「おもはぬがごとしぬぶつまかも」と訓むべし

「肩」の誤にて「わがかたをすぎ」か

然れこそ云々―上の歌の返しか、又上に語の落ちたるか

切る髪の云々―兒四歳ばかりにして髮の末を切り初めて是をふかそぎといふ、さて八歳まで髮の末を肩と均しく切る、是をはなりとも振分髮ともいふ、八歳以後は髮をそがずして長く垂れしむれば斬くいふならん

橘の―以下誤字あるべきか

汝情待。

然れこそ、年の八年を、切る髪の、我が身を過ぎ、橘の、上枝を過ぎて、此の川の、下にも長く、汝が心待て。

反歌

天地之。神尾母吾者。禱而寸。戀云物者。都不止來。

天地の、神をも我は、祈りてき。戀とふものは、嘗て止まずけり。

柿本朝臣人麻呂之集歌。

物不念。路行去裳。青山乎。振酒見者。都追慈花。爾太遙越賣。作樂花。佐可遙越賣。汝乎叙母。吾爾依云。吾乎叙物。汝爾依云。汝者如何念也。念社。歳八年乎。斬髪與。和子乎過。橘之。末枝乎須具里。此川之。下母長久。汝心待。

右五首。

隱口乃。泊瀬乃國爾。左結婚丹。吾來者。棚雲利。雪者零來奴。左雲理。雨者落

右二首。

問答

物不念。道行去毛。青山乎。振放見者。茵花。香未通女。櫻花。盛未通女。汝乎曾母。吾丹依云。吾叫毛曾。汝丹依云。荒山毛。人師依者。余所。留跡序云。汝心勤。

物思はず、道行きなむも、青山を、振りさけ見れば、躑躅花、匂へる少女、櫻花、榮ゆる少女、汝をぞも、我に寄すとふ、我をもぞ、汝に寄すとふ。荒山も、人し寄すれば、我がもとに、止むとぞ云ふ。汝が心ゆめ。

反歌

何爲而。戀止物序。天地乃。神乎禱迹。吾八思益。

如何にして、戀ひ止むものぞ。天地の、神を祈れど、我は思ひ益す。

然有社。歳乃八歳叫。鑽髮乃。吾同子叫過。橘。末枝乎過而。此河能。下文長。

吾叫毛曾―「毛曾」一本「曾毛」とある方よろし

道行きなむも―道行きなんをも

青山―一訓「はる山」

寄すとふ―互に相思ふぞと人々のいひ寄するといふ意

荒山も云々―常侍さる處のありていへるか、一說、本文「余所留跡序云」は「よそるとぞいふ」と訓むべし

汝が心ゆめ―斯く言ひ寄せらるゝからは遂にはしか成りなん、汝が心もゆめ違ふことなく相思へよかしの意

吾同子叫過―「同子」は

妻をゐて本國に歸り、やがてその妻の死せる時によめる歌か(一)官人などの紀國へ下りて年頃留り居たる間にかたらへる女に別れて京へ歸り上る時女よめる歌か(二)古義には、其處に男の深く思ひを籠めて通へる女ありしを、其中をも引かば絕えんものをと多くの思ひ人の爭ひ誘ひて我中を引離ちけんがその時まゝよと思ひ放ちしが悔しやの意といへり

思ひ頼みて―一說、下の「深めし兒ら」につゞく

梓弓―以下四句は序

人―女、古義によれば自ら也、或は「我」の誤か

戀ふる思へば―今斯く戀ふるを思へば

汝が戀ふる云々―この女の戀ひ慕ふ男に或人の道にて逢ひし由語れるを聞きてよめる歌なるべし

駒に―一訓「くろまに」

七瀨―瀨の多きをいふ

うらぶれて―憂ひ侘びて

たゞか―實際の消息

船の、思ひ頼みて、出立ちし、清き渚に、朝凪に、來寄る深海松、夕凪に、來寄る繩海苔。深海松の、深めし兒らを、繩海苔の、引けば絕ゆとや、里人の、行きの集ひに、泣く兒なす、ゆき取探り、梓弓、弓腹振り起し、しのぎ羽を、二つ手挾み、放ちけむ、人し悔しも。戀ふる思へば。

右一首。

里人之。吾丹告樂。汝戀。愛妻者。黃葉之。散亂有。神名火之。此山邊柄。(或本云「彼山邊」)烏玉之。黑馬爾乘而。河瀨乎。七湍渡而。裏觸而。妻者會登。人曾告鶴。

里人の、我に告ぐらく、汝が戀ふる、うつくし夫は、黃葉の、散りまがひたる、神南備の、この山邊から、ぬば玉の、駒に乘りて、川の瀨を、七瀨渡りて、うらぶれて、夫は逢へりと、人ぞ告げつる。

反歌

不聞而。默然有益乎。何如文。公之正香乎。人之告鶴。

聞かずして、もだもあらましを、何しかも、君がたゞかを、人の告げつる。

押照る―枕詞
そほ船―あかく塗りたる船
ひこづらひ―互に引き合ふ意
ありなみすれど―(一)夫婦となりて常に竝び居らんとすれどの意(二)「ありなみ」は「ありいなみ」にて、人のいひたつるをいなと言ひて爭ひつれども否み得ずして言ひ立てられしをいふ
言ひづらひ―いひ爭ひ
深海松の―枕詞
股海松の―枕詞、本文「俣」は「股」の通用
出立之―一說、「之」は「の」と訓みて、淸き渚につきたる語
紀の國の云々―(一)京に史生などにてありし人の

押照る　難波の崎に、引登る、朱のそほ船。そほ船に、綱取掛け、ひこづらひ、ありなみすれど、言ひづらひ、ありなみすれど、ありなみ得ずぞ、言はれにし我が身。

右一首。

神風之。伊勢乃海之。朝奈伎爾。來依深海松。暮奈藝爾。來因俣海松。深海松乃。深目師吾乎。俣海松乃。復去反。都麻等。不言登可聞。思保世流君。

神風の　伊勢の海の、朝凪に、來寄る深海松、夕凪に、來寄る股海松。深海松の、深めし我を、股海松の、復往き返り、妻と、言はじとかも。思ほせる君。

右一首。

紀伊國之。室之江邊爾。千年爾。障事無。萬世爾。加是將有登。大舟乃。思恃而。出立之。淸瀲爾。朝名寸二。來依深海松。夕難伎爾。來依繩法。深海松之。深目思子等遠。繩法之。引者絕登夜。散度人之。行之屯爾。鳴兒成。行取左具利。梓弓。弓腹振起。志之岐羽矣。二手挾。離兼。人斯悔。戀思者。

紀の國の、牟婁の江の邊に、千年に、障る事なく、萬代に、しかもあらむと、大

相語妻遠―「妻」は「益」の誤にて「かたらはましを」か

よしゑやし、死なむよ我妹、生けりとも、斯くのみこそ我が、戀ひ渡りなめ。

右二首。

見渡爾。妹等者立志。是方爾。吾者立而。思慮。不安國。嘆慮。不安國。左丹漆之。小舟毛鴨。玉纏之。小檝毛鴨。榜渡乍毛。相語妻遠。

見渡しに、妹らは立たし、この方に、我は立ちて、思ふ空、安からなくに、嘆く空、安からなくに、さ丹塗の、小舟もがも。玉纏の、小櫂もがも。漕ぎ渡りつゝも、相語らめを。

或本歌頭句云。

己母理久乃。波都世乃加波乃。乎知可多爾。伊母良波多多志。己乃加多爾。和禮波多知氏。

右一首。

忍照。難波乃埼爾。引登。赤曾朋舟。曾朋舟爾。綱取繋。引豆良比。有雙雖爲。曰豆良賓。有雙雖爲。有雙不得叙。所言西我身。

我子―他より我を指していふ代名詞、こゝは自ら間を設けていへり
うべな〳〵―げにも〳〵
本文、下に今一つ「名」ありしが脱せしか
蜷腸―枕詞
あさゞ―(一)本文は「何都良」の誤にて「かづら」(二)本文「左」は「尼」の誤にて交(アザネ)か、髪に木綿を交へ結ひ垂るゝ事
大和の―枕詞
押へ刺す―櫛は髪のおさへにさす物なればいふ
敷妙の兒―敷妙はうるはしく柔かなる絹なれば、よき女に譬へしなり、本文「刺」は「敷」の誤か
二二火―「火」は「夫」の誤
七日―「日」は「目」の誤

るや、人の兒故ぞ、通はすも我子。うべな〳〵、母は知らせず、うべな〳〵、父は知らせず、蜷の腸か黒き髪に、眞木綿以て、あさゞ結ひ垂れ、大和の、黄楊の小櫛を、押へ刺す、敷妙の兒は、それぞ我が妻。

反歌

父母爾。不令知子故。三宅道乃。夏野草乎。菜積來鴨。

父母に、知らせぬ兒ゆゑ、みやけ路の、夏野の草を、なづみ來るかも。

右二首。

玉田次。不懸時無。吾念。妹西不會波。赤根刺。日者之彌良爾。烏玉之。夜者酢辛二。眠不睡爾。妹戀丹。生流爲便無。

玉襷、懸けぬ時無く、我が思ふ、妹にし逢はねば、茜さす、晝はしみらに、ぬば玉の、夜はすがらに、寢も寢ずに、妹を戀ふるに、生ける術無し。

反歌

縱惠八師。二二火四吾妹。生友。各鑿社吾。戀度七日。

御金の嶽―吉野金峯山

妹がたゞかに―たゞかは實際の消息、本文「爾」は「乎」の誤か、此歌卷一の天武天皇御製の歌に末三句「隈も落ちず思ひつゝぞ來る其山道を」とあり、他は全く同樣なり、後人の歌ひかへしにや

打久津―(一)「津」は「須」の誤か、さらば「うちひさす」(二)「す」と「つ」とは同音なれば斯くもいへるならん

みやけの原―畿内か

ひた土―土の上、ぢべた、本文「當」は「常」の誤か

雪。不時如。間不落。吾者曾戀。妹之正香爾。

み吉野の、御金の嶽に、間無くぞ、雨は降るとふ、時じくぞ、雪は降るとふ。その雨の、間無きが如、その雪の、時じくがごと、間も落ちず、我はぞ戀ふる。妹がたゞかに。

反　歌

三雪落。吉野之高二。居雲之。外丹見子爾。戀度可聞。

み雪降る、吉野の嶽に、居る雲の、外に見し兒に、戀ひ渡るかも。

右二首。

打久津。三宅乃原從。當土。足迹貫。夏草乎。腰爾莫積。如何有哉。人子故曾。通簀文吾子。諸諸名。母者不知。諸諸名。父者不知。蜷腸。香黑髮丹。眞木綿持。阿邪左結垂。日本之。黃楊乃小櫛乎。抑刺。刺細子。彼曾吾孋。

内日さつ、みやけの原ゆ、ひた土に、足踏み貫き、夏草を、腰になづみ、如何な

青生—「青」は「重」の誤

將爲須便不知—一本、下に「足日木山之木末爾（アシヒキノヤマノコヌレニ）」の一句ある方取るべし

歸之別之數—一本「歸之」無き方取るべし

惜物可聞—「物」の下に「有」を脱せしか、さらば「をしくもあるかも」

齋ひ待ちなむ—齋ひて待たん

三芳野之。眞木立山爾。青生。山菅之根乃。慇懃。吾念君者。天皇之（或本、王命恐）。遣之萬萬（或本、云天疎夷治爾等）夷離。國治爾登。群鳥之。朝立行者。後有。我可將戀奈。客有者。君可將思。言牟爲便。將爲須便不知（或書、有足日木山之木末爾句也）。延津田乃。歸之別之數（或本、無歸之句也）。惜物可聞。

三芳野の、眞木立つ山に、しゞに生ふる、山菅の根の、懇に、我が思ふ君は、大君の、まけのまに〳〵、鄙離る、國治めにと、群鳥の、朝立ち行かば、後れたる、我か戀ひなむ、旅なれば、君か偲ばむ。言はむ術、せむ術知らに、這ふ蔦の、別れのあまた、惜しきものかも。

反歌

打蟬之。命乎長。有社等。留吾者。五十羽早將待。

空蟬の、命を長く、有りこそと、留れる我は、齋ひ待ちなむ。

右二首。

三吉野之。御金高爾。間無序。雨者落云。不時曾。雪者落云。其雨。無間如。彼

御佩を―枕詞
劍の池―大和國高市郡、舒明紀「瑞蓮生劍池、一莖二花」
蓮葉に云々―蓮葉に留れる露のあとかたもなくこぼれ失するを戀の行方なきに譬ふ
占へる―占にいでたる
な寢ねそ―相宿する事なかれ
清隅の池―一說、大和國
池の底―あだし心なく深く思ふに譬ふ
我は忍ばず―我は堪へずの意、本文「忍」一本「志」或は「忘」の誤にて「われはわすれじ」と訓むべきか
常不所念―「念」は「忘」の誤
今の心も―今心にも

萬葉集　卷第十三下

御佩乎。劍池之。蓮葉爾。渟有水之。往方無。我爲時爾。應相登。相有君乎。莫寢等。母寸巨勢友。吾情。清隅之池之。池底。吾者不忍。正相左右二。

御佩を、劍の池の、蓮葉に、留れる水の、行方無み、我がする時に、逢ふべしと、占へる君を、な寢ねそと、母聞せども、我が心、清隅の池の、池の底、我は忍ばず。直に逢ふまでに。

反歌

古之。神乃時從。會計良思。今心文。常不所念。

古の、神の時より、逢ひけらし。今の心も、常忘らえず。

右二首。

公以必—「以」は「似」の誤か

乾地乃。神乎禱而。吾戀。公以必。不相在目八毛。

天地の、神を禱りて、我が戀ふる、君に必ず、逢はざらめやも。

或本歌曰。

大船之。思憑而。木始已。彌遠長。我念有。君爾依而者。言之故毛。無有欲得。木綿手次。肩荷取懸。忌戸乎。齋穿居。玄黄之。神祇二衣吾祈。甚毛爲便無見。

右五首。

菅の根の—枕詞
妹によりては—左註にいへる如く「妹」は「公」の誤にて「きみ」なるべし
言の忌も云々—神も我が願ふ詞をとゞめ給ふなの意
のむ—祈る
いたも—いたくも
心はゆるす—一訓「心はよしゑ」

乎。石相穿居。竹珠乎。無間貫垂。天地之。神祇乎曾吾祈。甚毛為便無見。

菅の根の、懇ごろに、我が思へる、妹によりては、言の忌も、無くありこそと、齋瓮を、齋ひ掘り据ゑ、竹玉を、間なく貫き垂れ、天地の、神をぞ我がのむ。いたも術無み。

今案。不レ可レ言ニ之因レ妹者一。應レ謂ニ之緣レ君也。何則反歌云ニ公之隨意一焉。

反歌

足千根乃。母爾毛不謂。裹有之。心者縱。公之隨意。

垂乳根の、母にも言はず、包めりし、心はゆるす。君がまに〳〵。

或本歌曰。

玉手次。不懸時無。吾念有。君爾依者。倭文幣乎。手取持而。竹珠呼。之自ニ貫垂。天地之。神呼曾吾乞。痛毛須部奈見。

反歌

見えこそ―見えよかし
天のたり夜―全夜、本文「于」古本「乎」

床打拂ひ、現には、君には逢はず、夢にだに、逢ふと見えこそ。天のたり夜に。

或本歌曰。

吾背子者。待跡不來。雁音文。動而寒。烏玉乃。宵毛深去來。左夜深跡。阿下乃吹者。立待爾。吾衣袖爾。置霜文。氷丹左叡渡。落雪母。凍渡奴。今更。君來目八。左奈葛。後文將會常。大舟乃。思憑迹。現庭。君者不相。夢谷。相所見欲。天之足夜爾。

反歌

衣袖丹。山下吹而。寒夜乎。君不來者。獨鴨寢。
衣手に、嵐の吹きて、寒き夜を、君來まさずは、獨りかも寢む。

今更。戀友君爾。相目八毛。眠夜乎不落。夢所見欲。
今更に、戀ふとも君に、逢はめやも。寢る夜を落ちず、夢に見えこそ。

右四首。

菅根之。根毛一伏三向凝呂爾。吾念有。妹爾緣而者。言之禁毛。無在乞常。齋戸

りけんが亂れて一首となれるものなるべし、「心に乘りて」の句の末落ち、「高山の」の句の上に猶序のうちの言葉落ちて一首となれるか、古本にはこの間少し明けてありといへり
たをり—たわみ、山の頂の折り曲りたる所
射部立てゝ—枕詞
しゝ—猪鹿の類の總稱
人にな告げそ—犬に命ずるなり
たなしれ—しか心得よの意
立留待云々—「立留待」は「立待爾」の誤にて「たちまつにわがころもでに」か
公來座哉—古本「公來」の下に「將」あり
後毛相得—「後毛」の下に「將」あるべし
眞葛—枕詞
み袖—眞袖と同じく左右の袖

が待つ君を、犬な吠えこそ。

反歌

葦垣之。末掻別而。君越跡。人丹勿告。事者棚知。
葦垣の、末掻別けて、君越ゆと、人にな告げそ。事はたなしれ。

右二首。

妾背兒者。雖待不來益。天原。振左氣見者。黒玉之。夜毛深去來。左夜深而。荒風乃吹者。立留。待吾袖爾。零雪者。凍渡奴。今更。公來座哉。左奈葛。後毛相得。名草武類。心乎持而。三袖持。床打拂。卯管庭。君爾波不相。夢谷。相跡所見社。天之足夜于。
我が背子は、待てど來まさず、天の原、振りさけ見れば、ぬば玉の、夜も更けにけり。小夜更けて、嵐の吹けば、立留り、待つ我が袖に、降る雪は、凍り渡りぬ。今更に、君來まさめや。眞葛、後も逢はむと、慰むる、心を持ちて、み袖持ち、

「浪雪乃」にて「しきたへのかといへり
早川の―枕詞
行かく―行くの延言か、或は本文「往」の下に「方」を脱せるにて「ゆくへもしらに」か
衣手の―枕詞
馬じもの―枕詞
武士の―枕詞
八十の心―心の千々に亂れたるをいふ
魂合はゞ云々―略解に、此の二句、下の「さにづらふ云々」の上に入るべし、この二句の上下になは句ありて別に一首の長歌なりしが紛れしかといふ
八尺の嘆―長太息の意
さにづらふ―枕詞
答へやる―一訓「いひやらむ」
今身誰―「今宵訪」の誤か、一說「今宵座世可」の誤にて「いづくべに今宵いませか」
床敷而―「而」は「爾」の誤にて「とこしくに」か、さらばとこしなへにの意
犬莫吠行年―「行」は「所」の誤にて「いぬなはえそね」なるべし
赤駒の云々―「乘りて」の序、さてこの歌も二首な

たづきを知らに、武士の、八十の心を、天地に、思ひ足はし、魂合はゞ、君來ますやと、我が嘆く、八尺の嘆、玉桙の、道來る人の、立ち留り、如何と問はゞ、答へやる、たづきを知らに、さにづらふ、君が名言はゞ、色に出て、人知りぬべみ、足引の、山より出づる、月待つと、人には言ひて、君待つ我を。

反歌

眠不睡。吾思君者。何處邊。今身誰與可。雖待不來。
寢をも寢ず、我が思ふ君は、何處邊を、今宵とふとか、待てど來まさぬ。

右二首。

赤駒。廐立。黒駒。廐立而。彼乎飼。吾往如。思妻。心乘而。高山。峯之手折丹。射目立。十六待如。床敷而。吾待公。犬莫吠行年。
赤駒の、廐を立てて、黒駒の、廐を立てて、そを飼ひ、我が行くが如、思ひ妻、心に乘りて、高山の、峯のたをりに、射部立てて、しゝ待つが如、とこ敷きて、我

讀みも敢へむかも―數ふるにえ堪へぬの意、本文「續」は「讀」の誤か
宵を讀まむと―一訓「夜をかぞへむと」
心利―利心、活潑なる心
百足らず―枕詞、一說、本文は「足日木」の誤にて「あしびきの」か
山田―地名なるべし、大和國にも河内國にもあり
波雲の―枕詞、一說、本文に誤字あるべし、古義に

らゆくらに、思ひつゝ、我が寢る夜らを、讀みも敢へむかも。

反歌

一眠。夜算跡。雖思。戀茂二。情利文梨。

一人寢る、宵を讀まむと、思へども、戀の繁きに、心利も無し。

右二首。

百不足。山田道乎。浪雲乃。愛妻跡。不語。別之來者。速川之。往文不知。衣袂笑。反裳不知。馬自物。立而爪衝。爲須部乃。田付乎白粉。物部乃。八十乃心呼。天地二。念足橋。玉相者。君來益八跡。吾歎。八尺之嗟。玉桙乃。道來人之。立留。何常問者。答遣。田村乎不知。散鈎相。君名曰者。色出。人可知。足日木能。山從出。月待跡。人者云而。君待吾乎。

百足らず、山田の道を、波雲の、うつくし妻と、言問はず、別れし來れば、早川の、行かくも知らに、衣手の、歸るも知らに、馬じもの、立ちて躓き、せむ術の、

天雲の—枕詞
ゆくら〳〵に—物思ひに心の動くさま、本文初の「莫」の下に「行」を脱す
蘆垣の—枕詞
亂れ麻の云々—思ひの亂れをさめん方無きにたとふ

二つ無き—竝びなきの意
三重結ぶべく—思ひに痩せたる也

朝丹庭—「丹」は衍文

せむ術の云々—初の十句と後の十三句とは別の歌にて、前者は下の挽歌の「白雲之棚曳國之云々」といふ歌の末の離れてこゝに竄入せしものなるべく、後者は上に句どもの脱落せしものと見ゆ

天雲の、ゆくら〳〵に、蘆垣の、思ひ亂れて、亂れ麻の、麻笥を無みと、我が戀ふる、千重の一重も、人知れず、もとなや戀ひむ。息の緒にして。

反歌

二無。戀乎思爲者。常帶乎。三重可結。我身者成。

二つ無き、戀をしすれば、常の帶を、三重結ぶべく、我が身はなりぬ。

右二首。

爲須部乃。田付呼不知。石根乃。興凝敷道乎。石床笑 根延門呼。朝庭丹。出居而嘆。夕庭。入居而思。白栲乃。吾衣袖呼。折反。獨之寢者。野干玉。黒髪布而。人寢。味眠不睡而。大舟乃。徃良行羅二。思乍。吾睡夜等呼。續文將敢鴨。

せむ術の、たづきを知らに、岩が根の、こゞしき道を、岩床の、根延へる門を、朝には、出で居て嘆き、夕には、入り居て忍び、白妙の、我が衣手を、折返し、獨りし寢れば、ぬば玉の、黒髪敷きて、人の寢る、熟睡は寢ずて、大船の、ゆく

しき屋―次の「しき手」の「しき」は共に醜の意
播折らむ―一訓「打ち折らむ」、宣長說に、本文「所播將折」の「所」は衍なるべしといふ
差交へて―さしかはして
しめらに―又「しみらに」終日の義
すがらに―終夜
燒くも―思ひの火にて也
立良久乃―一說「良」は「莫」又は「麻」の誤にて「たたまくの」
親親―「親之」の誤にて「むつばひし」又は「にきびにし」と訓まんか
打延へて―遠きところにありて
小野―戀したる女にたとふ
おくか―奥處の意にて奥深きところをいふより轉じてそこに迷ふ意か

此の床の、ひしと鳴るまで、嘆きつるかも。

反歌

我情。燒毛吾有。愛八師。君爾戀毛。我之心柄。

我が心、燒くも我なり。はしきやし、君に戀ふるも、我が心から。

右二首。

打延而。思之小野者。不遠。其里人之。標結等。聞手師日從。立良久乃。田付毛不知。居久乃。於久鴨不知。親親。己之家尙乎。草枕。客宿之如久。思空。不安物乎。嗟空。過之不得物乎。天雲之。行莫莫。蘆垣乃。思亂而。亂麻乃。麻笥乎無登。吾戀流。千重乃一重母。人不令知。本名也戀牟。氣之緒爾爲而。

打延へて、思ひし小野は、遠からぬ、其の里人の、標結ふと、聞きてし日より、立つらくの、たづきも知らに、居らくの、おくかも知らに、父母の、己が家すらを、草枕、旅寢の如く、思ふ空、安からぬものを、嘆く空、過ぐし得ぬものを、

(との曇り—棚曇りに同じく雲の棚引き曇ること
天ぎらひ—空曇り
大口の—枕詞
眞神の原—大和國高市郡
思ひつゝ—一訓「しぬひつゝ」しなひうらぶれて思ふ意

さし燒かむ云々—火をさしつけて燒きも捨つべき程の賤しき小屋の意か、其他諸說あれど概ねいかがはしければ略す

之原従。思管。還爾之人。家爾到伎也。

三諸の、神南備山ゆ、との曇り、雨は降り來ぬ、天ぎらひ、風さへ吹きぬ。(大口の、)眞神の原ゆ、思ひつゝ、歸りにし人、家に到りきや。

反歌

還爾之。人乎念等。野干玉之。彼夜者吾毛。宿毛寢金手寸。

歸りにし、人を思ふと、ぬば玉の、其の夜は我も、寢も寢兼ねてき。

右二首。

刺將燒。少屋之四忌屋爾。搔將棄。破薦乎敷而。所搔將折。鬼之四忌手乎。指易而。將宿君故。赤根刺。晝者終爾。野干玉之。夜者須柄爾。此床乃。比師跡鳴左右。嘆鶴鴨。

さし燒かむ、小屋のしき屋に、搔棄てむ、破薦を敷きて、搔折らむ、醜のしき手を、差交へて、寢なむ君故、茜さす、晝はしめらに、ぬば玉の、夜はすがらに、

甘酒を―枕詞

戀ふらくも云々―戀ふるしるしありての意

右三首。

春去者。花咲乎呼里。秋付者。丹之穗爾黄色。味酒乎。神名火山之。帶丹爲留。明日香之河乃。速瀬爾。生玉藻之。打靡。情者因而。朝露之。消者可消。戀久毛。知久毛相。隱都麻鴨。

春されば、花咲きををり、秋づけば、丹の穗に黄葉づ、甘酒を、神南備山の、帶にせる、明日香の川の、早き瀬に、生ふる玉藻の、打靡き、心は寄りて、朝露の、消なば消ぬべく、戀ふらくも、著くも逢へる、隱妻かも。

反歌

明日香河。瀬湍之珠藻之。打靡。情者妹爾。因來鴨。

明日香川、瀬々の玉藻の、打靡き、心は妹に、寄りにけるかも。

右二首。

三諸之。神奈備山從。登能陰。雨者落來奴。雨霧相。風左倍吹奴。大口乃。眞神

い杭、ま杭—「い」「ま」は發語、杭は若木のことにて串ともいへり

反歌—略解に「右の歌もと反歌なし、左の歌右の反歌にはあらぬを、人誤りて書き加へたる也」

年渡る云々—一年を經渡る

何時の間—「間」の一訓「まに」又「あひだ」

乎懸。眞杭爾波。眞玉乎懸。眞珠奈須。我念妹毛。鏡成。我念妹毛。有跡謂者社。國爾毛。家爾毛由可米。誰故可將行。

隱國の、泊瀬の川の、上つ瀬に、い杭を打ち、下つ瀬に、ま杭を打ち、い杭には、鏡を懸け、ま杭には、眞珠を懸け、眞珠なす、我が思ふ妹も、鏡なす、我が思ふ妹も、有りと言はどこそ、國にも、家にも行かめ。誰故か行かむ。

檢二古事記一曰。件歌者木梨之輕太子自死之時所レ作者也。

反歌

年渡。麻弖爾毛人者。有云乎。何時之間曾母。吾戀爾來。

年渡る、までにも人は、有りとふを、何時の間ぞも、我が戀ひにける。

或書反歌曰

世間乎。倦跡思而。家出爲。吾哉難二加。還而將成。

世の中を、憂しと思ひて、家出せし、我や何にか、還りて成らむ。

小沼田の、愛知の水を、隙無くぞ、人は汲むとふ。時じくぞ、人は飲むとふ。汲む人の、隙なきが如、飲む人の、時じくが如、我妹子に、我が戀ふらくは、止む時も無し。

反歌

思遣。爲便乃田付毛。今者無。於君不相而。年之歷去者。

思ひ遣る、術のたづきも、今は無し。君に逢はずて、年の經ぬれば。

今案此反歌謂二之於君不相者一於レ理不レ合也。宜レ言二於妹不相一也。

或本反歌曰

楮垣。久時從。戀爲者。吾帶緩。朝夕每。

瑞垣の、久しき時ゆ、戀すれば、我が帶緩む。朝宵每に。

右三首。

己母理久乃。泊瀨之河之。上瀨爾。伊杭乎打。下湍爾。眞杭乎挌。伊杭爾波。鏡

今案云々—後人の註也、從ふべしといふ

瑞垣の—枕詞 我が帶緩む—戀に痩せたるをいふ、これも反歌にはあらず

心中少―「少」は「乎」の借字、又一本「乎」に作る
白木綿之―「木綿」は「幣」の誤か
新玉の―枕詞
年は來行きて―年の行き過ぐるをいふ、一訓「年は來去りて」
玉梓の―枕詞
霞立つ―枕詞
思ひ足らはし―思ひ滿たしめ
垂乳根の―枕詞
母が養ふ蠶の云々―蠶の繭に籠れるほどのいぶせきに譬ふ
息づき渡り―太息つくこと、息づきにいぶせき意をこむ
松が根の―枕詞
天傳ふ―枕詞
小沼田―本文「沼」は「治」の誤にて「をはりだ」なるべし、尾張國

乳根笑。母之養蚕之。眉隱。氣衝渡。吾戀。心中少。人丹言。物西不有者。松根。松事遠。天傳。日之闇者。白木綿之。吾衣袖裳。通手沾沼。

新玉の、年は來行きて、玉梓の、使し來ねば、霞立つ、長き春日を、天地に、思ひ足らはし、垂乳根の、母が養ふ蠶の、繭籠り、息づき渡り、我が戀ふる、心の内を、人に言ふ、ものにしあらねば、松が根の、待つ事遠み、天傳ふ、日の暮れぬれば、白妙の、我が衣手も、通りて濡れぬ。

反歌

如是耳師。相不思者。天雲之。外衣君者。可有有來。

斯くのみし、相思はざらば、天雲の、外にぞ君は、有るべかりける。

右二首。

小沼田之。年魚道之水乎。間無曾。人者挹云。時自久曾。人者飲云。挹人之。無間之如。飲人之。不時之如。吾妹子爾。吾戀良久波。已時毛無。

玉の緒の—枕詞
知らに—知らざるに
そこ知らむ云々—それを少女らが相思ふや否やを知らん由のなければ云云、徒に戀ふることのつらきをいへり
夏麻引く—枕詞
うなかぶしまけ—戀ひ佗びて頭を垂れて思ひなやむさま、一説、本文「命」は「念」の誤にて「思ひなづみ」と訓ず
刈菰の—枕詞
心もしぬに—心のしなへ萎なて
もとなぞ戀ふる—空しく戀ふる意
數數—「數數」の誤か、一說「しば〳〵に」と訓ず
暫も我は—一訓「しましくもあは」
石椅跡—「石瀨路」の誤か、或は「椅」は借字か
直に來ず云々—直に通ふ路は人目多ければ廻り道して辛うじて來りし勞をいへり

古ゆ、言ひ繼ぎ來らく、戀すれば、安からぬものと、玉の緒の、繼ぎては言へど、少女らが、心を知らに、そこ知らむ、由の無ければ、夏麻引く、うなかぶしまけ、刈菰の、心もしぬに、人知れず、もとなぞ戀ふる。息の緒にして。

反歌

數數丹。不思人者。雖有。暫文吾者。忘枝沼鴨。

しく〳〵に、思はず人は、有らめども、暫も我は、忘らえぬかも。

直不來。自此巨勢道柄。石椅跡。名積序吾來。戀天窮見。

直に來ず、こゆ巨勢路から、岩瀬踏み、なづみぞ我が來し。戀ひて術無み。

或本以二此歌一首一爲二之紀伊國之。濱爾緣云。鰒珠。拾爾登謂而。往之君。何時到來歌之反歌一也。具見レ下也。但依二古本一亦累載レ茲。

右二首。

荒玉之。年者來去而。玉梓之。使之不來者。霞立。長春日乎。天地丹。思足椅。帶

百重波—上に「五」を脱せしか、「いほへなみちへなみ」といふが例なり
荒礒浪—枕詞
ありても—ありながらへても

敷島の—枕詞
言靈の云々—詞に神の御靈もはしまして幸をなし給ふとの意
眞幸くありこそ—されば斯く祈るからは命長くあれかしの意、本文「與具」は「乙會」の誤か、されど他にも類例ある書方也

柿本朝臣人麻呂歌集歌曰。

葦原。水穗國者。神在隨。事擧不爲國。雖然。辭擧叙吾爲。言幸。眞福座跡。恙無。福座者。荒礒浪。有毛見登。百重波。千重浪敷爾。言上爲吾。

葦原の、瑞穗の國は、神ながら、言擧げせぬ國。然れども、言擧げぞ我がする。言幸く、眞幸く座せと、恙無く、幸く座せば、荒磯浪ありても見むと、もゝ重浪、千重浪しきに、言擧げする我。

反歌

志貴島。倭國者。事靈之。所佐國叙。眞福與具。

敷島の、日本の國は、言靈の、佐くる國ぞ。眞幸くありこそ。

右五首。

從古。言續來口。戀爲者。不安物登。玉緒之。繼而者雖云。處女等之。心乎胡粉。其將知。因之無者。夏麻引。命號貯。借薦之。心文小竹荷。人不知。本名曾戀流。氣之緒丹四天。

八鬼目—「鬼」は「魔」の誤か
神がらと—神ながらと、一説「神からと」と清音、神故と
言擧せぬ—平穩にて何のいひ言もなき意ならん
行く影の云々—(一)月影の行くを月並の過ぐるにいひなせり(二)本文「往影」はいかゞ、必ず「あらたまの」とあるべきところなり
思へかも—思へばかも
正目に—まのあたり
相見てばこそ—相見てあらばこそ

大船の—枕詞
君故に—君なるものを

久方の—枕詞、これは反歌にあらず、旅行く人を送る歌なり
草枕—枕詞

痛。末遂爾。君丹不會者。吾命乃。生極。戀乍文。吾者將度。犬馬鏡。正目君乎。相見天者社。吾戀八鬼目。

秋津洲、日本の國は、神がらと、言擧せぬ國、然れども、我は言擧げす。天地の、神も甚だ、我が思ふ、心知らずや。行く影の、月も經行けば、陽炎の、日も重りて、思へかも、胸安からぬ、戀ふれかも、心の痛き。末遂に、君に逢はずは、我が命の、生けらむ極み、戀ひつゝも、我は渡らむ。眞十鏡、正目に君を、相見てばこそ、我が戀止まめ。

反歌

大舟能。思憑。君故爾。盡心者。惜雲梨。

大船の、思ひ頼める、君故に、盡す心は、惜しけくも無し。

久堅之。王都乎置而。草枕。羈往君乎。何時可將待。

久方の、都を置きて、草枕、旅行く君を、何時とか待たむ。

敷島の―枕詞
藤浪の―枕詞
思ひ纏し―一訓「思ひ纏り」
若草の―枕詞
君が目に―君が目を、本文「自」は「目」の誤
人二人―我がいとしと思ふ人二人

相聞　此中長歌二十九首

式島之。山跡之土丹。人多。滿而雖有。藤浪乃。思纏。若草乃。思就西。君自二。戀八將明。長此夜乎。

敷島の、日本の國に、人さはに、滿ちてあれども、藤浪の、思ひ纏し、若草の、思ひつきにし、君が目に、戀ひや明さむ。長き此の夜を。

反歌

式島乃。山跡乃土丹。人二。有年念者。難可將嗟。

敷島の、日本の國に、人二人、有りとし思はば、何か嘆かむ。

右二首。

蜻島。倭之國者。神柄跡。言擧不爲國。雖然。吾者事上爲。天地之。神毛甚。吾念。心不知哉。往影乃。月文經往者。玉蜻。日文累。念戸鴨。胷不安。戀列鴨。心

天橋—神代紀「自槵日二上天浮橋、立浮渚在平處」天上に通ふ橋
高山も云々—天に上る便あればいふ
月夜見—月の異名、一訓「つくよみの」
越えむ年はも—(一)極めて澄める水を飲めば命延ぶといへば、月の水を取り來りて君に奉らば限りなく年を越え給はんの意(二)荒木田久老の考に、前の方の句の本文「持越有水」は「持有越水」の誤にて「もたるをちみづ」と訓み、て老人の若返る水をいふ、末句「早」は「牟」の誤にて「をちえしむもの」と訓みて君を若返らしめんものをの意
天有哉—一説「天照哉」の誤にて「あまてるや」
日にけに—日に〳〵
ぬな川—天安河の中なる渟名井(ヌナヰ)と同處なるべきかといふ
得てし玉かも—一訓「得し玉かも」と大言

天橋も、長くもがも。高山も、高くもがも。月夜見の、持ちこせる水を、い取り來て、君に奉りて、越えむ年はも。

反歌

天有哉。月日如。吾思有。公之日異。老落惜毛。
天なるや、月日の如く、我が思へる、君が日にけに、老ゆらく惜しも。

右二首。

沼名河之。底奈流玉。求而。得之玉可毛。拾而。得之玉可毛。安多良思吉君之。老落惜毛。
ぬな川の、底なる玉、求めて、得てし玉かも。拾ひて、得てし玉かも。惜しき君が、老ゆらく惜しも。

右一首。

長門の浦―安藝國

あごの海―(一)備後備中の内などにあるべし(二)「阿」は「奈」に通へば、ここは奈呉の海なり、さらば攝津國住吉の濱

海人少女らが―本文下に「之」を脱せるか、又原文のまゝにて「らが」一訓「ども」

うながせる―うなじに懸けたる

照るかに―照り輝くばかりに

小波―小波の如く

湯良羅爾。白栲乃。袖振所見津。相思羅霜。

少女らが、麻笥に垂れたる、績苧なす、長門の浦に、朝凪に、滿ち來る潮の、夕凪に、寄り來る浪の、その潮の、いや益々に、その浪の、いやしく／＼に、我妹子に、戀ひつゝ來れば、あごの海の、荒磯の上に、濱菜摘む、海人少女らが、うながせる、領巾も照るかに、手に纒ける、玉もゆらゝに、白妙の、袖振る見えつ。相思ふらしも。

反歌

阿胡乃海之。荒礒之上之。小浪。吾戀者。息時毛無。

あごの海の、荒磯の上の、小波、我が戀ふらくは、止む時も無し。

右二首。

天橋文。長雲鴨。高山文。高雲鴨。月夜見乃。持越有水。伊取來而。公奉而。越得之早母。

幸からば—一訓「幸くあらば」

人雖跡—「跡」は「蹈」の誤か

もゝしね—枕詞、本文「岐」は「詩」の誤か、又、「百傳布」の誤にて「もゝづたふ」か

高北の泳の宮—景行紀「四年二月、幸美濃」云々、「而居泳宮」

日向ひに—西の方をいふか、古義は「日月爾」の誤にて「月に日に」かといふ

行き靡かくを—靡かくは靡くの延言にて、女のたをやかなる姿にて歩み行く意か、一説、本文「靡」は「紊」の誤にて「いでましのみやを」とよむべし、古義には「行麻死里矣」の誤にて「行かましさとを」かといふ

波鹽乃—「波」は「彼」の誤

天地を、歎き乞ひのみ、幸からば、又返り見む、志賀の唐崎。

右二首。但此短歌者或書云。穗積朝臣老配二於佐渡一之時作歌者也。

百岐年。三野之國之。高北之。八十一隣之宮爾。日向爾。行靡闕矣。有登聞而。吾通道之。奥十山。三野之山。靡得。人雖跡。如此依等。人雖衝。無意。山之。奥礒山。三野之山。

もゝしね、美濃の國の、高北の、泳の宮に、日向ひに、行き靡かくを、有りと聞きて、我が通ひ路の、於吉蘇山、美濃の山、靡けと、人は蹈めども、かく寄れと、人は衝けども、心なき、山の、於吉蘇山、美濃の山。

右一首。

處女等之。麻笥垂有。續麻成。長門之浦丹。朝奈祇爾。滿來鹽之。夕奈祇爾。依來波乃。波鹽乃。伊夜益升二。彼浪乃。伊夜敷布二。吾妹子爾。戀乍來者。阿胡之海之。荒礒之於二。濱菜採。海部處女等。纓有。領巾文光蠁。手二卷流。玉毛

多企都瀬—「企」は「宜」の誤か

眞木積める—訓「眞木積む」眞木の柚木を積みて泉川を下せばいふ

劒太刀—枕詞

伊香胡山—近江國、こゝは「如何」の序

乃。多企都瀬乎。見乍渡而。近江道乃。相坂山丹。手向爲。吾越往者。樂浪乃。志我能韓埼。幸有者。又反見。道前。八十阿毎。嗟乍。吾過往者。彌遠丹。里離來奴。彌高二。山文越來奴。劒刀。鞘從拔出而。伊香胡山。如何吾將爲。往邊不知而。

大君の、命畏み、見れど飽かぬ、奈良山越えて、眞木積める、泉の川の、早き瀬に、竿さし渡り、千早振る、宇治の渡の、瀧つ瀬を、見つゝ渡りて、近江路の、逢坂山に、手向して、我が越え行けば、小波の、志賀の唐崎、幸からば、又返り見む、道の隈、八十隈毎に、歎きつゝ、我が過ぎ行けば、いや遠に、里離り來ぬ。いや高に、山も越え來ぬ。劒太刀、鞘ゆ拔き出でて、伊香胡山、如何我がせむ。行方知らずて。

反歌

天地乎。歎乞禱。幸有者。又反見。思我能韓埼。

白木綿花に―白木綿花の如くに

近江の海云々―この歌は大友皇子の天武天皇を猜ひ給はん謀をせられし時の譬歌にてもあるかといふ

あり立てる―古より立ちてあり存する

末枝に云々―斑鳩及び鵤を囮として捕ふるさま

捕らく―捕るの延言

いそばひ―いは發語にて、そばへ戯る意ならん

反歌

相坂乎。打出而見者。淡海之海。白木綿花爾。浪立渡。

逢坂を、打ち出て見れば、近江の海、白木綿花に、浪立ち渡る。

右三首。

近江之海。泊八十有。八十島之。島之埼邪伎。安利立有。花橘乎。末枝爾。毛知引懸。仲枝爾。伊加流我懸。下枝爾。此米乎懸。己之母乎。取久乎不知。己之父乎。取久乎思良爾。伊蘇婆比座與。伊加流我等此米登。

近江の海、泊八十あり。八十島の、島の崎々、あり立てる、花橘を、末枝に、黐引懸け、中つ枝に、斑鳩懸け、下枝に、鵤を懸け、己が母を、捕らくを知らず、己が父を、捕らくを知らに、いそばひ居るよ。斑鳩と鵤と。

右一首。

玉。命恐。雖見不飽。楢山越而。眞木積。泉河乃。速瀨。竿刺渡。千速振。氏渡

秋山の—枕詞
—(一)紅葉(二)持統天皇の行幸は六年三月なれば櫻桃などの花か、或は大寶二年十月に同天皇三河國に行幸ありしかば其の時の道次の行宮のさまをよめるか、さらば紅葉なるべし
此歌云々—略解に「此十字古本になし、除くべし」
寧山—「寧」の下「樂」を脱す
石田之森—「森」一本「社」
つゞきの原—仁徳紀「筒城岡」和名抄「綴喜」
瀧の屋のあごねの原—未詳、一説、宇治郡三室村にある蜻蛉野の一名
緑青吉—「青」一本「丹」とある方宜し
絲—「幣」或は「麻」の誤か
ものゝふの—枕詞
少女らに—枕詞
我妹子に—枕詞
くれ〳〵と—おぼつかなく
我が來る—「一」訓「あが來し」
妹が目を欲り—妹に逢ひ見んことを欲して

右二首。

空見津。倭國。青丹吉。寧山越而。山代之。管木之原。血速舊。于遲乃渡。瀧屋之。阿後尼之原尾。千歲爾。闕事無。萬歲爾。有通將得。山科之。石田之森之。須馬神爾。奴左取向而。吾者越往。相坂山遠。

空見つ、倭の國、青丹吉、奈良山越えて、山城の、つゞきの原、千早振る、宇治の渡り、瀧の屋の、あごねの原を、千歲に、缺くること無く、萬代に、あり通はむと、山科の、石田の森の、皇神に、幣取り向けて、我は越え行く、逢坂山を。

緑青吉。平山過而。物部之。氏川渡。未通女等爾。相坂山丹。手向草。絲取置而。我妹子爾。相海之海之。奧浪。來因濱邊乎。久禮久禮登。獨曾我來。妹之目乎欲。

青丹吉、奈良山過ぎて、ものゝふの、宇治川渡り、少女らに、逢坂山に、手向草、幣取り置きて、我妹子に、近江の海の、沖つ浪、來寄る濱邊を、くれ〳〵と、獨りぞ我が來る。妹が目を欲り。

日刺。大宮都可倍。朝日奈須。目細毛。暮日奈須。浦細毛。春山之。四名比盛而。秋山之。色名付思吉。百礒城之。大宮人者。天地與。日月共。萬代爾母我。

やすみしゝ、我ご大君、高光る、日の皇子の、聞し食す、御饌つ國、神風の、伊勢の國は、國見ればしも、山見れば、高く貴し、河見れば、さやけく淸し。水門なす、海もま廣し。見渡しの、島の名高し。此處をしも、ま細しみかも、かけまくも、あやに畏き、山の邊の、石の原に、內日さす、大宮仕、朝日なす、ま細しも。夕日なす、うら細しも。春山の、しなひ榮えて、秋山の、色懐しき、百敷の、大宮人は、天地と、日月と共に、萬代にもが。

反歌

山邊乃。五十師乃御井者。自然。成錦乎。張流山可母。

山の邊の、石の御井は、自ら、成れる錦を、張れる山かも。

此歌入道殿下令二讀出一給。

御饌つ國—大御食を奉る國

島の名高し—志摩國をいふか、古義は、本文「名」は「毛」の誤とし前句より「見渡す島も高し」と訓ず、然して其次に「曾許乎志毛、浦細美香」(ソコヲシモ、ウラグハシミカ)の脫せる也といへり

石の原—(一)今石藥師といへるところか(二)本文「師」は「鈴」の誤にて「いすずのはら」か

內日さす—枕詞

大宮仕—大神宮の御事なれば大宮と等しく申す、以下齋王の神宮に奉仕するさま、一說、この長歌は持統天皇の此の國に行幸ありし折の行宮のさま也

ま細し—見る目のうるはしきをいふ

うら細し—心に樂しくおもしろく思ふをいふ

春山の—枕詞、以下奉仕の女官のさま

ばしる」
揮友—「揮」の下に「往」を脱せしか、古義は、上に「行」か「立」かを脱したるにて「ゆきかはれども」又は「たちかはれども」也といへり
月も日も—一訓「月日は」
外つ宮—離宮
此歌云々—略解に「古本に此八字なし、尤も除くべし」
機—諸本「棧」「艤」「機」などに作る、古義は「筏」として「いかだ」と訓ぜり
丹生—吉野
旋頭歌—校本に「古寫本、水本、旋頭歌三字、作二反歌(旋頭歌)五字二」
留りにし—一訓「留めにし」家に留め置きし意
國見者之毛—「之毛」の上に脱字あるか、「あやにくはしも」などあるべし、或は「之」は「乏」の誤にて「あやにともしも」か、古義は、この五字衍文といへり

右二首。但或本歌曰。故王都跡津宮地也。

斧取而。丹生檜山。木折來而。機爾作。二梶貫。礒榜回乍。島傳。雖見不飽。三吉野乃。瀧動動。落白浪。

斧取りて、丹生の檜山の、木伐り來て、小舟に造り、眞檝貫き、磯漕ぎたみつゝ、島傳ひ、見れども飽かず、三吉野の、瀧もとゞろに、落つる白浪。

旋頭歌

三芳野。瀧動動。落白浪。留西。妹見卷。欲白浪。

三芳野の、瀧もとゞろに、落つる白浪。留りにし、妹に見せまく、欲しき白浪。

右二首。

八隅知之。和期大皇。高照。日之皇子之。聞食。御食都國。神風之。伊勢乃國者。國見者之毛。山見者。高貴之。河見者。左夜氣久淸之。水門成。海毛廣之。見渡。島名高之。己許乎志毛。間細美香母。挂卷毛。文爾恐。山邊乃。五十師乃原爾。内

神南備の、三諸の山に、齋ふ杉、思ひ過ぎめや。苔むすまでに。

五十串立。神酒座奉。神主部之。雲聚玉蔭。見者乏文。

齋串立て、神酒据ゑ奉る、祝部が、髻華の玉蔭、見れば乏しも。

右三首。但或書此短歌一首無レ有レ載之也。

帛叫。楢從出而。水蓼。穂積至。鳥網張。坂手乎過。石走。甘南備山丹。朝宮。仕奉而。吉野部登。入座見者。古所念。

幣を、奈良より出でて、水蓼を、穂積に至り、鳥網張る、坂手を過ぐり、岩橋の、神南備山に、朝宮に、仕へ奉りて、吉野へと、入り座す見れば、古思ほゆ。

反歌

月日。攝友。久經流。三諸之山。礪津宮地。

月も日も、替り行けども、久にふる、三諸の山の、外つ宮處。

此歌入道殿讀出給。

よれば、末久しく平安にてこの三諸山にあり通ひ遊ばんと也

劒太刀云々—垂仁紀「令祠官卜兵器爲神幣吉云」、古より武器を納めて神祇を祭れる也

齋串—玉、幣などを著くる料の榊と篠

祝部が—一訓「かむぬしの」

髻華—上古木の枝草などをかざして飾りとせしもの、本文、下に「之」を脱せしか

玉蔭—(一)玉は美稱、蔭は日蔭の略にて日蔭の葛のこと(二)「玉」は「山」の誤にて日蔭

乏し—珍し

幣を—幣を持ちて、一說、本文「帛叫」は「內日刺」の誤にて「うちひさす」か、又、「帛奉」の誤にて「ぬさまつり」か

奈良—奈良宮、一說、本文「楢」は「都」の誤にて「みやこゆいでて」か、奈良より吉野へ行幸の時の歌也

水蓼を—枕詞、一說「みづたて」と四言

穂積—大和國十市郡

鳥網張る—枕詞

坂手—城下郡

過ぐり—「過ぎ」の延言、一訓「過ぎ」

岩橋の—枕詞、一訓「いは

云續來在―一說「來在」は「來去」の誤にて「いひつぎきぬる」か

石枕―「枕」は「根」の誤にて「いはがねの」か

神代より―神賀詞「賀夜奈流美命能御魂乎飛鳥乃神南備爾坐天云々」

生ひため難き―一訓「むしため難き」

新代―(一)新京、これは藤原宮にうつりて後初めて飛鳥の神社へ大幣神寶等を奉り給ふ勅使などのよめるにや(二)新代はただ代の意(三)原文のまゝ「あらた夜の」と訓ずべし

幸く云々―新代の行末限りなくつゝかんことを神はかりまして夢に告げ給へと願ふ意、古義の說に

右二首。

葦原笑。水穗之國丹。手向爲跡。天降座兼。五百萬。千萬神之。神代從。云續來在。甘南備乃。三諸山者。春去者。春霞立。秋往者。紅丹穗經。甘甞備乃。三諸之神之。帶爲。明日香之河之。水尾速。生多米難。石枕。蘿生左右二。新夜乃。好去通牟。事計。夢爾令見社。劒刀。齋祭。神二師座者。

葦原の、瑞穗の國に、手向すと、天降ましけむ、五百萬、千萬神の、神代より、言ひ繼ぎ來たる、神南備の、三諸の山は、春されば、春霞立ち、秋ゆけば、紅匂ふ、神南備の、三諸の神の、帶にせる、明日香の川の、澪速み、生ひため難き、岩枕、苔むすまでに、新代の、幸く通はむ、事計り、夢に見せこそ、劒太刀、齋ひ祭れる、神にし座せば。

反歌

神名備能。三諸之山丹。隱藏杉。思將過哉。蘿生左右。

ちたる

我は持て行く—一訓「あは持ちて行く」

君—夫

此一首云々—略解に「古本此九字なし、尤も除くべし、此讀は訓點を附けたるなり」

吉畫矢寺—「寺」は「志」又は「子」の誤か

天雲の云々—水の極めて清きをいふ、本文「寒」は「塞」の誤

隱國の—枕詞

奧つ浪—川中に立つ浪

競ひ—一訓「きほひ」

漕ぎり來—漕ぎ入り來れ

浮而流—「浮」は「湧」の誤にて「わきてながるゝ」か、又「浮」は「沸」の誤にて「たぎて流るゝ」か

寄るべき礒の—舟の也

一人のみ、見れば戀しみ、神南備の、山の黃葉、手折りけり君。

此一首入道殿讀出給。

右二首。

天雲之。影寒所見。隱來笑。長谷之河者。浦無蚊。船之依不來。礒無蚊。海部之釣不爲。吉咲八師。浦者無友。吉畫矢寺。礒者無友。奧津浪。諍榜入來。白水郎之釣船。

天雲の、影さへ見ゆる、隱國の、泊瀨の川は、浦無みか、船の寄り來ぬ。礒無みか、海人の釣せぬ。よしゑやし、浦は無くとも、よしゑやし、礒は無くとも、奧つ浪、競ひ漕ぎり來。白水郎の釣船。

反歌

沙邪禮浪。浮而流。長谷河。可依礒之。無蚊不怜也。

小波、浮きて流るゝ、泊瀨川、寄るべき礒の、無きがさぶしさ。

人の守る山―人のめでて目かれず守る山の意
本邊―麓
うらぐはし―面白し
泣く兒守る山―泣く兒を愛し守る如くに人のなせる山ぞといふ意
未來鳴―「未」は「乏」の誤れて「ともしくきなく」か
峯文―「峯」は「延多」か「延太」の誤にて「えだ」也
ひかをる―光り曇るの意、されど集中かゝる例なし、古訓「ひかるみそらの」一說、初二句は「雨雰合渡日香久之」の誤にて「あまぎらひわたるひかくし」か
御田屋―神田を植えて刈りて春くまで守る屋をいふならん
垣つ田―御田屋の垣内の田
百足らず―枕詞
みづ枝―みづ〳〵しき若枝
纒き持たる―手に纒き持

山ぞ。泣く兒守る山。

右一首。

霹靂之。日香天之。九日乃。鍾禮乃落者。鴈音文。未來鳴。神南備乃。淸三田屋乃。垣津田乃。池之堤之。百不足。五十槻枝丹。水枝指。秋赤葉。眞割持。小鈴文由良爾。手弱女爾。吾者有友。引攀而。峯文十遠仁。捄手折。吾者持而往。公之頭刺荷。

鳴る神の、ひかをる空の、九月の、時雨の降れば、雁がねも、未だ來鳴かず、神南備の、淸き御田屋の、垣つ田の、池の堤の、(百足らず)齋槻が枝に、みづ枝指す、秋の黃葉、纒き持たる、小鈴もゆらに、手弱女に、我はあれども、引攀ぢて、峯もとをゝに、打手折り、我は持て行く、君が插頭に。

反歌

獨耳。見者戀染。神名火乃。山黃葉。手折來君。

萬葉集卷第十三上

雜歌　是中長歌十六首

冬木成。春去來者。朝爾波。白露置。夕爾波。霞多奈妣久。汗湍能振。樹奴禮我之多爾。鶯鳴母。

冬籠り、春さり來れば、朝には、白露置き、夕には、霞棚引く。雨の降る、木ぬれが下に、鶯鳴くも。

右一首。

三諸者。人之守山。本邊者。馬醉木花開。末邊方。椿花開。浦妙。山曾。泣兒守山。

三諸は、人の守る山。本邊は、馬醉木花咲き、末邊は、椿花咲く。うらぐはし、

冬木成―「成」は「盛」の誤

汗湍能振―(一)「汗微竝能」などの誤にて「かみなびの」か、(二)「御諸能夜」(ミモロノヤ)の誤か(三)「泊湍能夜」(ハツセノヤ)の誤か

三諸―こゝは飛鳥の神南備山にや

たか〳〵に—遙に望み見る意、是も問答にはあらず

豐國の、企救の長濱、行き暮し、日の暮れぬれば、妹をしぞ思ふ。

豐國能。聞乃高濱。高高二。君待夜等者。左夜深來。

豐國の、企救の高濱、たか〳〵に、君待つ夜らは、小夜更けにけり。

右二首。

白妙の―枕詞
袖の別を云々―わざ〳〵送り來りし女と袖ふり離して別れ難くの意なるべし
荒津の濱―筑前國那河郡
飽き足らずこそ―下に、思へと補ふ
早早―一本「旦旦」

右二首。

白妙乃。袖之別乎。難見爲而。荒津之濱。屋取爲鴨。

白妙の、袖の別を、難みして、荒津の濱に、宿りするかも。

草枕。羈行君乎。荒津左右。送來。飽不足社。

草枕、旅行く君を、荒津まで、送り來ぬれど、飽き足らずこそ。

右二首。

荒津海。吾幣奉。將齋。早還座。面變不爲。

荒津の海、我が幣奉り、齋ひてむ。早や還りませ、面變りせず。

早早。筑紫乃方乎。出見乍。哭耳吾泣。痛毛爲便無三。

朝なさな、筑紫の方を、出で見つゝ、音のみ我が泣く。甚も術無み。

右二首。

豐國乃。聞之長濱。去晩。日之昏去者。妹食序念。

うつしけめやも—現し心もなく半ば死にたる如くならんの意
玉の緒の—枕詞
八十檝懸け—多くの檝を懸け
島隱れ—一訓「島隱り」
留れと—一訓「留むと」
雨之間—「之」は衍文
降りにせば—降りてありせばの意
誰が里の間に—何處の里の程にの意

足引の、片山雉子、立ち行かむ、居に後れて、うつしけめやも。

問答歌

玉緒乃。徙心哉。八十梶懸。水手出牟船爾。後而將居。
玉の緒の、現心や、八十檝懸け、漕ぎ出む船に、後れて居らむ。
八十梶懸。島隱去者。吾妹兒之。留登將振。袖不所見可聞。
八十檝懸け、島隱れなば、我妹子が、留れと振らむ、袖見えじかも。

右二首。

十月。鐘禮之雨丹。沾乍哉。君之行疑。宿可借疑。
十月、時雨の雨に、濡れつゝや、君が行くらむ。宿か借るらむ。
十月。雨之間毛不置。零爾西者。誰里之間。宿可借益。
十月、雨間もおかず、降りにせば、誰が里の間に、宿か借らまし。

玉葛—枕詞
絶えず行かさね—一訓「絶えずいまさね」滯ることなく行きてとく歸り來給への意
あらずは—あらんよりは
田子の浦—夫の行きて居る所の浦を思ひていひ出でたる也
刈るとかも—刈るとてか、一訓「刈ればかも」
月の—月の如く
久にあらむ—旅に出でて久しく還り來まさずあらん
闇にのみ見ゆ—一訓「闇のみに見ゆ」

玉葛、絶えず行かさね。山菅の、思ひ亂れて、戀ひつゝ待たむ。

後居而。戀乍不有者。田籠之浦乃。海部有巾尾。珠藻苅苅。

後れ居て、戀ひつゝあらずは、田子の浦の、海人ならましを。玉藻刈る〳〵。

筑紫道之。荒礒之玉藻。苅鴨。君久。待不來。

筑紫路の、荒磯の玉藻、刈るとかも、君は久しく、待つに來まさぬ。

荒玉乃。年緒永。照月。不厭君八。明日別南。

新玉の、年の緒長く、照る月の、厭かぬ君にや、明日別れなむ。

久將在。君念爾。久堅之、清月夜毛。闇夜耳見。

久にあらむ、君を思ふに、久方の、清き月夜も、闇にのみ見ゆ。

春日在。三笠之山爾。居雲乎。出見每。君乎之曾念。

春日なる、三笠の山に、居る雲を、出で見る毎に、君をしぞ思ふ。

足檜木之。片山雉。立往牟。君爾後而。打四鷄目八方。

いなみの川―播磨國印南郡か、「いなば」の序
海の底―枕詞
礒ま―一訓「礒み」
漕ぎたみ往ませ―漕ぎ廻りておはしませ
氣比―越前國
時つ風―枕詞
吹飯の濱―紀伊國
贖ふ命―贖物(アガモノ)を出して罪を祓ひ以て長命を祈ること
熟田津―伊豫國溫泉郡
聞きしなへ―下に、歸り來んと思ひ待ちしをよ補ふ
うら戀しけむ―心戀しからん

明日よりは、いなみの川の、出で去なば、留れる我は、戀ひつゝやあらむ。

海之底。奥者恐。礒回從。水手運往爲。月者雖經過。
海の底、沖は恐し。礒まより、漕ぎたみ往ませ。月は經ぬとも。

飼飯之浦爾。依流白浪。敷布二。妹之容儀者。所念香毛。
氣比の浦に、寄する白浪、しく〳〵に、妹が姿は、思ほゆるかも。

時風。吹飯之濱爾。出居乍。贖命者。妹之爲社。
時つ風、吹飯の濱に、出で居つゝ、贖ふ命は、妹が爲めこそ。

柔田津爾。船乘將爲跡。聞之苗。如何毛君之。所見不來將有。
熟田津に、船乘せむと、聞きしなへ、何ぞも君が、見え來ざるらむ。

三沙呉居。渚爾居舟之。榜出去者。裏戀監。後者會宿友。
鶚居る、洲に居る舟の、漕ぎ出なば、うら戀しけむ。後は逢ひぬとも。

玉葛。無恴行核。山菅乃。思亂而。戀乍將待。

玉勝間。島熊山之。夕晩。獨可君之。山道將越。
玉篚、しまくま山の、夕暮に、獨りか君が、山路越ゆらむ。
一云。暮霧爾。長戀爲乍。寢不勝可母。

氣緒爾。吾念君者。鷄鳴。東方坂乎。今日可越覽。
息の緒に、我が思ふ君は、鷄が鳴く、東の坂を、今日か越ゆらむ。

磐城山。直越來益。礒崎。許奴美乃濱爾。吾立將待。
岩城山、たゞ越え來ませ。礒前の、こぬみの濱に、我立ち待たむ。

春日野之。淺茅之原爾。後居而。時其友無。吾戀良苦者。
春日野の、淺茅が原に、後れ居て、時ぞとも無し。我が戀ふらくは。

住吉乃。崖爾向有。淡路島。何怜登君乎。不言日者無。
住吉の、岸に向へる、淡路島、あはれと君を、言はぬ日は無し。

明日從者。將行之河之。出去者。留吾者。戀乍也將有。

玉篚—枕詞　しまくま山—未詳、東國ならん
鷄が鳴く—枕詞　東の坂—上野國碓氷峠か
岩城山—磐城國　礒前—常陸國
後れ居て—夫の遠行を送りて後に、ひとり取り遺されて
淡路島—打見るまゝを以て「あはれ」の序とせるならん

いなば――一訓「ゆかば」

ゆふま山――未詳、東國にあるべし

草陰の――枕詞にや
あらゐ――未詳、東國の地名ならん

朝霞。蒙山乎。越而去者。吾波將戀奈。至于相日。
朝霞、棚引く山を、越えていなば、我は戀ひむな。逢はむ日までに。

足檜乃。山者百重。雖隱。妹者不忘。直相左右二。
足引の、山は百重に、隱すとも、妹は忘れじ。直に逢ふまでに。

一云。雖隱。君乎思苦。止時毛無。

雲居有。海山越而。伊往名者。吾者將戀名。後者相宿友。
雲居なる、海山越えて、行ましなば、我は戀ひむな。後は逢ひぬとも。

不欲惠八趾。不戀登爲杼。木綿間山。越去之公之。所念良國。
よしゑやし、戀ひじとすれど、ゆふま山、越えにし君が、思はゆらくに。

草陰之。荒藺之崎乃。笠島乎。見乍可君之。山道越良無。
草陰の、あらゐの崎の、かさ島を、見つゝか君が、山路越ゆらむ。

一云。三坂越良牟。

袖の別れ—相纏へる袖と袖との別れにて、所謂後朝（キヌ〴〵）の別れ也

都邊へ—一訓「都邊に」

誰解けか—誰が解けばか、古へ下紐の自ら解くるは人に逢ふべきしるしとせるが故なり

たゆしも—一訓「たゆきも」

草枕—枕詞

生けりとも無し—一訓「生けるともなし」

曇夜の—枕詞

たゝなつく—枕詞

隔たらば—一訓「へなりなば」

白砂之。袖之別者。雖惜。思亂而。赦鶴鴨。

白妙の、袖の別れは、惜しけども、思ひ亂れて、許しつるかも。

京師邊。君者去之乎。孰解可。言紐緒乃。結手懈毛。

都邊へ、君は行にしを、誰解けか、我が紐の緒の、結ふ手たゆしも。

草枕。客去君乎。人目多。袖不振爲而。安萬田悔毛。

草枕、旅行く君を、人目多み、袖振らずして、あまた悔しも。

白銅鏡。手二取持而。見常不足。君爾所贈而。生跡文無。

眞十鏡、手に取持ちて、見れど飽かぬ、君に後れて、生けりとも無し。

陰夜之。田時毛不知。山越而。往座君乎者。何時將待。

曇夜の、たどきも知らぬ、山越えて、行ます君をば、何時とか待たむ。

田立名付。青垣山之。隔者。數君乎。言不問可聞。

たゝなづく、青垣山し、隔たらば、屢君を、言問はじかも。

志可…神馬藻の—「名は告り」の序

風のむた—風と共に

留りにし云々—家にとゞめ置きし妻を思ふなり
秋津野—吉野なるべし

相跡者無杼—宣長說「杼」は「荷」の誤にて「あふとはなしに」

うらも無く—何心もなく、一說、何の邪心もなくの意

我さへに—我が下紐をさへにの意
結びてな—結びてん

然海部之。礒爾苅干。名告藻之。名者告手師乎。如何相難寸。
志可の海人の、礒に刈乾す、神馬藻の、名は告りてしを、如何で逢ひ難き。

國遠見。念勿和備曾。風之共。雲之行如。言者將通。
國遠み、思ひな侘びそ。風のむた、雲の行く如、言は通はむ。

留西。人乎念爾。蜓野。居白雲。止時無。
留りにし、人を思ふに、秋津野に、居る白雲の、止む時も無し。

悲別歌

浦毛無。去之君故。朝旦。本名烏戀。相跡者無杼。
うらも無く、去にし君ゆゑ、朝なさな、もとなぞ戀ふる。逢ふとは無けど。

白細之。君之下紐。吾左倍爾。今日結而名。將相日之爲。
白妙の、君が下紐、我さへに、今日結びてな。逢はむ日の爲め。

難波潟、漕ぎ出し船の、遙々に、別れ來ぬれど、忘れ兼ねつも。

浦回榜。能野舟泊。目頰志久。懸不思。月毛日毛無。

浦ま漕ぐ、よしの舟はて、珍しく、懸けて思はぬ、月も日も無し。

松浦舟。亂穿江之。水尾早。檝取間無。所念鴨。

松浦舟、騷ぐ堀江の、澪早み、檝取る間無く、思ほゆるかも。

射去爲。海部之檝音。湯鞍干。妹心。乘來鴨。

漁する、海人の檝音、ゆくらかに、妹が心に、乘りにけるかも。

若之浦爾。袖左倍沾而。忘貝。拾跡妹者。不所忘爾。

和歌の浦に、袖さへ濡れて、忘貝、拾へど妹は、忘らえなくに。

或本歌末句云。忘可禰都母。

草枕。羈西居者。苅薦之。擾妹爾。不戀日者無。

草枕、旅にし居れば、刈薦の、亂れて妹に、戀ひぬ日は無し。

能野—「熊野」の誤か、さらば紀伊國、この句なほ誤字あるべし
目頰志久—一説「めがほしく」と訓む、見まほしくの意
浦ま—一訓「浦み」
懸けて思はぬ—心に也
松浦舟—筑紫の松浦の運漕舟、以下「檝取る」まで凡て序
堀江—攝津國難波
ゆくらかに—ゆらゆらと、胸打ち動く樣にの意
刈薦の—枕詞

郭公—枕詞
とばたの浦—筑前國鳥鎭か
子難懈之—「懈」或は「濰」の誤か
島ならなくに—島にはあらぬに、此島をよそ目に見て過ぎ行く如く、妹をよそにのみ見んやと也
見流—一本、上に「所」あり
浪間より—一訓「浪の間ゆ」
我に寄する兒ら—人の我に言ひ寄する兒らの意
衣手の—枕詞
眞砂路の—一訓「まなごつち」以上三句は「間無く」の序
い行く—一訓「いませ」從ふべし
がてら—一訓「がてり」
釣爲—「爲」は「爾」の誤
志可—筑前國、以下「漁火の」まで序

郭公、とばたの浦に、しく浪の、屢君を、見む由もがも。

吾妹兒乎。外耳哉將見。越懈乃。子難懈之。島楢名君。
吾妹子を、外のみや見む。越の海の、こがたの海の、島ならなくに。

浪間從。雲位爾見流。粟島之。不相物故。吾爾所依兒等。
浪間より、雲井に見ゆる、粟島の、逢はぬものゆゑ、我に寄する兒ら。

衣袖之。眞若之浦之。愛子地。間無時無。吾戀钁。
衣手の、ま和歌の浦の、眞砂路の、間無く時無し。我が戀ふらくは。

能登海爾。釣爲海部之。射去火之。光爾伊往。月待香光。
能登の海に、釣する海人の、漁火の、光にい行く。月待ちがてら。

思香乃白水郎乃。釣爲燭有。射去火之。髣髴妹乎。將見因毛欲得。
志可の海人の、釣に燈せる、漁火の、仄に妹を、見む由もがも。

難波方。水手出船之。遙遙。別來禮杼。忘金津毛。

港わに、滿ち來る潮の、彌増しに、戀はまされど、忘らえぬかも。

奥浪。邊浪之來依。貞浦乃。此左太過而。後將戀鴨。

沖つ浪、邊浪の來寄る、佐太の浦の、此のさだ過ぎて、後戀ひむかも。

在千方。在名草目而。行目友。家有妹伊。將鬱悒。

ありち潟、在り慰めて、行かめども、家なる妹い、いぶかしみせむ。

水咫衝石。心盡而。念鴨。此間毛本名。夢西所見。

澪標、心盡して、思へかも、此處にももとな、夢にし見ゆる。

吾妹兒爾。觸者無二。荒礒回爾。吾衣手者。所沾可母。

吾妹子に、觸るとは無しに、荒礒まに、我が衣手は、濡れにけるかも。

室之浦之。湍門之崎有。鳴島之。礒越浪爾。所沾可聞。

室の浦の、瀬戸の崎なる、なる島の、礒越す浪に、濡れにけるかも。

霍公鳥。飛幡之浦爾。敷浪之。屢君乎。將見因毛鴨。

港わに—一訓「みなとまに」又「みなとみに」
沖つ浪—此歌巻十一相標に出づ
ありち潟—未詳、或は越前國のあらちにや「在り」の序
妹い—いは助辭
いぶかしみせむ—心の晴やかならで塞ぎ結ぼるゝ聞かん
澪標—枕詞
思へかも—妹が思へばか
此處—旅居せるところをさす
もとな—徒に
荒礒回—一訓「荒礒み」
室—播磨國の室ならん

越の大山—越前國にも越中國にもあり、何れにか
行きこそ—行けかし
待乳山—紀伊國、經行く路を以て「待つ」といふ縁とせる也
あしき山—肥前國置城山か、尾張國にも近江國にもありといふ
靡きたりこそ—靡きてあれかし
鈴鹿川—伊勢國
妻もあらなくに—旅なるほどに家郷の妻のみまかりし後に歸るとてよめるにや
戀ひ渡るかも—川の縁語
邊にも云々—心の落ちつかず物思ひをなすと也

み雪降る、越の大山、行き過ぎて、何れの日にか、我が里を見む。

乞吾駒。早去欲。亦打山。將待妹乎。去而速見牟。
いで我が駒、早く行きこそ。待乳山、待つらむ妹を、行きて早や見む。

惡木山。木末悉。明日從者。靡有社。妹之當將見。
あしき山、木ぬれ悉、明日よりは、靡きたりこそ。妹があたり見む。

鈴鹿河。八十瀬渡而。誰故加。夜爾將越。妻毛不在君。
鈴鹿川、八十瀬渡りて、誰が故か、夜越に越えむ。妻もあらなくに。

吾妹兒爾。又毛相海之。安河。安寢毛不宿爾。戀渡鴨。
我妹子に、又も近江の、野洲の川、安寢も寢ずに、戀ひ渡るかも。

客爾有而。物乎曾念。白浪乃。邊毛奥毛。依者無爾。
旅にありて、物をぞ思ふ。白浪の、邊にも沖にも、寄るとは無しに。

湖轉爾。滿來鹽能。彌益二。戀者雖剩。不所忘鴨。

玉釧—枕詞
くき—山のはらあるところ、本文「岫」は或は「岬」の誤にて「さき」か
たぐひて—離れ得ずして副ひ來れるをいふ
春長日乎—「長春日乎」の誤か
奥所—はて、行きつくさき
戀ひつゝか來む—「來む」は行かんの意
木綿疊—枕詞
手向の山—奈良の手向山
玉籠—枕詞
あべ島山—尾張國、長門國にもありといふ
得すや—得せんやの意、四句一訓「たびねえせめや」

草枕、旅の紐解く、家の妹し、我を待ち兼ねて、嘆かすらしも。

玉釧。卷寢志妹乎。月毛不經。置而八將越。此山岫。
玉釧、まき寢し妹を、月も經ず、置きてや越えむ。此の山のくき。

梓弓。末者不知杼。愛美。君爾副而。山道越來奴。
梓弓、末は知らねど、うつくしみ、君にたぐひて、山路越え來ぬ。

霞立。春長日乎。奥香無。不知山道乎。戀乍可將來。
霞立つ、春の長日を、奥所無く、知らぬ山路を、戀ひつゝか來む。

外耳。君乎相見而。木綿牒。手向乃山乎。明日香越將去。
外のみに、君を逢見て、木綿疊、手向の山を、明日か越えなむ。

玉勝間。安倍島山之。暮露爾。旅宿得爲也。長此夜乎。
玉籠、あべ島山の、夕露に、旅寢は得すや。長き此の夜を。

三雪零。越乃大山。行過而。何日可。我里乎將見。

妹を云々—遊女などに一夜逢ひてよめるならん

見えこそ—見えよ

言問はましを—十分に語らひて別れ來べかりしものを

旅の夜の云々—初に男自ちの旅のことをいひ末は妹がまろねして戀ふるさまのまざ〱と面影に見ゆるをいふなるべし
さにづらふ紐—赤紐
解きさけず—一訓「あけさけず」

思ほせるかも—家の妹がわれを思ふかと也

草枕、旅の悲しく、あるなへに、妹を逢見て、後戀ひむかも。

國遠。直不相。夢谷。吾爾所見社。相日左右二。
國遠み、直には逢はず、夢にだに、我に見えこそ。逢はむ日までに。

如是將戀。物跡知者。吾妹兒爾。言問麻思乎。今之悔毛。
斯く戀ひむ、ものと知りせば、我妹子に、言問はましを、今し悔しも。

客夜之。久成者。左丹頰合。紐開不離。戀流比日。
旅の夜の、久しくなれば、さにづらふ、紐解きさけず、戀ふる此の頃。

吾妹兒之。阿乎偲良志。草枕。旅之丸寢爾。下紐解。
我妹子し、我を忍ぶらし。草枕、旅の丸寢に、下紐解けつ。

草枕。旅之衣。紐解。所念鴨。此年比者。
草枕、旅の衣の、紐解けぬ。思ほせるかも、此の年來は。

草枕。客之紐解。家之妹志。吾之待不得而。嘆良霜。

名―消息の意

面影にして―面影に見えて戀しき心のやむ時なしと也

歸り來なむと―一訓「歸り來なめど」
朝影に―(一)朝影の如くやせて(二)本文「影」は「異」の誤にて「あさにけに」か

はしきやし―下の「君」にかゝる、然るべき因緣の戀

近かれば、名のみも聞きて、慰めつ。今宵ゆ戀の、いや增りなむ。

客在而。戀者辛苦。何時毛。京行而。君之目乎將見。
旅にありて、戀ふれば苦し。何時しかも、都に行きて、君が目を見む。

遠有者。光儀者不所見。如常。妹之咲者。面影爲而。
遠かれば、姿は見えず。常の如、妹が笑まひは、面影にして。

年毛不歷。反來嘗跡。朝影爾。將待妹之。面影所見。
年も歷ず、歸り來なむと、朝影に、待つらむ妹が、面影に見ゆ。

玉桙之。道爾出立。別來之。日從于念。忘時無。
玉桙の、道に出で立ち、別れ來し、日より思ふに、忘る時無し。

波之寸八師。志賀在戀爾毛。有之鴨。君所遺而。戀敷念者。
はしきやし、然る戀にも、ありしかも、君に後れて、戀しく思へば。

草枕。客之悲。有苗爾。妹乎相見而。後將戀可聞。

どもなく、離れ去るを悲しみてよめるならんか　心喪云々—(一)「喪」を一本「哀」に、「之」を「云」に作る、さらば「松」は「待」の借字にて「こゝろいたくなにしかいもにあひひそめけむ」(二)「心喪」は「不遠」などの誤、「之」は「見」の誤にて「とはからずなにしかいもをあひみそめけむ」濱松を遙に見るよしにて遠からずと續けたるか(三)「心喪」は「ねもころに」とあるべきところ(四)「喪」は「表」の誤か、「心表」は義を以て「ねもころ」と訓むべし　企玖—豐前國　思へかも—思へばかも　日も替へずして—別れし其日やがて也　かへりも來やと—送りくれし人の又立かへりて來るかと　遠からなくに—遠き處にてもなきに

豐州。聞濱松。心喪。何妹。相之始。
豐國の、企玖の濱松、心にも、何しか妹に、逢ひし初めけむ。

右四首。柿本朝臣人麻呂歌集出。

月易而。君乎婆見登。念鴨。日毛不易爲而。戀之重。
月替へて、君をば見むと、思へかも、日も替へずして、戀の繁けき。
莫去跡。變毛來哉常。顧爾。雖往不歸。道之長手矣。
な行きそと、かへりも來やと、顧みに、行けどかへらず。道の長手を。
去家而。妹乎念出。灼然。人之應知。歎將爲鴨。
旅にして、妹を思ひ出、著く、人の知るべき、歎きせむかも。
里離。遠有莫國。草枕。旅登之思者。尙戀來。
里離り、遠からなくに、草枕、旅とし思へば、尙戀ひにけり。
近有者。名耳毛聞而。名種目津。今夜從戀乃。益益南。

蓑―字鏡に、蓑「爾能」と見えたるによれば「にの」也
所沾乍烏來―「烏」は「曾」の誤か
纏向―大和國城上郡
度會―伊勢國
若栂―(一)若を「我」に重ねたる序(二)本文「歷木」は「ひさぎ」ともよまんか、さらば「我が久」に重ねたる序
妹戀ふるかも―一訓「妹戀ひむかも」
櫻花云々―略解にいへる如く、櫻の咲きて散る如くにうるはしみ相見しは

久方の、雨の降る日を、我が門に、蓑笠著ずて、來る人や誰。

纏向之。痛足乃山爾。雲居乍。雨者雖零。所沾乍烏來。

纏向の、足痛の山に、雲居つゝ、雨は降れども、濡れつゝぞ來し。

右二首。

羇旅發思

度會。大河邊。若歷木。吾久在者。妹戀鴨。

度會の、大川の邊の、若栂、我が久にあれば、妹戀ふるかも。

吾妹子。夢見來。倭路。度瀬別。手向吾爲。

我妹子を、夢に見え來と、大和路の、渡瀬毎に、手向我がする。

櫻花。開哉散。及見。誰此所。見散行。

櫻花、咲きかも散ると、見るまでに、誰かも此處に、見えて散り行く。

年の枕詞を直に年の意に轉用せり(三)本文「歴」は「夜」の誤にて「あらたよの」

降らくに—降るに

今日谷相牟—「牟」一本「乎」とある方宜し

人目守る—一訓「人目守り」

乏しき—逢ふこと稀なる

夜毛更深利—「深」の下に「氣」を脱せしか

紐解き設けな—紐解き設けて相宿せん

來有人哉誰—一説、「けるひとやたれ」と訓むべし、「ける」は來るの古語

右二首。

吾勢子之。使乎待跡。笠不著。出乍曾見之。雨零爾。

我が背子が、使を待つと、笠も著ず、出でつゝぞ見し。雨の降らくに。

無心。雨爾毛有鹿。人目守。乏妹爾。今日谷相牟。

心無き、雨にもあるか。人目守る、乏しき妹に、今日だに逢はむを。

右二首。

直獨。宿杼宿不得而。白細。袖乎笠爾著。沾乍曾來。

唯一人、寢れど寢かねて、白妙の、袖を笠に著、濡れつゝぞ來し。

雨毛零。夜毛更深利。今更。君將行哉。紐解設名。

雨も降り、夜も更けにけり。今更に、君行かめやも。紐解き設けな。

右二首。

久堅乃。雨零日乎。我門爾。蓑笠不蒙而。來有人哉誰。

門立てて—門を閉ぢて

入而所見牟—「牟」の上「氣」を脫せしか、一說「牟」は「乎」の誤にて「入りて見えしを」

ゑりたる穴ゆ—穿ちたる穴より

明日よりは云々—旅立つ前の夜のことなるべし

新玉の—(一)次の句は一年の間の毎夜をいふが故に此の枕詞を置けり(一)

我故爾。痛勿和備曾。後逢。不相登要之。言毛不有爾。

我が故に、甚くな侘びそ。後逢に、逢はじと言ひし、事もあらなくに。

右二首。

門立而。戸毛閉而有乎。何處從鹿。妹之入來而。夢所見鶴。

門立てで、戸も閉ぢたるを、何處ゆか、妹が入り來て、夢に見えつる。

門立而。戸者雖闔。盜人之。穿穴從。入而所見牟。

門立てて、戸は差せれども、盜人の、ゑりたる穴ゆ、入りて見えけむ。

右二首。

從明日者。戀乍將在。今夕彈。速初夜從。緩解我妹。

明日よりは、戀ひつゝあらむ。今宵だに、早く宵より、紐解け我妹。

今更。將寢哉我背子。荒田麻之。全夜毛不落。夢所見欲。

今更に、寢めや我が背子。新玉の、一夜も落ちず、夢に見えこそ。

爲便毛無。片戀乎爲登。比日爾。吾可死者。夢所見哉。
術も無き、片戀をすと、此の頃に、我が死ぬべきは、夢に見えきや。

夢見而。衣乎取服。裝束間爾。妹之使曾。先爾來。
夢に見て、衣を取りき、裝ふ間に、妹が使ぞ、先だちにける。

右二首。

在有而。後毛將相登。言耳乎。堅要管。相者無爾。
在り〱て、後も逢はむと、言のみを、堅く言ひつゝ、逢ふとは無しに。

極而。吾毛相登。思友。人之言社。繁君爾有。
極めて、我も逢はむと、思へども、人の言こそ、繁き君なれ。

右二首。

氣緒爾。言氣築之。妹尚乎。人妻有跡。聞者悲毛。
息の緒に、我が息づきし、妹すらを、人妻なりと、聞くは悲しも。

我が死ぬべきは―死ぬべき樣になりたるは

夢に見て―汝が事を也　衣を取りき―汝の許に行かんと也　先だちにける―汝が方より使の先に來りしと也

吾毛相登―「相」の上「將」を脱せしか

息の緒に―命を懸けて戀ひ歎きしをいふ　聞くは―一訓「聞けば」

いぶかしみする―覺束なく思ふ、いぶせき心地す

生けりとも無し―一説「生けるとも無し」と訓ずべし、「と」は利心の「利」也といふ

思ふ我妹を―一説「我思ふ妹を」の顚倒なるべしといふ

逢ひしものかも―其始め逢ひじならんや

相見まく、欲しけくすれば、君よりも、我ぞ増りて、いぶかしみする。

右二首。

空蟬之。人目乎繁。不相而。年之經者。生跡毛奈思。

空蟬の、人目を繁み、逢はずして、年の經ぬれば、生けりとも無し。

空蟬之。人目繁者。夜干玉之。夜夢乎。次而所見欲。

空蟬の、人目繁くは、ぬば玉の、夜の夢にを、繼ぎて見えこそ。

右二首。

慇懃。憶吾妹乎。人言之。繁爾因而。不通比日可聞。

懇に、思ふ我妹を、人言の、繁きに因りて、淀む頃かも。

人言之。繁思有者。君毛吾毛。將絶常云而。相之物鴨。

人言の、繁くし有らば、君も我も、絶えむと言ひて、逢ひしものかも。

右二首。

れど何れも定かならず
眞鳥住む―枕詞
雲梯―大和國高市郡
紫は云々―紫は椿の灰のあくをさして染むる物なるによりて「椿市」の序とせる也
母が呼ぶ名―略解に「其むすめの名をば、母父の呼びつらめど、母を擧げいふは女の歌なれば也」といへるが如し、名を告ぐるは夫と許す意なる事類歌多し

誰が名にかあらも―一訓「誰が名ならむも」我が戀ひ死なば誰が名か立たん君が名こそ立ため

紫は、灰さすものぞ、椿市の、八十の衢に、逢へる兒や誰。

足千根乃。母之召名乎。雖白。路行人乎。孰跡知而可。
垂乳根の、母が呼ぶ名を、申さめど、道行人を、誰と知りてか。

右二首。

不相。然將有。玉梓之。使乎谷毛。待八金手六。
逢はなくは、然もありなむ。玉章の、使をだにも、待ちや兼ねてむ。

將相者。千遍雖念。蟻通。人眼乎多。戀乍衣居。
逢はむとは、千度思へど、在り通ふ、人目を多み、戀ひつゝぞ居る。

右二首。

人目多。直不相而。蓋雲。吾戀死者。誰名將有裳。
人目多み、直に逢はずて、蓋しくも、我が戀ひ死なば、誰が名にかあらも。

相見。欲爲者。從君毛。吾曾益而。伊布可思美爲也。

さ檜隈、檜隈川に、駒止めて、駒に水飼へ。我外に見む。

於能禮故。所詈而居者。驄馬之。面高夫駄爾。乘而應來哉。

己故、罵らえて居れば、葦毛馬の、面高夫駄に、乘りて來べしや。

右一首。平羣文屋朝臣益人傳云。昔聞紀皇女竊嫁二高安王一。被レ責之時。御二作此歌一。

但高安王左降任二之伊豫國守一也。

紫草乎。草跡別別。伏鹿之。野者殊異爲而。心者同。

紫を、草と別く〳〵、伏す鹿の、野は異にして、心は同じ。

不想乎。想常云者。眞鳥住。卯名手乃杜之。神思將御知。

思はぬを、思ふと言はば、眞鳥住む、雲梯の杜の、神し知らさむ。

問答歌

紫者。灰指物曾。海石榴市之。八十街爾。相兒哉誰。

さ檜隈—さは發語、大和國高市郡

面高夫駄に云々—(一)「夫」は「久」の誤りにて「おもたかくだに」か、さて常は身を裝ひうるはしき馬に乘り馬の頭をたてゝ勇み來しを己故父母に罵られて居る男なれば馬の頭も我が頭をも高く上げて乘り來ることは得ずうなだれてこそ通はめと女の嘆きてよめる歌也(二)左註によれば、この歌紀皇女の御作にて高安王の伊豫國に居らるゝ許によみて遣はされしものにて我故に伊豫國に流され給ひしなれば歸馬に乘りて面高くはこりかに君の御許に下り盡るべきにもあらずといふ意(三)「ぶだ」は「斑」(ブチ)也、己が爲め左遷せられしなれば以前の如くあしげの面高きぶち馬に乘りて來通ひ給ふ事あらじの意

紫を云々—鹿はたゞの草と紫とをえり別けて紫の上に伏すといひなせり、君と我と住所も境遇も異れど相思ふ心は一なりといふに譬ふ、其他數説あ

ひだの細江―(一)大和國高市郡にも斐太といふ村あり(二)卷十四、未得勘知國といふ歌の中にも「比多我多能いそのわかめ」とよめり、同所か

菅鳥―一說「菅」は「管」の誤にて「つゝどり」か

目を安み―見安しにて見苦しの反對、めは又群(ムレ)の約言なれば、來居て鳴く鳥の群とかけたる也

朝明の姿―朝起きて別れ行く姿

詈らゆれど―母などに罵り戒めらるれど、一二の句は序

駐馬―「うまとめて」とも訓むべし

鴨すらも、己が妻どち、あさりして、後るゝ程に、戀ふとふものを。

白檀。斐太乃細江之。菅鳥乃。妹爾戀哉。寢宿金鶴。

白眞弓、ひだの細江の、菅鳥の、妹に戀ふれや、寢を寢兼ねつる。

小竹之上爾。來居而鳴鳥。目乎安見。人妻姤爾。吾戀二來。

篠の上に、來居て鳴く鳥、目を安み、人妻ゆゑに、我戀ひにけり。

物念常。不宿起有。旦開者。利備氏鳴成。鷄左倍。

物思ふと、寢ねず起きたる、朝明には、侘びて鳴くなり。鷄さへ。

朝烏。早勿鳴。吾背子之。旦開之容儀。見者悲毛。

朝烏、早くな鳴きそ。我が背子が、朝明の姿、見れば悲しも。

柜楉越爾。麥咋駒之。雖詈。猶戀久。思不勝焉。

うませ越しに、麥食む駒の、詈らゆれど、猶し戀ふらく、忍び兼ねつも。

左檜隈。檜隈河爾。駐馬。馬爾水令飲。吾外將見。

朝影に、我が身はなりぬ。陽炎の、仄に見えて、往にし兒ゆゑに。

中中二。人跡不在者。桑子爾毛。成益物乎。玉之緒許。

なか〳〵に、人とあらずは、桑子にも、ならましものを、玉の緒ばかり。

眞菅吉。宗我乃河原爾。鳴千鳥。間無吾背子。吾戀者。

眞菅よし、宗我の河原に、鳴く千鳥、間無し我が背子、我が戀ふらくは。

戀衣。著楢乃山爾。鳴鳥之。間無時無。吾戀良苦者。

戀衣、著奈良の山に、鳴く鳥の、間無く時無し。我が戀ふらくは。

遠津人。獵道之池爾。住鳥之。立毛居毛。君乎之曾念。

遠つ人、かりぢの池に、住む鳥の、立ちても居ても、君をしぞ思ふ。

葦邊往。鴨之羽音之。聲耳。聞管本名。戀渡鴨。

葦邊行く、鴨の羽音の、音のみに、聞きつゝもとな、戀ひ渡るかも。

鴨尙毛。己之妻共。求食爲而。所遺間爾。戀云物乎。

朝影に云々—此歌巻十一に三四の句、「玉垣入風所見」と誤りて入りたり、全く同歌也

玉之緒許—「許」は「計」の誤か

あらずは—あらんよりは

桑子—蠶、雌雄離れぬものなればいふ

眞菅よし—枕詞

宗我の河原—大和國高市郡、檜隈川の末なりとぞ

戀衣—(一)「戀」は「舊」の誤にて「ふるごろも」きならすとかけたる枕詞(二)「戀」は「辛」の誤にて「からころも」

遠つ人—枕詞

かりぢの池—三巻に「長皇子遊二獵路池一之時柿本朝臣人麻呂作歌」云々とあると、同處なるべきかといふ

海…苔の―「名は」の序
名は云々―男の名は決して父母に告げじ

長き命―若くして末長き命をいふ

增れば今は―一訓「まされる今は」

世にも忘れじ―世の中に忘るべからぬ事の多き中に殊に忘られじといふ意

海の、沖つ玉藻の、靡き寢む。早や來ませ君、待てば苦しも。

海若之。奥爾生有。繩乘乃。名者曾不告。戀者雖死。

海の、沖に生ひたる、繩海苔の、名は嘗て告らじ。戀ひは死ぬとも。

玉緒乎。片緒爾搓而。緒乎弱彌。亂時爾。不戀有目八方。

玉の緒を、片緒に搓りて、緒を弱み、亂るゝ時に、戀ひざらめやも。

君爾不相。久成宿。玉緒之。長命之。惜雲無。

君に逢はず、久しくなりぬ。玉の緒の、長き命の、惜しけくも無し。

戀事。益今者。玉緒之。絕而亂而。可死所念。

戀ふること、增れば今は、玉の緒の、絕えて亂れて、死ぬべく思ほゆ。

海處女。潛取云。忘貝。代二毛不忘。妹之光儀者。

海人少女、潛き取るちふ、忘貝、世にも忘れじ。妹が姿は。

朝影爾。吾身者成奴。玉蜻。髣髴所見而。往之兒故爾。

田上山—近江國、本文「白月」は「田上」の誤

年をぞ來經る—相逢ふことなくして年を經過すと也

藤浪の—(一)色よきに譬ふ(二)「蜻蜓」などの誤にや、古義には本末兩句別々の歌の混じて一つの歌となりしものかといへり

吉名者不告—「不」は「令」の誤にて「よしなはのらせ」なるべし

浪のむた—浪に連れて

言の—人のかれこれいふ言葉の

或本詞曰。將絶跡妹乎。吾念莫久爾。

唐棣花色之。移安。情有者。年乎曾寸經。事者不絶而。

唐棣花色の、移ろひ易き、心あれば、年をぞ來經る。言は絶えずて。

如此爲而曾。人之死云。藤浪乃。直一目耳。見之人故爾。

斯くしてぞ、人の死ぬとふ、藤浪の、唯一目のみ、見し人ゆゑに。

住吉之。敷津之浦乃。名告藻之。名者告而之乎。不相毛恠。

住吉の、敷津の浦の、神馬藻の、名は告りてしを、逢はなくも恠し。

三佐呉集。荒礒爾生流。勿謂藻乃。吉名者不告。父母者知鞆。

鳴鳩居る、荒磯に生ふる、神馬藻の、よし名は告らじ。親は知るとも。

浪之共。靡玉藻乃。片念爾。吾念人之。言乃繁家口。

浪のむた、靡く玉藻の、片思に、我が思ふ人の、言の繁けく。

海若之。奧津玉藻之。靡將寢。早來座君。待者苦毛。

水莖之。岡乃田葛葉緒。吹變。面知兒等之。不見比鴨。
水莖の、岡の葛葉を、吹き返し、面しる兒らが、見えぬ頃かも。
赤駒之。射去羽許。眞田葛原。何傳言。直將吉。
赤駒の、い行きはゞかる、眞葛原、何の傳言、直にしえけむ。
木綿疊。田上山之。狹名葛。在去之毛。不令有十方。
木綿疊、田上山の、眞葛、在り去りてしも、今ならずとも。
丹波道之。大江乃山之。眞玉葛。絶牟乃心。我不思。
丹波路の、大江の山の、眞葛、絶えむの心、我が思はなくに。
大埼之。有礒乃渡。延久受乃。往方無哉。戀渡南。
大埼の、荒磯の渡り、這ふ葛の、行方も無くや、戀ひ渡りなむ。
木綿裏。一云「疊」白月山之。佐奈葛。後毛必。將相等曾念。
木綿疊、田上山の、眞葛、後も必ず、逢はむとぞ思ふ。

水莖の—枕詞
岡の云々—秋風に葛の葉の吹きかへさるゝ時いちじるく見ゆるを以て「面しる」の序とせる也「面しる」前註
羽許—「許」は「計」の誤
赤駒の云々—相聞の譬歌の一方の傳はれるものなるべし
い行きはゞかる—葛の根は足にからみつきて駒の歩み自由ならねばいふ
えけむ—よけむ、直に來ていはんこそよからめの意
不令有—「令」は「今」の誤
木綿疊—枕詞
田上山—近江國
在り去りてしも—宣長說に「今ならずとも、在去りて後にも逢はん」といふ也、古義には、後にたしかに逢はんと思ふならば心長く待たんの義といへり
眞葛—一訓「またまづら」
絶えむの心—絶えんと思ふ心
延久受乃—宣長は、此句は必ず漕ぐ舟のとあるべきところといへり
大埼—紀伊國
木綿疊—枕詞、本文「裏」一本「疊」とある方宜し

りていふ也

淺茅原云々―とりとめもなきかねごとといふ譬、一說「しめゆひむな言も」と訓む、一二の句は序とす

きこせ―宣へ

皆人之―一本「人皆之」

ありて後にも―在り／＼て年月經て後にも

刈るかや―かやは屋根葺く料とする草の總稱、上三句「亂れて」の序

妹待跡―「待跡」は「所服」の誤にて「いもがきる」か、然らば枕詞

はへてしあらば―ははへてしあらばの約、思ひ交す心の絕えずあらばの意

淺茅原。小野爾標結。空言毛。將相令聞。戀之名種爾。

淺茅原、小野に標結ふ、空言も、逢はむときこせ。戀の慰に。

或本歌曰。將來知志。君矣志將待。又見二柿本朝臣人麻呂歌集一。然落句少異耳。

皆人之。笠爾縫云。有間菅。在而後爾毛。相等曾念。

皆人の、笠に縫ふとふ、有馬菅、ありて後にも、逢はむとぞ思ふ。

三吉野之。蜻乃小野爾。刈草之。念亂而。宿夜四曾多。

三吉野の、秋津の小野に、刈るかやの、思ひ亂れて、寢る夜しぞ多き。

妹待跡。三笠乃山之。山菅之。不止八將戀。命不死者。

妹待つと、三笠の山の、山菅の、止まずや戀ひむ。命死なずは。

谷迫。峯邊延有。玉葛。令蔓之有者。年二不來友。

谷狹み、峯邊に這へる、玉葛、はへてしあらば、年に來ずとも。

一云。石葛。令蔓之有者。

淺茅原云々―上二句は妹が家のあたりを見んとて來りし勞をいふ也
心ぐみ―「心苦しみ」の中略、一說、心になつかしく思ふをいふ

月草の―枕詞、この花にて絹布などに移しつけて染むるより「うつし心」と續けたる也
うつし心云々―略解には他に心は移さずの義に解し、古義には「現し心」にて女を思ふ情には嚴重なる朝廷に仕へ侍らひながら尙月つたしかなる心も失せぬの義とせり

目覺草―草の名にあらず、目覺のたよりとなるものの意

しみゝに―繁く
醜の醜草―忘草を其のききめなきにつきてのゝし

淺茅原、茅生に足蹈み、心ぐみ、我が思ふ兒らが、家あたり見つ。

一云。妹之。家當見津。

内日刺。宮庭有跡。鴨頭草乃。移情。吾思名國。
内日射す、宮にはあれど、月草の、うつし心は、我が思はなくに。

百爾千爾。人者雖言。月草之。移情。吾將持八方。
百に千に、人は言ふとも、月草の、移し心を、我が持ためやも。

萱草。吾紐爾著。時常無。念度者。生跡文奈思。
忘草、我が紐に著く、時と無く、思ひ渡れば、生けりとも無し。

五更之。目不醉草跡。此乎谷。見乍座而。吾止偲爲。
曉の、目覺草と、是をだに、見つゝ座して、我と忍ばせ。

萱草。垣毛繁森。雖殖有。鬼之志許草。猶戀爾家利。
忘草、垣もしみゝに、植ゑたれど、醜の醜草、猶戀ひにけり。

垣津旗。開澤生。菅根之。絶跡也君之。不所見頃者。
燕子花、佐紀澤に生ふる、菅の根の、絶ゆとや君が、見えぬ此の頃。

足檜木之。山菅根之。懃。不止念者。於妹將相可聞。
足引の、山菅の根の、懇に、止まず思はば、妹に逢はむかも。

相不念。有物乎鴨。菅根乃。懃懇。吾念有良武。
相思はず、あるものをかも、菅の根の、懇ごろに、我が思へるらむ。

山菅之。不止而公乎。念可母。吾心神之。頃者名寸。
山菅の、止まずて君を、思へかも、我が心利の、此の頃に無き。

妹門。去過不得而。草結。風吹解勿。又將顧。
妹が門、行き過ぎ兼ねて、草結ぶ。風吹き解くな。又返り見む。

一云。直相麻氏爾。

淺茅原。茅生丹足蹈。意具美。吾念兒等之。家當見津。

燕子花……根の—「絶ゆ」の序

足引……根の—「懇」のねに掛る序

相思はず云々—妹は相思はずてあるらんものを何とて云々

思へかも—思へばかも

草結ぶ—事の成らんとならば立還り見ん時まで解けずあれ、成らずとならば自ら解けよとて、生えたる草の莖と莖とを結び合はするなるらん

安暫仁—宣長は、誤字あらんといへり。

獵場の小野—一説「獵路の小野」といふ大和の地名の誤なるべし

櫻麻の—枕詞、一訓「櫻あさの」

早やなさば—一訓「早おひば」略解に「ゆるらかにはかりし故に、遂にかく妹が紐解く時にも至りぬと悦ぶ也」といへり、其他説もあれどいかゞ

淺茅標結ひ—女を我手に入るゝに譬ふ

足引……根の—「懃」の序

左佐浪之。波越安暫仁。落小雨。間文置而。吾不念國。
細波の、波越す畦に、降る小雨。間も置きて、我が思はなくに。

神左備而。巖爾生。松根之。君心者。忘不得毛。
神さびて、巖に生ふる、松が根の、君が心は、忘れ兼ねつも。

御獵爲。雁羽之小野之。櫟柴之。奈禮波不益。戀社益。
御獵する、獵場の小野の、櫟柴の、馴れは増らず、戀こそまされ。

櫻麻之。麻原乃下草。早生者。妹之下紐。不解有申尾。
櫻麻の、麻生の下草、早やなさば、妹が下紐、解かざらましを。

春日野爾。淺茅標結。斷米也登。吾念人者。彌遠長爾。
春日野に、淺茅標結ひ、絶えめやと、我が思ふ人は、いや遠長に。

足檜之。山菅根乃。懃。吾波曾戀流。君之光儀乎。
足引の、山菅の根の、懃に、我はぞ戀ふる。君が姿を。

或本歌曰。吾念人乎。將見因毛我母。

萬葉集卷第十二下

朝日指。春日能小野爾。置露乃。可消吾身。惜雲無。

朝日射す、春日の小野に、置く露の、消ぬべき我が身、惜しけくも無し。

露霜乃。消安我身。雖老。又若反。君乎思將待。

露霜の、消易き我が身、老いぬとも、又若返り、君をし待たむ。

待君常。庭耳居者。打靡。吾黒髪爾。霜曾置爾家類。

君待つと、庭のみ居れば、打靡く、我が黒髪に、霜ぞ置きにける。

或本歌尾句云。白細之。我衣手爾。露曾置爾家留。

朝霜乃。可消耳也。時無二。思將度。氣之緒爾爲而。

朝霜の、消ぬべくのみや、時無しに、思ひ渡らむ。息の緒にして。

又若反—一說「又變若反」の誤にて「又をちかへり」

此歌卷十一、初句「朝露乃」とて、二の句より末全く同歌有り

庭のみ居れば—庭にのみ居れば、一說、本文「耳」の下に「之」を脫したるか、或は「耳」は「西」の誤にて「庭にし居れば」

消なば共にと云々―死なば諸共と契りしも絶えて、後程へて又思ひ出てなげく也

暮置而。旦者消流。白露之。可消戀毛。吾者爲鴨。
宵に置きて、朝は消ぬる、白露の、消ぬべき戀も、我はするかも。

後遂爾。妹將相跡。旦露之。命者生有。戀者雖繁。
後遂に、妹に逢はむと、朝露の、命は生けり。戀は繁けど。

朝旦。草上白。置露乃。消者共跡。云師君者毛。
朝なさな、草の上白く、置く露の、消なば共にと、言ひし君はも。

我が山に―我が住むところの山をいふか、或は本文「吾」は「春」の誤てにはるやまか
燃ゆる煙の―春野山を燒く煙のよそにも見ゆるより「外に見ましを」の序とせる也
見ゆる霧かも―略解には「煙のみゆる」といひ、古義には、物思ひなどする時はき出す白氣(イキ)といへり
反羽二―「羽」は「詞」又は「爲」の誤ならん
きりめ山―紀伊國熊野道の海邊ならんといふ、此山の邊の妹が許へ行きて、逢はずしていたづらに歸るとてよめるなるべしといふ
宵に置きて―一訓「ゆふべ置きて」

中中二。如何知氣。吾山爾。燒流火氣能。外見申尾。
なかなかに、如何で知りけむ。我が山に、燃ゆる煙の、外に見ましを。

吾妹兒爾。戀爲便名鴈。胷乎熱。旦戸開者。所見霧可聞。
我妹子に、戀ひ術無かり、胸をあつみ、朝戸明くれば、見ゆる霧かも。

曉之。朝霧隱。反羽二。如何戀乃。色丹出爾家留。
曉と、朝霧隱り、歸りしに、如何でか戀の、色に出でにける。

思出。時者爲便無。佐保山爾。立雨霧乃。應消所念。
思ひ出づる、時は術無み、佐保山に、立つ雨霧の、消ぬべく思ほゆ。

殺目山。往反道之。朝霞。髣髴谷八。妹爾不相牟。
きりめ山、行きかふ道の、朝霞、仄にだにや、妹に逢はざらむ。

如此將戀。物等知者。夕置而。旦者消流。露有申尾。
斯く戀ひむ、ものと知りせば、宵に置きて、朝は消ぬる、露ならましを。

へた—「はた」に同じく濱のこと
沖つ浪—へたには人知れど遠き沖の方は知る人なしとの意にて、下二句の序とせる也
義之—「義」は「羲」の誤
如何—「いかで」と訓ずべし「なぞも」は舊本「知」の字無きに從へる訓也
佐太の浦—出雲國
おくかも知らず—奧處即ち底ひも知らずの意
たゆたひ易き—やゝもすればためらひて定めなき
頼めそ—頼ませそ、本文「莫」の下に「令」を脱せり

淡海之海。邊多波人知。奧浪。君乎置者。知人毛無。
近江の海、へたば人知る。沖つ浪、君をおきては、知る人も無し。
大海之。底乎深目而。結義之。妹心者。疑毛無。
大海の、底を深めて、結びてし、妹が心は、疑も無し。
貞能汭爾。依流白浪。無間。思乎如何。妹爾難相。
佐太の浦に、寄する白浪、間無く、思ふを何ぞも、妹に逢ひ難き。
念出而。爲便無時者。天雲之。奧香裳不知。戀乍曾居。
思ひ出て、術無き時は、天雲の、おくかも知らず、戀ひつゝぞ居る。
天雲乃。絶多比安。心有者。吾乎莫憑。待者苦毛。
天雲の、たゆたひ易き、心あらば、我をな頼めそ。待てば苦しも。
君之當。見乍母將居。伊駒山。雲莫蒙。雨者雖零。
君があたり、見つゝも居らむ。生駒山、雲な棚引き、雨は降るとも。

絶沼之。下従者將戀。市白久。人之可知。歎爲米也母。
籠沼の、下ゆは戀ひむ。著く、人の知るべく、歎きせめやも。

去方無三。隱有小沼乃。下思爾。吾曾物念。頃者之間。
行方無み、籠れる小沼の、下思に、我ぞ物思ふ。此の頃の間は。

隱沼乃。下從戀餘。白浪之。灼然出。人之可知。
籠沼の、下ゆ戀ひ餘り、白浪の、著く出でぬ。人の知るべく。

妹目乎。見卷欲江之。小浪。敷而戀乍。有跡告乞。
妹が目を、見まく堀江の、さゞら浪、しきて戀ひつゝ、ありと告げこそ。

石走。垂水之水能。早敷八師。君爾戀良久。吾情柄。
岩走る、垂水の水の、はしきやし、君に戀ふらく、我が心から。

君者不來。吾者故無。立浪之。數和備思。如此而不來跡也。
君は來ず、我は故無み、立つ浪の、しく／＼侘びし。斯くて來じとや。

一説「君乎」は「君之」の誤にて「君が」と訓ずべし、君が我を苦々しくいふと也、尚可勘
言はねば—言はぬに
絶沼—「絶」は「隱」の誤か
頃者之間—下に「乎」を脫せしか、一訓「この頃のあひだ」
堀江—難波
さゞら浪—一訓「さゞれ波」、「しきて」の序
しきて云々—しきりに戀ひつゝありと妹に告げよかし
岩走る—枕詞
垂水—攝津國にある地名、其水のはしるを「はしきやし」といひ掛けし也、はしきやしは愛らしきの意
我は故無み—我は君の方へ行くべき理由なくして

神の如―雷の如く
面しる君―(一)顏を見知りたる君、(二)「しる」は著ちき意にて、他の人にまがはず著しく見ゆる君といふ事
瀧に勝れる―心の內のわき返り思ふ事の、瀧よりも甚しとならん

巨勢―大和國高市郡、上二句は「後」の序

とりかひ川―(一)大和國添下郡鳥貝といへる所の川にて卽鳥見(トミ)小川(二)大和物語にいへる鳥飼の御湯にて河內國か、其他にも說あれど未詳
斑鳩―大和國平群郡か
宜しくも云々―人は君をよくもいはぬにの意か、

如神。所聞瀧之。白浪之。面知君之。不所見比日。
神の如、聞ゆる瀧の、白浪の、面しる君が、見えぬ此の頃。

山河之。瀧爾益流。戀爲登曾。人知爾來。無間念者。
山川の、瀧に勝れる、戀すとぞ、人知りにける。間無く思へば。

足檜木之。山河水之。音不出。人之子姤。戀渡青頭鷄。
足引の、山川水の、音に出でず、人の兒ゆゑに、戀ひ渡るかも。

高湍爾有。能登瀬乃河之。後將合。妹者吾者。今爾不有十方。
巨勢なる、能登瀬の川の、後も逢はむ。妹には我は、今ならずとも。

浣衣。取替河之。河余杼能。不通牟心。思兼都母。
洗衣、とりかひ川の、川淀の、よどまむ心、思ひ兼ねつも。

斑鳩之。因可乃池之。宜毛。君乎不言者。念衣吾爲流。
斑鳩の、よるかの池の、宜しくも、君を言はねば、思ひぞ我がする。

橡之。衣解洗。又打山。古人爾者。猶不如家利。
橡の、衣解き洗ひ、まつち山、もとつ人には、なほ及かずけり。

佐保河之。河浪不立。靜雲。君二副而。明日兼欲得。
佐保川の、川浪立たず、靜くも、君にたぐひて、明日さへもがも。

吾妹兒爾。衣借香之。宜寸河。因毛有額。妹之目乎將見。
我妹子に、衣かすがの、よしき川、由もあらぬか。妹が目を見む。

登能雲入。雨零河之。左射禮浪。間無毛君者。所念鴨。
とのぐもり、雨降る川の、さゞれ波、間無くも君は、思ほゆるかも。

吾妹兒哉。安乎忘爲莫。石上。袖振河之。將絕跡念倍也。
我妹子や、我を忘らすな。石の上、袖布留川の、絕えむと思へや。

神山之。山下響。逝水之。水尾不絕者。後毛吾妻。
神山の、山下とよみ、行く水の、澪し絕えずは、後も我が妻。

橡の云々—衣を洗ひて又うつといふ意にて「まつち山」に冠らす
まつち山—音の通ふより「もとつ」といはん料とす、以上三句は序にて歌の意に關係なし
もとつ人—曾逢ひし女
佐保川云々—上二句は「靜く」の序
たぐひて—よりそひて

かすが—春日野に借すといひかけたり
由もあらぬか—由もあれかし、五句と前後して見よ、上三句は序

とのぐもり—棚曇に同じく雲の棚引きて曇ること、「雨降る」の序

袖布留川の—袖は添辭、川水の絕えぬ意より第五句の序とせる也
神山—飛鳥の雷岳ならん
澪し—一訓「澪の」上三句よりこの語迄凡て「絕えず」の序、中絕えずあらば此後いつまでも我妻ぞと也

夕月夜。五更闇之。不明。見之人故。戀渡鴨。
夕月夜、曉闇の、おほゝしく、見し人ゆゑに、戀ひ渡るかも。

久堅之。天水虛爾。照日之。將失日社。吾戀止目。
久方の、天つみ空に、照れる日の、失せなむ日こそ、我が戀止まめ。

十五日。出之月乃。高高爾。君乎座而。何物乎加將念。
望の日に、出でにし月の、高々に、君を座せて、何をか思はむ。

月夜好。門爾出立。足占爲而。往時禁八。妹二不相有。
月夜よみ、門に出で立ち、足占して、行く時さへや、妹に逢はざらむ。

野干玉。夜渡月之。清者。吉見而申尾。君之光儀乎。
ぬば玉の、夜渡る月の、さやけくは、よく見てましを、君が姿を。

足引之。山呼木高三。暮月乎。何時君乎。待之苦沙。
足引の、山を木高み、夕月を、何時かと君を、待つが苦しさ。

おほゝしく―ほのかに
ゆゑに―なるものを
照日之―「日」古本「月」「てるつきの」と訓むべし
十五日―「夜」を脱したるにて「もちのよに」か
高々に云々―遙に望み思へりし君を今宵我家に來させて
足占―「あしうら」の略、占の古の一法
君―男也
夕月を―山を出づる月をいつかと待つが如く

に我が方を望み見て待つらん

今來むーやがて行かん、「今」は俗に「おつつけ」といふに同じ意

水を多みー窪田には水が多き故に

あげに種蒔き云々ーあげは高田、高田は水乾ること多くて草の種除き難く稗多く生じて擇りぬかるゝ如く、我もつまらぬ奴と擇り捨てられしと也

靈合はばー心の合ひなば、一說「たましあへば」と既定に訓ず

しゝ田守る如ー山田をあらす鹿猪の類を守る如く

夕日のー夕日の如く

湊入之。葦別小船。障多。今來吾乎。不通跡念莫。
港入の、葦別小船、障り多み、今來む我を、淀むと思ふな。

或本謌曰。湊入爾。蘆別小船。障多。君爾不相而。年曾經來。

水乎多。上爾種蒔。此要乎多。擇擢之業曾。吾獨宿。
水を多み、あげに種蒔き、稗を多み、擇えし業ぞ、我獨り寢る。

靈合者。相宿物乎。小山田之。鹿猪田禁如。母之守爲裳。
靈合はば、相寢むものを、小山田の、しゝ田守る如、母し守らすも。

一云。母之守之師。

春日野爾。照有暮日之。外耳。君乎相見而。今曾悔寸。
春日野に、照れる夕日の、外のみに、君を逢見て、今ぞ悔しき。

足日木乃。從山出流。月待登。人爾波言而。妹待吾乎。
足引の、山より出づる、月待つと、人には言ひて、妹待つ我を。

玉襷云々—男女相逢ふことに譬ふ

はなやかに—假そめにあだあだしくの意ならんか

玉蘰—枕詞

懸けぬ時無く—心にかけぬ時なく

隔て編む數—一訓「重ね編む數」しげ〳〵との喩

花物—「物」は「疑」の誤か、一説もとのまゝにて「花もの」と訓む、髪飾の木綿は美しけれどあだ〳〵しきものにて賞するに足らずの義とす

白髪つく—枕詞

何時のまさかも云々—「まさか」は今さしあたりたる時、いつにても逢へる其時に、いひし言はたのもしと思はると也

石上—大和國山邊郡

たか〳〵に云々—妹が逢

玉手次。不懸者辛苦。懸垂者。續手見卷之。欲寸君可毛。

玉襷、懸けねば苦し。懸けたれば、繼ぎて見まくの、欲しき君かも。

紫。綵色之蘰。花八香爾。今日見人爾。後將戀鴨。

紫に、染めてし蘰、はなやかに、今日見る人に、後戀ひむかも。

玉蘰。不懸時無。戀友。何如妹爾。相時毛名寸。

玉蘰、懸けぬ時無く、戀ふれども、如何にぞ妹に、逢ふ時も無き。

相因之。出來左右者。疊薦。重編數。夢西將見。

逢ふ由の、出で來むまでは、疊薦、隔て編む數、夢にし見てむ。

白香付。木綿者花物。事社者。何時之眞坂毛。常不所忘。

白髪つく、木綿は花かも。言こそは、何時のまさかも、常忘らえね。

石上。振之高橋。高高爾。妹之將待。夜曾深去家留。

石上、布留の高橋、たかぐに、妹が待つらむ。夜ぞ更けにける。

思ひ見て—色々に思ひ試みて、樣々と思案して見て
弛べぬ—一訓「ゆるさぬ」
丈夫や—男子にして而も何ぞ
末中ためて—(一)男の中頃ためらひて通はずなりしに譬ふ(二)二句三句の本文は「すゑのなかごろよどめりし」と訓むべし
ゆるしみ—一訓「ゆるべみ」
絡染—絲を卷く具
打麻—美しき麻、又擣ちたる麻
うむ—績む=倦む、上の三句は此語の序
垂乳根の云々—上三句は「いぶせく」の序

梓弓。引見縱見。思見而。既心齒。因爾思物乎。
梓弓、引きみ弛べみ、思ひ見て、既に心は、寄りにしものを。
梓弓。引而不縱。丈夫哉。戀云物乎。忍不得牟。
梓弓、引きて弛べぬ、丈夫や、戀とふものを、忍び兼ねてむ。
梓弓。末中一伏三起。不通有之。君者會奴。嘆羽將息。
梓弓、末中ためて、絶えだりし、君には逢ひぬ。嘆きは止めむ。
今更。何牡鹿將念。梓弓。引見縱見。緣西鬼乎。
今更に、何しか思はむ。梓弓、引きみゆるしみ、寄りにしものを。
媙嬬等之。續麻之多田有。打麻懸。續時無二。戀度鴨。
少女らが、續苧の絡染、打麻懸け、うむ時無しに、戀ひ渡るかも。
垂乳根之。母我養蚕乃。眉隱。馬聲蜂音石花蜘蟵荒鹿。異母二不相而。
垂乳根の、母が飼ふ蠶の、繭籠、いぶせくもあるか。妹には逢はずて。

眞十鏡—枕詞

懸けて忍びつ—逢ふ人毎に必ず君の事を思ひ出し心にかけて思ふと也

針はあれど云々—紐が我をなやましなぶる樣に絶ゆると也、旅にてよめるなるべし

高麗劒—枕詞

劒太刀—枕詞

まさか—今さしあたりなる時

眞十鏡、見飽かぬ妹に、逢はずして、月の經ぬれば、生けりとも無し。

祝部等之。齋三諸乃。犬馬鏡。懸而偲。相人毎。
祝部等が、齋ふ三室の、眞十鏡、懸けて忍びつ。逢ふ人毎に。

針者有杼。妹之無者。將著哉跡。吾乎令煩。絶紐之緒。
針はあれど、妹し無ければ、著けめやと、我を惱し、絶ゆる紐の緒。

高麗劒。己之景迹故。外耳。見乍哉君乎。戀度奈牟。
高麗劒、我が心ゆゑ、外のみに、見つゝや君を、戀ひ渡りなむ。

劒太刀。名之惜毛。吾者無。比來之間。戀之繁爾。
劒太刀、名の惜しけくも、我は無し。此の頃の間の、戀の繁きに。

梓弓。末者師不知。雖然。眞坂者君爾。緣西物乎。
梓弓、末はし知らず。然れども、まさかは君に、寄りにしものを。

一本歌云。梓弓。末乃多頭吉波。雖不知、心者君爾。因之物乎。

眞玉附く—枕詞
遠近兼ねて云々—こし方行く末をかねて契りつゝ云々
帶—下紐のこと
高麗錦—枕詞
紐の結—二人して結びし紐
紫……紐の—「色に出でず」の序
紐の緒の云々—輪紐へ長紐をさし入れて結ぶを以て譬とす
眞十鏡—枕詞
我が形見云々—(一)我が形見なる此の眞十鏡を手に持ちて向はん時に逢はん(二)本文「辰」は「君」の誤にて「もたらむ君に」也、我が形見を持ちたらん君に逢はざることあらんやはの意
見てばこそ—見てあらばこそ

紫の、帶の結びも、解きも見ず、もとなや妹に、戀ひ渡りなむ。

高麗錦。紐之結毛。解不放。齋而待杼。驗無可聞。
高麗錦、紐の結も、解きさけず、齋ひて待てど、驗無きかも。

紫。我下紐乃。色爾不出。戀可毛將痩。相因乎無見。
紫の、我が下紐の、色に出でず、戀ひかも痩せむ。逢ふ由を無み。

何故可。不思將有。紐緒之。心爾入而。戀布物乎。
何故か、思はずあらむ。紐の緒の、心に入りて、戀しきものを。

眞十鏡。見座吾背子。吾形見。將持辰爾。將不相哉。
眞十鏡、見ませ我が背子、我が形見、持たらむ時に、逢はざらむかも。

眞十鏡。直目爾君乎。見者許増。命對。吾戀止目。
眞十鏡、直目に君を、見てばこそ、命に對ふ、我が戀止まめ。

犬馬鏡。見不飽妹爾。不相而。月之經去者。生友名師。

の序、「あらぞめ」は「退紅」「荒染」「桃花褐」等の字を當てたり、あらく一度染めたる薄紅にて即ちもろ色也
淺らかに―初めは事もなくたゞかりそめに思ひしといふ意ならん
年の經ば云々―旅に年へて、妹の縫ひし衣を見て歎く歌ならん
裏も無く―心に表裏もなく打ちとけてある
解衣の―枕詞
逢はむものかも―「かも」は「かは」の意
大君の云々―鹽は公の御物なる事、田租に均しければ斯くいふならん
赤衣の―枕詞
ひた裏衣―表裏同じ赤色なる衣
長く欲り―眞淵は、本文「長」―は「著」の誤にて「きまくほり」か、この男常にかかる衣を著て通ひしよりかく相共に其の衣を著て寢まほしと思ふなりといへど、いかゞ、すそ長からん事を欲する意より末長く相思ひたき義に通はしいへるならん

橡の、一重衣の、裏も無く、あらむ兒ゆゑに、戀ひ渡るかも。

解衣之。念亂而。雖戀。何之故其跡。問人毛無。
解衣の、思ひ亂れて、戀ふれども、何の故ぞと、問ふ人も無し。

桃花褐。淺等乃衣。淺爾。念而妹爾。將相物香裳。
あらぞめの、淺らの衣、淺らかに、思ひて妹に、逢はむものかも。

大王之。鹽燒海部乃。藤衣。穢者雖爲。彌希將見毛。
大君の、鹽燒く海人の、藤衣、馴れはすれども、いや珍しも。

赤帛之。純裏衣。長欲。我念君之。不所見比者鴨。
赤衣の、ひた裏衣、長く欲り、我が思ふ君が、見えぬ頃かも。

眞玉就。越乞兼而。結鶴。言下紐之。所解日有米也。
眞玉附く、遠近兼ねて、結びつる、我が下紐の、解くる日あらめや。

紫。帶之結毛。解毛不見。本名也妹爾。戀度南。

斯くのみに云々—斯くばかり疎き心の君にてありけるものを

橡—橡色、身分卑き人の衣の色

袷衣の—袷は裏あれば裏といはん料に用ひたり

裏にせば—(一)專らとせぬにたとふ(二)本文「爲」は「有」の誤にて「あはせのころもうらにあらば」と訓む、うらとは疑ひあやぶむ事にて、卽ち今宵逢ふこと疑はしくあやぶまるれば云々の意(三)本文「爾爲」は「有志」の誤にて「あはせのころも裏し有らば」と訓む、心に裘裏あらばの義とす

強ひめやも—來ませと也

あらぞめ衣—「淺らかに」

白妙の、袂豊く、人の寢る、熟睡は寢ずや、戀ひ渡りなむ。

寄レ物陳レ思

如是耳。在家流君乎。衣爾有者。下毛將著跡。吾念有家留。

斯くのみに、ありける君を、衣ならば、下にも著むと、我が思へりける。

橡之。袷衣。裏爾爲者。吾將強八方。君之不來座。

橡の、袷衣の、裏にせば、我強ひめやも。君が來まさぬ。

紅。薄染衣。淺爾。相見之人爾。戀比日可聞。

紅の、あらぞめ衣、淺らかに、逢見し人に、戀ふる頃かも。

年之經者。見管偲登。妹之言思。衣乃縫目。見者哀裳。

年の經ば、見つゝ忍べと、妹が言ひし、衣の縫目、見れば悲しも。

橡之。一重衣。裏毛無。將有兒故。戀渡可聞。

常に見えこそ―一訓「やまず見えこそ」絶えず見えよかしの意

所見而―「而」は一本「與」

言絶えにたり―一訓「言絶えにけり」

空蟬の―枕詞

心遮焉―「遮焉」官本「遲鳥」何れもいかゞ、眞淵は「慰焉」の誤にて「なぎぬ也」といひ、荒木田久老は「迷焉」の誤にて「心まよひぬ」と訓ずべしといひ、古義はそれに從ひて「心まどひぬ」と訓じたり

袖不數而宿―「數」は「卷」の誤か、一本「而」無き方宜しと略解にいへり、古義には「袖かれてぬる」と訓ぜり

人見而。言害目不爲。夢谷。不止見與。我戀將息。
人の見て、言咎せぬ、夢にだに、常に見えこそ。我が戀止まむ。

或本歌頭云。人目多。直者不相。

現者。言絶有。夢谷。嗣而所見而。直相左右二。
現には、言絶えにたり。夢にだに、繼ぎて見えこそ、直に逢ふまでに。

虛蟬之。宇都思情毛。吾者無。妹乎不相見而。年之經去者。
空蟬の、うつし心も、我は無し。妹を相見ずて、年の經ぬれば。

虛蟬之。常辭登。雖念。繼而之聞者。心遮焉。
空蟬の、常の言葉と、思へども、繼ぎてし聞けば、心は和ぎぬ。

白細之。袖不數而宿。烏玉之。今夜者早毛。明者將開。
白妙の、袖まかず寢る、ぬば玉の、今宵は早も、明けば明けなむ。

白細之。手本寛久。人之宿。味宿者不寢哉。戀將渡。

にての事なるべし
解かまく惜しも―其男今は絶えたれど、又他し男の爲に解かんは心ゆかぬとなるべし
君乎母准其思―「准」は衍文か、又「母」が衍、「准」は「進」の誤にて「君をしぞもふ」か、又眞淵は「母准」は「羅」の誤にて「きみをちそもふ」といへり
今よりは云々―今よりは君が絶えて逢はじとすればにや
夢可登―下に「毛」を脱せしか
情班―「班」は「怪」の誤にて「こゝろあやしも」か、又「まどひぬ」と訓ずるかともいへどいかゞ
月數多二―官本「二」の字なし、「つきまねく」と訓むべし
年月かねて―年月かさねての意

吾齡之。衰去者。白細布之。袖乃狎爾思。君乎母准其思。
我が齡し、衰へぬれば、白妙の、袖のなれにし、君をもぞ思ふ。
戀君。吾哭涕。白妙。袖兼所漬。爲便母奈之。
君に戀ひ、我が泣く涙、白妙の、袖さへ濡れて、せむ術も無し。
從今者。不相跡爲也。白妙之。我衣袖之。干時毛奈吉。
今よりは、逢はじとすれや、白妙の、我が衣手の、干る時も無き。
夢可登。情班。月數多二。干西君之。事之通者。
夢かと、心別かめや。月さはに、離れにし君が、言の通ふは。
未玉之。年月兼而。烏玉乃。夢爾所見。君之容儀者。
新玉の、年月かねて、ぬば玉の、夢にぞ見ゆる、君が姿は。
從今者。雖戀妹爾。將相哉母。床邊不離。夢所見乞。
今よりは、戀ふとも妹に、逢はめやも。床の邊さらず、夢に見えこそ。

念西。餘西鹿歯。爲便乎無美。吾者五十日手寸。應忌鬼尾。

思ふにし、餘りにしかば、術を無み、我は言ひてき。忌むべきものを。

或本歌曰。門出而。吾反側乎。人見監可毛。一云。無乏。出行。家當見。

柿本朝臣人麻呂歌集云。爾保鳥之。奈津柴比來乎。人見鴨。

明日者。其門將去。出而見與。戀有容儀。數知兼。

明けむ日は、其の門行かむ、出でて見よ。戀ひたる姿、數多著けむ。

得田價異。心欝悒。事計。吉爲吾兄子。相有時谷。

疑へる、心いぶせし。事計り、よくせ我が背子、逢へる時だに。

吾妹子之。夜戸出乃光儀。見之從。情空成。地者雖踐。

我妹子が、夜戸出の姿、見てしより、心空なり。地は踏めども。

海石榴市之。八十衢爾。立平之。結紐乎。解巻惜毛。

つば市の、八十の衢に、立ちならし、結びし紐を、解かまく惜しも。

我は言ひてき―忍妻の名を也、此歌巻十一にも四の句「人に語りつ」と變れるのみにて出でたり

明けむ日は―一訓「あすの日は」又「あすはその」

其の門行かむ―一訓「門まかりなむ」

戀ひたる姿云々―我が戀にやつれたる姿は頗る著しからん

得田價異―「異」は「累」の誤か、古義の一訓「うたてけに」

見之從―一本「見」の下に「而」あり

つば市―大和國

結びし紐―つば市の歌垣

行けば—一訓「ぬれば」

みどり兒の—一訓「わかきこの」寢ねがてなくは—寢ねかぬるのは

我命之—「之」一本「乎」(チ)

執許乎—一説「執」は「報」の誤にて「むくゆばかりを」か

我が命云々—一首の意は、我が命の長くはしいのは他にあらず、逢ふ逢ふとばかり言ひて一向逢ひもせぬうそつきを捕へてひどい目にあはせん爲のみ、との意ならんか

人言を云々—此歌、人麻呂集の書體也、亂れてここにまじりたるなるべしといふ

玉梓の—枕詞

外目にも云々—よそ目に見るだによき子なるを、我物とせんは何時の事にやと也

見るは—一訓「見れば」

念八流。跡狀毛我者。今者無。妹二不相而。年之經行者。

思遣る、たどきも我は、今は無し。妹に逢はずて、年の經行けば。

吾兒子爾。戀跡二四有四。小兒之。夜哭乎爲乍。宿不勝苦者。

我が背子に、戀ふとにしあらし。みどり兒の、夜泣をしつゝ、寢ねがてなくは。

我命之。長欲家口。僞乎。好爲人乎。執許乎。

我が命の、長く欲しけく、僞を、よくする人を、執ふばかりを。

人言。繁跡妹。不相。情裏。戀比日。

人言を、繁みと妹に、逢はずして、心のうちに、戀ふる此の頃。

玉梓之。君之使乎。待之夜乃。名凝其今毛。不宿夜乃大寸。

玉梓の、君が使を、待ちし夜の、名殘ぞ今も、寢ねぬ夜の多き。

玉梓之。道爾行相而。外目耳毛。見者吉子乎。何時鹿將待。

玉梓の、道に行き逢ひて、外目にも、見るはよき兒を、何時とか待たむ。

命知らずて―限有る命も知らずして

白妙の云々―袖折返して寢れば思ふ人を妻に見ること前にも出づ

戀と言へば―戀とのみいふ時はたやすく薄きが如しの意

死には―一訓「死なば」出づる日の云々―朝夕の分ちも知らず一心に戀ふと也

璞之。年緒永。何時左右鹿。我戀將居。壽不知而。
新玉の、年の緒長く、何時までか、我が戀ひ居らむ。命知らずて。

今者吾者。指南與我兄。戀爲者。一夜一日毛。安毛無。
今は我は、死なむよ我が背。戀すれば、一夜一日も、安けくも無し。

白細布之。袖折反。戀者香。妹之容儀乃。夢二四三湯流。
白妙の、袖折返し、戀ふればか、妹が姿の、夢にし見ゆる。

人言乎。繁三毛人髪三。我兄子乎。目者雖見。相因毛無。
人言を、繁みこちたみ、我が背子を、目には見れども、逢ふ由も無し。

戀云者。薄事有。雖然。我者不忘。戀者死十方。
戀と言へば、薄きことなり。然れども、我は忘れじ、戀ひは死ぬとも。

中中二。死者安六。出日之。入別不知。吾四久流四毛。
なか〱に、死には安けむ。出づる日の、入る別知らぬ、我し苦しも。

夕夕—訓「よひ〳〵」に
若雲—「けだしくも」と訓むべし
生ける世に—現世に於て、今までに
戀の中にも—戀といふ中にも殊に
空蟬の—枕詞
あぢさはふ—枕詞
携はり云々—狎れ親み打解けて言葉を交はす事もなきが苦しと也

夕夕。吾立待爾。若雲。君不來益者。應辛苦。
夕々、我立ち待つに、若しくも、君來まさずは、苦しかるべし。

生代爾。戀云物乎。相不見者。戀中爾毛。吾曾苦寸。
生ける世に、戀とふものを、逢ひ見ねば、戀の中にも、我ぞ苦しき。

念管。座者苦毛。夜干玉之。夜爾至者。吾社湯龜。
思ひつゝ、居れば苦しも。ぬば玉の、夜になりなば、我こそ行かめ。

情庭。燎而念杼。虚蟬之。人目乎繁。妹爾不相鴨。
心には、燃えて思へど、空蟬の、人目を繁み、妹に逢はぬかも。

不相念。公者雖座。肩戀丹。吾者衣戀。君之光儀。
相思はず、君はまさめど、片戀に、我はぞ戀ふる、君が姿を。

味澤相。目者非不飽。携。不問事毛。苦勞有來。
あぢさはふ、目には飽けども、携はり、言問はなくも、苦しかりけり。

直—直に也「逢はめど」の助詞

世の程に—生きてある内に、古訓は「よのなかに」この訓義は宣長說を略解に採用せる也

乳飮めや—乳飮めばにや、略解には「もと逢ひし女はかれて、男の今乳母とことばして、他女をよばふことと有る時、前の女の聞きて、戲れて贈れるなるべし」といひ、古義には「ねびたる女を男の戀想する時、其女の自らを乳母に比へてよめるなるべし」といふ

うらぶれて—侘びて、又、はれ〳〵と戀ひかなしみて

おのがじし—各自、古義には、こゝなるは、己れ自らの心からの意といへり

人死なすらし—この人は自己をさす

直今日毛。君爾波相目跡。人言乎。繁不相而。戀度鴨。

直今日も、君には逢はめど、人言を、繁み逢はずて、戀ひ渡るかも。

世間爾。戀將繁跡。不念者。君之手本乎。不枕夜毛有寸。

世の程に、戀繁けむと、思はねば、君が袂を、まかぬ夜もありき。

綠兒之。爲社乳母者。求云。乳飮哉君之。於毛求覽。

みどり兒の、爲めこそ乳母は、求むとへ。乳飮めや君が、乳母求むらむ。

悔毛。老爾來鴨。我背子之。求流乳母爾。行益物乎。

悔しくも、老いにけるかも。我が背子が、求むる乳母に、行かましものを。

浦觸而。可例西袖叫。又卷者。過西戀也。亂今可聞。

うらぶれて、離れにし袖を、又まかば、過ぎにし戀や、亂れ來むかも。

各寺師。人死爲良思。妹爾戀。日異羸沼。人丹不所知。

おのがじし、人死なすらし。妹に戀ひ、日にけに痩せぬ。人に知らえず。

年者近侵—「侵」は「浸」の誤か、一本「綅」然れば「としはちかきを」と訓むべし、これ可也
言擧せず—かれこれいふ事もなしに

幼婦者—一說「紐緒之」（ヒモノヲノ）の誤か

思へこそ—思へばこそ

寤香。妹之來座有。夢可毛。吾香惑流。戀之繁爾。
現にか、妹が來ませる、夢にかも、我が惑へる。戀の繁きに。
大方者。何鴨將戀。言擧不爲。妹爾依宿牟。年者近侵。
大方は、何かも戀ひむ。言擧せず、妹に寄り寢む、年は近づく。
二爲而。結之紐乎。一爲而。吾者解不見。直相及者。
二人して、結びし紐を、一人して、我は解き見じ。直に逢ふまでは。
終命。此者不念。唯毛。妹爾不相。言乎之曾念。
死なむ命、こゝは思はず。直にしも、妹に逢はざる、事をしぞ思ふ。
幼婦者。同情。須臾。止時毛無久。將見等曾念。
少女子は、同じ心に、暫くも、止む時も無く、見なむとぞ思ふ。
夕去者。於君將相跡。念許憎。日之晩毛。悞有家禮。
夕さらば、君に逢はむと、思へこそ、日の暮るらくも、嬉しかりけれ。

少くも云々—心の内には一方ならず思ふものをと也

夢に我が云々—遊仙窟「今宵莫閉戸、夢裏向渠邊」この意也

あらずは—あらんよりは

念吾妹乎—一說「吾念妹乎」とあるべし

うるはしと—一訓「うつくしと」

しかすがに—しかしながら、さすがに

玉かつま—枕詞

誰なるか—誰なるぞ他なし即ち汝ならずや然るに何ぞの意

人目多見。眼社忍禮。小毛。心中爾。吾念莫國。
人目多み、眼こそ忍ぶれ。少くも、心の中に、我思はなくに。

人見而。事害目不爲。夢爾吾。今夜將至。屋戸閉勿勤。
人の見て、事咎せぬ、夢に我が、今宵至らむ。屋戸差すなゆめ。

何時左右二。將生命曾。凡者。戀乍不有者。死上有。
何時までに、生かむ命ぞ、大方は、戀ひつゝあらずは、死ぬるまされり。

愛等。念吾妹乎。夢見而。起而探爾。無之不怜。
うるはしと、思ふ我妹を、夢に見て、起きて探るに、無きが淋しさ。

妹登日者。無禮恐。然爲蟹。懸卷欲。言爾有鴨。
妹と言へば、なめし畏し。しかすがに、懸けまく欲しき、ことにあるかも。

玉勝間。相登云者。誰有香。相有時左倍。面隱爲。
玉かつま、逢はむと言ふは、誰なるか。逢へる時さへ、面隱せす。

息づく―長太息す

人に知らえず―思ふ人に知られず

他國に云々―古事記の、八千矛の神高志國の沼河比賣を婚(ヨバ)はんとて其家に至りて詠める歌の大意を取れる也

解かねば―解かぬに

さとき心―利き心

戀ふるは―一訓「戀ふれば」

暫くも―一訓「しましくも」

大凡に―一訓「おほろかに」

幾。不生有命乎。戀管曾。吾者氣衝。人爾不所知。

幾何も、生けらじ命を、戀ひつゝぞ、我は息づく。人に知らえず。

他國爾。結婚爾行而。太刀之緒毛。未解者。左夜曾明家流。

他國に、よばひに行きて、太刀が緒も、未だ解かねば、小夜ぞ明けにける。

丈夫之。聰神毛。今者無。戀之奴爾。吾者可死。

丈夫の、さとき心も、今は無し。戀の奴に、我は死ぬべし。

常如是。戀者辛苦。暫毛。心安目六。事計爲與。

常斯くし、戀ふるは苦し。暫くも、心休めむ、事計せよ。

凡爾。吾之念者。人妻爾。有云妹爾。戀管有米也。

大凡に、我し思はば、人妻に、ありとふ妹に、戀ひつゝあらめや。

心者。千重百重。思有杼。人目乎多見。妹爾不相可母。

心には、千重に百重に、思へれど、人目を多み、妹に逢はぬかも。

なか〳〵に云々―寧ろもだして逢はずあるべかりし物を

茜さす―枕詞
日の暮れ行けば―一訓「日の暮れぬれば」

令掻管―下に「毛」を脱せしか

いとのきて―いとゞしく、本文「太」は「天」の誤

中中。默然毛有申尾。小豆無。相見始而毛。吾者戀香。
なか〳〵に、默もあらましを、あぢきなく、逢見初めても、我は戀ふるか。

吾妹子之。咲眉引。面影。懸而本名。所念可毛。
我妹子が、笑める眉引、面影に、懸りてもとな、思ほゆるかも。

赤根指。日之暮去者。爲便乎無三。千遍嘆而。戀乍曾居。
茜さす、日の暮れ行けば、術を無み、千度嘆きて、戀ひつゝぞ居る。

吾戀者。夜晝不別。百重成。情之念者。甚爲便無。
我が戀は、夜晝別かず、百重なす、心し思へば、いたも術無し。

五十殿寸太。薄寸眉根乎。徒。令掻管。不相人可母。
いとのきて、薄き眉根を、徒に、掻かしめつゝも、逢はぬ人かも。

戀戀而。後裳將相常。名草漏。心四無者。五十寸手有目八面。
戀ひ〳〵て、後も逢はむと、慰もる、心し無くは、生きてあらめやも。

君ゆゑに―君なるものを

聞きしより―妹が上の事を也

去にし月―前月

空消生―「生」は「共」の誤にて「そらに消ぬとも」か、死すともといふ誓言なるべし

泡沫も―危くはかなびにも我しあれば―我が斯くてあるからは汝をうち捨つることはせじとの意か

如何ならむ云々―如何なる日如何なる時にかの意

玉襷―枕詞

事計もが―工夫もあれかし

朝去而。暮者來座。君故爾。忌々久毛吾者。歎鶴鴨。
朝去にて、夕は來ます、君ゆゑに、由々しくも我は、歎きつるかも。

從聞。物乎念者。我胸者。破而摧而。鋒心無。
聞きしより、物を思へば、我が胸は、割れて碎けて、利心も無し。

人言乎。繁三言痛三。我妹子二。去月從。未相可母。
人言を、繁みこちたみ、我妹子に、去にし月より、未だ逢はぬかも。

歌方毛。曰管毛有鹿。吾有者。地庭不落。空消生。
泡沫も、言ひつゝもあるか、我しあれば、地には落ちじ、空に消なまし。

何。日之時可毛。吾妹子之。裳引之容儀。朝爾食爾將見。
如何ならむ、日の時にかも、我妹子が、裳引の姿、朝にけに見む。

獨居而。戀者辛苦。玉手次。不懸將忘。言量欲。
獨り居て、戀ふれば苦し。玉襷、懸けず忘れむ、事計もが。

世の中の云々—世間の常套語

夢に云々—夢に見えては夢に見え幾度も繰返して見ゆる事ならん

不相數多—「相」の下「日」を脱せしか、さらば「あはぬひまねく」

思遣る—思をやり過すべき

立居。田時毛不知。吾意。天津空有。土者踐鞆。
立ちて居る、たどきも知らに、我が心、天つ空なり。地は踏めども。

世間之。人辭常。所念莫。眞曾戀之。不相日乎多美。
世の中の、人の言葉と、思ほすな。誠ぞ戀ひし、逢はぬ日を多み。

乞如何。吾幾許戀流。吾妹子之。不相跡言流。事毛有莫國。
いで如何に、我が幾許戀ふる、我妹子が、逢はじと言へる、こともあらなくに。

夜干玉之。夜乎長鴨。吾背子之。夢爾夢西。所見還良武。
ぬば玉の、夜を長みかも。我が背子が、夢に夢にし、見えかへるらむ。

荒玉之。年緒長。如此戀者。信吾命。全有目八目。
新玉の、年の緒長く、斯く戀ひば、誠我が命、全からめやも。

思遣。爲便乃田時毛。吾者無。不相數多。月之經去者。
思遣る、爲のたどきも、我は無し。逢はずてまねく、月の經ぬれば。

或本歌云。君之目不見而。月之經去者。

不相而。戀度等母。忘哉。彌日異者。思益等母。

逢はずして、戀ひ渡るとも、忘れめや。彌日にけには、思ひますとも。

外目毛。君之光儀乎。見而者社。吾戀山目。命不死者。

外目にも、君が姿を、見てばこそ、我が戀止まめ。命死なずは。

一云。壽向。吾戀止目。

戀管母。今日者在目杼。玉匣。將開明日。如何將暮。

戀ひつゝも、今日はあらめど、玉櫛笥、明けむあしたを、如何で暮さむ。

左夜深而。妹乎念出。布妙之。枕毛衣世二。嘆鶴鴨。

小夜更けて、妹を思ひ出て、敷妙の、枕もそよに、嘆きつるかも。

他言者。眞言痛。成友。彼所將障。吾爾不有國。

人言は、誠こちたく、なりぬとも、そこに障らむ、我ならなくに。

明日―宣長說「明旦」の誤か、もとのまゝ「あすのひ」と訓ずべからん

玉櫛笥―枕詞

枕もそよに―「そよ」は鳴る音

そこに云々―それに障へらるべき我ならんや

里近く、家や居るべき。此の我がめの、人目をしつゝ、戀の繁けく、

何時奈毛。不戀有登者。雖不有。得田直比來。戀之繁母。

何時はなも、戀ひずありとは、あらねども、うたて此の頃、戀の繁きも。

黑玉之。宿而之晩乃。物念爾。割西胷者。息時裳無。

ぬば玉の、寢ねてし宵の、物思に、裂けにし胸は、止む時も無し。

三空去。名之惜毛。吾者無。不相日數多。年之經者。

み空行く、名の惜しけくも、我はなし。逢はぬ日まねく、年の經ぬれば。

得管二毛。今見牡鹿。夢耳。手本纒宿登。見者辛苦毛。

現にも、今も見てしが。夢のみに、袂まきぬと、見るは苦しも。

或本歌發句云。吾妹兒乎。

立而居。爲便乃田時毛。今者無。妹爾不相而。月之經去者。

立ちて居る、術のたどきも、今は無し。妹に逢はずて、月の經ぬれば。

もとのまゝにても、人目を怖れ憚る意の古語として通ずべきか

里近く云々—男女近きわたりに家居して居る故に却て人目を憚るの意

何時奈毛—一說「奈」は「忘」の誤にて「いつはしも」

裂けにし—一訓「割れにし」

み空行く云々—名の高く立つをいふ

逢はぬ日まねく—逢はぬ日多く

見てしが—見たきかな

立ちて居る—立ちてもゐても

我が背子が、來なむと言ひし、夜は過ぎぬ。しゑやさら〱、しこり來めやも。

人言之。讒乎聞而。玉桙之。道毛不相常。云吾妹。
人言の、よこすを聞きて、玉桙の、道にも逢はじと、言へる我妹子。

不相毛。懈常念者。彌益二。人言繁。所聞來可聞。
逢はなくも、うしと思へば、いやましに、人言繁く、聞え來るかも。

里人毛。謂告我禰。縱咲也思。戀而毛將死。誰名將有哉。
里人も、語り繼ぐがね、よしゑやし、戀ひても死なむ。誰が名ならめや。

慥。使乎無跡。情乎曾。使爾遣之。夢所見哉。
慥なる、使を無みと、心をぞ、使に遣りし、夢に見えきや。

天地爾。少不至。丈夫跡。思之吾耶。雄心毛無寸。
天地に、少し至らぬ、丈夫と、思ひし我や、男心も無き。

里近。家哉應居。此吾目之。人目乎爲乍。戀繁口。

來なむと言ひし―一訓「來むと語りし」

しこり來めやも―(一)「しこり」はしかありの約言(二)しきりの轉、頻に同じ(三)古義は「しこり」はしくじりの義にて「過りて來そこなひにも來らんや」の義といへり

道毛云々―宣長說「常」は「絕」、「云」は「去」の誤にて「みちにもあはずたえにしわぎも」か

よこす―よこしまごとをする

逢はなくも―逢はぬをも

誰が名ならめや―妹が相思はぬ故ぞといふ名こそ專ら立ための意

天地に云々―天地に今少しにて行足はすはどの丈夫の意

人目乎爲乍―「乎爲」は「毛里」の誤にて「ひとめもりつゝ」か、眞淵の說あれど、

玉釧—枕詞

宵の長きも—宵は夜のこと、一訓「夜の長けくも」

酢衣—「酢」は「作」「佐」などの誤にてもあるか

人妻—自らをさしていふ、紐とけといふを深く咎めたる歌也

ゆたに—寛かに、ゆつくりと寢て

思へこそ—思へばこそ

我背子を、今か〳〵と、待ち居るに、夜の更けぬれば、嘆きつるかも。

玉釧。卷宿妹母。有者許增。夜之長毛。歡有倍吉。

玉釧、まき寢る妹も、あらばこそ、宵の長きも、嬉しかるべき。

人妻爾。言者誰事。酢衣乃。此紐解跡。言者孰言。

人妻に、言ふは誰がこと。狹衣の、此の紐解けと、言ふは誰がこと。

如是許。將戀物其跡。知者。其夜者由多爾。有益物乎。

斯くばかり、戀ひむものぞと、知らませば、其の夜はゆたに、あらましものを。

戀乍毛。後將相跡。思許增。己命乎。長欲爲禮。

戀ひつゝも、後に逢はむと、思へこそ、己が命を、長く欲すれ。

今者吾者。將死與吾妹。不相而。念渡者。安毛無。

今は我は、死なむよ我妹、逢はずして、思ひ渡れば、安けくも無し。

我背子之。將來跡語之。夜者過去。思咲八更更。思許理來目八面。

小松の云々―(一)大なる巖の上に生ふる松は目立つものなれば名に顯るゝ譬とせるか(二)我妹子に譬へしか(三)小松の根より音轉にて「名」に係りたるか
水陰―「陰」一本「隱」「みごもり」とも訓むべし
妹が―妹の事の
立神古―略解に訓なし、今「立神左古」の「左」脱といふ古義の説によりて姑く訓を加へたり、眞淵は「神古」は「神有」の誤にて「たちしなひたる」かといへり、古點「たつみわこすげ」ともあれど、元よりいかゞはし
あさば野―武藏國入間郡麻羽か

礒上。生小松。名惜。人不知。戀渡鴨。
石の上に、生ふる小松の、名を惜み、人に知らえず、戀ひ渡るかも。
或本歌曰。巖上爾。立小松。名惜。人爾者不云。戀渡鴨。

山河。水陰生。山草。不止妹。所念鴨。
山川の、水陰に生ふる、山菅の、止まずも妹が、思ほゆるかも。

浅葉野。立神古。菅根。惻隱誰故。吾不戀。
あさば野に、立ち神さぶる、菅の根の、懇誰故、我が戀はなくに。
或本歌曰。誰葉野爾立志奈比垂。

右二十三首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

正述二心緒一

吾背子乎。且今且今跡。待居爾。夜更深去者。嘆鶴鴨。

新治の、今造る道の、さやかにも、聞きにけるかも。妹が上の事を。

山代。石田杜。心鈍。手向爲在。妹相離。

山城の、石田の森に、心おそく、手向したれや、妹に逢ひ難き。

菅根之。惻隱惻隱。照日。乾哉吾袖。於妹不相爲。

菅の根の、懇ごろに、照る日にも、干めや我が袖、妹に逢はずして。

妹戀。不寢朝。吹風。妹經者。吾共經。

妹に戀ひ、寢ねぬ朝に、吹く風し、妹に觸れなば、我がむたに觸れね。

飛鳥河。高河避紫。越來。信今夜。不明行哉。

飛鳥川、高川よがし、越えて來つ。誠今宵は、明けず行かめや。

八釣河。水底不絕。行水。續戀。是比歲。

八釣川、水底絶えず、行く水の、繼ぎてぞ戀ふる、此の年頃を。

或本歌曰。水尾母不絕。

戀結び—戀のかための爲に神かけて誓ふ時の一つの習はしなりしならん

新治……道の—「さやか」の序

さやかにも—明かに、しつかりと

石田の森—山城國久世郡

手向したれや—手向したればにや

菅の根の—枕詞

我がむたに觸れね—我にも共に吹けかし

高川よがし—高川は水の出でたる時の川、よがしは過(ヨ)ぎの延言、男の歌也、然るに古義は「よがし」はよけ給ひの義とし、三句以下を「越え來しをまこと今宵を明けずやらめや」として、女の歌とせり

八釣川—大和國高市郡

下紐開けて―下紐の解くるは人に逢はん前兆とせるが故に、自ら解きても或は逢ひ得る事もあらんと思ひて也

我妹子が―一訓「我妹子し」

眞玉附く―枕詞、本文「眼」は「附」の誤か、一本「服」遠方をし兼ねて云々―むりなることをなさば末あしかるべきによりて、遠きをかね思ふ故に云々、宣長說「遠」の下に「近」を脫して「をちこちかねて」とあるべし

我が紐の緒の云々―下紐の絶ゆるは人と絶ゆる前兆といへり

現には、直にも逢はず。夢にだに、逢ふと見えこそ。我が戀ふらくに。

寄レ物陳レ思

人所見。表結。人不見。裏紐開。戀日太。

人見れば、上を結びて、人見ねば、下紐開けて、戀ふる日ぞ多き。

人言。繁時。吾妹。衣有。裏服矣。

人言の、繁き時に、我妹子が、衣にありせば、下に著ましを。

眞珠眼。遠兼。念。一重衣。一人服寢。

眞玉附く、遠方をし兼ねて、思へれば、一重衣を、一人著て寢ぬ。

白細布。我紐緒。不絶間。戀結爲。及相日。

白妙の、我が紐の緒の、絶えぬ間に、戀結びせむ。逢はむ日までに。

新治。今作路。淸。聞鴨。妹於事矣。

べし、「新」はアラタ「惜」はアタラにてもとより異言なりとの古義の說正しと思はる
うるはしと―一訓「うつくしと」
寢まくはれこそ―一訓「寢まくほりこそ」寢まほしく思へばこその意
夜も云々―一訓、二つの「じ」の字共に「ず」
有諾―一本「有」の下に「者」あり
彼夢―一說「彼」は「夜」の誤にて「よるのいめにを」と訓むべし
見え繼げや―一訓「見え繼ぐや」

忘哉。語。意遣。雖過不過。猶戀。
忘るやと、物語して、心遣り、過ぐせど過ぎず、猶ぞ戀しき。

夜不寢。安不有。白細布。衣不脫。及直相。
夜も寢じ、安くもあらじ、白妙の、衣も脫がじ。直に逢ふまで。

後相。吾莫戀。妹雖云。戀間。年經乍。
後も逢はむ、我をな戀ひそと、妹は言へど、戀ふる間に、年は經につゝ。

直不相。有諾。夢谷。何人。事繁。
直に逢はず、あるは宜なり。夢にだに、何しか人の、言の繁けむ。

或本歌曰。寢者。諸毛不相。夢左倍。

烏玉。彼夢。見繼哉。袖乾日無。吾戀矣。
ぬば玉の、其の夢にだに、見え繼げや。袖乾す日無く、我が戀ふらくを。

現。直不相。夢谷。相見與。我戀國。

朝明の姿―朝明に男が女の許より歸るすがた

望使念―(一)「望使」は「無便」の誤にて「すべなくも(へ)ば」か(二)「使」の下「美」を脫したるか、さらば初句の「等」は二の句につきて「ともしみも(へ)ば」其他にも說あれど、何れもいかゞ、尚可勘

新夜―略解に「新夜は新玉の誤にて枕詞なるべしと翁はいはれつれど、新夜は、集中に年月はあたらあたらにと有るあたらにて、毎夜といふ事なるべし」といへり、されど古義に辯じたる如く「あらたよ」と訓じ、經易り〳〵新まる夜と解するが然る

萬葉集卷第十二上

正述心緒

我背子之。朝明形。吉不見。今日間。戀暮鴨。

我が背子が、朝明の姿、よく見ずて、今日の間を、戀ひ暮すかも。

我心等。望使念。新夜。一夜不落。夢見。

我が心と、のぞみ思へば、あたらよの、一夜も落ちず、夢にし見ゆる。

與愛。我念妹。人皆。如去見耶。手不纏爲。

うるはしと、我が思ふ妹を、人皆の、行く如見めや。手にまかずして。

比日。寢之不寢。敷細布。手枕纏。寢欲。

此の頃の、寢の寢らえぬは、敷妙の、手枕まきて、寢まくほれこそ。

したるのみにて空しく思ひ亂れんとの喩ならん

河上……來て―末終に妹によらんといはん料にいへる也

斯くしてや―斯くなりがたくしてもや

なほやなりなむ―なほ終にはなりなん、一說に「なほ」はたゞに打過ぐる意の語にて思の叶はぬをいふなるべしといふ、本文「牛鳴」は牟(ム)の借字也

降らぬ雨ゆゑ―降らぬ雨なるものを

河上爾。洗若菜之。流來而。妹之當乃。瀬社因目。

河上に、洗ふ若菜の、流れ來て、妹があたりの、瀬にこそ寄らめ。

右四首。寄レ草喩レ思。

如是爲哉。猶八成牛鳴。大荒木之。浮田之杜之。標爾不有爾。

斯くしてや、なほやなりなむ。大荒木の、浮田の杜の、標ならなくに。

右一首。寄レ標喩レ思。

幾多毛。不零雨故。吾背子之。三名乃幾許。瀧毛動響二。

幾何も、降らぬ雨ゆゑ、我が背子が、御名の許多、瀧もとゞろに。

右一首。寄レ瀧喩レ思。

「山川の筌を守るとすれど、猶魚をぬすまるゝに譬へて、女の父母に忍びて男の通ふをいふ」といへり、古義の「わをぬすまひし」と訓じ、ぬすむは欺く意と解したる方然るべきか
すだく―多く群集する
儲溝―池に水の溢るゝ時流し遣らん爲に穿ち設けたる遣溝
むろふ―大和國宇陀郡に室生、城下郡に室原あり、その何れかなるべし
毛桃―桃の一種、毛桃の木の本繁くと續けて序とせる也
眞葛はふ―枕詞
心ゆも―他人の心ませかにして
人引かめやも―或は本文「引」は「苅」の誤にて「ひとからめやも」か
我ならなくに―一訓「我なけなくに」兼てしめ結び置きし我なるものを時到らば刈りて我物とせんと也
未だ苗なり―幼き女に喩ふ
編まなくに云々―我妻とも定め得ず只逢はんと約

葦鴨之。多集池水。雖溢。儲溝方爾。吾將越八方。
葦鴨の、すだく池水、溢るとも、儲溝のへに、我越えめやも。

右一首。寄レ水喩レ思。

日本之。室原乃毛桃。本繁。言大王物乎。不成不止。
大和の、むろふの毛桃、本繁く、言ひてしものを、ならずは止まじ。

右一首。寄レ菓喩レ思。

眞葛延。小野之淺茅乎。自心毛。人引目八面。吾莫名國。
眞葛はふ、小野の淺茅を、心ゆも、人引かめやも。我ならなくに。

三島菅。未苗在。時待者。不著也將成。三島菅笠。
三島菅、未だ苗なり。時待たば、著ずやなりなむ。三島菅笠。

三吉野之。水具麻我菅乎。不編爾。刈耳苅而。將亂跡也。
三吉野の、水隈が菅を、編まなくに、刈りのみ刈りて、亂りなむとや。

衣霜。多在南。取易而。著者也君之。面忘而有。
衣しも、多くあらなむ。取替へて、著なばや君が、面忘れたらむ。

右二首。寄レ衣喩レ思。

梓弓。弓束巻易。中見判。更雖引。君之隨意。
梓弓、弓束巻き替へ、中見ては、更に引くとも、君がまに〳〵。

右一首。寄レ弓喩レ思。

水沙兒居。渚座船之。夕鹽乎。將待從者。吾社益。
睢鳩居る、洲に居る船の、夕潮を、待つらむよりは、我こそまされ。

右一首。寄レ船喩レ思。

山河爾。筌乎伏而。不肯盛。年之八歳乎。吾竊舞師。
山川に、筌を伏せて、守り敢へず、年の八歳を、我が盗まひし。

右一首。寄レ魚喩レ思。

多く―一訓「さはに」
著なばや―一訓「きせばや」
君が―君をの意

中見ては―（一）弓束の革は巻きかふる時内を見るものなれば女をこころみるに譬ふ（二）本文「中見判」を「あてみては」と訓み、女の古りたりとて外の女に習へ見ても心ゆかず更に又我に寄るとも云云の意とす、何れにしてもこの句穏かならず、誤字あるべし
吾社益―古義にいへる如く「あれこそまさめ」「あこそまさらめ」何れかの訓然るべからん
睢鳩居る―枕詞
筌乎伏而―筌は魚を捕ふる具（一）「筌」を「かたみ」と訓まんか（二）「伏」の下「置」を脱せるにて「うへをふせおきて」か（三）「而」は「置」の誤にて「うへをふせおき」か
我が盗まひし―略解には

妹と居りてば—妹と居りたらば何の不足あらん

ありなぐさめて—年月共に相なぐさめ居しをと也、相馴れし夫の遠くへ旅立つ時の女の歌ならん　玉の緒の—枕詞

行ぬべく—一訓「ゆくべく」

人者見久爾—「者」は一本「之」の方正し　紅の云々—花やぎたる女なれば、疾く顯はれんとの喩

玉敷有。家毛何將爲。八重六倉。覆小屋毛。妹與居者。

玉敷ける、家も何せむ。八重葎、覆へる小屋も、妹と居りてば。

右二首。

如是爲乍。有名草目手。玉緒之。絕而別者。爲便可無。

斯くしつゝ、あり慰めて、玉の緒の、絕えて別れば、術無かるべし。

紅。花西有者。衣袖爾。染著持而。可行所念。

紅の、花にしあらば、衣手に、染め附け持ちて、行ぬべく思ほゆ。

右二首。

譬喩

紅之。深染乃衣乎。下著者。人者見久爾。仁寶比將出鴨。

紅の、濃染の衣を、下に著ば、人の見らくに、匂ひ出でむかも。

斯くだにも—斯く更け行きたりとも
影を惜み—月影に出もやられず困る意をわざと愛惜する樣にいひなしたるにや
栲領巾の—枕詞　あらぶる—疎々しくなる
かへらまに—却つての意と契沖いふ

斯くだにも、妹を待ちなむ。小夜更けて、出で來し月の、傾くまでに。
木間從。移歷月之。影惜。徘徊爾。左夜深去家里。
木の間より、移ろふ月の、影を惜み、たちもとほるに、小夜更けにけり。

右二首。

栲領巾乃。白濱浪乃。不肯緣。荒振妹爾。戀乍曾居。
栲領巾の、白濱浪の、寄りも敢へず、あらぶる妹に、戀ひつゝぞ居る。

一云。戀流己呂可母。

加敝良末爾。君社吾爾。栲領巾之。白濱浪乃。緣時毛無。
かへらまに、君こそ我に、栲領巾の、白濱浪の、寄る時も無き。

右二首。

念人。將來跡知者。八重六倉。覆庭爾。珠布益乎。
思ふ人、來むと知りせば、八重葎、覆へる庭に、玉敷かましを。

たゆたふ心—ためらひて定まらぬ心

燕子花—枕詞
佐紀沼—大和國添下郡
著む日—晴れて夫婦とならん日の喩

後は云々—終に君が物なるをと也

右二首。

浦觸而。物魚念。天雲之。絶多不心。吾念魚國。

うらぶれて、物な思ひそ。天雲の、たゆたふ心、我が思はなくに。

浦觸而。物者不念。水無瀬川。有而毛水者。逝云物乎。

うらぶれて、物は思はず。水無瀬川、ありても水は、行くとふものを。

右二首。

垣津旗。開沼之菅乎。笠爾縫。將著日乎待爾。年曾經去來。

燕子花、佐紀沼の菅を、笠に縫ひ、著む日を待つに、年ぞ經にける。

臨照。難波菅笠。置古之。後者誰將著。笠有魚國。

押照る、難波菅笠、置き古し、後は誰が著む、笠ならなくに。

右二首。

如是谷裳。妹乎待南。左夜深而。出來月之。傾二手荷。

犬馬―「喚犬追馬」の略書
目直相而―古義は「直相見而」の誤にて「たゞにあひみて」かといへり、いかが
聞跡乎―(一)「乎」は「哉」の誤か(二)「跡」の下に「有」を脱せしにて「きかむとなれや」か(三)「きかむとならし」と訓ずるか
闇にのみ見つ―一訓「闇のみに見つ」かきくるゝ心に、闇に見なして在りつと前歌に答ふるなるべし
我妹子に云々―袖を折反して寢れば夢に思ふ人に逢ふといふ諺のまゝにせしを、そなたにも我に逢ひし夢見つやと問ふ也
逢へりしが如―一訓「逢へりし如し」實際逢ひし如く夢に見えしはの意
眞氣長く―「眞」は發語也
絶えぬとも―我を思ひ絶え給ふとも

此言乎。聞跡乎。眞十鏡。照月夜裳。闇耳見。
此の言を、聞きなむとかも、眞十鏡、照れる月夜も、闇にのみ見つ。

右二首。

吾妹兒爾。戀而爲便無三。白細布之。袖反之者。夢所見也。
我妹子に、戀ひて術無み、白妙の、袖反しゝは、夢に見えきや。
吾背子之。袖反夜之。夢有之。眞毛君爾。如相有。
我が背子が、袖反す夜の、夢ならし。誠も君に、逢へりしが如。

右二首。

吾戀者。名草目金津。眞氣長。夢不所見而。年之經去禮者。
我が戀は、慰め兼ねつ。眞氣長く、夢に見えずて、年の經ぬれば。
眞氣永。夢毛不所見。雖絶。吾之片戀者。止時毛不有。
眞氣長く、夢にも見えず、絶えぬとも、我が片戀は、止む時もあらじ。

敷妙の—枕詞、本文「白」は「色」の誤か

眉根掻き—此卷上に、結句「念吾君」とかはりたるまでにて、同歌を載す

今日なれば—今日となれば、一說「今日しあれば」と訓じ、君と相見る今日があればの義とす、本文「けふされば」とも訓むべし

鼻し鼻しひ—上の「し」は助辭、下は嚔（ハナヒ）ばなり、或は本文「鼻之火」は「鼻火之」の誤にて「はなびし」か、又「鼻火之鼻火」にて「はなびしはなび」か

可旭。千鳥數鳴。白細乃。君之手枕。未厭君。

明けぬべく、千鳥しば鳴く。敷妙の、君が手枕、未だ飽かなくに。

問答

眉根掻。鼻火紐解。待八方。何時毛將見跡。戀來吾乎。

眉根掻き、嚔ひ紐解け、待てりやも。何時かも見むと、戀ひ來し我を。

右上見二柿本朝臣人麻呂之歌中一。但以二問答一故。累二載於玆一也。

今日有者。鼻之鼻之火。眉可由見。思之言者。君西在來。

今日なれば、鼻し鼻しひ、眉かゆみ、思ひし事は、君にしありけり。

右二首。

音耳乎。聞而哉戀。犬馬鏡。目直相而。戀卷裳大口。

音のみを、聞きてや戀ひむ。眞十鏡、目に直に見て、戀ひまくも多く。

思ひも兼ねつ—思を忍び得ず

或本歌云々—略解に「後に人麻呂の歌とすれど、此卷と十二の卷は、皆よみ人不ㇾ知古歌なれば取るべからず」

里中に—一訓「さとぬちに」

籠妻—こゝは心の中に戀しく思ふ女の意

高々に—人を待つ意の語

待ち出なむかも—待ちつけんかな

音どろも—(一)音のとゞろと高く響くをいふか、(二)本文「杼侶」は「陏儞」などの誤にて「おとだにも」か(三)古義には「音信は人を令ㇾ驚意より音驚(オトオドロ)とはいふなるべし云々」と見えたり

戀ふれにかあらむ—戀ふればにかあらん

念友。念毛金津。足檜之。山鳥尾之。永此夜乎。

思へども、思ひも兼ねつ。足引の、山鳥の尾の、長き此の夜を。

或本歌曰。足日木乃。山鳥之尾乃。四垂尾乃。長永夜乎。一鴨将宿。

里中爾。鳴奈流鶏之。喚立而。甚者不鳴。隱妻羽毛。

里中に、鳴くなる鶏の、呼び立てて、甚くは鳴かぬ、籠妻はも。

一云。里動。鳴成鶏。

高山爾。高部左渡。高高爾。余待公乎。待将出可聞。

高山に、鸍さ渡り、高々に、我が待つ君を、待ち出なむかも。

伊勢能海從。鳴來鶴乃。音杼侶毛。君之所聞者。吾将戀八方。

伊勢の海ゆ、鳴き來る田鶴の、音どろも、君が聞えば、我戀ひめやも。

吾妹兒爾。戀爾可有牟。奥爾住。鴨之浮宿之。安雲無。

我妹子に、戀ふれにかあらむ。沖に住む、鴨の浮寝の、安けくも無き。

玉—小石
石貝—鮑

空貝—肉なき介殼
實無きこともて—實の心なくして僞に

朝な夕な—(一)「な」は助辭、(二)この「な」は魚菜の意

繁みと—繁さに
鶉鳴く—枕詞
人の云々—おのが家へはむかへずして、他の古家にてかたらひてやりつると也
明けぬとも—下に、更に惜くも思はずと補ふ

洲鳥—洲に居る鳥の汎稱

水泳。玉爾接有。礒貝之。獨戀耳。年者經管。
水潛る、玉に交れる、石貝の、片戀のみに、年は經につゝ。

住吉之。濱爾緣云。打背貝。實無言以。余將戀八方。
住吉の、濱に寄るとふ、空貝、實無きこともて、我戀ひめやも。

伊勢乃白水郎之。朝魚夕菜爾。潛云。鰒貝之。獨念荷指天。
伊勢の海人の、朝な夕なに、潛くとふ、鰒の貝の、片思にして。

人事乎。繁跡君乎。鶉鳴。人之古家爾。相語而遣都。
人言を、繁みと君を、鶉鳴く、人の古家に、語らひて遣りつ。

旭時等。鷄鳴成。縱惠也思。獨宿夜者。開者雖明。
曉と、鷄は鳴くなり。よしゑやし、獨寢る夜は、明けば明けぬとも。

大海之。荒礒之渚鳥。朝名旦名。見卷欲乎。不所見公可問。
大海の、荒礒の洲鳥、朝なさな、見まく欲しきを、見えぬ君かも。

末終に—今は人言などに障へられて遠ざかるとも と意を補ひ見よ

島意—「島」は「寫」の誤ならん

玉の緒の云々—一首の意は、ありありとしたる現心にて年月の行きかはるまで妹に逢はずあらんは如何で堪へ得べきと也

玉の緒の云々—緒に貫ける玉の間も無き如くに絶えず云々の意

澤立見—「立」は「出」の誤

遠而—「遠」は「透」の誤か、一本「逢」に作る

玉緒之。久栗緣乍。末終。去者不別。同緒將有。
玉の緒の、括り寄せつゝ、末終に、行きは別れず、同じ緒にあらむ。

片絲用。貫有玉之。緒乎弱。亂哉爲南。人之可知。
片絲以て、貫きたる玉の、緒を弱み、亂れやしなむ。人の知るべく。

玉緒之。島意哉。年月乃。行易及。妹爾不逢將有。
玉の緒の、うつし心や、年月の、行き替るまで、妹に逢はざらむ。

玉緒之。間毛不置。欲見。吾思妹者。家遠在而。
玉の緒の、間もおかず、見まくほり、我が思ふ妹は、家遠くありて。

隱津之。澤立見爾有。石根從毛。遠而念。君爾相卷者。
籠水の、澤泉なる、岩根ゆも、通して思ふ。君に逢はまくは。

木國之。飽等濱之。忘貝。我者不忘。年者雖歷。
紀の國の、あくらの濱の、忘貝、我は忘れじ。年は經ぬとも。

言待つ我を—妻にせんといふ言葉を待ちつゝあるものを
含める—萌める、心に戀ふるに譬ふ
忍びには—訓「こもりには」
韓藍の花の—「色に出て」の序
過ぐる—散り失する
唐棣花色—白くして赤ばみたる色
玉の緒の—枕詞
息の緒に—命の限り、命に掛けて
亂れな—亂れん
又も逢はずして—又も逢はんとは思はずして

隱庭。戀而死鞆。三苑原之。雞冠草花乃。色二出目八方。
忍びには、戀ひて死ぬとも、御園生の、韓藍の花の、色に出でめやも。

開花者。雖過時有。我戀流。心中者。止時毛梨。
咲く花は、過ぐる時あれど、我が戀ふる、心の中は、止む時も無し。

山振之。爾保敝流妹之。翼酢色乃。赤裳之爲形。夢所見管。
山吹の、匂へる妹が、唐棣花色の、赤裳の姿、夢に見えつゝ。

天地之。依相極。玉緒之。不絶常念。妹之當見津。
天地の、寄合の極み、玉の緒の、絶えじと思ふ、妹があたり見つ。

生緒爾。念者苦。玉緒乃。絶天亂名。知者知友。
息の緒に、思へば苦し。玉の緒の、絶えて亂れな。知らば知るとも。

玉緒之。絶而有戀之。亂者。死卷耳其。又毛不相爲而。
玉の緒の、絶えたる戀の、亂れには、死なまくのみぞ。又も逢はずして。

てこも桁といふ木を横に渡し、こも槌といふものに、あみ緒巻き、こも桁へかけて、槌を、此を彼へ、彼を此へ、取違へつゝあむ也、其槌のゆきかふ如く夫の通ひなばといふ意也」と略解に見ゆ
水底に云々―忍ぶにたとふ
なはのり―海藻の一種か
心も云々―身も心もなよなよとしなえつゝ、戀ひ侘ぶと也
紫の―枕詞、以下三句は「寄りにし」の序
海…藻の―序
最も今こそ―一訓「もはら今こそ」
さぬがには―宣長說に、さ寢んとならばといふ程の意、古義には「さねかねば」と訓む、寢る事を得ずばの義とすべしと論ぜり
沖つ藻の―枕詞
靡きし君―我が心の靡きよりし男の意

水底爾。生玉藻之。生不出。縱比者。如是而將通。
水底に、生ふる玉藻の、生ひ出でず。よし此の頃は、斯くて通はむ。

海原之。奧津繩乘。打靡。心裳四怒爾。所念鴨。
海原の、沖つなはのり、打靡き、心もしぬに、思ほゆるかも。

紫之。名高乃浦之。靡藻之。情者妹爾。因西鬼乎。
紫の、名高の浦の、靡藻の、心は妹に、寄りにしものを。

海底。奧乎深目手。生藻之。最今社。戀者爲便無寸。
海の底、奧を深めて、生ふる藻の、最も今こそ、戀は術無き。

左寐蟹齒。孰共毛宿常。奧藻之。名延之君之。言待吾乎。
さぬがには、誰とも寢めど、沖つ藻の、靡きし君が、言待つ我を。

吾妹子之。奈何跡裳吾。不思者。含花之。穗應咲。
我妹子が、如何にとも我を、思はねば、含める花の、穗に咲きぬべし。

眞野池之。小菅乎笠爾。不縫爲而。人之遠名乎。可立物可。
眞野の池の、小菅を笠に、縫はずして、人の遠名を、立つべきものか。

刺竹。齒隱有。吾背子之。吾許不來者。吾將戀八方。
さす竹の、葉籠りてあれ。我が背子が、我許來ずは、我が戀ひめやも。

神南備能。淺小竹原乃。美妾。思公之。聲之知家口。
神南備の、淺篠原の、女郎花、忍べる君が、聲の著けく。

山高。谷邊蔓在。玉葛。絕時無。見因毛欲得。
山高み、谷邊に這へる、玉葛、絕ゆる時無く、見る由もがも。

道邊。草冬野丹。履干。吾立待跡。妹告乞。
道の邊の、草を冬野に、蹈み枯し、我立ち待つと、妹に告げこそ。

疊薦。隔編數。通者。道之柴草。不生有申尾。
疊薦、隔て編む數、通はさば、道の柴草、生ひざらましを。

人の遠名云々—廣く遠く我が名を世に立つべけんやの意か

さす竹—立竹、篠は本も葉も殊に繁く籠れるものなれば葉籠りてあれといひて家に籠りてあれといふに譬ふ、又古義には說を立てて黍（キミ）の別名といへり

淺篠原—小さき篠原

忍べる君が—（一）人に忍びて我が戀ふる君が（二）本文「美」の上か下に脫字ありて「妾思公之」は「わがおもふ君が」なるべし、古義に「美」は「繁美似裳」（シミミニモ）かといへどいかゞ

冬野に—冬野の如くに

疊薦云々—「隔をば、蔣薄などを一筋づつ重ね編むをもて隔編といふ也、さ

三島江之。入江之薦乎。苅爾社。吾乎婆公者。念有來。
三島江の、入江の菰を、刈りにこそ、我をば君は、思ひたりけれ。
足引乃。山橘之。色出而。吾戀南雄。八目難爲名。
足引の、山橘の、色に出て、我が戀ひなむを、止めがたくすな。
葦多頭乃。颯入江乃。白菅乃。知爲等。乞痛鴨。
葦田鶴の、騒ぐ入江の、白菅の、知られむ爲と、こちたかるかも。
吾背子爾。吾戀良久者。夏草之。苅除十方。生及如。
我が背子に、我が戀ふらくは、夏草の、刈拂へども、生ひ及くがごと。
道邊乃。五柴原能。何時毛何時毛。人之將縱。言乎思將待。
道の邊の、いち柴原の、何時も〱、人の許さむ、言をし待たむ。
吾妹子之。袖乎憑而。眞野浦之。小菅乃笠乎。不著而來二來有。
我妹子が、袖を頼みて、眞野の浦の、小菅の笠を、著ずて來にけり。

三島江―攝津國か
刈りにこそ―「刈り」に「かりそめ」の「かり」を掛く
八目難爲名―(一)「八」は「人」の誤にて「ひとめがたみすな」か(二)「八」は「人」の誤にて「ひとめいますな」と訓む、何れにしても人目を憚ることなく相思ひてよの意

白菅―菅の一種か
知られむ云々―「我戀ふる心のほどを君にしられん爲とて、人言にいたくいひさわがるゝ歟」の意と略解にいへどいかゞ、誤字などあるか
生ひ及くがごと―一訓「生ひ及くごとし」

いち柴―又「いつしば」と訓む、櫟柴の略、繁き來草(シバ)の義といふ

眞野の浦―攝津國

足檜之。山澤回具乎。採將去。日谷毛將相。母者責十方。

足引の、山澤ゑぐを、摘みに行かむ、日だにも逢はむ。母は責むとも。

奧山之。石本菅乃。根深毛。所思鴨。吾念妻者。

奧山の、岩本菅の、根深くも、思ほゆるかも。我が思妻は。

蘆垣之。中之似兒草。爾故余漢。我共咲爲而。人爾所知名。

蘆垣の、中のにこ草、にこよかに、我と笑まして、人に知らゆな。

紅之。淺葉乃野良爾。苅草乃。束之間毛。吾忘渚菜。

紅の、あさはの野らに、刈るかやの、束の間も、我を忘らすな。

爲妹。壽遺在。苅薦之。念亂而。應死物乎。

妹が爲、命遺せり。刈菰の、思ひ亂れて、死ぬべきものを。

吾妹子爾。戀乍不有者。苅薦之。思亂而。可死鬼乎。

我妹子に、戀ひつゝあらずは、刈菰の、思ひ亂れて、死ぬべきものを。

枯れたる莖の實をとりて今春蒔きそれが實になるまで云々の意、而して上三句は「實になる」の序にて、「實になる」は實の夫婦となる限りいつまでも心長くの義とせる古義の說最も然るべくや

ゑぐ―草の名、前に註せり

我が思妻は―一訓「我がもふ妻は」

にこ草―若草か或は繖莚（エミクサ）に同じきかともいふ、一二の句は序

我と笑まして―我を相見て笑み給ひて

紅の―枕詞、以下「かやの」迄は「束」の序

あさはの野ら―武藏國にも遠江國にもあり

刈菰の―枕詞

あらずは―あらんよりは

れは潮風に堪へて島などに生ふべきものにあらず、こゝは異る木ならんといふ、「久しく」の序、後世「潜びさし久」といふ語のあるは此語の轉訛ならんか

閏八河邊之―一説「八」は「丸」の誤にて「うるわかはべの」と訓む

あきがしは―枕詞

篠のめ―めは群(ムレ)の約言

空言も―一訓「むなごとも」

寄せてし―人にいひよせくれたりし

月草の―枕詞

人―我をいふ

事無き―一訓「事無し」

菅の根の―枕詞

うら思ふ―心のうちに思ふの意(一)本文「而心」は「慮」の誤か(二)「而」は「布」の誤か(三)「思而」は「男」の誤にて三句は「こふるにし」、四句は「ますらをごころ」か

穗蓼古幹云々―去年の秋

朝柏。閏八河邊之。小竹之眼笑。思而宿者。夢所見來。

あきがしは、うるや川邊の、篠のめの、忍びて寢れば、夢に見えけり。

淺茅原。刈標刺而。空事文。所縁之君之。辭鴛鴦將待。

淺茅原、假標さして、空言も、寄せてし君が、言をし待たむ。

月草之。借有命。在人乎。何知而鹿。後毛將相云。

月草の、假なる命、なる人を、如何に知りてか、後も逢はむとふ。

王之。御笠爾縫有。在間菅。有管雖看。事無吾妹。

大君の、御笠に縫へる、有馬菅、ありつゝ見れど、事無き我妹。

菅根之。懃妹爾。戀西益。卜思而心。不所念鳧。

菅の根の、懇ろ妹に、戀ひせまし。うら思ふ心、思ほえぬかも。

吾屋戸之。穗蓼古幹。採生之。實成左右二。君乎志將待。

我が宿の、穗蓼古幹、摘み生ふし、實になるまでに、君をし待たむ。

大舟爾。葦荷刈積。四美見似裳。妹心爾。乘來鴨。
大舟に、葦荷刈り積み、しみゝにも、妹が心に、乘りにけるかも。

驛路爾。引舟渡。直乘爾。妹情爾。乘來鴨。
はゆま路に、ひき舟渡し、直乘りに、妹が心に、乘りにけるかも。

吾妹子。不相久。馬下乃。阿倍橘乃。蘿生左右。
我妹子に、逢はず久しも。うましもの、あべ橘の、こけむすまでに。

味乃住。渚沙乃入江之。荒礒松。我乎待兒等波。但一耳。
あぢの住む、すさの入江の、荒礒松、我を待つ兒らは、唯一人のみ。

吾妹兒乎。聞都賀野邊能。靡合歡木。吾者隱不得。間無念者。
我妹子を、聞きつが野邊の、しなひ合歡木、我は忍ばず。間無く思へば。

浪間從。所見小島之。濱久木。久成奴。君爾不相四手。
浪間より、見ゆる小島の、濱びさき、久しくなりぬ。君に逢はずして。

貨することとは古よりありし故に「名」といはん序とす
しみゝにも―繁くも、ひまなくも、一二の句は此語の序
妹が心に云々―妹のことが我が心に云々
はゆま路―早馬の約音にて書紀の訓也
うましもの―枕詞、甘美物の義
あべ橘―(二)甘橘(二)橙
こけ―苔、又、ひかげのかづら
あぢ…松―「待つ」の序
あぢ―あぢがもの路
すさ―神名帳に「紀伊國在田郡に須佐神社」とある所にや、又東國にも同名の地あるか
しなひ合歡木―ねむは枝も葉もしなふものなれば「忍ばず」の序とす
濱びさき―和名抄に楸(比佐木)とありてあかめがしはなりといへど、そ

玉藻刈りつゝ―何の物思ひもなく安らかにあらんと也

見ぬ人ゆゑに―見ぬ人なるものを

庭清み―庭は海原を譬ふ、清みは浪風の立たぬをいふか、本文「淨」或は「靜」の誤にて「にはをよみ」かといへどいかゞ

あぢかま―地名、未詳

鹽津―近江國にあれどこゝは何處か未詳

漕ぐ船の―國名を船名に

右一首。或云。石川君子朝臣作レ之。

中中二。君二不戀者。枚浦乃。白水郎有申尾。玉藻刈管。

なかなかに、君に戀ひずは、ひらの浦の、海人ならましを、玉藻刈りつゝ。

或本歌曰。中中爾。君爾不戀波。留鳥浦之。海部爾有益男。珠藻刈刈。

鈴寸取。海部之燭火。外谷。不見人故。戀比日。

鱸取る、海人の燈火、外にだに、見ぬ人ゆゑに、戀ふる此頃。

湊入之。葦別小舟。障多見。吾念公爾。不相頃者鴨。

港入の、葦別小舟、障り多み、我が思ふ君に、逢はぬ頃かも。

庭淨。奥方榜出。海舟乃。執梶間無。戀爲鴨。

庭清み、沖邊漕ぎ出る、海人舟の、楫取る間無き、戀もするかも。

味鎌之。鹽津乎射而。水手船之。名者謂手師乎。不相將有八方。

あぢかまの、鹽津をさして、漕ぐ船の、名は告りてしを、逢はずあらめやも。

大伴の—枕詞
人の知らなく—女の知らぬ事よ
大船の…下し—「如何に」の序
雎鳩…浪の—「行方も知らず」の序
大船の云々—こゝかしこよりいひ寄せらるゝことに譬ふ
君に戀ふらく—君に戀ふるは

大伴之。三津乃白浪。間無。我戀良苦乎。人之不知久。
大伴の、三津の白浪、間無く、我が戀ふらくを、人の知らなく。

大船乃。絶多經海爾。重石下。何如爲鴨。吾戀將止。
大船の、たゆたふ海に、碇下し、如何にせばかも、我が戀止まむ。

水沙兒居。奥荒磯爾。緣浪。往方毛不知。吾戀久波。
雎鳩居る、沖つ荒磯に、寄る浪の、行方も知らず。我が戀ふらくは。

大船之。舳毛艫毛。依浪。依友吾者。君之任意。
大船の、舳にも艫にも、寄する浪、寄すとも我は、君がまにく。

大海二。立良武浪者。間將有。公二戀等九。止時毛梨。
大海に、立つらむ浪は、間あらむ。君に戀ふらく、止む時も無し。

牡鹿海部乃。火氣燒立而。燎鹽乃。辛戀毛。吾爲鴨。
志可の海人の、煙焚き立てて、燒く鹽の、辛き戀をも、我はするかも。

うしまど—備前國
潮さゐ—潮のさし來る時海のさわぐこと
寄せてし君に—浪の寄するに人の音高くいひ寄する
さだの浦—和泉國にも出雲國にもあり、「さだ」の序
此のさだ過ぎて—(一)さだはうはさ、評判(二)本文「此」は「かく」と訓みて斯く年の盛りをすぎての意(三)古義は「此時過ぎて」の義と論ぜり
荒磯にも云々—何の物思ひもなき荒磯となりてもあらんものを
戀ひつゝあらずは—戀ひつゝあらんよりは
眞砂とも—まなごの如くうかれ〳〵徒に也
浦み—浦べ、又浦めぐり
しく〳〵—一訓「しばしば」
いたぶる—浪のいたくゆるゝこと

牛窓之。浪乃鹽左猪。島響。所依之君爾。不相鴨將有。
うしまどの、浪の潮さゐ、島とよみ、寄せてし君に、逢はずかもあらむ。

奥波。邊浪之來緣。左太能浦之。此左太過而。後將戀可聞。
沖つ浪、邊浪の來寄る、さだの浦の、此のさだ過ぎて、後戀ひむかも。

白波之。來緣島乃。荒礒爾毛。有申物尾。戀乍不有者。
白浪の、來寄する島の、荒磯にも、あらましものを。戀ひつゝあらずは。

鹽滿者。水沫爾浮。細砂裳。吾者生鹿。戀者不死而。
潮滿てば、水沫に浮ぶ、眞砂とも、我は生けるか。戀ひは死なずて。

住吉之。城師乃浦箕爾。布浪之。數妹乎。相因欲得。
住吉の、岸の浦みに、しく浪の、しく〳〵妹を、見る由もがも。

風緒痛。甚振浪能。間無。吾念君者。相念濫香。
風をいたみ、いたぶる浪の、間無く、我が思ふ君は、相思ふらむか。

三句にかゝる、三五四と句を轉じて見よといへり
秋風の｜枕詞か
千江の浦｜未詳
木積なす｜木屑の寄り積れるごとく
白細砂｜誤あらん、數說あれど何れも定かならず
三津｜攝津國

すが島｜(一)近江國か(二)阿波國と紀伊國との間に同名の島あり
間もおきて云々｜間斷なく思ふと也

奧まへて｜奧めて、深めてといふに同じ

霰降り｜枕詞
遠津大浦｜紀伊國か
よしも寄すとも｜たとひ人にいひさわがるともさのみ厭はじと也、一說「毛」は「惠」の誤にて「よしゑよすとも」か

白眞砂、三津の埴生の、色に出て、言はざるのみぞ。我が戀ふらくは。

風不吹。浦爾浪立。無名乎毛。吾者負香。逢者無二。
風吹かぬ、浦に浪立ち、無き名をも、我は負へるか。逢ふとは無しに。

一云。女跡念而。

酢蛾島之。夏身乃浦爾。依浪。間文置。吾不念君。
すが島の、なつみの浦に、寄る浪の、間もおきて、我が思はなくに。

淡海之海。奥津島山。奥間經而。我念妹之。言繁苦。
近江の海、沖つ島山、奥まへて、我が思ふ妹が、言の繁けく。

霰零。遠津大浦爾。縁浪。縱毛依十方。憎不有君。
霰降り、遠津大浦に、寄する浪、よしも寄すとも、憎からなくに。

木海之。名高之浦爾。依浪。音高鳧。不相子故爾。
紀の海の、名高の浦に、寄る浪の、音高きかも。逢はぬ兒ゆゑに。

籠沼の―枕詞
下に戀ふるは―一訓「下に戀ふれば」
忌むべきものを―つゝむべきものを
下樋無み―水の流れ出づるところ無きをいふ、「いぶせき」の序
玉藻刈る―枕詞
薄きかも―薄きかはといふ反語、一説、この歌は忍ぶ中の名の漏れたるを歎きてよめるものにて、本文「薄可毛」は「うすみかも」と訓み、柵の薄き故に我が名のもれたるか、又は我が忍ぶ思のよどみ滿ちておのづからあふれたるかと疑ふ意、又一説、忍び隱す心の薄さに漏れたるか、又は忍ぶ心のよどみ滿ち餘りて漏れたるかと歎く也
かりて―一説、笠を著るために著くる輪狀の紐、その輪をわざみ野の「わ」に掛く
和暫野―美濃國
數多あらぬ云々―我が身一つに二つなき名なるをもていふ
行方知らずて―宣長は、

籠沼の、下に戀ふるは、飽き足らず、人に語りつ。忌むべきものを。

水鳥乃。鴨之住池之。下樋無。鬱悒君。今日見鶴鴨。
水鳥の、鴨の住む池の、下樋無み、いぶせき君を、今日見つるかも。

玉藻刈。井提乃四賀良美。薄可毛。戀乃余杼女留。吾情可聞。
玉藻刈る、井手の柵、薄きかも。戀の淀める、我が心かも。

吾妹子之。笠乃借手乃。和射見野爾。吾者入跡。妹爾告乞。
我妹子が、笠のかりての、和暫野に、我は入りぬと、妹に告げこそ。

數多不有。名乎霜惜三。埋木之。下從其戀。去方不知而。
數多あらぬ、名をしも惜しみ、埋木の、下ゆぞ戀ふる。行方知らずて

冷風之。千江之浦回乃。木積成。心者依。後者雖不知。
秋風の、千江の浦まの、木積なす、心は寄りぬ。後は知らねど。

白細砂。三津之黄土。色出而。不云耳衣。我戀樂者。

物部乃。八十氏川之。急瀨。立不得戀毛。吾爲鴨。
武士の、八十宇治川の、早き瀨に、立ち得ぬ戀も、我はするかも。
一云。立而毛君者。忘金津藻。

神名火。打廻前乃。石淵。隱而耳八。吾戀居。
神奈備の、うちわの隈の、岩淵の、籠りてのみや、我が戀ひ居らむ。

自高山。出來水。石觸。破衣念。妹不相夕者。
高山ゆ、出で來る水の、岩に觸り、破れてぞ思ふ。妹に逢はぬ夜は。

朝東風爾。井提越浪之。世蝶似裳。不相鬼故。瀧毛響動二。
朝東風に、井手越す浪の、せてふにも、逢はぬものゆゑ、瀧もとゞろに。

高山之。石本瀧千。逝水之。音爾者不立。戀而雖死。
高山の、岩元激ち、行く水の、音には立てじ。戀ひて死ぬとも。

隱沼乃。下爾戀者。飽不足。人爾語都。可忌物乎。

うちわ—(一)神奈備山の麓に飛鳥川にうちわといふ所あるか(二)宣長は「打」は「折」の誤にて「をりたむくま」とよみ、道の折り曲れる處といへり

破れてぞ思ふ—心千々に碎けて思ふ

世蝶似裳—(一)「蝶」は「越」の誤にて「せごしにも」か(二)「蝶」は「染」の誤にて「よそめにも」か(三)「且蛾津裳」の誤にて「かつ〳〵も」か(四)「世蝶」は「左也蚊」の誤にて「さやかにも」か

不相鬼故—宣長の說、「鬼」は「兒」の誤にて「あはぬこゆゑに」

瀧もとゞろに—井手越す浪の音に人言の喧しきを譬ふ

激ち—たぎり

音には立てじ—名には顯はさじの意

一云。名耳之所緣而戀管哉將在。

吾妹子。吾戀樂者。水有者。之賀良三超而。應逝衣思。

我妹子に、我が戀ふらくは、水ならば、柵越えて、行くべくぞ思ふ。

或本歌句云。相不思。人乎念久。

狗上之。鳥籠山爾有。不知也河。不知二五寸許瀨。余名告奈。

犬上の、鳥籠の山なる、いさや川、いさとを聞こせ。我が名告らすな。

奧山之。木葉隱而。行水乃。音聞從。常不所忘。

奧山の、木の葉隱りて、行く水の、音に聞きしゆ、常忘らえず。

言急者。中波余騰益。水無河。絕跡云事乎。有超名湯目。

言とくは、中は淀ませ。水無瀨川、絕ゆとふことを、ありこすなゆめ。

明日香河。逝湍乎早見。將速登。待良武妹乎。此日晚津。

明日香川、行く瀨を早み、早や見むと、待つらむ妹を、此の日暮らしつ。

「名のみ寄せてし」、名ばかり高く人にいひ寄せられて、父母の守り籠めて逢ひがたかりし妹はいづ地行きけんと歎く也

我が戀ふらくは―我が戀ふる有樣は

犬上―近江國

いさとを聞こせ―「いさ」は「いさ知らず」の略にて否に同じ、人の聞きたらばいさ知らずとのたまはせよ

音に聞きしゆ―略解には「おとは聲をいふ」古義には「音は音づれなるべし」

言とくは―人言の甚しくば

水無瀨川―一訓「みなし川」水の砂の下をくゞりて流るゝ川

ありこすなゆめ―決してあることと勿れ

將速登―「速」の下に「見」を脫す

待つらむ妹を―妹待つらんを也

時とも無くも―いつといふ時の分ちもなく、絶えず

早み早瀨―略解には「一言を重て最早きをいふのみ」といひ、古義には「早み」は「早きが故に」の義にて、「水の早きは浮き事勿論なれば急く浮きが故にそれをめで掬ぶ謂なり」といへり

居名山響爾―「爾」は「彌」の誤にて「ゐなやまとよみ」か

息長鳥―枕詞

行く水の―「の」は「の如く」

名にのみ寄せし―一訓

眞薦刈。大野川原之。水隱。戀來之妹之。紐解吾者。

眞菰刈る、大野川原の、水籠に、戀ひ來し妹が、紐解く我は。

惡氷木之。山下動。逝水之。時友無雲。戀度鴨。

足引の、山下とよみ、行く水の、時とも無くも、戀渡るかも。

愛八師。不相君故。徒爾。此川瀨爾。玉裳沾津。

はしきやし、逢はぬ君ゆゑ、徒に、此の川の瀨に、玉裳濡らしつ。

泊湍川。速見早湍乎。結上而。不飽八妹登。問師公羽裳。

泊瀨川、早み早瀨を、掬び上げて、飽かずや妹と、問ひし君はも。

青山之。石垣沼間乃。水隱爾。戀哉度。相緣乎無。

青山の、岩垣沼の、水籠に、戀ひや渡らむ。逢ふ由を無み。

四長鳥。居名山響爾。行水乃。名耳所緣之。內妻波母。

息長鳥、猪名山とよに、行く水の、名にのみ寄せし、籠妻はも。

来れば戀しき—既に歸り來れば戀しき意にて、「あさ」の序とせるならん

阿陀人—大和國宇智郡阿陀に住める人

簗—木を竝べ水を塞ぎて魚を捕ふる裝置のもの

伏以死—「以」は「雖」の誤か、或は義を以て訓めるか、本居說には「庭伏以」皆誤字かといへり

陽炎の—枕詞、一訓「たまかぎる」

岩垣淵—谷川などの岩の垣の如くそばだてる淵をいふ

隱れには—一訓「しぬびには」

岩橋の—枕詞

遠き心云々—遠く間を置きて逢はんと思ふ心は更になし

いや日けに—彌日々に

在りがてましも—在り長らふる事を得ざらん

妹が名も、我が名も立たば、惜しみこそ。富士の高嶺の、燃えつゝ渡れ。

或歌曰。君名毛。妾名毛立者。惜己曽。不盡乃高山之。燒乍毛居。

往而見而。來戀敷。朝香方。山越置代。宿不勝鴨。

行きて見て、來れば戀しき、あさか潟、山越に置きて、寢ねがてぬかも。

安太人乃。八名打度。瀨速。意者雖念。直不相鴨。

阿陀人の、簗打渡す、瀨を早み、心は思へど、直に逢はぬかも。

玉蜻。石垣淵之。隱庭。伏以死。汝名羽不謂。

陽炎の、岩垣淵の、隱れには、伏して死ぬとも、汝が名は告らじ。

明日香川。明日文將渡。石走。遠心者。不思鴨。

明日香川、明日も渡らむ。岩橋の、遠き心は、思ほえぬかも。

飛鳥川。水往增。彌日異。戀乃增者。在勝申目。

飛鳥川、水行き增り、いや日けに、戀のまさらば、在りがてましも。

かにかくに、物は思はず。朝露の、我身一つは、君がまに〱、

夕凝。霜置來。朝戸出爾。甚踐而。人爾所知名。
夕凝の、霜置きにけり。朝戸出に、いと跡附けて、人に知らゆな。

如是許。戀乍不有者。朝爾日爾。妹之將履。地爾有申尾。
斯くばかり、戀ひつゝあらずは、朝に日に、妹が履むらむ、地ならましを。

足日木之。山鳥尾乃。一峯越。一目見之兒爾。應戀鬼香。
足引の、山鳥の尾の、一峯越え、一目見し兒に、戀ふべきものか。

吾妹子爾。相緣乎無。駿河有。不盡乃高嶺之。燒管香將有。
我妹子に、逢ふ由を無み、駿河なる、富士の高嶺の、燃えつゝかあらむ。

荒熊之。住云山之。師齒迫山。責而雖問。汝名者不告。
荒熊の、住むとふ山の、しはせ山、責めて問ふとも、汝が名は告らじ。

妹之名毛。吾名毛立者。惜社。布仕能高嶺之。燒乍渡。

思はず—一訓「思はじ」
朝露の—はかなき身の喩
甚踐而—(一)「甚」一本「跡」又、「甚」は「足」の誤か、何れにても舊訓の如く「あとふみつけて」なるべし(二)「甚」は「其上」の誤にて「そのうへふみて」か
夕凝の—霜の夕方になりて凝りかたまること。
山鳥—この鳥は雌雄峰を隔てて住むといふ
一峯越え云々—山のあなたの里などにて唯一目見し女に戀ふる意か
しはせ山—所在不明、「しはせ」をしば〳〵責る意にとりて「責めて」の序とせるならんといふ
責めて問ふとも—父母の也

雨も降らぬか—雨も降れかし
其を由にせむ—其を妹の許にとまる口實にせん

さくらをの—枕詞、一訓「さくらあさの」又、一説「かればをの」と訓むか
麻生の下草—麻の生ふところを麻生といひ、その下陰に生ふ草を下草といふ
い行け—一訓「いませ」
又若反—「又變若反」の誤脱にて「またをちかへり」かといふ

露者置—一說、下に「跡」文字を脱せるにて、「露は置けど」とあるべき所
たゆたひ—行きもやらず去りもあへぬ様

妹が門、行き過ぎ兼ねつ。久方の、雨も降らぬか。其を由にせむ。

夜占問。吾袖爾置。白露乎。於公令視跡。取者消管。
夕占問ふ、我が袖に置く、白露を、君に見せむと、取れば消につゝ。

櫻麻乃。苧原之下草。露有者。令明而射去。母者雖知。
さくらをの、麻生の下草、露しあれば、明してい行け、母は知るとも。

待不得而。内者不入。白細布之。吾袖爾。露者置奴鞆。
待兼ねて、内へは入らじ。白妙の、我が衣手に、露は置きぬとも。

朝露之。消安吾身。雖老。又若反。君乎思將待。
朝露の、消易き我が身、老いぬとも、復若返り、君をし待たむ。

白細布乃。吾袖爾。露者置。妹者不相。猶預四手。
白妙の、我が衣手に、露は置きぬ。妹には逢はず、たゆたひにして。

云云。物者不念。朝露之。吾身一者。君之隨意。

押照りて—押竝べて照りて

河千鳥……霧の—「いちじろ」の序、「著けむな」は、著く世に顯れんと歎く也

降らく—降るの延

韓衣—あやあるよき衣をいふなるべし

霡霂—「霂」一本「霖」とある方宜し

埴生の小屋—たゞ土の上にわら莚など敷きて住ふをいふ

身に添へ—もつとこちらの身へ寄り添へ

笠無しと—一訓「笠無みと」笠無き故にと

雨づつみ—雨をはゞかりて家に籠り居ること

窓越に、月押照りて、足引の、嵐吹く夜は、君をしぞ思ふ。

河千鳥。住澤上爾。立霧之。市白兼名。相言始而者。

河千鳥、住む澤のへに、立つ霧の、著けむな。相言ひ初めては。

吾背子之。使乎待跡。笠毛不著。出乍其見之。雨落久爾。

我が背子が、使を待つと、笠も著ず、出でつゝぞ見し。雨の降らくに。

辛衣。君爾内著。欲見。戀其晩師之。雨零日乎。

韓衣、君に打著せ、見まく欲り、戀ひぞ暮しゝ。雨の降る日を。

彼方之。赤土少屋爾。霡霂零。床共所沾。於身副我妹。

遠方の、埴生の小屋に、小雨降り、床さへ濡れぬ。身に添へ我妹。

笠無登。人爾者言手。雨乍見。留之君我。容儀志所念。

笠無しと、人には言ひて、雨づつみ、留りし君が、姿し思ほゆ。

妹門。去過不勝都。久方乃。雨毛零奴可。其乎因將爲。

ぬば玉の、夜渡る月の、ゆつりなば、更にや妹に、我が戀ひ居らむ。

朽網山。夕居雲。薄往者。余者將戀名。公之目乎欲。

くたみ山、夕居る雲の、薄らがば、我は戀ひむな。君が目を欲り。

君之服。三笠之山爾。居雲乃。立者繼流。戀爲鴨。

君が著る、三笠の山に、居る雲の、立ちては繼げる、戀もするかも。

久堅之。天飛雲爾。在而然。君相見。落日莫死。

久方の、天飛ぶ雲に、なりてしが、君を相見む。おつる日無しに。

佐保乃內從。下風之吹禮波。還者。爲便胡粉。歎夜衣大寸。

佐保の內ゆ、嵐の吹ければ、歸さには、せむ術知らに、歎く夜ぞ多き。

級子八師。不吹風故。玉匣。開而左宿之。吾其悔寸。

はしきやし、吹かぬ風ゆゑ、玉櫛笥、開きてさ寢し、我ぞ悔しき。

窓超爾。月臨照而。足檜乃。下風吹夜者。公乎之其念。

くたみ山—豐後國か
薄らがば—思ふ人の心のうすらぎ疎くならば、略解には本文「薄」は「轉」の誤にて「ゆつりなば」かといひ、古義には「薄」は「發」の誤にて「たちてゐなば」かといへど、共にいかゞ
君が著る—枕詞、一訓「君がける」
立ちては繼げる—一訓「立てば繼がるゝ」
在而然—「在」一本「成」とあるに從ふべし
おつる日無しに—日每に

佐保の內—佐保山の內
歸さ—歸るさ、宣長は本文「還者」は誤字ならん

吹かぬ風ゆゑ—來ぬ人を喩へたる也「ゆゑ」はなるものをの意
開きてさ寢し—戶を也

眞袖以て、床打拂ひ、君待つと、居りし間に、月傾きぬ。

二上爾。隱經月之。雖惜。妹之田本乎。加流類比來。

二上に、隱ろふ月の、惜しけども、妹が袂を、かるゝ此の頃。

吾背子之。振放見乍。將嘆。淸月夜爾。雲莫田名引。

我背子が、振りさけ見つゝ、嘆くらむ。淸き月夜に、雲な棚引き。

眞素鏡。淸月夜之。湯徙去者。念者不止。戀社益。

眞十鏡、淸き月夜の、ゆつりなば、思ひは止まじ。戀こそまさめ。

今夜之。在開月夜。在乍文。公乎置者。待人無。

此の夜らの、有明月夜、在りつゝも、君をおきては、待つ人も無し。

此山之。嶺爾近跡。吾見鶴。月之空有。戀毛爲鴨。

此の山の、峰に近しと、我が見つる、月の空なる、戀もするかも。

烏玉之。夜渡月之。湯移去者。更哉妹爾。吾戀將居。

二上―大和國葛下郡二上山
隱ろふ月の―月の隱るゝが惜しと續けたる也
かるゝ―離る
雲な棚引き―雲棚引く勿れ、下に「曾」を略していふ例は集中に多し
ゆつりなば―うつりなば、西に傾きなば
思ひは云々―人待つ夜は月のかたぶかんまゝに思の止むべきを、さはあらずして却て戀しき心のまさらんと也
此の……月夜―「在りつゝも」の序
此の山……月の―「空なる」の序、「空なる」は心もうか〳〵となる意也

たまぢはふ—枕詞
うつてこそ—打棄て給へよ
しゑや—嘆息の詞、又、よしやの意

い垣—忌垣の略、難き逢瀬に譬ふ

夕月夜云々—夕月の頃は必ず曉闇なれば「朝」といはんあやにいへるのみ
思ひかねに—思ひ堪へがてにしての意、一説、本文「丹」は衍文にて「なをもひかね」か、又一説、本文「丹」は「手」の誤にて「なをおもひかねて」
わき—さかひ

欲しけく—ほしけきは
月待つがごと—一訓「月待つごとし」

たまぢはふ、神も我をば、うつてこそ。しゑや命の、惜しけくも無し。

吾妹兒。又毛相等。千羽八振。神社乎。不禱日者無。

我妹子に、復も逢はむと、千早振、神の社を、のまぬ日は無し。

千葉破。神之伊垣毛。可越。今者吾名之。惜無。

千早振、神のい垣も、越えぬべし。今は我が名の、惜しけくも無し。

暮月夜。曉闇夜乃。朝影爾。吾身者成奴。汝乎念金丹。

夕月夜、曉闇の、朝影に、我が身はなりぬ。汝を思ひかねに。

月之有者。明覽別裳。不知而。寐吾來乎。人見兼鴨。

月しあれば、明くらむわきも、知らずして、寢て我が來しを、人見けむかも。

妹目之。見卷欲家口。夕闇之。木葉隱有。月待如。

妹が目の、見まく欲しけく、夕闇の、木の葉籠れる、月待つがごと。

眞袖持。床打拂。君待跡。居之間爾。月傾。

一云。須蘇衝河乎。又曰。待香將待。

天飛也。輕乃社之。齋槻。幾世及將有。隱孀其毛。

天飛ぶや、輕の社の、齋槻、幾世まであらむ、籠妻そも。

神名火爾。紐呂寸立而。雖忌。人心者。間守不敢物。

神奈備に、神籬立てて、いはへども、人の心は、守り敢へぬかも。

天雲之。八重雲隱。鳴神之。音爾耳八方。聞度南。

天雲の、八重雲隱り、鳴神の、音にのみやも、聞き渡りなむ。

爭者。神毛惡爲。縱咲八師。世副流君之。惡有莫君爾。

爭へば、神も憎ます。よしゑやし、よそふる君が、憎からなくに。

夜竝而。君乎來座跡。千石破。神社乎。不祈日者無。

夜竝べて、君を來ませと、千早振、神の社を、のまぬ日は無し。

靈治波布。神毛吾者。打棄乞。四惠也壽之。恡無。

天飛ぶや—枕詞
輕の社—大和國高市郡
幾世まであらむ—いつ迄斯く人にかくしてあるべきぞと也、上の三句は序
間守不敢物—「物」は「疑」の誤か、古義には原文のまゝ「守り敢へぬもの」と訓む、ものをの義といへり
神奈備—飛鳥の神奈備山

爭へば—人の君と我との間を上そへいへるを、さる事なしといひ爭へば

夜竝べて—夜毎に
のまぬ日は無し—祈らぬ日はなし

鹿などを追ふべき假廬にたく火、こゝは前者なるべし、蚊遣火は火を下に置きて上に芥などを積みてくゆらせば「下焦れ云々」の序とせり
殺板—そぎてつくりたる板、或は「はたいた」とも訓むべし
すしたれど—一訓「すしてあれど」煤びてあれどの意、妻の古びたるに譬ふ

妹が髮—枕詞
あげさゝば野—攝津國か、未詳、一說、本文「小」は衍にて「かみたかはぬ」
荒びにけらし—人の心の變り行くに譬ふ
とゞともすれば—とゞは馬の足音
若しも君かと—一訓「けだし君かと」

裾—女のもすそ

十寸板持。蓋流板目乃。不令相者。如何爲跡可。吾宿始兼。

殺板もて、葺ける板目の、逢はざらば、如何にせむとか、我が寢初めけむ。

難波人。葦火燎屋之。酢四手雖有。己妻許增。常目頰次吉。

難波人、葦火燒く屋の、すしたれど、己が妻こそ、常珍しき。

妹之髮。上小竹葉野之。放駒。蕩去家良思。不合思者。

妹が髮、あげさゝば野の、放駒、荒びにけらし。逢はぬ思へば。

馬音之。跡杼登毛爲者。松陰爾。出曾見鶴。若君香跡。

馬の音の、とゞともすれば、松陰に、出でてぞ見つる。若しも君かと。

君戀。寢不宿朝明。誰乘流。馬足音。吾聞爲。

君に戀ひ、寢ねぬ朝明に、誰が乘れる、馬の足音ぞ、我に聞かする。

紅之。襴引道乎。中置而。妾哉將通。公哉將來座。

紅の、裾曳く道を、中に置きて、我や通はむ、君や來まさむ。

坂田—「板」は「坂」の誤
小墾田—大和國高市郡
泉の杣—山城國相樂郡、杣は山に木を植ゑつけて材木をとるところ
止む時も無く—一訓「いこふ時無く」
津守網引—津守浦の網引
あらずは—あらんよりは
横雲の云々—一二の句は「遠み」の序、遠地に男を持つ女の歌にて、遠く離れて居れば相見て語らふ事の途切るゝなれど我とは絕えんとて斯く隔つるにはあらじの意か、又は略解にいへる如く、遠ければ事直ちに相見てものいふ事こそうとからめ、便だにせぬは今は絕えんとてへだつるならんと疑ふ意か
飛彈人—飛彈匠
たゞ一道に—たゞ一筋に君を思ふと也
蚊火—(一)蚊遣火(二)猪

小墾田之。板田乃橋之。壞者。從桁將去。莫戀吾妹。
小墾田の、坂田の橋の、崩れなば、桁より行かむ。な戀ひそ我妹。
宮材引。泉之追馬喚犬二。立民乃。息時無。戀渡可聞。
宮木引く、泉の杣に、立つ民の、止む時も無く、戀ひ渡るかも。
住吉乃。津守網引之。浮笶緒乃。得干蚊將去。戀管不有者。
住吉の、津守網引の、浮の緒の、浮れか行かむ。戀ひつゝあらずは。
東細布。從空延越。遠見社。目言疎良米。絕跡間也。
横雲の、空ゆ引越し、遠みこそ、目言かるらめ。絕ゆと隔つや。
云云。物者不念。斐太人乃。打墨繩之。直一道二。
かにかくに、ものは思はず。飛彈人の、打つ墨繩の、たゞ一道に。
足日木之。山田守翁。置蚊火之。下粉枯耳。余戀居久。
足引の、山田守る老翁が、置く蚊火の、下焦れのみ、我は戀ひ居らく。

梓弓。末之腹野爾。鷹田爲。君之弓食之。將絕跡念甕屋。
梓弓、すゑの原野に、鳥狩する、君が弓弦の、絕えむと思へや。

葛木之。其津彥眞弓。荒木爾毛。憑也君之。吾之名告兼。
葛城の、襲津彥眞弓、新木にも、寄るとや君が、我名告りけむ。

梓弓。引見弛見。不來者不來。來者其其乎奈何。不來者來者其乎。
梓弓、引きみ弛べみ、來ずは來ず、來ばぞ其を何ど、來ずは來ばそを。

時守之。打鳴鼓。數見者。辰爾波成。不相毛恠。
時守の、打ちなす鼓、よみ見れば、時にはなりぬ。逢はなくも怪し。

燈之。陰爾蚊蛾欲布。虛蟬之。妹蛾咲狀思。面影爾所見。
燈火の、影にかゞよふ、現身の、妹が笑まひし、面影に見ゆ。

玉戈之。道行疲。伊奈武思侶。敷而毛君乎。將見因母鴨。
玉桙の、道行き疲れ、寢筵、しきても君を、見む由もがも。

君之弓食之—「食」は「弦」の誤か、一說「食」は「葛」の誤にて「きみがゆづらの」か
梓弓—枕詞
すゑの原野—大和國添上郡陶(スヱ)の原野か
葛城の襲津彥—武勇にすぐれたる人にて、強弓の名にも負ひしならん
寄るとや君が—一訓「たのめや君が」
來ずは云々—來ないならば來ない、來るならば來るときつぱり定むべきを弓を引いたりゆるべたりする如くどちらつかずにあるは何事ぞと也
時守—陰陽式に「諸時撃鼓云々」時守はそれにあづかる人
打ちなす—打鳴らすの略
よみ見れば—數へみれば
時にはなりぬ—約束の時間になりぬ
かゞよふ—かゞやく
現身の—こゝは枕詞にあらず
玉桙の—枕詞
しきても—敷き=しげしげと
寢筵—枕詞

見人時禁屋—「人」は衍文、一本「將見時禁屋」(ミムトキサヘヤ)

死せかもしなむ—殺されても死なん

戀ひつゝあらずは—戀ひつゝあらんよりは

哂—(一)「哂」の誤にて「うれしくも」(二)「噎」の誤にて「しかぶかひ」この第二說然るべし

鼻をぞ嚏つる—人に思はるれば鼻嚏つるといふ

眞十鏡、直にし妹を、相見ずは、我が戀止まじ。年は經ぬとも。

眞十鏡。手取持手。朝旦。見人時禁屋。戀之將繁。

眞十鏡、手に取持ちて、朝なさな、見る時さへや、戀の繁けむ。

里遠。戀和備爾家里。眞十鏡。面影不去。夢所見社。

里遠み、戀ひ侘びにけり。眞十鏡、面影去らず、夢に見えこそ。

右一首。上見二柿本朝臣人麻呂之歌中一也。但以二句句相換一。故載二於玆一。

劒刀。身爾佩副流。丈夫也。戀云物乎。忍金手武。

劒太刀、身に佩き添ふる、丈夫や、戀ちふものを、忍び兼ねてむ。

劒刀。諸刃之於荷。去觸而。所殺鴨將死。戀管不有者。

劒太刀、諸刃の上に、行き觸れて、死せかもしなむ。戀ひつゝあらずは。

哂。鼻乎曾嚏鶴。劒刀。身副妹之。思來下。

打嘆き、鼻をぞ嚏つる。劒太刀、身に添ふ妹が、思ひけらしも。

花鬘—古へ女兒の頭の飾とせしもの
笑みゝ怒りみ云々—略解には單に「新枕かはすさま也」といひ、古義には、我妻が或は我をよろこびて笑み或はうらみて怒りなどしてつけしこの紐を解きて、少女の愛らしきに今夜新枕を交はすと也と解せり
古の…垂れ—「誰」の序

逢はずとも云々—男のもとへ枕を贈れる時の歌なるべし

ぬば玉の云々—四一二三五と句を轉じて見よ

波禰蘰。今爲妹之。浦若見。咲見慍見。著四紐解。
花鬘、今する妹が、うら若み、笑みゝ怒りみ、著けし紐解く。

去家之。倭文旗帶乎。結垂。孰云人毛。君者不益。
古の、倭文機帶を、結び垂れ、誰とふ人も、君にはまさじ。

一書歌。古之。狹織之帶乎。結垂。誰之能人毛。君爾波不益。

不相友。吾波不怨。此枕。吾等念而。枕手左宿座。
逢はずとも、我は怨みじ。此の枕、我と思ひて、まきてさ寝ませ。

結紐。解日遠。敷細。吾木枕。蘿生來。
結へる紐、解きし日遠み、敷妙の、我が木枕に、苔むしにけり。

夜干玉之。黑髮色天。長夜叫。手枕之上爾。妹待覽蚊。
ぬば玉の、黑髮敷きて、長き夜を、手枕の上に、妹待つらむか。

眞素鏡。直二四妹乎。不相見者。我戀不止。年者雖經。

揩衣。著有跡夢見津。寤者。孰人之。言可將繁。
揩衣、けりと夢みつ。現には、孰の人の、言か繁けむ。

志賀乃白水郎之。鹽燒衣。雖穢。戀云物者。忘金津毛。
志可の海人の、鹽燒衣、なれぬれど、戀とふものは、忘れ兼ねつも。

呉藍之。八鹽乃衣。朝旦。穢者雖爲。益希將見裳。
紅の、八入の衣、朝なさな、馴るとはすれど、彌珍しも。

紅之。深染衣。色深。染西鹿齒蚊。遺不得鶴。
紅の、濃染の衣、色深く、染みにしかばか、忘れ兼ねつる。

不相爾。夕卜乎問常。幣爾置爾。吾衣手者。又曾可續。
逢はなくに、夕占を問ふと、幣に置くに、我が衣手は、又ぞつぐべき。

古衣。打棄人者。秋風之。立來時爾。物念物其。
古衣、うつてし人は、秋風の、立來る時に、物思ふものぞ。

れども何の故ぞと問ふ人もなし」の歌を傳へ誤れる也

揩衣云々—揩衣を著たりと夢に見るは人言の繁かりちん前兆といひ傳へしにや、「けり」は著たりの意

志可—肥前國志可島なれぬれど—しほじみよごれたるより上二句を序として用ひたる也

八入—入は物を染むる時染料の中に入るゝ度數を數ふる接尾語

又ぞつぐべき—(一)著たる衣の袖は又もつけ得べきものぞとて解きはなちて幣とするをいふ(二)逢はぬ故に又つゞきて夕占の幣に置くべしの意

古衣—枕詞

うつてし人—人にうち棄てられし我が身をいふ

奥山の—枕詞　音早み—音の甚しさに母などの聞き咎めん事を恐れて云々と也

直路—近道

朝影に云々—影の如く我が身は痩せ衰へぬといふ意

韓衣—古へ韓人の衣の裾は合はずやありけん、さて「あはずて」の序とせる也

何ぞ汝が故と—巻十二、「解衣の思ひ亂れて戀ふ

奥山之。眞木之板戸乎。音速見。妹之當乃。霜上爾宿奴。
奥山の、眞木の板戸を、音早み、妹があたりの、霜の上に寢ぬ。

足日木能。山櫻戸乎。開置而。吾待君乎。誰留流。
足引の、山櫻戸を、明け置きて、我が待つ君を、誰か止むる。

月夜好三。妹二相跡。直道柄。吾者雖來。夜其深去來。
月夜よみ、妹に逢はむと、直路から、我は來つれど、夜ぞ更けにける。

寄レ物陳レ思

朝影爾。吾身者成。辛衣。襴之不相而。久成者。
朝影に、我が身はなりぬ。韓衣、裾のあはずて、久しくなれば。

解衣之。思亂而。雖戀。何如汝之故跡。問人毛無。
解衣の、思ひ亂れて、戀ふれども、何ぞ汝が故と、問ふ人も無き。

か
ぬば玉の—枕詞
引きぬちし—結びたる髪の解けてうねく\と下り亂るゝをいふ、以上は「亂れて」の序也
我が紐の云々—紐の自ら解くるは人に逢ふしるしなるを由もなく解くればいふ
袖觸而夜—「夜」は「從」の誤

下いぶかしみ云々—心の中に不思議に思ひ居りしに
古人—むかしなじみ

今更。君之手枕。巻宿米也。吾紐緒乃。解都追本名。
今更に、君が手枕、まき寝めや。我が紐の緒の、解けつゝもとな。

白細布乃。袖觸而夜。吾背子爾。吾戀落波。止時裳無。
白妙の、袖觸れてより、我が背子に、我が戀ふらくは、止む時も無し。

夕卜爾毛。占爾毛告有。今夜谷。不來君乎。何時將待。
夕占にも、占にものれる、今宵だに、來まさぬ君を、何時とか待たむ。

眉根掻。下言借見。思有爾。去家人乎。相見鶴鴨。
眉根掻き、下いぶかしみ、思へるに、古人を、相見つるかも。

或本歌曰。眉根掻。誰乎香將見跡。思乍。氣長戀之。妹爾相鴨。

一書歌曰。眉根掻。下伊布可之美。念有之。妹之容儀乎。今日見都流香裳。

敷栲乃。枕巻而。妹與吾。寐夜者無而。年曾經來。
敷妙の、枕をまきて、妹と我、寝る夜は無くて、年ぞ經にける。

道行きぶり—道にて行き合ひふるゝ意
思はぬに—思ひもかけず
さもらはば—人目のひまをのみうかゞひてあらば
敷妙の—枕詞
衣片敷き—ひとり丸寢するをいふ
まよひぬ—布帛の經緯の絲のよれ〳〵になりしをいふ
亂而反—(一)「反」は「已」の誤にて「みだれてのみも」か、(二)「而反」は「留及」の誤にて「亂るゝまでに」か、(三)「反」は「吾」の誤にて「亂れてあれは」

玉梓之。道去夫利爾。不思。妹乎相見而。戀比鴨。
玉梓の、道行きぶりに、思はぬに、妹を逢見て、戀ふる頃かも。

人目多。常如是耳志。候者。何時。吾不戀將有。
人目多み、常斯くのみし、さもらはば、何れの時が、我が戀ひざらむ。

敷細之。衣手可禮天。吾乎待登。在濫子等者。面影爾見。
敷妙の、衣手かれて、我を待つと、あるらむ兒らは、面影に見ゆ。

妹之袖。別之日從。白細乃。衣片敷。戀管曾寐留。
妹が袖、別れし日より、白妙の、衣片敷き、戀ひつゝぞ寢る。

白細之。袖者間結奴。我妹子我。家當乎。不止振四二。
白妙の、袖はまよひぬ。我妹子が、家のあたりを、止まず振りしに。

夜干玉之。吾黑髮乎。引奴良思。亂而反。戀度鴨。
ぬば玉の、我が黑髮を、引きぬらし、亂れてかへり、戀ひ渡るかも。

驗無。戀毛爲鹿。暮去者。人之手枕而。將寐兒故。
しるし無き、戀をもするか。夕されば、人の手まきて、寢なむ兒ゆゑに。

百世下。千代下生。有目八方。吾念妹乎。置嘆。
百代しも、千代しも生きて、あらめやも。我が思ふ妹を、おきて嘆かむ。

現毛。夢毛吾者。不思寸。振有公爾。此間將會十羽。
現にも、夢にも我は、思はざりき。古りたる君に、こゝに逢はむとは。

黑髮。白髮左右跡。結大王。心一乎。今解目八方。
黑髮の、白髮までと、結びてし、心一つを、今解かめやも。

心乎之。君爾奉跡。念有者。縱比來者。戀乍乎將有。
心をし、君にまたすと、思へれば、よし此頃は、戀ひつゝをあらむ。

念出而。哭者雖泣。灼然。人之可知。嘆爲勿謹。
思ひ出て、音には泣くとも、著く、人の知るべく、嘆すなゆめ。

しるし無き—甲斐なき
見ゆゑに—見なるものを

我が思ふ妹を—上に「いかで」と補ひて見よ

思はざりき—古義に「思はずき」と訓じたれどいかゞ
古りたる君—昔逢ひ見し君の意

またす—一訓「まつる」奉る也
よし此頃は云々—我心にして我心ならねば人の訪ね來ぬも恨みじ、戀しくば只戀ひつゝあらんとの意か
嘆すなゆめ—一說「嘆かすなゆめ」と敬語

萬葉集巻第十一下

夢谷。何鴨不所見。雖所見。吾鴨迷。戀茂爾。
夢にだに、などかも見えぬ。見ゆれども、我かも惑ふ。戀の繁きに。

名草漏。心莫二。如是耳。戀也度。月日殊。
慰もる、心は無しに、斯くしのみ、戀ひや渡らむ。月に日にけに。

或本歌云。奥津浪。敷而耳八方。戀度奈武。

何爲而。忘物。吾妹子丹。戀益跡。所忘莫苦二。
如何にして、忘るゝものぞ。我妹子に、戀はまされど、忘らえなくに。

遠有跡。公衣戀流。玉桙乃。里人皆爾。吾戀八方。
遠かれど、君をぞ戀ふる。玉桙の、里人皆に、我戀ひめやも。

我かも惑ふ―夢には見ゆめれど、戀に心のまよひて見えぬと思ふにやあらんと也

忘るゝものぞ―一訓「忘れむものぞ」

玉桙の―枕詞を直に道の意に用ひたり、即ち君が住む方に行くべき道の里人云々の意

面忘れなむ―我が面を忘れなん

我が命云々―三四句、一訓「我命の生けらむ日こそ」

早も明けぬかも―早く明けよかし、本文「不」を略す

人言の、繁き間守ると、逢はずあらば、終にや兒らが、面忘れなむ。

戀死。後何爲。吾命。生日社。見幕欲爲禮。

戀ひ死なむ、後は何せむ。我が命、生ける日にこそ、見まく欲すれ。

敷細。枕動而。宿不所寢。物念此夕。急明鴨。

敷妙の、枕動きて、寢ねらえず、物思ふ今宵、早も明けぬかも。

不往吾。來跡可夜。門不閉。何怜吾妹子。待筒在。

行かぬ我を、來むとか夜も、門さゝず、あはれ我妹子、待ちつゝあらむ。

斯くしつゝ、我が待つしるし、あらぬかも。世の人皆の、常ならなくに。

人事。茂君。玉梓之。使不遣。忘跡思名。

人言の、繁けき君に、玉章の、使も遣らず。忘ると思ふな。

大原。古郷。妹置。吾稲金津。夢所見乞。

大原の、古りにし里に、妹を置きて、我寝ね兼ねつ。夢に見えこそ。

夕去者。公來座跡。待夜之。名凝衣今。宿不勝爲。

夕されば、君來まさむと、待ちし夜の、名残ぞ今も、寝ねがてにする。

不相思。公者在良思。黒玉。夢不見。受旱宿跡。

相思はず、君はあるらし。ぬば玉の、夢にも見えず、うけびて寝れど。

石根蹈。夜道不行。念跡。妹依者。忍金津毛。

岩根蹈み、夜道は行かじと、思へれど、妹によりては、忍びかねつも。

人事。茂間守跡。不相在。終八子等。面忘南。

あらぬかも―あれかし、本文、上に「不」を略す、かかる例集中に多し

人言云々―一二の句、一訓「人言を茂みと君に」然るべし

大原―十市郡藤原の都のあたりにあり、奈良へ都をうつされて古里となれり

受旱―一說、「旱」は「日手」の誤

うけびて―祈りて

忘戸在者―宣長說「戸」は「弖」の誤にて「わすれてあらば」
男じものや―男たるものの〜の
耳にた易し―た易く大方の樣に聞ゆれども
枉言―「枉」は「狂」の誤に
何のたは言―自ら反省していふ也
相見而―上に「不」の脫せるか、然らば「あひみずて」と訓むべし
幾久しにも―訓「いくばくひさも」
小可者在來―「小可」は「所」の誤にて「からくはありけり」か、又「者」は「曾」の誤にて「からくぞありける」か

早や行きて、何時しか君を、逢見むと、思ひし心、今ぞ和ぎぬる。
面形之。忘戸在者。小豆鳴。男士物屋。戀乍將居。
面形の、忘るとならば、あぢきなく、男じものや、戀ひつゝ居らむ。
言云者。三三二田八酢四。小九毛。心中二。我念奈九二。
言にいへば、耳にた易し、少くも、心の中に、我が思はなくに。
小豆奈九。何枉言。今更。小童言爲流。老人二四手。
あぢきなく、何のたは言、今更に、童言する。老人にして。
相見而。幾久毛。不有爾。如年月。所思可聞。
相見ては、幾久しにも、あらなくに、年月の如、思ほゆるかも。
丈夫登。念有吾乎。如是許。令戀波。小可者在來。
丈夫と、思へる我を、斯くばかり、戀ひせしむるは、宜べにざりける。
如是爲乍。吾待印。有鴨。世人皆乃。常不在國。

心さへ、またせる君に、何をかも、言はずて言ひしと、我が盗まはむ。

面忘。太爾毛得爲也登。手握而。雖打不寒。戀之奴。

面忘れ、だにも得すやと、手握りて、打てども懲りず。戀の奴は。

希將見。君乎見常衣。左手之。執弓方之。眉根搔禮。

珍しき、君を見むとぞ、左手の、弓執る方の、眉根搔きつれ。

人間守。蘆垣越爾。吾妹子乎。相見之柄二。事曾左太多寸。

人間守り、葦垣越しに、我妹子を、逢見しからに、言ぞさだ多き。

今谷毛。目莫令乏。不相見而。將戀年月。久家眞國。

今だにも、目な乏しめそ。相見すて、戀ひむ年月、久しけまくに。

朝宿髮。吾者不梳。愛。君之手枕。觸義之鬼尾。

朝寝髪、我は梳らじ。うつくしき、君が手枕、觸れてしものを。

早去而。何時君乎。相見等。念之情。今曾水葱少熱。

またせる―奉るの古語、古義には「まつれる」と訓ずべしといへり

何をかも―宣長説、本文「乎」は「之」の誤にて「なにしかも」

盗まはむ―盗まむの延言にて、偶らんの意

雖打不寒―「寒」一本「塞」に作る「うてどさやらず」と訓むべし

面忘れ云々―人をひたすら忘るゝ迄は難くとも面をだに忘れんとするにかなはずとて云々、一説「得すやと」は「得せむやと」と訓ずべし

眉根搔禮―「禮」は「類」の誤か、一説、第二句「君見むとこそ」と訓を改め、五句はもとのまゝ

左手の云々―左の眉根のかゆければ人に逢ふといふ諺ありしならん

人間守り―人目のひまをうかゞひて

言ぞさだ多き―色々に評定する人言の多きをいへり

今だにも云々―男の旅立ちの近き時の歌、今の程なりともしばしば相見給へと也

久しけまくに―久しからむにの延言

觸義之―「義」は「羲」の誤

凡。吾之念者。如是許。難御門乎。退出米也母。
大方に、我し思はば、斯くばかり、難き御門を、退り出めやも。

將念。其人有哉。烏玉之。毎夜君之。夢西所見。
思ふらむ、其の人なれや、ぬば玉の、夜毎に君が、夢にし見ゆる。
或本歌云。夜晝不云吾戀渡。

如是耳。戀者可死。足乳根之。母毛告都。不止通爲。
斯くしのみ、戀ひば死ぬべみ、垂乳根の、母にも告げつ。止まず通はせ。

丈夫波。友之驂爾。名草溢。心毛將有。我衣苦寸。
丈夫は、友の騒ぎに、慰もる、心もあらむを、我ぞ苦しき。

僞毛。似附曾爲。何時從鹿。不見人戀爾。人之死爲。
僞も、似つきてぞする。何時よりか、見ぬ人戀ふに、人の死にせし。

情左倍。奉有君爾。何物乎鴨。不云言此跡。吾將竊食。

大方に—一訓「おほろかに」

難き御門—禁裏の御門の出入安からぬをいふ、宿直などする人の忍びて妹が許へ行きたるなり

思ふらむ云々—相思はむ人とも無きにの意「や」は反語

斯くしのみ—一訓「斯くのみに」

慰もる—古義「なぐさむる」とあるべき由論じたり

僞も云々—未だ親しく相見し事もなき人より死ぬばかり戀しく思ふ由云ひ來れる返歌ならん

言寄妻—妹と我と相思ふといふことを里人のいひよする妻といふ意
荒垣—透間ある垣、よそにといはん料也

裳の裾濡れぬ—君を送り出でて草の露に濡れしと也

靡けて—靡かせて、一訓「ぬらして」意は同じ

籠妻—忍びて戀ふる妻

見後爾曾毛—「曾毛」は「毛曾」なるべきを上下に誤れるか

里人之。言縁妻乎。荒垣之。外也吾將見。惡有名國。
里人の、言寄妻を、荒垣の、外にや我が見む。憎からなくに。

他眼守。君之隨爾。余共爾。夙興乍。裳裾所沾。
人目守る、君がまに〱、我さへに、早く起きつゝ、裳の裾濡れぬ。

夜干玉之。妹之黒髪。今夜毛加。吾無床爾。靡而宿良武。
ぬば玉の、妹が黒髪、今宵もか、我無き床に、靡けて寝らむ。

花細。葦垣越爾。直一目。相視之兒故。千遍嘆津。
花ぐはし、葦垣越しに、唯一目、相見し兒ゆゑ、千度嘆きつ。

色出而。戀者人見而。應知。情中之。隱妻波母。
色に出でて、戀ひば人見て、知りぬべみ、心の中の、籠妻はも。

相見而者。戀名草六跡。人者雖云。見後爾曾毛。戀益家類。
逢見ては、戀慰むと、人は言へど、見て後にぞも、戀ひまさりける。

玉垂之。小簀之垂簾乎。往褐。寐者不眠友。君者通速爲。
玉垂の、小簾の垂簾を、行きがちに、寢はなさずとも、君は通はせ。

垂乳根乃。母白者。公毛余毛。相鳥羽梨丹。年可經。
垂乳根の、母に申さば、君も我も、逢ふとは無しに、年ぞ經ぬべき。

愛等。思篇來師。莫忘登。結之紐乃。解樂念者。
うるはしと、思へりけらし。忘るなと、結びし紐の、解くらく思へば。

昨日見而。今日社間。吾妹兒之。幾許繼手。見卷欲毛。
昨日見て、今日こそ間、我妹子が、幾許繼ぎて、見まく欲しきも。

人毛無。古郷爾。有人乎。愍久也君之。戀爾令死。
人も無き、古りにし里に、ある人を、めぐくや君が、戀に死なせむ。

人事之。繁間守而。相十方。八反吾上爾。事之將繁。
人言の、繁き間守りて、逢へりとも、やへ我が上に、言の繁けむ。

き(一)本文「流」は「親」の誤にて「めづらしききみこよひきませり」か

往褐―(一)「持揭」の誤にて「もちかゝげ」か(二)「ゆきがてゝ」と訓む(三)「引揭」の誤にて「ひきかゝげ」

寢はなさずとも―共寢はならずともの意か、眞淵は「君が入來ん戸口の簾を持ちかゝげて、いをも寢ず待ちをるとも、其勞は思はじ、ひとへに君が通ひだに來らばといふ也」といへり

うるはしと―一訓「うつくしと」

忘るな「と」―一訓「な忘れと」

見卷欲毛―古義には舊寫本に依るとて「見卷之欲毛」と改め、「見まくしはしも」と訓ず

今日こそ間―今日のみこそ隔てたれの意、一說「今日こそへだて」と訓ず

古りにし里にある人―妹自らいふ

めぐく―略解は、見る目の苦しきにて、即ちむごしの意といひ、契沖はかはゆげにの意といへり

守りて―うかゞひて

やへ―いよゝ、一說、本文「八多」の誤にて「はた」

其の門—妹が門

しく〳〵—一訓「しくしくに」重々と也

逢ひ見れば—一訓「逢ひ見ては」

ものから—ものながら

朝戶遣—朝の遣戶

あぢさはふ—枕詞

目が欲る—(一)見まほし

立念。居毛曾念。紅之。赤裳下引。去之儀乎。
立ちて思ひ、居てもぞ思ふ。紅の、赤裳裾曳き、去にし姿を。

念之。餘者。爲便無三。出曾行之。其門乎見爾。
思ふにし、餘りにしかば、術を無み、出でてぞ行きし、其の門を見に。

情者。千遍敷及。雖念。使乎將遣。爲便之不知久。
心には、千度しく〳〵、思へども、使を遣らむ、術の知らなく。

夢耳。見尙幾許。戀吾者。寤見者。益而如何有。
夢のみに、見てすら幾許、戀ふる我は、現に見てば、まして如何にあらむ。

對面者。面隱流。物柄爾。繼而見卷能。欲公義。
逢ひ見れば、面隱さるゝ、ものからに、繼ぎて見まくの、欲しき君かも。

旦戶遣乎。速莫開。味澤相。目之乏流君。今夜來座有。
朝戶遣を、早くな開けそ。あぢさはふ、目が欲る君が、今宵來ませる。

現には、逢ふ由も無し。夢にだに、間無く見む君、戀に死ぬべし。

誰彼登。問者將答。爲便乎無。君之使乎。還鶴鴨。

誰そ彼と、問はば答へむ、術を無み、君が使を、返しつるかも。

不念丹。到者妹之。歡三跡。咲牟眉曳。所思鴨。

思はぬに、至らば妹が、嬉しみと、笑まむ眉引、思ほゆるかも。

如是許。將戀物衣常。不念者。妹之手本乎。不纒夜裳有寸。

斯くばかり、戀ひむものぞと、思はねば、妹が袂を、まかぬ夜もありき。

如是谷裳。吾者戀南。玉梓之。君之使乎。待也金手武。

斯くだにも、我は戀ひなむ、玉梓の、君が使を、待ちや兼ねてむ。

妹戀。吾哭涕。敷妙木。枕通而。袖副所沾。

妹に戀ひ、我が泣く涙、敷妙の、枕通りて、袖さへ濡れぬ。

或本歌云。枕通而。卷者寒母。

宣長は、「君」は誤字にて「まなくみえこそ」とあるべしといへり

問はば—母などのなるべし

思はぬに—思ひがけず、不意に
眉引—眉、眉はたわみて長ければ引くといふ也

斯くだにも—斯く君が使をだにもの意、結句にかけて見るべし
戀ひなむ—「なむ」は助辭にあらず「のむ」と同じく望み願ふ意也
敷妙木—「木」は「之」の誤か

獨り寢と―獨り寢するとて

薦云々―略解に「莚は蔣にて、中重也、席は莚にて、上重也、その上重の綾莚はそこなはれて、編緒のみに成りぬとも、中重の蔣までは朽ち亂るまじければ、夫子と共寢せし疊を、いつまでも取りもかへず、敷き寢つゝ待ちなんといへり」

否をかも―さうであらうか、さうでは有るまいか

振分の髮―古兒童の頭の左右にふりわけて垂らしたる髮

若草を―一訓「春草を」

髮にたくらむ―若草の髮の如きを、其髮にたぐりそへつかぬる也

ゆきみの里―地名、所在未詳

若草の―枕詞

待ちや兼ねてむ―待つに堪へ難くて今日も暮さなんか

間無見君―「まなく見え君」と訓ずるが可ならん、

獨り寢と、薦朽ちめやも。綾莚、緒になるまでに、君をし待たむ。

相見者。千歳八去流。否乎鴨。我哉然念。待公難爾。

相見ては、千歳や去ぬる。否をかも。我や然か思ふ。君待ちがてに。

振別之。髮乎短彌。青草。髮爾多久濫。妹乎師曾於母布。

振分の、髮を短み、若草を、髮にたくらむ、妹をしぞ思ふ。

徘徊。往箕之里爾。妹乎置而。心空在。土者蹈鞆。

たもとほり、ゆきみの里に、妹を置きて、心空なり。地は蹈めども。

若草乃。新手枕乎。卷始而。夜哉將間。二八十一不在國。

若草の、新手枕を、まき初めて、夜をや隔てむ。憎くあらなくに。

吾戀之。事毛語。名草目六。君之使乎。待八金手六。

我が戀ひし、事も語らひ、慰めむ、君が使を、待ちや兼ねてむ。

寤者。相緣毛無。夢谷。間無見君。戀爾可死。

おほならば—おほよその心ならば、「おほかたけ」とも訓むべし
靡けて居らむ—一訓「ぬらしてをらむ」ぬらくと靡かす義にて姿媚めくをいふ也
言者—「言は我也」と原註
人のゆゑにか—人なるものを
人に云々—人に事々しくいひさわがるゝを思へば
息の緒に云々—命をかけて妹を思へば
我が持てる—一訓「我が持たる」
よしゑ—よしや

おほならば、誰が見むとかも、ぬば玉の、我が黒髪を、靡けて居らむ。

面忘。何有人之。爲物焉。言者爲金津。繼手志念者。

面忘れ、如何なる人の、するものぞ。我はし兼ねつ。繼ぎてし思へば。

不相思。人之故可。璞之。年緒長。言戀將居。

相思はぬ、人のゆゑにか、新玉の、年の緒長く、我が戀ひ居らむ。

凡乃。行者不念。言故。人爾事痛。所云物乎。

大方の、業とは思はず。我が故に、人にこちたく、言はれしものを。

氣緒爾。妹乎思念者。年月之。往覽別毛。不所念鳬。

息の緒に、妹をし思へば、年月の、行くらむ別も、思ほえぬかも。

足千根乃。母爾不所知。吾持留。心者吉惠。君之隨意。

垂乳根の、母に知らえず、我が持てる、心はよしゑ、君がまにまに。

獨寢等。茭朽目八方。綾席。緒爾成及。君乎之將待。

しみと咲牟眉曳（エマムマヨヒキ）おもはゆるかも」と有る方穩かなり

ころはえ―叱り罵られ

思ひ悔ゆべき―わが夫と契りし心はかはらずして、夫に悔いしむる事はあらじと也

しみゝに―しみ〳〵にの略繁く

麁玉―遠江國、一說枕詞
寸戸―遠江の地名、一說、城の柵をいふか
編目―籬の透間

命は棄てつ―命はなきものと覺悟したりの意ならん

待つらむに、至らば妹が、嬉しみと、笑まむ姿を、行きて早や見む。

誰此乃。吾屋戸來喚。足千根。母爾所嘖。物思吾呼。
誰ぞ此の、我が宿に來呼ぶ。垂乳根の、母にころはえ、もの思ふ我を。

左不宿夜者。千夜毛有十方。我背子之。思可悔。心者不持。
さ寢ぬ夜は、千夜もありとも、我が背子が、思ひ悔ゆべき、心は持たじ。

家人者。路毛四美三荷。雖往來。吾待妹之。使不來鴨。
家人は、道もしみゝに、通へども、我が待つ妹が、使來ぬかも。

璞之。寸戸我竹垣。編目從毛。妹志所見者。吾戀目八方。
麁玉の、寸戸が竹垣、編目ゆも、妹し見えなば、我が戀ひめやも。

吾背子我。其名不謂跡。玉切。命者棄。忘賜名。
我が背子が、其の名告らじと、魂きはる、命は棄てつ。忘れ給ふな。

凡者。誰將見鴨。黑玉乃。我玄髪乎。靡而將居。

刈薦の、一重を敷きて、さ寢れども、君とし寢れば、寒けくも無し。

垣幡。丹頬經君叫。率爾。思出乍。嘆鶴鴨。

燕子花、匂へる君を、いさゝめに、思ひ出でつゝ、嘆きつるかも。

恨登。思狹名盤。在之者。外耳見之。心者雖念。

恨みむと、思ひて背は、ありしかば、外のみぞ見し。心は思へど。

散頰相。色者不出。小文。心中。吾念名君。

さにづらふ、色には出でず。少くも、心の中に、我が思はなくに。

吾背子爾。直相者社。名者立米。事之通爾。何其故。

我が背子に、直に逢はばこそ、名は立ため。言の通ふに、何かそこ故。

懃。片念爲歟。比者之。吾情利乃。生戸裳名寸。

懃に、片思すれか、此の頃の、我が心利の、生けりとも無き。

將待爾。到者妹之。懽跡。咲儀乎。往而早見。

さ寢れども―「さ」は接頭語

燕子花―枕詞

匂へる―一訓「にづらふ」從ふべし

いさゝめに―かりそめに

狹名盤―誤字あるべし、古義には「思名積而」（オモヒナヅミテ）かといへどいかゞ

さにづらふ―枕詞

少くも云々―少くは思はぬにて、深く思ふといふ意

言の通ふに云々―言のみ往來するにそれ故何とて名は立つべき

片思すれか―片思すればか

心利―心神

咲儀乎―此卷末に、「おもはぬにいたらば妹がうれ

敷妙の、枕に人は、言問へや。其の枕には、苔生ひにたり。

右二首。

以前一百四十九首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

正述二心緒一

足千根乃。母爾障良婆。無用。伊麻思毛吾毛。事應成。

垂乳根の、母に障らば、徒に、汝も我も、事なすべしや。

吾妹子之。吾呼送跡。白細布乃。袂漬左右二。哭四所念。

我妹子が、我を送ると、白妙の、袖ひづまでに、泣きし思ほゆ。

奥山之。眞木乃板戸乎。押開。思惠也出來根。後者何將爲。

奥山の、眞木の板戸を、押開き、しゑや出で來ね。後は何せむ。

苅薦能。一重叫敷而。紗眠友。君共宿者。冷雲梨。

言問へや─來りて相語らへの意、一說には、君の枕動きて夜をも寢ずといふは我に對してにはあらず枕に向ひていふ事ならんが其枕は云々の義とせり

苔生ひにたり─一訓「苔むしにたり」

事應成─下に「哉」を脫せしか、一訓「事成るべしや」従ふべし

障らば─憚りかゝづらはゞ

奥山の─枕詞

しゑや─歎息の詞、又、よしやさはる事ありともの意

隱口の、豊泊瀬路は、常滑の、恐き道ぞ。戀ふらくはゆめ。
味酒之。三毛侶乃山爾。立月之。見我欲君我。馬之足音曾爲。
甘酒を、三諸の山に、立つ月の、見が欲し君が、馬の足音ぞする。

右三首。

雷神。小動。刺雲。雨零耶。君將留。
鳴神の、暫しとよみて、さし曇り、雨も降れやも。君を止めむ。
雷神。小動。雖不零。吾將留。妹留者。
鳴神の、暫しとよみて、降らずとも、我は止まらむ。妹し止めば。

右二首。

布細布。枕動。夜不寐。思人。後相物。
敷妙の、枕動きて、夜をも寢ず、思ふ人には、後も逢はむかも。
敷細布。枕人。事問哉。其枕。苔生負爲。

戀ふらくはゆめ—我を戀ふとならばゆめ渡ることなかれの意か、されど穩かならず、「あかしてをゆけ」などあるべき所かと略解にいひ、古義には「戀」は「汝心」の誤にて「なが心ゆめ」か、女より男に向ひ、汝の心をつゝしみてゆめ〳〵過ちするなといふ也といへり

甘酒を—枕詞、本文「之」は「乎」の誤かといへど、原文のまゝ「うまざけの」にても可か

右三首—「右二首」とあるべし

小動—宣長說「小」は「光」の誤にて、「ひかりとよみて」「大なる」も然り

降れやも—降れかし

後相物—「後」は「復」「物」は「疑」の誤かといふ、古義には原文のまゝ「後逢ふものを」と訓ぜり

道行占―前の夕占に同じ
我に告りつる―一訓「我に告りてき」

神の御門―朝廷の門
畏みと―かしこまりて

陽炎の―枕詞、もと「蜻」とあるを「限」と改めし也、古義の説によればもとのまゝ「たまかぎる」
隱れたる妹―一訓「こもりたる妻」
袖巻―宣長説「巻」は「纏」の誤にて「そでふれ」
早けば―早ければ

玉桙。路往占。占相。妹逢。我謂。
玉桙の、道行占に、占へば、妹に逢はむと、我に告りつる。

問答

皇祖乃。神御門乎。懼見等。侍従時爾。相流公鴨。
天皇の、神の御門を、畏みと、侍ふ時に、逢へる君かも。

眞祖鏡。雖見言哉。玉蜻。石垣淵乃。隱而在孀。
眞十鏡、見とも言はめや。陽炎の、岩垣淵の、隱れたる妹。

右二首。

赤駒之。足我枳速者。雲居爾毛。隱往序。袖巻吾妹。
赤駒の、足掻早けば、雲居にも、隱れ行かむぞ。袖まかむ我妹。

隱口乃。豊泊瀬道者。常滑乃。恐道曾。戀由眼。

か、古義には「わが頭髮の方へむかへさす」といへどいかゞ

眷浦經—「眷」は「吾」の誤にて「われうらぶれぬ」か、又「眷」は「眷」の省畫にて「こひうらぶれぬ」かともいふ

射然—「射」は「何」の誤にて「なにしか」か

汝—枕をさす
主—男

浮沙生吾—「浮草浮吾」の誤にて「浮草の浮きても吾は」かといふ

夕占—辻占といふ類にて、辻に出居て往來の人の言語を聞きて吉凶を占ふなるべし

里遠。眷浦經。眞鏡。床重不去。夢所見與。
里遠み、うらぶれにけり。眞十鏡、床の邊去らず、夢に見えこそ。

眞鏡。手取以。朝朝。雖見君。飽事無。
眞十鏡、手に取持ちて、朝なさな、見れども君は、飽くことも無し。

夕去。床重不去。黄楊枕。射然汝。主待固。
夕されば、床の邊去らぬ、黄楊枕、何時しか汝が、主待ち難き。

解衣。戀亂乍。浮。沙生吾。戀度鴨。
解衣の、戀ひ亂れつゝ、浮きてのみ、眞砂なす我が、戀ひ渡るかも。

梓弓。引不許。有者。此有戀。不相。
梓弓、引きて許さず、あらませば、斯かる戀には、逢はざらましを。

事靈。八十衢。夕占問。占正謂。妹相依。
言靈の、八十の衢に、夕占問ふ、占正に告れ。妹に逢はむ由。

たらちね……籠―「籠れる」の序

肥人―古訓に「こまひと」とあるに依れば「肥」は「狛」の誤なるべし

額髮結へる―古へ男は髮を額にて結びたりしならん、古義には「ぬかがみ」と訓ずべしといへり

染木綿―古へ髮を結ぶに多く染めし木綿を用ひしと見ゆ、又二つの「染」の字、一訓上なるは「しめ」下なるは「しみ」

吾名謂―宣長說「吾」は「君」の誤、古義には此說を非として、四五の句を「あが名はのりつ、つまと恃ませ」と訓ぜり

名に負ふ夜聲―神代紀一「狗人請哀之、弟還出涸瓊、則潮自息、於是兄知弟有神德、遂以伏事其弟、是以火酢芹命苗裔諸隼人等、至今不離天皇宮墻之傍、代吠狗而奉事者也云々」、大嘗會式「隼人司率隼人分立左右朝集堂前、待開門乃發聲」

君によりてば―君に依りたらば、又君がためとならば

朝附日、枕詞

向ふ黄楊櫛―朝に櫛笥に向ふ意にて斯く續けたる

たらちねの、母がかふ蠶の、繭籠、籠れる妹を、見む由もがも。

肥人。額髮結在。染木綿。染心。我忘哉。

貴人の、額髮結へる、染木綿の、染めし心は、我忘れめや。

一云。所忘目八方。

早人。名負夜音。灼然。吾名謂。嬬恃。

隼人の、名に負ふ夜聲、著く、君が名告らせ。妻と頼まむ。

劍刀。諸刃利。足踏。死死。公依。

劍太刀、諸刃のときに、足踏みて、死にも死なむ。君によりてば。

我妹。戀度。劍刀。名惜。念不得。

我妹子に、戀ひし渡れば、劍太刀、名の惜しけくも、思ひ兼ねつも。

朝月日。向黄楊櫛。雖舊。何然公。見不飽。

朝附日、向ふ黄楊櫛、古りぬれど、何しか君が、見るに飽かざらむ。

我立ち—其身自ら立ち
なりぬや—木の實のなる
に戀の成就するを譬ふ
たづ〳〵し—たどり〳〵
しくたよりなき心地す
此度—「此」は「飛」の誤か
こゆ—こゝを
足沾來—一訓「足濡れ來
しを」又、宣長說、「沾」は
「腦」の誤にて「あなやみ
こしを」
年にあらば如何に—障あ
りて一年も逢はぬことあ
らば如何にあらんの意

橘の、下に我立ち、下枝取り、なりぬや君と、問ひし兒らはも。
天雲爾。翼打附而。飛鶴乃。多頭多頭思鴨。君不座者。
天雲に、羽根打附けて、飛ぶ田鶴の、たづ〳〵しかも、君しまさねば。
妹戀。不寐朝明。男爲鳥。從是此度。妹使。
妹に戀ひ、寢ねぬ朝けに、鴛鴦の、こゆ飛び渡る。妹が使か。
念。餘者。丹穗鳥。足沾來。人見鴨。
思ふにし、餘りにしかば、鳰鳥の、足濡し來しを、人見けむかも。
高山。岑行宍。友衆。袖不振來。忘念勿。
高山の、峰行くしゝの、友を多み、袖振らず來ぬ。忘ると思ふな。
大船。眞檝繁拔。榜間。極太戀。年在如何。
大船に、眞檝しゞ貫き、漕ぐ程も、懇戀ひし。年にあらば如何に。
足常。母養子。眉隱。隱在妹。見依鴨。

が我を待ちかねて、玉藻の如くなびきふせるらん

我が二人—我とその君と二人

君を待ち出ね—待ちつけよの意、本文「牟」は「年」の誤ならん

袖振るが—妹と別るゝ時、妹が袖ふるをいふ

茅渟の海—和泉國
人の兒ゆゑに—人の妻なるものを

不相止者—「者」は「害」の誤か

うれむぞは—いかんぞ

立回香瀧—未詳、(一)「瀧」は「樹」の誤にて「たつむろのきの」(二)「瀧」は「檝」の誤にて「たつわかまつの」

心哀—一說「心哀」にて「ねもころに」か

君不來者。形見爲等。我二人。植松木。君乎待出牟。
君來ずは、形見にせむと、我が二人、植ゑし松の木、君を待ち出ね。
袖振。可見限。吾雖有。其松枝。隱在。
袖振るが、見ゆべき限り、我はあれど、其の松が枝に、隱れたりけり。
珍海。濱邊小松。根深。吾戀度。人子姤。
茅渟の海、濱邊の小松、根深めて、我が戀ひ渡る。人の兒ゆゑに。
或本歌云。血沼之海之。鹽干能小松。根母己呂爾。戀屋度。人見故爾。
平山。子松末。有廉叙波。我思妹。不相止者。
奈良山の、小松がうれの、うれむぞは、我が思ふ妹に、逢はず止みなむ。
礒上。立回香瀧。心哀。何深目。念始。
礒の上に、立ちまふ瀧の、心いたく、何に深めて、思ひ初めけむ。
橘。本我立。下枝取。成哉君。問子等。

秋柏。潤和川邊。細竹目。人不顏面。公無勝。
秋柏、うるわ川邊の、篠のめの、人に忍べば、君に堪へなく。
核葛。後相。夢耳。受日度。年經乍。
眞葛、後も逢はむと、夢のみを、うけび渡りて、年は經につゝ。
路邊。壹師花。灼然。人皆知。我戀孋。
路の邊の、いちしの花の、著く、人皆知りぬ。我が戀妻は。
或本歌云。灼然。人知爾家里。繼而之念者。
大野。跡狀不知。印結。有不得。吾眷。
大野らに、たづきも知らず、標結ひて、ありがてましも。我が歸り見ば。
水底。生玉藻。打靡。心依。戀此日。
水底に、生ふる玉藻の、打靡き、心を寄せて、戀ふる此の頃。
敷栲之。衣手離而。玉藻成。靡可宿濫。和乎待難爾。
敷妙の、衣手かれて、玉藻なす、靡きか寢らむ。我を待ちがてに。

ふ
押伏せて―(一)草を結ぶには彼と是と押伏せて合せ結べばいふ、(二)本文「押」は「根」の誤にて「ねもころに」か
秋柏―枕詞
うるわ川―畿内の内にあるか、未詳
篠のめ―「め」は「むれ」の約言
人に忍べば云々―人目を忍ぶ故に君に逢ひ難くして思に堪へざる意
眞葛―枕詞
夢のみをうけび―其間の心やりに、夢にだにみんと神に祈りつゝの意、一說「夢のみにうけひ」と訓む、只夢に見るばかりにてそれを頼みに思ひつゝの意
いちしの花―諸說あれど未詳也、「いちしろく」の序
吾眷―宣長說「眷」は「戀」の誤にて「ありぞかねつるわがこふらくは」
此日―「此」は「比」の誤
敷妙の―枕詞
衣手かれて云々―衣手かれては、我袖を離れて妹

解く人はあらじ—君をおきて外には也

しだ草—山に生ふる常緑葉なると異なりて冬枯るる、一種の齒朶といふ、一說、忍草

忘草—萱草

打つ田—打返す田

擇らえし我ぞ—擇り捨てられし我ぞ、卷十二に、「水を多みあげにたねまきひえを多みえらえしわれぞよるひとりぬる」と有るを誤り傳へしかといふ

名負—誤字あるべし、一說「山の」と訓ずるかとい

見渡しの、三室の山の、巖菅、懇我は、片思ぞする。

一云。三諸山之石小菅。

菅根。惻隱君。結爲。我紐緒。解人不有。

菅の根の、懇君が、結びたる、我が紐の緒を、解く人はあらじ。

山菅。亂戀耳。令爲乍。不相妹鴨。年經乍。

山菅の、亂れ戀ひのみ、せしめつゝ、逢はぬ妹かも。年は經につゝ。

我屋戸。蘐子太草。雖生。戀忘草。見未生。

我宿の、軒のしだ草、生ふれども、戀忘草、見れど未だ生ひず。

打田。稗數多。雖有。擇爲我。夜一人宿。

打つ田にも、稗は數多に、ありといへど、擇らえし我ぞ、夜一人寢る。

足引。名負山菅。押伏。公結。不相有哉。

足引の、名に負ふ山菅、押伏せて、君し結ばば、逢はざらめやも。

浅茅生の—一訓「あさぢはら」一二の句は「空言」の序
空言—うそ、古義には「むかごと」と訓ずべき事を極論せり
草深百合の—「後」の序、「後」の古語「ゆり」なれば、「後云」も「ゆりにちふ」と訓ずべしといふ説あり
潮葦—「潮」は「湖」の誤
しり草—草の名、藺(ヰ)の一種なるべしといふ、和名抄「藺和名爲鷺色立成云鷺尻刺」
山ちさ—木の名
白露重み—一訓「白露しげみ」
潮—「湖」の誤
さ根這ふ小菅忍ばずて—宣長は、本文「核」は「根」「不」は「之」の誤にて「ねはふこすげのねもころに」かといへり、一二の句は序也
泉—山城國相樂郡
おしなみに—なみ一通りに
見渡—「美酒」の誤にて「うまさけの」といふ枕詞か

浅茅生の、小野に標結ふ、空言を、如何なりと言ひて、君をば待たむ。
路邊。草深百合之。後云。妹命。我知。
路の邊の、草深百合の、後にちふ、妹が命を、我は知らめや。
潮葦。交在草。知草。人皆知。吾裏念。
湊葦に、交れる草の、しり草の、人皆知りぬ。我が下思。
山萵苣。白露重。浦經。心深。吾戀不止。
山ちさの、白露重み、うらぶるゝ、心を深み、我が戀止まず。
潮。核延子菅。不竊隱。公戀乍。有不勝鴨。
湊に、さ根這ふ小菅、忍ばずて、君に戀ひつゝ、ありがてぬかも。
山代。泉小菅。凡浪。妹心。吾不念。
山城の、泉の小菅、おしなみに、妹が心は、我が思はなくに。
見渡。三室山。石穂菅。側隱吾。片念爲。

追出月―一說「追」は「照」の誤にて「てりいづるつきの」
及戀―一說、「及」は「後」の誤にて「のちこひむかも」

影に見え來ね―はのかにだにも見え來よといふ意なるべし

隱れ去ぬ―一訓「隱ろひぬ」
何しなぞへて―一訓「何になぞへて」なぞへてはなぞらへての意

遠妻の、ふりさけ見つゝ、忍ぶらむ。此の月の面に、雲な棚引き。

山葉。追出月。端端。妹見鶴。及戀。

山の端に、射し出づる月の、はつ〳〵に、妹をぞ見つる。戀しきまでに。

我妹。吾矣念者。眞鏡。照出月。影所見來。

我妹子し、我を思はば、眞十鏡、照り出づる月の、影に見え來ね。

久方。天光月。隱去。何名副。妹偲。

久方の、天照る月も、隱れ去ぬ。何しなぞへて、妹を忍ばむ。

若月。清不見。雲隱。見欲。宇多手比日。

三日月の、さやにも見えず、雲隱り、見まくぞ欲しき。うたて此の頃。

我背兒爾。吾戀居者。吾屋戸之。草佐倍思。浦乾來。

我が背子に、我が戀ひ居れば、我が宿の、草さへ思ひ、うら枯れにけり。

朝茅原。小野印。空事。何在云。公待。

君—旅にて逢へる女を指すか
高山之—「之」は後に加へしならん
言はれし—人にいひさわがれし
峰の朝霧—下に「の如く」と補ふ.
大野らに…下に—「寄り來」の序、本文「被敷」は誤字あるべし
何此夜—宣長說、「何」は「待」の誤にて「まつにこのよを」
急事—下に「成」の字を脫せる也

春日山、雲井隱りて、遠けども、家は思はず、君をし思ほゆ。

我故。所云妹。高山之。岑朝霧。過兼鴨。
我が故に、言はれし妹は、高山の、峰の朝霧、過ぎにけむかも。

烏玉。黑髮山。山草。小雨零敷。益益所思。
ぬば玉の、黑髮山の、山菅に、小雨降りしき、しく〳〵思ほゆ。

大野。小雨被敷。木本。時依來。我念人。
大野らに、小雨降りしく、木の下に、時々寄り來。我が思ふ人。

朝霜。消消。念乍。何此夜。明鴨。
朝霜の、消なば消ぬべく、思ひつゝ、如何で此の夜を、明しなむかも。

吾背兒我。濱行風。彌急。急事。益不相有。
我が背子が、濱行く風の、彌早に、はや事なさば、いや逢はざらむ。

遠妹。振仰見。偲。是月面。雲勿棚引。

白玉を、間明けつゝ、貫ける緒も、括り寄すれば、後逢ふものを。

香山爾。雲位桁曳。於保保思久。相見子等乎。後戀牟鴨。

香具山に、雲井棚引き、おほゝしく、逢ひ見し兒らを、後戀ひむかも。

雲間從。狹經月乃。於保保思久。相見子等乎。見因鴨。

雲間より、さ渡る月の、おほゝしく、逢ひ見し兒らを、見む由もがも。

天雲。依相遠。雖不相。異手枕。吾纏哉。

天雲の、寄り合ひ遠み、逢はずとも、あだし手枕、我はまかめや。

雲谷。灼發。意追。見乍爲。及直相。

雲だにも、著くし立たば、慰めに、見つゝし居らむ。直に逢ふまで。

春楊。葛山。發雲。立座。妹念。

春柳、葛城山に、立つ雲の、起ちても居ても、妹をし思ほゆ。

春日山。雲座隱。雖遠。家不念。公念。

烏玉—「烏」は「白」の誤か
桁曳—「桁」は「棚」の誤か、又「桁」を「たな」とも訓ずるならんか
おほゝしく—覺束なく仄かに
天雲の云々—天雲の如く隔りて寄り合ひ難きをいふ
我はまかめや—一訓「あれまかむかも」又「あれまかめやも」
意追—「追」は「進」の誤、一說「追」は「遣」にて「心やり」
見乍爲—「爲」は「居」の誤か
葛山—「葛」の下に「木」を脱せしか
春柳—枕詞
妹をし思はゆ—一訓「妹をしぞ思ふ」次の歌の五句も「君をしぞ思ふ」

盡きせぬものは—一訓「つきえぬものは」
澤泉—澤水
白眞弓—枕詞
磯邊の山—一說、近江國の地名か
命なれやも—命ならんや、略解に「いつ迄も永らふべき命ならねば命の限り戀ひつゝのみをらん」の意といへるはいかが、古義にいへる如く、身はたのみ難ければ豈心長閑かに只戀ひつゝのみあるべきとぢれつたき心持を詠めるならん
知れる時だに—略解に「妹にはじめて逢ふ事を得て、其母などにまだしらせねば、末はしらねど、今相知る時をだに、吾物と思ひ定めんと也」
念何畢—宣長說、「念」の下に「心」を脫し「畢」は「異」の誤にて「おもふこころはいつかかはらむ」

大地も、取れば盡くれど、世の中に、盡きせぬものは、戀にしありけり。
隱處。澤泉在。石根。通念。吾戀者。
籠水の、澤泉なる、岩根ゆも、通してぞ思ふ。我が戀ふらくは。
白檀。石邊山。常石有。命哉。戀乍居。
白眞弓、磯邊の山の、常磐なる、命なれやも。戀ひつゝ居らむ。
淡海海。沈白玉。不知。從戀者。今益。
近江の海、沈く白玉、知らずして、戀ひつるよりは、今ぞまされる。
白玉。纒持。從今。吾玉爲。知時谷。
白玉を、卷きてぞ持たる、今よりは、我が玉にせむ。知れる時だに。
白玉。從手纒。不忘。念。何畢。
白玉を、手に卷きしより、忘れじと、思ひしことは、何時か止むべき。
烏玉。間開乍。貫緒。縛依。後相物。

大船の―枕詞、以下三句は「いかなる」といふ爲めの序
香取―下總國にもあれどこゝは近江國か
隠さふ―隠すの延言
暫吾妹―宣長説に「暫」は「繁」の誤にて「ひとごとのしげけきわぎも」
綱手引く―海といはん料の序詞
淡海―下に今一字「海」を脱せしか
奥まけて―奥まへてといふに同じく、奥めて、深めての意
重下―「重」の下に「石」を脱す
妹が名告りつ―妹が名を言に出して云へり

大船の、香取の海に、碇下し、如何なる人か、物思はざらむ。
奥藻。隠障浪。五百重浪。千重敷敷。戀度鴨。
沖つ藻を、隠さふ浪の、五百重浪、千重しく〳〵に、戀ひ渡るかも。
人事。暫吾妹。繩手引。從海益。深念。
人言は、暫しぞ我妹、綱手引く、海よりまして、深くし思ほゆ。
淡海。奥島山。奥儲。吾念妹。事繁。
近江の海、沖つ島山、奥まけて、我が思ふ妹が、言の繁けく。
近江海。奥榜船。重下。藏公之。事待吾序。
近江の海、沖漕ぐ船に、碇下し、隠れて君が、言待つ我ぞ。
隠沼。從裏戀者。無乏。妹名告。忌物矣。
籠沼の、下ゆ戀ふれば、術を無み、妹が名告りつ、忌むべきものを。
大土。採雖盡。世中。盡不得物。戀在。

か、又、四五の二句、一訓「事かへさずぞ思ひそめてし」

かも川―山城國賀茂川ならん、此歌古義の訓によれば「かも川は後瀬靜けし後はあはむ妹にはあれは今ならずとも」

後瀬―川後といふに同じ、下流

水の上に云々―はかなき命に譬ふ、涅槃經「是身無常云々、如畫水隨畫隨合」

うけび―祈り、濁みて讀む方可ならん

外心―あだし心

七日越え來む―七日は日數の多きをいふ、一說、本文「七日」は「直」の誤にて「たゞにこえきぬ」

此の川の、水泡逆卷き、行く水の、言は反さじ。思ひ初めたれば。

鴨川。後瀬靜。後相。妹者我。雖不今。
かも川の、後瀬靜けく、後も逢はむ。妹には我よ、今ならずとも。

言出。云忌忌。山川之。當都心。塞耐在。
言に出でて、言はば由々しみ、山川の、激ぎつ心を、堰き敢へてけり。

水上。如數書。吾命。妹相。受日鶴鴨。
水の上に、數書く如き、我が命、妹に逢はむと、うけびつるかも。

荒礒越。外往波乃。外心。吾者不思。戀而死鞆。
荒礒越え、外行く波の、外心、我は思はじ。戀ひて死ぬとも。

淡海海。奧白浪。雖不知。妹所云。七日越來。
近江の海、沖つ白浪、知らねども、妹許と言はば、七日越え來む。

大船。香取海。慍下。何有人。物不念有。

紐鏡—枕詞のとかの山—山の名（所在地未詳）に、音通により「な解き」の意を掛けたるならん、一首の大意は、紐な解きそといふ山の名は、誰が故ぞや、思ふ人の來れる夜に、衣の紐解き明けずして寢んやはと也
山科—山城國宇治郡木幡の山を—後世「木幡山に」といひ習へるは甚だ非
馬はあれど—我は馬を持ちてはあれど
妹が云々—四五の二句、一訓「妹が目見ねばあれ戀ひにけり」
瀬々のしき浪—一訓「瀬瀬にしく浪」
千早人—枕詞
早き瀬に—早き時即ちさきれの意、一說、人言の繁きを喩ふ
後も—一訓「後は」
事不反—「反」は「變」の誤にて「ことはかはらじ」

紐鏡、のとかの山は、誰が故ぞ、君來ませるに、紐あけず寢む。

山科。強田山。馬雖在。歩吾來。汝念不得。
山科の、木幡の山を、馬はあれど、かちより我が來。汝を思ひ兼ねて。

遠山。霞被。益遐。妹目不見。吾戀。
遠山に、霞棚引き、いや遠に、妹が目見ずて、我が戀ふらくも。

是川。瀬瀬敷浪。布布。妹心。乘在鴨。
此の川の、瀬々のしき浪、しく〳〵に、妹が心に、乘りにけるかも。

千早人。宇治度。速瀬。不相有。後我孋。
千早人、宇治の渡の、早き瀬に、逢はずありとも、後も我が妻。

早敷哉。不相子故。徒。是川瀬。裳襴潤。
はしきやし、逢はぬ兒ゆゑに、徒に、此の川の瀬に、裳の裾濡れぬ。

是川。水阿和逆纒。行水。事不反。思始爲。

如何ばかり―一訓「如何ならむ名負へる神に」又宣長說に本文「名」は「在」、「負」は「皇」の誤にて「如何ならむすめがみにぬさ手向けばか」と訓ず

へなり―隔り

參路者―古義には「參路」の誤にて「まゐりぢ」と訓じ、朝廷に參る路の事ならんといへり

馬躓くに―馬躓かんに

重る―一訓「へなれる」

まねみ―多きが故に

路の後―和名抄「備後吉備乃美知乃之利」とあり、備後國の奧の意也

深津―備後國

如何ばかり、名に負ふ神に、手向けせば、我が思ふ妹を、夢にだに見む。

天地。言名絕。有。汝吾。相事止。

天地と、言ふ名の絕えて、有らばこそ。汝と我と、逢ふこと止まめ。

月見。國同。山隔。愛妹。隔有鴨。

月見れば、國は同じぞ。山へなり、うるはし妹が、へなりたるかも。

參路者。石蹈山。無鴨。吾待公。馬爪盡。

來る路は、岩蹈む山の、無くもがも。我が待つ君が、馬躓くに。

石根蹈。重成山。雖不有。不相日數。戀度鴨。

岩根蹈み、重る山は、あらねども、逢はぬ日まねみ、戀ひ渡るかも。

路後。深津島山。暫。君目不見。苦有。

路の後、深津島山、暫しくも、君が目見ねば、苦しかりけり。

紐鏡。能登香山。誰故。君來座在。紐不開寐。

人に知らゆな—一訓「人になしらせ」

意追不得—「追」は「進」の誤か、又一本「追」を「遣」に作るに從へば、「心遣りかね」也

少女らが云々—上三句「久し」の序、又原文「之」字は今本「乎」とあるを略解に改めたるもの、而して古義には其却て非なる由を論じたり

神の保てる—神の御心のまゝなる命といふ意か、宣長は本文「持」は「禱」の誤にて「かみにいのれる」かといへり

故も無く、我が下紐ぞ、解けしむる。人に知らゆな、直に逢ふまで。

戀事。意追不得。出行者。山川。不知來。

戀ふること、慰め兼ねて、出で行けば、山も川をも、知らず來にけり。

寄レ物陳レ思

處女等之。袖振山。水垣。久時由。念來吾等者。

少女らが、袖ふる山の、瑞垣の、久しき時ゆ、思ひ來し我は。

千早振。神持在。命。誰爲。長欲爲。

千早振る、神の保てる、命をも、誰が爲めにか、長く欲せむ。

石上。振神杉。神成。戀我。更爲鴨。

石上、布留の神杉、神さびて、戀をも我は、更にするかも。

何。名負神。幣嚮奉者。吾念妹。夢谷見。

百さか—百尺、一訓「もゝつみ」
船潜き入るよ—一説「潜」は「漕」の誤にて「船こぎ入るよ」
やうらさし—「や」は頭にて多くの意、「うら」は浦に占をかく、「さし」はそれとさし顯はす占の詞なるべし
眉根かき—末に、「上は同くて、下「いつかもみんと戀ひこし吾を」といふ歌あり、其傳へ誤り歟
悔—「恠」の誤にて「あやしくも」か
結手徒—「徒」は「倦」の誤にて「ゆふてたゆしも」か
敷白之—「白」の下「布」或は「妙」の字脱せしか
袖易子少—「少」は「乎」の誤か
忘れて思へや—忘れんや
はつ〴〵—仄に
見てしから—一訓「見しからに」
令解—一説「今解」の誤にて「いま解くる」と訓ず

百さかの、船潜き入るよ、やうらさし、母は問ふとも、其の名は告らじ。

眉根削。鼻鳴紐解。待哉。何時見。念吾君。
眉根かき、嚏紐解け、待てりやも。何時かも見むと、思へる我君。

君戀。浦經居。悔。我裏紐。結手徒。
君に戀ひ、うらぶれ居れば、悔しくも、我が下紐を、結ふ手もたゞに。

璞之。年者竟杼。敷白之。袖易子少。忘而念哉。
新玉の、年は果つれど、敷妙の、袖交へし兒を、忘れて思へや。

白細布。袖小端。見柄。如是有戀。吾爲鴨。
白妙の、袖をはつ〴〵、見てしから、斯かる戀をも、我はするかも。

我妹。戀無之。夢見。吾雖念。不所寐。
我妹子に、戀ひ術無かり、夢に見むと、我は思へど、寢ねらえなくに。

故無。吾裏紐。令解。人莫知。及正逢。

たまくぜ―山城國久世郡にあるか、宣長說、本文「玉」は「山」の誤にて「代」を脫し、「淸」は「能」の誤にて、「やましろのくぜのかはらに」と訓むべし
思ふより云々―誤脫あるべし、古來諸說あれど何れを是とも定め難し
垣穗なす―人言のしげきをいふ也
夕戸―「戶」は「谷」の誤か
高麗錦云々―三四一二五と句を轉じて心得べし戀ひつゝかあらむ―一訓「戀ひつゝあらむ」何れにしても、戀ひつゝあらんやの意也

戀ひ死なば、戀ひも死ねとや、我妹子が、我家の門を、過ぎて行くらむ。
妹當。遠見者。怜。吾戀。相依無。
妹があたり、遠くし見れば、怪しくも、我はぞ戀ふる。逢ふ由を無み。
玉久世。清河原。身祓爲。齋命。妹爲。
たまくぜの、淸き河原に、禊して、齋ふ命も、妹が爲めこそ。
思依。見依物。有。一日間。忘念。
思ふより、見るよりものは、あるものを、一日隔つを、忘ると思はむ。
垣廬鳴。人雖云。狛錦。紐解開。公無。
垣穗なす、人は言へども、高麗錦、紐解きあけし、君ならなくに。
狛錦。紐解開。夕戸。不知有命。戀有。
高麗錦、紐解きあけて、夕だに、知らざる命、戀ひつゝかあらむ。
百積。船潛納。八占刺。母雖問。其名不謂。

行けど〳〵、逢はぬ妹ゆゑ、久方の、天の露霜に、濡れにけるかも。

玉坂。吾見人。何有。依以。亦一目見。

たまさかに、我が見し人を、如何ならむ、由をもちてか、又一目見む。

暫。不見戀。吾妹。日日來。事繁。

暫くも、見ねば戀しき、我妹子を、日に〳〵來れば、言の繁けく。

年切。及世定。恃。公依。事繁。

たまきはる、世まで定めて、頼めたる、君に寄りてし、言の繁けく。

朱引。秦不經。雖寐。心異。我不念。

あから引く、肌も觸れずて、寢たれども、心をけには、我が思はなくに。

伊田何。極太甚。利心。及失念。戀故。

いで如何に、懇々に、利心の、失するまで思ふ。戀ふらくのゆゑ。

戀死。戀死哉。我妹。吾家門。過行。

逢はぬ妹ゆゑ—逢はぬ妹なるものを

たまさかに—たま〳〵

我妹子を—我妹子なるものを

たまきはる—枕詞、本文「年」は「玉」の誤

あから引く—枕詞

心をけには云々—變らず思ふの意、一說、本文「異心」の誤にて「けしきこころを」

ぬば玉の—枕詞
あから引く—枕詞
朝行く君を—朝別れ行く君の又來るを

玉ゆらに—かすかに、古義に此訓の正しからぬ由を極說し、「烏玉」(ウバタマノ)の誤なるべしといへり、尙可勘

玉垣入風所見—「垣」は「蜻」の誤、「入」は「乃」の誤か、又は衍文かといふ、一說には「たまがきる、ほのかに見えて」と訓ず、たまがきるは枕詞
朝影に—朝影の如くに、痩せ衰へたるをいふ

ぬば玉の、此の夜な明けそ。あから引く、朝行く君を、待てば苦しも。

戀爲。死爲物。有者。我身千遍。死反。
戀するに、死にするものに、あらませば、我が身は千度、死に反らまし。

玉響。昨夕。見物。今朝。可戀物。
玉ゆらに、昨日の夕、見しものを、今日の朝に、戀ふべきものか。

中中。不見有從。相見。戀心。益念。
なかくに、見ざりしよりも、相見ては、戀しき心、まして思はゆ。

玉桙、道不行爲。有者。惻隱此有。戀不相。
玉桙の、道行かずして、あらませば、懇斯かる、戀には逢はじ。

朝影。吾身成。玉垣。入風所見。去子故。
朝影に、我が身はなりぬ。陽炎の、仄に見えて、去にし兒ゆゑに。

行行。不相妹故。久方。天露霜。沾在哉。

はた忘られず—此句未詳、眞淵は、本文「手」は「多」の誤かといへり

人來鴨—「來」の上に「不」を略す、かゝる例集中に多し

かへりきて—未詳、(一)「遍來」は「過畏」の誤にて「たま〳〵も」(二)「來」は「多」の誤にて「たびまねく」

五年雖經—濱臣說「五」は衍文にて「としはふれども」

しるしなき—甲斐なき

日位—一本「位」を「低」に作る

ありこせぬかも—あれかし

起居する—一訓「立ちてゐてたどきも知らず」

世の中は、常斯くのみと、思へども、はた忘られず、猶戀ひにけり。

我勢古波。幸座。遍來。我告來。人來鴨。

我が背子は、幸く座すと、かへりきて、我に告げ來む、人の來ぬかも。

麁玉。五年雖經。吾戀。跡無戀。不止恠。

新玉の、五歳經れど、我が戀ふる、しるしなき戀の、止まず怪しも。

石倚。行應通。建男。戀云事。後悔在。

巖すら、行き通るべき、丈夫も、戀とふことは、後悔いにけり。

日位。人可知。今日。如千歳。有與鴨。

日暮れなば、人知りぬべし、今日の日の、千歳の如も、ありこせぬかも。

立座。態不知。雖念。妹不告。間使不來。

起居する、わざも知らえず、思へども、妹に告げねば、間使も來ず。

烏玉。是夜莫明。朱引。朝行公。待苦。

命繼ぎけむ―生きながらへけん

見渡せば―一訓「見渡しの」 わたり―あたり、一說、河瀨の渡 たもとほり―人目を避くとて廻り道をして 障れかも―障ればかも 君が來まさぬ―略解に「君か」と淸みて讀み歟の意とすと解けるはいかゞ

何せむに、命繼ぎけむ。我妹子に、戀ひざる先に、死なましものを。

吉恵哉。不來座公。何爲。不厭吾。戀乍居。

よしゑやし、來まさぬ君を、何せむに、厭はず我は、戀ひつゝ居らむ。

見度。近渡乎。回。今哉來座。戀居。

見渡せば、近きわたりを、たもとほり、今や來ますと、戀ひつゝぞ居る。

早敷哉。誰障鴨。玉桙。路見遺。公不來座。

はしきやし、誰が障れかも、玉桙の、路見忘れて、君が來まさぬ。

公目。見欲。是二夜。千歳如。吾戀哉。

君が目を、見まく欲しして、此の二夜、千歳の如も、我が戀ふるかも。

打日刺。宮道人。雖滿行。吾念公。正一人。

內日射す、宮路を人は、滿ち行けど、我が思ふ君は、唯一人のみ。

世中。常如。雖念。半手不忘。猶戀在。

遠く見るべく―よそに見るべく
夕かたまけて―夕に向ひて
戀は術無し―「乏」を「すべ」と訓ずる例他にあれど未詳、略解には「爲」の誤かといへり、又「戀」一訓「戀ふ」
斯くしのみ云々―一訓、第一二句「かくのみし、戀ひし渡れば」第五句「年は經につゝ」
相與勿―「與」は「乏」の誤か
逢ひこすなゆめ―決して逢ふことなかれ

心には、千度思へど、人に言はず、我戀ふ妻を、見む由もがも。

是量。戀物。知者。遠可見。有物。
斯くばかり、戀ひむものとし、知らませば、遠く見るべく、ありけるものを。

何時。不戀時。雖不有。夕方枉。戀無乏。
何時はしも、戀ひぬ時とは、あらねども、夕かたまけて、戀は術無し。

是耳。戀度。玉切。不知命。歳經管。
斯くしのみ、戀ひや渡らむ、たまきはる、命も知らず、年を經につゝ。

吾以後。所生人。如我。戀爲道。相與勿湯目。
我ゆ後、生れむ人は、我が如く、戀する路に、逢ひこすなゆめ。

健男。現心。吾無。夜晝不云。戀度。
丈夫の、現心も、我は無し、夜晝と言はず、戀ひし渡れば。

何爲。命繼。吾妹。不戀前。死物。

る心の落着く間もなきをいふ

母が手かれて―母が手を離れてより、一訓「母が手はなれ」

人所寐―宣長說　ひとのなすと訓むべし

事告衆―一說「衆」は「禁」の誤にて「こともつげなく」古義には官本によるとて「衆」を「无」に作り「なき」と訓ず

玉梓の―枕詞

ゐに。

右五首。古歌集中出。

正述心緒

垂乳根乃。母之手放。如是許。無爲便事者。未爲國。

垂乳根の、母が手かれて、斯くばかり、術無きことは、未だせなくに。

人所寐。味宿不寐。早敷八四。公目尙。欲嘆。

人の寢る、熟睡は寢ずて、はしきやし、君が目すらを、欲りて嘆くも。

或本歌云。公矣思爾。曉來鴨。

戀死。戀死耶。玉桙。路行人。事告衆。

戀ひ死なば、戀ひも死ねとや、玉桙の、路行き人に、言も告げけむ。

心。千遍雖念。人不云。吾戀孋。見依鴨。

に、一説、おほぞうに、大方にの義にて、下に心から思ふなら兎に角大方にはしといふ者に許さんやの意を含む也

岡崎の—一訓「岡の崎」
たみたる道—まはり行く道
避路—人目を避くる通路

玉垂の—枕詞
すけき—すき、隙間

内日射す—枕詞
宮路—内裏へ參り向ふ道

繁此者—「此」は「比」の誤

眞十鏡—枕詞
見しが—見てしがな
玉の緒の—枕詞

乘れゝや—乘りてあればにや
ゆたにあるらむ—戀ひ居

右十二首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

崗前。多未足道乎。人莫通。在乍毛。公之來。曲道爲。
岡崎の、たみたる道を、人な通ひそ。ありつゝも、君が來まさむ、避路にせむ。

玉垂。小簾之寸鷄吉仁。入通來根。足乳根之。母我問者。風跡將申。
玉垂の、小簾のすけきに、入り通ひ來ね。垂乳根の、母が問はさば、風と申さむ。

内日左須。宮道爾相之。人妻姤。玉緒之。念亂而。宿夜四曾多寸。
内日射す、宮路に逢ひし、人妻ゆゑに、玉の緒の、思ひ亂れて、寢る夜しぞ多き。

眞十鏡。見之賀登念。妹相可聞。玉緒之。絕有戀之。繁此者。
眞十鏡、見しがと思ひし、妹に逢へるかも。玉の緒の、絕えたる戀の、繁き此の頃。

海原之。路爾乘哉。吾戀居。大舟之。由多爾將有。人兒由惠爾。
海原の、路に乘れゝや、我が戀ひ居りて、大舟の、ゆたにあるらむ。人の兒ゆ

何爲。命本名。永欲爲。雖生。吾念妹。安不相。
何せむに、命をもとな。長く欲りせむ。生けりとも、我が思ふ妹に、易く逢はなくに。

息緒。吾雖念。人目多社。吹風。有數數。應相物。
息の緒に、我は思へど、人目多みこそ。吹く風に、あらば屢、逢ふべきものを。

人祖。未通女兒居。守山邊柄。朝朝。通公。不來哀。
人の親の、少女兒するて、守る山邊から、朝なさな、通ひし君が、來ねば悲しも。

天在。一棚橋。何將行。穉草。妻所云。足莊嚴。
天なる、一つ棚橋、如何でか行かむ。若草の、妻許と言へば、足結すらくを。

開木代。來背若子。欲云余。相狹丸。吾欲云。開木代來背。
山城の、來背の若兒が、欲しといふ我を。あふさわに、我を欲しといふ、山城の來背。

人の…するて―「守る」の序

棚橋―板を一枚渡して棚の如き樣にかけたる橋

如何でか行かむ―古義には、本文「行」は「障」の誤にて、「何かさやらん」かといへり

足結すらくを―(一)足結すれば歩行に自由ならねばいふ(二)本文「莊嚴」は「結發」の誤にて「つまがりといひてあゆひしたらす」と訓む(三)本文「莊嚴」は「發帶」の誤にて「あゆひしたらむ」

あふさわに―あながち

男の名を靜の子といひしに蹈靜といひかけたる也（中略）さて右は新室蹈までは序にて、靜子より下は、此男の來りて、手玉ならして、妹にしらせんとするを聞て、内へ入給へと、さるべきなかだちにいひかけたるならん」古義には「蹈靜子之」を「ふみしづむ子が」と訓じたり

念亂而——一說「亂」は「武」の誤にて「むもひたけびて」

惠得——一說「息緖」の誤にて「いきのをに」

早も過ぎねや——早も死ねや、一訓「早も死ねやも」

濡らさな——濡らさん

一云。人見豆良牟可。

健男之。念亂而。隱在其妻。天地。通雖光。所顯目八方。

丈夫の、思ひ亂れて、隱せる其の妻。天地に、通り照るとも、顯れめやも。

一云。丈夫乃思多鶏備氏。

惠得。吾念妹者。早裳死耶。雖生。吾邇應依。人云名國。

うつくしと、我が思ふ妹は、早も過ぎねや。生けりとも、我に寄るべしと、人の言はなくに。

狛錦。紐片叙。床落邇祁留。明夜志。將來得云者。取置待。

高麗錦、紐の片方ぞ、床に落ちにける。明日の夜し、來なむと言はば、取置きて待たむ。

朝戸出。公足結乎。閏露原。早起。出乍吾毛。裳下閏奈。

朝戸出の、君が足結を、濡す露原。早く起きて、出でつゝ我も、裳裾濡らさな。

壁草―(一)延喜式七踐祚大嘗祭式「所レ作新殿一字(中略)並以ニ黑木及草一構葺、壁蔀以レ草云々」是壁草なるべし(二)新室をつくりて未だ壁など塗らぬほどは草を刈りて其の蘆をかこひおく、これを壁草といふ

おはし給はね―來給へ、一訓「いまし給はね」

新室を云々―略解に「新室には古今種々のいはひ事有こと也(中略)地に蹈平す、家に蹈靜むといふ歌うたひてをどりなどする事有べし、かくて其

萬葉集

巻第十一上

旋頭歌

新室。壁草苅邇。御座給根。草如。依逢未通女者。公隨。

新室の、壁草刈りに、おはし給はね。草の如、寄り合ふ少女は、君がまに〳〵。

新室。蹈靜子之。手玉鳴裳。玉如。所照公乎。内等白世。

新室を、蹈み靜の子が、手玉鳴らすも。玉の如、照りたる君を、内へと申せ。

長谷。弓槻下。吾隱在妻。赤根刺。所光月夜邇。人見點鴨。

初瀬の、槻が下に、我が隱せる妻、茜さし、照れる月夜に、人見てむかも。

令史田邊云々と有○于時期之明日二十四日將遊覽布勢水海仍述懷 各作歌 八首○二十五日大伴宿禰家持往布勢水海道中馬上口號二首○同日至水海遊覽時各述懷作歌六首○二十六日掾久米朝臣廣繩館宴饗田邊史福麻呂歌四首○太上皇御在於難波宮時歌七首○左大臣橘宿禰歌一首○和左大臣歌○御製一首○於左大臣橘卿宅御船泝江遊宴時御製一首○河內女王奏歌○粟田女王奏歌 一首○御船以綱手泝江遊宴時史福麻呂傳誦歌二首こゝの目錄の書ざまいとまぎらはし、契沖がいへる如く、太上皇御在於難波宮時歌七首とのみにて足れり、はた御船以云云傳誦之人田邊史福麻呂是也と七首の終に書るは、泝江遊宴時の二首に限るにあらず、すべて福麻呂が傳誦也と註したる也、本文の如く、右件歌者御船以綱手泝江遊宴之日作也と有て、さて傳誦之人田邊史福麻呂是也となくてはことわきがたし、さてこゝは史の上田邊の字を脱せり○後追和橘 大伴家 持歌二首 ○山上臣 射水郡驛館之屋柱題著歌一首○四月一日掾久

米朝臣廣繩館宴歌四首○先國師從僧欲入京設飲饌饗宴時主人大伴家持詠庭中牛麥花歌一首○大伴家持重作歌二首○三月十五日越前國掾大伴池主來贈歌三首○十六日越中守大伴家持報贈歌四首○姑大伴氏坂上郎女來贈越中守大伴家持歌二首○大伴家持報歌一首○又別所心歌一首○天平感寶元年五月五日饗東大寺占懇地使僧平榮時守大伴家持送酒歌一首○同九日諸僚會少目秦伊美吉石竹館飲宴時造百合花縵捧贈賓客各賦此縵歌三首○十日大伴家持獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首幷短歌○行英遠浦之日作歌一首守大伴家持の字を脱せり○天平感寶元年五月十二日守大伴家持於越中國館賀陸奥出金詔書歌一首幷短歌○幸行芳野離宮時儲作歌一首幷短歌本文幸行の字の上爲の字有こゝに略ける

天平二十年春三月二十三日左大臣橘卿使田邊史福麻呂饗越中守大伴家持館時新作幷誦古詠各述心緒歌四首本文橘家之使者造酒司

歌六首○引津亭舶泊之作歌七首（之の下夜或時の字を脱）○肥前國松浦郡狛島亭舶泊之夜作歌七首○挽歌到壹岐島雪連宅滿死去之時歌一首幷短歌二首○葛井連子老作歌一首幷短歌二首○六鯖作歌一首幷短歌二首○到對馬島淺茅浦舶泊之時作歌三首○竹敷浦舶泊之時作歌十八首○回來筑紫海路入京到播磨國家島作歌五首○中臣朝臣宅守娶藏部女嬬狹野茅上娘子之時勅斷流罪配越前國也於是夫婦相嘆易別難會各陳慟情贈答歌六十三首○臨別娘子悲嘆作歌四首○中臣朝臣宅守上道作歌四首○至配所中臣朝臣宅守作歌十四首○娘子留京悲傷作歌九首○中臣朝臣宅守作歌十三首○娘子作歌八首○中臣朝臣宅守更贈歌二首○娘子和贈歌二首○中臣朝臣宅守寄花鳥陳思作歌七首

有由緣雜歌

（本文緣の下幷の字有此卷末に至て皆雜歌なれば也こゝには脫せり）

二壯士誂娘子遂嫌適壯士入林中死時各陳心緖作歌二首（誂は挑の誤か）○三男共娉一女娘子嘆息沈沒水底時不勝哀傷各陳心作歌三首○竹取翁偶逢九箇神女贖近狎之罪作歌一首幷短歌○娘子等和歌九首○娘子等竊交接壯士時欲令知親與其夫歌一首○壯子專使節赴遠境娘子累年悲嘆姿容疲羸壯子還來流淚口號歌一首○娘子聞夫君歌應聲和歌一首○女子竊接壯子其親呵嘖壯子悚惕時娘子贈與夫歌一首○葛城王發陸奥時祇承緩怠王意不悅釆女捧觴詠歌一首○男女衆集野遊時有鄙人夫婦容姿秀衆諸仍賛嘆美貌歌

萬葉集下目錄

萬葉集

下

